腐れ縁はチートども！

江玖糸亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腐れ縁はチートども！

【Ｎコード】
Ｎ４５６６Ｓ

【作者名】
江玖糸亜

【あらすじ】
「勇者様、どうかこの世界をお救いください！」
異世界に召喚された俺たちは、いきなりそんなことを言われた。
幼馴染みの熱血チート野郎は快く引き受け、ツンデレチート女はツンデレながら引き受けた。
だが！
だが俺は断った！
俺は普通だ一般人だ！
チートどもに付き合ってやる義理はない！

「なにいってるんだか。」
「知らぬは本人ばかりなりってことかな。」
俺は無力だ、一般人なんだっ！
頼むから誰か信じてくれーーー！！！
（注、以前投稿した物も読みやすくなるよう後で編集することがあります。ご了承ください。それと最初のころと文章の書き方が違う。というのは主人公たち同様、作者も成長しているということで・・・・）

プロローグ（前書き）

初投稿です。まだまだ未熟で駄文になってしまうでしょうが、精一杯、頑張りますので暇なときにでも読んでください。それと主人公は大切な人たち以外はどうでもいいと考えているというタイプの人です。

プロローグ

俺は今、非常に不愉快だ。

原因は分かり切っている。

俺の腐れ縁もとい幼馴染みの葵理香（あおいりか）と紅東間（くれないとうま）だ。

理香は成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗、男女の人気カリスマ、強気なツンデレ、などと。

人間何を食ったらこんな完璧超人になれるのか、食文化への探求心を抑えきれなくなる学者が続出したという噂さえ流れている。

もう一人の男、東間はまあ言わずもがなほぼ理香と同じだ。違う点といえば、真面目な熱血漢ってことと理香は男子の、東間は女子の人気が多いってことだけだ。

こんなチートどもと一緒にいる俺もさぞかしすさまじいチート野郎なんだって思う奴ばかりで困る。

断言してやってもいい。

俺は普通だ。平々凡々な一般人だ。

断じてチートなんかじゃない。

だと言うのにそれを言うとあの二人はいつも

「いや、あんたは十分すぎるほどチートでしょ。」

「少なくとも君に比べたら、僕らは凡人だと思うよ。」

とか言いやがる。

まったく、俺のどこがチートだって言うんだ。

だいたいお前らの尻拭いはいつも俺がやっているんだぞ。

この前だって暴徒と化した二人のファンクラブ四百人前後を、二度と暴走しないようにきっちり調教してやったのに。

あいつら感謝の言葉もないんだぞ！

まあ、警察に連れて行かれそうになったのを必死に止めてくれたけどな。

話が逸れたな。

とにかく、俺は非常に不愉快だ。

なぜなら――――――――――――――――――――

「勇者様、どうかこの世界をお救いくださいっ！」

見たこともない祭壇の上に見たこともない巫女らしき女にいきなりそんなことを言われた。

だがこれだけは言える。

俺は巻き込まれただけだ。

プロローグ（後書き）

とりあえず、プロローグを書いてみました。
いかがでしょうか？
人様に自分の書いた小説をお読みしてもらうのはこれが初めてなので、勝手がよくわかりませんでした。
ご気分を害された方には謝罪を、こんな作品を読んでくれたすべての方に感謝を。
これからも細々と更新していきたいと思います。

第一話　押しつけられる前に、押しつけてやる！（前書き）

続きを書いてみました。
読んでもらえたら、非常にうれしいです。

第一話　押しつけられる前に、押しつけてやる！

「なっ、なによこれっ！」

騒ぎ出す理香を尻目に、俺はどうしてこうなったかを思い返していた。

俺たちはいつも通り三人で帰っていた。

暴徒どもの調教は終わっていたので、ストーカーの気配は感じられない。

ひさびさに本当の意味で三人だけの帰り道。

「ねえ二人とも、今度の日曜日、一緒に映画でも見に行かない？」

「別に私は構わないわよ。」

「嫌だ。」

俺は即答していた。

「・・・・・・・・理由を聞いていいかい。」

「面倒。」

俺の発言に二人とも呆れたようだ。

「あんたねぇ・・・・・・。たまには外で遊ぶとか考えないの？」

「ネトゲサイコー。」

無視された。

「それじゃあ午後三時に近所の映画館に集合ってことで。」

「異議無し。」

「まっ、いいか。」

そんなことを話している最中だった。

俺たちが道路の下に落ちたのは。

いきなり足場が消え、目の前が真っ白になり――――――――――――――――

気が付いたらこの場所にいた。というわけだ。

俺はいい加減現実逃避をやめて、周りを見渡した。

神官らしき男どもと、白い甲冑が大量に並んでいる。

これが俗に言う『勇者召喚のための儀式』というやつなのだろう。

「・・・・・・なぜ、三人・・・・・・」

「・・・・・・・失敗・・・・・・・」

周りの奴らが何やらざわつき始めた。

「あのぅ・・・・・・・・」

巫女らしき女が不安そうに俺たちに話しかけてきた。

俺は瞬時に反応した。

「こちらの方々が勇者様でございます。」

「・・・・・・・へっ？」

俺の言葉に呆けたように口を開く東間。

「ちなみに私は勇者様にお仕えしているしがない従者にございます。
どうかお気になさらないでください。」

気でも狂ったのか？

二人の視線が如実に語りかけてくる。

・・・・・・・・けっこう痛い・・・・・・

しかし理香が俺の狙いに気づき、発言しようとする。

「ちょっとあんた――――――――――――」

馬鹿め、もう遅いわ。

「そうなのですかっ！」

案の定、巫女らしき女は目を輝かせながら東間と理香に詰め寄った。

「お願いします、二人の勇者様。どうかこの世界をお救いくださいっ！」

「い、いや、俺は――――――――――――――」

「私は勇者なんかじゃ――――――――――――――」

「巫女殿、勇者様たちは召喚されたばかりで気が動転しています。お話をなさる前に少し休ませてはもらえませんか？」

俺の言葉に巫女らしき女は慌てて頭を下げた。

「失礼しました。お部屋にご案内しますので、私についてきてください。」

巫女らしき女は歩きだす。

東間と理香が俺をにらみつけてきた。

俺はそれを涼しい顔で受け流す。

詰めが甘いんだよお前らは。

厄介事に巻き込まれる前に、厄介事を受け入れるふりをして押しつける。

この二人と一緒にいて学んだことだ。

このままいけばこの二人が勇者として旅立ってくれる。

俺はその間に異世界を堪能するとしよう。

このとき俺は気付くべきだった。

一番詰めが甘かったのは俺だ。ということに。

第一話　押しつけられる前に、押しつけてやる！（後書き）

というわけで、第一話でした。
まだまだ始まったばかり、気合を入れて続きを書いてみます。
ちなみに、主人公の名前が出てこないのは、まだ決めてないからだったりします。
次あたりに決めてみます。

第二話　最初の選択肢、間違えたー！（前書き）

最初に言った言葉を、あとあと後悔しても、もう遅いですよね。

第二話　最初の選択肢、間違えたー！

俺たちは巫女らしき女の案内で、城内の高級そうな部屋で休んでいる。

どうやら神殿と城は繋がっているようだ。

「でっ、いったいこれからどうするつもりよ。」

理香は半眼で俺を睨んでいる。

「どうするもこうするもないだろ、頑張れ、勇者ども。」

俺は東間の肩に手を置いた。

「まったく、なんで僕たちが勇者なんだよ。君がやればいいだろ。」

東間は俺の手を払いのける。

「そうよ、あんたの方が勇者に――――――――――――――――――」

理香は東間と俺を見比べた。

「――――――――――――向いてないわね、まったく。」

「同意するが、はっきりと口に出すな。」

失礼な奴だ。

東間が横で苦笑いしていると、扉をノックする音がした。
俺は瞬時に扉の前に行き、扉を開けた。
「あら？」
扉の前には先ほどの巫女らしき女が立っていた。
「ようこそ巫女殿。どのような御用件でしょうか。」
俺は体が直角になるように頭を下げた。
後ろの二人が気持ち悪いものを見るような目で俺を見ていたが、無視する。
「お休みのところ申し訳ありません。勇者様。お母様が勇者様たちにお会いしたいとのことです。」
「お母様、ですか？」
「あっ、お母様はこの国の女王です。」
「わかりました。行きましょう。」
俺が返事をする前に東間が返事をしやがった。
「いいよね、二人とも。」
「私はいいけど。」

「俺は――――――――――――――――――」

「あっ、従者は当然、勇者についてくるよね。」

「・・・・・・・・承知いたしました。」

にっこり笑いながらの発言に、俺はそう言うしかなかった。

後ろでほくそ笑んでいる理香を見て俺は改めて思った。

やばい、設定ミスった。

「では、ご案内しますのでついてきてください。」

巫女らしき女は歩きだした。

「女王陛下、勇者様たちを連れて参りました。」

「御苦労。」

やたらと大きい扉が開くと謁見の間らしいだだっ広い部屋があり、俺たちは中に入っていく。

周りにはこの国の要人らしき人物が大勢いた。

俺たちを値踏みするような視線は不愉快だったが、それ以上に女王が気になった。

微笑みを浮かべながらの慈愛の眼は、どう考えても腹黒い女だと言っているようにしか見えなかった。

メアリヴェスタが女王の近くに歩いていく。（巫女らしき女の名前。ここに来る途中で自己紹介をした。）

「はじめまして、勇者の方々。私はこの国の女王マリステラ・ファクリル・ヴェルナルドです。」

「はじめまして、女王陛下。僕は紅東間です。」

「私は葵理香です。」

「影月仁（かげつきじん）と申します。」

「それでは早速、なぜあなた方を召喚したかを説明しますね。」

いきなり本題か。お手並み拝見っと。

「この世界は今、魔王に支配されようとしています。」

王道きたよ。

「魔王は元々、北の大陸を支配していました。今までは他の大陸や国々に不干渉を貫いてきましたが、つい先日、魔族や魔物たちを率いて、突如侵略を開始しました。我々も竜人や獣人、エルフたちと同盟を結びこれに対抗しました。」

獣人とかもいるのかよ。

「しかし人間には差別意識が強い者が多く、竜人は他の種族を見下している傾向があり、獣人やエルフの中には人間を毛嫌いしている者がおり、同盟は長く続きませんでした。」

仲悪いな、おい。

「我々が仲違いしている間に魔王は着々と侵略を進め、今やこの世界の半分は魔族の領地となってしまいました。」

自業自得だーっ！

「かくなる上は、かつてこの世界を救ったという伝説の勇者を召喚するしかないと思い、我々は召喚の儀をとり行ったのです。」

責任押しつけやがったーーっ！

「お願いします、勇者様。この世界をお救いくださいっ！」

「私からもお願いします。勇者東間様、勇者理香様、従者仁、あなた方のお力をお貸しくださいっ！」

ふざけんなーーーっ！

俺は東間に視線を送った。

東間は俺の意思をくみ取ってくれたらしく、口を開く。

「わかりました。僕たちがこの世界に呼び出されたのもなにかの導きによるもの。若輩者の身ですが、謹んでお受けします。」

はい、予想通りーーーーっ！

「私は関係ないわよ。」

おお、思わぬところで援護が入ったっ！

「理香・・・・・・・・・・」

「だからあんたたちの為にやるわけじゃないわよ、この世界を救うのはあくまでも私の意思よ。」

ツンデレ戦法入りましたーーーーっ！

「ありがとうございます、勇者様っ！」

あれ、俺の意思は？

「従者の方は当然、勇者様に従いますよね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

しまったーーーーーーーーーーーーーーっ！！！

「・・・・・・・・・・・・・・今からでも設定を変えるべきか・・・・・・・？」

俺の今更過ぎる発言に東間と理香は溜め息をついた。

第二話　最初の選択肢、間違えたー！（後書き）

主人公、やっと名前が出せました。
次は武器庫で武器選びをする予定です。

第三話　人の恋愛は、野次馬になるに限るよな！（前書き）

主人公が馬鹿になって来ました
と、いうわけで今回は武器選びと訓練場についてです。

第三話　人の恋愛は、野次馬になるに限るよな！

「こちらが武器庫になります」

メイドさんに案内され、俺たちは武器庫の中に入った。

武器庫と言うだけあって大量の武器が置いてある。

近代兵器（銃など）はまったくないが。

「東間様、理香様、お好きな武器をお一つお選びください。」

あれ？　俺は？

「従者の方も何か一つ持っていっていいですよ。」

さいですか・・・・・

俺たちはしばらく武器を物色していた。

「それじゃあ、僕はこれで。」

「私も決まったわよ。」

東間が剣で、理香は槍か・・・・・・

面白くもなんともないな。

「うるさいっ！　じゃああんたは意外な武器を選ぶんでしょうねっ

！」

うおっ、心読まれたっ！？

「じゃあ俺は――――――――――――――ごほんっ、私はこれにいたします。」

メイドがこちらを見ていることを思い出し、慌てて口調を変える。

本来ならあの馬鹿二人は俺をからかおうとするだろう。

しかし俺が手に取った武器を見て、俺以外全員が硬直した。

「・・・・・・・・・それでよろしいのですか。」

「はい、私はこれを所望します。」

「・・・・・・・・・かしこまりました。それでは次は訓練場にご案内します。」

メイドさんが歩きだす。

俺たちもそれについていく。

「ごめん、仁。私、あんたがそこまで追い詰められていたなんて思ってもみなかったわ。」

「仁、無理はしないでよ。辛いことがあったらいつでも僕に相談してほしい。」

なぜか同情されました。

「こちらが訓練場です。」

メイドさんが案内してくれた場所は、屋外でとても広かった。

「これほどの広さが必要あるのでしょうか。」

「ここは戦闘訓練だけでなく、魔法の実践訓練を行う場所でもあるのです。」

魔法か、やっぱりこの世界にもあるんだな。

「勇者様方にもいくつかの魔法を覚えていただきます。」

「う～ん、魔法か・・・・・・・・・」

「いかがなさいましたか、勇者、東間様。」

「僕にできるでしょうか。」

「あっ、確かに私も少し不安ね。」

「御心配には及びません、魔法は基本的に誰でも習得できるものなのです。」

へえ、珍しいな。

「魔法は魔導師にしか使えないものではないのですか？」

「専門的なものや複雑なものはそうですが、辺りを照らす、軽い傷を治す、などといった日常生活に必要なものは、きちんと学べば子供でも使えます。」

「じゃあ、私たちもそういう一般的なのを覚えさせられるの？」

「その通りです。その上で適性があるのなら、攻撃魔法なども覚えていただきます。」

「なるほど・・・・・・・・・」

「では、次の場所にご案内させていただきます。」

メイドさんが訓練場を去ろうとしたその時だった。

「勇者様っ！」

メアリヴェスタ（長いので以降メアリ）がうれしそうに東間に向かって走ってきた。

ちなみにメアリは理香のことを勇者殿と呼ぶ。

「メアリヴェスタさんっ！」

「はあ、はあ、はあ、勇者様、こんにちはっ！」

「こんにちは、いったいどうしたの？」

にっこり笑って訊ねる東間と、真っ赤になってうろたえるメアリ。
それを物陰に隠れてにやにやと眺める俺と理香とメイドさん。
「って、メイドさんもこういうの好きなんですか？」
「大好物です。」
この人とは意外と趣味が合いそうだ。
「あ、あのっ、勇者様っ！」
おっ、どうやら本題に入るみたいだな。
頑張れ～、応援してるぞ～。
俺たち三人の心が一つになった瞬間だった。
「姫様っ！」
メアリの体が、びくっと痙攣した様に震えた。
いかにもナルシストですよ的な金髪の男が馬に乗って現れた。
「姫様、こんなところにおられたのですか。さあ行きましょう。魔法の修練の時間です。」
「でっ、ですがまだ時間は――――――――――――――――」
「なにをおっしゃっられるのですか、修練は早めに始めた方が――

―――――――」

そのとき、ナルシー（名前がわからないので命名した）の視線が東間に移った。

「貴殿は・・・・・・・・？」

「はじめまして、紅東間といいます。」

「ああ、確かこの前召喚されたとかいう勇者ですか。」

ナルシーは鼻で笑った。

「まったく、陛下にも困ったものです。どこの馬の骨とも知れぬ輩に魔王討伐を命じるとは。」

「なっ――――――――――――――――――――――」

「このような得体の知れぬ者たちより、我々騎士団に命じていただければ、魔族に奪われた領地などすぐに取り返すというのに。」

メアリが先ほどとは違う種類の震えを起こしていることに、ナルシーは気づかない。

「まあ良いでしょう。さあ姫様、こんな奴は放っておいて私と一緒に行きましょう。ああそれと勇者君、二度と気安く姫様に近づかないように――――――――――――――――」

ナルシーが吹っ飛んだ。

乗っていた馬は驚いてどこかに走り去って行った。

「・・・・・・・・・へ？」

メアリは魔法を放とうとしたまま固まっていた。

東間も何が起きたか分からずに呆然としていたが、落ちていたものを見てすぐに理解した。

「「「ラブコメの邪魔をするなーーーーーーーーーっ！！！」」」

俺と理香とメイドさんの魂の叫びが響き渡った。

メアリが声に反応して振り向く前に俺たちは物陰に身を潜めた。

東間は落ちていた木彫りの熊を、苦笑しながら拾い上げると懐に入れた。

「メアリヴェスタさん、魔法の修練はいいんですか？」

「・・・・・・・・・あっ、はい、今から向かいます。」

「では、僕はこれで失礼します。また会いましょう、メアリヴェスタさん。」

「・・・・・・・・・あの、勇者様。」

「なんですか。」

「私のことは、その・・・・・・メアリ、と呼んでくれませんか。

あっ、いえ、嫌なら別に構いませんけど・・・・・・・・親しい人はみんな私のことをメアリって呼びますので・・・・・・」

「わかりました。そのかわり、僕のことは東間って呼んでくれませんか。」

にっこり笑って言い放つモテチート。

「えっ・・・・・・・・・・！」

案の定、ゆでダコの様になるメアリ。

「そっ、そんなっ、恐れ多いですよっ！　私風情が、勇者様を呼び捨てになんて・・・・・・・・・・」

にっこり笑い続ける東間に、メアリは小さな声で、

「とっ・・・・・・・・・東間・・・・・・・・・様・・・・・」

「はい、なんですか、メアリさん。」

オーバーヒートしそうな勢いで赤くなっていくメアリは、ここに来た時の数倍の速さで走り去る。

「まっ、また明日、お会いしましょうーーーーーーーーーーーっ！！」

「はいっ、また明日っ！！」

走り去っていくメアリに、大きく手を振って送り出す東間。

「「「ラブコメ最高ぉぉぉーーーーーーーーーーーっ！！！」」」

俺と理香とメイドさんの心と魂が一つになった瞬間だった。

「さっきも気になったんだけど、ラブコメって何の話だい？」

全く理解していない東間に、俺と理香とメイドさんは脱力してその場に座り込んだ。

余談だが、ナルシーは気絶したまま放置された結果、風邪をひいたそうだ。

しかも逃げ出した馬が女王お気に入りの花畑を踏み荒らしたらしく、そのまま騎士団をクビになったそうだ。

まあ、本当にどうでもいいことだが。

第三話　人の恋愛は、野次馬になるに限るよな！（後書き）

というわけで、第三話が出来上がりました。
ナルシーは完全な単発キャラです。
嫌味ったらしい貴族キャラを書いてみようと思ったのですが、あまりうまく表現できませんでした・・・・・・
次は仁が女王に呼び出される予定です。
ちなみに仁が選んだ武器は、先ほどの木彫りの熊です。
理由は、武器庫に一つしかなかったレアな品だからです。

第四話　世界がどうした、俺は一般人だ！（前書き）

仁が呼び出されます。
駄々をこねます。

第四話　世界がどうした、俺は一般人だ！

俺は扉をノックする。

「失礼します。」

扉を開けて中に入った。

「ようこそ、いらっしゃいました。」

目の前にいるのはこの国の女王、マリステラだった。

部屋の中に護衛の気配はない。

「人払いは済ませてあります。どうぞ楽にしてください。」

微笑みながら話す言葉は、俺の警戒心をより深める。

この女は危険だ。

何を考えているのか全く読めない。

「まずは、突然呼び出してしまったことをお詫びします。」

そう、俺は部屋でメイドさんと一緒に掃除をしていたら（不本意ながら、俺は従者だから）いきなりメイドさんその二が現れて、女王陛下が呼んでいると告げたのだ。

俺はメイドさんに掃除を任せてここに来た。

東間と理香は、早くも訓練を始めている。

本当は俺も訓練に参加するはずだったんだが、木彫りの熊をなくしてしまったため参加できなかったのだ。

「それで、私はなぜ呼ばれたのでしょうか。」

「単刀直入に言います。勇者たちとは別れて旅に出なさい。」

「嫌です。」

「そうですか、やはり彼らと別れたくないと――――――――――――」

「私は一般人です。だから旅になんて出ないのです。」

微笑み続ける女王。

「勇者たちと共に召喚された身でありながら一般人だと言うのですか？」

「そうです。」

「この前、ナルシーに木彫りの熊を当てて吹っ飛ばしたのにですか？」

「私は無力な民間人です。」

まさかの奇跡っ、あの男本当にナルシーって名前だったのかっ！？

俺は内心で起こった奇跡に驚愕しつつ、顔は無表情を保った。

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「嫌です。」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「嫌です。」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「嫌だ。」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「やだ。」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「やだやだ。」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「やだやだやだっ！　俺はこの街でのんびり暮らしながら、城の金を勝手に使って堕落した日々を過ごす一般人になるんだっ！」

ジタバタジタバタ。

俺はその場に寝転がり手足をバタつかせた。

十分後。

疲れたので立ち上がる。

「すいません、せめて呆れるか罵倒してください。」

頭を下げてお願いしてみた。

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「いやっ、本当にスルーされるのが一番きついんですっ！　衛兵を呼ばれた方がまだマシですっ！」

「この世界を旅するのは面白いですよ。」

「わかりましたっ！　旅に出ますっ！　だからせめてっ！　せめて何かリアクションをっ！」

「では支度をしてください。少しではありますがお金をメイドの一人に渡しておきますので、後で受け取っておいてください。」

「・・・・・・・・・・あれっ？」

「勇者殿たちには、見聞を広めるために旅立ったとでも伝えておきましょう。」

「えっ？　ちょっと？　いや？　なんで？」

「最初はこの街をを見て回った方がよいでしょう。あまり長く居られても困りますが、城にさえ入らなければごまかせるでしょう。」

「あれ？　どうして？」

「ああ、それとあなたに拒否権はありませんよ。逆らった場合は、いろんな手段を取らせていただきますので覚悟しておいてくださいね。」

女王は今までで一番の笑みを浮かべた。

「では、あなたの旅に祝福があらんことを祈っています。」

あれーーーーーーーー？

いつの間にか俺は一人で旅立つことになったらしい。

なんで？　どうして？

いったいなにがどうなっているんだ？

俺は無力な一般人なのに。

なんで旅立つことになってしまったんだーーーーーーーーっ！

sideマリステラ

彼が出て行ったあと、私はあの子を呼び出した。

「お呼びでしょうか、陛下。」

「彼にこれを渡しておいてください。」

私はこの子――――――――――――――――メイドさんにお金の入った袋を渡す。

「承知いたしました。」

「それともう一つ、あなたに休暇を与えます。」

メイドさんは眉をひそめた。

「休暇、ですか。」

「ええ、彼の旅についていってほしいの。頼めるかしら。」

「構いませんが・・・・・・何故です?」

「あなたは彼のことを、結構気に入っているように見えましたから。」

「それだけ、ですか。」

「そうね、強いて言うのなら――――――――――――――――――――――――――――――」

私は窓を開け、空を眺めた。

「私は彼に期待しているのよ。」

第四話　世界がどうした、俺は一般人だ！（後書き）

第四話いかがだったでしょうか。
いきなり旅をすることになってしまった仁。
次は街の探索――――――の前に。
主要キャラの説明をしたいと思います。
正直、先に進めるか、キャラ紹介するかは、今現在決めかねていたりしますけど・・・・・・

キャラ設定その一（前書き）

とりあえず召喚された三人とメアリとメイドさんについてです。
とはいってもくわしいことは、まだ明かせないので（というよりも決めていない設定も多いんです。）簡単なプロフィールと設定を。

キャラ設定その一

影月仁

年齢　十七歳

身長　１６２ｃｍ

体重　５３ｋｇ

趣味、特技　特になし、家庭菜園（むしろ農業）

容姿　中肉中背より少し小柄で、女よりの中世的な顔つき

髪の色　赤色

瞳の色　青色

両親は仕事で海外に、現在は一人暮らし。両親がどんな仕事をしているかは知らない。この三人は同級生で、幼稚園のころから一緒にいる。

葵理香

年齢　十七歳

身長　１６０ｃｍ

体重　そんなこと聞くんじゃないわよっ！

スリーサイズ　おっ、教えるわけ無いでしょっ！　馬鹿っ！

趣味、特技　料理、料理以外

容姿　仁より少し小柄で、自他共に認める美少女

髪の色　オレンジ色

瞳の色　右が緑色、左が紫色

孤児。とある道場に引き取られ、鍛えられる。仁はチートと言っているが、実は三人の中で一番の努力家。容姿以外の能力は、才能と努力で培ったもの。

紅東間

年齢　十八歳

身長　１６６ｃｍ

体重　５８ｋｇ

趣味、特技　運動全般、剣道

容姿　中肉中背で、可愛さの中に、カッコよさがある美形

髪の色　茶色

瞳の色　紺色

父親は死去、母親は女優をやっており、ほぼ家にいない。幼少期に寂しさを感じさせない二人がいたため、性格がねじれ曲がることはなかった。

メアリヴェスタ・ファクリル・ヴェルナルド

年齢　十六歳

身長　１５２ｃｍ

体重　秘密です。

スリーサイズ　東間様になら・・・・・・・・・・・・

趣味、特技　花の育成、水魔法

容姿　小柄な美少女。かなりレベルが高い

髪の色　水色

瞳の色　水色

女王の娘、父親は病死している。最初は三人も召喚してしまったこ

とに失敗の不安を覚えたが、仁の機転（失敗）で成功したと安心する。東間に惚れるが気づいてもらえない。

メイドさん

年齢　調査不能

身長　１６４ｃｍ

体重　命と引き換えで良いのなら教えてあげます。

スリーサイズ　親類縁者の命も差し出すなら教えてあげるかもしれません。

趣味、特技　奉仕活動　偵察

容姿　メイドさん。それ以上でもそれ以下でもない美女

髪の色　黒色

瞳の色　紅色

過去の経歴は一切不明。女王の命令で、仁と行動を共にすることになった。年齢を聞いたものは、存在を抹殺される。

キャラ設定その一（後書き）

とりあえず今回はここまでです。
これから先、設定は増えていくとので、ある程度先に進んだら、二回目の設定紹介をやると思います。
次は街の探索です。たぶん勇者たちの出番は極端に少なくなると思います。

第五話　女って、やっぱ怖えぇ！（前書き）

今回は街を探索します。
ギルド出てきます。
獣人も出てきます。
後、前話に出てきたメイドさんその二は単に仁がそう言っただけで、
メイドさんとは関係ありません。

第五話　女って、やっぱ怖えぇ！

「東間様。何か考え事ですか？」

問われて僕はゆっくりと横を向いた。

「メアリさん・・・・・・・・」

「また、仁殿のことを考えていたのですか？」

僕は思わず苦笑した。

流石に何度も同じことを考えていたら、見透かされるよな。

仁が旅に出た、と聞いたときは本当に驚いた。

僕たちは急いで女王の部屋に行き、真相を問いただした。

あのときメアリが止めてくれなければ、僕たちはすぐに城を出て仁を探しに行っていただろう。

しばらくしてからメイドさんが現れ、今の僕たちでは仁の足手まといにしかならないと言われた。

ショックだったが、事実だったので返す言葉はなかった。

あの日以来、僕たちは城で訓練を受けていた。

しかし――――――――――――――――――――

「理香様も、仁殿が旅立たれてから溜め息ばかりついているように見えます。」

「そんなことないわよ・・・・・・・・・」

声のした方向に振り向くと理香が歩いてきた。

「あの馬鹿がいなくなったくらいで、私が動揺するとでも思っているの？」

「ですが・・・・・・・・・・・」

僕にもわかる。

理香は明らかに無理をしてる。

いや、それは僕も同じか。

理由は先ほど指摘された通り、仁がいなくなったからだろう。

僕たちはいつも三人でいた。

もちろん四六時中一緒というわけではないし、長期休暇などのときしばらく会えない日々があった。

しかし今回は命がかかっている。

今までとは状況がまるで違う。

だからだろうか。

二人になった今は、体にとって必要な部品をいくつか失ったような喪失感がある。

きっと理香も同じような感じなのだろう。

仁。

今、お前はどこにいる？

僕たちはどれくらい強くなったらお前に追いつけるんだ？

「いらっしゃいませ、新規登録の方ですか？」

俺はメイドさんに案内されギルドに来ていた。

メイドさんがお金を持ってきてくれたとき、俺はこれを元手にして野菜を作り、それを売って生計を立てようとしたのだがメイドさんが

「ギルドへ行きましょう。」

と、にこやかに言うもんだから、

「面倒。」

といつものように答えたら、

「死にますか。」

と笑顔で返され、おとなしくメイドさんについてきたのだ。

メイドさん怖えぇぇぇーーーーっ！

わかっていたことだが。

「こちらに名前を記入してください。」

「名前だけでいいのか。」

「はい、あなたが賞金首だろうが他国の人だろうが魔王だろうが、仕事をこなしてくれるのなら問題はありません。」

にこやかにとんでもないことを言う受付嬢。

こっちの女は怖いのが多いな・・・・・・・

俺は渡された紙に名前を書く。

「はい、ではうんこちびりクンで登録完了しますね。」

「ごめんなさい、冗談です、許してください。」

俺は土下座して許しを請うた。

「次はありませんよ。うんこちびりクン。」

受付嬢は女王と同じ種類の微笑みを浮かべたまま、新しい紙を渡してきた。

俺は真面目に偽名を書く。

「はい、ではトリスで登録しますね。」

受付嬢が作業を終えると満面の笑みでこう言った。

「ようこそ、トリス様。さっさとどこかのギルドに入って死ぬ気で働いてください。」

やばい、この人メイドさん並みに危険だ。

「終わりましたか。」

「ああ。」

ギルドの入り口付近に立っていたメイドさんと合流して街道を歩き始める。

「ところでメイドさん。」

「なんでしょうか。」

「さっきどこかのギルドとか言われたんだが、ここってギルドじゃないのか。」

「いいえ、ここはギルドです。」

「じゃあさっき登録した俺はこのギルドに入ったんじゃ無いのか？」

「いいえ、登録はしましたが加入はしていません。」

よくわからん。

「ここは申請ギルド、天を照らす陽光（アマルテミス）。ギルドに入るためにはここで申請登録をしなければならないのです。他のギルドはここの新人紹介掲示板の資料を持っていき、それを見て本人が来たときに加入させるかどうかを決めるのです。」

ふ～ん。

「要するに身分証明書を作る場所ってことか。」

「その通りです。ちなみにこのギルドは基本的にどの街にも存在しますが、ここに届けられる依頼はほぼありません。」

「じゃあどうやってここはどうやって食いぶちを稼いでいるんだ？」

「紹介した人間が依頼を果たした場合、依頼人は報酬の一割にあたる金額をこのギルドに送らなければならないのです。」

「送らなかったら？」

「あの受付嬢の態度でわかるでしょう。」

なるほどね。

「んっ？」

「気づきましたか。」

俺がギルドに入りたくないけどギルドに入らなければメイドさんとあの受付嬢に何をされるかわからない、という問題をどうやって解決するかを考えていると悲鳴が聞こえた。

「どうしますか？」

「無視する。」

面倒事に関わっていられるか。

俺はそのまま歩き続ける。

メイドさんは否定も肯定もせずに一緒に歩く。

しばらく歩いたが俺は足を止める。

ところで話は変わるが、夜中に時計の音が気になったことはないだろうか。

寝ようとしているのに、カチッ、カチッ、と時計の音が気になって気になって眠れなくなってしまうことはないだろうか。

俺は今、気づいたことがある。

悲鳴って無視し続けると、その時計の音以上に気になって気になって仕方がなくなる。

っていうか正直うぜぇ。

「メイドさん。」

「なんでしょうか。」

「ちょっと行くところが出来た。」

「御同行しましょう。」

俺は悲鳴の元へと走り出した。

（やはりあなどれませんね・・・・・）

仁は普通に悲鳴に反応していたが、周りの人間は全く反応していない。

メイドさんも下手をすれば聞き取れなかったほど小さな悲鳴を、仁ははっきりとしかも何度も聞き取った。

この事実だけでも仁が普通の人間ではないことはわかる。

（女王様、あなたの目に狂いはなかったようです。）

メイドさんは主君の人を見る目は確かだと、改めて思った。

「ここか・・・・・・・」

見た目は路地裏にある普通の小屋だな。

だがさっきからの悲鳴はここから聞こえきやがる。

中に入って確かめてみるか。

「お待ちくださ――――――――――――――――」

メイドさんが何か言ってきたが、俺は無視してぼろい扉をぶっ壊した。

蹴り一発で壊れるなんて、見た目通りもろい扉だ。

中に入ってみると、ある意味予想通りの光景。

左右には牢が作られていて、中には大人から子供まで幅広く。

中央には両手と両足を鎖でつながれた少女がもがいている。

だがもがくたびに電流が流れ、悲鳴を上げている。

悲鳴の正体はこれか。

「・・・・・・・・・・・あなたは本当に何者ですか・・・・・」

後ろからメイドさんが驚いたように俺を見る。

「この扉は魔法で強化され、並大抵の攻撃では傷一つ付かないようになっています。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なにをしているんですかメイドさんっ！　早く中の人たちを救出しないとっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・まあ、正論ですね。」

メイドさんは牢の前に立つと、何かを取り出し鍵穴に差し込んだ。

「大丈夫です。私たちはあなた方を助けに来ました。」

牢の中にいる人々を刺激しないように優しく語りかけるメイドさん。

メイドさんに優しくしてもらえるなんて・・・・・・うっ、羨ましいだなんて思ってないんだからねっ！

やがて牢の扉が開く。

湧き上がる歓声。

「皆さん、少し落ち着いてください。いま他の扉も開けます。」

メイドさんが作業に取り掛かっている間に、俺は中央のの少女へと近寄った。

精一杯俺を睨みつけていたが、結構な時間電流を浴びていたようだ。

「メイドさん、何か刃物を貸してくれ。」

メイドさんは俺によく切れそうなバターナイフを貸してくれた。

・・・・・・・・・・・・なんで？

とりあえずバターナイフで少女の鎖を切る。

鎖から解放された少女は自力で立つことができずに倒れそうになったので、とりあえず抱きとめてやった。

少女は気を失ったようだ。

んっ？

俺はあることに気付いた。

この少女、変な所に耳が生えている。

これは・・・・・・・・・ネコミミ？

「なにをしているっ！？」

俺が本物かどうか確かめようとしたところに男の野太い声が響く。

入り口には剣を持った荒くれ者Ａ、Ｂ、Ｃがいた。

俺の探求心を邪魔するとはいい度胸だ。

第五話　女って、やっぱ怖えぇ！（後書き）

次回、木彫りの熊が火を噴きます。

嘘です。ごめんなさい。

第六話　むかつく奴は、ぶちのめすに限るな！（前書き）

初戦闘です。
下手くそで、短いです。ごめんなさい。
戦闘シーンって書くのが非常に難しいです。
主人公は無駄に強いです。
というか作者が主人公至上主義なんで、そのあたりは、ご容赦ください。
木彫りの熊は、城から旅立つ前に、東間から返してもらいました。

第六話　むかつく奴は、ぶちのめすに限るな！

俺は三人の男たちを睨みつける。

「なんだてめえ、その目はっ！」

男たちはずかずかと俺の前に歩いてきた。

牢の中の人たちは牢の奥に固まって震えている。

メイドさんはいつの間にかいなくなっていた。

「なんだお前ら、強盗か？」

「ふざけんじゃねえ、人様の所有地に勝手に入ってきて中の商品を盗み出そうとしたのは、てめえの方じゃねえか。」

リーダー格らしい男が俺に文句を言ってきた

ああ、なるほど。

「奴隷商人か。」

どこにでもいるんだな。クズって。

「へっへっへっ、なかなか鋭いじゃねえか。」

いや、さっきお前が中の商品とか言ったんだろう。ここには他には何もないぞ。

「だがよ、ただの奴隷じゃねえ。こいつら獣人は普通の奴隷の数倍の値で売れるんだからよ。」

男たちは剣を背中の鞘に収め、リーダー格の男が得意げに話しだした。

「普通の奴隷とは力も体力も段違いだからよ。働きがよくて人気があるんだ。こんなにボロい商売は他にはねえぜ。」

「人身売買なんて国にばれたら終わりだろう。」

「ところがよ、この国のお偉いさんの中には獣人を差別してる人もいてな。俺たちの商売を黙認してくれてるのよ。」

男たちはへらへらと笑っている。

癪に障る下卑た笑いだ。

「それどころか金の一部と引き換えに、俺たちの身の安全を保証してくれてるのさ。まあでも流石に人間の奴隷を売ることはできなくなっちまったがな。」

やれやれ、上の方に行くとどうしてもクズって増えるんだな。

「ところでよ、なんで俺がここまでペラペラと話してやったと思う？」

男たちがにじり寄ってくる。

「さあ？」

「それはな・・・・・・・・死ぬ前の手土産くらい渡してやろうっていう優しさってやつだよっ！」

男たちは背中の剣を抜き放ち襲いかかってきた。

「「「死ねえぇぇぇぇーーーーーっ！！」」」

男たちの野太い叫び。

俺は顔にかすかな笑みを浮かべる。

正当防衛成立だな。

俺は抱きかかえている少女をリーダー格の男へと投げつけた。

「おわっ、とぉっ！」

男は慌てて剣を捨てて少女を受け止める。

いまだ！

俺はリーダー格の男の足を払い、バランスを崩したところで顔面にひざ蹴りを入れた。

「おぶぅっ！」

リーダー格の男は鼻血を出して仰向けに倒れた。

「て、てめえっ！」

横の男が剣を振り下ろしてきた。

俺は少女の足を掴んで後ろに下がる。

剣が床に刺さると俺は足で剣を押さえつけ、少女を勢いよく振り回した。

ごちんっ、と鈍い音を立てて少女の頭と男の頭が激突した。

声もあげられずに男が倒れ伏す。

「さて、と」

俺は残りの一人を見る。

「ひ、ひぃっ！！」

残された男の顔は恐怖で引きつっていた。

見た目は大して違わないのに中身は違うもんだな。

まあ、小物って点は全員同じみたいだが。

男は俺に背を向けて逃げ出した。

逃がしてやらね―けど。

俺は少女を捨てると懐から木彫りの熊を取り出し、大きく振りかぶ

って投げた。

「あべっ！」

木彫りの熊は見事に男の頭に命中し、男は倒れた。

まあ、たぶん生きてるだろう。

「お疲れさまでした。」

隣にはいつの間にかメイドさんが。

「見てたんなら手伝ってくれよ。」

「申し訳ありません。私はか弱いメイドさんですので。」

真顔でそんなこと言われても・・・・・・

「さきほど城に連絡を入れておきました。直に兵たちが駆けつけてくるでしょう。」

「でもこいつら、捕まってもすぐに釈放されるみたいだぞ。」

「女王陛下に直接お伝えしました。証拠物品も先ほど押収しましたし、この者たちの背後関係も調査中です。いずれにせよ即時釈放はありえないでしょう。」

「トカゲのしっぽ切りされたらどうするつもりだ。」

「私の信頼のおける部下たちに見張らせておきます。口封じをさせ

るつもりはありません。」

「ぬかりはない、か。」

「無論です。」

心配はいらないか。

「んじゃ、行きますか。」

「どこにですか?」

「知らん。」

「宿を取ってありますからそこへ向かいましょう。」

「わかった。」

ふと、俺は足元の少女を見る。

頭に結構大きなこぶがあった。

「この娘も連れてっていいか?」

「・・・・・・・・・別に構いませんが、理由をお聞きしてもよろしいでしょうか?」

メイドさんが胡散臭そうに俺を見てくる。

まあ、さっき武器として使っちゃったし、頭のこぶの治療くらいし

てやらないと流石に、なあ。

「親切心ってやつだ。」

「嘘ばかりついているとナイフを千本飲ませますよ。」

「ごめんなさい。」

「・・・・・・・・まあいいでしょう、それより早く行きましょう。」

俺は少女をかついで木彫りの熊を回収した後、メイドさんの後ろについていった。

ちなみにバターナイフは宿に着いたら洗って返してくれと言われた。

第六話　むかつく奴は、ぶちのめすに限るな！（後書き）

雑魚戦でした。
すいません表現が未熟で・・・・・・
あと、女性に謝ってばかりいますが、仁は別に女性が苦手なわけではありません。
ただ、出会った女性が、強いだけです。
次は宿屋で獣人娘を仲間にする予定です。
若輩者の身ゆえに、設定が矛盾しているとかあるかもしれませんが、寛大な心で見守ってください。

第七話　泣く子を止めるのって、面倒くせえ！（前書き）

宿屋です。
ネコミミです。
泣きます。

第七話　泣く子を止めるのって、面倒くせえ！

「うーわー、普っ通。」

宿屋に到着した俺たちを待っていたのは、どこにでもありそうな民家を少し大きくしたような宿屋だった。

「いやさあ、一応、俺って女王の命令で旅に出たわけだし、もっとこう豪勢な宿屋か正体を隠すために非合法のぼろぼろの宿屋かどっちかだと思ってたんだけど。」

「前者はお金の無駄遣い、後者は意味がないので普通の宿です。」

「意味がないって・・・・俺も一応召喚されたんだけど。」

「市民には召喚された勇者様は二人だと公表してありますし、城の者たちも従者であるあなたを本気で探そうとする者はいません。」

「・・・・・・・・・・・そーっすか。」

なんでだろう、目からちょっぴり塩分を含んだ液体が流れてきた気がする。

「早く行きましょう。」

メイドさんは宿屋に入ると主人と二、三言かわして二階へと上がっていく。

俺は少女を引きずりながらメイドさんについていく。

途中、階段を昇るたびになにかがぶつかる音がしたが気のせいだろう。

二階の一室に入るとこれまた地味な部屋だった。

「仁様、とりあえずお座りください。」

ベッドは二つ。

俺はメイドさんが座ってない方のベッドに少女を寝かせ、ふと気付いた。

「メイドさん。」

「なんでしょうか。」

「この娘、なぜか頭に傷が増えているように見えるんだが俺が気づかないほどの刺客が襲ってきてたのか？」

「なるほど、本気で気づいていなかったのですね。」

「なにに？」

「あなたが少女をここまで運んでくるときに、街の人たちに変な目で見られていたことは？」

「当然、気づいていたが・・・・・・あれとこの娘との傷と何か関係があるのか？」

メイドさんが深く溜め息をついた。

俺、なにかやったっけ。

「いいえ、あなたは何もしていません。ただこの娘を引きずって運んできただけです。」

「だろう、変なことしてないよな・・・・・・」

「ええ、途中の石にこの娘の頭をぶつけようとも人ごみでこの娘の頭が蹴られようとも先ほどの階段でこの娘の頭をいちいち段差にぶつけようとも、あなたは気にも留めずににここまでこの娘を運んできました。女をキズモノにしたのですからきちんと責任を取ってくださいね。」

あっ、なるほど、さっきの鈍い音や街の人の変な視線の原因はそれか。

あれっ、もしかして俺って一般人にあるまじき行為をしたのか？

「う、う～ん・・・・・・・・・」

タイミングを見計らったように少女が意識を取り戻し始めた。

・・・・・・・・・よしっ、あれでいこう。

「ここは・・・・・・・・・」

少女が目を覚ました。

「痛っ・・・・・・・・っ！！」

どうやら頭の痛みに気づいたようだ。

「大丈夫か。」

俺はなるべく優しく話しかけた。

「・・・・・・・・・あんた、誰だ。」

少女が俺たちを警戒する。

「おいおい、随分な御挨拶だな、俺たちは捕まっていたお前たちを助けてやったってのに。」

「助けただって・・・・・・・・・？」

少女は自分の置かれていた状況を思い出したらしく、ベッドからはね起きると俺の胸ぐらを掴んだ。

「おいっ、みんなはっ！　みんなは無事なんだろうなっ！？」

「御心配には及びません。あそこに捕まえられていた獣人たちは皆（みな）、女王陛下が保護されました。事情を聴いた後、故郷へと送られるでしょう。」

「本当だなっ！？」

「嘘をついても私に利はありません。」

「・・・・・・・よかった・・・・・・ほんとによかった・・・・・・・」

少女が涙をこぼしながらその場に座り込んだ。

「・・・・・ところで、なんであたしの頭がこんなに痛いんだ・・・・・・・」

「それだけこぶができていれば当然でしょう。」

「こぶ・・・・・・・・・・・・？」

少女は頭を触った。

「ほんとだ・・・・・・・・・いつの間にこんなにこぶができたんだ・・・・・・あいつらに捕まってた時は、商品に傷がつくからって電流を浴びさせられてただけなのに・・・・・」

「それは――――――――――――――――――――――――――」

「俺たちがお前たちを助けに行ったらあの男たちが逆上してな奪われるくらいならって暴れまくったんだよその時に気絶していたお前が巻き込まれてボコボコになったんだすまないな俺たちがもっと早く助けられていたらお前にこんな傷を負わせることは無かったのにな本当にすまん。」

「そう、だったのか・・・・・・・・・？」

これぞ秘義、超早口で相手を納得させる術。

反論やつけ込ませる隙を作らず、かつ相手が内容を完全に理解することがないように一気にしゃべりつくすのだ。

狙い通り、こぶの痛みを忘れて呆けていやがる。

メイドさんから汚物でも見るような視線を感じたが、気にしな～い。

メイドさんは俺から少女に視線を移して（もちろん視線は優しげなものになっている。）口を開いた。

「一つお聞きしてもよろしいでしょうか。」

「・・・・・・・・・・なんだよ・・・・・・・・」

「あなたのその手の甲にある紋章、それは狩猟ギルド誇り高き民（ブラウネオス）のメンバーである証。そのあなたがなぜあのような者たちに捕らえられたのですか。」

「なんだそれ。有名なのか。」

「あとで説明しますから、黙っていていただけますか。」

事情を知らないと空気になるなー。

「・・・・・・・・・・・・人間だよ。」

「・・・・・・・・・」

少女は吐き捨てるようにつぶやいた。

今更だがこの娘、尻尾はあるのかな。

後で聞いてみよう。

「あの日、私は人間の依頼人の仕事を受けた。生態系を乱さないよう突然山に現れた凶暴な肉食獣を倒してくれってな。だけど山にいたのは肉食獣なんかじゃなかった。あれは――――――――――」

少女は震えた。

「あれは、魔獣だ。」

メイドさんの顔が険しくなった。

魔獣ってあれか、ゲームとかでよく出てくる超大型獣（ベヒモス）とかか。

「あいつにはどんな攻撃も魔法も効かなかった・・・・・あんなに大きな獣初めて見た・・・私は必死に逃げたけど・・・・・奴の攻撃で吹き飛ばされて・・・・目が覚めたら、鎖に繋がれてた・・・・・」

なるほど、確かに人間の――――――――――――――――

んっ？　ちょっと待て。

「お前、確かさっき人間のせいで捕まったって言ってたよな。」

「そうだよ・・・・・それがどうした・・・・」

「え～っと、お前が気を失ったのは魔獣の攻撃を受けたからだよな。

」

「そうだって言ってるだろ、何が言いたいんだよっ！」

いや、俺にキレられても困るんだが。

「じゃあ捕まったのって、魔獣にやられたお前の弱さのせいじゃね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は沈黙し――――――――――――――――

「うわーーーーーーーんっ！！」

いきなり泣き出した。

「女の子を泣かせるなんて・・・・・・・・最低ですね。」

「いやでも事実だし。」

「事実だろうともう少しやわらげて言うべきです。女心が全く分かっていませんね。」

女心って関係あるのか。

「いやっ、うんっ、確かにお前の言うとおりお前に無茶な依頼をした人間が悪いな、うん。」

俺は仕方なく少女を慰めた。

「うっ、ぐすっ、違うんです～。」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で何かを話しだす少女。

「違うって何が違うんだ。」

「この依頼・・・・・もともとはギルドでは引き受けないはずだったんです・・・・・でも私、早く一人前って認めてもらいたくて・・・・・勝手に依頼人のところに行って・・・・・・・・」

「でっ、実力不足で負けて瀕死のところを人間に捕らわれたってわけか。」

「うわーーーーーーーーーーん!!」

呆れたな、おい。

こいつ、むしろ人間に見つけてもらえなかったら死んでたんじゃねえか。

「しかし、お前を捕らえた奴らはその魔獣ってのを退けられるだけの強さがあったってことか。」

この前の三人組と同じ感覚で戦ったら死ぬかもな。

「いえ、その可能性は低いでしょう。」

「なんでだよ。」

「そんな人物がいたら私が情報を持っていないとでも？」

そりゃそうか。

「じゃあどうやってあいつらはこの娘を捕らえたんだよ。」

「単純に魔獣が去った後にこの娘を発見したのでしょう。要するにこの娘は魔獣の眼中に入っていなかったのでしょう。攻撃というのも恐らく、ただ単に歩いただけと考えるべきです。」

「うわーーーーーーーーーーーーーーーーんっ！！！」

死ぬ思いで戦った相手に気づかれもしなかったのか・・・・・・

不憫な奴。

メイドさんが鼻紙を取り出して少女の鼻に当てた。

少女は鼻をかんだ。

「ぐすっ、私、これからどうしたらいいか・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・」

知らんと答えたかったが、また泣かれても面倒だしな。

「仁様。」

メイドさんが耳打ちしてくる。

「仁様、ここは彼女をブラウネオスまで送って差し上げるべきです。」

「なんでそんな面倒なことを・・・・・・」

「ブラウネオスは獣人たちの国デニルガルス最大のギルドです。そこのメンバーを救いギルドまで無事に送り届けたとなれば、獣人たちから警戒心を取り除くことができるかもしれません。」

要するに恩を売りつけるってわけか。

「使えるものは何でも使います。それにもともとどこに行くか決まって無かったですし、丁度いいと思いますよ。」

ここで反論したって勝てないよな、絶対。

「ブラウネオスは王都ガルアリスにあります。」

「了解。」

俺は少女に話しかけた。

「おいっ、お前、名前は？」

「名前・・・・・・・アイリス。アイリス・グエルジェリンです・・・・・・」

「アイリス、俺たちはこれから王都ガルアリスを目指す。おまえはどうする？」

「・・・・・どうするって・・・・・・・・?」

「俺たちと一緒に来るかどうかきいてるんだ。」

「・・・・・・一緒に、行っていいの?」

「別に構わねえ、お前が決めろ。」

少女は少し考えてから答えた。

「私も・・・・・つれていってください。」

「よしっ、いいだろう。」

こうして俺たちの旅に同行者が加わった。

一人で行くって言った場合も気絶させて強制連行するつもりだったが。

「これからよろしくな、アイリス。」

「はいっ!」

「ところで、なんでさっき他の人が解放されたのをあんなに喜んでいたんだ。誰か知り合いでもいたのか。」

「いえ別に、ただ単にああした方が周りの人が仲間思いのいい奴だって同情してくれるから、いろいろ得をするって教えてくれた人がいるんです。」

「・・・・・・・・・・」

「あっ、それと初対面の方にはなるべく不良っぽく強気で言った方が良いってことも教わりました。」

意外と純真無垢な娘だったんだ。

そしてそれを教えた奴はいい性格しているな。

第七話　泣く子を止めるのって、面倒くせえ！（後書き）

というわけで、ネコミミ娘、アイリスが仲間になりました。
尻尾があるかどうかは、ご想像にお任せします。
次はいよいよ、街を出ます。
（今回の後書き、編集しました。）

第八話　殺気立つ女がそばにいると、かなりやべえよ！（前書き）

とりあえず、街を出ます。
それといい加減、木彫りの熊だけじゃなくなります。木彫りの熊も使いますが。

第八話　殺気立つ女がそばにいると、かなりやべえよ！

「・・・・・・・・・・・」

「陛下。」

窓の外を眺めていると後ろから声がかかってきた。

「どうしました。」

相変わらず音も気配もなく近づいてくる子だ。

もっとも私ごときがこの子の気配を察せるわけはないのだが。

「私たちはこれからデニルガルスの王都ガルアリスへと向かいます。」

「ガルアリスへ・・・・・・？　いったいなぜ。」

「実は先日の奴隷たちの中に一人、ブラウネオスのメンバーの少女がいまして。それを私たちが保護しブラウネオスへと送り届けようという次第です。」

「なるほど・・・・・・、獣人たちの人間に対する嫌悪感は強いですが、受けた恩は決して忘れない誇り高き種族。ブラウネオスのメンバーを送り届けたとなれば彼らもあなたたちを無下にはにはできない。という算段ですね。」

「相変わらずの聡明さで・・・・・・・」

この子が言うと皮肉にしか聞こえないわね。

不思議と嫌な気分にはならないけど。

「それにしても私のもとに届いた資料の中には、そのような娘は載っていなかったはずですが。」

「すみません、仁殿が勝手に連れてきてしまいまして・・・・・・」

「そうですか。」

「陛下、一つ質問をしてもよろしいでしょうか。」

「なんでしょう。」

「陛下はなぜあのような男に期待をなさっているのでしょうか。」

「私の決定に不満があると？」

「いえ、決してそのようなことはありません。ですが私にはあの外道に期待をするようなところがあるとは思えないのです。」

あら、この子が他人をそんな風に言うなんて珍しいわね。

「あなたがそう言うなんて、よほど彼を気にかけているのね。」

「は？」

呆けて瞬きしてるなんてますます珍しいわね。

「陛下、ふざけないでください。」

「別にふざけてなんかいないのだけれど・・・まあいいわ。」

私は空を見上げた。

雲一つない、晴天だった。

「確かにただ単に魔王を倒すだけならば、今この城に残っている二人の勇者様だけで十分――――――いえ、彼ら以外には無理でしょう。ですがそれだけでは駄目なのです。」

「と、言いますと？」

「彼らでは魔王を倒せても、平和を取り戻すことはできません。」

「・・・・・陛下・・・・・あなたはまさか・・・・・・・・」

「ガラスと一緒で、表側だけきれいにしても裏側をきれいにしなければ意味はない。ということです。」

「陛下・・・・・・・・・！」

この子の怒りももっともね。

私は自分たちの世界の都合に異世界の住人である彼らを巻き込んでしまったのだから。

そしてそれは、この子にとって最も許せないこと――――――

―――――――。

「・・・・・仁たちが待っています。私はこれで・・・・・・・・・」

私から背を向ける。

恐らく私はこの子に嫌われてしまったでしょう。

でもこれだけは言わせてほしい。

「いってらっしゃい。必ず帰ってくるのよ。」

返事はなく、振り向きもせずに瞬きをしている間に消えてしまった。

「・・・・・・・・神よ、願わくば裁かれるのは罪深きこの身だけにしてほしい・・・・・」

私は届くはずもない祈りを天にささげていた。

「遅いですね、メイドさん。」

「そうだな・・・・・・」

俺たちは街の門の前でメイドさんを待っていた。

門番が不審げにこちらを見ていたが、メイドさんにここで待っているように言われたのだから仕方ない。

「お待たせいたしました。」

「メイドさんっ！」

「やっときたか・・・・・、って。」

メイドさんがやけに不機嫌だった。

「なにかあったのか？」

「いいえなにも。そんなことより早く出発しますよっ！」

「わわっ、待ってよっ、メイドさん！」

メイドさんは一人でずかずかと先に進んでいった。

なにかあったのは確実だったが、怖いからそのままついていった。

しばらく進むとメイドさんが急に止まった。

「仁殿。」

「なっ、なんだ？」

思わず声がどもってしまった。

アイリスにいたっては俺の後ろに隠れて震えている。

「どうかなさいましたか。」

「い、いやっ、なんでもない、気にするな。」

だからその殺気をおさめてほしい。頼むから。

「そうですか、そんなことより渡すものがあります。」

「なっ、なんでしょうか？」

「これです。」

メイドさんは袋から何かを取り出し放り投げてきた。

慌てて受け止めると、それは――――――――――――

「・・・・・・剣？」

鞘から抜いてみると、純白に輝く見事な刀身の剣だった。

これほどの物はそうそう転がっていないだろう。

「ミスリル、と呼ばれている希少な金属でできた剣です。店で売っている物でこれよりも優れた剣はそうは無いでしょう。」

「節約志向じゃなかったのか？」

俺は殺気立っているメイドさんに聞いてみた。

「城の物です。」

「餞別か何かか、でもこういうのは東間にやるもんじゃないか。」

「私が勝手に持ち出したものです。」

「盗品じゃねえか！」

「そうですが、それがなにか？」

メイドさんはしれっと言った。

「どちらにしろ、俺には木彫りの熊さんが――――――――――――」

なにかが俺の右頬をかすめた。

血が流れる。

「ナイフをぶち込まれたくなければ冗談はやめなさい。」

「サー、イエッサーっ！」

飛んできたナイフを俺は持っていた鞘ではじいた。

怖えっ！　マジで怖えっ！！

「なんですかそれは、どういう意味ですか、本当にナイフをぶち込みますよ。」

「ごめんなさい、許してください。」

冗談は許されないらしい。

「・・・・・・・・・・・本当に、ふざけないでください・・・・・私たちの都合のせいであなたたちを犠牲にしたくないのですから・・・・・・・」

メイドさんがぼそぼそとつぶやいている。

「何か言ったか、メイドさん。」

「なんでもありません。先を急ぎますよっ！」

メイドさんは歩く速度を速めた。

俺は歩きだそうとして動きを止めた。

「メイドさん、ちょっと待ってくれ。」

「なんですか、くだらないことだったら許しませんよっ！」

「アイリスが気を失ってる。」

「・・・・・・・・・・・」

俺の背中に隠れていたアイリスは、どうやらメイドさんの殺気に耐えられなくなったらしく気絶していた。

通(どお)りでなにもしゃべらないと思った。

アイリスはその日の内には目を覚まさず、俺はアイリスを背負って

歩くはめになった。

第八話　殺気立つ女がそばにいると、かなりやべえよ！（後書き）

すみません、あまり進みませんでした。
ちなみに魔物や野獣は、メイドさんの殺気に恐怖して近寄って来ません。
そのため戦闘はありませんでした。
次回は、国境付近の話しにする予定です。

第九話　俺って結構、大人げなかったんだな！（前書き）

今回は国境の町の話です。
最近説明台詞が多くて、なかなか先に進みません。
フラグが一つ立ちます。

第九話　俺って結構、大人げなかったんだな！

「到着いたしました。」

俺たちは何とか怒りをおさめてくれたメイドさんの案内の元、国境の街に辿り着いた。

「ここは中央交易都市ルサナンです。」

「仁さん、初めてなんですか？」

「ああ、まあな。」

アイリスはやけにうれしそうに尋ねてくる。

「じゃあ私が案内してあげますね！」

「却下です。」

「どうしてですか、メイドさん。」

どうせ先を急がなければなりません。とか言うんだろうけど。

「案内はメイドさんたる私の仕事です。アイリス様にはデニルガルスについてからの案内をお願いいたします。」

意外な理由！

「はいっわかりましたっ！　メイドさんっ！　ご案内お願いします

っ！」

わかっちゃったよっ！

先頭だって歩くメイドさんに俺たちは大人しくついていく。

まあでも、メイドさんの機嫌が元に戻ったのはいいことだがな。

一緒に旅をする以上、ギスギスした空気のままじゃ気が滅入るしな。

「ではまず、この街の成り立ちから説明しましょう。」

歩きながらメイドさんの説明が始まった。

「まず、この街は完全なる中立の街です。」

「中立だって？」

「はいっ！　この街は人間、獣人、竜人、魔族やエルフも含めたありとあらゆる種族が暮らしている街なんですよっ！」

「アイリス様、私が説明をしますから静かにしていくください。」

「あっ、すみません・・・・・・」

別に誰が説明しようとも構わないんだけどな・・・・・・

「おほんっ。この街はすべての国の中間に存在し、陸路でほかの国へと行くためにはこの街を通る必要があります。」

んっ、ちょっと待て。

「陸路が使えないなら魔王軍はどうやって他の国に攻め込んでんだ？」

「もちろん、海路と空路です。」

そりゃあ陸が使えないなら、あとはその二つかあるいは転移くらいしか方法はないだろうが。

「じゃあ魔王軍はその二つだけで、世界の半分を制圧したってのか？」

「いえ、二つではありません。一つです。」

「えっ？」

「魔王軍は空路だけで世界の半分を支配したのです。そもそも海路と言っても、魔族たちの国ラヘルレギスは一年を通して雪が降りやまない厳しい環境です。周囲の海は凍りついていますから砕氷船にかける莫大な費用も必要になってしまうため、魔王軍にはおまけ程度にしか海軍は存在しません。」

メイドさんが溜め息をついた。

「もっとも、そのせいで海から魔王軍へと攻め込むことはできないのですが・・・・」

「・・・・空路からしか敵が来ないって、わかってたのに世界の半分を支配されるって・・・・」

とてつもなく阿呆なんだな、この世界のお偉い方は。

でも少なくともあの女王は、そんな間の抜けたことをするようには見えなかったけどな。

「原因は二つあります。」

メイドさんが説明の続きをし始めた。

「一つは先日、女王陛下がおっしゃっていた通り同盟軍の結束の弱さです。」

こころなし、女王陛下って発言したときに怒りが混じっていたような気がするが・・・・・

気のせいだろうな。

「二つ目は空路から攻めてきた敵、魔王軍の幹部が私たちの予想を遥かに超えた実力者だったことです。」

フラグ来たーーーーっ！

「その名を――――――――――――」

「メイドさんストップ、それ以上は言わなくていい。」

「へっ、なんで話を止めちゃうんですか？」

「アイリス、説明台詞の中に強敵の説明が入ってかつその名前を聞

いちゃうと、自動的にライバルフラグか強制敗北フラグが立っちゃうもんなんだぞ。」

「仁さん・・・・・・言ってる意味がよくわからないんですけど・・・・・」

「アイリスの言う通りです。訳のわからない言葉で話の腰を折らないでください。」

メイドさんは不機嫌そうに言った。

あ～あ、これでそいつとの戦いは避けられそうにないな。

「その名を、無双竜牙（ガエボルク）のヴェンリス。六星魔将最強の武人と言われています。」

強そうだな～。戦うなら東間たちが戦うべきだろ～。チートなんだし。

「ご安心ください。ヴェンリスは強者との戦いを何よりも楽しみにしている戦闘狂です。私たちがよほど派手に動かなければ、相手をすることもないでしょう。」

そういう奴に限って、なんてことない行動でこっちをつけ狙うストーカーと化すんだよな～。

「ともあれ、魔王軍の進撃はヴェンリスあってのもの。そこで女王陛下は魔王軍にあることを告げました。その結果魔王軍、というよりヴェンリスは侵略をやめたのです。」

・・・・・・初耳だな。

「えっと・・・・・・・・私、そんな話聞いたことないんですけど・・・・」

「知らなくて当然です。これは一部の者しか知らない極秘事項ですから。」

「・・・・・・・・そんなことを俺たちに話していいのか。」

「構いません。というよりあなたと東間様、理香様は知らなければならないことです。」

・・・・・・・だいたいの予想はつくけどな。

「女王陛下たちは、魔王軍に伝説の勇者を召喚することを宣言しました。ヴェンリスは強い者と戦うことを至上の喜びとする戦闘狂。だからこそ勇者が成長し魔王軍に乗り込むまで停戦することを確約させました。魔王軍が侵攻を再開するためには勇者を抹殺することが絶対条件。条約の一つに六星魔将は出撃してはいけないというものはありますが、魔王軍は勇者を殺すために様々な刺客を送り込んでくるでしょう。ですが、死んだのならまた新しい勇者様を召喚すればいいだけのことですから・・・・・・・・・」

ははぁ、なるほど・・・・・・

つまりこいつら。

「俺たちを使い捨ての駒として召喚したわけか。」

「・・・・・・・否定はしません。」

アイリスは話が理解できずにおろおろしている。

俺はメイドさんの胸ぐらをつかみ上げた。

「じっ、仁さんっ！　なにをしているんですかっ！？」

「一つ聞かせろ。」

俺はメイドさんの目を射抜くように見る。

「なんでその話を俺にした。」

「・・・・・・・・・・あなたには知る権利がありますから・・・・・」

「・・・・・・・・・ふんっ。」

俺はメイドさんを離した。

「・・・・・・・・・なぜ・・・・・・」

「お前を責めたって、状況は変わらないしお前の責任でもない。」

イラついているのは事実だがな・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「えーっと、えーっと、あっ！　そうですっ！」

アイリスが突然大声を上げた。

「仁さんっ、メイドさんっ！　行きましょうっ！」

俺とメイドさんの手を掴み走り出す。

「どっ、どうしたのですかっ！？」

「なんだ、なんだっ！？」

アイリスはある屋台の前で急に止まった。

「おいっ、おやじっ！　串焼き三本だっ！　早くしやがれっ！」

相変わらず初対面の人には強気で不良っぽいな・・・・・

屋台のおやじさんから串焼き三本を買ったアイリスは、一本ずつ俺たちに渡してきた。

なかなかに食欲を誘う良い香りだ。

「えっと・・・・・アイリス様、なぜ急にこのような物を・・・・・」

「いいから食べてくださいメイドさんっ！　ほら、仁さんも早くっ！　焼きたてが一番おいしいですからっ！」

催促されるがまま、俺とメイドさんは串焼きにかじりつく。

うんっ、タレの味がよく染みてるし肉も程よい柔らかさだ。

実にうまいっ！

メイドさんもどうやら同じような感想を抱いたようだ。

微妙に顔が笑みの形を浮かべている。

「私、難しい話はよくわかりませんっ！」

串焼きをかじりながらいきなり話しだすアイリス。

「でも、みんなで食べる串焼きはおいしいですっ！」

まあ、実際においしいから反論はできないが。

「おいしい物は一人で食べても味気ないですっ！」

そりゃそうだが・・・・・・・

「私はギルドの仲間と同じくらい仁さんとメイドさんが好きですっ！」

・・・・・・・・・・・そいつは光栄だな。

「みんなで楽しく、おいしい物を食べれば暗い気持ちなんて吹っ飛んじゃいますっ！」

・・・・・・・・・・・楽観的だな。

「これからも喧嘩をするかもしれないですけど、そのときはまた一緒においしい物を食べれば簡単に仲直りできると思いますっ！」

こいつ純粋っていうより、純馬鹿っていうんじゃないか・・・・

「だから仁さんもメイドさんも、これで仲直りできましたよねっ！みんなで仲良く旅を続けましょうっ！」

・・・・・・・・・・・・

今、気づいた。

こいつ震えてやがる。

この前メイドさんが不機嫌だったのも、俺と仲違いしていたと思ったわけか。

でっ、さっきの俺の行動で完全に仲違いを起こしたと思って、なんとか俺たちを仲直りさせようと自分なりに必死に考えたわけか。

・・・・・・・・・・・・はあ。

子供に気を遣わせるとは・・・・・・・・・

俺が目指す一般人とは程遠いな。

「ふえっ！」

俺はアイリスの頭を撫でた。

「悪い、アイリス。俺もまだまだだな。」

次いで俺はメイドさんに頭を下げた。

「メイドさん、すまない。少々頭に血が上っていたようだ。」

「・・・・・・・・いえ、それを言うなら私もです。」

メイドさんは、たぶん初めて心から俺に頭を下げた。

「ごめんなさい仁殿。それにアイリス様。最近の私は頭に血が上り過ぎていたようです。」

「・・・・・・・・うんっ！」

アイリスは目に涙を浮かべらながら笑顔になった。

「じゃあ仲直りの印に、二人で握手をしましょうよっ！」

そうだな・・・・・・

俺はメイドさんに右手を差し出した。

「これからもよろしく、メイドさん。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。仁殿。」

俺たちは握手をした。

アイリスは横で俺たちの様子を笑顔で見続けていた。

「すいません、店の前に突っ立っていられると営業妨害なんでどいてもらえますか。」

・・・・・・・・・・・・・・・

俺たちはメイドさんの案内の元、宿屋へと向かった。

第九話　俺って結構、大人げなかったんだな！（後書き）

言うまでもないとは思いますが、立ったフラグは強敵フラグです。
メイドさんとのフラグは、残念ながらまだ立っていません。
今回でようやく、まともに見てもらえるようになった、と言ったところです。
仁はロリコンではないので、アイリスとのフラグは立て無い予定です。（いまのところは）

第九話外伝　その頃、勇者たちは。（前書き）

今回は東間たちの話です。
主人公の出番はないです。

第九話外伝　その頃、勇者たちは。

ｓｉｄｅ東間

「はあっ！」

「甘いわっ！」

理香は後ろに下がり槍を薙ぎ払った。

「この程度っ！」

僕は槍を剣で受け止める。

そのまま刃先をすべらせ斬りかかった。

「遅いっ！」

理香は紙一重で剣を避け距離を取った。

やっぱり理香は速いなっ！

「炎よっ、我が呼び掛けに応えよっ！　火炎弾（フレアボール）っ！」

炎の塊が僕へと押し寄せてくる。

「くっ！」

僕は炎を避けきれず足にかすめてしまった。

「もらったわよっ！」

目の前に理香の槍が迫ってくる。

炎は攻撃であり目くらましでもあったってわけか。

でもこっちだってっ！

「光よっ、照らせっ！　閃光（シャイン）っ！」

僕の手の平から閃光が走る。

「うわっ！　くっ・・・・・・・卑怯よっ！　東間っ！」

理香は眩しさから眼を手で覆った。

卑怯って、目くらましたのはお互いさまでしょ。

「これでっ！」

僕は剣を理香の首に突きつける。

「そこまでっ！」

やった・・・・・・・・・！

「・・・・・・・・・あーあ、とうとう負けちゃったか。」

「やっと、一回勝てた・・・・・・・っ！」

「おめでとうございますっ！　東間様っ！」

メアリさんがうれしそうに僕に近寄ってくる。

「ありがとう、メアリさん。」

「東間様も理香様もお強くなられましたね。」

「ありがとうございます、ラフィさん。」

王国最強の騎士であるラフィさんがそう言ってくれると素直にうれしく感じる。

「ふんっ、一勝ぐらいで調子に乗らないでよ。まっ、確かに強くなっていると思うけど。」

「ありがとう、理香。」

「それにしても驚きました。お二人とも魔法を学び始めて数日しかたっていないというのに、戦いの中でもう魔法を使いこなしているとは・・・・・これが勇者の力、というものですか。」

確かに、魔法は普通最低でも三年ほど練習しなければ使うことができないと僕たちはメアリさんから学んだ。

だけど僕たちはすぐに使うことができた。

よくわからないが、覚えたというより知っていた。という感じだ。

とは言っても理香の方はすでにいくつか攻撃魔法を使えるようになっている。

召喚されたときになんらかの影響を受けたんだろうけど、それも個人差があるみたいだ。

「そういえば、仁は魔法を使えるようになったのかな？」

「さあっ？　あいつのことだから、もうとっくに使えるようになってるんじゃないの。」

「仁・・・・・・というと、確か従者の方でしたね。」

従者じゃなくて幼馴染みなんだけどね。

仁の自業自得で僕たちの従者ってことが広まっちゃったね。

「確か女王陛下の使いとして、各国へと旅立ったと聞き及びましたが・・・・・・」

ラフィさんが怪訝な顔をする。

「失礼ながら、仁殿は所詮従者なのでしょう。勇者様たちの様にすぐに魔法が使えるようになるとは思えませんが・・・・・」

メアリさんも似たような顔をしている。

理香は我関せず、といった感じで槍の手入れをしている。

僕は苦笑しながら答えた。

「確かに仁は勇者じゃないですけど、僕たち三人の中では一番強いですよ。」

「そんなはずありませんっ！」

メアリさんが強く否定してきた。

「確かに理香様はお強いですが、お三方で一番お強いのは東間様ですっ！　これだけは絶対に間違いありませんっ！」

「どうしたんですか、メアリさん。」

「あうっ、え・・・・・・・っと・・・・・」

なぜか顔を赤くするメアリさん。

「鈍感。」

理香が冷ややかな目で見てくる。

ラフィさんも苦笑しながら僕らを見ていた。

「・・・・・・・・メイドさんも仁について行っていなくなっちゃったし、ラブコメの話できる人って他にいないのかなー・・・・・・・・」

理香が空を見上げる。

「・・・仁・・・・メイドさんに手を出したら、絶対に許さないん

だからね・・・・・」

寂しげなつぶやきは僕の耳にも届いた。

まったく、理香も素直になればいいのに。

「ラフィさん、稽古をつけてくれませんか。」

「ええ、いいですよ。」

僕は剣を構える。

待っててくれ仁。僕たちは必ずお前に追いついて見せるから！

第九話外伝　その頃、勇者たちは。　（後書き）

正統派勇者って、難しいです。
ほとんど出番がなかった東間たちは、外伝で登場します。
これからしばらくは、出番はありません。
次の外伝では、理香視点の話にする予定です。
そういえば、この回で、初めて魔法が登場しました。
仁はこの世界の魔法は学んでいないので、当然ながら、使えません。
理香は仁がいないので、ツンデレとして本領が発揮できません。
余裕があったら、世界についての設定とかも出してみたいと思います。

第十話　誰にでも、意外な一面はあるもんだ！（前書き）

お金を稼ぎに行きます。
メイドさんの意外な一面が出ます。
あと少し戦闘もしますが、相変わらず上手くいきません。

第十話　誰にでも、意外な一面はあるもんだ！

「お金が無くなりました。」

始まりはメイドさんの一言だった。

「本来ならばここに来る途中で、魔物や野生の獣を狩って皮を剥いだり牙をえぐったり干し肉を作ったりして資金の足しにしようとしていたのですが、なぜかここに来るまでに一匹も遭遇しませんでした。」

メイドさん、アイリスが怯えてるぞ。

というか俺にやらせるつもりだったんだろうな、それ。

「ですからこのような情報を入手してきました。」

メイドさんは何かの地図を広げた。

地図は二枚あり一枚はこの周辺の地図のようだ。

もう一枚は洞窟の中を描いたものの様だがどちらもかなり古く見える。

「なんですか、それ？」

「宝の地図です。」

眼を輝かせながらはっきりと俺たちに告げるメイドさん。

キャラ壊れてないか。

「うわぁ・・・・・本物ですかっ！　メイドさんっ！」

純真な子どもは信じちゃうのか・・・・・

ネコミミがぴくぴく動いている。

「メイドさん・・・・・そんなもんいったいどこで手に入れたんだ。」

「外の露天商が金貨三千枚と交換してくれると言いましたが、素直に足りないと言ったら所持金全てと交換してくれました。」

おかしいと思ったよっ！

ほとんど普通の宿にしか泊ることにしか使ってないのにもらった金が尽きるわけがないよなっ！

「まったくもって親切な方です。」

騙されてるぞメイドさんっ！

「お宝とロマンを目指して、いざ冒険の旅に出発しましょうっ！」

「おーっ！！」

・・・・メイドさん・・・・ついさっきまで寡黙で冷静な人だと思ってたのに・・・・

俺ははりきっている二人を見て、これから一人旅をしようかなと本気で考え始めた。

特に何事もなく俺たちは地図に示された洞窟の入口に辿り着いた。

「大きな洞窟ですね。」

「はい、お宝の匂いがプンプンしてきます。」

メイドさん、本気でキャラ壊れかけてるぞ。

「では中に入りましょう。」

「はいっ！」

「はいよ。」

まあここまできた以上、素直に洞窟探検を楽しみますか。

男の子として生まれたからには、お宝に興味が無いといえば嘘になるし。

俺とメイドさんは洞窟に入る。

洞窟内はうす暗くジメジメしていた。

「ちょっ、ちょっと待ってくださいっ！」

アイリスが俺たちを止めた。

どうしたってんだ？　こんな入り口で。

「いやいやいやっ！　お二人ともなんでこんな真っ暗な洞窟の中に平気で入ろうとしているんですかっ！　たいまつを点けるとか光魔法で明るくするとか普通そっちが先でしょうっ！」

そういやそうだな。

「でも俺たいまつなんて持ってないし、魔法も使えないぞ。」

「私も同じです。」

メイドさん魔法使えないのか。

意外だな。この人のことだから殺戮に特化させた魔法とか使えると思ってたのに。

「生き物を殺すのに魔法を使う必要はありませんよ。」

また心読まれたっ！

「そんな物騒な話はさておき、アイリス様はどうですか。」

「えーっと、・・・・私も光魔法は使えないんですけど、確かたいまつがこの辺りに・・・・・」

ガサゴソとかばんの中を探し始めるアイリス。

「あっ、ありましたっ！」

「テッテレー、アイリスはたいまつを手に入れたー。」

「・・・・・・・どうしたんですか仁さん？」

「気でも狂ったのですか？」

ああ視線が痛いっ！　興味本位で言うんじゃなかったっ！

「それはともかく。よく持ってたな、偉いぞアイリス。」

「えへへ・・・・・・」

「これで準備完了ですね。さあ早く行きましょうっ！　ぐずぐずしていると他の冒険者にお宝を取られてしまいますっ！」

メイドさんほんとテンション高いなー。

「ところでたいまつに点けるための火はどうする気だ。」

「・・・・・・・・・・・あ。」

「これで準備完了ですね。さあ早く行きましょうっ！　ぐずぐずしていると他の冒険者にお宝を取られてしまいますっ！」

「わざわざもう一度言わなくてもいいだろ・・・・・」

あの後、メイドさんが火打石をどこからか発見しそれでたいまつに火を点けようとしたのだが、たいまつが湿っており火を点けることができなかった。

業を煮やしたメイドさんは街の方へ消えたかと思うと、火の点いたたいまつを持ってきて湿ったたいまつに着火した。

たいまつを持ってこれるならわざわざ火を移す必要無くね？

ちなみにメイドさんは地図を見て歩かなければならないため、俺とアイリスがたいまつを持っている。

たいまつで照らされた洞窟内を俺たちは歩いている。

先頭はメイドさんで一番後ろは俺だ。

しばらく進むと広い空間に出た。

「なんかちょっと怖いです・・・・・・」

アイリスは不安げに辺りを見回している。

「ひゃっ！」

「どうした、アイリス。」

水滴が首に落ちてきたのか？

「い、いいいっ、いまっ、何かっ、冷たい物が私の首筋に・・・・・

・っ！」

見事なまでに予想が的中したな。

「それはただ水滴が首に落ちてきただけだ。」

「そっ、そうなんですかっ！　よかった～。」

「良くありませんよ。仁殿、アイリス様。」

んっ？

なるほど、そういうわけか。

「アイリス、たいまつを持っててくれ。」

「えっ・・・・・・わかり、ました・・・・・」

両手が自由になると俺は懐から――――――

「えっ？　えっ？　どうしたんですか？」

答えてやりたいがどうやら向こうは我慢できないらしい。

がさがさがさがさっ！！

「これって・・・・・・・っ！」

徐々に大きくなっていく音にアイリスも気がついたようだ。

「さてと・・・・・・軽く相手をしてあげますか。」

足は八本あり触覚が付いている黒光りする巨大な虫が俺に襲いかかってきたっ！

蜘蛛とゴッキーを合成させて巨大化させるとこんな感じになるんだろうな。

俺は真っ直ぐ突っ込んできたゴキグモ（今、命名した）を剣を抜くと同時に一閃した。

いわゆる抜刀術というものだ。

ゴキグモは縦に二つに裂けしばらく動いていたがやがて動かなくなる。

「馬鹿ですね。」

メイドさんが冷ややかに言った。

倒したのになんで罵倒されなきゃならないんだ――――――――――

と気配を感じて後ろを見ると、倒したゴキグモの腹から大量の小さなゴキグモがうじゃうじゃと湧き出している。

って、小蜘蛛が出てくるのかよっ！

俺は剣で小蜘蛛を蹴散らすがきりがない。

「メイドさんっ！　ちょっと手を貸してくれっ！」

「お断りします。」

「なんでだよっ！」

「あなたの不祥事なのですから、あなたが最後まで責任を取りなさい。」

くそっ、事実だから言い返せない。

「ですがこのままでは先に進めないのも事実です。早くしないと私のお宝というロマンがどことも知れぬ雑魚に穢されかねません。」

本当にお宝があると信じちゃってるよメイドさん・・・・・・

「では、さっさと片づけましょう。」

メイドさんが動き出した。

まさにその時だった。

「誰か俺様を呼んだかぁっ！」

洞窟内に男の声が響き渡った。

「とおっ！」

影がジャンプをして俺の前に着地した。

「闇あるところに光はある。悪あるところに正義はある・・・・・・」

男はゆっくりと立ち上がる。

いや、背格好からして男と言うより少年というべきか。

「助けのところに英雄はあるっ！　正義の戦士ジャスティス・ガイっ！　只今参上っ！！」

ビシッと決めポーズ？　を決めて少年はいまだに湧き続けている小蜘蛛共を指差した。

きっと特撮とかだったら後ろで爆発でも起きるんだろうな～。

「邪悪な魔物めっ、観念しろっ！　この俺様が来たからにはもうお前たちの好きにはさせないぞっ！」

メイドさんが小蜘蛛と俺たちの周りに何かの液体をまいている。

いつの間にかアイリスは先へ続く道からこちらの様子をうかがっていた。

この臭いは・・・・・・やばいっ！

「いくぞっ！　魔物どもっ！」

俺は慌てて走り抜けた。

「さようなら。」

メイドさんはまいていた液体にたいまつの火を点けた。

火は瞬く間に燃え広がり先ほどまで俺がいた場所を含めて激しく燃え始めた。

広い空間が紅蓮に包まれる。

「ノオオオオォォォォォッッッッ！！！！！」

洞窟内に先ほど以上の悲鳴が響き渡った。

「では行きましょう。」

大量の敵を殲滅するためには手段を選ばない。

怖いっ！

今のメイドさんはお宝のためなら何でもするだろう。

俺とアイリスは改めてメイドさんに戦慄を覚えながら先に進んだ。

「はっ、ここはどこだっ！」

黒焦げの少年が起き上った。

火はすでに鎮火している。

ゴキグモの死体は完全に灰となっていた。

「思い出したっ！　俺様はここで魔物に襲われているか弱い女性三名を助けたんだったっ！」

少年は周囲を見渡す。

「むっ、あの三人がいない・・・・・。これはきっとここに住まう魔物が俺様の存在を恐れ人質にするために連れ去ったのかっ！！」

少年は拳を握りしめた。

「許せんっ！　早く行って助けてやらねばっ！　待ってろよ俺様のファンたちっ！！」

少年は洞窟の奥へと走り出した。

第十話　誰にでも、意外な一面はあるもんだ！（後書き）

今回はここまでです。
新キャラ登場です、レギュラーにするかどうかは、決めかねていますが。
次回では、彼がなぜ生きているのかを、説明する予定です。

第十一話　馬鹿の相手は、ろくなことが無い！（前書き）

洞窟探検その二です。
新キャラは、テンションの高い馬鹿です。

第十一話　馬鹿の相手は、ろくなことが無い！

「なあメイドさん。気になることがあったんだが。」

「なんでしょうか。」

「さっき火を思いっきり燃やしていたが、密閉された洞窟内でそんなことやって大丈夫なのか？」

「密閉されていたなら危険な行為ですね。」

「どういう意味だ。」

「気づきませんか？」

言われて俺は感覚を研ぎ澄ませてみる。

これは・・・・・・・・・

「空気の流れか・・・・・・・・？」

「はい、この洞窟には空気の通り道があります。」

「俺がさっき地図を見た限りでは入口は一つだけのはずだったが・・・・」

「私も先ほどから幾度となく地図を確認しておりますが、入口は一つだけで隠し通路などもないはずです。」

となると残された可能性は――――――――――

「地図が偽物か、あるいは洞窟内に変化が起こったか・・・・」

「前者はありえません。」

「何故そう言い切れるんだ？」

俺は前者が大本命だと思っているのに。

「メイドさんの勘です。」

そーですか・・・・・・・

俺は先ほどから無言で歩いているアイリスに声をかけることにした。

「アイリスはどう思う。」

「はいっ！？　あっ、ええっと、甘い物は好きですよっ！」

「誰がいつ好物のことを聞いたっ！」

「ひゃいっ！？　じゃっ、じゃあ、最近妻に頭の上がらない国王陛下が自分の鼻くそを妻の飲んでいるお茶に入れたことがばれて全裸で国中を追い回されたことですかっ！」

なにその情報っ！？　獣人の国って大丈夫なのかっ！？

「落ちついてくださいアイリス様。」

「はっ、はいっ！」

すー、はー、すー、はー。

「すみません、お待たせしましたっ！」

「別に構わんが・・・・・・・、何をそんなに錯乱していたんだ？」

「あう・・・・・。すみません、実は私さっきのグロゴールがとても苦手なんです。」

グロゴール？　ああっゴキグモのことか、そういう名前だったのか。

「無理もありません。グロゴールはその見た目や性質から男女問わず多くの人たちから嫌われていますから。」

まあ名前の通り見た目はグロかったし、斬ったら小蜘蛛が出てきたし嫌われても仕方ないだろうな。

「そうなんです・・・・・。でもっ、仁さんが倒してくれたおかげで安心して先に進めますっ！」

「まっ、喜んでくれて何よりだ。」

「よりによって真っ二つになんてするから子供がうじゃうじゃ湧きましたけどね・・・・」

そこっ、余計なこと言わないっ！

「そういえばメイドさん。あの人燃やしちゃって大丈夫なんですか。

」

アイリスが不安げに尋ねてきた。

そういやなにか変な生物がいたな。

「大丈夫でしょう。」

「根拠は？」

「馬鹿は死ななきゃ治りませんから。」

冷ややかに告げるメイドさん。

「私のロマンを求める冒険の旅の邪魔をするものは死ねばいいんです。」

理由になって無い。っていうか殺すこと前提かよ。

「冗談はさておき。」

絶っ対本気だった。

「会ったことのない仁殿はともかく、獣人であるアイリス様が気づかないとは思いませんでした。」

どういうことだ？

アイリス、首をかしげている。

「彼は恐らく竜人です。」

メイドさんはあっさりと言った。

竜人。

人の姿と竜の姿の両方を持ち、自身の意志で自由にどちらの姿にもなれる。

高い身体能力と硬い皮膚、そして並外れた回復能力を持つ。

「でっ、さっきの馬鹿がその竜人だからってなんだってんだ?」

「簡単にいえば、あの程度の炎で死ぬはずがないということです。」

いやそれだけだと訳わからんし。

「仁さん。竜人には高い回復能力があるってさっき説明しましたよね。」

アイリスが説明を始めた。

あっメイドさんがちょっとむくれている。

「竜人は皮膚が硬い上に火にも強い体質なんです。仮に黒焦げになったとしてもそれは表面だけで、少ししたら黒焦げになった皮膚は体からはがれて新しい皮膚が姿を現すそうです。」

脱皮かよ。

でも待てよ・・・・・それだと・・・・

「服はどうなるんだ？　皮膚が脱ぐたびに服が無くなったら、風紀的に冗談じゃ済まなくなるぞ。」

「それは――――――――――――――――」

「竜人たちの服は竜人の国で作られた特別性の物だそうで、何かの魔法で皮膚を脱いでも服は着たままの状態になっているらしいですよ。」

「・・・・・・・・その通りでございます。」

メイドさん、説明役を取られたからってそんなにすねなくても・・・・・

「先を急ぎますよ、ぐずぐずしている暇はありませんっ！」

メイドさんが歩く速度を上げた。

「あっ、待ってくださいっ！」

アイリスは小走りで追いかける。

俺も二人のあとに続いた。

「はーっ、はっはっはっはっはぁっ！　君たち、大丈夫だったかいっ！」

突然、後ろから声が響いてきた。

うんざりしながら振り向くと、案の定先ほど見かけた少年の姿があった

「とうっ！」

馬鹿はジャンプして天井に頭をぶつけて落ちた。

ゴロゴロと転がっていたが、急に立ち上がりポーズを決めた。

「おいおい君たちぃ、さっき俺様の華麗な活躍で助かったというのにお礼や花束やキスはないのかい？」

「走りますよ。」

メイドさんが殺意を馬鹿に向けたまま言った。

「わっ、わかりましたっ！」

「了解。」

今のメイドさんに逆らったらマジで刺されるかもしれない。

それに俺も馬鹿の相手をするつもりはない。

俺たちは馬鹿に背を向けて走り出した。

「ややっ！　さては照れているんだなぁ、まったく人気者は辛いぜぇ。サインは一人三枚までだぞ。」

寝言は死んで言え。

と言いたいところだが、相手にしたら面倒くさいことになるだけだろう。

ここは無視して一気に先に進むのが吉。

「おいおい待ちたまえ。この洞窟は危険だから俺様がエスコートしてやろうと言っているんだ。」

無視だ無視。

「俺様と一緒に冒険ができるなんて君たちはなんて幸運なんだろうかっ！　ああっファンたちに対する俺様の溢れんばかりのサービス精神っ！　これでは更にファンが増えてどこの国に行ってもファンたちが俺様を追いかけてきてしまうぜっ！」

さっきよりも広い空間に出たな。それにあちこちに穴が開いてやがる。

「ああっ、俺様はなぜこんなにも人気があるんだろうかっ！　神はなぜ俺様に肉体を一つしかお与えにならなかったのだろうかっ！　このままではいくら俺様でも全てのファンに応えることができないっ！」

っ！？　この気配は・・・・・！

俺は立ち止まって後ろの馬鹿を殴り倒した。

そのまま再び走り出そうとしたが、もう遅かったようだ。

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

アイリスが声にならない悲鳴をあげて固まっている。

メイドさんも忌々しげにそいつらを睨みつけていた。

がさがさがさ。

馬鹿を生け贄にしてなんとか突っ切ろうとしたが、やはり駄目だったか。

広い空間内を埋めつくさんとばかりに穴の中から出てきた大量のグロゴール。

その数は軽く千を越えている。

周りを完全に囲まれた俺たち。

アイリスは完全に固まっている。馬鹿は今さっき俺が殴り飛ばして意識を失っている。

戦えるのは俺とメイドさんのみ。

・・・・・・・・これって結構、ピンチだよな。

「あっ私は戦いませんから。よろしくお願いしますね。」

「この数を俺一人で片づけろとっ！？」

前言撤回。

大ピンチだ。

第十一話　馬鹿の相手は、ろくなことが無い！（後書き）

以上、洞窟探検編、その二でした。
ちなみに、グロゴールは体長二メートルほどあります。
想像してみてください。
自分の視界、三百六十度、全てを、巨大なゴッキーに囲まれている状況を。
作者は、書いている最中に、想像して気持ち悪くなりました。
洞窟探検編は、もう少し続きます。
楽しんでいただければ、幸いです。

第十二話　これは、ヤンデレじゃねえからな！（前書き）

洞窟探検その三です。
戦闘演出は、やっぱり下手くそです。

第十二話　これは、ヤンデレじゃねえからな！

俺は鞘を腰から外した。

そのまま剣を引き抜く。

斬撃では中から小蜘蛛が沸いてくる。

なら斬撃以外でやるしかないっ！

木彫りの熊はこの数が相手では意味が無いし、なによりこんなのにぶつけて汚したくない。

「頑張ってください、応援しています。」

メイドさんは本当に戦う気が無い様だ。

というよりもアイリスをかばうために戦闘ができない、と言った方が正しいか。

だったら最初からそう言えっての。

「さて、この数相手にどこまでできるか・・・・・・」

とりあえず逃げ道を確保する方が賢明だろう。

「さっさと片づけて先に進みますよ。時間は待ってはくれないのですから！」

ＯＫ、わかってたさくそっ。

逃げるという選択肢がない以上こいつらを殲滅するしかない。

だが良く見ると壁や天井にも、びっちりとグロゴールが張り付いている。

流石に気持ち悪いな・・・・・・・

「みぎゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・」

後から断末魔の叫びの様なものが聞こえてきた様な気がした。

と、しびれを切らしたらしいグロゴール共が一斉に襲いかかってきた。

がさがさがさがさっ！

足は八本のくせに動き方はまさにゴッキー。

「はあ！」

剣を地面に高速で走らせ、生じた風圧で衝撃波を生みグロゴール共を吹き飛ばす。

だが所詮は氷山の一角。

すぐに次の集団が襲いかかってくる。

「くそっ！」

俺は後ろで気絶している馬鹿に手を伸ばそうとしてやめた。

全方向囲まれているはずなのに、後方や左右の奴らが襲ってこないからおかしいとは思っていたが。

「意外と役に立ったな。」

馬鹿の腕がグロゴールの群れの隙間から少しだけ見えた。

安らかに眠れ。お前のことはこいつらを倒すまでは忘れない。

さて馬鹿への祈りは済んだが、実際どうしたもんか・・・・・・

ぐずぐずしていれば、馬鹿を食い終わったグロゴール共がこちらに襲いかかってくる。

俺は正面と横から襲ってくるグロゴール共をかわしながら解決策を考えた。

一、逃げる。

メイドさんが許してくれない。

二、全力でつぶす。

面倒くさい。

三、どうしようもない。

まいったな・・・・・・・・

メイドさんも悪戦苦闘している。

アイリスを抱えながらでは上手く動けないだろうし、たぶん触りたくないんだろうな。

俺は四方から攻めてきたグロゴールを跳躍して回避する。

ふと、視界内に石に躓き体勢を崩したメイドさんが映った。

その隙に襲いかかる一匹のグロゴール。

ちぃっ！　させるかっ！

俺は咄嗟に剣を投げつける。

剣は襲いかかろうとしていたグロゴールを貫いた。

だが――――――――――――――――

「くそっ！」

グロゴールは一匹だけではない。

メイドさんが体勢を立て直した瞬間に二体のグロゴールが襲いかかっていた。

俺は着地して駆け出す。

駄目だっ！　間に合わないっ！

そう思った瞬間だった。

すさまじい突風が吹き荒れグロゴール共が吹き飛んだ。

俺は鞘を地面に突き立てどうにか突風に耐える。

グロゴール共は壁に張り付いていたグロゴール共とぶつかり潰れた。

壁には黄色の体液がベッタリと付着している。

メイドさんたちを見やると、メイドさんはすさまじく不機嫌な顔をしていた。

どうやら先ほど剣が突き刺さったグロゴールの体液をまともに浴びてしまったようだ。

だがそんなことよりも――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・アイリス、どうした？」

アイリスは答えない。

いつの間にかメイドさんから離れて突っ立ってる。

そして虚ろな目でグロゴールの体液を浴びた自分の体を見ている。

「・・・・・・・・・・・・・にゃは。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？

なんだ、いまの？

アイリスは何を言ったんだ。

「にゃはははははは派葉歯刃ハ波覇羽端爬波頬――――――――――――。」

虚ろな目のまま狂ったように笑いだす。

怖い。

とてつもなく怖い。

下手をするとメイドさんよりも怖い。

少なくともホラー映画に出てきたら絶叫する。

アイリスはユラリと体勢を低くした。

これは・・・・・・・・・

風の流れが変わった？

「キシャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

アイリスが雄たけびと共にグロゴールへと突撃する。

グロゴール共はアイリスを危険な敵と認識したらしく、馬鹿に群が

っていた連中も含めて一斉にアイリスに襲いかかる。

しかし――――――――――――――――――

「忌社（キシャ）ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

アイリスに近づいたグロゴールは片端からぐしゃぐしゃに潰されていった。

うわぁ・・・・・、グロい。

「幼くてもブラウネオスの一員、と言ったところでしょうか。」

メイドさんが近寄ってきた。

あれっ？　いつの間に着替えたんだろう。

「詮索したら殺しますので。」

了解しました。

俺は改めてアイリスを見やった。

「奇射（キシャ）ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

狂戦士（バーサーカー）へと変貌したアイリスが暴れまくっている。

しかしアイリスは返り血を全く浴びていない。

「彼女は風魔法が使えるようですね。」

「風？　ああっ、だからさっき空気の流れが変わったのか。」

「気づいてましたか。恐らくアイリス様は空気の流れを操り自らに纏うことで、近づくもの全てを粉砕する圧縮された風の鎧を作りだしたのでしょう。」

なるほど。だから返り血も浴びないわけだ。

「・・・・・・詠唱無しでそれほどのことをやってのけるとは・・・・恐ろしい才能ですね。」

それってそんなにすごいことなのか？

「あっ、終わったようですよ。」

アイリスが敵意むき出しでこちらを睨んでいる。

「フーーーーーーーっ！！」

・・・・・・・・・猫だ。

周囲にはおびただしい量の黄色い体液がまき散らされている。

だがグロゴールそのものは粉々にされたものが多いらしく、死骸（しがい）はほとんど無かった。

「フシャーーーーーーーーーーーっ！！！」

襲いかかってきたアイリスに、俺は懐から木彫りの熊を投げつける。

「フギャッ！！！」

木彫りの熊はアイリスの顔に直撃しアイリスはそのまま気絶した。

「やれやれ・・・・・なんとかなったな・・・・・・」

俺は木彫りの熊を回収して懐にしまった。

「・・・・・はあ・・・・・相変わらず常識が一切通用しないのですね。」

メイドさんが呆れながら溜め息をついた。

訳が分からないが、とりあえずアイリスを回収しよう。

俺はアイリスを持ち上げた。

「今度は引きずらないのですか。」

「仲間を引きずりはしねえよ。」

「そうですか。でもその持ち方もどうかと思いますが・・・・・」

何を言ってるんだ？

「まあいいです。だいぶ時間を食ってしまいました。早く行きましょうっ！」

ｓｉｄｅ馬鹿

「はっ、ここはどこだっ！」

仁たちが去ってからしばらくした後。

取り残されていた俺様は目を覚ました。

「確か俺様の華麗な活躍で、醜悪な魔物どもを蹴散らしファンたちから黄色い声援を浴びていたところまでは覚えているんだが・・・・・」

俺様は周囲を見渡した。

黄色い体液といくつかのグロゴールの死体だけがあった。

「はっ！　そうかっ！　この洞窟の主が俺様の強さに恐れをなし、人質にするために連れ去ったのだなっ！　許せんっ！　この俺様が成敗してくれるっ！！」

俺様は憤り洞窟の奥へと走り出した。

第十二話　これは、ヤンデレじゃねえからな！（後書き）

洞窟探検編、その三、終了です。
とりあえず、洞窟探検は、次で終わる予定です。

第十三話　洞窟は、予想外の塊だ！（前書き）

洞窟探検その四です。
移動中に、メイドさんが、アイリスの体をきれいにしました。
仁は、その間、目隠ししていました。

第十三話　洞窟は、予想外の塊だ！

「う・・・・・・ん・・・・・・・」

もぞもぞと腕の中でアイリスが動き始めた。

おっ、ようやくお目覚めか。

「・・・・・・・・・仁・・・・・・さん・・・・・・・・？」

「起きたか。」

「・・・・・・・・あれっ？　私・・・・・・なんで・・・・・・・って、ええっ！？」

いきなり騒ぐな、うるさいぞ。

「どっ、どうして私、仁さんに抱っこされているんですかっ！？」

どうしてって。

気絶していたからに決まっているだろう。

「アイリス様はお姫様抱っこされていることに驚いているんですよ。」

そうなのか？

アイリスは顔を真っ赤にしながら口を金魚のようにパクパクさせて

いる。

あっこれって実際に見てみると結構面白いな。

「おっ、降ろしてくださいっ！」

「わかった。」

俺はアイリスを開放してやった。

「わきゃんっ！」

当然のごとく地面に落ちた。

「痛たた・・・・・」

「大丈夫か。」

「はい・・・・・・、って、どうしていきなり降ろすんですかっ！」

「降ろせって言われたからだが。」

なにが気に食わないんだ？

「全く学習していませんね・・・・・・」

メイドさんが半眼で俺を見ている。

アイリスは涙目で睨んでくる。

・・・・むう・・・・・・なにかまずい事でもしたか？

ふと、メイドさんが表情を変えた。

「んっ・・・・・・？」

何かいるな。

それもかなりのが。

「どうしまし・・・・・・・・この気配は・・・・・・」

アイリスも気づいたみたいだ。

「・・・・・・・・行きましょう。」

「ああ。」

俺は百八十度体を回転させ、そのまま歩きだ――――――――――――

――――

「どこへ行くつもりですか？」

首筋に音もなくナイフが突きつけられた。

「大きい方。」

「我慢しなさい。」

「もう漏れる。」

「漏らしたら自分で体内に戻しなさい。」

・・・・・・・・逃走は無理か。

「だって強そうだし。」

「却下です。」

「俺じゃ勝てない。」

「囮くらいできるでしょう。」

いつにも増して手ごわい。

「面倒。」

「ここまできてですか。」

「大丈夫ですよ仁さんっ！　あのグロゴールの集団だって仁さんが倒したんですよっ！」

いやそれやったの君だから。

「覚えていないようですね・・・・・・・」

「だな。伝えた方がいいか？」

「・・・・・・・・やめておきましょう。自覚が無いのなら混乱

させてしまうだけです。」

「そうだな。」

いずれわかることだろうし。

「さて、では行きましょうか。」

「嫌です。」

俺はその場に寝転がった。

「仁さん・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・憐みの視線には慣れたが、子供にそういう目で見られる日が来るとは思ってなかった・・・・

「アイリス様、足を掴んで持ち上げてください。仁殿を運びます。」

「はいっ、わかりましたっ！」

そこは拒否しようよ。元気良く返事するなよ。

しかも俺物扱いされてるよ。

っていうかメイドさんと子供に運ばれてるよ。

なんとも言えない気分になっている俺をメイドさんたちが運んでいく。

少し進むと、恐らく洞窟の最深部であろう洞窟内で最も広い空間に出た。

「・・・・・・・・・なるほど、気配の正体はあれでしたか。」

メイドさんが俺から手を離した

だがアイリスが俺を離さなかったため俺は頭を地面にぶつけた。

地味に痛い。

「ごっ、ごめんなさいっ！　大丈夫ですかっ！」

心配そうに俺の足から手を離すアイリス。

うんうん、いい子だ。

俺は頭から血を流しながら立ちあがった。

「い、いま拭くものを出しますっ！」

アイリスは自分の鞄を漁りだした。

「いや、別にいい。どうせすぐ止まるし。」

「そうですよ、アイリス様が責任を感じる必要はありません。自業自得です。」

いやっ半分くらいあんたの責任でしょう。

「自業自得、ですよね。」

「その通りです。」

・・・・・・・俺って立場弱いなぁ～

「でっ、でも・・・・・・・・」

「いやほんとに大丈夫だから。それにそんなことをやっている暇はなさそうだ。」

ゆったりとそれが近寄ってくる。

全長五メートルと言ったところか。

三つの頭に銀色の体毛それに蛇の尾。

これだけならただの地獄(ケルベロス)の番犬で済む。

だがそれには翼があった。

体毛と同じ銀色の羽毛。

さらに後ろ脚は犬のそれだが、前足は鳥、それも鷹に近い物だ。

「驚きました・・・・・・・・。まさかこのようなところで天空(ケルヴ)の番犬(エルグ)に遭遇するとは・・・・・・・・。」

「強いのか？」

「・・・・よく知りませんが、魔獣の中でもかなり高位の位置にいるらしいです。」

魔獣って言うと確か――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・逃げましょう。」

アイリスが震えている。

この子は魔獣と戦い瀕死になったんだっけ。

そりゃ怖いよな。

「その選択肢はありません。」

「勝てるわけがないですよっ！！」

アイリス、メイドさんに食ってかかるとは珍しく動揺してるな。

「誤解しないでください。流石に私も魔獣とまともに戦いたいだなんて思っていません。」

戦うのはきっと俺なんだろうな～。

いつもの如く。

「じゃあどうして――――――――――――――――――」

「簡単な話です。」

メイドさんがケルヴェルグを見る。

三つ首はよだれを垂らしながら、ジリジリと距離を縮めてくる。

良く見ると足元には巨大なミミズのような死体があった。

「ダンジョンスネークです。恐らくあれが本来のここの主だったのでしょう。」

なるほど、どうやら食事中にお邪魔してしまったようだ。

「逃げたらガブリッ、だな。」

まあそんなことだろうとは思っていたさ。

「あ・・・・・・・うぅ・・・・・・・・」

アイリスはさっきとは違った種類の恐怖で固まってしまった。

「お任せしました。」

メイドさんがアイリスをかばうように後ろに下がる。

「・・・・・・・・・・・気をつけて、ください。」

おおっ！　これは珍しいっ！

「心配してくれるなんて、明日は槍でも降るのか。」

「っ～～～！　死になさいっ！」

頬を若干赤く染めて、メイドさんがアイリスと共に大きく下がった。

はいはい。今回は少し気合を入れるか。

俺は剣を右手に持ち、木彫りの熊を上に放り投げてから鞘を左手に持った。

「「「グルォォォアアアアアアッ！！！」」」

三つ首が咆哮と共に突進してきた。

いいだろう。犬っころ。

割と本気で遊んでやるよ。

ｓｉｄｅ馬鹿

「ええいっ！！　ここはどこだっ！！」

俺様は何故か洞窟の入口にいた。

「さてはここの主が俺様と直接戦うのを恐れ、幻覚系の魔法で俺様を惑わせたんだなっ！」

俺様は華麗なる推理にこの洞窟の主は恐れおののいただろう。

まさか奥へ行く道と入口への道を間違えたとは夢にも思っていない。

「おのれぇっ！！　許さんぞっ！！　俺様のファンを誘拐しただけで無くこのような小汚い真似をするとはっ！！！」

俺様は再び洞窟の中へと入っていく。

「今行くぞっ！！　待っていろよっ！！　俺様のファンたちっ！！」

俺様は助けを待っているだろうファンたちの為に走り出した。

第十三話　洞窟は、予想外の塊だ！（後書き）

洞窟探検編、その四終了しました。
まだ終わりませんでした。ごめんなさい。
次で、ラストになると思います。
たぶん、レギュラーが増えます。

第十四話　ひさしぶりに、あれをやるか！（前書き）

洞窟探検その五です。
木彫りの熊は、扱いが難しいです。

第十四話　ひさしぶりに、あれをやるか！

落ちてきた木彫りの熊を左手の鞘で野球のように打った。

「「「ガルゥアッ！？！？！？」」」

自身に向かってくる飛来物にケルヴェルグが動揺している。

どうやらそれなりの知能は持っているみたいだ。

「「「ガルルルルルルルッ！！！」」」

中央の頭の口の中に炎が見える。

俺は瞬時にケルヴェルグの横に回り込んだ。

右の首が俺を視界に収める。

だが遅いっ！！

俺は左手の鞘を一閃させた。

「「「グルゥオアッ！！！」」」

右手のかぎ爪に受け止められる。

計算通りだ。

どうやら自分が受け止めたのは剣では無いことに気付いたようだ。

そのまま右手の剣を一閃させる。

左手でその一撃を受け止めようとするも。

「「「グギャッ！？！？！？」」」

接近する木彫りの熊を咄嗟にはじくのに使ってしまった。

「「「ギャオワァッ！！！」」」

ケルヴェルグの右手から血が噴き出る。

ちっ、浅いか・・・・・

咄嗟に腕を引き腕が切り落とされるのを防いだか・・・・

「「「グルゥウォオォアアァァッ！！！」」」

怒りで赤い瞳を充血させ真っ赤になった六つの目で俺を睨みつける。

頭に血が上ったんならやりやすくなったな。

「「「グルアアァァッ！！！」」」

真ん中の頭が口から炎を、右の頭が口から竜巻を出した。

おいおいっマジかよっ！

炎を纏った竜巻は真っ直ぐ俺に向かってくる。

速いっ！　が避けられないほどではないっ！

だが炎の竜巻は俺に届く前に上へ向かい天井へとぶつかった。

炎の竜巻は天井を貫通し、洞窟の外へと飛んで行った。

空いた穴から光が差し込む。

「そういうことか・・・・・」

最初に入ってきたとき、この空間が妙に明るかったのはこいつが穴を空けたからか。

天井には結構大きい穴もあった。

たぶんこいつがここに入るときに空けたものだろう。

だがこんなことに何の意味が・・・・・？

そんなことを考えてしまった俺は、奴の攻撃に反応するのに一瞬遅れてしまった。

左の口から何かが出てきた。

「しまったっ！」

俺はまともにそれを浴びる。

これは・・・・・泥かっ！

しかもただの泥では無い。

非常に粘着性が強い上にすぐに固まってしまった。

真ん中と右の口が開く。

まずいっ！

荒れ狂う炎の竜巻が俺を飲み込んだ――――――――――――――――

ｓｉｄｅアイリス

私は呆然としていた。

いつもはヘタレでいい加減な人だけどそれなりに強い人。

私にとって仁さんはそういう人だ。

だけど仁さんは、魔獣相手にたった一人で挑んでいる。

なぜ？　どうして？

勝てるはずが無いのに。

この人もこの人だ。

メイドさん。

本名は知らないけど、メイドさんなのに私たちのパーティーはこの人が実権を握っている。

厳しいけど優しい人。

だけど戦闘には参加しない人。

今回もただ見ているだけ。

本来、動けない私が言うべきことじゃないけど、三人で戦えば逃げる隙くらいは作れるかもしれないのに。

この人はただ見ているだけ。

どうしてただ見ているだけなの？

どうして助けてあげないの？

どうして――――――――――――――――――――

そんなに仁さんを信じることができるの？

「簡単ですよ、アイリス様。」

メイドさんが口を開いた。

穏やかな口調だった。

そのとき仁さんが炎に飲み込まれた。

私は震えた。

しかしメイドさんは表情を崩さず――――――――――――――――――

「メイドさんの勘です。」

そんなことを言った。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「「「グルオオアアァァァァッ！！！」」」

ケルヴェルグは勝利の雄たけびを上げた。

咆哮が洞窟全体を揺るがす。

「なにがそんなにうれしいんだ。」

「「「グルアァッ！？！？！？」」」

俺は服についた残り火を手で払った。

確かに強力な炎だった。

まともに食らったらその辺の戦士だったら灰になっているだろう。

だが俺にとってはこの程度の炎というレベル。

こんなもんより強力な炎を子供（ガキ）の頃から受けている。

だがそれは単に耐えられると言うだけの話。

熱いことには変わりない。

「犬っころ、覚悟はいいな？」

殺す。

ケルヴェルグは左の口から泥を吐きだした。

それはもう見切ったっ！

俺は泥をかわしながら一気に距離を詰める。

ケルヴェルグの右手が上がった。

じゃあな。

「「「「――――――

まさかいまのに耐えるとはな。

魔獣という名は伊達じゃないってことか。

「「「グ、グルルルゥゥゥ・・・・・・・・」」」

苦しそうにうめき声を上げる。

回復されても厄介だし止めを刺すか。

剣を振り上げる。

「「「マタレヨッ！！！」」」

・・・・・・・・？

メイドさんたちを見る。

二人とも首を横に振った。

「「「キサマホントウニ、ニンゲンナノカ？？？」」」

あっ、こいつがしゃべってたのか。

って、しゃべれるなら最初からしゃべれよ・・・・

「「「マア、ソレハセンナキコト。ワレヲウチタオシタキョウシャヨ、ワガサイゴノネガイヲキイテハクレマイカ？？？」」」

「言ってみろ。」

「「「ワレヲ、ウチタオシタキサマニ、ワガチカラヲアタエタイ。ワレトケイヤクシテクレマイカ。」」」

なんだそんなことか。

「断る。」

「「「・・・・・・・・・ハッ？？？」」」

俺は再び剣を振り上げた。

「「「マテマテマテ、ココハスナオニ、ケイヤクスルトコロダロウッ！！！　ワガチカラガホシクナイノカッ！！！」」」

「いらん。」

「「「ヨク、カンガエテミルノダッ！！！　ワガチカラヲエレバ、コレカラサキイロイロナトコロデヤクニタツゾッ！！！」」」

「興味無い。」

「「「ワレハ、ホコリタカキマジュウノナカデモ、コウイノソンザイナノダゾッ！！！　ワレトケイヤクスルコトガ、ドレダケメイヨナコトカ、リカイシテイルノカッ！？！？！？」」」

「遺言はそれでいいな。」

さっさとヤルか。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ダ・・・・・」」」

「なんだまだ言いたいことがあるのか。」

「「「イヤダッ!!!　シニタクナイヨォォォォーーーーーーーーッ!!!」」」

突然、六つの目から大量の涙が流れ始めた。

「「「イヤダ、イヤダ、イヤダッ!!!　ボクハマダ、ジュウネンシカイキテナイノニ、コンナトコロデシニタクナイヨォォォォーーーーッ!!!　オネガイシマス、ケイヤクシテクダサイヨォォォォーーーーーーーーッ!!!」」」

・・・・・・・・・・・・う〜ん・・・・・・・・・・・・・・・

「「「ケイヤクシテクレルナラ、フクジュウノアカシトシテ、アオムケニナッテハラヲダシテモイイデスカラッ!!!　クツヲキレイニナメマスカラッ!!!」」」

一気に殺し辛くなったな。

「一つ聞いてよろしいでしょうか。」

メイドさんがケルヴェルグに話しかけた。

「「「ナニッ!!!　ナンデモコタエルカラ、ダカラオネガイッ!!!　ケイヤクシテッ!!!」」」

こいつ、なんでここまで契約にこだわるんだ？

「最初に見たときから気になっていたのですが、あなたの首にあるそれ、もしかして首輪ですか？」

首輪？

そういや赤い首輪が三つ、それぞれの首についているな。

誇り高きとか言ってたくせに飼い犬だったのか？

「シツレイナッ！！！　カイイヌナンカジャナイヨッ！！！　デモ、アノオンナノトコロニモドルノハシヌヨリモイヤダッ！！！」」」

ケルヴェルグが必死に訴えかけてきた。

「「「ボクヲタオシタキョウシャデアル、アナタトケイヤクスレバ、アノオンナガボクノトコロニキテモ、ナントカデキルカモシレナイッ！！！」」」

なるほど、それでさっきから必死に契約しようとしてたわけか。

「じゃあ殺すか。」

面倒事に俺を巻き込むな。

三度（みたび）剣を振り上げる。

「「「オネガイマッテッ！！！　ボクノハナシヲキイテッ！！！アノオンナガ、ボクニシテキタシウチノカズカズヲッ！！！　」」」

先ほど以上に必死になるケルヴェルグ。

流石に憐れになってきたので話を聞いてやることにした。

「「アリガトウ、アリガトウ、アリガトウ・・・・・・ッ！！！」」

感激の涙を見せるケルヴェルグ。

「「「ソウ・・・・アレハニカゲツマエ、クライノコトデシタ・・・・」」」

ケルヴェルグは自分の過去を語り始めた――――――――――――

ｓｉｄｅ馬鹿

「ぬおおおおぉぉぉぉぉっ！！！」

洞窟内を走っていた俺様はグロゴールの巣にまで戻ってきた。

そう、巣は戻っていた。

正確には新たな大量のグロゴールがいた。

「このぉぉぉぉぉっ！　虫風情がぁぁぁっ！！」

グロゴールは繁殖力と成長力がとてつもなく高い。

一匹のグロゴールの体内には数百のグロゴールの卵がある。

そして生まれたグロゴールの小蜘蛛は、二十分で成長が終わる。

成長が終わったグロゴールはすでに体の中に卵が存在する。

一匹でも逃がせば、あっという間に増える。

ただグロゴールは、太陽の光に極端に弱く浴びただけで燃え尽きてしまう。

それにグロゴールの卵が孵化するのは親の体が裂けたとき。

そして極端に個体の数が減り絶滅の危機にひんしたとき、防衛本能かなにかで親を食い破って出てくる。

そんなことを後で誰かに聞いた様な気がする俺様。

「ぬうぉぉぉぉっ!!!!　必っ殺っ!!!　俺様熱血っ!　炎のパンチっ!!!!」

俺様は一人で大量のグロゴールの相手をしていた。

第十四話　ひさしぶりに、あれをやるか！（後書き）

洞窟探検その五、終了です。
本当にすみません。まだ終わりませんでした。
次こそは、終わります。

第十五話　ロマンは、金にならねえよ！（前書き）

洞窟探検その六です。
やっと、洞窟から抜けます。

第十五話　ロマンは、金にならねえよ！

「「「アレハ、ボクガイツモノヨウニ、サンポヲシテイルトキデシタ・・・・・」」」

ケルヴェルグが戻れない過去を懐かしむように言った。

「「「トツゼン、ソラカラヒリュウニノッタ、ヒトリノマゾクノオンナガ、ボクノマエニオリタッタノデス。」」」

ふむ。

「「「オンナハイイマシタ。オマエガ、マジュウケルヴェルグカ、ト。」」」

一般的な出会いだな。

「「「オンナハボクトタタカイ、ボクハマケテシマイマシタ。」」」

こいつに勝ったってことは、相当強いな。

「「「ボクハ、オンナトケイヤクヲ、ムスボウトシマシタ。シカシ、オンナハソレヲキョヒシマシタ。」」」

こいつ実は人気ないんじゃねーか？

「「「オンナハ、イイマシタ。オマエトタタカッタノハ、オマエヲトラエテ、ヒメサマヘノオミヤゲニスルノダト。」」」

お土産って。

「「「ボクハ、マゾクノヒメノペットニサセラレマシタ。マジュウトシテノホコリヲ、アレホドケガサレタノハ、ハジメテデシタ。」」」

さっきの命乞いの方が見苦しかった気もするが。

「「「ソシテソノヒカラ、ボクノジゴクノヒビガハジマリマシタ・・・」」」

ケルヴェルグが震えている。

どうやら昔の恐怖を思い出しているようだ。

「「「ヒメハ、トキドキボクノモトニキテハ、ボクヲペットトシテアツカイ、オテヤオカワリヲハジメ、サマザマナキョクゲイヲ、シコミマシタ。」」」

犬だな。

「「「ソレハマダタエラレマシタ。デモ、モウカタホウノ、ボクヲトラエタオンナハサイアクデシタ。」」」

なにをされたんだ、こいつ。

「「「アノオンナハ、テハジメニ、ボクニドクドクシイ、ワケノワカラナイブッシツヲタベサセマシタ。ボクガヒッシニ、タベタクナイトウッタエテイルノニ、アノオンナハキキトシテ、ボクノクチニブッタイヲ、ムリヤリイレテキマシタ。」」」

気の毒に・・・・・・

似たような経験のある俺は心底同情した。

「「「シカモ、イチニチデハナク、マイニチ、アノオンナニナゾノブッタイヲタベサセラレツヅケマシタ。マイニチノヨウニゲリヲオコシ、カラダハヒメイヲアゲテイマシタ。」」」

ケルヴェルグは三つ口から盛大に息を吐いた。

・・・・・・・・・生臭い。

「「「サラニアノオンナハ、ヤリヲモッテ、ボクヲ、コウゲキシテキマシタ。マイニチゲリヲオコシテイル、ボクハヒッシニボウギョシツヅケルダケデシタ。」」」

虐待か。

「「「モウ、コンナセイカツニタエラレナクナッタボクハ、サンポニジョウジテニゲダスコトニセイコウシマシタ。フシギナコトニ、アノオンナハ、スグニハオイカケテキマセンデシタガ、カゼノウワサデハ、ボクノコトヲサガシマワッテイルトカ。」」」

風の噂って魔獣にも届くのか。

「「「ミツカッタラ、コンドハナニヲサレルカワカリマセン。オネガイシマス、ドウカボクトケイヤクシテクダサイッ！！！」」」

さて、どうするかな。

「決めるなら、早く決めてください。」

メイドさんが急かしてくる。

「お宝はもう目の前なのです。こんなところで時間を食うわけには参りません。」

そういえば俺たちってもともと宝探しに来てたんだっけ。

「「「オタカラノバショナラ、ボクガシッテルヨ。ボクトケイヤクシテクレタラ、アンナイシテアゲル。」」」

「仁殿、さっさと契約してください。先ほどの話を聞いてこの魔獣の悲しみを感じなかったのですかっ！」

メイドさんそんなにお宝が欲しいんですか・・・・・・

「あの・・・・・私も契約してあげたらいいと思います。」

アイリスは憐みの視線をケルヴェルグに向けた。

「虐げられる獣を放ってはおけないんです。」

・・・・・・・・はあ。

仕方ないか。

「いいだろう契約してやる。どうすればいい。」

「「「ッ！！！　アリガトウッ！！！　デハ、チヲイッテキシタノウエニタラシテクダサイッ！！！」」」

俺は親指を噛んで血を出す。

そのまま口を空けたケルヴェルグの舌の上に血を垂らした。

「「「ワレハ、コノモノヲアルジトミトメ、チノケイヤクヲカワサン。」」」

ケルヴェルグの体が強く発光した。

光が消えるとケルヴェルグの姿も消えていた。

否、正確にはそこに子供がいた。

銀髪に銀の服、赤い目と発達した犬歯犬耳赤い首輪。

まさかこいつは――――――――――

「これからよろしくお願いします。マスター。」

ぺこりっと頭を下げる少年。

・・・・・・そういうことか。

でも擬人化は無いだろう・・・・・

「それでお宝はどこです？」

マイペースだなメイドさん。

アイリスなんて洞窟に入ってから何度目の硬直かわからないってのに。

「あっ、こちらです。ついてきてください。」

少年――――――――――――――――ケルヴェルグが歩きだす。

メイドさんは固まっているアイリスを持って歩き出す。

俺は木彫りの熊を回収してからついていく。

最深部の奥に小さな穴があった。

「ここをこうすれば・・・・っと。」

穴に手を突っ込んで何かをしたケルヴェルグ。

と、洞窟全体が揺れ始めた。

そして岩壁だと思っていた一部が横にスライドしていく。

なるほど、仕掛け扉か。

「にしてもお前、良くこんな道知っていたな。ここに住んでいたわけじゃないんだろう?」

「さっきここの主を殺す前に念のため聞いといたんですよ。」

そっか。

「ちなみにあそこは出口です。お宝は――――――――――――」

また小さな穴に手を入れてなにやら操作すると、目の前の岩壁が崩れ中に宝箱があった。

「では頂くとしましょう。」

早っ！

いつの間に移動したんだ？

「これは・・・・・・・・・」

俺たちはメイドさんが持っているお宝をのぞき見た。

「・・・・・・・・・うわぁ～。」

「・・・・・・・・・えー、っと・・・・」

「なにこれ・・・・・・・・」

三者三様の反応だったが、共通して言えるのはろくでもない物だと思ったところだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・素敵。」

はっ？

今この人なんて言った?

「これぞまさにお宝と呼べる品物・・・・・・・・・。これほどの珍品はそう滅多に見られないでしょう・・・・・・・・」

メイドさん、そんな不気味なものに頬染めないでください。

確かに珍品には違いないが。

一言でいえば埴輪(はにわ)だ。土でできた見事な造形と言えなくもない代物だが。

顔がでかい。

ひたすらでかい。

顔だけで全体の八割はある。

顔に手足が付いている。

モアイ像を手の平サイズにして、両手足を付けたらこうなるんじゃないだろうか。

「ま、まあ満足してくれたなら結構です。行きましょう、皆さん。」

ケルヴェルグが出口へと歩き出す。

俺たちは恍惚となっているメイドさんを引きずりながらついていった。

「こんなところに繋がっていたのか・・・・・・」

洞窟の外に出てみるとルサナンが見える。

「真っ直ぐ歩いていたつもりでも、結構道は曲がりくねっていたんだな。」

「暗い所の一本道ってそういうのわかりづらいですよね。」

「そうだな。」

アイリスの言葉に、同意する。

「しかし、こんなところに洞窟への最深部につながる場所があったなら誰かが気づいてもよさそうなものだが。」

「あっ、この出口しばらく時間がたつと勝手に閉じる仕掛けになっているんですよ。」

そうなのか？

「おまけにあの洞窟はグロゴールの巣でもありますから、冒険者もめったなことには近づかないんですよ。」

つまり最深部までたどり着いた奴はいなかったのか。

別にいいけど。

「話は変わりますけどマスター。名前を決めてください。」

「いきなりなんだ。」

「契約を交わした魔獣は契約者に名前をつけてもらわなければならないのです。」

「なんでもいいのか？」

「構いませんが変な名前を付けたら、今後その名前をきっちり叫ばないと反応しませんから。」

ちっ、流石は魔獣だな。先手を打たれた。

「なら、そうだな・・・・・。フレスっていうのはどうだ。」

「わかりました。これからは僕のことはフレスと呼んでください。」

気に入ったみたいだな。

さて・・・と。

「メイドさん。それはいったいいくらで売れるんだ？」

大した値打ちにはならないだろうが無いよりはマシだ。

「はっ？　何を言ってるんですか？　売りませんよ、売るわけないでしょう。」

ちょっと待て。

「俺たちは金を稼ぐためにお宝を取りに行ったんだよな？」

「無粋なことを・・・・・。お宝探しはロマンです。それを金に換えるなんて出来るはず無いでしょう。」

メイドさんは埴輪を天に掲げた。

「これは新しい私のコレクションに加えます。何人にもそれを邪魔することは許しません。」

・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・俺たちはいったい何のために・・・・・・・・・・」

「だ、駄目ですよっ！　仁さんっ！　そんなこと言っちゃあっ！」

「そうですよマスター。そういうセリフはもっと後になってから戦いの虚しさを語るときとかに使うものです。」

お前もう魔獣だったころの面影ないな。

メイドさんはいまだに恍惚としている。

俺は脱力しながらどうやって金を稼ごうか考えていた。

だから俺たちは気付かなかった。

俺たちを見ている奴がいることに。

「あらぁん。なかなか面白そうな子達ねぇ。」

ｓｉｄｅ馬鹿

「はあ、はあ、はあ、やっと着いたぜっ！！」

俺様はグロゴールの巣を華麗に突破し最深部まで到達した。

「さあ、かかってこいっ！　邪悪な魔物どもめこの俺様が成敗してくれるっ！！！」

俺様の美声が洞窟の奥に響き渡る。

「どうしたっ！！　かかってこないのかっ！！　ならば俺様のファンたちを返せぇっ！！　そして俺様の登場に感極まったファンたちは熱い抱擁とキスを俺様に迫り・・・・・」

ファンたちの熱い声援（幻聴）に俺様は思わず体をくねくねさせる。

「ああっ！！　駄目だよぉっ！！　俺様はみんなの物なんだからぁっ！！　あっ、そんなに激しくしないでぇっ！！」

延々と叫び続ける俺様を止める者はこの場にはいなかった。

第十五話　ロマンは、金にならねえよ！（後書き）

洞窟探検、やっと終わりました。
長かったです。
新たな仲間、擬人化魔獣が加わりました。
あと、仁がケルヴェルグを倒した技は、そのうち説明すると思います。

第十六話　契約って、理不尽だな！（前書き）

今回は短いし、ほとんど先に進みません。

第十六話　契約って、理不尽だな！

結局、俺たちはあの後森の中にいる魔物を狩りまくった。
魔物たちの皮などの素材を手に入れるためだ。
それを雑貨屋に売りつけた。
「そうだな、全部で銀貨三十枚といったところか。」
「ふざけないでください。」
といった感じでメイドさんが値上げ交渉した結果、最終的には金貨三十枚になった。
いったいどんな交渉をしたのだろうか・・・・・・
「お願いです、もう二度と来ないでくださいっ！」
涙を流しながら店主の娘に訴えかけられた。
ちなみに店主はメイドさんとの交渉が終わってすぐに寝込んでしまったそうだ。
俺にとってはどうでもいいことだが、アイリスは気に病んでいた。
「アイリス様、あまりお気になさらずに。双方納得しての結果なのですから。」

いや、絶対違うだろ。

「そうなんですか・・・・・・・・」

「そうです。」

「マスター、あの人結構外道ですね。」

「口に出すな、殺されるぞ。」

「あなたもですよ。」

しまった。やぶへびだったか。

「マスターは僕を守るっ！」

逆だろっ！

フレスは俺をメイドさんの盾にする。

「契約者は契約した魔獣を守る義務がありますっ！」

「それって逆なんじゃないか？」

「逆じゃありませんっ！　なんせ契約した魔獣は全ての力を失いますからっ！」

役に立たねえ。

「・・・・・・・・・存在価値ねえじゃねえか。」

「なるほど、お荷物を増やすのが契約の真髄でしたか。」

「・・・・・・・・・・・・そんな魔獣に手も足も出ず、あげくに気づかれもしなかった私っていったい・・・・・・・・」

アイリスが落ち込んだ。

「皆さん、非道いですっ！」

フレスが泣き出した。

「こんなところで泣きださないでください。」

メイドさんがなだめる？　が、さらに大きな声で鳴き続ける。

周りの人が何事かと立ち止まり始める。

・・・・・まずいな、目立つとろくなことが無い。

「フレス、静かにしろ。」

「はいっ！　マスターっ！」

元気に返事したよ。

しかも泣きやんでるし。

「嘘泣きですか。」

「失礼ですねっ！　僕たちは契約者に絶対服従なんですからっ！　マスターが泣きやめと言ったら泣きやまないといけないんですっ！」

「じゃあ俺が死ねっていったら自殺するのか。」

「はいっ！」

その辺に落ちていたとがった石を自分の首に突き付けるながら言った。

「ちょっと待てぃっ！　冗談だっ！」

「そうですよね。」

笑いながら石を捨てやがった。

こいつおちょくってやがる。

いつの間にか野次馬共はいなくなってるし。

「しかしその話が本当なら、なぜフレス様はあそこまで契約にこだわったのですか？」

「負けた魔獣は勝者と契約を交わすものだからです。」

「そういうものなんですか？」

「そういうものです。」

「そういうものなのよねぇ～。」

まあ、魔獣には魔獣なりのルールがあるんだろう。

「でもその理屈で言うと、あなたが嫌がっていた例の女とやらと契約を交わすことになってしまいますよ。」

「あのときはまだあの女の本性に気付いていませんでしたし、それが運命なら仕方ないです。でも――――――――――――――」

フレスが俺の腕に抱きついてきた。

「そのおかげでマスターに出会えましたから、あの頃の出来事も今ではいい思い出ですっ！」

「いい人に巡り合えたのねぇ～。」

「なんで俺と出会えたことが幸運なんだ？」

「だってマスター強いですし、それに何気に世話好きな顔をしていますからっ！」

どんな顔だ。

と言いたかったがやめた。

たぶん俺の顔を指差してくるだろうし。

「だからもしあの女が襲ってきても、マスターが撃退してくれますから安心できますっ！」

「良かったわねぇ～ケルちゃん。」

「はいっ！」

まったく、こいつら人を何だと思っているんだ。

・・・

男は優雅に一礼した。

オカマだな。

「私はバット。魔王軍の客将よ。よろしくねぇ～。」

くねくねしてる。

うざいが、間違いなく言えることがある。

・・・・・戦ったら死ぬな。俺。

「そういえばあの洞窟にいた竜人の人はどうなったんでしょうか？」

「さあ。どうでもいいことですし。」

おーい、そこのお二人さん。

気持ち悪い現実から目をそらすなー。

第十六話　契約って、理不尽だな！（後書き）

今回はここまでです。
お楽しみいただけたら、幸いです。

第十七話　ああ、行ってやろうじゃねえか！（前書き）

戦いません。
話し合いです。
ちなみに、前回、戦ったら死ぬと言っておりますが、実際は、本当に命がけになるというだけです。

第十七話　ああ、行ってやろうじゃねえか！

「ほらぁ、物騒なものはしまってしまって。お茶でも飲みながら話をしましょうよぉ～。」

どこかからテーブルセット一式を取り出し、バットとかいうオカマはカップに紅茶を入れた。

フレスは警戒しながら俺の後ろに隠れている。

お前、本当に役に立たないな。

「お茶をいらんが話は聞くだけ聞いてやろう。」

「それが得策ですね。」

「え・・・・でも・・・・・」

「そうですよマスターっ！　こんなオカマぶちのめしちゃってくださいよっ！」

黙れ役立たず。

「あらぁ随分と嫌われちゃったみたいねぇ～、お姉さん悲しいわぁ～、ケルちゃん。」

「僕はフレスだっ！　マスターがそう名付けてくれたんだっ！　ケルちゃんって呼ぶなっ！」

「あらそうなの。ごめんなさいねぇ～ケルちゃん。」

ガルルルルと威嚇しつつも俺の後ろから出ようとしない。

契約って本当に何の意味があったんだ・・・・・

「そっちのお嬢さんもそんなに警戒しなくていいわよぉ～。今のところ、私にはあなたたちと戦う理由はないわ。」

「黙れオカマおやじがっ！　糞にでも埋もれて死ねっ！」

アイリスよ・・・・・・・。初対面の奴にそれは無いんじゃないのか。

いや、そういえばこいつ初対面の奴にだけ強気で不良口調になるんだっけ。

「非道いっ、非道いわっ！　可憐な乙女をつかまえておやじだなんて・・・非道すぎるわっ！！」

オカマは否定しないのか。

一目瞭然ではあるが。

オカマのおっさんは体をくねらせながら嘘泣きをする。

キモい。

正直この場にいたくない。

「さっさと用件だけ言ってとっとと失せてください。キモオカマ様。」

メイドさんもいつになく辛辣な言葉使いだ。

「しょうがないわねぇ～。その前に物騒なものはしまいなさい。お茶までは強要しないけど話をするときの態度はわかるでしょう。」

俺は剣を鞘に収めた。

・・・・・そういえば最近、戦闘になったら剣を抜いてばかりだな。

むぅ、最初は木彫りの熊で頑張ろうとしていたはずなのに。

「ほらそこ。上の空のままじゃ話なんてできないでしょ。」

はっ、いかんいかん。

俺は気を取り直してオカマおっさんと対峙する。

「まあ用ってほどのことじゃないわ。ただケルちゃんを倒した相手がどんな人か確かめに来ただけよ。」

オカマおっさんは品定めするように俺に視線を向ける。

うわぁ、オカマおっさんに見られてるよ。

「うんっ合格よっ！　ケルちゃんを大事にしてあげてね。」

何に合格したんだろうか。

「僕はフレスだって言ってるだろっ！」

うんっ、いま重要なのはそこじゃないだろ。

後、いい加減俺の後ろに隠れるのはやめろ。

「それにしてもケルちゃんも隅に置けないわねぇ～。こんな可愛い女の子と契約するなんて・・・・・」

「俺は男だ。」

「そうだっ！　マスターはあの女よ・・・・・・・り・・・・・・？」

フレスが変な視線を俺に向けてくる。

アイリスも同様のだ。

どうしたんだこいつら。

「あらあなた、男の子だったの？」

「そうなんですか。気づきませんでした。」

はいはい棒読みありがとう。絶対気づいてたよね。オカマとメイドさん。

「・・・・・嘘・・・・・・じゃあ私、あのとき男の人に、お、おおお、お姫様だ抱っこされたんですか・・・・・・・？」

いままで一緒にいて気づいてなかったのか。

風呂だって一緒に入ったことは無かったのに。

「・・・・・・・・ぷしゅぅーーーーーーーーーー。」

うおっ、頭から湯気を出したっ！

そのままアイリスは倒れた。

アイリスよ。何がそんなに恥ずかしかったんだ？

「大丈夫ですっ！　マスターっ！　僕はマスターの性別なんて気にしませんからっ！」

ずいぶんと危ない発言に聞こえるぞ。それ。

「あらあら仲のいいことねぇ～。」

オカマおっさんは立ちあがった。

「ああ、それともう一つ忠告に来たのよ。」

「忠告だと？」

「ええ。ケルちゃんを捕まえたあの子、ヴェンリスちゃんはケルちゃんのことお気に入りだったから、たぶんすぐに捕まえに来るわ。」

ああ、やっぱりか・・・・・。フラグを立てた以上絶対になんか

しらの形で戦うことになると思っていたが。

「ところでヴェンリスって女だったのか？」

「言ってませんでしたか。」

言ってねえよ。

「なかなか肝が据わっている子たちねぇ～。あの子の名前を聞いたらたいていの人はケルちゃんみたいに震えあがるものだけれど。」

ん～、まあ俺は話を聞いただけだしな。

「流石はケルちゃんを倒した子といったところかしら。じゃあちょっと試させてちょうだい。」

オカマおっさんがどこからか禍々(まがまが)しい剣を取り出した。

「ケルちゃん。」

「なっ、なんだよっ！」

「あなた、その子たちにちゃんと契約のこと説明してなかったでしょ。」

「うっ・・・・・・・・・・・・」

どういうことだ？

「ケルちゃん。あなたこの子たちに役立たずを見る目で見られてた

ことに気づいてた？　あなたがちゃんと役に立つところを見せないと、せっかく契約したマスターに見捨てられちゃうわよぉ～。」

「・・・ううう・・・・・・・・・わかったよ・・・・・・」

フレスが俺の手を掴んだ。

「マスター、失礼します・・・・・」

痛っ！？

フレスは俺の指を口に含み犬歯を立てた。

「・・・・ちゅぷ・・・・れる・・・・・・」

指先から血が流れフレスはそれを舌で舐めとっていく。

「・・・はあ、はあ、はあ・・・・・・」

鼻息を荒くしながらその様子を観察している、アイリスとメイドさんとオカマおっさん。

何してんだっ、てめえらっ！！

「フレスっ！　いったい何しやがるっ！」

「すみませんマスター。もう一つの姿になるためには、改めてマスターの血を取り込む必要があったので・・・・・」

もう一つの姿？

「終わっちゃいました・・・・・。残念です。」

「大丈夫ですアイリス様。一緒に旅をしていく中で、きっと今以上に刺激的なシーンがあるはずです。」

「あらぁん残念だわぁ～。いっそのこと私もあなたたちの旅についていこうかしら。」

「やめてください。オカマゲス野郎様。」

「さっきよりさらに非道い呼ばれ方だわっ！」

こいつら殺そう。必ず殺そう。

俺は心の中でスクスクと育っていく殺意を感じていた。

「マスター。手を。」

フレスに右手を握られる。

このパターンは、たぶんあれだよな・・・・・

「行きますよ・・・・・。武装変身っ！」

フレスと俺の体が光り輝く。

光が収まると、そこには予想通りフレスの姿は無く俺の姿が変わっていた。

いや、姿が変わったというより文字通り武装を装着しただけか。

両手両足、そして背中に銀色の装甲を纏っている。

「これが契約した魔獣のもう一つの姿よ。」

俺は斬撃を右手で受け止めた。

『痛いっ！　痛いですよっ、マスターっ！』

口もないのにしゃべれるのか。

「見ての通り、ケルちゃんは格闘系の武装よ。他にもいろいろな能力があるけれど、そのあたりは実戦で確認して頂戴。」

オカマおっさんは剣を下げた。

「あなたたち、これからデニルガルスに向かうのかしら。」

「・・・・・・・どこでそれを。」

「ふふっ、乙女にはねぇ秘密が多いのよ。」

やっぱりうぜえ。

「まっいいわ。もう一つだけ忠告しておいてあげる。」

「忠告は一つだけじゃなかったのか。」

「そんないじわる言わないの。どうやらデニルガルスの王都ガルア

リスに異変が起こったらしいわ。それを解決するために、勇者一行が向かうことになったそうよ。」

アイリスの顔色が変わった。

まあ故郷だし、心配にもなるか。

「勇者が向かうとなればたぶん、うちの魔王も黙っていないでしょうしねぇ～。そもそもその異変だって魔王の仕業かもしれないわ。」

「いいのか？　魔王をそんな風に言って。」

「構わないわ。それにあなたたちの方が可愛いもの。」

体をくねらせるのは、本気で気持ち悪いからやめてほしい。

「私はねぇ～。可愛いものなら男も女も勇者も魔王も関係なく応援してあげたいの。だから頑張ってねぇん。」

オカマおっさんの指先から閃光が走った。

しまったっ！

「また会いましょうねぇ～。」

光が収まるとオカマおっさんは消えていた。

周囲には、いつの間にかたくさんの通行人や露天商がいた。

「どうやら何らかの魔法で、私たちを隔離した空間に閉じ込めてい

たようですね。」

あのおっさんやはりとんでもない奴みたいだな。

それにしても。

「やれやれ・・・・面倒くさいことになりそうだ。」

俺は一般人になりたいだけなのに。

俺の平穏はいったいどこに・・・・・・

『マスター、そろそろ戻っていいですか。』

あっ、忘れてた。

俺が許可を出すと、再び光が走りフレスが元の姿に戻った。

「ふう。あの姿はけっこう疲れますね。」

そんなこと知るか。

だが俺たちは気付かなかった。

気づかずに変身を解除してしまった。

ここが人通りが絶えない道のど真ん中だということに。

まあ武装した人間がいたら、それはそれで騒ぎになりそうだが。

なんだっ、なんだっ、と野次馬たちが集まり始める。

「まったく・・・・呆れた方ですね・・・・・・」

メイドさん、気づいていたなら止めてくれよ。

「どうしましょう・・・・・、マスター。」

「・・・・・・・・・逃げる。」

「えっ？」

「走れっ！」

俺は走り出す。

勇者たちが王都ガルアリスを目指すというのなら間違いなくここを通る。

というよりもう着いているかもしれない。

だったらここで目立ったっていいことは何もない。

ああ、いいだろう。オカマおっさん。

あんたの思惑はわからねえが、この際やけくそだ。

行ってやろうじゃねえか。王都ガルアリスへっ！

第十七話　ああ、行ってやろうじゃねえか！（後書き）

というわけで、次回から獣人の国、デニルガルス編です。
と、その前に、そろそろ、プロフィールその二を作りたいと思います。

キャラ設定その二（前書き）

今回はマリステラ、アイリス、ラフィ、フレス、バットについてです。
今回も簡単なプロフィールと設定だけです。
すみません。詳しく書くと、ネタバレ要素もあるので、後で、二回目の紹介をやると思いますので、それまでは待っていてください。

キャラ設定その二

マリステラ・ファクリル・ヴェルナルド

年齢　永遠の二十歳

身長　１６９ｃｍ

体重　戦争を起こしたいのですね？

スリーサイズ　良い女は自分のことを語らないものです。

趣味、特技　花の育成、魔法全般

容姿　長身の美女

髪の色　水色

瞳の色　水色

仁たちをこの世界に召喚するように仕向けた張本人。全国民の憧れ。なにか重大なことを知っており、仁たちを召喚したのはそれに対抗するためらしい。なお、メアリはほとんど何も聞かされていない。

アイリス・グエルジェリン

年齢　十二歳

身長　１４５ｃｍ

体重　３８ｋｇ

スリーサイズ　６８　５０　７１

趣味、特技　日向ぼっこ、狩猟

容姿　小柄な美少女

髪の色　緋色

瞳の色　金色

仁たちに助けられたネコミミ獣人少女。風の魔法を得意としており、キレると無詠唱で風の鎧を身に纏い暴走する。素手（というより爪）の攻撃を得意とし、武器は使わない。純真な少女だが、初対面の相手には強気かつ不良口調でいくため、避けられることも多い。

ラフィ・ヴィスマルク

年齢　二十二歳

身長　１７４ｃｍ

体重　６０ｋｇ

スリーサイズ　８８　５９　９０

趣味、特技　稽古、剣と光魔法

容姿　東間より、少し背の高い美女

髪の色　金色

瞳の色　緑色

王国最強の騎士の異名を持つ女騎士。東間や理香をしのぐ戦闘能力は、たゆまぬ鍛錬と実戦で磨かれたもの。特技は剣とあるが、実際はほとんどの武器を使いこなせるスーパーウーマン。お年頃でもあるので密かに東間を狙っていたりする。

フレス

年齢　十歳

趣味、特技　睡眠、無し

容姿　自他共に認める美少年？（美少女？）

髪の色　銀色

瞳の色　赤色

魔獣ケルヴェルグが変化した姿。性別は不明。質問すると、「あな

たは、どちらだと思いますか？」と言い答えると「なら、そう思っていてください。」と言われる。なんだかんだで契約してくれた仁のことを大切に思っている。仁の血を飲むことで魔翔獣装ケルヴェルグへと変わる。

バット

年齢　乙女に聞くことじゃないわよぉん。

身長　１８８ｃｍ

体重　乙女の秘密よぉん。

スリーサイズ　作者が調査を拒否。

趣味、特技　可愛いものの観察、可愛いものに気づかれずに接近すること

容姿　筋肉隆々の髭を生やしたおっさん

髪の色　白色

瞳の色　紅色

オカマのおっさん。魔王軍の客将らしいが魔王に忠誠を誓っているわけではない。可愛いものが大好きで、可愛いものの応援をするらしい。ふざけた口調と容姿とは異なり、空間を隔離したり仁に死を覚悟させるほどの使い手。いろいろなことを知っているそうだ。

キャラ設定その二（後書き）

以上です。
すみません、やっぱり中途半端にしか紹介できませんでした。
仁が、ケルヴェルグを倒した時の技や、ケルヴェルグが使える能力などは、先に進んで、いろいろなことが分かってから、改めて紹介します。

第十八話　獣人の国に、入ったぞ！（前書き）

獣人の国編です。
結構、続く予定です。

第十八話　獣人の国に、入ったぞ！

「さてっ、弁明があるのならお聞きしますが。」

「ありません。ごめんなさい。」

俺は今正座をしている。

「そうですか。」

メイドさんの冷ややかな視線は結構堪(こた)える。

何故こんなことになっているかと言うと、俺たちはデニルガルスへ行くための門を走って通っただけだ。

手続きも何もせず。

そりゃ警備兵に捕まるわけだよ。

目的も開示せずに堂々と不法侵入したわけだからな。

メイドさんの巧みな話術とアイリスとフレスの涙ながらの訴えが無かったら、下手をすると牢屋の中にぶち込まれていたかもな。

そんなわけで、俺は今メイドさんに責められているわけだ。

ちなみに今は夜お月さまが世界を照らしている時間だ。

疲れたのかアイリスとフレスは夢の中だ。

森の中で野宿なんて久しぶりだ。

「私はもう寝ますが、罰としてあなたは今日一切の睡眠を許可しません。見張りでもしていてください。」

「軽い罰だな。メイドさんのことだからもっと精神的にきつい罰をさせられると思ってたんだが。」

「明日以降、使い物にならなくなっては困りますから。」

そうですか～。

とりあえず俺の平穏は遠のいた。

んっ？

「任せますよ。」

起きてた。というより熟睡していなかった。と言ったところか。

「りょ～かい。」

やる気はないがやることもないしな。

まあこれで大丈夫だろ。

俺は懐に手を入れた。

周囲の警戒が強まったのがわかる。

だが俺が懐から取り出した物のせいで警戒が困惑へと変わった。

言わずもがな木彫りの熊だ。

俺は暗い森の中へ視線を送る。

・・・・・・・・・・・あそこかな。

木彫りの熊を上に放り投げ。

丁度いい高さに落ちてきたとき蹴った。

木彫りの熊は寸分違わず狙った場所へ飛んでいく。

「げはっ！？」

悲鳴が上がった。

「ぐほっ！？」

「なっ！？　げへっ！？」

二人、三人、と悲鳴は増えていく。

「がびっ！？」

「ぐべっ！？」

四人、五人――――――――――

悲鳴はそこで終わった。

入った方向とはまったく別の方向から木彫りの熊が俺の元へと戻ってくる。

いや確かに跳弾を計算して蹴ったけどさ。木はこんなにバウンドしないだろ。絶対。

「一人、わざと外しましたね。」

俺が木彫りの熊の材質をどうやって調べようか考えていると、横になっているメイドさんから声がかかった。

「他の奴らとは桁が違うからな。」

「そうですか。」

それだけかよ。

まあいいけど。

「そこにいるのはわかっている。さっさと出てこないとお前も仲間の様になるぞ。」

「申し訳ない。ちょっと試させてもらいたかったのだ。」

暗闇の中から一人の男が姿を現した。

虎耳か。

筋肉質の中年男性といったところか。

見たところ隙もないし、相当な使い手だな。

木彫りの熊じゃ倒せなかっただろうな。

「初めまして。私はギルド、ブラウネオスのギルドマスター、ゲルグ・シュピーゲルと言うものだ。うちの者が世話になったみたいだな。」

男は頭を下げた。

ブラウネオスだと？

「あんたがアイリスのギルドのトップってわけか。」

「ああ。アイリスが一人で魔獣を倒しに行くという置手紙を見つけた時には、ギルドメンバー総出で魔獣のところに向かったのだが・・・・。」

ゲルグは息を吐いた。

「そこには魔獣の姿もアイリスの姿も無く、ふもとの村人たちに聞き込みをしたところ、人間の奴隷商人に捕まったという情報を得てな。流石にこのご時世で真っ向から人間の国に攻め込むわけにもいかず、どうにか救出のための手段を見つけ人間の国へ向かおうとした矢先――――――――」

「俺たちと一緒にいるアイリスを見つけた。ってわけだ。」

コクリッと頷く。

「最初はまた奴隷商人が来たのかと思ったが、それならアイリスを連れてくる意味が無い。しかしアイリスを買った人間が、さらに獣人を奴隷にしに来たのかという可能性もあり警戒していたのだが、それも違ったようだ。」

ほう。

「何故そう言い切れるんだ。」

「寝顔を見ればわかる。少なくともアイリスは貴殿らを信じているようだ。ならアイリスの仲間と考えるべきであろう。」

・・・・・・単純だが否定しようがない理由だな。

「だがそれだけでは納得できない。と、うちの若い衆の五人が貴殿らを試したいと言い出したのだ。もっともあのような方法で倒されるとは思っていなかったがな。」

なるほど。それでか。

少し離れた場所に気配を隠すことに長けた連中がいるのは。

俺も気づくのに少し時間がかかったし。

「ここまで圧倒的な差を見せつけられた以上、不満を口にするもの

はいないだろう。」

「口には出さないだろうが態度には出すかもな。」

ゲルグは苦笑した。

「そのあたりは勘弁してやってほしい。うちのメンバーの中には人間に虐げられた過去を持つ者もいるのでな。」

「あいよっ。」

「ともかく、改めて言わせてほしい。」

ゲルグは再び頭を下げた。

「私の仲間を助けてくれて、本当にありがとう。」

・・・・・・集団のトップってのがこのおっさんみたいなやつばっかりだったら、国家間での争いとかもなくなるんだろうな～。

「ところで私のギルドと合流しないか。皆、アイリスのことを心配している。」

「あ～、ちょっといいか。」

「どうした？」

俺はアイリスを指差した。

スヤスヤと眠り続けている。

「明日の朝まで待ってくれ。」

「・・・・・・ふっ、そうだな。」

慈愛に満ちた眼差しでアイリスを見続けるゲルグ。

それはまるで、我が子を見守る父親のようだった。

「このロリコン共が。」

メイドさん自重してくれ。

って、共ってことは俺も入っている!?

「心外だぞっ、俺をこのロリコンおやじと一緒にしないでくれっ!」

「私はロリコンではない。」

あっ聞かれてた。

第十八話　獣人の国に、入ったぞ！（後書き）

衝撃の事実！　実は木彫りの熊は、木彫りでは無かった！
といったことが、判明しました。
まあ、そもそも、武器庫に、木彫りの熊が置いてある方が不自然なんですけど。
ゲルグがロリコンかどうかは、ご想像にお任せします。
仁は、ロリコンではありませんが。

第十九話　面倒事を、引き受けるな！（前書き）

ブラウネオスと合流です。
やはり、いざこざに巻き込まれそうです。

第十九話　面倒事を、引き受けるな！

「アイリスっ！」

「お帰りっ！　アイリスっ！」

「チーダーっ、グランっ！　みんなっ！」

朝。

泣きながらアイリスは仲間のところへ駆け寄っていく。

「よかったですね。」

「安藤の再開ですねっ。マスターっ！」

感動だろ。

誰だ安藤って。

「そうだな。」

いちいち訂正するのが面倒だったのでスルーしておく。

「旅の方・・・・アイリスを連れてきてくれてありがとうございます。」

垂れた犬耳の老人がお礼の言葉を述べる。

「いえっ、大したことではありません。」

「まあ成り行きだし、別に感謝される覚えはないな。」

老人は首を横に振った。

「そういうわけには参りません。是非ともお礼がしたいので、近くの村にある支部までお越ししてはいただけませんか。」

「私からもお願いする。」

ゲルグが話に入ってきた。

「アイリスの恩人である貴殿らに、何の礼もしてあげられなければ私たちのギルドの掟に反する。それに貴殿らの耳に入れておきたい情報もある。」

・・・・・・罠ではなさそうだ。

「掟ってのはなんだ。」

「ギルドにおいて必ず守らなければならない決まりだ。ブラウネオスの掟は『受けた恩も受けた恨みも必ず返せ。』だ。」

へえ、割とまともな掟だな。

信用してもよさそうだ。

「いいだろう。知って損する話じゃなさそうだ。」

「私も異論はありません。」

「僕はマスターに従うだけです。」

「ありがとう。」

ゲルグは一礼するとアイリスたちの方へ向き直る。

「みんなっ！　移動するぞっ！　アイリスを連れてきてくれた恩人たちを支部へと案内するっ！」

メンバーに向かって大声で言った。

おおっ、流石はデニルガルス最大のギルドのトップだな。

威厳のある声だ。

ギルドメンバーたちが移動を始める。

アイリスも一緒に移動している。

「さあ、行きましょうか。」

ゲルグの後ろについていく。

と、ゲルグは振り返り老人を担いだ。

「先代、行きますよ。」

「ゲルグよ。わしはまだそこまでボケておらんぞっ！」

「文句なら後で聞きます。腰と足を痛めてらっしゃるのですから遠慮しないで。それに恩人たちを待たせるわけにはいかないでしょう。」

昨日も思ったが、どうやらこの男は本心から仲間を信頼し大切に思っているようだ。

誇り高き民(ブラウネオス)か。

少なくともそこのトップは名前負けしているわけじゃなさそうだ。

「ここだ。」

ふもとの村にある大きな建物の中に案内される。

中には先に行ったギルドメンバーたちがアイリスを中心に騒いでいる。

ゲルグは先代と呼んだ老人を降ろす。

「奥へ。」

促(うな)がされるままに進んでいく。

アイリスは俺たちに気づいていないみたいだ。

奥の部屋にはソファーが二つ。間にテーブルがあった。

「今、お茶の準備を・・・・・・」

「私がやります。」

メイドさんが湯呑みにお茶を入れる。

相変わらず仕草に無駄が無いな。

俺はソファーに座り体面にゲルグが座った。

メイドさんは後ろに立ち、フレスは俺の膝に頭を乗せ寝転がった。

フレス。ナチュラルに俺を枕にするな。

「改めて自己紹介を。私はゲルグ・シュピーゲル。ブラウネオスのギルドマスターだ。」

「影月仁だ。」

「メイドさんです。」

「フレスだよっ、よろしくっ！」

「・・・・・・変わった名前だな。もしかしてあなたは噂に聞く異世界の勇者なのか？」

「違う。」

断じて違う。

「そっ、そうか。」

今度はメイドさんに目をやり、

「あなたは・・・・・・・メイド・サン、という名前なのか・・・・・？」

「はい。その通りです。」

「そうか・・・・・・・・。人間の中には変わった名前もあるのだな・・・・」

失礼な。

「いやっ、失敬、アイリスの恩人たちに対して言うべきことではなかった。すまない。」

ゲルグは頭を下げる。

このおっさん頭を下げることが多いな。

「それでは早速、本題に入ろう。」

さてっ、どんな情報が聞けるかな。

「率直に言えば、いま王都ガルアリスで勇者暗殺を目論んでいる輩がいる。」

へぇ～、そうなんだ～。

「・・・・・・・・・・なんだその反応は。」

ゲルグが俺たちの反応に少々驚いているようだ。

「興味無い。」

「後ろに同じです。」

「僕もー。」

三者三様の反応にゲルグは呆れたようだ。

「・・・・・普通はもっと驚くものなのだが・・・・・・・・・・まあいいだろう。ただ、実行されたとなれば獣人と人間の間で間違いなく戦争が起きる。」

ゲルグはお茶を飲んだ。

「熱いっ!!」

あっ、虎も猫舌なんだ。

「そっ、そういうわけで、私たちはアイリスを取り戻したら王都へ向かい、勇者暗殺を阻止しようと思うのだが・・・・・・・一つ問題があってな。」

大体予想はつく

「メンバー内に勇者暗殺に賛成している者がいるってわけか。」

「・・・・・・・・その通りだ。」

ゲルグは苦々しく言った。

「このギルドの中には人間の奴隷にされた者もいてな。彼らを責めることは私にはできない。だがこのままでは人間との間に戦争が起こってしまう。仮に戦争にまではいかなくとも勇者を失ってしまえば魔王軍を止めることができなくなってしまうっ！　だからお願いがあるっ！」

ゲルグは頭を下げた。

本当によく下がる頭だな。

「勇者暗殺を阻止するのを手伝ってくれっ！　アイリスを助けてくれた貴殿らは信用できるっ！」

「嫌――――――――――――――――――――」

「わかりました。」

おいっ！？

「ですが、これはあくまでも私個人の意見です。今夜一晩、話し合う時間をください。答えは明日出します。」

「わかった。二階に部屋を用意しておくから好きに使ってくれ。」

俺はメイドさんを睨むが無視された。

何を考えているのかはわからんが、面倒事に巻き込まれるのは間違いないようだ。

仁さんたちマスターと何を話しているんだろう。

仲間たちと談笑しながらも私はそのことが気になっていた。

どうしてだろう。

さっき奥の部屋へ向かう途中、私の方を見たのに声をかけてくれなかった。

単純に私に気を使ってくれたのかもしれないけど。

「アイリス？　どうした？」

「ううんっ、なんでもないよっ！」

どうしてなんだろう。

仲間たちとようやく再開できたのに。

どうしてこんなに寂しいんだろう・・・・

第十九話　面倒事を、引き受けるな！（後書き）

今回はここまでです。
次は、たぶん、一気に王都へ行きます。

第二十話　あいつらのことは、心配ねえだろ！（前書き）

王都に到着しました。
アイリスにいろいろなことを拭き込んだ人は、まだしばらく出てきません。

第二十話　あいつらのことは、心配ねえだろ！

「ここが王都ガルアリスだ。」

ゲルグが説明する。

あの夜は結局、俺たちも勇者暗殺を阻止するのに協力することになってしまった。

メイドさん曰く。

「東間様や理香様に万が一のことがあってはいけませんから。」

だそうだ。

絶対あの二人のことなんか心配していないだろうに。

ちなみにあの二人というか勇者パーティーはまもなくここに到着するそうだ。

う～ん・・・・俺たちだって遊んでいたわけじゃないのになあ。

あいつら進むペース早すぎだろ。

それはともかく、せっかく王都に着いたんだから観光でもしたいもんだ。

「却下です。」

却下された。

「まずは宿を確保します。その上で今後の対策を練りましょう。」

「はいっ、メイドさんっ！」

フレスが元気よく返事した。

あの野郎このパーティー内の力関係を見抜きやがった。

「それでは私たちは本部へ行くとしよう。アイリスの無事を残りの皆に伝えなければならないからな。」

「それじゃあ仁さん、メイドさん、フレス、また後で。」

アイリスはゲルグと一緒に行った。

心なし、元気が無かったような気がしたが・・・・・・

やっと仲間に会えたんだし、それは無いか。

後、他のメンバーはそのまま支部に待機しているらしい。

仲間を疑いたくはないが念のためだそうだ。

「しかしメイドさん。あの馬鹿どももうすぐここに来るんだろ？同じ宿で鉢合わせってことになったらいろいろ面倒なんだが。」

「それは無いでしょう。」

「根拠は？」

「勇者様たちは城で歓迎されそのまま城の中に泊まるはずだからです。私たちのようにお金を払って宿に泊まる必要などありません。」

同じ出身だってのにこの待遇の差。

これが勇者と一般人の違いか。

「さて、では参りましょうか。」

メイドさんはガイドブックを片手に歩き出した。

って、ガイドブックだと？

「そんなものどこで手に入れたんだ。」

「そこに落ちていました。」

机の上を指差すメイドさん。

・・・・・・・・・・・・・・・

窃盗じゃないよね。うんっ。きっと。大丈夫。

・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だよね？

宿のとある一室。

ガイドブックにお勧めと書かれていただけあって、料金が安い割にはいい部屋だ。

ガイドブックが盗難にあったとかいう騒ぎがあった気もするけど、気のせいだったようだ。

よかった。よかった。

「まず今後のことについてですが。」

メイドさんが話し始める。

この場にいるのは俺とメイドさんとフレスだけだ。

フレスは相変わらず座っている俺の膝を枕にしている。

どうやら気に入ったらしい。

アイリスは当然のことながらいない。

べっ、別にさみしくなんてないんだからねっ！

・・・・・・・・・・・・・・

自分でやっててなんだがこれは無いわ～。

俺にツンデレ属性は似合わんな。やっぱり。

「さっきからなんで百面相しているんですか？　マスター。」

無邪気な顔で尋ねてくるフレス。

「大人にはな、いろいろあるんだよ。」

さわやかに受け流した。

「未成年ですけどね。」

メイドさんに突っ込まれる。

・・・・・うんっ、やっぱなんか物足りない。

一人いなくなるだけでこんなに違うもんなんだな。

「話を戻しますが、まあ話すべきことなどありません。」

メイドさんがバッサリと言い切った。

「強いて言うのなら、私たちはいつでも臨機応変に動けるようにしておくことだけです。」

「どうしてですか？」

フレスが不思議そうに訊いてきた。

「簡単な話だ。俺たちが何かしなくても暗殺なんて失敗するからだよ。」

「その通りです。」

俺の言葉にメイドさんが同意した。

「ますますわからないんですけど・・・・・・？」

「ぶっちゃけあの二人にそんなものは無意味だってことだ。」

首をかしげるフレスの頭を撫でながら説明してやる。

「あの馬鹿どもはこの国の問題を間違いなく解決する。そこにどんな思惑があろうともだ。俺たちにできることは最初から、不測の事態に備えること。」

「ええ。ですがその不測の事態もまた、間違いなく起こるでしょう。」

メイドさんの言葉に首肯する。

「まっ、そういうわけだから、いまのところはすることはなし。」

「そうですか。それじゃあお休みなさい・・・・・・」

寝るの早っ！

「それでは私も寝ます。お休みなさい。」

「ああっ、お休み。」

メイドさんも横になった。

俺は窓の外から星を見ながらこれからのことを考えていた。

やれやれ・・・・早く平凡な日常を取り戻したいもんだ・・・・・・

俺はかなわないと知りつつそんなことを思っていた。

「はあ・・・・・・・・・・・」

星を見ながら私はため息をついていた。

本部に帰ってきてみんなとても喜んでくれた。

無茶をし過ぎだっ。とか怒られもしたけど。

私は仲間の元に帰ってこれて本当にうれしい。

だけど。

だけどどうしてだろう。

フレスに会いたい。

メイドさんに会いたい。

そしてなにより。

仁さんに、会いたい。

昨日も感じていたこの気持ちは何だろう。

私のギルドは。私の居場所は。ここなのに。

私はどうしたいんだろう。

第二十話　あいつらのことは、心配ねえだろ！（後書き）

なんか、最近、アイリスとのフラグが、立ちそうな感じになってきちゃいました。
アイリスは、ヒロインの一人になれるでしょうか？
後、仁が東間や理香のことを、いなくて寂しいと、思っていないのは、単に一緒にいた時間が長すぎて、これからも、また同じ時間を過ごすだろうと、信じているからです。

第二十一話　面倒事が、始まりそうだ！（前書き）

東間と理香は、この世界の字も勉強しました。

第二十一話　面倒事が、始まりそうだ！

「おはようメイドさん。」

「おはようございます。」

早朝。

まだ完全に日が昇りきっていないころ。

メイドさんは一言俺に挨拶すると、部屋から出て行ってしまった。

俺はと言うと部屋に置いてあった絵本を読んでいた。

字は読めないが、絵本の表現で内容はなんとなく理解できる。

しばらくした後フレスが目を覚ました。

「ふわぁ～、・・・・・・・・・・、おはやうございます、ますたー。」

「おはようだろ。」

寝起きなためかろれつが回っていない。

「顔でも洗ってこい。」

「ふわぁ～い・・・・・・・・」

俺の膝から下りるとのそのそと歩いていく。

あっ、壁にぶつかった。

フレスは頭を押さえてうずくまっている

「ううううぅぅぅ～。」

俺は別な絵本を手に取った。

「マスタァー・・・・・・少しは心配してくれてもいいんじゃないですか・・・・」

「それだけ言えれば大丈夫だろ。」

俺は視線を絵本から離さずにフレスに言ってやった。

フレスは恨みがましく唸っていたが、諦めたように部屋から出て行った。

俺が絵本の続きを読んでいるとドアをノックする音が聞こえてきた。

「誰だ。」

まあフレスはノックなんてしないだろうし、メイドさんはまだ帰ってこないだろうから考えられる人物は二人だけだが。

ドアが開く。

姿を現した人物は予想通りだった。

「何か用か。アイリス。ゲルグ。」

「失礼する。」

「・・・・・・失礼します。」

中に入ってくるゲルグとアイリス。

この前も思ったがアイリスの顔が暗い様な気がする。

なにかあったのか？

「おはよう仁殿。ゆっくり休めましたか？」

「おはようゲルグ。まあそれなりに快適だったよ。」

俺はアイリスの方を見やった。

「おはようアイリス。仲間たちとの再会はどうだった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・おはよう、ございます・・・・・・」

なんだ。

なぜ赤くなる？

俺はなにかしたか？

否！

俺は何もしていないはずだ！

「仁殿、メイド・サン殿とフレス殿が見当たらぬが・・・・・」

ゲルグの発言で思考の海から引き戻された。

「フレスは顔を洗いに行っただけだ。メイドさんはもうじき戻ってくるだろう。」

アイリスの様子が気になったが、なにかあったのなら本人が直接言うだろう。

「ただいま戻りました。マスター。」

タイミングを見計らったように部屋に入ってくるフレス。

「あっ、おはようございます。ゲルグさん。アイリス。」

「おはようフレス殿。」

「おはよう・・・・・・・・」

アイリスの元気のなさにフレスも気づいたようだ。

首をかしげつつも俺の膝の上にダイブしてくる。

いい加減、俺の膝を枕にするのをやめてほしいところだが。

「おはようございます。ゲルグ様。アイリス様。」

タイミングを見計らったように――――――――――――――――――

――実際見計らってたのだろうが。

メイドさんが姿を現した。

「おはようメイド・サン殿。」

「おはようございます・・・・・・・・・」

メイドさんはかすかに眉を動かしたが何も言わない。

「ところでメイドさん。いったい何をしていたんだ。」

「お庭にお花を摘みに行っていました。」

・・・・・・・・・・随分時間がかかったな。

「冗談です。」

「そうか。」

何をしていたかは大体想像がつくがな。

「本当は二軒隣のヴェヴォルフさんのお宅の朝食に目玉焼き（塩）があるかどうかを調べていたのです。」

予想通りだな。

「でっ、どうだったんだ。」

「目玉焼き（胡椒）でした・・・・・・・・。目玉焼きに対する冒とくでしたのでばれない様に黄身だけ切り取って食べました。」

「残念だったな。」

「残念なのはマスターの頭の方だと思います・・・・・・・」

はっ！？

あまりにも予想外過ぎて俺自身訳のわからんことを言ってしまったっ！

「冗談です。」

わかっていたのにっ、わかっていたのにっ！

心の中で地団駄を踏む俺を勝ち誇った顔で見ているメイドさん。

「流石マスターですっ！」

フレスよ。

しばらく飯抜きな。

「・・・・・・・・・貴殿らは、その・・・・・・いつもこういうことをしているのか・・・・？」

ゲルグの俺たちに対する信頼が一気にマイナスまで落ちた音がした。

様な気がする。

「・・・・・・・・・・・・・・・ぷっ。」

んっ？

「は、ははははははははは、あははははははははははははっ！」

アイリスが笑いだした。

この前みたいに狂った笑い――――――

「さて、本題に移りましょうか。」

メイドさんが真面目な表情になった。

「私の調べでは三軒隣りの前の家の――――――――――――――」

「話が進まん。」

「冗談です。」

メイドさんがしれっと答える。

「私の調べによりますと――――――――――――――」

いずれにしろ。

面倒なのは確実だ。

「あの子、よくあんなことまで調べられたわねぇん。」

暗闇に包まれたどこかの一室。

目を閉じながらつぶやく男の姿があった。

「ケルちゃんもすっかりあの男の子になついちゃって、可愛いわねぇ～。」

はたから見れば独り言を言っている変人がいるだけだ。

しかし男にははっきりと見えている。

「今回の刺客はちょっぴり強敵だけど、あの子たちなら心配いらないわねぇん。」

男は目を開いた。

「さってと、そろそろあの子が帰ってくるころねぇ～・・・ケルちゃんがいなくなっていると知ったらきっと大暴れするでしょうねぇ～。」

どうなだめようかしら。などとつぶやきながら男は部屋を後にした。

第二十一話　面倒事が、始まりそうだ！（後書き）

今回はここまでです。
アイリスのフラグが立っていく・・・・・・・
仁はロリコンじゃないのに・・・・・・・・・

第二十二話　油断は、するもんじゃねえな！（前書き）

地下道に入りました。

第二十二話　油断は、するもんじゃねえな！

ぴちょん。

薄暗い地下道に水滴の音が響き渡る。

実は今、俺たちは城に潜入するための地下通路を通っている。

なんでもここは王族が脱出用に作った通路なのだが、結局今まで一度も使っていないそうだ。

そういえば洞窟を探索した時は三人だったな。

「どうかしましたか。」

「いや、なんでもない。」

いまここにいるのはメイドさんと俺の二人だけだ。

その理由はメイドさんが勇者暗殺を目論んでいるお偉いさんのことを調べ上げたからだ。

俺たちの役割は証拠を発見すること。

メイドさんの調べによれば、今回の勇者暗殺の件には魔王軍が関わっているそうだ。

大方、魔王軍の刺客と馬鹿どもがやりあっているどさくさにまぎれて馬鹿どもを殺そうという算段だろう。

正直、あの馬鹿どもなら問題無いと思うんだが。

「仁さん、メイドさん、頑張ってくださいっ！」

なんて笑顔で送り出されたら、やらないわけにはいかないだろ。

アイリスとフレス、それにゲルグは王城近くで待機してもらっている。

馬鹿どもの足止めをしてもらうためだ。

顔の知られている俺とメイドさんは論外。

ゲルグはブラウネオスの代表として、アイリスとフレスは勇者様のファンとして。

特にあの馬鹿どもが子供のファンを邪険に扱うとは思えない。

メイドさんの調べによると、お偉いさんの計画は勇者が謁見の間にいるときに行うらしい。

つまり勇者が城の中に入ってこなければ、その分時間が稼げるってわけだ

それにばれたときに罪人になるのは少ない方がいいってことだ。

俺たちなら簡単に逃げられるだろうし。

そんなわけで俺とメイドさんが二人っきりになっているわけだ。

見た目は文句無しのメイドさんと暗がりで二人きり。

ただし甘い展開は無し。

男だったらこの状況を嬉しく思うべきか、悲しむべきなのか・・・・・

メイドさんが不意に立ち止まった。

わーお。デジャビュ～。

「お任せしました。」

「へ～い。」

どうしてこういう場所って変なのが発生するんだろうな～。

使ってないからかな？

「エモノダ、ヒサシブリノニンゲンノエモノダッ！」

地下道に低い声が響き渡る。

現れたのは異形の獣。

深紅の毛皮に深紅の鬣（たてがみ）、それに二本の長く伸びた尾の先に鋭く尖った針。

そして――――――――――――――――――

「ウマソウダ、ニンゲンナンテイツイライダロウカッ！」

人の顔。

しわくちゃの老婆の顔だが、口には無数の牙が生えている。

「人喰い獅子（マンティオウス）・・・・・・・・・・」

メイドさんが怪訝（けげん）な顔をする。

「どうした？」

「マンティオウスはその名の通り、人を主食としています。ですが、それはあくまでも人間に限定されています。」

「獣人は食べないってことか。」

「その通りです。ですからこんなところにいること自体、異常なのです。」

なるほど。

だとすると、こいつは。

「誰かに飼われている。か。」

「そう考えるのが妥当でしょうね。」

「なら飼っているのは――――――――――――――」

「キサマラッ！　イツマデ、シャベッテイルツモリダッ！」

おっと。どうやら怒らせてしまったみたいだ。

「オレハ、イマ、ハラガヘッテイルンダッ！　モウ、マテナイッ！
イッタダッキマースッ！」

魔物のくせにちゃんといただきます。って言うんだ。

意外としっかり調教されているのかもな。

人間を襲うことも含めて――――――――――――――――

俺とメイドさんはその場から飛び退いた。

一瞬後、マンティオウスも牙が俺たちのいた場所の空気を噛み砕く。

「ヨケルナッ、メシドモッ！」

無茶言うな。って！？

いつの間にかマンティオウスの尾が目の前に迫ってきている。

やばっ！？　油断したっ！？

尾は俺の胸に突き刺さった。

「ぐっ・・・・・・・・はっ・・・・・」

そのまま壁に叩きつけられる。

「シトメタッ、シトメタッ、ゴハンッ、ゴハンッ！」

「仁っ！？」

メイドさんがナイフをマンティオウスの尾へ投げつけた。

マンティオウスは素早く尾を引っ込める。

「仁っ！　大丈夫ですかっ！」

メイドさんが急いで俺に駆け寄ってくる。

「珍しいな。メイドさんが俺の心配をしてくれるなんて。」

俺は剣を鞘から抜きながら軽口を言った。

「強がっている場合ではありませんっ！　マンティオウスの尾には毒針が付いていますっ！　早く解毒しないと――――――――――――――」

ここまで焦るメイドさんは本当に珍しいな。

どうやら相当やばい毒みたいだな。

「大丈夫だって。こいつのおかげで助かった。」

懐からある物を取り出す。

毎度お馴染みの――――――――――――

「木彫りの熊・・・・・・・・・？」

ただし、穴あき。

「こいつに針が刺さったみたいでな。おかげで俺は無傷だ。まあでも、心配してくれたみたいだからありがとう。とは言っておくか。」

メイドさんが顔をそらした。

真っ赤になっている様に見えるが、たぶん気のせいだろう。

とりあえずマンティオウスへ向き直る

「はあ・・・・・・・・・・」

やれやれ。さっきは本当に油断したな。

木彫りの熊に穴が開いたのは俺のせいだ。

だから――――――――――――

「行くぞ。」

仇討ち、させてもらうからな。

「・・・・・・・・・・・・」

「ねえ、アイリス・・・・・・・・・」

「なに・・・・・・・・・・」

「暇だね・・・・・・・・・・・・」

「そうだね・・・・・・・・・・・・」

地下道の戦闘のことなど知らず、三人は勇者が城に来るのを、ただ待っていたのであった。

第二十二話　油断は、するもんじゃねえな！（後書き）

木彫りの熊があああぁぁぁぁ～！！
まあ、材質は、木じゃないんですけど。

第二十三話　字は、習っておくべきだ！（前書き）

マンティオウスは上位の魔物ですが、魔獣ではありません。
ＲＰＧで言うと、中ボスとして出てきたけど、ラスボスのダンジョンでは、普通の敵として登場、といった感じの敵です。
木彫りの熊（穴あき）は、ちゃんと持っています。

第二十三話　字は、習っておくべきだ！

「イキテルッ、イキテルッ、イキテルッ！」

マンティオウスは叫んでいた。

どうやら仕留めたと思った獲物が、無傷だったことにショックを受けているようだ。

「コンドコソッ、シトメテヤルッ！」

メイドさんは俺から大きく距離を取った。

やっぱり戦ってはくれないのか・・・・・・・・

マンティオウスはメイドさんは眼中にないらしく、俺に向かって突進してきた。

俺は右に跳んで突撃をかわす。

すると先ほどと同じように尾が追撃してきた。

俺に同じ手が通用するかっ！

高速で迫りくるう尾を俺は掴んだ。

「ナニッ！？」

掴んだまま俺は剣を一閃させた。

「ギャウッ！！」

切断された尾の断面から血が吹き出る。

「キサマッ、キサマッ、ヨクモッ、ヨクモッ！」

マンティオウスは赤い目を更に充血させて、真っ赤な目で俺を睨みつける。

「今のは貫かれた木彫りの熊の分だ。」

「ナンダトッ！？」

俺は尾をマンティオウスへと投げつけ、それと同時にマンティオウスへ突撃する。

「クッ！」

マンティオウスは残された尾で飛来する尾をはじき、そのまま尾で俺を迎撃する。

学習しない奴だ。

俺は再び尾を掴んだ。

「バカメッ！」

マンティオウスは口から炎を吐いた。

おっ、少しは学習能力があるのか。

自分の尾を燃やしてでも俺を殺そうとするとは。

だが甘い。

俺は尾を切断すると後ろに下がり炎を避けた。

炎は命中した壁や床を溶かし、溶岩を形成した。

大した高熱だな。

「これが木彫りの熊が感じた痛みの分だ。」

「クソッ、クソッ、クソオオオォォォォォォッッッ!!」

尾を切られた痛みと簡単に攻撃を、それもたぶん切り札を避けられて怒り心頭ってところか。

「シネエエエェェェェッッ!!」

口から再び炎を噴き出そうとする。

だから甘いって。

俺は尾を捨てると剣を鞘に収め、炎が出てくる前に跳んだ。

「・・・・・・・・・・ゲベッ?」

何が起こったのか理解できないか。

俺は剣を抜いた状態でマンティオウスの後ろにいた。

マンティオウスは不思議そうにこちらを見ている。

上下逆さまの世界を。

「そしてこれが――――――――――――――」

マンティオウスの首が地面に落ちた。

「木彫りの熊の怒りの分だ。」

剣を鞘に収めると、マンティオウスの肉体がバラバラになった。

「・・・・・ゼンブ・・・・・・・キサマノ・・・・・・・ヤツ・・・・・アタリ・・・・・・・ジャナイカ・・・・・・・」

否定はしない。

マンティオウスの首は力尽きたように目を閉じた。

俺はマンティオウスの尾を一つ持った。

何かに使えるかもしれないし。

「メイドさん、これの毒って――――――――――――――――――――――――――――――――」

そこまで言ってから気がついた。

メイドさんがいなくなっている。

まさかやられたのか？

かと思ったら、メイドさんがさっきまでいた場所に紙が貼ってある。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は紙を手に取った。

そこには――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・読めん。」

この世界の字、本気で習っておこう。

俺は心に決めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・どうするかな。」

置き手紙にはなんて書いてあるかわからんし。

かといって、今更戻って馬鹿どもと鉢合わせするのも嫌だし。

このままここでじっとしているのも嫌だしなー。

A、このまま先に進む。

B、戻ってアイリスたちと合流する。

C、この場に留まる。

なんだっ！？

今、頭の中に何かの意志が選択肢を出していったぞっ！？

神の啓示というやつかっ！？

でもまあせっかくだから使わせてもらうか。

A、このまま先に進む。

「遅かったですね。」

先には（恐らく）メイドさんがいた。

「結構、苦戦してたんだ。」

「役に立たないですね。」

とまあこんな感じか・・・・・・・・・

B、戻ってアイリスたちと合流する。

「よお。そっちはどうだ。」

「マスターっ！」

「仁さんっ！」

暇そうにしていた（まだ東間たちは来ていないだろう）フレスとアイリスが駆け寄ってくる。

「仁殿、いったいどうしてというのだ？」

「いやまあ・・・・メイドさんとはぐれてな・・・・・・」

「何を言っているのだ。メイド・サン殿は後ろにいるではないか？」

・・・・・・・・・ナンデスト？

振り向いた俺の眼前にはナイフが――――――――――

・・・・・・・・・・・・デッドエンド直行か・・・・・・

C、この場に留まる。

「暇だなー。」

あれ以来特に何かが襲ってくるわけでもなく、俺は暇を持て余していた。

そろそろ先に進もうかな。

そう思った時だった。

「何をしているんですか・・・・・・・・」

暗がりの中に静かに声が響く。

決して大きくは無いのになぜか耳に残る。

「あまりにも遅いので様子を見に来てみたら、良い身分ですね・・・・」

不気味なまでに穏やかなメイドさんの声。

「いや、これは――――――――――――――――」

「いいわけは死んでからしてください。」

瞬間――――――――――――――――

俺の意識は引きずりこまれた。

二度と目覚めることのない。

深い深い闇の中へ――――――――――――――――

うんっ。デッドエンドその二だな。

わーい。俺に選択権なんて始めからなかったんだー。

俺は目尻から溢れてくるものをこらえながら先に進んだ。

「・・・・・アイリスぅ～・・・・・・・・・・」

「・・・・なにぃ～・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・暇だよぉ～・・・・・・・・・・」

「・・・・・・そうだねぇ～・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人はただひたすら待っていた。

ゲルグは瞑想しているだけだったが。

フレスとアイリスは勇者でも刺客でもいいから、さっさと来てほしいと切実に願っていた。

第二十三話　字は、習っておくべきだ！（後書き）

選択肢については、あくまでも仁の想像です。
実際にそうなるかは、わかりません。
読者の皆さま方の、ご想像にお任せします。

第二十四話　ようやく、侵入だ！（前書き）

潜入します。

第二十四話　ようやく、侵入だ！

「遅かったですね。」

先にはメイドさんがいた。

「結構、苦戦してたんだ。」

「役に立たないですね。」

・・・・・・・・想像通りだな～。

「どうかしましたか。間抜けな顔をして。」

「いや別に。」

「そうですか。」

ふと、メイドさんが俺の手にあるものに視線を向けた。

「何を持ってきているんですか。」

「マンティオウスの尾。」

「そんなことはわかっています。なぜそのようなものを持ってきたのか訊いているんです。」

「何かに使えるかなー、と。」

「・・・・・・・・・・・まあ確かに使えないことは無いですね。」

「でだ。メイドさん。こいつの毒ってどんな効果があるんだ。」

「簡単に言えば麻痺です。」

「ふーん。」

メイドさんの説明が始まった。

「まず毒が体に入ると、体が言うことを聞かず倒れてしまいます。」

「へえ～。」

「その後一時間ほどすると、体の器官が麻痺し呼吸することができなくなり死に至ります。」

「ほお～。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当に聞いてますか？」

「聞いてるよ。危険な毒だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

メイドさんがジト目で睨んでくる。

俺何もしてないのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・まあいいでしょう。それを貸してくだ

さい。」

メイドさんに尾を手渡す。

「流石にこれをそのまま持っていくのは荷物になります。」

メイドさんが尾から針の部分だけを切り取った。

「毒はこの針の部分に染み込んでいます。」

そのまま針を懐にしまった。

「危なくないか。」

「問題ありません。」

まあそういうのならこれ以上何も言えないが・・・・・

「さて。少々時間がかかりすぎましたね。先を急ぐとしましょう。」

「そうだな。」

しばらく奥へ進んでいくと階段があった。

「ここから城の中に侵入します。」

「わっかりやすーい。」

「ここはもともと逃走用に作られたものです、入る場所は隠しますが、中を複雑にしたら逃げづらいだけでしょう。」

ごもっとも。

俺たちは階段の先へ進んだ。

その先には――――――――――――

「行き止まり・・・・・・・・・」

良く見ると一か所だけ他の壁より薄い壁があった。

俺は躊躇することなく壁を押した。

「・・・・・・・・・あれっ？」

動かない。

「どうしました？」

「・・・・・・・・普通こういう場所って隠し扉になっているもんだろ。」

「そうですね。」

「じゃあなんで動かないの？」

「・・・・・・・・・・・・」

メイドさんが黙って壁に触れ横に動かした。

「引き戸ですね。」

そういうことは多いけどさぁっ！　何も隠し扉でやることはねえだろっ！！

「何をしているんですか？」

「世の中の理不尽さに怒りを感じていたんだ・・・・・・」

「とりあえずこのような場所で言う言葉ではありませんね。早く行きますよ。」

メイドさんにうながされ、仕方なく地下道を後にする。

ここは・・・・・・・・・・・・・・・倉庫か・・・・・・・・・・・・？

「倉庫ですね。」

「やっぱそうか。」

「だからと言って手をつけないでくださいね。」

「えー。」

「犯罪者になったら一緒に逃げてあげます。」

「それは嬉しいかもな。」

素直に感心した。

「賞金首になったら捕縛して突き出しますが。」

「前言撤回・・・・・・・・・・・・」

メイドさんってどうして俺にだけこんなにきついんだろうな～。

「行きましょうか。」

「はいよっ。」

俺たちは倉庫から抜け中へと侵入した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・うー・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あー・・・・・・・・」

やることが無さ過ぎて寝転がっているフレスとアイリス。

ゲルグは一人でたたずんでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ぐー・・・・・・」

・・・・・・・寝ていただけだった。

第二十四話　ようやく、侵入だ！（後書き）

そろそろ、東間たちが登場する予定です。

第二十五話　やばい、隠れないと！（前書き）

お城の探索です。

第二十五話　やばい、隠れないと！

足音を忍ばせながら俺たちは廊下を駆けていた。

窓からは夕日が差し込んでいる

「もうこんな時間か。」

「苦戦していたせいですね。」

「戦いもしない奴に言われたくない。」

軽口を叩きあいながら上の階へあがっていく。

メイドさん曰く、お偉いさんは上の階にいるそうだ。

理由は恐らく。

馬鹿と何とかは高いところが好きってことだろう。

「違います。」

久々に心読まれた～。

「魔王軍とつながっている以上、なるべく人目を避けたいと思うのは当然でしょう。」

そりゃそうか。

メイドさんが立ち止まる。

前方から人の気配。

隠れるところは――――――――――――――――――――――――一つだけ、か。

俺たちは素早くそばにあった部屋へと駆け込んだ。

中には都合よく誰もいなかった。

内装から見て客室の様だ。

とりあえず息を殺して気配が通り過ぎるのを待った。

徐々に足音が近づいてくる。

それと同時に話し声も――――――――――――――――――――――――

「この部屋をお使いください。勇者様とそのお仲間様。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なに？

「ありがとうございます。」

ちょっと待て。この展開は――――――――――――――――――――――――

ドアが開いた。

中に入ってきたのは東間たち御一行。

「なかなかの部屋ですね。」

「お気に召しましたか。」

「はいっ。」

「ではご夕飯の時まで、ごゆっくり・・・・・・」

ドアが閉まった。

「東間ぁーーーーーーーーーーーー！」

東間にネコミミの少女が抱きついた。

アイリスと同じ種族か・・・・・・・・・

「うわっ、危ないだろ。リャナ。」

「東間が受け止めてくれるから平気にゃ～。」

「まったくもう・・・・・・・・」

「はいはい～。離れましょうねぇ～。リャナさん。」

メアリがニコニコと笑いながら（かなり、怒っているな・・・）リャナと呼ばれた少女を東間から引き剥がした。

「うなぁ～っ、東間ぁ～！」

苦笑いしながら東間はベッドに腰を下ろした。

「ふう・・・・・・・・・・」

「どうしたのよ。東間？」

「いや。明日、国王様に会うと考えたら緊張しちゃって・・・・・・・・」

「東間様なら大丈夫ですよ。」

「ありがとうメアリ。」

はうっ。と顔を赤くするメアリ。

「あんたたちも飽きないわね・・・・・・・・・」

呆れた顔でそれを見る理香。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人（確か王国騎士のラフィだったか）が何か思案しているようだった。

「ラフィさん？」

「珍しいわね。あんたが東間の取り合いに参加しないなんて。」

すでに巫女姫、ロリネコミミ、年上騎士を落としていたか・・・・・・

恐ろしい奴。

「いえ。街中で聞いた噂について考えていたのですが・・・・・・・・」

「確か魔王軍が東間様と理香様を狙い刺客を送り込んできた。という話ですね。」

「はい。ただの噂ならよいのですが・・・・・・・・」

「大丈夫にゃっ！　私が東間を守るにゃっ！」

やけに自信満々だな。

「いずれにせよ、警戒しておいた方が良いでしょう。」

「そうだね。」

他の奴らも同様の意見みたいだ。

にしても早く出てってくれないかなー。

ずっとこの体勢は辛い・・・・・・・・・

「なにしてるんですかっ、じっとしていなさいっ！」

メイドさんの小さな叱責が飛んできた。

身じろぎ一つしないのは流石と言わざる負えない。

俺たちは今、天井に張り付いている。

どうやっているかというと、ナイフを天井に突き刺しているだけだ。

ナイフはあの瞬間、メイドさんに二本ほど投げつけられた。

・・・・・・・・・・危うく命を落とすところだった。

足の方は靴の中の仕込みナイフを使った。

どうして普通の靴にそんな機能があるのかって？

・・・・・・・・・・・・知らぬ間にメイドさんに仕込まれてた・・・・・・・

メイドさんの方も俺と似たような格好だ。

俺たちにできることは、気配を完全に殺し天井を見られない様に祈るだけだ。

しかしアイリスたちももう少し足止めできなかったのだろうか。

いやっ。単に俺が時間をかけたせいか。

いずれにしろ――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・どうしよう？

「・・・・・・・・・・・・むっ。」

ゲルグは目を開いた。

周囲はすっかり暗くなっている。

アイリスとフレスはすっかり寝入っている。

「まだまだ子供だな・・・・・・・・」

ゲルグは念のため持ってきていた毛布を二人に掛ける。

「・・・・・勇者たちはまだ来ていないようだな・・・・・・・・」

実はもう中に入っているなどとは夢にも思っていない、ブラウネオスのマスターだった――――――――

第二十五話　やばい、隠れないと！（後書き）

アイリスたち、役に立ちませんでした。

第二十六話　早く、出て行けよ！（前書き）

東間たちは、あくまでもおまけです。
今のところ、出番は少なめです。

第二十六話　早く、出て行けよ！

「失礼します。お食事の用意が出来ましたのでご案内させていただきます。」

「待ってたにゃーっ！」

リャナとかいうネコミミ少女が真っ先に反応した。

東間たちも立ち上がり部屋から出て行った。

それを見送ってから、しばらく待って俺たちは降りた。

ああ。こんなに時間の流れを遅く感じたのはいつ以来だろうか。

俺が感激していると懐から何かが落ちた。

木彫りの熊（穴あき）だ。

それにしてもあんなに完璧な芸術だったのに俺のせいで穴が開くとは・・・・・・

「なにをしているんですか。」

おっと。

俺は在りし日の木彫りの熊の姿を思い浮かべながら木彫りの熊（穴あき）を拾った。

「あれっ？」

俺はその感触に違和感を覚えた。

「なあメイドさん。」

「なんですか。」

「木彫りの熊って再生するのか。」

「そんなわけないでしょう。気でも狂いましたか。」

辛辣ですねぇ～。

俺は木彫りの熊を確認した。

完璧に直っている。

俺が先ほど思い浮かべた在りし日の姿に。

俺は木彫りの熊を懐に入れて、部屋の外に誰もいないことを確認してからメイドさんと共に廊下に出た。

「急ぎましょう。」

窓の外には月が昇っているのが見える。

「っていうか、夜なのになんでこんなに明るいんだ？」

「光魔法の応用です。まあくわしいことは私も知りませんが。」

「調べないのか。」

「興味ありません。」

嘘っぽいなー。

でも追及してもしゃべらないだろうし、これ以上時間をかけるわけにはいかない。

人に出会わぬよう隠れながら先に進んでいく。

「まるでどこかの蛇みたいだな・・・・・・・・・」

あの人は単独でしか行動しないが。

「蛇ですか？」

「俺の世界にそういう人がいるんだよ。」

「はあ、・・・・・・・・蛇人ですか？」

間違っちゃいないけどその呼び方はなあ～。

「――――――――――――――――――止まってください。」

急にメイドさんが立ち止まった。

「どうやらここの様です。」

「隠し部屋か。」

「はい。」

メイドさんが壁に手をかける。

がこっ。という音と共に壁が横に動いた。

・・・・・・・・・・・・獣人の国では隠し扉はスライド式じゃないといけないのか・・・・・・

「気をつけてください。」

「了解。」

俺はいつでも剣を抜けるようにして隠し部屋に入っていく。

とはいえ東間たちに気づかれたら面倒だしな。

さてと。鬼が出るか、蛇が出るか。

一筋縄でいくようならあの馬鹿どもに任せるか。

「んっ？」

「どうしたんですか理香殿。」

「いえ・・・・今、ちょっと・・・・・・・」

「理香もか？」

「ってことは東間も。」

「ああ、なんか誰かが僕たちに厄介事を押しつけようとしているような気が・・・・・」

「東間様たちにそのようなことをしようとする不届き者なんていませんよ。」

メアリが断言するように言った。

「案外、仁殿がお二人のことを話していたりするのでは？」

仁、か・・・・・・・・・

「東間はその仁って奴に会いたいのかにゃ～。」

リャナが無邪気に訊いてきた。

「ああ、会えるのなら会いたいかな。」

「理香はどうなのだぁ～。」

「・・・・・・・・・・・・ふんっ。別に会いたくなんてないけどね、一発引っぱたいてやらなきゃ気が済まないだけよっ！」

「どっちなのだぁ～？」

困ったように首を傾げるリャナ。
僕らは笑いながら食事を楽しんだ。

「・・・

第二十六話　早く、出て行けよ！（後書き）

今回、一つだけ、言っておきたいことがあります。
木彫りの熊は、再生したわけじゃありません。

第二十七話　厄介なのが、出てきたもんだ！（前書き）

新キャラ登場します。

第二十七話　厄介なのが、出てきたもんだ！

「いつまで待たせる気だっ！！」

隠し部屋の奥の方から怒鳴り声が聞こえてくる。

「もうしばらくお待ちください。」

「ええい、勇者がこの城に滞在している間になんとしても殺さなければならんのだぞっ！！」

「ええ、わかっております。そして勇者暗殺の罪を現国王になすりつけ、その座から引きずり落とすのでしょう。」

「わかっておるのなら、さっさと勇者を殺さぬかっ！！」

「ですからもうじき、刺客が到着しますのでそれまでお待ちください。」

「ふんっ。急ぐのだぞっ！！」

足音がこちらに向かってくる。

俺とメイドさんは急いで隠れた。

「・・・・・・・まったく、使えん奴らばかりだ・・・・・・・」

ぶつぶつと言いながら部屋から出ていく。

うーん。

隠し部屋の入口が開いていることを怪しまないとは・・・・・・・

「無能でしょう、あの男は。」

もう一人、男が姿を現した。

「心配いりませんよ。事を構えるつもりはありませんから。」

俺とメイドさんは男と対峙した。

「初めましてお二方。私は魔王軍、六星魔将が一人魔聖賢将（ミズドルティン）のニブルと申します。」

丁寧な物腰だ。

少なくとも今のところは。

「それでいったい何の用でしょうか、お嬢さん方。迷子には見えませんが。」

「俺は男だ。」

「そんなことどうでもいいことでしょう。」

いや全然良くないから。

「そうですか。ですが私にとってはどうでもいいことです。」

これから殺すこと相手のことはどうでもいいってわけか。

「私は男でも女でも愛することができますから。」

そっち系っ！？！？

俺は一歩後ずさりした

「なるほど。ただの変態でしたか。」

「失礼な。性差廃絶主義者と言ってください。」

「で、変態。」

「違います。」

「変態、お尋ねしたいことがあるのですが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでしょうか。」

あっ、あきらめた。

「刺客の方の正体とどこにいるのかです。」

「それを教えるとでも。」

「教えてくれたのなら変態と呼ぶのをやめてあげます。」

「いいでしょう。」

・・・・・・・・・・・・そんなに嫌なのか。

「刺客の正体はルナールと言う魔王軍随一の暗殺者です。今はこの城から東にある小屋で待機しています。」

「ありがとうございます。変態様。」

「・・・・・・・・・・・・・・・呼ばないと言ったのは嘘ですか。」

「いいえ、変態様。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちょっとだけ同情する。

「ではこちらからも一つ、あなた方の名を聞かせてもらえませんか？」

「ではかわりにルナールの戦い方を教えてもらいましょうか。」

「お断りします。」

「ではこちらも教える必要はありません。」

二人の間に火花が散った。

ような気がする。

「俺は影月仁。こっちはメイドさんだ。」

このままだと先に進まないので教えてやった。

メイドさんが睨んできたが無視する。

「仁にメイド・サン。ですか・・・・・・・」

ニブルは爽やかに笑った。

「良い名前です。覚えておきましょう。」

ニブルが歩き出す。

咄嗟に身がまえたが、そのまま部屋から出て行く。

と、去り際に俺たちを見た。

「期待していますよ。」

その言葉を残して――――――――――――

ニブルは去って行った。

「・・・・・・・・・・・・・油断できませんね。」

「そうだな。」

あいつ、強いな。

それに自分で操縦するために、わざわざお偉いさんの中でも無能な奴の下にいる。

頭の切れる強者か。

厄介なのに目をつけられたもんだ。

「これからどうしますか。」

「・・・・・・・・とりあえずゲルグたちと合流しよう。話はそれからだ。」

たぶんあいつはあの無能が失敗するのがわかっている。

いや、あいつがそう仕向けているみたいだ。

その上で俺たちに情報を渡した。

俺たちに暗殺者と戦えってことだろうが。

いったいどういうつもりなんだ――――――――――――――――――

思考しつつ、俺たちは城から脱出するために来た道を引き返した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・遅い。」

相変わらずゲルグは腕を組みながら待っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・退屈だ。」

ゲルグは仁たちが来て話を聞くまで、勇者たちはまだ来ていないと思っていたのだった――――――――

第二十七話　厄介なのが、出てきたもんだ！（後書き）

ちなみに、魔族の見た目は人間とほぼ同じです。
違うのは出し入れ自由な黒い羽根があることと、魔法を使うときに瞳が赤くなることです。
そのため、各国でスパイ対策はちゃんと用意されています。
後、長時間は飛べません。

第二十八話　結局、俺が戦うのか！（前書き）

再び、二手に分かれます。
フレスが情けない発言をします。

第二十八話　結局、俺が戦うのか！

「本当にすまないっ！！」

ゲルグたちに城であったことを話したら、ものすごい勢いで謝罪された。

「ごめんなさい。マスター、メイドさん・・・・・・・・」

「ごめんなさい・・・・・・・・」

フレスとアイリスも落ち込みながら謝った。

まさか寝ていて東間たちを見過ごしたとは・・・・・・・・・・・・

俺は頭をかいた。

かゆかったからだ。

「誰にでも失敗はあります。」

メイドさんがフォローを入れる。

「大切なのは次に活かすことです。」

「「メイドさん・・・・・・・・・」」

「メイド・サン殿・・・・・・・・」

三人ともメイドさんの言葉に感激している。

たぶん俺が失敗したら、肉体的にも精神的にも責められるんだろうな～。

「で、これからどうする。」

「そうですね・・・・・・・・、刺客の大体の居場所は分かっていますし、操られている無能と操っている変態様の存在も確認しました。」

「なら二手に分かれて行動すべきだ。」

おーい、おっさーん。

二手に分かれた結果、寝てたんだろ。

「そうですね・・・・・・・・、では今回は仁とフレス様が刺客の方へ、私たちは城に潜入して無能と変態様の見張りをしていましょう。」

「はーい。」

フレスが俺のそばに寄ってきた。

そういやメイドさん、俺のことだけ呼び捨てにしているな。

なんでだろう？

「他になにかありますか？」

挙手する。

「なんでしょう。」

「なあメイドさん。今から行くといっても相手は暗殺者だぞ。夜に相手をするのは危険だと思うんだが。」

「信じていますから。」

無表情かつ棒読みでそんなこと言われてもな～。

「他には？」

再び挙手する。

「今度は、何ですか。」

「働きた――――――――――――――――――――――――――――――」

「無いようですね。では参りましょう。」

「働きたく――――――――――――――――――――――――――――――」

「仁さんっ、頑張ってくださいっ！」

「働きたくな――――――――――――――――――――――――――――――」

「マスター・・・・・・・・、諦めましょうよ・・・・・・・・」

せめてっ！

せめて最後まで言わせてくれっ！！

「・・・・・・・・仁殿は馬鹿なのか・・・・・・・」

寝てただけのロリコンおっさんに非道いこと言われたっ！

「行きましょう。マスター。」

フレスが俺の手を引っ張っていく。

俺の姿はまるで売られていく仔牛の様に・・・・・・・・

「そんなわけないだろ。」

酪農にチャレンジしようとしたことはあったが。

結局、予算が無くてやめた。

フレスが立ち止まり呆れた表情で俺を見る。

「マスター・・・・・・・・・、僕、行く前から疲れちゃいそうです。」

「それはいけない。急いで宿に行って休まないと。」

俺は慈愛の心でフレスを宿屋へと――――――――――――――――――

「駄目ですっ、マスターっ、行きますよっ！」

フレスは先ほど以上に強い力で俺を引っ張っていく。

「なあフレス。疲れているんだろ？　俺も疲れているから宿へ行こう。」

「駄目ですっ。」

「フレス。マスターには絶対服従じゃないのか。」

「メイドさんが怖いんですっ！！」

・・・・・・・・力強く断言してるよ・・・・・・

・・・・・・・・・・悲しい奴。

俺はフレスに憐憫(れんびん)の情を抱きながら引っ張られていくのだった・・・

・・

「あのぅ、メイドさん・・・・・・・」

「なんでしょうアイリス様。」

「仁さんたち本当に大丈夫でしょうか・・・・・・・・・」

「心配いらないでしょう。」

メイドさんは小さく、見落としかねないほど本当に小さく笑って言った。

「信じていますから。」

第二十八話　結局、俺が戦うのか！（後書き）

次回は暗殺者との戦闘を行う予定です。
いよいよフレスで戦う時が来ました。
でも、その分木彫りの熊の出番が減ってしまいます。
悩みどころです・・・・・

第二十九話　随分な、ハンデだな！（前書き）

予定通り、暗殺者との戦いです。

第二十九話　随分な、ハンデだな！

「この辺りか・・・・・・・・・」

周囲を見渡すと、中に明かりの灯った一軒の小さな小屋があった。

「あれか。」

俺は躊躇(ちゅうちょ)なく小屋に近づく。

「マスターっ、そんなに音を立てたら気づかれちゃいますよっ！」

フレスが慌てている。

「平気だろ。」

「なんでそんなこと言えるんですかっ！」

「なんだフレス。気づいてないのか？」

「・・・・・・・・・なににですか？」

仕方ないので説明してやることにした。

「いいかフレス。相手は勇者を殺すために魔王軍が用意した暗殺者だ。」

「それが？」

「恐らく魔王軍の中でもかなりの使い手だろう。特に闇の中では相手の方がかなり有利だ。」

「ですから慎重に行動した方がいいでしょうっ！」

やれやれ。ここまで言ってもわからないのか。

「気配を消すのにも気配を察するのにも非常に長けた相手だ。要するに――――――――――――――」

瞬間――――――――――

闇の中から何かが飛び出してくる。

俺は剣を抜いてそれをはじいた。

地面に突き刺さった黒塗りのナイフ。

「とっくに気づかれているんだよ。」

俺はフレスの襟首を掴んでこちらへ引っ張る。

「わわっ！？」

一瞬後、フレスが先ほどまでいた場所に手に大きなナイフを持った黒装束が降り立った。

恐らく、俺の注意が黒塗りナイフに向いている間にフレスを仕留めようとしたんだろうが。

相手が悪かったな。

黒装束は小さく舌打ちすると暗闇の中へと消えた。

・・・・地の利は向こうにありそうだ。

「フレス、変身しろ。」

短く告げる。

「ふえっ？」

「早くしろ。」

フレスを守りながらこいつと戦うのは骨が折れる。

「は、はいっ、ではマスターっ、血を・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・いちいち必要なのか？」

「はいっ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ。

俺は自分の親指を噛んだ。

「さっさとしろ。」

「失礼します。マスター・・・・・・・」

指を口に含む。

刹那、闇の中から黒塗りナイフが飛び出す。

「ちっ！」

俺はフレスを抱えて横に跳んだ。

フレスは俺の指を口に含んだままだ。

「いつまでやっているっ！」

俺はフレスの頭を掴み引き剥がした。

「痛いですよっ！　マスターっ！」

「やかましいっ！　早く変身しろっ！」

「ううーーーーーーーっ、・・・・・・・・・仕方ないですね・・・武装変身っ！」

フレスは唸(うな)りながらも状況はわかっていたらしく、素直に変身した。

両手両足に銀色の装甲を纏う。

「契約魔獣だとっ！？」

黒装束（確かルナールと言ったか）が驚愕の声を上げる。

この声・・・・・・・・・女か。

「女の暗殺者か。色香で勇者を惑わして殺そうとしたのか？　魔王軍随一ってのは色香で手に入れた称号だったのか。」

俺の言葉でルナールから戸惑いが消え、かわりに殺気が膨れ上がった。

思った通りだ。

「・・・・・・・・・・・・貴様は殺す。」

「来いよ。遊んでやる。」

俺の背後に音もなくルナールが現れる。

そのまま背後から俺の心臓へとナイフを突き立てる。

「甘いっ！」

俺は身を屈(かが)めルナールの足を払った。

だがルナールは大きく跳びながら二本の黒塗りのナイフを投げつける。

俺は左手でそれらをはじいた。

ルナールは再び闇の中へと身を潜(ひそ)めた。

まったく。本来なら東間たちがこいつの相手をするべきだろう。

こっちは銀色の装甲。向こうは黒装束。

こっちからは相手は見えず、向こうからはこっちが丸見え。か・・・・・

・・・・・・・・・・・仕方ない。

フレスには口止めをすればいいし。

俺の口元が歪んだ。

「――――――――――――――――――――っ！？」

ルナールが息を飲むのがわかった。

まあ安心しろ。

たぶん、殺さないから。

なんだあの女は・・・・・・・・・・・・・・・

私は息を飲んだ。

情報には無かったが、恐らく勇者の仲間だろうと思い、一人を殺し

てもう一人から情報を聞き出そうと奇襲した。

だが女はあっさりと闇に紛れた黒塗りナイフをはじいた。

それだけではなく、音を立てずに襲ったのにこちらを見ないまま連れの子供を守った。

しかもその子供は契約魔獣。

そして、いま。

口元に凶悪な笑みを浮かべている。

恐ろしく鋭い殺気と共に。

・・・・・・・・・今更ながら私は気付いた。

戦ってはいけない相手と、戦っているのだということに――――――――――――――――――――――――

第二十九話　随分な、ハンデだな！（後書き）

ルナールさん、大ピンチです。
それと、木彫りの熊、出番がありません・・・・・・

第三十話　敗者に、吠える権利はねえ！（前書き）

木彫りの熊、活躍しませんでした・・・・・・

第三十話　敗者に、吠える権利はねえ！

大した女だ。

素直に俺はそう思った。

黒装束に頼っているとはいえ、闇の中に溶け込む技量。

メイドさんには及ばないが気配を消す技術も高い。

・・・・・・・あの人、ほんとに何者なんだろうか・・・・・・・

まあそれは今考えるべきことではないな。

ともあれ、先ほどの動きをみる限り速さも申し分ない。

先ほどの投げナイフの威力から考えて、力も暗殺者としては十分すぎるだろう。

一流。

いや、超一流の暗殺者といっていいだろう。

魔王軍随一というのも納得のできる話だ。

俺は笑みを深めた。

だが足りない。

俺と戦うには。

この程度の相手。

子供（ガキ）のころから相手をしている――――――――――――

死角から黒塗りのナイフが一本。

別の死角から二本。

俺がナイフに意識を割（さ）いた直後、

正面にルナールが現れた。

姿勢を低くしながらナイフを突き立ててくる。

鈍い音が響き渡った。

「――――――――――――げはっ！？」

ルナールは地面を転がった。

おおっ。咄嗟に後ろに跳んで威力を殺したか。

良い反応速度だ。

死角から来たナイフは全部叩き落とした。

「――――――――――――っ！」

ルナールは顔の覆面を取り俺に投げつける。

目くらましか。

黒い布が地面に落ちるころには、ルナールは俺からかなり距離を取っていた。

「闇よっ！　我が手に集いっ、敵を貫く破滅の牙となれっ！」

ルナールの手に夜の闇よりも暗い漆黒が集まっていく。

「・・・・・・・・・ほお。」

魔法か。

このタイミングで使ってくるとなると切り札ってことか。

『マスターっ！』

フレスが心配そうに声を上げたが――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無言で呆れていた。

ルナールの手に黒い槍のような塊ができた。

狙いを定めて振りかぶる。

・・・・・・・・・馬鹿だろ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ・・・・・・」

ルナールが呆けたような声を出した。

『・・・・・・・・・・・・・えっ？』

フレスも理解できていないようだ。

そんなに驚くようなことか？

単純に腹に一発入れただけなんだが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・」

びちゃびちゃと口から大量の血液を吐きだす。

内臓は潰していないが、砕いた肋骨（ろっこつ）が刺さったのかもな。

「・・・・・・・・・・・・・ば・・・・・・か・・・・・・な・・・・・・」

ふらふらと後ろに下がる。そして――――――――――――――――――――――――

「はや、すぎる――――――――――――――――――――――――」

そのまま仰向けに倒れた。

「お前は・・・・・・・・・いったい・・・・・・・何者なんだ・・・・・・・・」

意識はあるみたいだ。

「ただの一般人だ。」

「・・・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・・・」

俺はフレスを元に戻した。

「マスターっ――――――――――――――――――」

「フレス、命令だ。このことは誰にも言わずお前も何も訊くな。」

「・・・・・・・・・・・・わかりました。」

俺はルナールを見下ろした。

「まあ、しばらくすれば動けるようになるだろう。」

俺はその場から立ち去る。

「・・・・・・・・・・・・待て・・・・」

ルナールが身を起こそうとする。

「やめとけ。致命傷ではないがそれなりに重傷だ。動かない方がいい。」

「・・・・・・・・・・・・私を見逃すというのか。」

「お前を殺したって俺に得が無いしな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふざ、けるな・・・・・・・・・殺せっ・・・・・・・・！」

その声には確かな怒りを感じた。

「・・・・・・・・・私は・・・・・・暗殺者で・・・・・・・・・ある前に・・・・・・・戦士だ・・・・・・ここまで・・・・・・・・圧倒的な・・・・差を・・・・・・・・見せつけられて・・・・・・・敗北・・・・したとあっては・・・・・・・死を・・・・・・・受け入れるしか・・・・・・ない・・・・・・っ！」

再び血を吐く。

無理をするからだ。

「殺せっ！　私は生き恥をさらす気はないっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ。

俺はルナールに近づいた。

「・・・・・・・・・そうだっ・・・・・・・それでいい・・・・・・・」

ルナールは目を閉じる。

俺は足を振り上げルナールの腹に落とした。

「がぇっ！」

ルナールが悲鳴を上げた。

「ふざけんなよ。なんで俺がお前の命令を聞かなきゃならねえんだ。」

そのまま体重を移す。

声にならない悲鳴を上げ続けるルナールに、俺は言葉を続けた。

「いいか。吠えていいのは勝者だけだ。敗者には何も言う権利は無い。」

俺は間近でルナールの目を見る。

「敗者は敗者らしく黙って勝者の命令に従え。それすらできないときは、この上なく惨めな死をくれてやる。」

吐き捨てるように言うと、なぜかルナールは顔を赤くした。

酸欠か？

「行くぞ。フレス。」

「あっ、はいっ、マスターっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・待って！」

ルナールが声を張り上げた。

「・・・・・・・・名前を、聞かせて・・・・・・・・・」

「仁だ。影月仁。」

教えてやらん理由もなかったので答えてやった。

ルナールはそれ以上、何も言わなかった。

俺たちはメイドさんたちと合流するために歩き出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は夜空を見上げていた。

「・・・・・・・・・・・・・かげつき、じん・・・・・・・・」

男の、名前・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・男、だったのか・・・・・・・・・・・・・・

でも・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・素敵な、人・・・・・・・・」

私の心にはそんな想いしかなかった。

第三十話　敗者に、吠える権利はねえ！（後書き）

ルナール、結構ひどい目にあったのにフラグが立っちゃいました。
理由はまあ、そういう人としか言いようがありません・・・・・

第三十話外伝　一方、城内では。（前書き）

外伝その二です。
仁はこの件に関してこれ以上関わる気はないため、出番がありません。
理香視点で頑張ってみます。

第三十話外伝　一方、城内では。

「こちらです。急いでください。」

私たちはメイドさんたちの案内の元、この国の大臣を追いかけている。

それにしても驚いた。

今朝、私たちが国王に謁見しているとメイドさんが乱入してきた。

衛兵に捕まりそうになったが、ブラウネオスのギルドマスターを名乗る獣人が現れそれを制した。

メイドさん自身はそのことを気にも留めずに、名指しで一人の大臣を指名し勇者暗殺計画について語りだした。

しかもそれ以外の不正の証拠や魔王軍とのつながりを証明して見せた。

大臣はその場から逃亡し、私たちが展開についていけずにぼーっと呆けていると、メイドさんが駆け出した。

「ついてきてください。」

メイドさんの一言で私たちは我に返った。

そして、今。

私たちはメイドさんの後ろを走っている。

正直、どうしてメイドさんがここにいるのかとか仁はどこにいるのかとかいつの間にあんなことを調べたのかとか・・・・・・・・

気になることはたくさんある。

これが終わったら、必ず訊きだしてみせるわ。

待ってなさい。仁。

別に会いたくなんてないけど、必ず一発引っぱたいてやるわ。

べっ、別に私たちを置いて行ったことやメイドさんと二人っきりで旅していたことを怒っているわけじゃないからねっ！

メイドさんが立ち止まった。

「・・・・・・・・・・・・ご武運を・・・・・・・」

そのまま後ろに下がる。

・・・・・・・・・・なるほどね・・・・・・・

・・・・・みんなも気づいたようだわ・・・・・・・・・・・・

この部屋から溢れ出る魔力の量・・・・・・・・

いままで戦ってきた全ての敵を遥かに凌ぐ強大な魔力――――――――

――――――――

「ひ、ひいいいいいっ！」

逃げた大臣が部屋から出てきた。

「たっ、助けてくれぇ～っ！」

転がりながら（比喩ではなく）こちらへ逃げてくる大臣。

・・・・・・・意外と余裕あるみたいね・・・・・・・・

「おやおや。やはり無能は逃げる姿も無様ですね。」

部屋の中からゆっくりと一人の男が姿を現した。

見た目は穏やかな好青年みたいだけど・・・・・・・・・・

ただものじゃないみたいね。

「初めまして。勇者御一行様方。私はニブル。以後お見知り置きを・・・・・・・」

ラフィさんが顔色を変える。

「皆さんっ！　気をつけてくださいっ！」

声を荒げながら剣を抜いた。

「知っているんですか。ラフィさん。」

「魔聖賢将（ミズドルティン）のニブル・・・・・・。魔王軍六星魔将の一人ですっ・・・・っ！」

「六星魔将・・・・・・・・・っ！？」

メアリが蒼白になっている。

六星魔将って、確か魔王軍で魔王に次ぐ力を持つって・・・・・・・・

「うなぁーーーーーーーーーっ！！」

私たちが武器を構えると、突然リャナが跳びかかって行った。

「リャナっ！」

リャナは爪を振り下ろす。

しかし――――――――――――――――

「勇ましいお嬢さんですね。」

爽やかに笑いながらリャナの攻撃を受け止めている。

いえ、良く見ると手の平に障壁の様なものが見えるわ・・・・・・

リャナはそのままはじかれた。

「リャナっ！」

東間がリャナを受け止める。

「ですが、私にはあなた方と戦う意思はありません。」

ニブルの体から黒い霧の様なものが噴き出した。

「では、またお会いしましょう。」

霧が晴れるとそこには誰もいなかった。

あの強大な魔力も感じられない。

完全に去ったみたいね・・・・・・・

「見逃された。ってわけね・・・・・・・」

後味の悪い終わり方に私たちは悔しさを隠せなかった。

「・・・・・・・・強くなろう。」

不意に東間がつぶやいた。

「・・・・・・・・・そうね。」

私も頷(うなづ)く。

「大丈夫です。私たちならきっと強くなれますっ！」

「・・・・・・・そうですね。」

「そうなのだぁ～っ！」

メアリの言葉にラフィさんとリャナも同意する。

六星魔将だかなんだかしらないけど今に見てなさいっ！

私たちは必ず強くなってみせるわ――――――――――――

「・・・・・・・・・・で、この無能はどうしますか。」

メイドさんが縄で縛った大臣を踏み付けた。

・・・・・・・・・・あっ。

すっかり忘れてたわ。

でもメイドさん・・・・・・・

メイドなのに人を踏み付けるのはどうかと思うんだけど・・・・・・

第三十話外伝　一方、城内では。（後書き）

理香視点、難しいです。
上手く書けませんでした・・・・・
ちなみにニブルがすぐに帰ったのは条約を守るためです。

第三十一話　寝る、止めても無駄だ！（前書き）

題名の通りです。

第三十一話　寝る、止めても無駄だ！

「思うに、俺は働き過ぎている気がするんだ。」

事件が終わった後の翌日。

俺は宿屋でそんなことを口にした。

この部屋には今、メイドさんとフレス、それにアイリスがいる。

ゲルグは今回の件について詳しい話と、東間たちの相手をしてもらうため（メイドさんは大臣を東間たちに引き渡した後、煙り玉を使って逃亡したそうだ。）城に残っている。

その場にいる俺以外の全員が何を馬鹿なことを言っているんだ。といった視線を向けてきた。

「何を馬鹿なことを言っているんですか。」

訂正。

一人は口に出していた。

「俺は本来ただの一般人だったはずだ。なのに最近ではいろんな奴らと戦ってばかりいる。」

俺はベッドの上に横になって布団をかぶった。

「だから今日は休暇だ。一般人らしくごろごろしていたいんだっ！」

「・・・・・・・・・・・一般人は四六時中ごろごろしているわけではありませんよ。」

・・・・・・・・・・・・・そうなのか？

「まあいいでしょう。今日は休暇にしましょうか。」

おおっ。メイドさんが妙に優しい・・・・・・・っ！

「あまり使いすぎて壊れてしまっては元も子もありませんからね。」

・・・・・・・・・・・・・前言撤回。

「では、夕方にこの部屋に集合ということでよろしいですね。」

「マスターが寝るなら僕も一緒に――――――――――――――――」

「フレス様。今日はアイリス様に街を案内させてもらってはどうですか？」

「はいっ、わかりましたっ！」

・・・・・・・・・・・・忠犬だ・・・・・

「ではアイリス様。フレス様をよろしくお願いします。」

「あっ。はいっ、わかりましたっ！」

フレスが駆け出すように部屋から出て行った。

「あははっ、早く行こうよアイリスっ！」

「待ってよっ、フレスーっ！」

次いでアイリスも部屋から飛び出した。

俺とメイドさんだけが部屋に取り残された。

「・・・・・・・・・・・どうしたメイドさん。どこかに行かないのか？」

「その前に一つだけ訊きたいことがあります。」

いつになく真剣な表情のメイドさん。

「・・・・・・・・・・・なんだ？」

「あなたはどうして一般人にこだわるのですか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・

俺は即答した。

「・・・・・・・・・・そうですか。」

メイドさんはそれだけ言うと部屋から出て行った。

俺は布団をかぶりなおして目を閉じた。

・・・・・・・・・・・・強迫観念、か・・・・・・・・

俺の脳裏にはメイドさんの言葉が張り付いていた。

だが寝付きの良い俺は数刻もしないうちに眠りに落ちていた。

眠りに落ちる直前。

夢見が悪くなることを覚悟しながら――――――――――――――――

「ご主人様。」

「なんだ?」

どこかの部屋の誰かの会話。

「デニルガルスでの大臣の謀反が失敗に終わりました。」

「あっ、そう。」

男は興味無いと言わんばかりに適当に返事をした。

「それと解決した依頼の内、三件ほど未納金がありますが・・・・・」

「いつも通り、三日に一度ずつ警告の紙を送りつけろ。三回無視したら半殺しにしてどんな手段を使っても払わせろ。」

「かしこまりました。」

女は部屋から出て行った。

かわりに別の女が部屋の中に入ってくる。

「ご主人様。」

「今度は何だ。」

「疑問に思ったのですが・・・・・なぜ殺さないのですか？」

男は溜め息をついた。

「お前、新人か。」

「はい。」

「なら一度しか言わないから覚えておけ。」

男は振り向きながら言った。

「金のなる木を殺してどうする。」

「はぁ・・・・・・・・、それなら高額な依頼をする貴族などだけで十分なのでは?」

「馬鹿を言うな。俺たちは善良な一ギルドだぞ。」

男は笑いながら言った。

冷たい笑いだった。

「ギルドは人の役に立つために存在するんだ。暗殺をするのは俺たちに逆らった奴だけで充分だろう?」

「・・・・・・・・・・・・不躾な質問でした。申し訳ありません。」

「別に構わん。行け。」

女は部屋から出て行った。

男は一人、暗い部屋の中に残されていた。

誰もいなくなった部屋の中で。

男は笑みを浮かべていた――――――――――――――――――――

第三十一話　寝る、止めても無駄だ！（後書き）

今回はほとんど進みませんでした。
次回もたぶん進みません・・・・・・・

第三十二話　俺は、二度寝る！（前書き）

今回も休暇です。

第三十二話　俺は、二度寝る！

「一番大切なものは何？」

唐突に俺は母にそう問われた。

その時幼かった俺はなんて答えたのか。

父か母か、理香か東間か、あるいはそれ以外だったか。

今はもう覚えていない。

だが答えた俺を母が優しく頭を撫でながら諭すように言葉を紡いだのは覚えている。

その内容も。

「その考えは大切だわ。でもそれは一番であってはいけないの。」

では何が一番なのか。

問うた俺に答えたのは父だった。

「わからないのか、仁。」

そう返されしばらく考えてみたがわからなかった。

そう言うと父は俺を抱き上げながらこう言った。

「それはな、自分自身だ。」

父はいつも通り笑いながら言った。

「・・・・・・随分と懐かしいな、おい。」

俺は目を覚ました。

まだ日は昇っている。

早く起き過ぎた。

それもこれもメイドさんが変なことを訊いてくるからだ。

まあ、思っていたよりも夢見は悪くなかったが。

「・・・・・・やれやれ・・・・」

俺は再び横になった。

二度寝するために。

「・・・・・・・・・・・・・・」

だが一度眠りから目覚めてしまったせいか、なかなか寝付けない。

「・・・・・・羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹・・・・・」

メイドさんやアイリスたちの動向を気にしつつ、俺は羊を数えることにしたのだった――――――――――

魔王城のとある一室。

巨大な円卓に六つの椅子があった。

そのうちの一つが空席となっている。

「ヴェンリスはどうしたのだ？」

「あやつなら最北の氷山へと行きおったわ。」

「けっ。ただの戦闘狂じゃねえか。」

「まあまあ、それが彼女の魅力の一つなのですから。」

「どうでもいい。」

ここは六星の間。

六星魔将が集(つど)う場だ。

「それで勇者とやらはどうだったのだ。ニブルよ。」

「そうですね・・・・・、なかなか面白そうな方々だと思いましたよ。」

「ずりぃよなぁ。てめえだけ勇者の面を拝めるなんてよぉっ！」

「そう申されましても不可抗力でした。としか言いようがないのですが・・・・・」

いかにも不満そうな隣の将軍にニブルは困ったように笑った。

「いずれにせよ、あのルナールにあそこまでの傷を負わせたのだ。勇者たちの成長の早さは目を見張るものがあるのは事実だろう。」

実際にルナールを倒したのは彼でしょうがね・・・・・・・・・・・・

ニブルは内心で楽しそうに笑っていた。

「それともう一つ、姫様の件だ。」

リーダー格の将軍が苦々しく言葉を続ける。

周りの将軍もその言葉だけだ察したようだ。

「結局、魔王様が折れた。姫様は明日、最小限の護衛だけ引きつれて出発するそうだ。」

「まったく。姫様にも困ったものですわい。」

最も年老いた将軍が溜め息を吐いた。

「このご時世に何を考えてやがんだっ、あの小娘はっ！」

「まあまあ。いろいろなものに興味を示すのはとても大切なことで

すよ。」

「うるせぇっ！　俺はそんなことを言ってるんじゃねえっ！」

突然、一人の将軍が立ち上がった。

「腹が減った。帰る。」

それだけ言うと部屋から立ち去っていく。

いつものこととはいえ、その行動に将軍たちは皆呆れていた。

「・・・・・・・・・・まあ、今回はここまでにしよう。」

これ以上は意味が無いだろうと判断したリーダー格の将軍の一言で、将軍たちは部屋から出て行く。

「・・・・・・・・・・さて。これからいろいろと楽しみですね・・・・」

ニブルの言葉は誰にも聞こえないような小さな声だった。

「私の出番はこれだけですか。」

メイドさんが空を見上げてつぶやいていた。

第三十二話　俺は、二度寝る！（後書き）

ルナール。城にて療養中です。
今後どう動くかはわかりませんが。
次回も休暇です。
もうしばらく続くと思います。

第三十三話　寝てる、出番がねえ！（前書き）

休暇、その三です。

第三十三話　寝てる、出番がねえ！

「ねえねえアイリスっ！　これは何っ？」

「これっ？　これは猪とかを捕まえるための罠だよ。」

「へえ～。じゃああれはっ？」

「あれは鷹使いが使う鷹用の特別な手袋だよ。」

「へえーっ！　へえーっ！！　じゃああっちのは？」

「それは――――――――――、・・・・・・・・・ただの剣だよ。からかってるの？」

「あははーっ！」

目を輝かせて雑貨屋の中をはしゃぎまわるフレス。

アイリスはそれを微笑ましく思っていた。

私はギルドの中では一番の年下。

だからいままで同年代の友達や年上の知り合いはいるものの、年下の相手はあまりしたことがなかった。

一応、妹はいるがあの子は自由奔放で今はどこにいるのかもわからない。

アイリスは笑いながらフレスを見守っていた。

「アイリス～っ、こっちこっち～っ！」

「待ってよっ、フレス～っ！」

走り出すフレスをアイリスは追いかけた。

「わぷっ！？」

フレスが誰かにぶつかった。

「こらっ。ちゃんと前を見ないと危ないぞ。」

そこにいたのは――――――――――――――――――――――――――――

「ゲルグさんっ！」

アイリスの所属するギルドブラウネオスのギルドマスター、ゲルグだった。

「アイリス、それにフレス。観光か？」

「はいっ。ゲルグさんは？」

「さっきようやく解放されたところだ。」

ゲルグさんは肩を回した。

「お疲れ様ですっ。ゲルグさんっ！」

「労(ねぎら)いの言葉、ありがとうフレス。」

ゲルグはフレスの頭を撫でた。

「それでゲルグさん。勇者様たちは・・・・・・？」

「ああ。彼らは北の山に行ったよ。詳しい話は知らないが何かを取りに行ったらしい。」

ゲルグさんが何かを思い出したように苦笑した。

「それと理香殿から仁殿に伝言がある。」

「伝言？」

なんだろう？

「『すぐに戻ってくるから待ってなさいっ！』だそうだ。」

理香さんかぁ・・・・・・・・・

あの時、遠目からだったけどきれいだったなぁ・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・仁さんのこと好きなのかな・・・・・・・・・・

アイリスの心の中でモヤモヤとした良く分からない感情が湧き出してきた。

・・・・・・なんだろうこの気持ち・・・・・・・・

「わかりましたっ！　きちんとマスターに伝えますっ！」

私が黙っている間にフレスが元気良く返事をする。

「頼んだぞ。フレス。」

ゲルグさんがもう一度フレスの頭を撫でた。

その後、私を見て言った。

「アイリス。話がある。後でギルド本部へ来てくれ。」

「・・・・・・・・・・・はい・・・・・・」

私は力無く返事をした。

「・・・・・・・・・どうかしたのか？」

「・・・・・・・・・なんでもないです・・・・・・・」

さっきから胸のモヤモヤが取れない・・・・・・・・・

「？　？　？」

フレスはアイリスの様子を見て混乱していた。

ゲルグも心配そうにアイリスを見つめている。

・・・・・・さっきまで楽しかったのに・・・・・・・

・・・・・・・・私はいったいどうしたんだろう・・・・・・・

「理不尽です。このような理不尽が許されてよいのでしょうか。」

メイドさんが青空に向かって文句を言った。

第三十三話　寝てる、出番がねえ！（後書き）

休暇その三、終了です。

第三十四話　そろそろ、出発するぞ！（前書き）

休暇、その四です。
休暇は今回で終わりです。
休暇らしい休暇では無かったかもしれませんが・・・・・

第三十四話　そろそろ、出発するぞ！

「だそうです。マスターっ。」

夕刻。

羊を三億二千六百三万二千四十七匹まで数えたとき、フレスが戻ってきた。

途中でのどが渇いたので水を飲みに行ったり、トイレを済ませたりしたが、その間もちゃんと数えていたから間違いない。

不審な目で見られたが気がしたが、大丈夫だろう。

病んでいる人だと思われたかもしれないが。

「・・・・・・・・・・そうか。」

フレスから一通り話を聞いた俺は荷物を整理し始める。

アイリスはゲルグと一緒にギルドへ向かったそうだ。

「何をしているのですか、仁。」

「この国から出る準備。」

「え～っ！？」

明らかに不満そうな声を上げるフレス。

ところでメイドさん。いったいいつ戻ってきたんだ？

「異論は聞かない、馬鹿どもが戻ってくる前に出発するぞ。」

「やだやだ～っ！！　もっとこの国を探検したい～っ！！」

子供のように寝転がって、手足をばたつかせ始める。

「・・・・・・・・・どこかで見たような光景ですね・・・・・・・・」

メイドさんが思い出したようにつぶやいた。

「メイドさん、子供の相手をしたことがあるのか？」

「いえ、少し前のことです。」

俺たちがこの世界に召喚される前のことか？

「・・・・・・・・ペットは飼い主に似る、ですか・・・・・・・・・」

再び小声でつぶやく。

「何か言ったか？」

「はい、言いました。」

「言ったのか。」

なんか下手に追及すると精神的ダメージを負いそうだから、気にし

ないでおこう。

「・・・マスター・・・・・むなしいですから、せめてうるさいとかは言ってください・・・・・・」

フレスが起き上る。

「うるさい。」

「このタイミングでっ！？」

「うるさいですよ、フレス様。」

「う・・・・・・うわぁーんっ！」

泣き出してしまった。

「それで、この国を出るのに異論はありませんが、アイリス様はどうなさるつもりですか。」

「どういう意味だ。」

俺は荷物を整理しながら訊き返した。

「アイリス様は、私たちと一緒に行きたがっていると思います。」

「どうしてわかる。」

「メイドさんの勘です。」

「そうか。」

「あっ。そういえばさっき、アイリスの様子がなんだか変でしたよ。」

やはり嘘泣きだったか。

「どんなふうに変だったんだ。」

「暗かったです。」

・・・・・・・・・・それだけか？

「・・・・・・なるほど。そういうことですか。」

メイドさんが納得したような声を出した。

「罪なロリですね。」

呆れたように俺を見ながら溜め息をついた。

「・・・・・・・・・罪なロリって誰のことだ。」

「さあ？」

俺とフレスは首を傾げた。

「それで、アイリス様をどうなさるつもりですか。」

そこに戻るのか。

「どうするもなにも俺たちが決めることは無いだろ。」

荷物の整理を終えた俺はベッドに座った。

すると、いつも通りフレスが俺の膝を枕にして横になった。

「ギルドに留まるか、俺たちと一緒に行くか、それはアイリスが決めることだ。」

俺たちが口出すことは何もない。

「それもそうですね。」

メイドさんが同意してくる。

「メイドさん。明日の昼には出発するってアイリスに伝えておいてくれ。」

「わかりました。」

アイリスはどんな選択をするんだろうな・・・・・

ここに残るって言うなら少し寂しいかもな・・・・・・・・・

俺はフレスの頭を撫でながら、そんなことを考えていた。

「やはりロリコンなんですか。」

「違う。」

第三十四話　そろそろ、出発するぞ！（後書き）

休暇その四、終了です。
次回でこの国を出る予定です。

第三十五話　じゃあ、行くか！（前書き）

出発です。
獣人の国では、アイリスに変な言葉を仕込んだ人は出てきませんでした。
その人はもっと後に出てきます。

第三十五話　じゃあ、行くか！

「・・・・・・・そうか。」

朝。

私の言葉にゲルグさんは静かに頷(うなず)いた。

「アイリス・・・・・本当に行っちゃうの・・・・・・・？」

「寂しいよ、アイリス・・・・・・」

チーダーやグラン、それにみんなも悲しそうな顔をしている。

「・・・・・・・・アイリス。」

ゲルグさんが私の頭を撫でた。

「いつでも戻ってきたいいぞ。ここはお前の家なんだからな。」

私は泣いた。

嬉しくて、悲しくて。

泣き続けた。

「それじゃあ行くぞ。」

日がだいぶ傾(かたむ)いたころ、俺たちは街の入口にいた。

本当はもっと早く出発する予定だったのだが、メイドさんが買うものがあるとか、フレスがお腹すいたとか、俺が木彫りの熊の芸術性を町に広めていたとかでかなりの時間を食ってしまった。

「マスターっ、次はどこに行くんですか？」

「知らん。」

俺の答えにフレスは納得したように頷いた。

「流石マスターっ！　相変わらずの無計画の無鉄砲ですねっ！」

「そうだろうっ、そうだろうっ！」

笑いながら俺はフレスの頭を鷲掴みする。

そのまま手に力を込める。

いわゆるアイアンクローというものだ。

「痛いっ、痛いっ、痛いっ、痛いーーーーーーーーっ！！　頭が砕けるーーーーーーーー！！」

フレスの悲鳴を無視してメイドさんに問いかける。

「次の目的地って決まっているのか？」

「はい。次は竜人の国ルヒナへ向かいます。」

竜人の国、ねえ。

「あの馬鹿がたくさんいると考えればいいのか。」

「違います。」

そりゃそうだな。

そうじゃなかったら、国が破滅しているだろうし。

「ただ、ある意味ではあの馬鹿はマシな方とも見れます。」

「そうなのか？」

あの馬鹿がマシな方って竜人たち大丈夫なのか・・・・・・

「竜人は多種を見下している者が多いのです。彼らは自分たちが最良の種であると信じています。」

そういえば女王の話の中にもそんな内容が入っていた気がする。

「もっとも、昔に比べれば良識のある竜人も多くなったと聞きますが。」

ふぅむ。

面倒くさそうだな。

「よし、それじゃあ別の場所に行くとするか。」

「却下です。」

「うんっ。わかってたよ。」

俺に選択肢が無いことは。

「それより、いい加減に離してあげたらどうですか。」

メイドさんの当然のお言葉。

「何を？」

「今掴んでいるフレス様をです。」

視線を手の方に向けると、フレスが泡を出して気絶していた。

・・・・・・・・・・やばい、忘れてた・・・・・・・・・

一刻ほど過ぎるとフレスが復活した。

「それじゃあ行くぞ。」

「はいっ、マスターっ！」

今度は目的地などは訊いてこない。

俺としてもこれ以上遅れるのは勘弁してほしいからな。

しばらく歩いていると、複数の気配に気がついた。

・・・・・・・・・なんだ、なにをしているんだ・・・・・？

「マスターっ？　どうかしたんですか？」

フレスに返事を返さず、俺は横の森の中へ入っていく。

そこにいたのは――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・本当に、なにをしているんだこいつら・・・・・？」

獣人たちがいた。

それも寝転がったり、本を読んでいたり、談笑していたり、遊んでいたり――――――――――――――――

本当にさまざまなことを行っている。

紋章を見る限りブラウネオスのメンバーたちのようだが・・・・・・

「・・・・・・・・・・むっ。」

一人の男と目が合った。

ゲルグだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いに無言だった。

その空気に気づいたように周りの獣人たちも俺を見た後、無言になっていく。

すごく気まずい空気だ。

「どうしたんですか。マスターっ。」

後ろからフレスとメイドさんが顔を出した。

「・・・・・・・待ち切れなかったんですね・・・・・・」

メイドさんは獣人たちを見てつぶやいた。

「・・・・・ええっと・・・・・・・仁さん、メイドさん、フレス・・・・・」

更に奥からアイリスと二人の少女が姿を現した。

確かチーダーとグランだったか・・・・・・・

良く見ると手にカードの様なものが握られている。

・・・・・・・・・・・遊んでいたのか。

「・・・・・私も、一緒についていっていいですか・・・・・・・・」

「別にいいけど。」

「特に異論はありません。」

「またアイリスと旅ができるんだねっ。やったーっ！」

三者三様の反応にアイリスはほっとしたようだ。

「それじゃあみんな、行ってくるね・・・・・・・」

「・・・・・・・・アイリス、気をつけてね・・・・・・」

「・・・・・・・・頑張ってね、アイリス・・・・・・・・」

他のメンバーたちも口々にアイリスに声援を送った。

それでもこの気まずい空気は取れなかった。

「・・・・・・・・皆さん。アイリスをお願いします。」

「・・・・・・・・ああ、わかった。」

「お任せください。いざとなれば、二つの盾がありますから。」

俺だけじゃなくてフレスも盾にするつもりか。

「・・・・・・・・本当に、頼みますよ・・・・・・・・」

結局、最後まで気まずい空気の中、俺たちはブラウネオスに見送られて歩き出すのだした・・・・・

「・・・・・・・・・・アイリス。」

「・・・・・・・・なんですか、仁さん。」

「手に持っているカードは返しに行かなくていいのか?」

「・・・・・・・・・・・・あっ。」

アイリスが後ろを向いた。

「ちょっと待っていてくださいっ、すぐに戻って来ますからっ!」

そのまま来た道を逆走する。

・・・・・・・・・・大丈夫か、ブラウネオス・・・・・・・・

第三十五話　じゃあ、行くか！（後書き）

何とも微妙な別れになってしまいました・・・・・・・
獣人族は、基本的にじっとしているのが耐えられないのです。

第三十六話　嫌な、感じだ！（前書き）

仁たちは今回、おまけ程度の出番しかありません。

第三十六話　嫌な、感じだ！

アイリスが仲間たちと微妙な別れをしてから数日。
俺たちはのんびり歩いていた。
メイドさんの調べによると馬鹿どもはまだしばらくこの国にいるらしい。
だから急ぐ必要もない。
そのはずなんだが・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・ふう。」
嫌な予感がする。
出会いたくない奴と出会ってしまいそうな。
そんな予感が。

「ったく、なんだってんだ・・・・・・・・・」
六星魔将の一人がぶつぶつと文句を言いながら歩いている。
前回の会議が終わってからずっとこの調子だった。

魔王軍で一番の手足(てだ)れと呼ばれているルナールの敗北。
その責任を負うべきだというのに何のお咎(とが)めもないニブル。
それだけでも男を苛立たせるには十分だったが、付け加えて姫の遠征。
自分のわがままを通した姫もそれを許した魔王も男を苛立たせた。
「あのじゃじゃ馬女が・・・・・・・・・魔王様の娘だからって良い気になりやがって・・・・・・」
男は掃除をしているメイドを蹴りつけた。
「きゃあっ！」
メイドは転倒しそばにあったバケツの水が廊下を水浸しにした。
「おらっ、なにしてやがるっ！」
「もっ、申し訳ございませんっ！」
メイドは急いで廊下を拭き始める。
「てめえ・・・・・・・・・謝ってすむと思ってんのかぁ！」
男はメイドに向かって拳を振り上げた。
「何をしている。」

振り上げられた拳はそのまま固まってしまった。
男はそのままゆっくりと後ろを振り返った。
「もう一度訊こう。何をしている。」
銀色の髪と深紅の瞳。
身を包んでいる漆黒の鎧は彼女の動きを殺さないように作られている。
六星魔将筆頭、ヴェンリス。
彼女はメイドと男を見比べている。
「ハガード。」
静かな声にハガードと呼ばれた男が震えた。
同じ六星魔将でもその力の差は歴然だった。
「弱者、ましては私たちに尽くしている者に対して理不尽な振る舞いを行うとは何事だっ！」
「うっ、うるせえっ！　そんなの俺の勝手だろうがっ！」
男は背を向けて逃げるように走り去る。
ヴェンリスはその後姿を眺めた後、メイドに手を差し出した。

「すまない。怪我はないか。」

「はっ、はい・・・・・・・・・」

メイドは頬を赤く染めながら差し出された腕を掴んだ。

「今後、何か問題が起きたら私に言ってくれ。出来る限り力になろう。」

「あっ、ありがとうございますっ！」

ヴェンリスは小さく頷(うなず)くと自室へと向かった。

その途中、ある男が待っていた。

「おかえりなさい、ヴェンリス。」

「何の用だ。ニブル。」

ヴェンリスはニブルを睨みつけた。

「そう怖い顔しないでください、せっかくの美しいお顔をが台無しですよ。」

「なぜ動かなかった。」

ニブルの褒め言葉に全く反応せずヴェンリスは問いかけた。

「なんのことです?」

「とぼけるな。先ほどのハガードの行いに気付いていたはずだ。」

ニブルは苦笑した。

「私が行っても彼の怒りが余計に増しただけでしょう。それにあなたが止めてくれるとわかっていましたから。」

「だから何もしなかった、と？」

「ええ。もっとも――――――――――――――――――――――――」

ニブルの目が鋭くなった。

「彼があの拳を振り下ろしていたなら、私は彼を殺していたでしょうが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ニブルが再び笑顔になった。

「私は愛の伝道師。無粋な輩は味方であっても許せないもので・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・ふんっ。」

ヴェンリスが再び歩き始める。

「そうそう。実は面白い情報がありますよ。」

去ろうとするヴェンリスの背中に声をかける。

その話を聞いたヴェンリスは愛竜の元へと全力で駆け出した。
爽やかに笑いながら飛び立っていく飛竜を見つめるニブル。
「非道いわねぇ。ニブルちゃん。」
闇の中からバットが姿を現した。
「ケルちゃんについては、私から言っておこうと思ったのに。」
「良いではありませんか。どうせ出会うのなら早い方がいいでしょう。」
「・・・・・・・・・・・・運命、ねぇ。」
バットとニブルは見えなくなるまでデニルガルスへと向かう飛竜を眺め続けていた。
「理不尽な扱いは前々回で終わったはずではないのですか。」
「どうしたんですか。メイドさん。」
突如、天に向かって文句を言い始めるメイドさんをアイリスとフレ

スは心配そうに見ていた。

第三十六話　嫌な、感じだ！（後書き）

ヴェンリス、ついに登場しました。
次回でバトルする予定です。

第三十七話　やっぱり、来やがった！（前書き）

ヴェンリス戦です。
ヴェンリスは強いです。

第三十七話　やっぱり、来やがった！

それは、嫌な予感を感じた翌日の昼過ぎだった。

「・・・・・・・・・・・・・んっ？」

強烈な殺気を感じた俺は後方の空を見上げた。

なにかがすさまじい速さでこちらに近づいている。

「あれは・・・・・・・・・・・・竜？」

遠目からだがそれほど大きくはない。

「・・・・・・・・・最悪ですね。」

緊張した面持ちでつぶやいたメイドさんの言葉を聞き、俺はかつてルサナンで聞いた名前を思い出した。

空から来（きた）る魔王軍最強の将軍の名を。

竜は俺たちの前に降り立った。

その背から一人の女性が地面に降りる。

銀色の髪と真紅の瞳が印象的な美女だ。

しかしその真紅の瞳から激しい怒りを感じる。

怒りの矛先は・・・・・・・・・・・・俺？

「貴様か・・・・・・私のケルちゃんを誑(たぶら)かして、無理やり契約を結んだ外道の輩(やから)は・・・・・・・・・・」

誑かしてはいないぞ～。

人聞きの悪いことを言うな～。

「ケルちゃんはどこだっ！　答えろっ！！」

俺は無言で後ろに隠れているフレスを指差した。

「ケルちゃんっ！」

ヴェンリスは喜びの声を上げる。

「ケルちゃんっ、大丈夫だった？　怪我とかしていない？」

心配そうな声にフレスは何の反応も示さない。

見るとフレスの顔が恐怖で引きつっていた。

うーむ・・・・・・・・・

まさかここまで恐怖を植え付けられていたとは・・・・・・・

「・・・・・・・・・貴様。ケルちゃんに何をした。」

ヴェンリスが黒い大きな槍の矛先を俺に向ける。

「俺は何もしていない。」

「嘘をつくなっ！！　ケルちゃんをこんなに怯えさせて・・・・・・貴様は絶対に許さんっ！！」

・・・・・・・・・半ば予想はしていたが、この女、自分がフレスの恐怖の対象になっているってことに気付いていないな。

と、ヴェンリスがメイドさんとアイリスへ視線を向けた。

「これはケルちゃんを賭けた私とこの男との戦いだ。他の者には離れていてほしい。」

「わかりました。」

メイドさんがアイリスとともに距離を取った。

「フレス。お前も行け。」

おれの言葉を聞き終える前に、フレスはメイドさんの後ろへ隠れた。

・・・・・まあトラウマの原因になった相手だし、仕方ないと言えば仕方ないが・・・・・・・・

本っ当に役に立たんな。

ちゃんと使ったのルナールの時だけだし。

気を取り直してヴェンリスの方を見やると、竜を空へと飛ばしてい

た。

「構えろ。」

俺は左手に鞘を、右手に剣を持った。

「ゆくぞ。」

その言葉が耳に届く前に。

ヴェンリスの槍が目の前に迫っていた。

俺は反射でそれを避けた。

「ほお・・・・・・・・少しはできるようだな。」

俺は姿勢を低くして懐に飛び込み剣を振り上げた。

しかしヴェンリスは槍を回転させて斬撃をはじいた。

こいつ・・・・・・・・強い・・・・・・・・!?

体制を整えるため、俺は距離を取った。

そしてすぐに自分の失策に気付いた。

「ふっ!」

案の定、ヴェンリスは高速で槍を突いてくる。

それも連続で。

少なくとも一秒間に十回以上、致命傷を狙った突きが繰り出されている。

今のところ全て防げているが時間の問題だ。

剣はまだ大丈夫だが、このままでは鞘が砕ける。

・・・・・・・・・本気でまずいかもな・・・・・・・・・

私は気分の高揚を隠せなかった。

最初はケルちゃんを誑かした不届き者を成敗するだけのつもりだった。

だがどうだ。

この男は自分と戦えている。

初撃は少しだけ手を抜いていたが、今は違う。

全力で突きを繰り出している。

なのに一撃も当たらない。

「・・・・・・・・・・・・ふっ。」

思わず笑みを浮かべてしまった。

この男なら。

あの技を試してもいいかもしれない。

第三十七話　やっぱり、来やがった！（後書き）

ヴェンリスとの戦い、次で一旦決着が着く予定です。

第三十八話　迷いは、禁物だ！（前書き）

強敵との最初の戦いは、割とあっさり決着が着くものです。

第三十八話　迷いは、禁物だ！

それは何撃目だったか。

ヴェンリスは突如攻撃をやめ、大きく距離を取った。

俺はその隙を逃さず、一気に距離を――――――――――――――詰めようとしてやめた。

今、距離を詰めていたら貫かれていた。

俺の直感がそう告げていたからだ。

「・・・・・・・・・改めて名乗らせてもらう。」

ヴェンリスは構えを解いて一礼した。

「私の名はソフィ・ヴェンリス。魔王軍、六星魔将に名を連(つら)ねるものだ。」

「・・・・・・・・・影月仁だ。」

俺は問われてもいないのに、自分の名を名乗っていた。

なぜかはわからないが、なんとなくそうしておきたかった。

「・・・・・・・・変わった名だが、不思議と親しみが持てる気がする。」

ヴェンリスは大きく構えた。

「カゲツキジン、久しく見ぬ強者よ。あなたに敬意を表しこの一撃を送ろう。」

瞬間――――――――――――――――――

空気が凍りついた。

少なくとも仁は少しの間、呼吸ができなかった。

ヴェンリスの槍が紅く輝いている。

荒れ狂う魔力の奔流に、俺は戦慄を覚えていた。

本気を出さなければ殺される。

俺は剣を強く握りしめ――――――――――――――――――

「がんばれーっ、マスターっ！！」

届いた声援に、メイドさんたちが見ていることを思い出してしまった俺は本気を見せていいか一瞬迷ってしまった。

それが致命的な間違いだと気付いた時には手遅れだった。

「奥義――――――――――――――――――」

ヴェンリスが動き出す。

間に合わない――――――――――――――――――――――――

「魔業楼槍閃(まごうろうそうせん)っ！」

神速の一撃が、俺の体を貫いた。

咄嗟に防御を捨てて反撃したが、俺の体は勢い良く吹っ飛んでいく。

ようやく勢いが収まってきたところで後ろ目で地面を見てみる。

地面がやけに遠かった。

自身の体が崖を飛び越えてしまったことに気付いていなかった。

今はただぼんやりと、必殺技って叫ばないといけないのかな、と。

そんなことを考えながら俺は落ちて行った。

ヴェンリスはゆっくりと槍を下ろした。

「私の勝ち――――――――――――――――――」

ふっ、と笑みをこぼし。

「とは言えないな。」

鎧が砕け、大量の血が流れ出た。

「がはっ！」

口からも大量の血を吐いた。

傷口を手で押さえながら、飛竜を呼び寄せる。

危なかった。

ヴェンリスは砕けて散らばっている仁の剣に視線を向ける。

剣が痛んでいなかったら、あるいはもっと強度があったのなら。

命は無かっただろう。

それにさっきの――――――――――――――――――

ふらつきながら思考していると、強烈な殺気を感じ上を見た。

日の光を背に、メイドさんが上空からナイフを投げつける。

ヴェンリスは槍で薙ぎ払おうとして腕が上がらないことに気が付いた。

飛竜は翼をはばたかせて突風を起こし、主を守った。

まともに戦うことはできない。

そう判断したヴェンリスは飛竜の背にしがみつく。

主の意図を理解した飛竜は翼をはばたかせて空へと飛翔した。

追撃を仕掛けるメイドさんに、炎を吐いて足止めをしつつ上昇する。

ヴェンリスは上からメイドさんの目を見て、寒気を感じた。

人のものとは思えないその眼。

薄れゆく意識の中。

ヴェンリスは世界の広さに喜びを感じていた。

「水よ、彼(か)の者を包み込みたまえ。水泡球(アクアスフィア)。」

地面に激突する前に俺の体が水に包まれた。

・・・・・・・なんだ・・・・・・・・・・・・・？

何が起こったのか、呆けた頭では理解できなかった。

「とりあえず助けて差し上げましたが、これからどうしたものかしら・・・・・・・」

最後にそんな言葉を聞きながら。

俺は意識を失った。

第三十八話　迷いは、禁物だ！（後書き）

ヴェンリス戦、いかがだったでしょうか。
強敵との戦いの最中は、一瞬でも隙を見せたらアウトなんです。

キャラ設定その三（前書き）

今回はゲルグ、リャナ、ニブル、ルナール、ヴェンリスの五人です。
相変わらずネタバレしない様に軽めの紹介です。

キャラ設定その三

ゲルグ・シュピーゲル

年齢　三十六歳

身長　１８５ｃｍ

体重　９３ｋｇ

趣味、特技　筋肉作り、じっとしていると三分以内に寝られること

容姿　長身で筋肉質の青年

髪の色　藍色

瞳の色　青色

ブラウネオスのギルドマスター。一騎当千の強者なのだが活躍する前に出番が終わってしまった不憫な虎の獣人。仁たちにロリコン扱いされて以来、ギルド内で彼を見る目が変わったと変わって無いとか。彼が再び登場する機会はあるのだろうか・・・・・・

リャナ・グエルジェリン

年齢　十一歳

身長　１４２ｃｍ

体重　３４ｋｇ

スリーサイズ　６７　４９　６９

趣味、特技　昼寝、早食い

容姿　小柄な美少女

髪の色　緋色

瞳の色　金色

ネコミミ獣人少女その二。奴隷商人が仕掛けた罠に引っ掛かっていたところを東間に助けられて以降、行動を共にしている。名前を見てわかるようにアイリスの実妹。猫なのだが、ニブルとの戦いでかませ犬のポジションを獲得してしまった。それが定着するかどうかは本人の努力次第。

ニブル・ゼルヘイム

年齢　二十一歳

身長　１７５ｃｍ

体重　６８ｋｇ

趣味、特技　チェス、戦術戦略策謀術全般

容姿　細身で長身の美青年

髪の色　焦げ茶色

瞳の色　茶色

男も女も愛することができる性差廃絶主義者。そのため変態扱いされることがしばしばあるが、本人は否定し続けている。バットとそれなりに親しく、いろいろなことを知っているが基本的には傍観者の立場でいる。

ルナール・ベルセリウム

年齢　十八歳

身長　１５５ｃｍ

体重　４４ｋｇ

スリーサイズ　８４　５３　８７

趣味、特技　訓練、暗殺

容姿　理香より少し小柄な美少女

髪の色　灰色

瞳の色　紺色

魔王軍随一の暗殺者。幼いころから厳しい訓練を受け続けた結果、痛みに快感が混じるようになってしまった。暗殺者であったがゆえに幸か不幸か仁に出会うまで強敵らしい強敵と戦ったことが無く、仁は彼女にとって初めての圧倒的強者だった。そのため間近で仁を見たときに心を奪われてしまった。

ソフィ・ヴェンリス

年齢　十七歳

身長　１６０ｃｍ

体重　５０ｋｇ

スリーサイズ　測ったことが無い。

趣味、特技　強敵との戦い、料理

容姿　理香と同レベルの美少女

髪の色　銀色

瞳の色　紅色

魔王軍最強の将軍。本人は内緒にしているつもりだが、可愛いもの

が大好き。だがそれ以上に強敵との戦いを楽しむ戦闘狂。しかし戦えない者などには誠意のある態度で接する一面もある。特に理不尽な振る舞いをする者は味方であっても容赦しない。仁との戦いで彼について何か気になることがあるらしいが・・・・・・・・・？

キャラ設定その三（後書き）

こんな感じです。
すみません。仁の必殺技とか、ケルヴェルグの能力とかちゃんと設定があるのですが書く機会がありませんでした・・・・・・・
いつかきっと書くと思いますので気長に待って下さると幸いです・・・・
次回からしばらくメイドさんたちの出番はありません。

第三十九話　てめえは、誰だ！（前書き）

新章突入、と言った感じです。

第三十九話　てめえは、誰だ！

一人の子供が戦場を歩いていた。

子供の体には大量の血痕が付着していた。

子供が持っている木の棒にも。

子供は無言で歩き続ける。

砲撃によって目の前で爆散する兵士。

ハチの巣にされる民間人。

地雷で吹き飛ぶゲリラ。

子供はただ歩き続けた。

瓦礫（がれき）の隙間から聞こえる助けを求める声。

この子だけでもと泣きながら訴える女性。

それら全てを無視し続け。

立ち塞がるモノ全てを壊して。

そうして子供は戦場で生き残った。

「・・・・・・・・・・・・」

目の前に広がるのは見知らぬ天井。

というかこの世界に来てから、見知った天井など何一つないのだが。

「・・・・・・・・・・よりによってあの頃かよ・・・・・・・」

すさまじく寝覚めが悪い。

あれは確か棍棒を手渡されて、「生き残ってこい。」と親父に言われた時のことだったか。

過去のことはあまり忘れていないんだから、夢にまで出てくるなと言いたい。

「っ！？」

起き上ろうとして体の異変に気付く。

服が無い。

代わりに包帯が巻いてある。

しかも下手くそな巻き方だ。

「なんだ・・・・・・・？　なんで俺が包帯なんか巻いているんだ・・・・・・？」

つぶやいてからヴェンリスとの戦いを思い出す。
そういえばあの時、崖から落ちたはずだったが・・・・・・・
「あら、ようやくお目覚めになられたのですね。」
女の声が聞こえてきた。
視線だけ動かすと、そこに一人の少女がいた。
上から下までフリフリの黒いドレスに身を包んでいる。
確かゴシックロリータとか言うやつだ。
長い銀色の髪と深紅の瞳。
だがヴェンリスではない。
「誰だお前。」
率直に訊いてみた。
「・・・・・・・・・・随分と無礼な殿方ですのね、命の恩人に向かって誰だとは・・・・・・・」
「命の恩人だと?」
言われてみれば、確か地面に激突する前に何かに身を包まれたような記憶がうっすらと・・・・・

「助けられた覚えは無いぞ。」

出てこなかった。

少女は呆れたようだ。

俺と話す奴は必ず一度は呆れる。

うーむ・・・・・・・・。

なぜだろう？　見当もつかない。

「まあ良いですわ。別に善意で助けたわけではないですし。」

「・・・・・・・・・金目の物なんて持っていないぞ。」

「私(わたくし)を卑しい盗賊と一緒にしないでほしいですわっ！」

少女は大変、憤慨した。

だとすると・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・まさか俺の体が目当てとか・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。その通りですわっ！」

肯定したよ。

「いや～ん、獣(けだもの)～、誰か助けて～。」

「棒読みですわね。」

「でっ、どういう意味だ。」

「そのままの意味ですわ。」

少女は良く分からない複雑なポーズを取った。

たぶん決めポーズなんだろう。

「あなたには私(わたくし)のギルドの一員になってもらいますわっ！」

少女はポーズを決めたまま言い放った。

「・・・

第三十九話　てめえは、誰だ！（後書き）

新キャラ登場です。
次回は、あのキャラと少女の名前が登場します。

第四十話　どうするよ、こいつ！（前書き）

予告通り、あのキャラが再登場します。

第四十話　どうするよ、こいつ！

「俺の服はどこだ。」

「あそこですわ。」

リリィ（自己紹介は済ませた）はテーブルの上を指差した。

そこにはぼろぼろになった俺の服と奇妙な形の物体があった。

「あれはなんだ？」

「私（わたくし）に訊かれても困りますわ。あなたの服に入っていたものですもの。」

なんだと・・・・・・・・・・

それじゃああれは――――――――――――――――――――――――――――――

「熊よ・・・・・・・・・お前は身を呈して俺を守ったと言うのか・・・・・・・・・！」

俺は感動に打ちひしがれていた。

「・・・・・・・・・大切な物でしたの？」

俺は頷（うなず）く。

「ああ・・・・・・・・・俺の生涯で七百六十二番目くらいに大切

な物だ・・・・・・・・・」

「微妙ですわね。」

熊よ・・・・・・・・・お前の犠牲は決して無駄にしないぞ・・・・・・！

俺は立ちあがり服を手に取った。

思っていたほど損傷はひどくない。

これなら縫って洗濯すれば十分着られる。

「それで、なんで初対面の俺をギルドに誘うんだ？」

「そんなこともわかりませんの？」

リリィはやれやれと首を振った。

「新しくギルドを作るには、種族を問わず最低三人確保する必要がありますのよ。」

「って、まだギルド作って無いのかよっ！」

「当たり前ですわっ！」

何が当たり前なんだろうか。

「それなら友達でも誘って勝手に作ればいいだろ。」

「私に友人などいませんわよっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「だからなんですの？　その目は？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・憐れな女だ・・・・・・・・・・・・

不覚にも目頭が熱くなってしまった。

「・・・・・・・・・仮に俺が入るとして、それでも一人足りないぞ。」

「心配無用ですわ。」

少女は無い胸を張って言った。

「もうすぐ私の部下がここに到着いたしますから。」

その時、タイミングを見計らった様に扉を叩く音がした。

「来ましたわ、入ってもよろしいですわよ。」

「失礼します。」

入ってきた女と目が合った。

この女は確か・・・・・・・・・・・・・・

「お逃げくださいっ！　リリィ様っ！」

女は素早く俺とリリィの間に割って入り、リリィをかばうように下がらせた。

「急にどうしましたの？　ルナール。」

ルナール。

そうだ、確か前に戦った暗殺者だ。

「リリィ様っ、この男は勇者の仲間でかなりの手練(てだ)れですっ！　私も以前この男に敗れたことがありますっ！」

「まあ、本当なのですか？」

「はい。」

ルナールは油断なく俺を見据える。

「カゲツキジン・・・・・・。貴様が何のためにリリィ様に近づいたかは分からないが、リリィ様は必ず私が守り切って見せるっ！」

そう言うとルナールは体を大の字に広げて仁王立(におうだ)ちした。

「リリィ様には指一本触れさせはしないっ！」

・・・・・・・・・・・・なんだ？

なぜ向こうから仕掛けてこない？

「どうしたのっ、なぜ攻撃して来ないのっ！」

はあ、はあ、と息を荒くしながら叫ぶルナール。

何もしていないはずなのに顔が紅潮している。

「・・・・・・・・・えー、っと、ルナール？」

「姫様っ、下がっていてくださいっ！　カゲツキジンに殴られるのは私――――――――――――――ごほんっ、カゲツキジンは私が引き付けますっ！　その間にお逃げくださいっ！」

「え、ええ、わかりましたわ・・・・・・・・・」

リリィは俺からと言うよりルナールから距離を取るように離れていく。

俺はルナールに近づいた。

「さあっ、来なさいっ！」

それじゃあ遠慮無く。

俺はルナールの顎を蹴り上げた。

「ぐぅっ！」

歯を食いしばりながら宙を舞うルナールに容赦なく追撃をかける。

下に潜り込んで背中を殴り、ジャンプして腹に踵落（かかと）としを決めてそ

のまま床に落ちたルナールの腹を踏み付ける。

「・・・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・・・」

結構本気で殴ったはずなんだが・・・・・・・・・・

ルナールは恍惚の表情となっている。

「・・・・・・きもち、いい・・・・・・・・・・」

つぶやきに、俺はどういう反応をすればいいのか本気で悩んだ。

「お前、こいつを本気でギルドメンバーに加えるつもりか？」

「・・・・・・・・・・他にいないんですもの。仕方ありませんわ。」

リリィは沈痛な面持ちで幸せそうに気絶しているルナールを見ていた。

第四十話　どうするよ、こいつ！（後書き）

とりあえず一言。

熊ぁーーー

第四十一話　意外と、楽しい奴だ！（前書き）

服屋と防具屋はセットになっています。

第四十一話　意外と、楽しい奴だ！

とりあえず服を買いに行くことになった。

リリィがいつまでも包帯（巻き方下手くそ）のままではみっともないですわっ！　とか言い出したからだ。

ちなみに今、俺はぼろい布を身に纏（まと）っていたりする。

これも十分みっともないと思うのだが、これなら旅人に見えるから大丈夫ですわっ！　だそうだ。

基準がよくわからん。

ルナールは幸せそうな顔だったので気絶させたまま放置しておいた。

「着きましたわ。」

見上げると目印である盾のマークが。

中に入ると雑貨屋も兼ねているらしく、いろいろなモノが置いてあった。

本当にいろいろなモノだ。

服に鎧、兜に小手や具足。

たいまつに薬草セット、火打石に油。

食料品に裁縫セット。

新商品、勇者まんじゅう（東間と理香の二種類）

勇者パーティー成りきりセット。

マンティオウスの剥製（はくせい）に等身大ヴェンリス人形。

妻のお茶に鼻くそを入れる獣王、キレる妻の人形セット。

犬の糞（ふん）（蜂蜜入り）。

他にもたくさんの品物が――――――――――――――――――――――――

「なんなんですのっ！　この店はっ！？」

リリィ、キレる。

気持ちはわかるがな。

いろいろすぎるだろ、この店。

しかし――――――――――――――――――――――――

「なぜこの商品のラインナップで、木彫りの熊が置いてないんだっ！？」

「そんなことどうでもいいですわっ！」

俺の切なる叫びが一蹴されてしまった・・・・・・・・・・

「そこのあなたっ！　今すぐに店主をここに呼びなさいっ！」

リリィは今にも店を破壊しかねない勢いで店員に向かって命令した。

「は、はひっ！　少々お待ちくださいっ！」

店員は逃げるように奥へと走っていく。

少しして、奥から店主らしき大男が現れた。

「お客様、なにかご用でしょうか。」

大柄な割には丁寧な物腰だ。

客商売なのだから当然と言えば当然だが。

「なんなんですのっ!?　このふざけた品物の数々はっ!?」

リリィは犬の糞やその他を指差しながら店主に詰め寄る。

「この店の人気商品たちになにか問題が？」

「ありますのっ!?　人気がっ!?」

これには俺も驚いた。

「ええ。特にこの『中身を読んだ人は三日以内に絶命するかもしれない呪いの手紙セット』が一番の人気商品です。」

「この街の人々はそんなに殺したい人が多いんですのっ！？　しかも効果が曖昧（あいまい）ですわっ！？」

周囲の客が野次馬と化していく。

店主はこれに気づいていたようだったが、リリィは気付いていないようだ。

「二番目の人気商品は『犬の糞（蜂蜜入り）』です。」

「知りたくもない情報ですわっ！？」

・・・・・・・・・勇者グッズより人気あるのか・・・・・・・・・

俺は馬鹿どもに心の底から同情した。

「全て嘘ですが。」

「嘘でしたのっ！？」

「というわけで本日のお勧（すす）め商品は『薬草セット』です、お一ついかがでしょうか。」

「普通の商品をお勧めされましたわっ！？」

「ではごゆるりと買い物をお楽しみください。」

「どうやって楽しめばいいんですのぉーーーーーーーーーーーーーーっ！？」

叫ぶリリィを尻目に店主は奥へと戻っていく。

二人の漫才が終わったのを確認すると、野次馬たちも散っていく。

だが最初のころよりも人が増えている。

・・・・・・・・・あの店主、客を呼ぶためにわざとリリィと漫才しやがったな・・・・・・・

周囲を見渡せば、店員たちが野次馬だった人たちにまともな商品を勧めていた。

・・・・・・・・・あの男、できる・・・・・・・・・・・

俺はまんまと客寄せの道具として利用されたリリィを見る。

リリィは肩で息をしていた。

ツッコミすぎて疲れたようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・意外と楽しい奴だったんだな。」

俺はリリィに対する評価を改めた。

高慢なお嬢様から。

いじられるツッコミ係へ。

「ギルド、か・・・・・・・・・・・・」

リリィを毎日いじることができる環境。

俺は入ってやってもいいかなと思い始めていた。

「ママぁー、犬の糞（蜂蜜入り）買ってぇー。」

「駄目よ、犬の糞（蜂蜜入り）は、三日に一つだけって約束でしょう？」

・・・

第四十一話　意外と、楽しい奴だ！（後書き）

リリィがある意味一番かわいそうなキャラになってきました。

第四十二話　こいつ、ほんとに楽しい！（前書き）

コントです。
話が進みません・・・・・・・・・

第四十二話　こいつ、ほんとに楽しい！

「まったくっ、なんなんですのあの店はっ！」

ご立腹中のツッコミ係さん。

俺たちは宿屋の一室（俺が寝ていた部屋）に到着したところだ。

とりあえず普通の服も売っていたから、黒い服を上下一式と裁縫セットを買った。

もちろん金など持っていなかったので全てリリィ持ちだ。

会計の際に店員が『（前略）呪いの手紙セット』を勧めてきたことが、今だに憤慨している理由なのだろう。

「リリィ様っ！」

部屋にの中に入ると、ルナールが心配そうに駆け寄ってきた。

「ただ今戻りましたわ。ルナール。」

「なぜ勝手に出て行かれてしまったのですかっ！　私以外に護衛はいないというのにっ！」

どうやらルナールは本気で怒っているようだ。

「まあそう怒ってやるな。こんな街中で危険なことは無いだろう。」

ルナールは俺を睨みつける。

「貴様・・・・・この御方をどなたと心得ているっ！　この方こそは魔王様の――――――――――――――――」

「ルナールっ！」

リリィの怒声で言葉を止めるルナール。

少し考えてから口を開いた。

「この方こそは魔王様の従兄妹（いとこ）の親戚の弟の息子の友人の兄の妻の姉の元恋人の友人の上司のお得意先の娘さんなのだぞっ！」

「なんで友人だけ二回も言ったんだっ！？」

「そこにツッコミますのっ！？」

リリィは俺のツッコミが不満らしい。

俺は一旦咳払いをすると、改めてツッコミを入れた。

「なんで（前略）兄の妻の姉は恋人と別れたんだっ！？」

「わざと言っているのでしょうっ！？」

「当たり前だぁっ！」

「逆ギレですわっ！？」

いちいち反応が良いな、こいつ。

「なんでリリィには胸が無いんだっ！？」

「まったく話に関係ない上に、侮辱されましたわっ！？」

「なんでリリィには友達が一人もいないんだっ！？」

「あなた私（わたくし）に何か恨みでもありますのっ！？」

「別に。」

「一気に勢いが無くなりましたわっ！？」

「なんでリリィには友達が一人もいないんだっ！？」

「二回目ですわっ！？」

「大事なことだし。」

「なにが大事なんですのっ！？」

「・・・・・・・・・・・可愛そうな娘・・・・・・・」

「おちょくっておりますのっ！？」

「その通りだっ！」

「ムキャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

壊れたように吠えるリリィ。

楽しい。

なんていじりがいのある奴なんだ・・・・・・・・！

俺は新鮮な感覚に感動すら覚えていた。

「そこまでだっ！」

ルナールが壊れたリリィと俺の間に割り込むように入ってきた。

「カゲツキジンっ、これ以上リリィ様を愚弄することは許しませんっ！　愚弄するなら私にしなさいっ！」

興奮しながら詰め寄ってくるルナールを殴ってみる。

「へぶしっ！」

奇声を上げてルナールは横に吹っ飛んだ。

だがすぐに立ち上がると、俺の前に立ち塞(ふさ)がった。

「この程度では私は倒せないわっ！　もっと思いっきり来なさいっ！」

息を荒くしているルナールに俺はあることを思いついた。

「そういや少し腹が減ったな、パンを持ってる奴を殴って奪おうか

な――――――――――――――――」

完全に言い終わる前にルナールは姿を消し、一瞬でパンを持ってきた。

「このパンが欲しいのなら、力ずくで奪ってみなさいっ！」

パンをこちらに突き出してくるルナール。

・・・・・・・・・・・・便利だ。

俺は視線を動かし、正気に戻ったらしく拗ねたようにうずくまっているリリィを見る。

こいつらとギルドを結成する、か・・・・・・・・・

どうやら思っていた以上に面白そうだったので、俺はギルドに入ることを決めた。

「それでいつギルドを作りに行くんだ。」

パンを齧りながら（ルナールは恍惚な表情で横たわっている。）尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふんっ。」

リリィは顔を背(そむ)ける。

・・・これは思っていた以上に時間がかかるな・・・・・・・・・・

俺はリリィの機嫌が良くなるまで待つことにした。

第四十二話　こいつ、ほんとに楽しい！（後書き）

次回でギルドを結成する予定です。

第四十三話　ギルド、結成だ！（前書き）

ギルド結成です。

第四十三話　ギルド、結成だ！

「ギルドの申請に行きますわよっ！」

ようやく機嫌が直ったリリィは俺たちに命令した。

「わかりました。」

「はいよ。」

俺たちの返答を待たずに部屋を出ていくリリィ。

ルナールは無言で後に続く。

俺は部屋に置いてあった本を――――――――――――――――――――

「話が進みませんわよっ！」

また拗ねられても面倒なので、大人しくついていくことにした。

「・・・・・・・・・・・・・・・どういうことだ。」

「？　早く行きますわよ。」

申請ギルド、アマルテミス。

建物の大きさ以外、王都の建物と変わらない。

「いらっしゃいませ、本日はどのような御用件でしょうか。」

受付嬢すらも。

「ギルド発足（ほっそく）の申請しに来ましたわ。」

俺の疑念をよそに、リリィが早速本題に入る。

「かしこまりました。ではこちらに名前を本人がご記入ください。」

まずはリリィ、次いでルナール、最後に俺が名前を記入した。

「申し訳ありませんが、リリィ様とルナール様は新規登録の方ですのでこちらにも名前をご記入してください。」

差し出された用紙に名前を記入するリリィとルナール。

「俺はいいのか？」

「はい。以前登録されましたので問題ありませんよ仁様。いえトリス様と呼んだ方がよろしいでしょうか。」

――

俺はこの世界の文字を勉強した。

難しい字はまだ書けないが、大抵の字は読めるようになった。

だがこの受付嬢は俺の書いた字を読んだ。

漢字で書いた文字を。

思い返してみれば、前に王都で会った受付嬢もそうだった。

前はカタカナで書いたのにだ。

「・・・・・・・・・・一体何なんだ、お前らは。」

俺は目の前にいる、前にあった受付嬢と寸分違わず同じ背格好と顔をした受付嬢に問いかけた。

「知りすぎれば長生きできませんよ。」

笑顔でそう返された。

「先ほどから何を話しているんですの？」

記入を終えたリリィとルナールが受付嬢に用紙を渡した。

「はい、確かに。」

受付嬢は用紙を箱に入れると、別の紙を取りだした。

「では最後に、ギルドの名は何にしますか？」

「すでに決まっていますわ。」

リリィが高らかに宣言する。

「楽園の悪夢（パラダイスナイトメア）。それが私のギルドの名前ですわ。」

ギルドを発足してから俺たちは酒場へと向かった。

なんでも、新米ギルドや弱小ギルドは酒場の掲示板に張ってある依頼をこなしていくそうだ。

そうして報酬と信頼を勝ち得た者たちが、大ギルドと成長する。

「着きましたわ。」

酒場の中に入ると、大勢の人間や獣人たちがいた。

俺たちは掲示板の前へ歩いていく。

いろいろな依頼があった。

猫探し、猫探し、猫探し、猫探し、犬探し、猫探し、虎（とら）探し、猫探し、猫探し、猫探し、猫探し、鰐（わに）探し、猫探し、猫探し、鮫（さめ）探し、猫探し―

―――――――――――――――――――――――――

「この街の人々は頭がおかしいんですのっ！？」

「まったくだっ！　どうしてこのラインナップで木彫りの――――

――――――――――――――――――――――――」

「しつこいですわっ！」

・・・・・・・・しくしく・・・・・・・・・・怒られた・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・くっ。」

男は笑った。

「いかがなされましたか。」

「楽園（パラダイス）の悪夢（ナイトメア）か・・・・・・・・・なかなかいい名前じゃないか。」

女は意味がわからないといった顔をしていたが、男は気にも留めずにつぶやいた。

「期待してるぞ、この楽園（じごく）を悪夢に染め上げてくれることを。」

第四十三話　ギルド、結成だ！（後書き）

次は初クエストです。

第四十四話　ここが、目的地か！（前書き）

初めてのクエストです。
今回は短めです。

第四十四話　ここが、目的地か！

「やだ～、やだ～、歩くの～嫌だ～。」

輝く日差しの下を俺たちは歩いていた。

「暑い～、厚い～、熱い～、篤い～。」

無言で歩くルナールと、こめかみを痙攣させているリリィ。

「どれだけぇ～、歩いてもぉ～、終わりがぁ～、見えないぃ～。」

音程を外しながら即興のどうでもいい歌を適当に歌い続ける。

「疲れたぁ～、めんどいぃ～、寝たいよぉ～。」

「一体何なんですのっ！？　その歌は！？」

突然リリィがキレた。

「さあ？」

「わからないのに歌ってましたのっ！？」

「うん。」

「素直に認めてしまいましたわっ！？」

俺はルナールに回し蹴りを放った。

「えっ？」

と言っている間にルナールは吹っ飛んだ。

「何をしていますのっ！？」

「お前と口論していると、いつも割り込んできて変なことを言い出すから先手を打って蹴り飛ばしただけだが。」

「女性に対して有るまじき行いですわっ！？」

「それが俺の生きる道っ！」

「そんな道捨ててしまいなさいっ！」

いつでも全力でツッコミを入れるリリィ。

本当にいじりがいのある奴だ。

「う・・・・・・・・・・ぐぅ・・・・・・・」

うめき声を出しながら、ルナールが立ち上がった。

「カゲツキジン・・・・・・・・・貴様・・・・・・・・・っ！」

「仁でいい。」

俺の言葉にルナールが目をキョトンとさせた。

「・・・・・・・・・なに？」

「仁でいいと言ったんだ。お前らと違って俺は仁の方が名字ではなく名前なんだ。親しい奴は大体呼び捨てにしている。」

途端、ルナールが頬を赤く染めた。

「親しいって・・・・・えっ、でも、そんな、いきなりなんて・・・・・・」

ルナールはオロオロしている。

俺はルナールから視線を外すと、横にいるリリィを見た。

理由は不明だが不機嫌になっている。

「どうした。」

「・・・・・・・・・・・・ルナールには名前で呼ばせるんですの？」

なぜかそんなことを訊いてきた

「別にお前も名前で呼んで構わないぞ」

俺の言葉にリリィの機嫌が突然良くなった。

わからん。

今のやり取りのどこに機嫌が良くなる理由があったんだ？

「では私のことはリリィとお呼びなさい。」

「わかった。というか前からリリィと呼んでいるんだが・・・・・・。」

リリィは満足した様に足を速めた。

俺の言葉など耳に入れていないようだ。

仕方なく俺も歩く速度を速める。

「・・・・元は敵同士だったわけだし・・・・・・でも今は仲間なわけだし・・・・・・・」

後ろで一人自問自答を繰り返していたルナールは、二人を完全に見失ってから置いて行かれたことに気が付いた・・・・・・・・

「ここですわ。」

目の前にある古びた洋館。

ここが今回の目的地だ。

あの時、一つだけあった生き物探し以外の依頼。

それがこの洋館の調査だった。

「一度入った者は二度と出てこられないと言われている呪いの洋館か・・・・・・」

「燃えますわ・・・・・・・・・！」

リリィは目を輝かせているが、ありきたりすぎる内容に俺はこっそりと溜め息をついた。

「リリィ様っ！」

ルナールが追いついてきた。

「遅いですわよっ、ルナールっ！」

「申し訳ありません・・・・・・・」

リリィに謝罪するルナール。

「早く入りますわよっ！」

そのままリリィに促(うなが)され俺たちは洋館の中へと足を踏み入れた。

きたきた・・・・・・・・

また馬鹿な獲物たちが・・・・・・・・・

今日は数が多い・・・・・・・・・・

一人ずつ狩って行こう・・・・・・・・・・

第四十四話　ここが、目的地か！（後書き）

（問題になると面倒なので、歌詞の部分を修正しました。）
後、最近少しずつ以前の話を読みやすく編集しています。

第四十五話　新たな剣、ゲットだぜ！（前書き）

呪いの洋館編スタートです。

第四十五話　新たな剣、ゲットだぜ！

中に入ると扉が閉まった。

良くあることだ。

もうちょっと捻ってもいいと思う。

「・・・・・・・・閉じ込められたようです。」

「上等ですわ・・・・・・・・・っ！」

更に燃え上がるリリィ。

対して俺は氷点下。

「どけ。」

ルナールを扉の前から移動させると、俺は壁を叩いた。

びくともしない。

「何をやっておりますのっ、早く奥に進みますわよっ！」

リリィの文句を聞き流しながら俺は大きく息を吐いた。

そのまま手加減抜きの全力の蹴りを叩きこむ。

鈍い音を屋敷内に響かせながら扉が壊れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙するリリィとルナールに俺は爽やかに笑って見せた。

「さて、進むか。」

「何のために壊しましたのっ！？」

俺は答えずに奥へと進み始める。

しぶしぶながらもリリィ達はついてきた。

屋敷内を照らすのは燭台（しょくだい）に灯る蝋燭（ろうそく）の明かりだけだった。

どういう原理かは分からないが、外部からの光は全て遮断されている。

扉を壊したにも関わらず、外の光が入ってこない。

不意に遠くから何かが這いずる様な音が聞こえた。

「・・・・・・・・・どうやらお出迎えの様ですわね。」

「・・・・・・・・・・・・お気を付けください、リリィ様。」

リリィとルナールは武器を構えた。

ルナールは相変わらずの黒塗りナイフ。

リリィはいくつもの宝石が散りばめられた黒い杖。

そして俺は――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・あっ。」

剣はすでに砕けている。

鞘も失くした。

木彫りの熊は宿に置いてきた。

完全な丸腰。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

音は少しずつ近付いてきている。

這いずって近づいてくる以上、絶対アレ系統の敵だ。

正直触りたくない。

必死に武器を探している最中、気配を感じて俺は横に跳んだ。

先ほどまで俺がいた場所を剣が通り過ぎた。

「なんですのっ！？」

「これは・・・・・・・・・・っ！」

剣だけだった。

剣が独りでに動いているのだ。

「動く剣（リビングソード）です。大して強くはありませんが、浮遊しているため物音を立てずに近寄ってくる少し厄介な敵です。」

言ってルナールはナイフを構えた。

「肩慣らしぐらいにはなってほしいですわ。」

リリィも杖を構える。

「ちょっと待て。」

だが俺は二人を制した。

「なんですの？」

「俺にいい考えがある。」

不審げに見ているリリィを無視して俺はリビングソードを掴んだ。

リビングソードが俺の手の中で激しく暴れる。

俺は気にせずしっかりと掴んだまま優しく語りかけた。

「取引しよう。この屋敷を探索している間、ただの剣になれ。そう

すれば見逃してやる。」

リビングソードは俺の言葉など聞いていない様に暴れ続ける。

「無駄ですよジン。リビングソードに自我などありません。」

ルナールの言葉を無視して、俺はにこやかに笑みを浮かべながら左手で燭台の一つをへし折り蝋燭を捨てた。

「もう一度言おう。この燭台の様になりたくなかったらただの剣になれ。」

左手に徐々に力を込めると、燭台は少しずつひびを拡げていき砕け散った。

リビングソードが大きく震えた。

やはりな。

他のリビングソードはどうだか知らないが、少なくともこいつには意思がある。

俺は笑顔のまま刀身を左手で掴んだ。

「これが最後だ。ただの剣になれ。」

俺が言葉を発すると同時に。

リビングソードはピクリとも動かなくなった。

よっしゃ、武器ゲットっ！

俺はリビングソードを構える。

リリィから冷ややかな視線を感じたが気にしている時間は無い。

這いずる音はもうすぐそこまで来ていた――――――――――――――

――

ちなみにルナールは燭台に自己投影していたらしく、後ろで悶えていた。

第四十五話　新たな剣、ゲットだぜ！（後書き）

次回はアレらとの戦いです。

第四十六話　んじゃ、死体狩りだ！（前書き）

アレらとの戦いです。

第四十六話　んじゃ、死体狩りだ！

それは真っ赤な肉の塊だった。

いくつもの大きな肉塊からが這いずって来ている。

中々にグロテクスな光景だ。

「・・・・・・・・・・・・醜悪ですわ。」

リリィが嫌悪感を露(あらわ)にしていた。

肉塊たちが一斉に止まった。

そのまま動かなくなる。

「・・・・・・・・・何なんですの――――――――――――――――」

リリィのつぶやきが終わる前に。

全ての肉塊が裂けた。

その中から腐臭を漂わせながらリアル腐った死体が飛び出してきた。

一つの肉塊から三体ほどだ。

腕が無かったり片足が無かったり上半身しか無かったりといろいろなモノがいた。

ゾンビ共（ありきたりだが一番しっくりくる。）は新鮮な肉に惹かれたのか、俺たちに襲いかかって来る。

「っ！？　これはっ！？」

悶えていたルナールは異変に気付きナイフを構えた。

俺は剣を（これはリビングソードではない。ただの剣だ。）を構えて突撃した。

ゾンビ共は思考能力がないのか、うめき声を上げながら一番近くにいる俺に全員で向かってきた。

そのまま当然のように詰まった。

狭い廊下で一斉に動いたらそうなるのは必然だろう・・・・・・・・

俺はまずゾンビ共の下顎（したあご）を切り落とす。

理由は二つ。

一つはこうすれば噛み付くことができなくなるからだ。

もう一つは確認のため。

切り落とされた下顎はしばらく動いていたがやがて止まった。

どうやら予想が当たったみたいだ。

「援護しますっ！」

ルナールは後ろから黒塗りナイフを投げる。

ナイフはゾンビ共に命中するも全く効いていないようだった。

「ルナールっ、頭を狙えっ！」

言いながら俺はゾンビ共の頭を切り落としていた。

首ではない。

あくまでも頭、つまり脳を切断している。

ルナールは俺の行動を理解し、ゾンビ共の頭にナイフを投げつける。

脳を損傷したゾンビ共は程(ほど)なくして動かなくなる。

どうやらこいつらは何らかの手段で脳を動かされているようだ。

下半身だけや頭が無いモノがいない時点でそれは予測できたことだ。

ただ確証がなかったから体の一部だけを切り落として、それがそのまま動き続けるかを試してみたのだ。

これが魔法なのか呪いなのかはわからない。

だが脳で動いているのなら脳を破壊すればいいだけのこと。

俺たちはすし詰め状態になっているゾンビ共を片端から倒していく。

だが肉塊は奥からどんどん増えていく。

それに伴(ともな)いゾンビの数も増えていく。

流石にこれだけの数を相手にするのは面倒くさい。

ルナールもすでに援護をやめて遠くに離れているし。

・・・・・・・・・・・・・・・なに？

なんで遠くに離れているんだ？

後方を見ると、リリィが杖を構えながら何かを唱えている。

一瞬、リリィがメイドさんに見えた。

大量の敵。

距離を大きく取ったルナール。

この状況で使う魔法。

・・・・・・・・・・・・・・・

「闇よっ！　愚者共に黒き裁きをっ！　殲滅魔王陣（キングスカタストロフィ）っ！」

闇が膨れ上がり――――――――――――――――

轟音が耳を貫いた。

「なんで勝手に逃げ取るんじゃーっ！」

後ろから来る衝撃波に乗って速度を増した跳び蹴りを放つ。

「ぶへらっ！」

ルナールはいつも以上に吹き飛び、ゴミの様に転ってから止まった。

「・・・・・・・・・けっ・・・・・・・」

ルナールは倒れたままゆっくりと顔を上げる。

「・・・・・・計算通り・・・・・・・・・っ！」

その顔はとても幸せそうだった。

第四十六話　んじゃ、死体狩りだ！（後書き）

アレらはやはりゾンビの群れでした。
デジャヴュの理由は、洞窟探検その一参照でお願いします。
最近、ルナールが取り返しのつかないところまで来ている気がします・・・・・・

第四十七話　変な誓い、立てるな！（前書き）

呪いの洋館編はしばらく続きます。

第四十七話　変な誓い、立てるな！

「あのぅ・・・・・・・・・・」

老人らしき人物が声を掛けてきたが無視して俺はリリィに詰め寄った。

「おいっリリィっ！　さっき俺ごと吹き飛ばすつもりだっただろうっ！」

「別にそんなつもりはありませんでしたわ。」

怒りの言葉を涼しい顔で受け流すリリィ。

ルナールは力尽きたらしく気絶していた。

「それにあの程度の魔法、仁なら耐えられるはずですわっ！」

「お前は俺を何だと思っているんだっ！？」

「私の物ですわっ！」

「その通りだっ！」

「肯定しますのっ！？」

俺の反応にリリィは頬を赤く染めながら戸惑いの言葉を発する。

仕切りなおすように、リリィは一旦咳払いをしてから言い直す。

「訂正しますわ。あなたは私のギルドの物ですわ。」

「断るっ！」

「断りますのっ！？」

「お前の物にならなってやってもいいが。」

「――――――――――――――――――――っ！？」

リリィは真っ赤になって顔を反らした。

「嘘だがな。」

「この男最低ですわっ！？」

「当たり前だっ！」

「また逆ギレっ！？　と言うか当たり前なんですのっ！？」

「全部嘘だ。」

「どこからですのっ！？」

「出会った時から。」

「名前すらも偽りでしたのっ！？」

「今のが嘘だ。」

「結局何が言いたいんですのっ！？」

「嘘だと言う全てが嘘だ。」

「もう訳が分かりませんわぁぁぁぁぁーーーーーーーーっ！？」

頭を抱えてしゃがみ込むリリィ。

本っ当に楽しいな。

「まあリリィで遊ぶのはこれくらいにして。」

「遊びでしたのっ！？」

「起きろルナール。そろそろ先に進むぞ。」

ルナールに反応は無い。

「今すぐ起きたら後で殴ってやる。」

「なにをしているんですか、早く行きましょう。」

ルナールは率先して俺たちの前を歩く。

・・・・・・・・・・速い。

ルナールの動きが全く見えなかった。

「・・・・腐っても魔王軍随一の暗殺者ですわね・・・・・・・」

リリィが本当に残念そうな視線でルナールを見ていた。

ほんと、どうしてあんな風になってしまったんだろうか・・・・・・・・

俺たちは残念な視線のまま歩き始めた。

「そういえばお二人に訊きたいことがありましたの。」

リリィが突然口を開いた。

「なんでしょう、リリィ様。」

「ルナールも仁も、戦っている時無言でしたわね。」

「それがどうした。」

「あなたたちの技に名前は付いておりませんの?」

・・・・・・・・何を言い出すんだこいつは。

「リリィ様、なぜそのようなことを・・・・・・・?」

「昔、お姉様にお聞きしたことがありますの。」

姉がいたのか。

「技と言う物は名が付いて初めて完成すると。お姉様は名の付いている技と付いていない技では、自然に大きな差ができてしまうものだとおっしゃっていましたわ。」

そういえば親父もそんなこと言っていたな。

リリィの言葉に俺は苦笑を漏らした。

「リリィ様・・・・・・・これでも一応、私は暗殺者なのですが・・・・・・」

「そうですわっ！」

ルナールの言葉など耳に届いていない様にリリィは大きな声で言った。

「昔、ギルドには『ギルドの誓い』と言う絶対に守らなければならない『誓い』があったと本に書いておりましたわっ！」

イタイ予感。

「私のギルドの『誓い』は技名は必ず叫ぶ。と言う物にいたしますわっ！」

予感的中。

「当然拒否権はありませんわっ！　破った者にはそれ相応の罰を与えますわっ！」

リリィの宣言に俺は溜め息を吐いた。

「・・・・・・・・一つよろしいでしょうか。」

「どうしましたの、ルナール。」

「アレは、いかがいたしましょうか。」

「アレ？」

見やると老人がうずくまって泣いていた。

・・・・・・・・・・・・誰だ、アレ。

第四十七話　変な誓い、立てるな！（後書き）

次は老人の話です。
幽霊？　です。
そして次回からは戦闘時に技名を叫ぶことになりました。

第四十八話　ちょっと、急ぐか！（前書き）

そろそろあいつと再会します。

第四十八話　ちょっと、急ぐか！

「そしてわしはこう言ったのじゃ・・・・・「君以上に大切な人などいない。」と。」

この屋敷に住んでいたという老人は、延々と昔話を続けている。

「彼女はわしの愛を受け入れてくれてのう・・・・・・・・・わしらはこうして結ばれたのじゃ。」

「・・・・何度聞いても素敵なお話ですわ・・・・・・・」

リリィは老人の話を聞いて感動している。

いやほんとに何度目だろう。

最初はこの屋敷についてなどの真面目な話だったのだが、いつの間にか爺さんの惚気話になってしまっていた。

しかも同じ話を何度も何度も。

少なくともう二桁は超えている。

リリィは話を聞く度に感動している。

いろんな意味ですごい奴だ。

「・・・・・・・・・・んっ？」

その時、俺は異変に気付いた。

ルナールがいなくなっている。

気配を探ってみたが、感じ取れない。

トイレにでも行ったのか・・・・・・・・・？

だが、リリィに黙って行くとは考えにくい。

「リリィ、ルナールの奴が――――――――――――――――――」

視線の先には誰もいない。

「・・・・・・・・・参ったな。」

どうやら分断されたようだ。

「まっ、ルナールは俺の攻撃に耐えられるくらい頑丈だから平気だとして・・・・・・」

問題はリリィの方だ。

典型的な魔法使いであるあいつが一人で行動して平気だろうか。

それ以前にあの爺さんが敵だったとしたら――――――――――――――――

「早く合流する必要があるな。」

あれほど相性の良いツッコミを失うのはあまりにも痛い。

俺は廊下を駆け出した。

しばらく走っていると、複数の気配を感じた。

今は時間を掛けていられないってのにっ！

現れたのは壊れた人形たち。

ホラー映画などに良く出てくるビスクドールだ。

手に大きなナイフを持ち、口元がケタケタと動いている。

「邪魔だっ！」

剣を一閃させて人形たちを斬り裂く。

直後、斬り裂かれた人形たちの体から複数の長く太い針が伸びた。

「ちっ！」

舌打ちしながら俺は大きく後退した。

針は廊下に突き刺さる。

かなり頑丈そうで少しの攻撃じゃ壊れそうにない。

「道が塞(ふさ)がれたか・・・・・・・・・」

気配を感じて振り向くと、後ろからも人形たちが迫ってきていた。

前からも多くの人形たちが迫ってくる。

「・・・・・・・・・・・・人形風情が。」

リリィの言葉を思い出す。

確か、技の名前は必ず叫ぶだったか。

少々恥ずかしいが、ストレスの発散にはなりそうだ。

本気になっても今は誰も見ていないし。

周りの被害が大きすぎるから、この技は一人のときにしか使えない。

「幻魔(げんま)――――――――――――――――――――」

俺は剣を上に掲げ――――――――――――――――――――

「滅煉陣(めつれんじん)っ！」

その名を叫んだ。

俺は走りながら少し反省していた。

やりすぎた。

さっきの一撃、下手をすると洋館そのものを壊していたかもしれない。

かなり威力を抑えたつもりだったのだが、まだまだ制御が甘いようだ。

と、曲がり角からまたも気配を感じた。

今度は一つだけだった。

しつこいな・・・・・・・・

俺は曲がり角から出てきた人影に軽く剣を振り下ろした。

「くっ！」

人影は俺の剣を剣で受け止めた。

あれっ？　この太刀筋はまさか――――――――――――――――――っ！？

「お前はっ！？」

「仁っ！？」

忘れるはずがない腐れ縁の顔がそこにあった。

「・・・・・・これはいったい・・・・・・」

はぐれた仲間を探していたラフィは立ち止まった。

立ち止まらざるを得なかった。

粉々に破砕された廊下と人形たち。

ところどころに焼け焦げた痕跡が存在していることから、最上位の炎系の魔法でも使われたのだろうか・・・・・・・・・・？

「早く皆さんと合流しなければ・・・・・・・・・・！」

これほど危険な敵がいるとは考えもしなかった。

軽い気持ちで依頼を受けたことを後悔しながらラフィは全力で走りだした。

第四十八話　ちょっと、急ぐか！（後書き）

東間との再会です。
理香はもうちょっと後です。
ちなみに酒場の依頼は誰かが掲示板から取った場合、酒場のマスターが同じ物を貼り直します。
手に取った依頼は、後は他のギルドが解決の報告をするだけの物だった。などということもたまにあります。
解決した物は貼りません。

第四十九話　いきなり、どうした！（前書き）

前回までのあらすじ。
腐れ縁（その一）と再開しました。

第四十九話　いきなり、どうした！

「・・・・・・・お前は誰だ。」

鍔迫(つばぜ)り合いをしながら馬鹿がそんなことを口にした。

「非道い奴だ。俺の顔を忘れたのか。」

「お前は仁じゃない。」

断言されました。

俺は剣をはじき、一旦距離を置いた。

「僕に同じ手は二度も通じないぞ。」

「・・・・・・・なんのことだ。」

馬鹿は剣の切っ先をこちらに向ける。

「さっきは理香で今度は仁か。どうやって僕の大切な人の偽物を作っているのかは知らないが、僕を怒らせるだけだぞ。」

おいおい。

「なんで俺が偽物だって分かる。そんな証拠は一つもないだろ。」

東間は更に顔を険(けわ)しくした。

「ふざけるなっ！　お前が本物の仁ならメイドさんがいるはずだっ！」

「はぐれただけかもしれないだろ。」

「本物の仁なら、仲間とはぐれたときにそんなに落ちついているはずがないっ！」

お前どれだけ俺を美化しているんだ。

「偽物の存在を許すつもりはないっ！　さっきの理香の偽物と同じ様に倒してやるっ！」

馬鹿は剣を構えた。

・・・・・・・・・やれやれ。

「これ以上話をしても仕方ないか・・・・・・・」

「それはこっちのセリフだっ！」

俺も剣を構える。

「来いよ。遊んでやる。」

「遊ぶつもりなどないっ！」

馬鹿が足を踏み出した。

「あれっ？」

「理香、どうかなさいましたの？」

「・・・・・・・・・ううん、なんでもない。」

たぶん気のせいでしょ。

私は再び歩きだした。

少し前に新しくギルドを作った私たちは、この屋敷を調べるという依頼を受けた。

竜人の国に行く前に丁度良い経験になるだろうと言う理由で受けた依頼だったが、調査を続けているうちにみんなとはぐれて一人になってしまった。

たぶんこの屋敷に巣食う何者かの仕業だと思う。

しばらく一人で歩いているとリリィに出会った。

彼女も仲間とはぐれていつの間にか一人になってしまっていたそうだ。

同じ境遇の私たちは一緒に行動することになった。

「それにしても二人ともどこに行ってしまったのかしら・・・・・・」

「やっぱり心配？」

「・・・・・・・そう、ですわね・・・・・・でも・・・・・」

リリィは少し考えてから口を開いた。

「・・・・・・二人とも私（わたくし）よりもずっと強いですわ・・・・・・・私ごときが心配する必要などないくらいに・・・・・・」

「・・・・・・・それは違うと思うわ。」

不安そうな表情のリリィに、私は話しかける。

「大切な人の心配は誰だってしていいと思うわ。例えそれが自分よりも遥かに強いと分かっていても。」

「・・・・・・・ですが、私不安なんですの・・・・・・・」

リリィの顔はますます曇（くも）っていく。

「今の私は確実に二人の足手まといでしかありませんわ・・・・・・・こんな私が一緒にいていいのかしら・・・・・」

「なら強くなればいいわ。」

弱気なリリィに私は強く言った。

「置いて行かれたくないのなら、追いつくまで走り続けるしかないわ。相手が走っているのならそれよりも速く走り続ければいいだけよ。そうすれば――――――――――――――」

あの時から私がいつも自分に言い聞かせている言葉。
あいつが一般人にこだわり続けるようになってしまったのは私の責任。
だから私は――――――――――――――――――――――――――――――
「――――――――――――――いつかきっと隣を走ることができるわ。」
リリィはしばらく私を見続けていたが、不意に頬を緩めた。
「不思議ですわ・・・・・・・今まで私が胸の内にある不安を口に出したのはお姉さまだけでしたのに・・・・・・・・・それに理香の言葉は私の胸に響き渡りますわ・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・実は私もこのことは人にはあまり言わないのに、なぜかリリィには言っちゃったわ・・・・・・・・・」
リリィはフフッと微笑(ほほえ)んだ。
「私たち、相性が良いのかもしれませんわね。」
「そうね。」
私も笑顔で返す。
「・・・・・・・・・つきましては、その・・・・・・・・・一つお願いがありますの・・・・・・・」

リリィが顔を赤くしながらつぶやいた。

「なに？」

「・・・・ええっと・・・・・・・・私と、お友達になってくださいませんか・・・・・・・・」

なんだ。そんなことか。

「何言ってるの、私たちもう友達でしょう。」

私の言葉でリリィが真っ赤になりながら笑顔を浮かべた。

その笑顔は本当に可愛かった。

「・・・・・・・・・・・・仁。」

「なんだ。」

再び鍔迫り合いを行っている最中、馬鹿が口を開いた。

「・・・・・・・・今、ほのかに百合（ゆり）の香りがしたような気がしたんだが・・・・・・・・」

「お前壊れたのか。」

「・・・・・・・・・・・いや、なんでもない。」

第四十九話　いきなり、どうした！（後書き）

次回で戦います。
後、この作品は百合ではありません。

第五十話　やっぱ、駄目だな！（前書き）

呪いの洋館編はまだしばらく続きます。
ちょっと短めです。

第五十話　やっぱ、駄目だな！

「光よっ！　照らせっ！　閃光（シャイン）っ！」

馬鹿の手から閃光がほとばしる。

目暗ましか。

「小賢しいな・・・・・・・・」

つぶやきながら俺は目を閉じて気配を探った。

気配は正面から近づいてくる。

斬撃が風を切る音と共に。

俺はその音に合わせて剣を振るった。

二つの剣がぶつかり合う。

「はあぁっ！」

馬鹿が剣に力を込めるので俺は軽く受け流してやった。

「うわっ！？」

案の定、よろけて体勢を崩す馬鹿。

「ほれっ、受け止めてみろ。」

俺は剣を振り下ろした。

「くぅっ！」

馬鹿は中腰姿勢になってギリギリでそれを受け止める。

「下ががら空きだ。」

俺は馬鹿の足を払った。

「痛っ！？」

こけて仰向(あおむ)けになった馬鹿の頭に勢い良く足を降ろす。

横に転がって避ける馬鹿。

馬鹿が避けたので俺の足は廊下の床を踏み砕いた。

「・・・・・・・危なかった・・・・・」

安堵の息を漏らす馬鹿。

そのままキッと俺を睨みつける。

「・・・・・・偽物とは言え、流石は仁ってことか・・・・・・・・・」

「お前こそやるじゃないか。」

「偽物に褒められても嬉しくない。」

頑(かたく)なな奴だな。

「だ～か～ら～、俺は本物だって言ってるだろうっ！」

「嘘をつくなっ！」

「嘘じゃないってっ！」

「嘘だっ！」

「嘘じゃないわけじゃないっ！」

「・・・・・・・・・やっぱり偽物なんだなっ！」

・・・・・・・・・・むう・・・・・・

やっぱりリリィじゃないと、ちゃんとツッコミを入れてくれないみたいだな。

「行くぞっ！　お前の化けの皮を剥(は)がしてやるっ！」

剣を床に突き刺し、なにやらつぶやき始める馬鹿。

馬鹿の両手に光が集まり始める。

・・・・・・・・・・ルナールはこっちが追い詰めていたから冷静に考えることができなかったんだろう。

それでもルナールはたぶん短時間で唱えられる物の中で最強の一手を選択したはずだ。

だが今は戦況はほぼ五分。

少なくとも追い詰めてはいない。

なのに一対一かつ近距離で長期詠唱を始める。

・・・・・・・・馬鹿に拍車がかかったのか。

「閃光よっ！　我が手に集いて我に仇為す者を貫けっ！」

光が膨れ上がっていく。

俺は黙ってそれを見ていた。

ルナールのときのように邪魔をしない。

「閃光壊精波(ルミナスブラスト)っ！」

光の奔流(ほんりゅう)が俺を包み――――――――――――――――

炸裂した。

「っ！？　今のはっ！」

「うなぁ～？」

爆発音を聞いたメアリは走り出した。

「メアリ～、待つにゃ～っ！」

慌ててリャナも走り出す。

爆発音ということははぐれた仲間の誰かが戦っているということ。

「リャナさんっ！　急ぎますよっ！」

メアリはリャナの返事を聞かずに速度を上げた。

第五十話　やっぱ、駄目だな！（後書き）

戦いはまだ続きます。

第五十一話　面倒だな、おい！（前書き）

東間との戦いはもう少し続きます。

第五十一話　面倒だな、おい！

光が収まっていく。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・」

馬鹿は肩で息をしていた。

「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・・・これで終わりだ・・・・・・」

馬鹿が後ろを向く。

「何が終わりなんだ。」

「っ！？　何っ！？」

俺は先ほどと変わらぬ位置に立っていた。

あちこちに傷が付いていたがそれだけだ。

「・・・・・・・・・やっぱりこの程度か・・・・・・・・」

「お前・・・・・・・どうやってっ！」

うろたえている馬鹿に俺はやれやれと首を振った。

「別に何もしていない。普通に攻撃を食らっただけだが。」

「馬鹿なっ！　今のは僕が使える中で一番威力のある魔法なんだぞ

っ！」

「馬鹿はお前だと思うけどな。」

俺は肩をすくめた。

「くっ・・・・・・どうやって凌(しの)いだかはわからないが、それなら直接斬るだけだっ！」

馬鹿は再び剣を構える。

「直接斬るねぇ・・・・・・・・」

俺も剣を構え直す。

丁度その時だった。

「東間様っ！」

少し離れた場所にメアリとリャナ（確かそんな名前だった）が現れた。

・・・・・・・・・ふむ。

「メアリっ！　リャナっ！」

東間が後ろを振り向いた。

やっぱ馬鹿だ。

俺は間合いを詰めて剣を横に一閃させた。

「東間様っ！　前っ！」

メアリの声に素早く反応して俺の攻撃を防ぐ。

が、完全には防ぎきれずそのまま吹き飛び壁に叩きつけられてしまった。

「あぐっ！？」

「東間様っ！　大丈夫ですかっ！」

メアリが東間に駆け寄った。

「光よっ！　この者の傷を癒やせっ！　光治癒（ライトヒール）っ！」

恐らく回復魔法であろう穏やかな光が馬鹿を包みこんだ。

・・・・・・・特に外傷は見当たらなかったんだが、回復する必要があったのだろうか？

「ありがとう、メアリ。」

「いいえ、遅くなってしまって申し訳ありません・・・・・」

東間の顔を見ながら頬を赤く染めていたメアリは、突然キッとこちらを睨みつけた。

「仁っ！　従者の立場にいながら東間様に危害を加えるとはどうい

うつもりですかっ！」

・・・・・・・う～ん・・・・・・・・・・・・

はっきり言ってメイドさんの方が数万倍怖い。

「無駄だメアリ。こいつは仁の偽物、たぶん魔族が変身しているんだ。」

東間が立ち上がりながらそう言った。

お前まだそんなことを言っているのか。

「・・・・・・東間様の大切な従者に化けて油断を誘うということですか・・・・・・・」

メアリは杖を構えた。

「外道ですね。」

東間はメアリをかばうように剣を構えながら前に出る。

「一つ良いか。」

俺は剣を構えなおしながら言った。

「・・・・・・・何だ。」

油断せずに口を開く馬鹿。

「お前は俺のことを偽物だと言ったが、後から来たその二人が偽物じゃないという保証はあるのか？」

「・・・・・・・・・それは・・・・・・・っ！」

「私は本物のメアリヴェスタですっ！」

「だからそれを証明して見せろと言ったんだ。」

叫ぶメアリに俺は呆れた声で言った。

「・・・・・その手には惑わされないぞ・・・・・」

馬鹿はジリジリと間合いを詰める。

・・・・・・・・・はぁ。

どうしてこう面倒くさいことになるのかねぇ。

さっきの魔法発動する前に潰しておけば良かった。

「メアリっ！　援護を頼むっ！」

「わかりましたっ！」

馬鹿が一気に突っ込んできた。

「・・・・・・・・・うなぁ～・・・・・・・・・」

リャナは離れたところでその戦いを見ていた。

もちろんリャナは東間の味方だ。

しかし――――――――――――――――――――

「・・・・・・・うなぁ～・・・・・・・」

初めて見るはずの仁からかすかになつかしい匂(にお)いがする。

昔、喧嘩(けんか)別れをしてしまった姉の匂い。

そのせいでリャナは戦いに加わる気になれなかった。

第五十一話　面倒だな、おい！（後書き）

リャナの嗅覚はなかなか優秀なのです。

第五十二話　覚悟、決めろよ！（前書き）

メアリが増援に。
でもすぐに終わります。

第五十二話　覚悟、決めろよ！

「はぁっ！」

相変わらずの剣撃、しかし先ほどまでとは違うのは――――――――

「水よっ！　貫く槍となれっ！　水流槍（アクアスピア）っ！」

馬鹿の後ろから飛来してくる魔法。

炎や風、光や水。

様々な属性の魔法による攻撃。

メアリって優秀な奴だったんだな～。

しみじみと思った。

「よっと。」

まあ一発も当たってやらないが。

「でやぁっ！」

魔法を避けたことにより体勢を崩した俺に追撃を仕掛けてくる馬鹿。

だから甘いって。

俺は上から振り下ろされる剣を半歩身を引いてかわす。

「なっ！？」

馬鹿は驚愕の表情を浮かべる。

今更驚くようなことなのかねぇ。

「お下がりくださいっ！　東間様っ！」

声に従って下がる馬鹿と、入れ替わりで前に出るメアリ。

どうやら魔法が当たらないのは距離が離れているからだと思ったようだ。

・・・・・・・・・・やれやれだな。

たぶん前に出ても東間や理香やラフィなどが守ってくれていたのだろう。

それに恐らくだが、メアリは自分たちのパーティーよりも強い相手とまともに戦ったことがないみたいだ。

しょうがない奴だ。

「光よっ！　この者に裁きの――――――――――――――――」

言い終わる前に首筋に手刀を入れる。

何かを言う暇もなく倒れるメアリ。

「・・・・・・・・さて。」

俺が一歩前に出ると、馬鹿が一歩後ろに下がる。

また一歩前に出る。

一歩下がる。

「くっ・・・・・・・・・・っ！」

「どうした、かかってこないのか。」

近づくたびに後ろに下がる馬鹿。

「リャナっ！　援護をっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・」

リャナは動かない。

なるほど。どうやらこいつも気づいたみたいだ。

「どうしたっ！　リャナっ！」

「・・・・・・・・お前は東間じゃないにゃ。」

リャナは断言した。

「なっ――――――――――――――――――――」

「お前からは東間の優しい匂いがしないにゃ、お前は誰にゃ。」

匂いか。流石は獣人だな。

「何を馬鹿な――――――――――――――――――――――――」

「気づいていないとでも思ったか。」

俺の声に振り向く馬鹿。

「見た目はまあ良い線いっていると思う。だがおまえは東間じゃない。」

「・・・・・・・・・・・・いつから気づいた?」

馬鹿――――――――――――――――偽東間は笑みを浮かべる。

あの馬鹿が絶対浮かべない邪悪な笑みだ。

リャナは敵対心をむき出しにして間合いを取った。

「最初は少し違和感を感じた程度だったが、お前は三つほどミスを犯した。」

「へえ、訊いてもいいかい?」

俺は人差し指を立てた。

「ひとつ、あの馬鹿は誰よりも俺という存在を理解している。勝手

な美化は絶対にしない。」

次いで中指。

「ふたつ、あの馬鹿は偽物だろうが俺や理香を倒すことはできない。あの甘ちゃんにそんなことができるものか。」

最後に薬指。

「みっつ――――――――――――――――――――――――」

一呼吸置いてからはっきりと告げる。

「あいつはこんなに弱くない。あいつはいつだって俺の想像を超える馬鹿だ。」

「・・・・・・・・・・・・・くっくっく、なるほどね。」

偽東間は俺を嘲笑(あざわら)う様に見やる。

「どうやら君は勇者の仲間よりも勇者を信じているみたいだね。僕の調査不足だったよ。」

「・・・・・・・・・で、お前は何者だ。」

「そんなに知りたいなら教えてあげるよっ！」

俺の問いに偽東間は名乗りを上げた。

「僕の名はメタモルフォーゼっ！　この屋敷の主が作り上げた人造

モンスターさっ！」

「いや、正直お前の正体に興味はない。」

バッサリと切って捨てる。

「おれが聞きたいのは一つだけ。その姿でお前は誰かを殺ったのか。」

「ああ、仲間の身を案じているんだね。」

ニヤニヤと嘲笑しながらしゃべるメタ（以下略）。

「安心しなよ。この姿になってから初めて会ったのは君だから。」

「そうか。」

「もっとも、この屋敷に侵入した者たちが死ぬのは時間の問題だけどね。」

目の前にいる偽物の言葉を無視して、俺は安堵の息を漏らした。

東間や理香にリリィとルナールも無事か。

「・・・・・・・それだけわかれば十分だ。」

「？　何が十分――――――――――――――――――――」

言い終わる前にメタの体が壁に串刺しになった。

「げばっ！？」

傷口から透明な粘液のようなものが出てきた

「確かリャナだったか。」

「ふにゃっ！？」

「目を閉じて耳を塞(ふさ)いでろ。トラウマになるぞ。」

だがリャナは俺の言葉が届く前に気絶していた。

おっといけない、間違って殺気を向けてしまったか。

俺はリャナを一瞥(いちべつ)した後にメタを見た。

「・・・・・・・・・不幸な奴だ。」

俺はメタに同情した。なぜなら――――――

「このっ！」

剣で壁に傷をつけるもあまり意味はなかった。

迂闊（うかつ）だった。

いきなり壁が下りてきて閉じ込められてしまった。

早く脱出しないと・・・・・・・・・っ！

焦りの所為（せい）で東間は魔法を使うという選択肢を忘れているのだった。

第五十二話　覚悟、決めろよ！（後書き）

次で偽東間との戦いは終わる予定です。

第五十三話　それだけ聞ければ、十分だ！（前書き）

仁、本気で殺ります。

第五十三話　それだけ聞ければ、十分だ！

突然、メタの体が歪み液体となった。

液体のまま地面を滑るように移動すると、再び人の形となっていく。

ただし今度は知らない奴だった。

恐らくこれがこいつの基本となった姿なんだろう。

「こんなことをしても俺には何の意味もないぞっ！」

あっ、一人称が変わった。

俺は無造作にメタに近づいた。

メタは自分の腕を槍のように伸ばした。

「死ねぇっ！」

メタが高速で腕を突き出してくる。

俺はその腕を掴みへし折った。

「意味がないと言っただろうっ！」

へし折った腕が液体となってメタの体に戻っていく。

「魔法の使えない貴様に勝ち目などないっ！」

今度は両腕を槍のように伸ばし、俺を突いてきた。
俺は先ほどと同じように両腕を掴む。
「馬鹿めっ！　かかったなっ！」
両腕が液体となって俺の首に巻き付いた。
そのまま固体となって俺の首を締め付ける。
「このまま絞め殺してやるっ！」
メタが両腕に力を込める。
どうやら首の骨をへし折るつもりのようだ。
「ちなみに仲間はここには来れないよっ！　ここの場所はさっき空間が隔離されたからねっ！　どんなに大きな音が立っても気づかれないし、どんなに大きな魔力でも感知されないんだよっ！」
そうか。じゃああと確認するべきことは――――――――――――――
「・・・・・・・・・・一つ、いいか。」
首を絞められながら俺は尋ねる。
「んっ～？　命乞いなら聞いてやらんぞ。」

「さっきお前は調査不足とか言っていたが、いったいどうやって俺たちのことを調べたんだ。」

「ああ、そのことか。」

メタは俺のことを嘲笑しながら話し始める。

「調査って言っても実際に調べたわけじゃない。俺たちメタモルフォーゼは変身した相手の記憶や経験をコピーすることができるのさっ！」

「それにしてはお粗末な変身だったが。」

「まだ俺たちは完成したわけじゃない。記憶や経験も一部しかコピーできないし、変身するためにはこの屋敷のあらゆる場所に仕掛けられている魔法陣を踏ませる必要があるのさ。」

でっ、あの馬鹿はその魔法陣とやらを踏んでしまったわけか。

馬鹿な上にドジだな。

「それなら俺との戦いをどこかで見ているというわけじゃないんだな。」

「ああそうだ。だが貴様の情報は死体になった後でゆっくりと――――――――――――――――――――」

そこまで言ってようやく気付いたようだ。

首を絞められているはずの俺が平然としゃべっているという異常に。

「安心したよ。これで心置きなく全力を出せる。」

「きっ、貴様いったい――――――――――――――――――っ！」

メアリもリャナも気を失っている。

近くには誰もいない。

これで心置きなくこのクズを消せる。

「ああ、一つ前言を撤回させてくれ。」

俺は前に進み出た。

全力で何かを殺すのは本当に久しぶりだ。

ルナールのときは全力は全力でも殺すつもりはなかった。

今回は違う。

「楽には殺さないではなく、一瞬で殺してやる。」

「うっ・・・・・・・あ・・・・・・・・・・・・・」

メタは両腕を戻し尻もちをついた。

そして。

「う、うあああああああああぁぁぁーーーーーーーーーっ！」

絶叫しながら四つん這いで逃げ出す。

無論逃がしてはやらない。

前を見ていなかったメタは俺の足にぶつかった。

「ひぃっ！　なんで前にっ！」

俺はメタを見下ろしていた。

「こっ、この魔力っ！　貴様は人間ではないのかっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「おっ、お願いしますっ！　命だけは、どうか命だけはお助けをっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は何も言わない。

「こっ、この屋敷について知っていることを全て話しますっ！　もう二度と人を襲いませんっ！　だから命だけは――――――――――」

「お前、俺のことを人間じゃないのかと言ったな。」

俺は口を開いた。

「答えてやるよ。」

メタの顔が絶望で歪んだ。

「ただのイカれた怪物さ。」

屋敷が大きく揺れた。

「くっ・・・・・・・・・・一体この揺れはなんなんだ・・・・・・・・・・」

ルナールは屋敷内を駆けていた。

姫の護衛を任せられていたはずの自分がこの体(てい)たらく。

油断していたでは済まされない。

本来なら自決するべきなのだが、今は一刻も早くリリィを探し出す。

だが万が一のことが起こっていたら――――――――――――――――

「・・・・仁・・・・・・・・・・姫様を頼むぞ・・・・・・・・・・っ！」

ルナールは走る速度を上げた。

第五十三話　それだけ聞ければ、十分だ！（後書き）

しつこいようですが、仁が全力になるのはあくまでも人の目が無いところだけです。
特に東間や理香の前では絶対に全力を出しません。

第五十四話　また、新しいキャラかよ！（前書き）

題名通りです。

第五十四話　また、新しいキャラかよ！

廊下には外まで続く大きな穴が開いている。

どうやら空間を隔離していた魔法が解けたみたいだ。

メタは完全に消滅した。

文字通り塵一つなく。

奴の最後の絶望と恐怖で塗りつぶされた表情。

・・・・・・間違いなくこの姿を見たからだろうな。

俺は少し後悔していた。

一時（いっとき）の感情の高ぶりでこの姿になってしまったことを。

「・・・・・・・・・・・・・・」

俺は壁に突き刺さっている剣を左手で握り、引き抜いた。

刀身が鏡の様に変化した俺の姿を写し出す。

銀色の髪と紅い瞳。

それだけなら良い。

髪は染めた、瞳はカラーコンタクトと言えば済む話だから。

この世界では魔族扱いされる気がするが、それもまあ別に構わない。

問題はこの右腕。

明らかに人の物ではない漆黒の異形。

「・・・・・・・・・・・・はぁ。」

溜め息と共に俺は元の姿に戻った。

もちろん右腕も元に戻っている。

この力の制御に関しては両親から徹底的に叩き込まれている。

だが制御できてもあの姿は嫌いだ。

俺が人間ではないという証とも言える姿。

目を閉じればはっきりと思い出せる記憶。

あの日以来この姿は誰にも見せていない。

見た奴は全員消してきた。

あいつらを除いて。

「・・・・・・・・やれやれ・・・・・」

いつまでも鬱(うつ)モードでいても仕方がない。

心機一転、明るく歌でも歌うかっ！

・・・

俺は再び思考にふけった。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙だけが続く。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・

一目見た時からそんな気がしていた。

こいつは俺と同じく一度は使ってみたいセリフを言おうとしていると。

「・・・・・・・・俺はリューグ。リューグ・アヴェンジー。トレージャーハンターだ。」

「そうか。」

返事をすると俺は再び思考にふけった。

「・・・・・お前の名は？」

「貴様に名乗る名前は無いっ！」

「くそっ！　そのセリフもとられたっ！」

「ふはははははっ！　貴様は我には勝てんっ！」

俺はいかにも途中でやられる中ボス的なセリフを叫んだ。

実はこの手のセリフも一度使ってみたかったりする。

「くっ・・・・・・まだだっ！　まだ俺には支えてくれる仲間がいるっ！」

男――――――――――――リューグは誰もいない後ろを振り向きながら叫んだ。

「みんなっ！　俺に力を貸してくれっ！」

「無駄だっ！　貴様の仲間はすでに我が手中にあるっ！」

「なっ、なんだとっ！」

リューグは俺を睨みつける。

「卑怯だぞっ！　魔王っ！」

・・・・・中ボスっぽく言ってたつもりだったが、魔王認定されてしまった。

「ふはははははっ！　なんとでも言うがいいっ！」

「くそっ・・・・・・・・・どうすればいいんだ・・・・・・・っ！」

哄笑（こうしょう）を上げる俺と苦悩するリューグ。

そのまま時が流れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「冗談はそろそろ終わりにしよう。話が進まん。」

「そだな。」

真顔になったリューグに俺は同意した。

「俺は仁。影月仁だ。」

「・・・・・・・・変わった名前だな。」

「俺のことは気軽に麗(うるわ)しの影月閣下と呼んでいいぞ。」

「分かった。麗しの影月閣下。」

間髪入れずに返された。

・・・・・・・・やるな。流石は俺のライバル。

「それで、一体ここで何をしていたんだ。麗しの影月閣下。」

「答えてやる義理は無い。といいたいところだが――――――――――」

俺は一旦言葉を区切ってから、再度口を開く。

「お互いに知りたいことがあるみたいだし、情報交換をするというのはどうだ。」

「別に良いぞ。」

「よし。それじゃあまず俺から話そう。実は――――――――――――」

俺はリューグと情報を交換し始めた。

「・・・・・・・・・一つ訊いても良いか。」

「なんだ。まだ話の途中だぞ。」

「あそこに倒れている二人は誰なんだ?」

・・・・・・・・・あっ。

すっかり忘れていた。

俺は倒れている二人を一瞥(いちべつ)する。

「知らない奴らだ。」

・・・・・・・説明するのも面倒だし。別に良いよな。

「そうか。邪魔して悪かったな、続けてくれ。」

リューグも納得したみたいだ。

良かった良かった。

第五十四話　また、新しいキャラかよ！（後書き）

リューグ初登場です。
果たして彼はレギュラーの座を獲得できるでしょうか・・・・・

第五十五話　とりあえず、親睦を深めるか！（前書き）

仁も遊びたかったんです。
まったく進みません。

第五十五話　とりあえず、親睦を深めるか！

「というわけだ。」

「なるほど、そういうわけか。」

リューグは納得した様に頷いた。

「でっ、結局どういう事情なんだ。」

「いま説明しただろ。」

何を言っているんだこいつは。

「ほぉ・・・・・・・・知らない奴らだ。の次の言葉が、というわけだ。で納得できると本気で思っていたのか。」

なんだとっ！？

「話数を区切ったら説明が終わっているというのは、世界の常識だろうっ！？」

「とりあえずお前の頭がおかしいのは分かった。」

リューグは真顔で断言した。

「非道いっ！　非道いわっ！　あんなに尽くしてきた仕打ちがこれなのっ！？」

「お前と出会ったのは数分前のはずだが。」

「私のお腹にはあなたの子供がいるのよっ！？」

「お前女だったのか。」

「俺は男だっ！」

「じゃあ子供ができるわけないだろ。」

・・・・・こいつ・・・・・・・・・・強い・・・・・・・・・・・・っ！

リリィとは真逆ローテンションの鋭利なツッコミ。

更に俺のボケに合わせてボケられる柔軟な思考。

俺はリューグの手を両手で握った。

「俺たちの仲間にならないか。」

「断る。」

バッサリと切られました。

「そう言わずにっ、頼むっ！」

俺は頭を下げた。

「・・・・・・・・・どうして会ったばかりの俺を仲間に入れたが

るんだ。」

「お前が入ってくれたら俺たちのギルドが無敵になるからだっ！」

リューグは不審げな顔をする。

「・・・・・・・・・どういう意味だ？」

「お前の力が必要なんだっ！」

俺は力強く断言した。

「だから会ったばかりの俺の何を知っているんだと訊いている。」

「会ったばかりだろうと、この会話でわかったことがあるっ！」

「そっ、そうなのか・・・・・・・？」

リューグは戸惑うように言った。

「ああっ、そうだっ！」

「まっ、まあそこまで言うなら話くらいは――――――――――――――」

「お前が来てくれれば俺たちは笑いの頂点を取れるっ！」

「・・・・・・・・・・はっ？」

リューグの目が点になった。

「ハイテンションなツッコミのリリィっ！　物理的ダメージ担当のルナールっ！　ボケとツッコミ両刀使いの俺っ！　そしてローテーションツッコミかつノリの良いリューグっ！　まさに完璧な布陣っ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

リューグは冷たい視線を送ってきた。

「俺たちのギルドはこの世界のお笑いギルドの頂点に立つだろうっ！」

「帰る。」

立ち去ろうとするリューグに俺はしがみついた。

「待て待て待てっ！　お前にとっても悪い話じゃないだろうっ！」

「心配するなっ、お前たちは俺がいなくても大丈夫だからっ！」

俺を力づくで引き剥がそうとするリューグ。

「さっきも言っただろうっ！　俺たちが頂点に君臨するためにはお前の力が必要なんだとっ！」

「安心しろっ！　お笑いギルドなんてお前たちのギルド以外存在しないから、結成した瞬間からお前たちは世界の頂点だっ！」

「なんだそうなのか。」

俺はリューグの体から離れた。

「じゃあもうお前いらないから帰っていいぞ。」

俺はシッシッと手で追い払うような仕草をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

リューグは無言でこちらを見ている。

「どうした、まだ何かあるのか？」

「・・・・・・・・・・尋ねても良いか？」

「良いぞ。」

俺の言葉にリューグはゆっくり口を開いた。

「お前は俺の力が必要だ。と言ったな。」

「言ったぞ。」

「お前の言う俺の力って言うのは俺のお笑いに関しての力だったのか。」

「そうだ。」

「・・・・・・・じゃあそれ以外、俺には価値がないと言いたいのか？」

「当然だろう。」

「・・・・・・・・・ときどき、思うんだ。」

リューグは遠い目をした。

「憎しみで人を殺せたら、どれだけ楽だろうって・・・・・・・」

「それが成長するって言うことだ。」

俺はリューグの肩にポンっと手を置いた。

「そうか・・・・・・・・・」

「そうなのさ・・・・・・・」

俺たちはアハハハと朗(ほが)らかに笑った。

リューグは肩に置かれた俺の手を掴む。

「いい加減真面目に話さないとこの腕をへし折るぞ。」

「うん、わかった。」

笑顔のまま告げるリューグに俺も笑顔で返した。

「実はかくかくしかじかでこうなったわけだ。」

「へし折られたいんだな?」

腕がミシミシとやばい音を立て始めた。

「わかったわかったちゃんと話すから。それでどこまで話したっけ？」

「この屋敷に着いたところまでだ。」

「じゃあその続きからか。確かこの屋敷に着いた後俺たちは――――――――――――――――――――」

俺は話の続きを話し始めた。

「天よっ、いつまでこの理不尽な扱いは続くのですかっ！」

「メイドさん？　突然どうしたんですか？」

フレスは意味不明な発言をするメイドさんを見やった。

「いえ。なんでもありません。」

「メイドさん、真面目にマスターを探さないとアイリスが本気で怒りますよ。」

「真面目に探していますよ。ただ――――――――――――――――」

メイドさんは空を見た。

「もしあの阿呆が私たちのことを忘れて遊んでいたら、どんな目に合わせてやろうか考えていただけです。」

「・・・・・・・・流石にあのマスターでも僕たちのことを忘れるなんてないと思いますけど・・・・・・」

「だと良いのですが。」

第五十五話　とりあえず、親睦を深めるか！（後書き）

メイドさん久々の登場、そしてまたしばらく出番なし。
次回は少しは進みます。

第五十六話　うわぁ～、面倒くせえな！（前書き）

予告通り、少しは話が進展します。

第五十六話　うわぁ～、面倒くせえな！

「というわけだ。」

「なるほど、そういうわけか。」

リューグは納得した様に頷いた。

言っておくが今度はちゃんと簡潔に説明した後だ。

「しかしまあ、最初のクエストで随分と大変なことになっているな。」

リューグは苦笑しながら言った。

「そうでもないさ。」

俺も苦笑した。

「今度はそっちの番だぞ。」

「ああ、俺がここに来た理由は――――――

リューグがここに来た理由は要するとこうだ。

宝探しに来た。

以上。

「これからどうするつもりだ。」

リューグが尋ねてきた。

「そうだな・・・・・・・・とりあえず他の奴らを探すさ。」

「あれは？」

リューグの指差した方向には倒れている二人が。

・・・・・・・そういやあいつらがいたんだっけ。

気絶したまま放っておいて面倒なことになられても困るしな・・・・・・

「ちょっと待っててくれ。」

「やはり知り合いだったのか。」

リューグの問いに答えず、俺はまずリャナに近づいた。

「おーい、起きろー。」

しゃがみ込み頬をペチペチ叩いてやった。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・にゃ・・・・・・・・」

リャナが反応する。

「・・・・・・・あと・・・・・・・・ごふん・・・・・・・」

「ベタな寝言ほざいてんじゃねえ。」

頭を軽く殴った。

「・・・・・・・・ふにゃ～・・・・・・・・」

そのショックでリャナは目を擦(こす)りながら起き上る。

少しすれば完全に目覚めるだろう。

俺は立ちあがりメアリの方へ向かった。

そのままメアリの前に立つと腹を踏みつけた。

「げぼっ！？」

一気に意識を取り戻すメアリ。

べっ、別にさっき攻撃されたことを根に持っていたわけじゃないからねっ！

勘違いしないでよねっ！

「げほっ、ごほっ、ごほっ・・・・・・・・・・」

メアリが咳き込みながら起き上った。

肺炎か？

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・ここは・・・・・？」

「うにゃ～・・・・・・・・・・」

メアリが周囲を見渡しているとリャナが立ち上がりこちらへ向かってきた。

「行くぞ。」

俺は歩き出した。

「お前は・・・・・・・・・・さっきの偽物っ！」

メアリが叫ぶ。

ああ～・・・・・・・そういやこいつメタのことを知らないんだっけ・・・・・・

ますます面倒くさいな～。

「東間様・・・・・・・・・東間様はっ！？」

慌てて再び周囲を見渡すメアリ。

「あの馬鹿はここにはいない。」

「偽物っ！　東間様をどうしたっ！」

メアリが立ち上がり杖を俺に向けた。

恋は盲目とは良く言ったものだ。

だが面倒なことには変わりない。

・・・・・・いっそ殺すか？

「メアリっ、違うにゃ！」

リャナが抱きついてメアリを止める。

「リャナっ！　どうして止めるのっ！？」

「メアリっ、私の話を聞くにゃっ！」

リャナはここで起こったことを説明し始めた。

俗に言う少女説明中、というものだ。

「・・・・・そうでしたか・・・・・・」

メアリはリャナの説明で落ち着きを取り戻した。

「仁殿・・・・・ごめんなさい。東間様とはぐれてしまって、私は冷静さを欠いていたようです。」

「別に構わないさ。」

それだけ東間を大事に思ってくれているわけだし。

「それにしても・・・・・仁殿があの東間様の偽物を?」

「ああ、東間に比べればただの雑魚だったからな。問題無かったよ。」

「そうですか・・・・・・・・」

納得しきれていない顔のメアリ。

リャナもどうして自分が気絶したか覚えていないようで、しきりに首を傾げている。

「話はまとまったか?」

リューグが会話に入ってきた。

「あなたは・・・・・・・・?」

「俺はリューグ。トレージャーハンターだ。」

自己紹介とここに来た経緯を改めて説明するリューグ。

「それで、あんたらは？」

「申し遅れました。私は――――――――――――――」

こちらも自己紹介とここに来た経緯を説明し始める。

・・・・・・・・・えっ？　この流れだと俺も説明しなきゃならないの？

うわ～、面倒くせぇ～・・・・・・・・・

『・・・・・・・・ますか・・・・・・・・・』

んっ？　なんだ？

他の三人も不思議そうな顔をしている。

「いま何か言ったか？」

「いいえ・・・・・・・・・」

「俺も何も言っていないぞ。」

「言ってないにゃ。」

だが三人とも何かを聞いたようだ。

『・・・・・・・・聞こえますか・・・・・・・』

「・・・・・・・またか。」

「・・・・・・どうやら幻聴では無いみたいですね。」

・・・・・・・・・声の発している位置は・・・・・・・・・

『私の声が聞こえますか・・・・・・・・・』

俺の持っている剣だった。

「くひゃ、くひゃひゃひゃ・・・・・・・」

屋敷の一室に不気味な笑い声を上げる黒い衣がいた。

「あと少し・・・・・・・あと少しだ・・・・・・。」

黒い衣は大きなカプセルにある何かを見ながらつぶやいた。

第五十六話　うわぁ～、面倒くせえな！（後書き）

呪いの洋館編も終わりが見えてきました。

第五十七話　ありがちな、話だ！（前書き）

剣がしゃべりました。

第五十七話　ありがちな、話だ！

「よしへし折るか。」

ニッコリ笑って俺は右手で刀身を掴み力を込める。

『まっ、まままま待ってくださいっ！』

剣から抗議の声が上がる。

「仁殿っ！？　何をしているんですかっ！？」

「当然どうしたんだにゃ～？」

「あほだな。」

三者三様の抗議の声（一人悪口が混ざっていたような気がするが）が上がる。

『話をっ！　とにかく私の話を聞いて――――――――――――――――』

「おい剣。」

全ての抗議を無視して俺は短く告げる。

「言ったよな～・・・・・・俺はただの剣になれって言ったよな～・・・・・・っ！」

少しずつ力を入れていく。

ただし刀身にはヒビが入らないよう手加減して。

これから先使うのに万が一折れてしまっては大変だからな。

『もっ、ももももももちろん覚えていますっ！』

剣は必死に声を上げる。

「本当か？」

『はいっ！　本当ですっ！』

「そうか。」

俺は刀身から手を離した。

「余計なことを言ったらその瞬間にへし折るからな。」

最後の言葉に剣の震えが伝わってくる。

これだけ脅せば大丈夫だろう。

「余計なこと？」

メアリが食いついてきた。

リャナは特に気にしておらず、リューグは無表情で黙っている。

「仁殿、余計なこととは一体――――――――――――――――」

「メアリっ！　そんなことを聞いている時間は無いだろうっ！　早く剣から情報を得ないと東間たちが大変なことになるかもしれないんだぞっ！」

「えっ！？　ええっと、そうですね・・・・・・・・・？」

突然ハイテンションになった俺に困惑するメアリ。

ふっ、やはりこの戦法は使えるな。

「それじゃあ剣。お前の知っていることを話してもらおうか。」

『はい、わかりました。』

メアリが困惑している間に話を進める。

『私の名前はフーエ。この屋敷の主の娘だったものです。』

剣――――――――――――――――フーエは語り始めた。

『この屋敷は元々、五十年前に父が建てたものでした・・・・・・・・』

フーエは言葉を続ける。

『父はこの屋敷である研究をしていました。それが原因でこの屋敷

は変貌してしまいました・・・・・・・・・』

「どんな研究だ。」

『それは――――――――――――――』

俺の問いに言ったん言葉を区切るフーエ。

まあ屋敷の状況を見ればだいたいどんな研究かは予測できるがな。

『・・・・・・・・死者蘇生についてです。』

予想通りだな。

「随分な夢物語だな。」

リューグは呆れかえっている。

・・・・・今気づいたんだが、こいつもしかして俺とキャラがかぶってないか？

「うなぁ～・・・・・・ししゃそせいってなんなのだぁ～？」

「・・・・・死んだ人を生き返らせることですよ。」

メアリがリャナに説明する。

「そんなことができるのにゃ？」

『いいえ、不可能です。』

リャナの疑問に答えるフーエ。

『実際、父は残された時間では実現は不可能だと悟っていましたから。』

「残された時間ですか？」

今度はメアリが疑問を口にする。

『父は重い病を患っていました。一年持つか持たないか分からないほどの。』

「そんな男がこの状況を作ったって言うのか？」

リューグも疑問の声を上げる。

・・・・・・あれっ？　さっきと同じように俺も何か言わないといけないのかな？

『いいえ、父はすでに死んでいます。ですが――――――――――』

フーエの声に緊張が宿る。

まるでここからが本題だと言わんばかりに。

『父は死ぬ直前にある魔物を生み出しました。その魔物がこの屋敷を変貌させたのです。』

これも予想が付く。

『メタモルフォーゼ・・・・・・先ほど仁さんが倒した変身能力を持った魔物です。』

わかりやすい展開だな。

だがそんなことより――――――――――――――――

「誰が仁さんと呼んでいいと言った？」

俺は再び刀身を握る。

『ひぃっ！？　すいませんっ！？』

「仁殿っ！　話が進みませんっ！」

メアリが怒ったので俺は刀身から手を離した。

『あのぅ・・・・・・・それならなんと呼べばいいんでしょうか・・・・・？』

フーエが不安そうに訊いてきた。

・・・・ふむ・・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・

「仁で良い。二度は言わないぞ。」

『はっ、はいっ！　よろしくお願いします仁っ！』

フーエの言葉に満足する俺。

「素直じゃない奴。」

リューグがニヤつきながら俺に向かって言った。

失礼な。俺より素直な奴は元の世界でも数えきれない程度にしかいないと言うのに。

「それで、メタモルフォーゼがどうなったのですか？」

メアリがフーエに話の続きを尋ねた。

『メタモルフォーゼは父を殺して死体を取り込んだのです。』

話の続きが始まった。

「ところで、なんで最初会った時に俺に斬りかかってきたんだ？」

俺はさっきから気になっていたことを尋ねた。

『あの時はこれ以上犠牲を出さないために、気絶させてから外に出そうとしていたのです。幸いにも入口が何者かによって壊されていましたから、あなた方を脱出させるには今しかないと思いまして・・

・・・・・』

「剣の体でか？」

『・・・・・

第五十七話　ありがちな、話だ！（後書き）

フーエの声が聞こえるようになった理由は、次回で明らかになります。

第五十八話　さてと、ちょっと行ってくるか！（前書き）

フーエの話、後半です。

第五十八話　さてと、ちょっと行ってくるか！

『父の死体を取り込んだメタモルフォーゼは父の記憶と経験を手に入れ、父の代わりに研究の続きを始めました。』

フーエの話が続いている。

本当にありがちな話だったが、他の三人は黙って話を聞いているため（一人退屈そうにうとうとしていたが）俺も黙って話を聞き続ける。

『メタモルフォーゼは元々、父が己の命が尽きる前に己の分身とするために産み出した魔物です。父はメタモルフォーゼに自分を殺させて死体を取り込ませ、メタモルフォーゼを新たな自分として研究を続けようとしたのです。』

「・・・・・・・狂気の沙汰だな。」

リューグが口を開いた。

メアリもリューグの言葉に静かに頷く。

とりあえず俺も頷いておく。

『私もそう思い父を止めたのですが、父はすでに悪魔の研究に取りつかれていました・・・・・・・・・父を取り込んだメタモルフォーゼは父の記憶を持ちながらも、私のことを研究材料としか見ていなかったのです・・・・・・・』

フーエの声に悲しみが混じる。

「じゃあお前がリビングソードになっていたのは・・・・・・・」

俺の質問にフーエが答える。

『・・・・・・・メタモルフォーゼは自分の研究の成果を試すため、私を殺して生き返らせようとしました・・・・・・しかし・・・・・・・』

「失敗したのか。」

リューグの発言にフーエは首（そんなもの存在しないが）を横に振った。

『父の研究はある程度形になっていたようです。私の肉体を蘇らせることはできませんでしたが、魂をこの世界に留まらせることには成功しました。ですが魂だけの私はメタモルフォーゼにとってはただの失敗作だったらしく、適当な入れ物として剣の中に閉じ込められ屋敷内から出られなくされてしまいました・・・・・』

フーエの言葉が終わると、俺は気になっていたことについて訊いてみることにした。

「確か俺たちの前に多くの冒険者が来たはずだ。なぜ彼らに助けを求めなかったんだ。」

『今までは私の言葉が彼らに届かなかったからです。』

ああ、確かにそれじゃあ助けを求められんな。

言葉が届かないんじゃ、ただのリビングソードだし。

「って、それじゃあ今はなんで言葉が届くんだ？」

『メタモルフォーゼは新たに二体のメタモルフォーゼを産み出しました。』

堂々と無視しやがった・・・・・・・

『この二体のメタモルフォーゼは、この屋敷の結界を包む結界の要（かなめ）としての役割も持っていました。その結界は私の言葉が届くのを阻害する役割も持っていたのです。』

あっ、ちゃんと俺の質問に対する回答だったのか。

・・・・・・・・・待てよ。

「二体のメタモルフォーゼって俺が倒したのは一体だけだが？」

俺の疑問に少し考えてからフーエが口（だからそんなもの存在しないって）を開く。

『・・・・・・恐らく、他の場所でもう一体のメタモルフォーゼを誰かが倒したのでしょう。そのおかげで結界が消失し、私の言葉が届くようになりました。』

「誰かっていうと・・・・・・・・」

「きっと東間様ですっ！」

メアリが目を輝かせて言った。

まあ確かに東間にしろ理香にしろ、メタごときに負けるはずはないだろうが・・・・・・

「ならこの屋敷の結界とやらは消滅したのか？」

リューグの疑問に再びフーエが口（そんなもの存在しないと言っているだろうっ！　いい加減しつこいぞっ！）を開く。

『いいえ。確かに二体のメタモルフォーゼは結界の要でしたが、結界を張っているのはあくまでも最初のメタモルフォーゼです。彼を倒さない限り、この屋敷の結界が完全に消えることはありません。』

結局のところ、そいつの所に乗り込むしかないわけか・・・・・・・

俺は憂鬱な気分になった。

『ですが結界が弱まっているのも事実です。今なら屋敷内の隔離された空間が繋がっているはずです。』

フーエの一言でメアリの表情が明るくなった。

「なら東間様たちと合流することができるんですかっ！？」

メアリの叫びにフーエが首（しつこいって言ってるだろっ！　ぶっ殺されたいのかっ！）を縦に振った。

『可能です。ご案内しましょうか？』

フーエは俺の手から離れてフワフワと空中に漂い始めた。

そう言えばこいつ浮遊できるんだったな。

でもな・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・なんで勝手に俺の手から離れているんだ？　ただの剣。」

俺は浮遊している刀身を掴む。

『ひぃっ！？　すっ、すみませんっ！』

フーエは怯(おび)えた目（よしわかったっ！　ぶっ殺しに行くからそこで待ってろ作者っ！）で俺を見る。

「仁殿っ！　今はそんなことを言っている状況ではありませんっ！　早く行きましょうっ！」

メアリに急(せ)かされて仕方なく俺は刀身を離した。

解放されたフーエは俺から逃げるように浮遊しながら移動する。

メアリとリューグと俺はそれについて行く。

と、メアリは思い出したように立ち止まって先ほどから微動だにしていなかったリャナに声をかける。

「リャナさんっ！　何をしているんですかっ！　早く行きますよっ

！」

だがリャナは動かない。

「・・・・・・・・・リャナさん？　どうしました？」

メアリが心配そうに近づいた。

あっ、俺今オチが読めた。

「リャナさんっ！　どうしたんですかリャナさんっ！？」

一向に呼び掛けに応じる気配のないリャナ。

「・・・・・・・・・やはりそうか。」

静かに見守っていたリューグにもオチが読めたようだ。

「リャナさんっ！？」

メアリの必死な叫び声に――――――――――――――――――――――――

「ＺＺＺ・・・・・・・・・・」

ゼットゼットゼットっ！？　どんな寝言だっ！？

メアリは呆れているが、俺とリューグは驚愕を隠せなかった。

「・・・・・・・リャナさんっ！　起きなさいっ！　東間様たちのところへ行きますよっ！」

「・・・・・・・・・うにゃ～・・・・・・・まだもうちょっと～・・・・・・・」

リャナの寝ながらの訴えを、メアリはまったく聞き入れない。

「駄目ですっ！　行きますよっ！」

驚きで固まっている俺たちを尻目に、遠くからこちらの様子をうかがっているフーエの方へメアリはリャナの腕を引っ張りながら歩き始めた。

「ああ、ちょっと次元超えてくるから待っててくれ。」

「は？」

唐突過ぎる俺の言葉に、俺以外の全員が固まった。

俺は後ろを振り向き走る。

次元を超えるためには右腕を使う必要があるからな。

あの姿を見られるわけにはいかない。

正直あの姿にはなりたくないが、作者は俺を怒らせた。

誰にも見られない場所に立った俺は簡易結界を展開し、魔力を感知できなくしてからあの姿となった。

覚悟しろよ作者。

償(つぐな)いはしてもらうぜ。

第五十八話　さてと、ちょっと行ってくるか！（後書き）

さて次回はいよいよ――――――――――――
あれっ？　なんでここにいるの？　えっ？　しつこい？
償えって何を？　なんで拳をグーにしてるの？　ちょっと待って、
今あとがきのとちゅ

第五十九話　やっぱ、これだよな！（前書き）

危なかった・・・・・・・・・
作者ゆえに仁の好物を知っていたから助かりました・・・・・・・

第五十九話　やっぱ、これだよな！

「待たせたな。」

俺はいつもの姿に戻ってから待たせていたみんなと合流する。

時間はあれからほとんど経過していない。

下手をすると数日ずれることがあるので、今回の次元転移は上手くいったと言えるだろう。

「一体どこに行っていたんですか？」

メアリが責めるような口調で質問してくる。

「小用だ。」

本当のことを話すと面倒なことになるのでごまかしておく。

次いでリューグが口を開いた。

「・・・・・何を持っているんだ？」

全員の視線が俺の持っている袋に集中する。

「ああ、これか。これは親切な奴にもらったんだ。」

「親切な奴だと？」

リューグは胡散臭そうな顔をする。

「・・・・・・良い匂いにゃ～・・・・・・・・」

「そんなことより早く行きましょうっ！」

リャナは匂いを嗅ぎながら腹の虫を鳴らす。

メアリは早く東間と合流したいようで、ひたすらソワソワしている。

三者三様の反応を見ながら俺は袋の中に手を入れて、中身を一つ取りだした。

取りだされた物を見て、リューグは眉をひそめた。

「・・・・・・・・・・何だそれは？」

「これは――――――――――――――――」

「魚にゃっ！」

リャナが目を輝かせながら飛びついてきた。

だが残念っ、これは渡せないなっ！

「よっと。」

俺は飛びついてきたリャナを避ける。

勢い余ったリャナはそのまま壁に激突した。

「フギャッ！？」

奇声を上げた後、うずくまって鼻を押さえるリャナ。

「これは駄目だ。誰にも渡すつもりはない。」

俺は頭から魚の形をしたそれを口に入れた。

うん。丁度良い焼き加減だし、あんこの味も絶妙だ。

やはりたい焼きは至高の食べ物と言えるだろう。

いや、むしろ人類最大の遺産と言うべきか・・・・・・・

「いい加減にしてくださいっ！　早く行きますよっ！」

俺がたい焼きの味に舌鼓を打っていると、突然メアリがキレた。

反抗期か？

『あのう・・・・・・一つよろしいでしょうか。』

フーエが俺とキレたメアリにビクビクしながら声を上げた。

「どうしたんですか？」

不機嫌なままメアリがフーエに聞き返す。

『何者かが高速でこちらに向かってきているんですけど・・・・・・

・どうしますか？』

・・・・・・・・敵か。

どうやら馬鹿をやり過ぎたみたいだ。

俺はたい焼き袋を懐に入れ、フーエを掴み構える。

「俺は様子を見させてもらう。」

リューグはそれだけ言うと後ろに下がった。

「援護します。」

「うなぁ～っ！」

杖を構えたメアリは若干後方へ、鼻の痛みから復活したリャナは俺の右隣に立った。

ここまで接近されたら嫌でも気づく。

かなりの使い手がこちらに向かってきているのがはっきりとわかる。

・・・・・・・・・・・・・んっ？　この気配は・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・なるほど。確かに大した使い手には違いないな。

「お前ら。構える必要はないみたいだぞ。」

「えっ？」

「にゃ？」

俺の言葉に呆けている二人に構わず、俺は地面に突き刺した。

『仁、知り合いですか？』

フーエの質問に俺は無言で頷いた。

気配はすぐそこまで来ている。

俺は中腰体勢になって足に力を込める。

気配の正体である最近見慣れた黒装束が視界に入った瞬間――――――――――――

「オーバーヘッドキーックっ！」

「じぶげぅ！？」

叫びと共に跳び上がってソレの顔にオーバーヘッドキックを入れる。

鼻血を流しながらルナールはゴミの様に転がって動かなくなった。

なんか名前が呼ばれかけた気がするが気にしな～い。

きれいに着地した俺は、ふと気になって周囲を見渡してみる。

全員が口を開けて呆然としていた。

「見ろっ！　人がゴミの様だっ！」

とりあえず叫んでみる。

いやぁ～、このセリフも一度は使ってみたかったんだよね～。

「仁殿っ！？　酷過ぎますっ！」

「うにゃーっ！　やっぱりお前は悪人なんだにゃっ！」

「見損なったぞ・・・・・・仁。」

『最低ですっ！』

非難轟々だった。

しまった・・・・・・ここ異世界だからこのセリフ知っている奴いないんだっ！

「うっ・・・・・・・・仁・・・・・・・・貴様・・・・・・・・・」

どうやって三人＋一振りの非難から逃れようか考えていると、タイミング良くルナールが意識を取り戻した。

チャンスっ！

「大丈夫かっ！　ルナールっ！」

俺はルナールに駆け寄った。

「誰がこんな非道いことを・・・・・・・許せないな・・・・・・・」

「・・・・えっ？　ちょっと・・・・・なに？」

ルナールは訳も分からず呆然としている。

「何？　立てない？　じゃあ俺が運んでやる。任せておけ。」

言葉と共に俺は両手でルナールを抱き上げる。

もちろんお姫様抱っこの姿勢だ。

「えっ？　わっ？　ちょっ？　えっ？」

鼻血を出しながら真っ赤になるルナール。

ふっ。どうだ俺のこの優しさ。

これなら奴らも俺に対する評価を上げるはずだ。

期待を込めて周りを見渡してみる。

・・・・・・・・・・・・・・すっごく白い目で見られました。

しくしく。

「・・・・・・・・・あっ！」

俺の腕の中で真っ赤になって固まっていたルナールが思い出したように口を開いた。

「大変よっ！　仁っ！　リリィ様が――――――――――――――」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

話を一通り聞き終えた俺たちは、その場に向かうために走り出した。

「ええっと・・・・・・・仁。」

「なんだ？」

「・・・・・・ううん、なんでもない・・・・・・・・」

俺の腕の中でルナールは真っ赤になったまま黙りこむ。

「朴念仁（ぼくねんじん）だな。」

俺が呆れていると、リューグが無表情のまま言った。

なぜリューグがこのタイミングでその言葉を言ったのかを考えながら俺は走り続けた。

第五十九話　やっぱ、これだよな！（後書き）

仁、珍しくルナールに優しい・・・・・・・・
フーエは仁の両手がふさがっているため、リューグが運んでいます。
後、仁のあのセリフはラ〇ュタ王のありがたいお言葉です。

第六十話　この先に、いるのか！（前書き）

ルナールはやはりルナールでした。

第六十話　この先に、いるのか！

ルナールの話は簡潔に言えばリリィと理香が一緒に行動し、ルナールが合流した後東間とも合流したそうだ。

その時に東間に化けたメタその二が現れたらしいが、東間本人に斬られて液体の姿になった際リリィと理香の魔法で蒸発したそうだ。

その直後、目の前に扉が現れ中から触手の様なものが飛び出しリリィを捕獲し中へと引きずりこんで行ったそうだ。

東間と理香は中へと突入し、一番足が速いルナールが俺たちを連れてくる役目になったそうだ。

本当はルナールが突入したかったらしいが、ルナールはあくまでも暗殺者。

敵がなんなのか分からない以上、純粋な戦闘能力で劣る自分が仲間を呼びに行く役目を負うしかなかったそうだ。

それにしてもリリィはともかく理香の奴の魔法もそんなに強力なのか・・・・・・

俺はあのツンデレチートに会うべきかどうか、真剣に悩みながら走っていた。

無論、真っ赤になったルナールを抱きかかえたままだ。

廊下は相変わらず薄暗いが目立った損傷個所は無い。

「・・・・・・・妙だな。」

走りながらリューグがつぶやいた。

「どうしたんですか？」

メアリがリューグのつぶやきに反応した。

「なぜ敵が出てこない？」

「・・・・・・どういう意味ですか？」

リューグの疑問にメアリが更なる疑問で返した。

「俺が屋敷内を調査していた時、嫌と言うほど肉塊や人形共が出てきた。」

「そういえば・・・・・私たちもそうでした。」

メアリが思い出すように言う。

「だが今は何も出てこない。なら考えられるのは――――――――――」

「罠、ですか。」

「あるいは襲う必要が無くなったか。」

リューグとメアリは表情を引き締めた。

「・・・・・・うなぁ～・・・・・・良く分からないのだ・・・・・・」

その後方でリャナは二人の会話について行けず混乱していた。

『あの扉の先が実験室ですっ！』

リューグの右手に持たれているフーエが叫ぶ。

むう・・・・考えている間に目的地へとたどり着いてしまった・・・・・

俺たちは扉の前で立ち止まる。

見るからに重そうな鉄製の扉。

屋敷内でこの扉だけ作りがまるで違う。

「皆さんっ、下がっていてくださいっ！　私が魔法で扉を壊しますっ！」

言って魔法を唱え始めるメアリ。しかし――――――――――――

『無駄です。この扉は魔法を反射する特殊な防壁が張られています。どれだけ強力な魔法でもこの扉を破ることはできません。』

「・・・・・・・・・そうなのですか・・・・・・」

フーエの言葉に詠唱を中止するメアリ。

「ならどうする。ここで扉が開くのを大人しく待つのか。」

リューグの言葉で全員が頭を悩ませ始めた。

具体的に言うと、口元に手を当てながらブツブツとつぶやくリューグ。

ソワソワしながら心配そうに扉を見ているメアリ。

考えることを放棄したらしく格闘技の練習をし始めるリャナ。

無表情（顔ないし）で黙っているフーエ。

俺の腕の中で赤面したままうつむいているルナール。

・・・・・・・・・・・・・・・

実はあいつらの心配しているのってメアリだけなんじゃ・・・・・・・・・

「・・・・あの・・・・・・・・・仁。」

「ん？」

ルナールが口を開いた。

「仁なら・・・・・・・・・この扉をこじ開けられるんじゃ・・・・・・・・・」

「できるぞ。」

俺は即答した。

「本当ですかっ!?　仁殿っ!?」

メアリが目を輝かせながら詰め寄ってきた。

「正直、あまり乗り気はしないがな・・・・・・・」

俺は一歩引きながら答えた。

引いた分だけメアリが詰め寄ってくる。

「なら今すぐこの扉を開けてくださいっ！　方法は任せますからっ!!」

「わかったから少し離れろ。邪魔だ。」

メアリが俺から離れる。

俺たちの会話を聞いていたのか、いつの間にか他の奴らも俺に注目していた。

やれやれ・・・・・・この方法は使いたくなかったんだがな・・・・・

「仁。私は離れなくていいの？」

ルナールの疑問に俺は答えない。

答えるかわりに行動で示す。

俺はルナールを頭の上に掲(かか)げて――――――――――――

「えっと・・・・・仁、まさか――――――――――――」

全力で扉へ投げつけた。

そのまま俺も駆け出してルナールの背中に跳び蹴りを入れる。

「うおりゃぁっ！」

気合のこもった雄たけびと共に打ち込んだ渾身の蹴りは、ルナールから扉へと衝撃を伝えていった。

鈍い音が響き渡り、鉄製の扉とルナールが吹き飛んで行った。

着地した俺は息を漏らした。

うん。やっぱり硬い物を蹴るときは間にクッションがあった方がいいな。

「じゃあ行くか。」

周囲の視線が白い目を通り越して恐怖の対象を見る目になっていたことには、気づかないことにして俺は歩き出した。

俺が充分離れたことを確認してから三人が歩き出す。

少し進むと吹き飛んだ扉とルナールが落ちていた。

ピクリとも動かないが、とりあえず拾って肩に乗せた。

それにしても、俺が立ち止まると後ろの三人も立ち止まるのはなんでだろうか？

少し気になったが、俺は構わず歩みを再開した。

「・・・・・・・・・・・・ぅ・・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

ルナールがうめき声を漏らした。

「・・・・・・・さ・・・・・・い・・・・・・・・・こ・・・・・・・う・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・今気づいたんだが、こいつもしかして魔王よりタフなんじゃないのか・・・・・・・・

第六十話　この先に、いるのか！（後書き）

仁も言っていますが、仁はこの方法をやりたくなかったんですよ。
本当ですからっ！

・・・

第六十一話　あっ、俺死んだかも！（前書き）

呪いの洋館編そろそろ終わりが見えてきました。

第六十一話　あっ、俺死んだかも！

「これで終わりだぁっ！」

東間の一撃が異形の怪物を二つに裂いた。

「ギョオオオオオオオオオオオオオオンッ！！！」

怪物は悲鳴を上げながら崩れ落ちる。

その体はそのまま灰となっていく。

「・・・・・終わったわね・・・・・・・・」

「ええ・・・・・・そうですわね・・・・・・・・・」

肩で息をしている三人は怪物の最後を静かに見届けていた。

「ばっ、馬鹿なっ！？　わしの最高傑作が・・・・・・・・・っ！」

白衣を着た老人がうろたえながら尻もちをついた。

「・・・・・・・残るはあなただけです。」

東間は老人へと近づいて行く。

丁度その時だった。

俺たちが実験室に辿り着いたのは。

「・・・・・・・・う～わ～・・・・・・・・・」

すでに戦いは終わったようだ。

完全なる無駄足だよ・・・・・・・

俺は脱力した拍子にルナールを落としてしまった。

ルナールは頭から地面に落ち、鈍い音が実験室内に響いた。

その音で三人がこちらに振り向く。

「「「仁っ！？」」」

三人の叫び声はまったくの同時だった。

本当にどうでもいいことだが。

「・・・・・仁、ひさしぶりだね。」

「そだな。」

東間の言葉にあっさりとした返事を返す。

東間は苦笑しながらそれ以上何も言わなかった。

俺たちの間に言葉は不要というわけか。

それともこれから起こりうる惨劇に巻き込まれないようにするため

か。

「・・・・・・仁・・・・・・・・」

理香が震えている。

いや～ん。怖～い。

などと言ったら消し炭にされそうだ。

「・・・・・あんた、いままで――――――――――」

理香の瞳に怒りの炎が宿った。

前言撤回。

何も言わなくても消し炭にされそうだ。

「何してたのよーーーーーーーーーーーーーっ！！」

理香の手の平からすさまじい熱気を帯びた火球が放たれた。

だが甘いっ！

「バリアーっ！」

俺は落としたルナールを蹴り上げて火球にぶつけた。

火球はルナールに当たると火柱となりルナールを飲み込んだ。

・・・・・生きてるよね、ルナール・・・・・・

俺がルナールを心配していると火柱の中から槍が飛び出してきた。

「ほいっと。」

死角からの攻撃を俺は横に跳んで避けた。

「避けるなっ！」

「避けなきゃ死ぬだろ。」

「死ねっ！　いっそ死ねっ！」

繰り出される高速の連続突きを紙一重でかわしていく。

ヴェンリスほどではないが、やはり速いな・・・・・・・

「いつもいつもっ！　あんたは勝手に先に行ってっ！」

槍での薙ぎ払いを後ろに跳んで避ける。

「私や東間を置き去りにしてっ！」

再び理香の手の平から火球が放たれるが、単調な軌道だったので体を少しずらすだけで避けられた。

「どうしてっ！？」

今までで一番速い槍の一撃を右手で掴む。

掴んだ右手から血が流れ落ちる。

「どうしてっ・・・・・・連れて行ってくれないの・・・・・・・・っ！」

ポタポタと理香の瞳から流れる涙が床に落ちる。

「私じゃ・・・・・・・駄目なの・・・・・・・・？」

理香は槍を手放し俺の服を震える手で握りしめ、そのままうつむいてしまった。

・・・・・・・・・・はぁ。

こういうとき、なんて言えばいいんだろうな・・・・・・

俺は助けを求めるように周りを見た。

興味深そうに観察するリューグ。

こんな外道の何が良いのかしら。と言わんばかりの複雑な顔をしているメアリ。

退屈なのか腕立て伏せを始めるリャナ。

苦笑しながら見守る東間。

部屋の隅で震えながらうずくまっている白衣の老人。

本当に幸せそうな顔をしながら気絶しているルナール。
なにが気に入らないのか不機嫌なリリィ。
とリリィと目が合った。
リリィは俺の顔を見ながら名案を思いついたようにニンマリと笑った。
・・・・・・・すっごく嫌な予感がする。
「仁と理香は知り合いでしたの。知りませんでしたわ。」
ニンマリと笑いながら口を開くリリィ。
「ところで仁。前に私(わたくし)に言ったことを覚えていますわよね。」
リリィは一呼吸置いてから――――――――――――――
「私の物にならなってもいいと。」
爆弾発言をした。
「・・・・・・・・・・・なんですって?」
理香の震えが止まった。
かわりにとても濃密な殺気が溢れてくる。
「他にもそこに寝ているルナールを親しい人とも言いましたわよね。

」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無言のまま微動だにしない理香。

この感覚・・・・・・いついらいだろうか・・・・・・

まさかメイドさん以外に俺にここまでのプレッシャーを与える人物がいたとは・・・・・・っ！

「それに仁は私で遊んでいたとはっきりと言いましたわ。」

「・・・・・・・・・・そう。」

理香の手が俺の服から離れ、同時に右手から炎が生じる。

どうしてだろう、さっきとはケタ違いの高温のはずなのになんでこんなに寒いんだろう・・・・・・

理香がゆっくりと顔を上げる。

とても穏やかな笑みだったが、確信を持って言える。

この顔は修羅などと言う生易しいものではない。

これは修羅を食らう羅刹の顔だ。

命の危機を感じた俺は全力で逃げ出そうとする。

しかし俺よりも早く理香が左手で俺の腕を掴んだ。

「何か言い残すことはある？」

とても優しい声だ。

まるで死神が生者を死の世界へ誘う様な声。

俺は助けを請うように周囲に視線を動かしたが――――――――――

「誰もいないだとぉっ！？」

慌てて部屋の入口を見ると、リリィがルナールを引きずりながら走っていくのが見えた。

「それが遺言？」

どこまでも優しい声に俺は死の覚悟を決めて叫ぶ。

「この影月仁っ！　天に帰るに人の手は――――――――――」

「こんっの・・・・・・馬鹿ぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーっ！！！」

俺の叫びが終わる前に、瞬時に憤怒の形相となった理香の手から炎が放たれた。

炎は至近距離で俺に命中し――――――――――――――――――

大爆発を起こした。

「・・・・・・・・・わしの、わしの出番がぁ～・・・・・・・・・」

それが――――――――――――――――

この屋敷を悪夢の屋敷に変貌させたメタモルフォーゼ（オリジナル）の最後の言葉だった。

第六十一話　あっ、俺死んだかも！（後書き）

リリィのささやかな逆襲でした。
ちなみにあのセリフは、仁の言ってみたいセリフ集（最後の言葉編）でランキングトップだったセリフです。
そしてメタモルフォーゼ（オリジナル）は逃げ遅れた様です・・・・・

第六十二話　乙女の怒りは、恐ろしいな！（前書き）

今回はリューグ視点でお送りします。
理由は・・・・・・・・まあお分かりかと思います。

第六十二話　乙女の怒りは、恐ろしいな！

「ふぅ・・・・・・・なんとか助かったか・・・・」

大爆発の直前に、全力で屋敷の外に出ておいて正解だった。

もっとも、爆風に巻き込まれてかなり遠くまで吹き飛ばされたが。

ようやく屋敷の前まで戻ってきてみると、そこには――――――――

「これは・・・・・・・なんというか・・・・・・・」

完全に崩壊し原形を留めていない屋敷。

いや、もはや屋敷ではなく瓦礫の山と呼んだ方が良いだろう。

「・・・・・・げに恐ろしきは乙女の怒りか・・・・・・・」

俺は無意識のうちにつぶやいていた。

「おーいっ！」

声の方へ振り向くと、そこにはさっきの一団（仁と槍使いの女を除く）がいた。

あの女――――――――ルナールも平気な顔をして立っている。

あれだけの目にあっておきながら傷一つ残っていないとは・・・・・

・・・

「君、大丈夫かい？」

戦慄している俺に茶髪の男が話しかけてくる。

たぶんメアリヴェスタが言っていた東間というのはこいつのことだろう。

「そっちこそ、良くあの爆発に巻き込まれて平気だったな。」

「うん。メアリとリリィが咄嗟（とっさ）に魔法でバリアを張ったおかげで助かったよ。」

東間が後ろにいる二人を見る。

「そんな・・・・・お礼なんていいですよ東間様・・・・・」

「別に大したことはしていませんわ。」

頬を赤くしながら照れるメアリヴェスタとそっけなく答えるリリィと呼ばれた女。

なるほど。予想はしていたが、メアリヴェスタは東間にご執心なんだな。

「それにしても――――――――――――――――」

俺は改めて瓦礫の山を見る。

「まさかここまでの威力の魔法を放つとはな・・・・・・・」

『いえ、これは単に屋敷のダメージが限界を超えたのでしょう。』

俺のつぶやきに反応したのはフーエだった。

「どういうことだ？」

『この屋敷はもともと魔法による結界よって保(たも)たれていました。しかし結界と言っても全ての攻撃を防ぎきれたわけではなく、五十年の間にダメージが蓄積され続けました。そして結界の要である二体のメタモルフォーゼが消え、恐らく本体のメタモルフォーゼもあの爆発で倒されたのでしょう。そのため結界が完全に消失し、あの爆発と衝撃をまともに受けた屋敷は――――――――――――――」

「崩壊したというわけか。」

『そうです。』

フーエが肯定の言葉を漏らしたその時だった。

瓦礫の一部が崩れ、中から何かが出てきた。

俺たちは音のした方を見て――――――――――――――――そのまま固まった。

出てきたのは右手に槍を持った、とてつもなく不機嫌そうな煤(すす)だらけの女。

それはまあ予想通りと言える。

問題なのは彼女が左手に持っている物。

それは黒焦げの肉塊だった。

女は肉塊の足を持ち、引きずりながらこちらに移動してくる。

ピクリとも動かないので生きているのか死んでいるのかまったく判別できなかった。

槍使いの女は俺たちの前まで来ると、肉塊を手放した。

「メアリ。回復。」

「はっ、はいっ！」

短く告げる言葉にメアリヴェスタが即座に反応した。

「光よっ！　彼の者に癒しをっ！　天治療（エンゼルヒール）っ！」

強い光が肉塊を包み込む。

ああ。やっぱりあの肉塊は――――――――――――

「理香。今回はちょっとお仕置きが過ぎるんじゃないかな？」

「自業自得よっ！」

苦笑する東間に理香と呼ばれた女は怒りの言葉を吐く。

「理香・・・・・・・・・・」

リリィが理香に話しかける。

「リリィ・・・・・・あなたが言っていた二人って――――――――」

「ええ、ここにいるルナールと仁ですわ。」

理香の問いにリリィは頷いた。

ルナールは理香に向かって無言で一礼する。

「そっか・・・・・・・・・・」

それだけつぶやくと理香は黙ってしまった。

「理香、さっき私が言ったことは――――――――――――――」

「わかってる。」

リリィの言葉を理香が遮る。

「あの馬鹿・・・・・・・・・・私だけじゃなく、リリィも不安にさせるなんて・・・・・・・・・まったく・・・・・・・」

寂しそうなつぶやきは誰に向けられたものだったのか。

いずれにせよ、俺たちは仁の回復を待っているのだった。

「・・・・・・・・・・けほっ。」

瓦礫の中に煤だらけの人物がもう一人。

「・・・・・・・・・・いったい何が起こったのでしょうか・・・・・・・・」

その人物はラフィ・ヴィスマルク。

瓦礫を押しのけて仲間たちと合流するまで、誰もが彼女の存在を忘れていたのであった。

第六十二話　乙女の怒りは、恐ろしいな！（後書き）

次回で仁復活の予定です。

第六十三話　ようやく、目覚めたぜ！（前書き）

仁復活。
ただし完全復活ではありません。

第六十三話　ようやく、目覚めたぜ！

「いやほんと死ぬかと思った・・・・・・」

全身を包帯で巻かれ（魔法だけでは完治しなかった）ミイラ状態になった俺はつぶやいた。

やっぱあれだな。冒険に行くときには木彫りの熊を懐（ふところ）に入れておかないからこうなったんだな。

周りを見回すと、東間たち勇者パーティーにリリィとリューグがいた。

・・・・・・・・・・あれっ？　なんか足りなくないか？

「というか普通の人間なら確実に死んでると思うよ。」

俺が考え事をしているというのに東間が失礼な物言いをするので反発した。

「失敬な。俺ほど普通の人間など他にいないぞ。」

「「「「「「それはない（から。わ。だろ。ですわ。にゃ。）」」」」」」

その場にいた（ラフィ以外）全員にツッコミされた。

ちなみにラフィは体育座りをしながら虚ろな目でブツブツとつぶやいていた。

聞いた話によると、東間たち全員がラフィの存在を忘れていたことにショックを受けたそうだ。

・・・・・・・憐れだな。王国最強の騎士。

「それはそれとして。」

「それってなんだい？」

東間の無粋な質問を無視して俺は本題に入ることにした。

「依頼の方はどうする。屋敷は吹っ飛んだみたいだが・・・・・・」

「それについてはすでに話し合って決めましたわ。」

リリィが前に出てくる。

「そう。」

俺の素っ気無い態度にリリィは眉をひそめたが、そのまま話を続ける。

「まず、依頼の紙の一番下に万が一の時は屋敷を破壊しても良いと書かれておりますから成功ということでよいと思いますわ。」

「ふぅん。」

「報酬については理香たちに六割を、私たちが四割をいただくことになりましたわ。」

「へぇ。」

「あちらにいらっしゃるリューグという方は、何もしていないからいらないと言っておりましたわ。」

「ほぉ。」

「・・・・・・・・さっきからなんなんですの。その如何(いか)にも興味なさそうな言葉は。」

リリィが突然言いがかりをつけてくる。

「ソンナコトナイヨ～。ワタシキョウミシンシンアルヨ～。」

「なんですのっ!?　その珍妙な物言いはっ!?」

「方言だ。」

「方言っ!?　今まで普通に話していましたわよねっ!?」

「お前がそんな態度だから・・・・・・俺の家族は死んだんだっ!!」

「意味がわからない上に言いがかりにもなっていませんわっ!?」

「しかも生きてるよね。仁の家族。」

俺が楽しくリリィで遊んでいるのに、横から東間が割って入って来やがった。

「・・・・・・何のつもりだ。東間。」

「怪我の所為で感覚が鈍っているみたいだね。

東間は苦笑しながら俺の後ろを指差した。

俺は後方を振り向くと――――――――――――――――――

ニコニコ笑う悪鬼がいた。

「・・・・・・・・随分と楽しそうね・・・・・・」

はっ!?　違うっ!?　これは理香だっ!?

溢れ出る黒いオーラが理香を悪鬼に見せただけだった。

メアリ、リャナ、リューグは遠くへ逃げていた。

「とっ、ところで腹も減ったしそろそろ街に戻らないかっ!」

「えっ、ええっ、そうですわね。それが良いですわね。」

慌てて話をそらす俺とリリィ。

「リリィさん。ルナールさんはどうするんですか?」

東間は自分に殺気が向けられていないからか、呑気にそう言った。

って、ルナール?

その時、タイミングを見計らったように森の中から見慣れた黒装束が姿を現した。

「リリィ様。少しよろしいでしょうか。」

ルナールはリリィを森の中へとつれていった。

ルナールほどの暗殺者（性癖はともかく）なら理香の殺気に反応しそうなものだが・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿。」

理香が再び口を開き、それだけ言うと黙ってしまった。

不思議に思って理香の方を見やってから俺は気付いた。

理香から殺気が消えていることに。

俺はアイコンタクトで東間にどういうことだ。と訊いてみた。

返ってきた言葉は乙女心は複雑なんだよ。だった。

う〜む・・・・・・わけがわからん。

「仁。理香。東間さん。ちょっと話がありますわ。」

俺が悩んでいると、リリィとルナールが戻ってきた。

「実は私（わたくし）、一度お父様の元へ帰らなければならなくなりましたわ。」

そんな言葉と共に。

『あの～・・・・・・・・リューグさん。』

「なんだ。」

『私はいつになったら解放してもらえるんでしょうか・・・・・・・・』

「仁に訊け。」

『・・・・あぅ・・・・・・・・・・・・』

そんなこと訊いたら私折られちゃいます。

リューグにはフーエが言外にそんなことを言っている気がした。

第六十三話　ようやく、目覚めたぜ！（後書き）

次回、新展開の予定です。

第六十四話　どうする、どうすればいいんだ俺！（前書き）

仁に重大な決断が迫られます。

第六十四話　どうする、どうすればいいんだ俺！

リリィ達と別れてから俺たちは街へと帰還した。

リリィは父親との対話が終わったら合流するそうなので、この街で待っていてほしいとのことだ。

フーエは結局、俺たちと一緒に来ることになった。

屋敷内にいる間だけという話だったのだが、屋敷は壊れてしまったし今更解放されてもノラモンスターとして冒険者に壊されるだけだと優しく（ここ重要）教えてやったら震えながら一緒に来たいと泣きついてきた。

ただしリューグに。

リューグもフーエが憐れだったのか普通に受け入れていた。

まああれだけ脅してやったから余計なことは言わないだろう。

街に到着した俺は、一旦東間たち別れて一人で宿へと戻った。

「勝手にいなくなったら本気で怒るわよ。」

と理香に釘を刺されながら。

とはいえ久しぶりの自由には変わりない。

荷物を受け取ったら街をブラブラ散歩でもするか。

少し早足になりながら宿に到着すると店主から部屋にあった荷物を渡された。

一つの袋にまとめられた荷物の中から俺はある物を取り出す。

「あったあった。」

それはもちろん木彫りの熊（残骸）だ。

木彫りの熊（残骸）はあの時のままだった。

あの時は勝手に直っていたはずなのだが、今回は壊れたのままだ。

う～む・・・・・いったいどういうことなんだろうか・・・・・・

疑問に思いつつも、俺は木彫りの熊の雄々しき姿を思い出しながら懐に入れた。

さて、それじゃあ馬鹿どもと合流するか。

俺が宿の外に出ようとしたら、店主に呼び止められた。

「ちょっとあんた。もしかしてカゲツキジンって名前じゃないか？」

「そうだが。」

名乗った覚えは無いはずだが・・・・・・・

「やっぱりそうか。実はさっきメイドさんと二人の子供があんたの

ことを尋ねてきたんだよ。」

・・・・・・・・・・そうか。

短かったな俺の自由。

・・・・・・・・いや。まだだっ！

「それでそのメイドさんと二人の子供はどこにいる？」

俺が訊くと店主は上を指差した。

「緋色髪の少女は二階で寝てて、他の二人はあんたのことを探しに行ったよ。」

つまり今はまだメイドさんたちは俺の存在に気づいていないと。

この情報は大きなアドバンテージだ。

「なんなら寝ているあの娘を起こそうか？」

「いや。別に良い。」

どうする・・・・・・っ！

今この街を離れれば自由を満喫することができる。

しかしそれをやれば理香とリリィ、メイドさんの怒りを買うのは明白だ。

今度こそ本当に死ぬかもしれない・・・・・・・っ！

しかし今を逃せば自由は二度と無くなってしまうだろう・・・・・・・っ！

悩んで悩んで――――――――――――――――俺は結論を出した。

魔王城、転移の間。

リリィは転移魔法によってルナールと共に魔王城へ帰ってきた。

「姫様、お帰りなさいませ。」

従者や兵たちが一斉に頭を下げる。

「ただいま帰りましたわ。」

リリィは微笑みながら帰還の言葉を口にしてから歩き出す。

ルナールもその後ろへとついていく。

やがて大きな扉の前に着くと、扉が勝手に開いた。

リリィはそのまま進み、ルナールは扉の前で待機した。

周囲に誰もいない状況でリリィは玉座の前で止まり、うやうやしく一礼した。

「お父様。ただいま戻りましたわ。」

「うむ。」

玉座に座った男――――――――――――左目を眼帯で覆っている魔王は静かに頷いた。

今年で四十を過ぎるはずだが、見た目は二十代後半で通用する。

「お父様。重要な話というのは――――――――――――――――」

「まあ待て。その前に今回の社会勉強について聞かせてはくれないか。」

父親の言葉にリリィは少し考えてから答えた。

「わかりましたわ。まずは――――――――――――――――」

リリィは今回の旅のことを全て話した。

仲間になった仁やルナールのこと。初めての友人である理香のこと。最初の依頼で充実した時間が過ごせたこと。

リリィは気付いていなかったが、本当に楽しそうに父親に話をしていた。

魔王は娘の話にただ耳を傾けていた。

やがて話が終わると魔王はゆっくりと口を開いた。

「リリィよ。」

「はい。お父様。」

「楽しかったか？」

「はい。」

魔王の問いかけにリリィは一瞬の躊躇(ちゅうちょ)もなく即答した。

「そうか・・・・・・・・・・」

魔王はしばらくの間考えると再び口を開いた。

「リリィよ。今日はゆっくり休んで明日出発すると良い。」

「お父様・・・・・・・・・・・っ！」

「今回お前を呼び戻したのはお前がちゃんとやっていけるかが心配だったからだ。だがどうやら私の心配は杞憂(きゆう)に終わったようだ。」

魔王は愛娘(まなむすめ)に微笑みかけた。

「では下がってよいぞ。」

「はいっ。失礼いたしましたわっ！」

歓喜の声と共にリリィは玉座の間を去って行った。

そのまま部屋に戻り――――――――――――――――――の前にある人物の

部屋へと向かった。

「ねぇん。言ったとおりだったでしょうぉ～」

「貴様の言葉だけでは信用できなかったが・・・・・・娘からの情報とあってはな・・・・・・」

「失礼ねぇん。私はあの娘を千里眼で見守っているって言ったでしょうぉ～。」

「ふんっ。」

魔王は陰に潜んでいたバットを一瞥(いちべつ)してから虚空に視線を向けつぶやいた。

「まさか生きていたとはな・・・・・・・・スバルよ。」

第六十四話　どうする、どうすればいいんだ俺！（後書き）

魔王初登場です。
でも出番はしばらくありません。顔見せだけです。
下手をするとリリィ達も出番がしばらくなくなってしまうかも・・・・・

第六十五話　逃げじゃない、戦術的撤退だ！（前書き）

続きです。
ほぼ進みません。

第六十五話　逃げじゃない、戦術的撤退だ！

偶然にも東間様たちと再会した私は、仁がこの街にいることを知りました。

仁が生きている。

その報(しら)せを受けた私は表情には出しませんでしたが内心でほっとしていました。

東間様たちの話によれば、これから仁と合流するとのことです。

私はアイリス様に吉報をお届するべく（フレス様は後回しでいいでしょう。）宿屋へと向かいました。

「あっ、メイドさん。丁度良かった。」

アイリス様の部屋に向かおうとした時、宿屋の店主が私を呼びとめました。

「実はさっきあんたの探してたカゲツキジンって男が――――――」

話を聞いた私は寝ているアイリス様を持って東間様たちのところへと駆け出しました。

「メイドさん？　そんなに急いでどうしたんですか？」

「東間様。これを。」

私は先ほど店主から受け取った手紙を東間様に手渡しました。

手紙に書かれた文字は恐らく異世界の物で、私には読むことができなかったからです。

「仁からです。」

「っ！？　貸してっ！」

その名前を聞いた理香様は東間様から手紙を奪い取りました。

「・・・・・・・・・何と書いてあるのですか。」

「・・・・・・・・・・・・・」

無言で手紙を読んでいた理香様は、いきなり手紙を丸めて地面に叩きつけました。

「・・・・・・・・・・・・・っ！」

「どうなさったのですか？」

怒りに震える理香様は応えず、代わりに東間様が手紙を拾って声に出して読み上げました。

要約すると、先に竜人の国ルヒナへ行っていろいろと調査する。とのことです。

内容を聞いた全員の思いが一つになりました。

あの野郎、逃げやがったと。

理香様の怒り、良くわかります。

・・・・・どうやら・・・・少々きつめのお仕置きが必要のようですね・・・・・・・

水面から顔を出していた俺は背筋が凍るような感覚を覚えて、思わず後ろを振り向いた。

遠くの方で俺に殺意を抱いている奴がいる様な感じがしたんだが・・・・・

理香かメイドさんか。あるいは両方か。

どちらにせよ行動に移してしまった以上、引き返すことはできない。

陸路では獣人であるアイリスやリャナに匂いをたどって発見される危険があった。

そこで俺は近くを流れていた川に入り、頭に大量の葉を乗せて流れに沿って移動することにしたのだ。

「・・・・・・・そろそろいいか。」

川に入ってから約二時間。

川から上がって周りを見渡すと森に囲まれていた。

「ここは・・・・・・・・・どこだ。」

当たり前だがここがどこなのかなどまったくわからなかった。

・・・・・自由を求めるあまり、迷子になる危険性を考慮していなかったか・・・・・

俺は自分の迂闊さを呪いつつ歩き始めようとして――――――――――

「・・・・・・・仁。なにをやっているんだ?」

その声の所為で固まった。

ギギギッと壊れたブリキのおもちゃの様な音を立てながら首を横に動かした。

「・・・・・・・リューグ。どうしてここにいる?」

東間たちと一緒にいたはずの男の存在は、俺に死を運んでくる二人の女の存在を彷彿とさせたからだ。

「俺はトレージャーハンターだ。それにお前たちの仲間じゃないんだから、どこに行こうが俺の勝手だろう。」

「・・・・・・・・連れはいないのか?」

俺は全神経を周囲の索敵にまわしながらリューグに尋ねた。

「強いて言うならこいつかな。」

リューグは鞘から剣を抜いて俺に見せた。

・・・・・・剣が相棒なんて、可哀想な奴・・・・・・・

「お前フーエのことを忘れたのか？」

フーエ？

「・・・・・・・

むぅ。流石はローテンションツッコミのリューグ。鋭く冷たいツッコミだ。だが――――――――

「・・・・・・・・・実際いるんだよな。これが。」

「何か言ったか？」

「別に。」

俺のボソッとしたつぶやきはリューグの耳に届かなかったようだ。

「それで？　フーエが誰だか思い出したか？」

「ただの剣だろ。」

忘れるわけがない。

余計なことを言ったらへし折る予定の剣なのだから。

「じゃあ話を戻すぞ。どうしてお前がここにいるんだ？　東間たちと一緒にいるんじゃなかったのか？」

周囲の索敵は続けていたが、どうやら森には誰もいないみたいだ。

「実はな――――――――――――――――――――――」

俺はリューグに事情を説明した。

「・・・・・・・・・・ふふっ。」

メイドさんが小さく笑った。

「・・・・この程度で私を出し抜けると思ったら大間違いですよ。」

第六十五話　逃げじゃない、戦術的撤退だ！（後書き）

・・・・・・どうやら仁はメイドさんを侮ったようです・・・・・・

第六十六話　ふっ、逃げられなかったぜ！（前書き）

仁は詰めが甘かったようです・・・・・・・

第六十六話　ふっ、逃げられなかったぜ！

「つまりなんだ。お前は自由が欲しくて置手紙を残して失踪したと。そう言いたいのか？」

「その通りだ。」

俺の返事にリューグは呆れた表情で溜め息をついた。

「クズだな。」

「失礼な。ゴミと呼んでほしい。」

俺はリューグの呼び方を訂正した。

「わかりました。ゴミ。」

瞬間――――――――――――――――――――

空気が凍った。

否。凍ったのは俺自身だった。

後方で川から何かが上がってくる音が聞こえる。

リューグは俺の後ろを見て――――――――――――――――――――全速力で逃げ出した。

「しかし自分がゴミだという自覚があったのですね。そこは素直に

感心致(いた)します。」

誰かが歩いてこちらに近づいてくる。

肌にまとわりつくこの声とプレッシャーは・・・・・・っ！

「ではゴミがどのような目にあうか・・・・・教えて差し上げねばなりませんね。」

下手をすればその場で殺されるかもしれないこの状況で、それでも俺は逃げ出すタイミングを作り出すために口を開く。

「・・・・・・・・・一つお尋ねしてもよろしいでしょうか。」

「なんでしょう。」

「どうして俺の居場所がわかったのでしょうか？」

「メイドさんの第六感です。」

「そうですか・・・・・・・・」

会話の終了と同時に俺は後方を確認せずに走り出――――――――――

「逃げたらお仕置きは三倍増しです。」

俺は再び硬直した。

川の方から更に二つの水音が聞こえた。

「仁さん・・・・・・・・・・・・・」

この声は――――――――――――――

「・・・・・・・・・・覚悟はできていますよね。」

・・・・・・まさかアイリスからこれほどのプレッシャーを感じる日が来ようとは・・・・・・・

「マスター・・・・・・・・・・・」

もう一つの声は予想通り。

「・・・・・・・・・・覚悟は――――――――――――」

「フレス。お手。」

「わんっ！」

フレスが嬉しそうに俺に近づいて手を差し出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・しょうがないじゃないですかっ！？マスターの命令には逆らえないんですよっ！？」

手を差し出したまま固まっているフレスを無言で見つめていると、逆ギレされた。

「・・・・・・・・・・・・・」

「お二方。別れは済みましたか。」

アイリスの冷ややかな視線と、メイドさんの冷徹なお言葉が俺たちに突き刺さった。

どうやらフレスもお仕置き対象として認定されたようだ。

「・・・・・・フレス。すまない。」

「マスター・・・・・・・・」

俺は沈痛な面持ちでフレスとアイコンタクトを取りつつ発言する。

「身代わりになれ。命令だ。」

「この外道マスターっ！」

「やかましいっ！　少しはマスターのために働け役立たずっ！」

「それを言いますかぁっ！　マスターだってヴェンリスに負けてどっか行っちゃったんですから十分役立たずでしょうっ！」

「戦いもしない奴に言われる筋合いはないっ！」

「負けたんなら戦わないのとたいして変わらないでしょうっ！」

俺とフレスが言い争っている中、メイドさんとアイリスはどこまでも冷たい視線を俺たちに向けていた。

ちくしょうっ！

くだらない喧嘩を見せて殺る気を削ぐ作戦失敗か・・・・・・っ！

せっかく一瞬のアイコンタクトでフレスと意思疎通ができたというのに・・・・・・

「さて――――――――――――――」

メイドさんが懐からスプーンとフォークとナイフを取り出した。

「覚悟はよろしいですね。」

優しい笑顔はデジャヴュの証。

理香が羅刹ならメイドさんは夜叉といったところか・・・・・・

「安心してください。殺しはしません。」

まったく安心できない笑顔のままゆっくりと近寄ってくる。

「ええ。殺すだなんて。死という安息など与えてたまるものですか。」

アイリスも無言無表情のまま近づいてきた。

俺はあの言葉を叫ぶことにした。

「俺は退かぬっ！　媚びぬっ！　省み――――――――――――――」

「反省の色無しですね。」

直後――――――――――――――――――――

俺とフレスの悲鳴が森中に響き渡った。

響き渡る悲鳴にリューグは身を竦ませた。

あの川から上がってきたメイド服の女が誰だかは知らないが、逆らってはいけない種類の人間だということはわかった。

なぜなら逆らった結果を今の悲鳴が証明したからだ。

『・・・・・・・・・・まさかあの理香と同レベルに恐ろしい人がいたなんて・・・・・・』

「・・・・・・・・・そうだな。」

リューグはフーエに同意しながら悲鳴が上がった方向を見た。

「・・・・・・・・安らかに眠れ。」

リューグは胸元で十字を切り仁の冥福を祈った。

第六十六話　ふっ、逃げられなかったぜ！（後書き）

どうやら仁は拳王様と同じくらい聖帝様が好きなようです。
メイドさんのお仕置きについては詳細は控えさせていただきます。
・・・・・・どれほどのことが行われているかはご想像にお任せします・・・・・・

第六十七話　返事がない、俺は屍の様だ！（前書き）

仁視点で書こうとしましたが、無理だったのでリューグ視点からのスタートです。

第六十七話　返事がない、俺は屍の様だ！

「・・・・・・・・・・・なんだこれは。」

様子を見に来た俺はボロボロになって虚ろな目で虚空を見つめている仁の姿を見て愕然（がくぜん）としていた。

「どなたですか？」

声をかけてきたメイド服の女は憑き物が落ちた様なすっきりした笑顔を浮かべている。

「・・・・・・仁の知り合いだ。」

「そうですか。」

女はそれ以上何も言ってこなかった。

俺は改めて周りを見渡した。

良く見ると他に二人の子供がいた。

犬耳の少年の方は仁と同じようにボロボロな虚ろな目で空を見上げていた。

もう一人の少女は何か見てはいけない物を見てしまった様に縮（ちぢ）こまってガタガタと震えている。

「仁。なにがあったんだ。」

俺が仁に詰め寄ると、ブツブツと小さなつぶやきが聞こえてきた。

「・・・・・・・めんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンナサイゴメンナ――――――――――――――」

病んでいる・・・・・・・・・

・・・・・・・今ならあのことを言えるか？

「・・・・実はお前の持っていた魚の形をした焼き菓子、お前がルナールにオーバーヘッドキックを入れた際に落としたから、拾って全部食べたぞ。」

「てめえの血は何色だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

「赤だが。」

変な質問に俺は充当な回答で答えた。

「にしても良く復活できたな。」

「当たり前だっ！　精神は死んでいたが、肉体も死んでいたっ！」

「それ完全に死んでるぞ。」

俺の冷徹なツッコミに反応もしない仁の瞳は怒りに燃えていた。

「貴様だけは・・・・・・貴様だけは許さんっ！」

仁が拳を振り上げて――――――――――――――――――――

「お元気そうですね。」

冷たい言葉にそのままの体勢で硬直した。

「・・・・・・どうやらお仕置きが足りなかったようですね。」

「ごめんなさい。申し訳ありません。助けてください。」

仁が光速でメイド服の女に土下座をした。

「・・・・・・・・・はぁ。良いでしょう。これ以上追い詰めて使い物にならなくなってしまっては私も困りますから。」

「きゃっほーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」

メイド服の女の許しが出た瞬間、仁が文字通り跳び上がって歓喜の声を上げた。

「うるさいですよ。」

「すみません。」

再び土下座する仁。

・・・・・・上下関係ははっきりしてるみたいだ。

「ところで仁――――――――――――――――――――」

メイド服の女が俺を見る。

「そちらはいったいどなたですか？」

その言葉で俺は未だにちゃんと挨拶すらしていないことを思い出した。

このところ自己紹介ばかりだなと思いつつ俺は口を開いた。

「リリィ。そろそろ部屋に戻ったらどうだ。」

「あら、もうそんな時間でしたの？」

リリィの言葉に私は苦笑した。

「それにしても意外でしたわ・・・・・・お姉さまが仁と知り合いでしたなんて・・・・」

「知り合いというほどのものでもない。」

私は腹にある傷を触った。

消せるはずだったが、残すことにした傷跡。

再戦を誓ったあの男のことを忘れないための傷跡――――――――――

「最初はケルちゃんを誑(たぶら)かしただけの小悪党だと思っていたが・・・・」

「・・・・・・・・ケルちゃんもお姉さまから解放されて喜んだはずですわ・・・・」

「何か言ったか。」

「いいえ。」

私はそれ以上追及せず窓の外にある月を眺めながらつぶやく。

「・・・・・・・・・・楽しみだ。」

「・・・お姉さま、まさか――――――――――――――」

「心配するな。今はまだ戦うつもりはない。」

その言葉にリリィは溜め息を漏らした。

「・・・・・できれば先もやめてほしいですわ。」

「それは聞けないな。」

笑いながら私は言った。

「・・・・・・ふぅ。仕方ありませんわね。」

リリィが立ち上がり部屋の入口へ向かう。

「ですがお姉さま。例え相手が仁だったとしても――――――――」

「わかっている。本気は出さん。」

リリィはその言葉に胸を撫で下ろした。

「ではお休みなさい。お姉さま。」

「お休み。リリィ。」

部屋からリリィが出て行ったあと、私は小さく息を漏らした。

すまない。リリィ。

心の中でリリィに謝りながら私は立ちあがった。

そのまま目を閉じて精神を集中し始める。

死ぬはずがない。あの程度で死ぬような奴ではない。

私の考え通り生きていたカゲツキジン。

彼の全力と戦うため。私が全力で戦うため。

私は自らの枷(かせ)を外し、体を慣らせておくことを決めた。

魔王軍六星魔将最強の武人、ソフィ・ヴェンリス。

彼女は常にある魔法を使っていた。

自らと纏(まと)っている物や持っている物に数十倍の負荷を掛ける重力魔法。

しかも常時使用しているため、半端ではない魔力を消費していた。

それでも彼女は恐るべき強さを誇っていた。

「・・・・・・・・・・カゲツキジン。」

ヴェンリスが目を開く。

「・・・・・・・・・・本当に楽しみだ。」

緑色の瞳は彼女が本当の全力を出した証だった。

第六十七話　返事がない、俺は屍の様だ！（後書き）

いろいろなフラグを立てつつ、そろそろ先に進むと思います。

第六十八話　子供たちよ、強く生きろよ！（前書き）

続きです。

第六十八話　子供たちよ、強く生きろよ！

「さて。余計な時間を使ってしまいましたが、当初の予定通りルヒナへ向かうと致しましょう。」

一通りの挨拶と自己紹介、それにここまでの経緯を説明した俺たちにメイドさんが言った。

「東間たちのところへは戻らないのか？」

リューグの質問にメイドさんが答える。

「はい。東間様たちにはルヒナの王都リグルロードで合流する予定です。」

「リリィ達は？」

「知りません。」

メイドさんが無表情のまま断言した。

しかし俺にはわかった。

リリィやルナールの名前が出た瞬間、少し不機嫌になったことを。

理由は皆目見当（かいもくけんとう）もつかないが。

そういえばリリィで遊んでたりルナールを殴ったり名前で呼ばせたことを話した時も少し不機嫌になっていたような・・・・・・・・

「まあ俺にとってはどうでもいいことだが、仁はギルドメンバーなんだから流石に置手紙くらい残しておくべきなんじゃないか？」

「どうでもいいなんて言うなよ。お前もギルドメンバーだろ。」

「入った記憶はない。」

リューグの冷たい言葉に俺は唇を尖らせる。

「え～っ！　りゅーたんのいじわる～っ！」

「次にそんな風に呼んだらその舌切り落とすぞ。」

「ＯＫブラザー。」

首筋にフーエを当てられた俺はハードボイルドに笑いながら言った。

「カッコついてませんよ。」

メイドさんのツッコミなんて気にしな～い。

「それはともかく。やはり置手紙を宿屋に預けるべきだと俺は思う。」

「そうですか。」

「そうですとも。」

メイドさんの許可をもらった俺は、無言でフーエを鞘に収めるリュ

ーグに手を差し出した。

「・・・・・・・・・なんだ？」

「紙とペン。」

「ほら。」

「・・・・・・・ほんとに持っていやがった・・・・・不気味な奴。」

「返せ。」

「ああっ、ごめんなさいっ！　ありがたく使わせてもらいますっ！」

俺はこの世界の文字で『リグルロードで待っている』と書いた。

「これでよし。」

紙を濡れないように防水加工（どうやったかは大人のヒ・ミ・ツ）して川に入った。

「んじゃ少し待っててくれ。届けてくる。」

「お待ちください。仁。」

メイドさんが俺を引き止めた。

「なんだ？」

「フレス様を宿屋に連れて行ってください。」

「フレスを？」

俺は目線をフレスの方へ向けた。

フレスは未だに虚ろな目で空を見上げている。

・・・・・・まあ、一通りの拷問の訓練を受けた俺でさえ精神が死にかけたんだから、フレスが耐えられるわけないか・・・・・・・

「原因はわかりませんが、先ほどからフレス様の意識が戻りません。この状態で旅に同行させるのは危険だと思われます。」

メイドさん。自分が原因だということに気づかなきゃ、原因不明のままだぞ。

「わかった。」

俺は川から上がり、紙を取り出して『ついでにフレスのことをよろしく頼む。』と書いてからフレスを担(かつ)いで再び川に入る。

「それじゃあ行ってくるわ。」

「いってらっしゃいませ。」

「おい待てっ！　ここから街までどれくらい時間がかかると――――――――――――――――」

リューグの言葉を最後まで聞かず、流れに逆らって俺は泳ぎだした。

数分後。

「ただいま～。」

俺は再び川から陸に上がった。

「早っ！？」

おおっ。冷たいツッコミが売りのリューグが珍しく驚愕しているっ！

「おかえりなさいませ。」

こっちはいつも通り冷静沈着なメイドさん。

「思っていたより時間がかかりましたね。」

「いやありえないだろ。ここからあの町までどれだけ急いでも片道最低一時間はかかるぞ。」

むぅ・・・・・リューグめ、意外と細かいことを気にする奴だな。

「リューグ様。あなたはまだ仁という人間を理解していませんね。」

メイドさんが真剣な表情でリューグを見る。

「・・・・・・どういう意味だ。」

メイドさんは一呼吸置いてから口を開いた。

「いいですか。カゲツキジンという人物は、私が死ねと言えば笑って死に、戦えと言えば例え神だろうが悪魔だろうが戦い、殺せと言えば親兄弟を殺す人なのです。」

うんっ。メイドさんが俺をどういう目で見ているかが良くわかるお言葉ですね。

俺は感動でもしたのかな？　目頭が熱くなってきたよ。

「・・・・・・・・・・・・」

リューグが憐(あわれ)みの視線を向けてくる。

「同情するなら金をくれっ！」

叫びと共に俺は手を差し出す。

「・・・・・・少ないがこれをやるよ。」

銀貨十枚が入った袋を渡されました。

やったっ！　儲けたぜっ！

「遊びは終わりにしてそろそろ行きましょう。」

「だってさリューグ。」

「遊んでいたのはお前らだろう。」

そんなこんなで俺たちはやっとルヒナへ行くために歩き出した。

「ところでメイドさん。アイリスは？」

俺の質問にメイドさんは足を止めて振り向いた。

そこには木の陰に隠れている恐怖で顔を歪(ゆが)ませたアイリスの姿が。

「・・・・・・仁。アイリス様も宿屋へ連れて行ってください。」

「・・・・・・・・了解。」

・・・・・やっぱり幼い子供に凄惨(せいさん)な光景は見せない方が良いな。

第六十八話　子供たちよ、強く生きろよ！（後書き）

二名ほど退場しました。
次回でルヒナに入る予定です。

第六十九話　この二人、相性が悪いのか！（前書き）

戦いが始まります。

第六十九話　この二人、相性が悪いのか！

「ちょっと待て。今気づいたんだが、なんで俺が当たり前のようにお前ら一緒にいるんだ？」

あれから三日。

俺たちはルサナンへ行き、そのままルヒナへと入国しリグルロードへ向かっている途中のことだった。

リューグがいきなり変なことを言い出したのは。

「いきなりどうした。」

「どうしたもこうしたもない。考えてみればそもそも俺は別にお前らの仲間じゃないし、一緒に行動する理由もない。」

やれやれ。今更何を言ってるんだか。

「別に良いだろ。どこかに行く予定があったわけでもないんだろ。」

リューグは後ろ手で頭をかいた。

「いや。行く場所はあるといえばあるんだが・・・・・」

「どこに。」

「・・・・・・・・リグルロード。」

「じゃあ丁度良いじゃないか。一緒に行こうぜ。」

メイドさんと二人旅なんて、どんな危険が待っているかわからないし。

「それはそうなんだが・・・・・・・・・」

「五月蝿(うるさ)いですよ。仁に劣化版(れっかばん)仁。」

「ごめんなさい。」

「待て、劣化版仁って俺のことか？」

とりあえず謝る俺とメイドさんに問うリューグ。

「五月蝿いと言っているでしょう。黙ってください劣化版仁。」

「俺はリューグだ。」

「黙ってくださいと申しています。劣化版仁。」

「・・・人の名前もまともに覚えられないメイドか。」

リューグは鼻で笑った。

「三流だな。」

瞬間――――――――――――――――――――

空気が凍てついた。

ちょっ！？　リューグっ！？　なんて命知らずなことをっ！？

「・・・・・・・・・・・・・・・三流ですか。」

言葉に温度などないはずなのに、メイドさんの声に俺は確かな冷たさを感じた。

「・・・・・・・・・私が三流ならあなたは何流だと言うのでしょうか。」

「さあな。それくらい察して見せたらどうだ。三流。」

空気がどんどん凍てついていく。

まるで氷河期の様だ。

うんうん。これほどの寒さなら恐竜たちが絶滅したのも素直に頷ける。

「・・・・・・・・いいでしょう。所詮は劣化版仁。いてもいなくても変わらない存在です。」

俺が現実逃避している間にメイドさんが戦闘態勢を取った。

「・・・・・俺からしてみれば、あんたの方こそいらない存在なんじゃないか。」

リューグがフーエを抜き構える。

・・・・・・そういえば俺、リューグが戦っているところって見たことなかったな～。

じゃなくてっ！

「ストップストップっ！　お前ら止まれっ！」

俺は二人の間に割って入った。

「「邪魔ですよ（だぞ）。仁。」」

どうしてこんなところだけ息ピッタリっ！？」

「とにかくやめろ。今すぐやめろ。さっさとやめろ。反論は聞かんっ！」

「どけ。仁。」

「これ以上邪魔をするなら、それ相応の目にあっていただきますよ。」

・・・・・・ったくこいつら・・・・・・・・・っ！

俺がこの状況をどうにかするため（リューグが死のうと別に構わないが、その後間違いなく俺に矛先が向かうため）の打開策をを考えていると視界の端に何かを捉えた。

「あっ！　あれはなんだっ！？」

天の救いとばかりに捉えた物体を指差すと――――――――――

―――

「「五月蠅い。」」

一蹴されました。

・・・・・ほんとどうしよう・・・・・・

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ――――――――――――――――」

一触即発な状況が続く中、先ほど視界に捉えた物体がこちらへ近づいてきた。

いや、良く見ると物体の前を誰かが逃げるように走っている。

・・・・・・天は俺を見捨ててはいなかったっ！

「メイドさんっ！　リューグっ！　誰かが何かに追われているぞっ！　早く助けにいかないとっ！」

「お前が行け。」

「一人で行ってください。」

冷たく告げながら睨み合ったまま動かない二人。

・・・・・・くっ、この程度のことでは動じないか・・・・・・っ！

「貴様等、あの女の仲間か。」

だが上空からの声に二人は煩わしそうに空を見上げた。

バサバサと複数の音が降りてくる――――――――――――――――――――

「じゃっ、俺はあっちの方を助けてくるんで。」

俺は面倒なことになる前に（すでに面倒事に巻き込まれている気がするが）追われている人を助けに向かった。

「もう一度訊く。貴様等、あの女の仲間か。」

空から降りてきた物の正体。それは――――――――――――――――――

「有翼人種だと・・・・・・・・・？」

「・・・・なぜこんなところにハーピィが？」

「俺が知るか。」

「使えませんね。」

空を見上げていた二人は再び睨み合いを再開する。

「・・・・・・あの・・・・・・聞こえてますか？」

「「黙れ（ってください。）」」

ただならぬ空気を感じ取ったリーダー格の女は気圧されるように黙り込む。

「・・・・・・どうやら――――――――――――」

「先に葬るべき相手は決まりましたね。」

「・・・・そのようだ。」

そして訪れる沈黙。

「・・・・・・・・えっと。先にってことは、私たち葬られること前提なんですか？」

その言葉を皮切りに――――――――――――

リューグはメイドさんへと突撃し、メイドさんはそれを迎え撃つ。

戦いが、始まった。

第六十九話　この二人、相性が悪いのか！（後書き）

というわけで次回はリューグＶＳメイドさんです。
さて、メイドさん相手にリューグはどこまで食いつけるでしょうか・・・・

第七十話　あいつの持っている、あれは！（前書き）

リューグの武器が登場します。

第七十話　あいつの持っている、あれは！

「ふっ！」

上から振り下ろされる一撃をメイドさんは右に避ける。

更に追撃を仕掛けるリューグ。

「はぁっ！」

横薙ぎの一閃をメイドさんは後ろに跳んでかわす。

「・・・・・・この程度ですか。」

後ろに下がったメイドさんは明らかな落胆（らくたん）の声を漏らした。

「・・・・・・なんだと。」

「この程度ですかと訊きました。」

その声には落胆だけではなく、わずかながら怒りの色が混じっていた。

「剣速から判断して、あなたの剣術は一流と言って良いでしょう。ですがそれだけです。」

「・・・・・・・・・・・・」

無言のリューグにメイドさんは言葉を続ける。

「先ほどの言葉を訂正します。リューグ様、あなたは劣化版仁などではありませんでした。あなたは仁の足元にも及ばない雑魚なのですから。」

「・・・・・・・・・・・・・・それがどうした。」

メイドさんの侮辱にしか聞こえない言葉を、リューグは涼しい顔で受け流した。

「俺は仁とは違う。そもそもアイツと俺を比較すること自体が間違いなんだ。アイツの戦っている姿を見たことはないが、たぶん剣の腕前一つとって俺より遥かに上にいるんだろう。」

笑いながら放たれた言葉にメイドさんは眉をひそめた。

「・・・・・・・・いきなりの自虐ですか。」

「・・・・・・・・さっきも言ったはずだ。俺と仁を比較すること自体間違いだと。」

リューグの手に何かが出現した。

瞬間――――――――――――――――――――――――

響き渡る発砲音にメイドさんは身をひるがえして大きく横に跳んだ。

撃たれた弾はそのまま木に命中すると凍りついた。

「・・・・・・・・・・・・なんですか。ソレは。」

リューグの左手にあった青いモノ。

見たことのない形状をしたソレについてメイドさんは説明を求めた。

「これは前に調査した古代遺跡に保管されていたモノだ。共に保管してあった古文書を解析した結果、かつては“銃(じゅう)”と呼ばれた物であることがわかった。魔力を込めて“引き金”という名前の場所を押すと込められた魔力が弾となって発射させるそうだ。」

リューグはフーエを鞘に収めると空いた右手に今度は赤い銃が現れた。

「銃は全部で六つ保管してあった。どうやらこいつらは最初に触った奴の物となるらしく、六つ全部が俺の意志で出し入れ自由になった。」

リューグが二つの銃口をメイドさんに向けた。

メイドさんは皮肉気な笑みを浮かべつつ、頬に一滴の汗を垂らした。

「一つ一つ放つ弾の属性が違っていて、色でどの属性かがわかるようにできているというわけだ。」

「・・・・・・・・随分と無骨なお宝ですね。」

「やらんぞ。」

「そんな趣味の悪いお宝、欲しくありません。」

「・・・・・残念ながらこれはお宝じゃない。俺の武器だ。俺の見つけたお宝は他にたくさんある。さて、話はこれくらいにして――――――――――――――――」

リューグが引き金に指を掛ける。

「踊ってもらうぞ。」

その言葉と共に――――――――――――――――

再び銃声が響き渡った。

んっ？

なんかメイドさんたちの方で銃声が響き渡った気がするんだが・・・・・・

まっ、こんなところに銃があるわけないよな。

俺はそれ以上気にせず物体と追われている人物を追いかけながら観察していた。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ――――――――――――――――」

一人と一体は先ほどから森の中を走っている。

・・・・・・あの追われている人物、森の中をかなりの速度で走っている。

身のこなしは良いみたいだ。

とはいえ物体は木々をなぎ倒しながら徐々に距離を縮めている。

追いつかれるのも時間の問題だろう。

それにしてもあの物体。

あの外見を言葉で表現するなら・・・・・・・サソリとムカデとクワガタを合体させて巨大化させ、毒々しい紫色に塗装したと言ったところか。

・・・・・・・・・虫に分類して良いのかな、アレ。

とりあえず声をかけてみるか。

「おーい。助けに来たぞー。」

「はぁ、はぁ、必要ありませぬっ！」

「わかった。」

「だから必要――――――

・・・・・・ござる・・・・・・・・・・・・？

俺は改めて追われている人物を注視して――――――――――――気が付いた。

服装はいたってシンプルだ。

はっきりいって服装だけを見れば町民Ａと呼んでも過言ではないだろう。

顔は・・・・・・まあ整（ととの）っている部類だろう。

だがそんなことよりも気になったのはその人物が手に持っている物。

・・・・・・・どう見たって刀です。

それも日本刀。

少なくともこの世界に来てからどの店にもそんな物は置いていなかった。

だとすれば――――――――――――――

俺の頭に一つの可能性が思い浮かんだ。

その人物が俺たちと同じ転移者だと言う可能性を。

「待てと言いましたが、その場に留まってほしいという意味ではありませぬーーーーーーーーーーっ！」

「あっ。」

思考している間に少女は物体に追われてかなり遠くの方を走っていた。

第七十話　あいつの持っている、あれは！（後書き）

メイドさんちょっとピンチ。
しかしリューグはメイドさんを甘く見ています。
ちなみに二人は相変わらず敵に囲まれていますが、二人の戦いが高レベルだったらしく、手が出せない状況の様です。

あっ、ついでに新キャラみたいです。

第七十一話　おおっ、やっぱ刀は使いやすいな！（前書き）

さてメイドさんＶＳリューグの続きです。

第七十一話　おおっ、やっぱ刀は使いやすいな！

「っ！」

街道沿いの森の中。

身を低くしたメイドさんの頭上を青い弾丸が通り過ぎる。

青い弾丸はそのまま木に命中して木を凍(こお)りつかせた。

続けて二発の発砲音――――――――――――――

メイドさんはスプーンとフォークをそれぞれ赤と青の弾丸に投げつける。

空中でスプーンとフォークにぶつかった弾丸は片方は燃え上がり片方は凍りついた。

・・・・・・・見事なものですね。

いつの間にか口元に笑みを浮かべていたメイドさんはリューグに対しての評価を一新していた。

死角から来る攻撃とわざと見させる攻撃。

どちらも避けるか迎撃しなければ致命傷を負う攻撃だった。

しかも無理に避けて体勢を崩したところに躊躇なく追撃を行う。

そしてこちらの攻撃を的確に回避、あるいは銃で撃ち落としてくる。

・・・最初はただの仁にくっついてきているだけの寄生虫だと思っていたのですが・・・・・・

「・・・・・・・・・・リューグ様、少しよろしいでしょうか。」

メイドさんは木を背に隠れているリューグに話しかけた。

・・・・・・・・・なんなんだあのメイドは・・・・・・っ!?

リューグは左手の青い銃を発砲しながら焦っていた。

あのメイドがただものではないことは仁の態度から見てわかっていた。

だがいきなり人のことを劣化版仁などと呼ぶので、少々腹が立ったから腕試しついでに戦ってみた。

その結果が今の状況。

メイドさんはリューグの攻撃をことごとくかわし続けている。

それも余裕の笑みを浮かべながら。

リューグは焦りから両手の銃の引き金を引いてしまい、後悔した。

この銃は魔力を消費して弾丸を形成する。

当然、撃ち続ければ魔力はどんどん無くなっていく。
そして今のでほとんどの魔力を使いきってしまった――――――――

・・・・・・いや、落ち着け。まだ手はあるはずだ。

「・・・・・・・・・リューグ様、少しよろしいでしょうか。」

リューグが頭を冷やして次の手段を考えていたその時だった。
メイドさんが話しを始めたのは。

「お～い。大丈夫か～。」

再び視界内に物体とござるさん（名前は知らないので名付けてみた）が入ったので俺は大きな声で呼んでみた。
ござるさんは森の中を器用に走りつつ視線と声だけを俺に向けてくる。

「さっ、先ほどの御婦人っ！　来てくれたでござるかっ！」

「帰る。」

「ええっ！？」

ござるさんの言葉を聞いた俺は、間髪入れずに立ち止まって後ろを振り向いた。

誰が御婦人だ。誰が。

俺はまだ御婦人と呼ばれるほど歳を取っていないぞっ！

「なっ、なにか失言があったのなら後で謝りまするっ！　ですからなにとぞご助力を――――――――――――――――」

・・・・・・・・やれやれ。

「じゃあ助けて――――――――――――――――」

言いかけて俺は思いとどまった。

今の俺の手持ちは木彫りの熊（残骸）のみ。

走っている物体はいかにも毒ですよ～。と言っているような紫色の皮膚をしている。

う～ん・・・・・・・・・・

あっ、そうだ。

「お～い。お前のその刀を貸せ～。そうすれば助けてやる～。」

俺の叫びにござるさんは。

「そっ、それだけはできぬっ！」

死んでも手放さないという気概を見せたので。

「さよ～なら～。」

俺はハンカチ（そんなもの無いからエアーハンカチだけど。）を振ってござるさんを見送った。

だが――――――――――――――――

物体が突如停止した。

俺もござるさんもどうしたのかと不思議そうに物体を見ていたが――――――――――――――――

物体がゆっくりと方向転換をした。

狙いは・・・・・・・・・・・まあこの状況で変えられる狙いは一人しかいないが。

「・・・・・・・・・・・なぜ～だ～。」

物体が俺に向かって突進してきた。

俺は素早くござるさんの方向へ走りだす。

「えっ？　えっ？」

状況の変化に対応しきれないござるさんは呆けたまま突っ立っている。

ちっ。身のこなしはそれなりでも心はまだまだってことか。

俺はござるさんの手を掴み（ついでに刀を奪って）――――――――――――――――

「ほいっと。」

軽い口調で物体の方へ空高く投げた。

「――――――――――――――――――――――――うきゃぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！？」

我を取り戻したござるさんは空中で悲鳴を上げた。

物体は空中にいるござるさんを尾で突き刺そうとする。

今だっ！

俺は跳び上がり物体の尾を一閃してから物体の後ろに降り立ち。

「ぁぁぁーーーーーーーーーーっ！？」

落ちてきたござるさんを受け止める。

「ううぅぅ・・・・・・・・・」

ござるさんは恨めしげな視線を俺に向けてくる。

せっかく助けてやったのになんだその態度は。

と言おうとしてからやめた。

物体の放つ殺気が膨れ上がったのを感じたからだ。

「・・・・・・・・・ふぅ。」

俺はござるさんを下ろしてから刀をござるさんに返した。

「逃げるなよ。」

「・・・・・・・えっと・・・・・・？」

俺はそれ以上何も言わず、木の上にすわってござるさんと物体から離れた。

「あのっ――――――――――――――――――――」

「がんばれよ～。」

無責任な声援とともに。

俺は突進してくる物体と呆けているござるさんを見学していた。

「・・・・・・・あのぉ～、ルギリス様・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・なに。」

「・・・・・私たち、何のために登場したのでしょうか・・・・・・」

「・・・・・・・・私に訊かないで。」

それはメイドさんたちの戦いを、巻き込まれないように空中から見ているハーピィ達の悲しき会話だった・・・・・・・・・・

第七十一話　おおっ、やっぱ刀は使いやすいな！（後書き）

二人の戦い。
決着がつきます。

第七十二話　この害虫が、貴様の罪は重いぞ！（前書き）

メイドさんたちは今回は登場しません。

第七十二話　この害虫が、貴様の罪は重いぞ！

「ごっ、御婦人っ！？　いったい何を――――――――――――――――」

「ほら来たぞ。さっさと迎え撃て。ちなみに逃げたら俺がお前を殺す。」

顔面蒼白なござるさんに物体は容赦なく突撃する。

斬った俺ではなく近くにいるござるさんを狙うか・・・・・・・

怒りで我を忘れているのか、あるいは単に俺とござるさんの見分けがつかないのか。

どちらにしろ知能は低いみたいだ。

ござるさんは横に跳んで転がり、突進をよけた。

やはり身のこなしは良いみたいだ。

「くっ！？」

ござるさんは刀を構える。

一般的な剣道の上段の構えだ。

・・・・・・・・隙の少ない良い構えだな。

俺は刀の鞘（そういえば返し忘れてたな。）をいじりつつ感心した。
物体は今度は突撃せず、巨大なハサミ（右）で攻撃を仕掛ける。
「はぁっ！」
ござるさんは刀でハサミを受け止め、そのまま刀を滑らせて外殻の隙間からハサミを切り落とす。
皮膚と同じ紫色の体液が切り口から勢い良く噴き出た。
「っ！？」
ござるさんは咄嗟に大きく飛び退いて物体から離れた。
噴き出した体液を浴びた植物はそのまま溶けてなくなった。
「これは・・・・・・・・毒でござるか。」
あの外見を見れば毒を持っていることは明白だったが。
それにしても体液を浴びただけでアウトとは・・・・・・
んっ？　待てよ？
確か先ほど尾を斬った時には体液など出てこなかったはずだが・・・・・・
・・・・・まさか尾には毒が無く、ハサミに毒があるとでもいうのか？

だとしたらまったく意味のない進化だ。

・・・・いや・・・・・・もしかすると――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・まあいいか。」

気にしていても仕方ないし、ござるさんのレベルならたぶん戦えるだろう。

そして何よりもこんな面倒な物体の相手なんてしたくない。

・・・・・・・・・・・・・・・まあ見殺しにはしないけど。

「でやぁっ！」

俺が自分のことを甘くなったものだと自嘲（じちょう）していると、今度はござるさんの方が物体に攻撃を仕掛けた。

しかし――――――――――――――――――――――――

「くぅっ！？」

振り下ろされた刀は物体の外殻にはじかれる。

物体はその間に残ったハサミ（左）でござるさんを挟（はさ）んだ。

「あぐぅっ！？」

挟まれたござるさんは悲鳴を上げつつもなんとか抜け出そうとする。
だが挟む力が想像以上に強いのかハサミはビクともしない。
物体はハサミを動かして自分の正面にござるさんを固定した。
・・・・・・・・・何をする気だ？
俺が静かに見守っていると物体の二本の角が一つになっていく。
あれは・・・・・・・・・まさかっ！？
一つになった角は高速で回転し始める。
その光景を見た俺の血液が怒りで沸騰した（様な気がする）。
「くっ・・・・・・・うぅっ！？」
高速回転する角が少しずつ近づいて行き、ござるさんの顔が焦りと恐怖の入り混じった表情になる。
だが俺の視界にはすでにござるさんは存在していなかった。
俺は跳躍してハサミの上に降り立った。
「なっ！？」
ござるさんは驚いたようだが、物体は気にせず俺ごと貫こうとする。
俺はござるさんの手から無理やり刀を奪うと、ハサミを切って体液

が飛び散る前にござるさんと共に離れる。

「あうっ！？」

離れた俺はござるさんをその辺に投げ捨てて物体を睨み付けてつぶやく。

「・・・・・・・・ドリル・・・・・」

「どっ、どうしたでござるかっ？」

ござるさんの言葉を無視して俺は叫ぶ。

「ドリルは男のロマンだっ！！！　それを貴様のような害虫が使うことなどっ、天が許してもこの俺が許さんっ！！！」

俺の魂の叫びに物体は反応せず、ござるさんは首をかしげるばかり。

だがそんなことはどうでもいい。

「調子に乗った害虫が・・・・・・今ここで完全に始末してやる。」

俺の怒りはすでに振りきれている。

この害虫を始末しても余りあるほどの怒りだ。

俺は刀を鞘に収めた。

そのまま刀に手をかけたまま目を閉じて刀に魔力を集中させる。

「ごっ、御婦人っ！？」

ござるさんの叫びに反応したかはわからないが、物体が懲(こ)りもせず突進してきた。

だが物体が動き出すその一瞬前に、俺は物体の目の前まで移動していた。

「・・・・・・・・あれっ？」

呆けた声が俺の耳に届くころには俺は鞘で物体を空中にはじき上げて刀を抜く。

「紫電(しでん)――――――――――――――――――――」

もちろんギルドの掟は忘れていない。

「閃滅槍(せんめつそう)っ！」

叫びと共に雷を纏った無数の突きを物体に浴びせた。

物体は結局、断末魔の悲鳴すら上げることなく――――――――――

全身がバラバラになると同時に電撃で完全な灰となり、そのまま風に流されて消えていった。

「これが――――――――――――――――――――」

俺は刀を鞘に収める。

「ドリルを侮辱した罰だ。」

完全に消滅した物体がいた空を見上げて俺はつぶやいた。

「っ！？　今のはっ！？」

ルギリス達は遠くであの化け物が消滅するのを目撃した。

「ルギリス様・・・・・・・・・っ！？」

「・・・・・・・・撤退よ。」

「はっ、はいっ！」

命令を受けたハーピィが他の仲間へと伝達していくなか、ルギリスは塵(ちり)となった化け物がいた方向を厳しい目で見つめていた。

第七十二話　この害虫が、貴様の罪は重いぞ！（後書き）

ハーピィたち、結局何もせずに帰っていきました。
もちろん再登場しますが。

そしてメイドさんたちの戦いはどうなったでしょうか・・・・・・

第七十三話　太陽が、二つある！（前書き）

別に本当に二つあるわけではありません。
ただ、仁たちにはそれが見えたのです。

第七十三話　太陽が、二つある！

俺はトウキ（ござるさんの本名）と一緒にメイドさんたちのいる場所へ話しながら歩いていた。

「つまりトウキはここからずっと離れた島国から修行のために来たということか。」

「その通りでござるっ！　それがしは父上から立派な剣士を目指せとこの大陸への旅を命じられたのでござるっ！」

元気良く返答するトウキ。

「・・・・・・・ところでトウキ。お前の持っているソレは――――――――――――」

「この刀がどうかしたでござるか？」

やはり刀だったか・・・・・・・

「・・・・・・この辺りでは見かけない独特な形をしているな。」

「それはそうでござるっ！　この刀はそれがしの故郷、ジポングに古くから伝わる伝統的な製法で作られた特殊な剣なのでござるっ！」

・・・・・・・・ジポング？

一体何の冗談だっ！　と叫びたい気持ちをこらえて俺は更に尋ねてみる。

「伝統的な技術なのに特殊な剣なのか？」

「くわしいことは知りませぬが、父上は材料である玉鋼（たまはがね）が特別な物だと言っておりました。」

・・・・・ふ～ん・・・・・・・・・・玉鋼か・・・・・・・

材料の名前も元の世界と同じ。

これは偶然なのか・・・・・・・・・・

まあとりあえず――――――――――――――

「その刀、俺にくれる気は――――――――――――――」

「駄目でござるっ！」

言い終わる前にトウキは刀を抱きかかえながら俺を睨んだ。

「どうしてもか。」

「いくら師匠の頼みでもこればかりはきけぬでござるっ！」

・・・・・・・・・残念だな。

それなりに高く売れただろうに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

んっ？

「今何て言った？」

「これぱかりはきけぬで――――――――――――――」

「その前。」

「駄目でござ――――――――――――」

「わざとやっているならもう二度と口を聞かん。」

俺は歩く速度を上げてトウキを置いて行く。

「ああっ、ごめんでござるっ！　師匠っ！」

トウキが慌てて追いかけてくる。

「それで。どうして俺が師匠なんだ？」

「決まっているでござるっ！　それがしが手も足も出なかったあの怪虫をいとも容易（たやす）く仕留めたその力量っ！　まさしく師匠と呼ぶにふさわしい御婦人ですっ！」

「消えろ。」

俺は突き放すように断言して更に歩みを速めた。

「ええっ！？　一体何がそんなに気に入らないのですかっ！？　師匠っ！」

あきらめずに追いかけてくるトウキ。

・・・・・・・まったく。

「まず最初に言っておくが、俺は男だ。」

「えっ・・・・・・・・そうだったのですかっ!?」

俺の言葉に驚愕するトウキ。

・・・・・・・・・・・俺ってそんなに女に見えるのかな・・・・・・

それはまあ別に良いけど。

「それに女だったとしても、御婦人などと呼ばれるほど歳は取っていない。」

「具体的に何歳なのでござるか?」

「今年で十七。」

「・・・・・・なるほど、それは失礼したでござる。」

トウキが頭を下げた。

「これからは御婦人ではなく師匠と呼ばせもらうでござる。」

「俺は弟子は取らない主義だ。」

「そんなこと言わずにお願いするでござるっ！」

・・・まったく・・・・・・・・・しつこい奴だ。

俺は呆れつつもそのあきらめの悪さだけは内心で評価していた。

「ところで師匠、どこへ向かっているのでござるか？」

「師匠はやめろ。・・・・・さっき置いて行った仲間の所へ歩いているだけだ。」

・・・・・・リューグの奴、大丈夫かな・・・・・・

死んでも別に構わんが、頼むからメイドさんの怒りは静めておいてくれよ・・・・・

俺は祈りながら能天気に隣を歩いているトウキと共にメイドさんたちの元へ向かった。

「・・・・・・・・やるな。流石はメイドさんだ。」

「ええ。あなたもですよ。リューグ様。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えーっ、と・・・・・・・・・

なにこの状況。

目的地にたどり着いた俺たちが見たものは、夕日をバックに固い握手を交わしているメイドさんとリューグだった。

俺はとりあえず空を見る。

すがすがしいほどの快晴で丁度真上に太陽があった。

その後、目を擦(こす)ってから改めて前を見る。

そこには夕日に照らされて赤く染まった二人がいた。

・・・・・・俺の目は壊れたのだろうか・・・・・・・

「美しい光景ですねっ！　師匠っ！」

目を輝かせながら感動しているトウキ。

「・・・・・・・お前には二人が夕日に照らされているのが見えるか？」

どうしても気になったのでトウキに尋ねてみた。

「もちろんですよっ！　師匠っ！」

「・・・・・・・・・・・そうか。」

力無く頷(うなず)いてから俺は大きく息を吸い込み――――――――――――――

「まともなのは俺だけなのかーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーっ！！！」

力いっぱい叫んだ。

「「あなた（お前）が一番まともじゃありません（ないだろ）。」」

固い握手をしていた二人はありえないことを叫んだ仁に同時にツッコミを入れた。

第七十三話　太陽が、二つある！（後書き）

いつの間にか和解していた二人。
熱い戦いを超えた二人には、夕日の中での和解がお約束ということで・・・・・・

次はキャラ設定です。

キャラ設定その四（前書き）

今回はリリィ、リューグ、フーエ、魔王、トウキについてです。

キャラ設定その四

リリィ・ストラグジス・ザルクロンド

年齢　十五歳

身長　１５６ｃｍ

体重　どうしてそんなことを教えなければなりませんのっ！

スリーサイズ　私は貧乳ではありませんわっ！

趣味、特技　読書、魔法全般（光属性以外）

容姿　小柄なゴスロリ美少女

髪の色　銀色

瞳の色　紅色

魔王の娘で次期王位継承者。少しファザコンの気（け）があり。真面目な性格のお嬢様なため、よく仁にからかわれている不運なお姫様。今までは自分に媚（こび）を売る者や利用しようとする者ばかりが近寄ってきたため、ヴェンリスなど一部の存在にしか心を開かなかったゆえに、理香や仁など心を許せる友を得たことは彼女にとって何よりも喜ばしいことだった。ちなみにヴェンリスは腹違いの姉。

リューグ・アヴェンジー

年齢　二十一歳

身長　１６６ｃｍ

体重　６２ｋｇ

趣味、特技　お宝探し、お宝鑑定

容姿　東間と同程度の身体つきの美青年（ただし東間よりワンランク下がる）

髪の色　青色

瞳の色　碧色

謎のトレージャーハンター。剣の腕も一流で銃を手に入れる前は剣で戦っていたが、銃を手に入れた後は剣と銃を使い分けて戦う。（ただしメインは銃）様々なお宝を発掘しては売っているが、いくつかコレクションとして取っているものもある。

フーエ・テリアン

年齢　享年十六歳

身長、体重　スリーサイズはデータが残っていないため不明。

趣味、特技　絵を描くこと、裁縫

容姿　不明（現在は一般的なロングソード）

髪の色　不明

瞳の色　不明

呪いの洋館で出会った実験台にされた悲劇の少女。現在はリューグの手元にいる。本来はしゃべれるのだが仁を恐れてか滅多に口を開かない。生前の姿で登場したことが無いので今のところどのような姿だったのかは一切不明。

魔王

年齢　四十歳

身長　１８８ｃｍ

体重　９５ｋｇ

趣味、特技　娘の成長を見守ること、基本的に何でもできる

容姿　長身の美青年

髪の色　銀色

瞳の色　紫色

本名は不明。左目を眼帯で覆(おお)っている。魔王と呼ばれるにふさわしいだけの威厳と能力を持っている。また正妻の他に側室も何人か存在しており、リリィは正妻の、ヴェンリスは側室の子供である。なぜ急に世界征服に乗り出したかの理由は本人とごく一部の者しか知らない。

トウキ・リュウドウ

年齢　十九歳

身長　１４９ｃｍ

体重　４０ｋｇ

スリーサイズ　６９　５５　７３

趣味、特技　けまり、特技と呼べるほどのものは習得していない（本人談）

容姿　ルナールより少し小柄な美少女。

髪の色　黒色

瞳の色　黒色

遠い東の大陸、ジポングから来た少女。リュウドウ流剣術の使い手。父親から特別な刀を渡されており、それを命よりも大切にしている

はずだが、ちょくちょく仁に勝手に使われることになる。仁に助けられてから（本人はそう思っている）彼のことを師匠と呼ぶようになった。また父親の影響か、一人称はそれがしと言い、語尾にござるをつける変わったしゃべり方をする。

キャラ設定その四（後書き）

このような感じになりました。
相変わらず簡単なプロフィールだけです・・・・・・・

第七十四話　なんだかなぁ、もうパターン化してるよ！（前書き）

いつも通り面倒事に巻き込まれるようです。

第七十四話　なんだかなぁ、もうパターン化してるよ！

日がすっかり西へ傾いたころ。

「こっちでござるっ！」

恒例の自己紹介を終えた俺たちはトウキがここに来る途中に見た村まで案内すると言われ、山道を歩いていた。

あれ以来、別に何かに襲われるなどといったことはなかったのだが――――――――――――――――

「おいトウキ。本当にこの道で良いんだろうな。」

「心配ござらんっ！　それがしに任せてほしいでござるっ！」

俺の問いにトウキは不安しか感じさせない返答を返してきた。

だってこの道・・・・・・・さっき通ったばかりだし。

俺は後ろの二人の意見も聞いてみようかと思って振り向くが。

「これは以前に見つけたお宝なのですが――――――――――――――――」

「おおっ・・・・・・これはなんて独特で素晴らしい物だろうか・・・・・・っ！」

すっかり仲良くなったメイドさんとリューグは、お互いのお宝を交

互に見せあっていた。

今はメイドさんの番らしく、いつかの埴輪(はにわ)を見たリューグが感動していた。

その反応をメイドさんが満足そうに見ている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「師匠？　なんでそんなに怖い顔をしているのでござるか？」

「別に。」

俺ははしゃぐ二人を無視してトウキの前を早足で歩き始めた。

「あっ、師匠っ！　待つでござるっ！　案内はそれがしがやるでござるっ！」

トウキが後ろから俺に追いすがってくる。

しかしメイドさんとリューグはそれに気付いていない。

俺はそのことにイラつきを覚えながらそれでも二人に構わず先頭を歩き続けた。

・・・・・・・まあ、そのせいで余計に道に迷ってしまったわけなんだが。

「ここでござるっ！」

日が沈み夜が世界を支配してから数時間。

俺たちはやっと小さな村に辿り着いていた。

「やっと着いたか。最寄りと言う割には随分と時間がかかったな。」

「何十回も同じ道を歩いていたのですから、時間がかかって当然でしょう。」

リューグの疑問にメイドさんが答える。

って、ちょっと待てぃ。

「メイドさん・・・・・・・道に迷っていたことに気づいていたのか？」

「当たり前です。」

メイドさんは涼しい顔で返してきた。

「・・・・・じゃあなんで何も言わなかったんだ。」

「リューグ様との語らいが楽しかったもので。」

しれっと答えるメイドさんに俺は溜め息をついた。

「気にするな。仁。俺も楽しかったし別に問題はないだろ。」

「・・・・・・・・ああそうだな。」

俺はリューグの慰め(なぐさ)の言葉を適当に返した。

「さあっ！　まずは宿を探すでござるっ！」

一人やけに元気なトウキが歩き出す。

仕方ないので大人しくついて――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・んっ？」

行こうとしてから、ふと目に映ったのは小さな廃屋。

「どうした。仁。」

話しかけてくるリューグを無視して俺は廃屋へ近づいた。

そのまま入口の前に立ち、壊れかけた扉に手を掛けて開く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

中には壊れた木材や釣り具、その他使えなさそうな物ばかりが置いてあった。

「・・・・・・・・・・ふんっ。」

俺は扉を閉めて、リューグ達の元へ歩き出――――――――――――――――

「仁っ！　早く来ないとメイドさんが怒るぞっ！」

メイドさんの元へ走り出した。

「あらまぁ、こんな遅い時間にお客さんかぃ。」

特に古くも新しくもない木製の平凡な宿屋の看板を掲げた店の中に入ると、店主らしきおばちゃんに声を掛けられた。

「部屋は二つほどお願いしたいでござる。」

「はいよっ。ちょっと待っておくれ。すぐに準備するからねぇ。」

おばちゃんは二階へと駆け足で階段を昇っていった。

「それでこの前見つけたのが――――――――――――――――――――」

「素敵ですね――――――――――――――――――――」

メイドさんとリューグは飽きもせずにお宝について熱く語り合っていた。

俺は少し離れた場所からそれを見ていた。

「師匠？　また怖い顔をしてどうしたのでござるか？」

「なんでもない。」

「しかし――――――――――――――――――――」

「黙れ。口を開くな。」

俺の言葉と態度に威圧されたのか、すごすごと引き下がるトウキ。

「あのぅ・・・・・・・旅の方々、少しお時間をいただけますかのお。」

そんな俺たちに声をかけてきた人物が一人。

横目で見るといかにも厄介事を抱えています的な顔をした村長らしき外見の老人と屈強そうな男が二人。

このとき俺は確信した。

いつも通り面倒事に巻き込まれることを。

「これは――――――――――――――――――――」

「なるほど――――――――――――――――――――」

ちなみにメイドさんとリューグはその存在に気づいていたのだろうが、完全に無視して話に熱中していた。

第七十四話　なんだかなぁ、もうパターン化してるよ！（後書き）

最近、仁とメイドさんの絡みがないですね・・・・・・・・・
それはともかく、活動報告のところにミニコーナーを投稿してみました。
お時間がありましたらそちらの方ものぞいてみてください。

第七十五話　はぁ、どうなっても知らないぞ！（前書き）

村長の話から始まります。

第七十五話　はぁ、どうなっても知らないぞ！

「そしてわしはこう言ったのじゃ・・・・・「君以上に大切な人などいない。」と。」

宿屋内の食堂の一つのテーブル席に俺たちは座っていた。

あれから一時間。

予想通りこの村の村長だった老人は、どこかで聞いた様な惚気（のろけ）話を延々と繰り返し話していた。

村長が連れていた二人の男は話が始まる前に逃げるように宿から出て行った。

「彼女はわしの愛を受け入れてくれてのう・・・・・・・・・わしらはこうして結ばれたのじゃ。」

「・・・・・・良い話でござる・・・・・それがし、感動で涙が止まらないでござる・・・・」

トウキは泣きながら村長の話を聞き入っていた。

その様子に俺は少し前に同じような光景を見たことがあった様な気がして思わず首を傾（かし）げた。

ちなみにメイドさんは村長の話を完全に無視してスプーンやフォーク、ティーセットなど（たぶん持参品だろう。どこに持っていたかはまったくわからないが。）の手入れをしていた。

「・・・・・・・・それで・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・はい。その通り・・・・・・・・・』

リューグはいつの間にか離れた席に座ってフーエと会話していた。

話の内容は少し気になったが、プライベートな事だったら気まずくなりかねないので聞き耳は立てないでおく。

万が一、フーエが俺のことを話していたらリューグ共々消えてもらうことになるが。

流石にそんな愚挙は犯さないだろう。

・・・・・・・・それに俺には他に気になることがあった。

まあとりあえず話を先に進めよう。

「村長。そろそろ本題に入ってほしい。まさかそんな話をするためにわざわざ俺たちを訪ねてきたわけじゃないだろう。」

「師匠っ！　今は丁度良いところ――――――――――――――――」

ギロリ。

俺が一睨みするとトウキは小さくなって黙った。

「おぉう・・・・・・・そうじゃったそうじゃった。」

村長は一旦深呼吸をしてから口を開いた。

「実は今、この村は深刻な危機にさらされておりますのじゃ・・・・・・」

「断る。」

「ええっ!?」

トウキが驚きの声を上げるが村長は気にも留めずに話を続ける。

「最近、山の方からハーピィたちが群れをなしてこの村の住人を襲う事件が多発しておりますのじゃ。そのせいで村人は迂闊(うかつ)に村の外出られず、毎日を家の中で怯えて過ごしているんですじゃ。」

長老が深く息を吐いた。

「ハーピィたちがなぜ村人を襲うかはわかりませんが、このままではいずれこの村が滅んでしまうのは明確です。旅の方、どうかハーピィたちを滅ぼしてはくれませぬか。」

「知るか。」

勝手に襲われて勝手に滅べ。

「なにいっているでござるか師匠っ！　困っている人が頭を下げてお願いしているんでござるよっ！」

「一ミリも下がっていないがな。」

即答するもトウキは納得せずに反論してくる。

「そんな屁理屈はどうでもいいでござるっ！　こんなに困っている人たちを見捨てるなんて、見損なったでござるよ師匠っ！」

「じゃあお前が一人で解決しろ。」

「嫌でござるっ！　怖いでござるっ！」

・・・・・・・・こいつなんかフレスに似てる気がするな・・・・・

「それはともかくこれが報酬なのですが・・・・・・・・・」

村長は金貨のたくさん入った袋を差し出してくる。

・・・・・・・・・・・・・・ふ～ん・・・・・・

「ほわぁ～・・・・・・・・・すごいでござるっ！　こんな大金は初めてでござるっ！」

目を輝かせているトウキを尻目に、俺は微笑みながら村長に話しかける。

「小さな村の割には随分と高額な報酬だな。これだけの金貨をどうやって用意したんだ？」

「村中から集めた言わばこの村の全財産ですじゃ。これでどうか・・・・・・」

朗らかな笑顔で応対する村長。

・・・・・・・・・こいつを信用する奴はただの馬鹿だな。

俺が呆れかえっていると。

「そんなっ！　この金貨は受け取れませぬっ！　先ほどの話ならただで引き受けるでござるっ！」

予想通りの馬鹿がいた。

「そういえば・・・・・・ハーピィたちの巣にはお宝が隠されているという話も聞きましたぞ。」

「「本当ですか（か）。」」

村長のわざとらしい言葉にお宝マニア二人が食いついてきた。

・・・・・・・・・このじじい・・・・・・

「仁。なにをしているのですか。今すぐ出発しますよ。」

「そうだぞ。仁。困っている村人たちを救うのは旅の醍醐味（だいごみ）でもあるんだぞ。」

「師匠っ！　他のお二方もこう言っているでござるよっ！」

欲望にまみれた二つの視線と、純粋な馬鹿の視線が俺に突き刺さる。

・・・・・・・・・・あ～あ。

「どうなっても知らないぞ・・・・・・・」

俺は心の底から面倒くさそうな声を出しながら席を立った。

「・・・・・・・・上手くいったようじゃな。」

村長は宿から出て行った四人を見送りながらつぶやく。

「ふふふ・・・・・・ちゃんと始末してほしいもんじゃわい。」

その言葉を聞いている者は誰もいなかった。

第七十五話　はぁ、どうなっても知らないぞ！（後書き）

怪し過ぎる村長の依頼でした。
次回は山道（深夜）から始まります。

第七十六話　いっそグレようかな、俺！（前書き）

いつも通り押し付けられます。

第七十六話　いっそグレようかな、俺！

俺たちは深夜の山道を歩いている。

周囲は薄暗い上に森に囲まれているが、幸いなことに坂道になっていることを除けば地面は比較的安定していると言って良いだろう。

どうしてこんなところにいるかと問われれば言わずもがなハーピィ退治のためにハーピィの巣へ向かうためだ。

ハーピィたちの巣は村から北の方角に二時間ほど歩いた場所にあるそうだ。

今は歩き始めてから大体一時間程度だ。

本来、ハーピィたちは人前にはほとんど姿を現さず勝手に領土内に入らなければ襲ってこないそうだ。

襲うからにはそれ相応の理由があるはず。

それが俺たちが歩きながら下した結論だった。

まあ実際のところ、そんなことはどうでもいいことだ。

はっきり言って面倒くさい。

その一言に尽きる。

だというのに――――――――――――――――

「今度のお宝は――――――――――――――――」

「いいえ、きっと――――――――――――――――」

やる気をまるで出していない俺とは違い、メイドさんとリューグのやる気は十分すぎるほどあるみたいだ。

今もハーピィの巣にある（あのじじいの話が真実ならだが）お宝は一体どういう物なのかについて実に楽しそうに議論しているところだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの～・・・・・・師匠。」

「なんだ。」

「顔がすごいことになっているでござる。」

「気にするな。」

「でも――――――――――――――――」

俺はトウキに視線を向けた。

それだけだったのだが――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・なっ、何でもないでござるっ！」

トウキは恐怖で顔を引きつらせながら俺から顔をそらした。

・・・・・・まったく、失礼な反応をする奴だな。

「トウキ。」

「ひゃいっ!?　なっ、なんでござるかっ!?」

話しかけただけなのにトウキは思いっきり後ろに下がった。

「・・・・・・・・・なにをしている。」

「そっ、それがしを食べてもおいしくないでござるよっ!」

「誰が食うか。」

飢えているわけでもないのに人肉なんてまずい物、頼まれたって食いたくない。

「そっ、それなら一体なんでござるっ!?」

相変わらず怯えきった表情で俺に近寄ろうとしないトウキ。

・・・・・・・・ちょっぴり傷ついた・・・・・

「・・・・・・今回の件どう思う?」

「・・・・・・・・・どういう意味でござる?」

俺の問いかけにトウキも問いかけで返してきた。

「あのじじいの話を本当に信じているのかと訊いているんだ。」

「・・・・・・師匠は村長殿の話を信じていないのでござるか？」

「仮に本当だとしてもハーピィたちは理由もなく人を襲わないんだろう？」

俺の言葉にトウキは少し考えるようにうなった後。

「わからないでござるっ！」

即答かつ断言されました。

「・・・・・・・・・そうか。」

「ですが仮に何か事情があったとしても、それは村人を襲って良いという理由にはならないでござるっ！」

トウキが力強い言葉に俺は肩をすくめて発言する。

「襲わなければならない理由があったとしたら？」

「・・・・例えばどのような理由でござるか？」

「さあな。とりあえずわかるのは――――――

メイドさん、リューグも同様だ。

「師匠？　メイドさん？　リューグ殿？　どうしたでござるか？」

「仁。私たちはもう場所を覚えましたから地図は渡しておきます。」

「どちらがお宝を先に手に入れるか。勝負だメイドさん。」

一人だけ状況を理解していないトウキを放って好き勝手なことをほざくメイドさんとリューグ。

ああ。つまり――――――――――――――――

「こいつらの相手は俺一人でやれと。」

「その通りです。」

「頑張れ、仁。」

その言葉を残して二人はそれぞれ別方向の闇の中へと疾走して行った。

「キキィッ！？」

メイドさんとリューグが消えた闇から甲高（かんだか）い悲鳴が聞こえた。

「師匠っ！？」

おおよそ人のものとは思えない悲鳴を聞いて、トウキもやっと状況を理解した様だ。

それにしても――――――――――

「どーしていつも俺だけが戦わされるんだろうな～・・・・・・」

森の中から複数の気配がこちらに近づいてきた。

もうすでにパターン化している状況に俺は溜め息をつくことしかできなかった。

『よろしいのですか？　リューグ。』

「さあな。」

フーエの問いかけに言葉を濁すリューグ。

その脳裏に浮かんでいるのは、あの時のメイドさんの言葉――――――――――

「・・・・・メイドさんの考えなどよくわからん。」

第七十六話　いっそグレようかな、俺！（後書き）

トウキと二人きりになってしまいました。

第七十七話　くそっ、油断した！（前書き）

雑魚共との戦闘です。

第七十七話　くそっ、油断した！

俺はゆっくりと三百六十度全方向を見渡してからトウキに声を掛ける。

「トウキ。」

「なんでござるか？　師匠？」

「刀貸せ。」

「だから駄目だと言っているでござるっ！」

そう言うと思った。

俺が溜め息をつくのとほぼ同時に暗闇の中から人に近い形の何かが襲いかかってきた。

「ギキィッ！」

襲いかかってきたソレは黄緑色の皮膚に動きやすさを重視した皮の鎧と皮の帽子をかぶっており、右手に持った棍棒を俺に向かって振り下ろす。

だが――――――――――――――――――――

「・・・・・これでいいか。」

つぶやきと共に俺は左手で棍棒を受け止めてソレの顎（あご）を右足で蹴り

上げる。

「ゲギャウッ!?」

ソレは棍棒から手を離し悲鳴と共に三メートルほど浮遊してからソレは地面に落ちる。

ピクピクと痙攣しているからまあ死んではいないだろう。

「トウキ。コイツはなんだ。」

ソレの正体を知るべくトウキに質問する。

「知らないのでござるか？　師匠。」

「ああ。知らない。」

トウキは呆れた顔になった後、いきなり得意げな顔に変わった。

「仕方ないでござるなぁ～。物を知らない師匠にそれがしが教えてあげるでござる。」

「頼んだぞ。」

言い方は少々ムカついたが、教えてくれると言っているのに反論する必要はないだろう。

「これは劣化人獣（ゴブリン）と呼ばれている魔物でござる。」

「ゴブリン？」

またメジャーな名前が出てきたな・・・・・・・

「ゴブリンは比較的に知能があまり高くないでござるが、ある程度人語を解することができ、更に自分たちで道具を作ったり人の死体などから道具を奪ったりするでござるが、基本的には大したことない魔物でござる。」

「なるほど。」

俺が納得したように相槌を打つと気分を良くしたのかトウキは更に言葉を続ける。

「ゴブリン共は基本的に群れで行動しているでござる。単体での能力はそれほど高くないでござるが、連携してこられるとそれなりに厄介な魔物になることもあるでござ・・・・・・」

言葉を終える前にトウキの顔が青ざめていく。

・・・・・ようやく気付いたみたいだな。

周囲にうごめく無数のゴブリンの怒りの気配に。

俺は奪った棍棒を肩に乗せた。

「大体三百匹ってところか。」

この程度の数なら一人で仕留められるが――――――――――――――

「しっ、師匠っ！？　逃げるでござるよっ！」

・・・・・・今はこいつがいるからな～。

俺は心の中で深い深いため息をついた。

「無理。完全に囲まれている。」

慌てふためくトウキに俺ははっきりと言ってやった。

「そっ、それならどうするつもりでござるかっ！？」

叫ぶトウキの疑問には答えず、俺は正面を見据える。

「トウキ。俺から離れるなよ。勝手に離れて死んでも俺は置いて行くからな。」

「へっ！？」

「行くぞっ！」

俺は暗い森の中へと駆け出した。

「しっ、師匠っ！？」

慌ててトウキが俺の後ろを走り出した。

「ギギョェェッ！！」

複数の甲高い叫びが森の中に響き渡ると共に、俺たちに向って複数

のゴブリンが襲いかかってきた。

「邪魔っ！」

俺は手にした棍棒を走りながら振るって襲いかかるゴブリン共を薙ぎ払っていく。

「ギギィッ！？」

ゴブリン共は吹き飛ばされ、木に激突したり地面に叩きつけられ動かなくなる。

だが数が多すぎる。

倒しても倒しても次々にゴブリンが湧いてくる。

俺はゴブリン共を倒しながら後ろを見やると、案の定ゴブリン共に囲まれて身動きが取れなくなっているトウキの姿があった。

やはりトウキを連れての一点突破は無理があったか・・・・・・

いっそ気絶でもしていてくれたならすぐにこいつらを殲滅出来るのだが・・・・・・

そこまで考えてから俺はふと気が付いた。

・・・・・・・どうしてこいつらを殲滅しなければならない？

トウキだけを置いてさっさと先に進めばいいだけの話だ。

少なくとも以前の俺ならそういう考えが選択肢にあったはずだ。

なのになぜ。

見捨てるという選択が俺の中から無くなっているんだ――――――

――――

困惑する俺は死角から来た一撃に気付けなかった。

「ギヒィッ！」

振り下ろされた棍棒の一撃はまったく意識していなかった後頭部へと命中した。

「っ！？」

「師匠っ！？」

俺は悲鳴こそ上げなかったが不意の後頭部への一撃に意識が朦朧（もうろう）としてしまった。

その隙をゴブリン共が見逃すはずもなく、十数匹のゴブリンが一斉に襲い掛かってきた。

「くっ！　・・・なめ・・・・・・・るなっ！」

俺は棍棒で応戦するが狙いがうまく定まらない。

それでも襲い来るうゴブリン共から目を離すことはしなかった。

だからなのだろう。

その一撃に気付けなかったのは。

「がっ！？」

後頭部への強烈な一撃。

ゴブリン共ではない空からの突然の奇襲。

薄れゆく意識の中、俺はそもそもなぜここに来たのかを思い出していた。

有翼人種（ハーピィ）の巣。

完全に失念していた。

俺は最後に羽ばたきながらこちらを見下ろすその姿を瞳に写してから。

自身の目と意識を閉ざした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

闇の森の中を走り続けていたメイドさんは急に足を止めて後ろを振り向いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

だがすぐにまた前を向いて走り出す。

メイドさんには戻るという選択肢はなかった。

例えどのような予感があったとしても。

第七十七話　くそっ、油断した！（後書き）

雑魚を侮ってはいけません。

第七十八話　昔のことを、夢に見るなんてな！（前書き）

（注）この特訓（というより拷問）は仁だからこそ生き残れました。常人では百パーセント死にますので決して真似をしないでください。

第七十八話　昔のことを、夢に見るなんてな！

「何度やらせても失敗ばかりだな。このクズは。」

「ごっ、ごめんなさいっ！」

山奥の森の中。

父の言葉に俺は全身の痛みに耐えながら必死に謝っていた。

母はそんな俺を冷たく見つめているだけだった。

確かこれは俺が五歳の頃の記憶だ。

断わっておくが俺の両親は優しい両親だと思う。（まあ一般家庭がどのようなものかは知らないので比較対象は存在しないが。）

単純に訓練のとき、一切の容赦がないだけだ。

幼い頃、俺はよく幼稚園や学校を休んだ。

もちろん体調不良などではなく、訓練のためだ。

出席日数は両親が（方法はわからないが）どうにかした。

「もう一度だ。さっさとやれ。」

「はっ、はいっ！」

俺は父の命令に必死に体を動かした。

この時の訓練は、確か単純に跳ぶことだったはずだ。

ただし崖の上から下の地面へと。

最初の頃は滝つぼへと落ちるだけだったが、それは文字通り最初だけだ。

一日もしないうちに崖から地面へと飛び降りる訓練に変わっていった。

五メートル、十メートル、二十メートル、四十メートル――――――

飛び降り、着地に失敗するたびに高さは上がっていった。

両足の骨が砕けた。這いずって更に高いところへと。

全身の骨が砕けた。砕けた骨を激痛と共に動かして更に高いところへ上がっていった。

動かないという選択肢はない。

動かなければ死ぬだけだったから。

「早くしろ。生ゴミ。」

父が激痛の中でミノムシの様に這いずる俺の頭を踏みつける。

「本当に使えない愚図（ぐず）だな。お前は。」

「・・・・・ごめん・・・・・・なさい・・・・・」

グリグリと後頭部を踏みにじる父に俺は謝罪の言葉を述べることしかできなかった。

それを何度か繰り返していると、不意に父が言った。

「ふんっ。一度も成功しないとはな・・・・・・もういい。帰るぞ。」

父は母に一声掛けて森の中へと去って行った。

「・・・・・一つだけ忠告しておいてあげる。」

母は俺を冷たく見下しながら口を開いた。

「このあたりは夜になると野犬が多く出没するわ。どうすれば生き残れるか考えてみることね。」

それだけ告げると母も森の中へと去って行った。

残された俺はたった一人――――――――――――

激痛の中、自分が生き残る方法だけを必死に考えていた。

俺は目をゆっくりと開けて起き上った。

「師匠っ！？」

近くにいたトウキが驚きの声を上げたかと思うと、いきなり泣きながら抱きついてきた。

「・・・・師匠・・・・・・・良かった・・・・・・本当に良かったでござる・・・・・・」

俺は曖昧（あいまい）な意識のまま、周囲を見渡してみる。

土でできた部屋に入口には鉄格子。

どうやら洞窟、それも牢屋の中に閉じ込められているみたいだ。

次になぜこのような所にいるのかを思い出そうとして――――――――

思い出せなかった。

否、正確にはゴブリン共に後頭部を殴られて、その後すぐにハーピィに殴られたのは覚えているのだが・・・・・・・・

って考えずともこの場にいるじゃないか。

あのとき何が起こったのかを目撃した奴が。

「トウキ。いい加減離れろ。」

「ふ、ふぁいでござる。師匠。」

トウキが俺から離れると、鼻水がベッタリと俺の服に付いていた。
後で殴っておこう。それより今は――――――――――――――
「トウキ。俺が気絶している間になにがあったのか説明しろ。」
「・・・・・ぐすっ、了解でござる。師匠っ！」
トウキの話を聞いているうちに、俺の頭は徐々に覚醒していった。
あの時、俺が気絶した後。
上空から俺を奇襲したハーピィの群れはそのままゴブリン共に攻撃を仕掛けたそうだ。
突然の空からの攻撃にゴブリン共は統率を失い、散り散りに逃げ去ったそうだ。
そしてハーピィたちは気絶した俺とゴブリンの相手をして疲弊したトウキを襲おうとして、不意に響いた上空からの命令で動きを止めたらしい。
ハーピィたちは上空から捕縛網を投げつけ、捕らえた俺とトウキを巣へと運び込み――――――――――――
「そして牢屋の中に閉じ込められたわけか・・・・・・」
俺は納得したように頷いた。

「でも師匠が生きていて本当に良かったでござるっ！」

心の底から喜んでいるトウキに、俺は微笑みながら頭を撫でてやった。

「悪い。心配掛けたみたいだな。」

「本当でござるっ！　師匠が死んでいたら誰を囮にして逃げだせばいいのかわからないでござるっ！」

「うん。素直なのは良いことだが時と場所と人を選んだほうがいいぞ。」

そのまま頭を鷲掴みにして力を込める。

「みぎゃぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！！！
ごめんなさいでござるぅぅぅーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

こいつ本当にフレスに似ているな。

俺は苦笑しつつも少しずつ力を込めていく。

そんな最中（さなか）、不意に牢屋の入り口が開き、一人のハーピィが中に入ってきた。

「出ろ。ルギウス様がお呼びだ。」

命令口調のその言葉は、俺が知りたい情報を訊くためのまたとない機会だった。

「・・・・・・・・・・あの・・・・・・」

命令口調だったハーピィが急にオドオドとし始めた。

どうしたんだろうか？

「その人・・・・・・口から泡を吹いているんですけど・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・あっ。

第七十八話　昔のことを、夢に見るなんてな！（後書き）

これだけのことを幼少期からずっとやっていたのに仁の性格がそれほど歪まなかったのは、両親の遺伝子と幼馴染みのおかげです。

第七十九話　話くらい、聞いてやるか！（前書き）

続きです。

第七十九話　話くらい、聞いてやるか！

「・・ううぅ・・・・・・・・・・非道い目にあったでござる・・・・・・」

頭を押さえながら俺の後ろをフラフラとトウキがついてくる。

牢屋から出された俺たちは、一人のハーピィに連れられてルギリス様とやらに会うために巣内部を歩いていた。

洞窟内は壁に掛けられたたいまつの

「・・・・・・わざとではないんだ。ただちょっと力の加減を間違えただけだ。というわけで忘れろ。少なくとも俺は忘れた。」

俺は後ろのトウキに矢継ぎ早に言葉を並べた。

トウキは納得してないでござると顔に出していたが、自分にも非があるとわかっていたためか何も言ってこなかった。

「・・・・・・・・・・ここだ。」

先頭を歩いていたハーピィが、少し大きめの木製の扉の前で立ち止まった。

「ルギリス様。捕らえていた二人を連れて参りました。」

「御苦労。入れ。」

木製の扉が軋む音を立てながら開いた。

・・・・・・・相当古いな。

素直に新しい扉にした方が良いと思うぞ。

などと親切な忠告をしたら面倒くさいことになりそうなので、黙って部屋の奥の椅子に座っている気の強そうなハーピィに視線を向ける。

他のハーピィが横に立っているところから察するに、この女がルギリスで間違いないだろう。

トウキは俺の後ろに隠れてルギリスと目を合わせようともせずじっとしていた。

「・・・・・・・貴様たちか。この巣の近くでゴブリン共と戦っていたというのは。」

「違います。」

「嘘をつくな。」

俺の迷いの一切ない即答に、ルギリスも即答で返してきた。

「・・・・・・・・・なぜ私たちが戦ったとわかるのですか？」

「実際に見ていたからな。お前たちを捕らえる様に指示を出したのも私だ。」

なら訊くんじゃねえよ。

不敵に微笑むルギリスにそう言ってやりたかったが、時間の無駄だろう。

「要件は何だ。」

これ以上、下手に出ても無駄と判断した俺は一転して強気になる。

「貴様・・・・・・・・・ルギリス様になんて口のきき方をっ！」

「よせ。」

一人のハーピィが俺に掴みかかって来ようとするのをルギリスが手で制した。

「・・・・・・貴様の戦いぶりは遠くから拝見させてもらった。その強さを見込んで私たちの頼みを聞いてくれれば自由を約束しよう。」

ルギリスの言葉に俺は疑問を持った。

「遠くから見ていたって、俺たちがゴブリン共に囲まれてやられそうになっていたところをか？　そんなところを目撃したなら俺たちが弱いってことをわかっているはずだろう。」

俺の言葉にルギリスは首を横に振る。

「確かに先の戦いは無様だった。だが貴様は昼間、あの蟲の化け物を倒しただろう？　なら貴様は先ほど故意に手を抜いていたか、本

気を出せなかった理由がある。と考えるべきだ。」

自信満々に言いきったルギリスに俺は反論する。

「買いかぶりだ。あの化け物を倒したのも単なるマグレかもしれないだろ。」

「運や偶然であのような技が撃てるわけがない。」

・・・・・・・しっかり見られていたか。

俺はあの時怒りに任せて技を使ってしまったことを少し反省した。

「頼みとはなんだ。」

これ以上会話を続けてもごまかせないことはわかりきっていたので、さっさと頼みとやらを聞くことにした。

俺の言葉にルギリスは不敵に微笑み。

「・・・・ある女を殺すことだ。」

物騒なことを言い出した。

「殺人依頼か。また唐突な話だな。」

「とっ、唐突なんて問題ではないでござるよっ！　師匠っ！」

のんびりと返答した俺とは対照的に慌てた様子のトウキは（俺の後ろから出ずに）ルギリスを睨みつける。

「それがしらは武士でござるっ！　安易に人殺しの依頼を受ける様な愚か者ではござらんっ！」

「引き受けてくれないのならば身の安全は保証しないが？」

ルギリスの一言で周りのハーピィたちが臨戦態勢に移った。

「師匠っ！　出番でござるっ！」

俺を盾にしながら俺の背中を押し始めるトウキ。

・・・・・・・どうして俺はこんな奴を助けたんだろうか・・・・・

いっそのことこの場でトウキを八つ裂きにしたい気分に襲われたが、グッと我慢して発言する。

「ある女とは誰だ。詳細な情報が無いと引き受けるべきかどうか判断がつかない。」

ルギリスは鋭い視線を俺に向けてくる。

「・・・・・・立場がわかっていないようだな。貴様に引き受ける以外の選択肢があるとは思えないが。」

「そっちこそ。俺と戦って無傷で済むと思っているのか？」

数秒間。俺とルグリスは睨み合っていた。

沈黙が支配する中、ルギリスがゆっくりと口を開く。

「・・・・・・・・わかった。口頭で良いのなら教える。」

「充分だ。」

ルギリスは嘆息(たんそく)をしてから――――――――――――――――

再び口を開いた。

「・・・・・・・ここか。」

リューグは自身で確認するようにつぶやいた。

「・・・・・まったく、メイドさんも人使いが荒いな。」

仁が苦労するわけだ。

苦笑しつつリューグはその中へと侵入して行った。

第七十九話　話くらい、聞いてやるか！（後書き）

リューグは現在メイドさんの指示で動いています。

第八十話　魔女討伐は、勇者にやらせろ！（前書き）

ルギリスの話しの続きからです。

第八十話　魔女討伐は、勇者にやらせろ！

「その女はこの山から更に北にある通称“サマヨイのモリ”の奥に住んでいる魔女だ。」

俺とルギリスは向かい席に座って話をしている。

他のハーピィはルギリスの命令で部屋の外におり、トウキは俺の隣の椅子に座って大人しくしていた。

ルギリスは淡々（たんたん）と説明を続ける。

「あの女がどこから現れたのか。目的は何なのか。それらについてはまだ何もわかっていない。だが問題なのはあの場所を勝手に使われているということだ。」

「特別な場所なのか？」

俺の質問にルギリスは首を縦に振る。

「あの場所は私たちハーピィにとって神聖であり欠かせない場所。あの場所を乗っ取られては一族の存亡の危機だ。」

「それほど大切な場所を簡単に奪われたわけか。」

「・・・・・・・・・・その通りだ。」

苦々しい表情には自身の未熟さに対する怒りの色があった。

「私たちも何度かあの魔女に出て行ってもらうよう話しあいに行ったのだが全て拒否され、武力行使も行ってきたのだがそのたびに返り討ちにあい、果てはあの蟲の化け物をけしかけられる始末。あの化け物には私たちでは歯が立たずどうするべきか悩んでいたところに――――――――――――――――」

「俺が現れた。」

「そうだ。」

俺の言葉を肯定するルギリス。

「貴様は私たちが傷一つ付けることができなかったあの化け物を一瞬で倒して見せた。その強さがあればあの魔女も倒すことができるはずだ。」

ルギリスの話を聞きながら俺はあることを考えていた。

すなわちこの話を引き受けることで生じるメリットとデメリットについてだ。

メリットとして上げるならば終わった後の自由だけだ。

一方、デメリットは面倒くさい。報酬が無い。魔女の力量次第では命がけになるかもしれない。など。

考えるまでもなくデメリットの方が大きい。

しかし引き受けなければハーピィたちを皆殺しにしないと外に出られそうもない。

「ちょっと待つでござる。」

俺が考え込んでいるとトウキがルギリスにあることを尋ねる。

「それがしらは村人を襲い続けるハーピィの討伐のためにここに来たのでござる。依頼を受ける以前の話に、まず村人を襲う理由を話してほしいでござる。」

・・・・そういえば俺たちは元々、あの胡散臭いじじいの依頼でここに来たんだっけ。

「？　なんのことだ？」

だがルギリスの返答は予想外の物だった。

「なっ、何の事ではござらんっ！　お主たちハーピィが村人を襲っていると近くの村の村長言っていたでござるっ！」

「・・・・・・・言いがかりもほどほどにするべきだぞ。」

ルギリスの視線が鋭くなる。

・・・・・・見かけによらず短気な奴だ。

だが少なくとも嘘をついている目では無い。

俺は顎（あご）に手を当てて思考にふける。

ならあのじじいが嘘をついたということか？

その可能性としては低いだろう。

意味がないからだ。

初対面の旅人にハーピィの殲滅など頼んで、失敗したら報復として村が襲われる危険が高い。

仮にも村長を務めているならば理由もなく村を危険にさらすわけがない。

ならばあのじじいの言葉通り人間を襲っているハーピィがいると考えるべきだ。

だがルギリスは知らないと言っている。

「・・・・・・・・・お前たち以外にこの付近にハーピィはいるのか？」

「・・・・・・・・・・いる。」

俺の問いに少し考えてからルギリスは肯定の言葉を口に出す。

「しかしそれはありえない。あの方がわざわざ人間を襲うなど考えにくい。」

「あの方？」

ルギリスはハッとなって口を塞ぎ。

「・・・・・・・・・なんでもない。」

なんでもあるような言葉でごまかした。

「そうか。」

問い詰めても無駄だということはわかっているのであえて問い詰めない。

「何を言っているのでござるかっ！　師匠っ！　この女は明らかに隠し事を――――――――むぐぐっ！？」

「それじゃあこの話はここまでだ。本題に戻るぞ。」

「・・・・・・・・・わかった。」

俺は馬鹿の口を手で塞いで話題を無理やり終わらせた。

理由？　これ以上、面倒事を増やすのが嫌だからに決まっているだろう。

なぜかトウキが死に物狂いで俺の手から離れようと暴れていたが、俺は少しだけ腕に力を込めると徐々に大人しくなっていった。

「それで、引き受けてくれるのか？」

ルギリスの質問に俺は答えた。

「・・・・・・・・・・・・・・おい。一つ良いか。」

ルギリスが困惑の視線を俺に向けてくる。

なんだ？　また俺は何かしたのか？

「その娘。顔色が真っ青だぞ。」

言われてトウキの顔を見ると、確かに真っ青になっている上に口から泡を出している。

明らかに先ほどよりも重症だ。

軽く口を塞いでいるだけなのにどうしてだろう？

「・・・・・・・・もしかして気づいていないのか？　さっき右手で口を塞いだ時に左手でついでの様に首を絞めていることに。」

あっ。

・・・・・・・・・・・・・・

第八十話　魔女討伐は、勇者にやらせろ！（後書き）

次回ハーピィの巣から出発します。

第八十一話　朝日が、目に染みるな！（前書き）

ハーピィの巣からの出発です。

第八十一話　朝日が、目に染みるな！

「朝か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

山頂にあるハーピィの巣穴から出ると、そこには一面美しい光景が待っていた。

朝日に照らされる森や空を飛んでいる見たことのない鳥や飛竜に乗って槍を持っている鎧姿の人。

まさに現代社会では見られないファンタジーの世界だった。

背後でテレビから這い出てきた貞〇クラスの恨みの視線を向けてきている相手に気付かないふりをしながら俺はつぶやいた。

・・・・・・・特に意味はないが。

「・・・・・・・・・・師事する人を間違えたでござるか・・・・・・」

ブツブツと俺に聞こえるギリギリの大きさの声でつぶやくトウキと俺は目を合わせようとしなかった。

・・・・・・・流石についうっかりで殺し掛けた相手を直視するつもりはない。

「人生山あり谷ありだぞ。勉強になったなトウキ。」

だが話し掛けはする。

「・・・・・・・何の勉強でござるか。」

一応反応を示してくれるトウキに俺は朝日を見つめたまま断言する。

「ついうっかりで殺害されてしまった人の気持ちだ。」

「死ねでござる。」

いつになく辛辣な言葉使いを（出会ってからまだ一日も経過していないが。）するトウキに俺は背中に一筋の汗が垂れるのを感じた。

うわ～・・・・・・・めちゃくちゃ怒っているよこの娘・・・・・

どうしようか・・・・・・・・・

どうにかして機嫌を直させる方法を考えていた俺は遠くを飛んでいる鳥を見つめて、あることを思いついた。

「そうだトウキ。焼き鳥なんてどうだ。この辺の鳥は肉付きが良いみたいだからきっと美味しいぞ。」

単純な娘を食べ物で釣るという俺の名案は。

「・・・・・・・それは私たちに対する宣戦布告と受け取っていいのだな。」

後ろにいるもう一つの殺気で却下された。

「・・・・・・やっぱり焼き鳥は嫌い？」

「・・・・・貴様は私たちをなんだと思っている。私たちが共食いをするとでも思ったのか。」

ルギリスは非難の視線を俺に浴びせてくる。

その視線はトウキの殺気と重なってなかなかの破壊力の眼力と化した。

・・・・・う～む・・・・・なかなかの殺気だ・・・・・・・

夜叉メイドさんや羅刹理香に比べれば幼稚としか言いようがないが。

「まあいいや。そろそろ出発するぞ。」

俺は殺気立つ二人に一声かけてから歩き始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でのろのろと歩き出すトウキとやはり無言で翼を羽ばたかせて飛んでついてくるルギリス。

・・・・あの馬鹿だったら、女性からこんな風に睨まれることはあり得ないんだがな・・・・・

俺はこの場にいないモテチートの顔を歩きながら思い浮かべた。

「君が睨まれているのは間違いなく君の行動の所為だからね。」

「東間様？　どうなさったのですか？」

「・・・・いや。ごめん。なんか言わずにはいられない衝動に駆られたから・・・・・」

「？」

とある街道のとある勇者たちの会話。

「そういえばルギリス。一つ訊いても良いか。」

「・・・・・・内容による。」

昼間でも薄暗い森の中を歩いている最中、俺はルギリスに話しかけた。

ルギリスは低空飛行で俺の隣を飛んでいたが、どう見ても木の枝が邪魔をして上手く飛べておらず時々木に激突していた。

それでもルギリスは何かこだわりでも持っているのか、意地でも歩こうとはしなかった。

トウキは相変わらず幽鬼の様に表情一つ動かさずに抜き身の日本刀を手に持って俺の背後にピッタリと憑いてきているが、そのうち機嫌が良くなるだろうから放っておくことにした。

「これから向かう場所ってそれほどハーピィにとって重要な場所な

のか？」

「ああ。先ほども言ったが、あの場所は私たち一族にとって神聖であり欠かせない場所だ。」

「一体どんな場所なんだ？」

続けて問うた俺の言葉に、なぜかルギリスは頬を赤く染めて沈黙した。

「どうした？　なんで黙っている？」

「・・・・・・・・その・・・・あの場所は・・・・・えっと・・・・」

「さっさと言え。言わないならこの話は無かったことにするぞ。」

はっきりしない物言いをするルギリスに俺は少々苛立ったので少し強めに問い詰めた。

「・・・・・・・・・・尾・・・・・・・」

「聞こえないぞ。もっとはっきり言え。」

「だからっ！　あの場所はハーピィが交尾をする場所だって言ったっ！」

真っ赤になって叫ぶルギリス。

「・・・・・・・・・・よくそんなこと大声で叫べるな。お前。」

「貴様が言わせたんだろうっ！」

「うおっ！　危ないだろっ！　いきなり攻撃してくるなっ！」

理由もなくキレたルギリスから俺は走って逃げだした。

・・・・ちなみにトウキはどれだけ走る速度を上げても俺の背後にピッタリと憑いてきていた。

流石に不気味にだったのでチラっと後ろを見て。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・『呪〇』に出てきても違和感がなさそうなその顔に、以前の洋館の時とはケタ違いの恐怖を感じた俺は何も見なかったことにして前だけを見つめて走り続けた・・・・・

第八十一話　朝日が、目に染みるな！（後書き）

トウキが怖くなってきました・・・・・・・・・

第八十二話　普通、空から降ってこないだろ！（前書き）

あの娘がやってきました。

第八十二話　普通、空から降ってこないだろ！

森の奥、サマヨイの森までもうすぐというところで。

「んっ？」

背後のトウキの殺気にも慣れたころ、上空からの新しい気配を感じた俺は空を見上げた。

「ーーーーーーーーーーーーぁぁぁぁぁぁぁあああああっ！！！」

徐々に大きくなっていく悲鳴と共に空から何かが急降下してくる。

「・・・・・・・・下がれっ！」

俺は咄嗟にルギリスの片足を掴んで右に跳んで身を伏せた。（トウキもやはりピッタリと憑いてきた。）

大きな音を立てて一人の女が頭から地面に激突した。

「・・・・・・・・・・・・なんだ？」

動かなくなった女をルギリスは不審げに見つめる。

「・・・・・・・・・・・・うぅ。」

倒れているのは黒い装束に身を包んだ灰色の髪の小柄な女。

・・・・・・・・・・・・はて。つい最近見たことがある様な・・・・・

・・

思考していた俺の背後から迫りくる凶刃を左手で受け止めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

左手から血が流れる。

無言のまま刀を下げるトウキの顔からは一切の表情が無くなっていた。

・・・・・・・・やばい。本気でどうにかした方が良さそうだ。

俺は倒れている女を無視することにして、トウキの機嫌を直す方法を真剣に考え始めようとしたのだが。

「お～い。ルナール～。大丈夫か～。」

のんびりとした声と共に深紅の竜に乗った笑顔の竜騎士が空から舞い降りた。

「・・・・・・・ルナール？」

口にした名前に俺はようやくかつて戦った暗殺者を思い出した。

そういえばいたな。そんな奴。

などと口にしたら本気で泣かれるか怒られるかのどちらかしかない

だろうことを思ったことは内緒にしておく。

「え～っと。」

突如現れた竜騎士は竜から降りると手に持った槍の矛先でツンツンとルナールの頬を突いた。

見た目は長身で整った顔立ちに深紅の鎧を身に纏った好青年の堅物といった感じだ。

だがやる気の感じられない瞳と口調から判断すると堅物ではないことがうかがえる。

「大丈夫そうだな～。」

槍を引き戻す青年は、ルナールの頬から結構な量の血が流れていることを気にも留めなかった。

・・・・・・刺さっていたことは気付いていないのか、気付いていてスルーしているのか。

変わらない笑顔からは真相はうかがえない。

と、竜騎士が俺の方を向いた。

「初めましてだね～。僕はフェブナルっていうんだ～。自己紹介したいところだけど面倒だから名前だけで良いよね～」

青年――――――――――――――――――フェブナルと名乗った男はそのまま再び竜の背に乗り手綱を握りしめる。

流石にこのまま還すわけにはいかなかったので、俺は大声でフェブナルを引き止めることにした。

「おいっ！　なんなんだお前はっ！　どうしてルナールがいきなり空から落ちてきたんだっ！　説明しろっ！」

「え～。やだ～。面倒くさ～い。」

やはり笑顔のまま青年はそれだけ言うと飛竜を羽ばたかせて空高く上がっていく。

ったく、このまま逃がしてやるほど俺が甘ちゃんに見えるのかねっ！

俺は倒れているルナールの片足を両手でしっかりと掴む。

「おいっ！　なにを――――――――――――――――――――」

先ほどから話しの流れについて行けず空気になっていたルギリスの声が聞こえたが、当然の様に無視して俺はその場で回転し始める。

グルグルと高速で回転しながら（流石にトウキもルナールに当たらない様に俺から少し離れていた。）俺は去っていく赤い竜騎士に狙いを定める。

充分に回転して勢いをつけた俺はルナールを投げ――――――――――

「・・・・・・・っ！？」

ようとして両手からルナールの足がすっぽ抜けた。

ルナールは豪快な音と共に大木に激突し、激突された大木には亀裂が走り鈍く大きな音を立てて倒れた。

「あっ、あれっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルギリスはゴミを見る様な眼で俺を見続け、トウキは先ほどまでとはまったく違い『倒すべき悪はここにいる』とでも言いたげなはっきりとした憎しみの視線を向けてくる。

だが俺はしばらくの間自分の両手を見ていた。

「・・・・・・・・・・どういうことだ？」

先ほどトウキを殺し掛けてしまった時もそうだった。

力の加減、腕の感覚がおかしくなってきている。

それだけじゃない。

考えてみればいくら考え事をしていたからといって、普段の俺がゴブリン程度に不意打ちを食らうわけがない。

思えばあの時。違和感を感じ始めたのはメタを消した時からだったか。

もっとも、あの時はほんの少しの違和感だったから気にも留めていなかったが・・・・・

俺は両手を強く握りしめ脳裏に浮かんだ考えを振り切るように頭を横に振った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ。」

その後、何事もなかったように空を見つめてつぶやく。

「・・・・・・戦いはいつも虚(むな)しい・・・・・・彼女はそのことを身をもって俺たちに教えてくれたんだ・・・・・・・・」

「「外道（でござる。）。」」

・・・・・・・・名言風な言葉で誤魔化そう作戦。失敗・・・・・・・・

「・・・この・・・・・感じ・・・・やっぱ・・り・・・・・・さ・・い・・・・こう・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・気まずい沈黙だけがその場を支配した。

第八十二話　普通、空から降ってこないだろ！（後書き）

ルナール再登場。
そして合流しました。

第八十三話　そろそろ、先に進みたいんだが！（前書き）

まだ中に入りません・・・・・・・・・・

第八十三話　そろそろ、先に進みたいんだが！

「やれやれ・・・・・・・余計な時間を食ったな。」

「誰の所為でござるか。」

「反省しろ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もう一度やってほしいな・・・・・・・」

サマヨイの森の入口の手前。

二人の非難の声と、なぜか傷一つ負っていない一人の危ない発言に俺は溜め息をついた

幸いなことに、ルナールの突然の登場にトウキは自分の怒りを忘れてしまったようだ。

・・・・・いや。もしかしたら実はトウキは二重人格で何かのスイッチで入れ替わるとかいうオチかもしれないが・・・・・・

とにかく俺はこの時ルナール感謝の気持ちを込めて、今度何か（物理的ダメージを与えることを）してやろうと思った。

まあそれはそれとして。

「ルナール、何があったのか話を聞かせてもらうぞ。」

二人から背筋が凍りつく視線を向けられつつも、俺はルナールに何があったのかを問いただした。

「わかった。」

ルナールは頷くとここに来た経緯について語り始めた。

「つまり・・・・・・・・・リリィはいま東間たちと一緒に行動していて、俺たちと確実に合流するために部下の一人に頼んでお前を自宅から俺の元に連れてきてもらったと。」

確認の言葉にルナールは首を縦に振った。

竜騎士。ということは恐らくヴェンリスの部下だろうが・・・・・・にしても解せない。

「どうやって俺の位置を調べたんだ。」

「それはバット様が――――――――――――――――――――――――なんでもない。忘れて。」

問いかけに答えかけてから言葉を濁(にご)すルナール。

まあ深く追求するつもりはないが・・・・それにしても魔王の娘が勇者と一緒に行動ねぇ・・・・・・

「いや・・・・・・最近では割と一般的なことなのか・・・・・・・・？」

「何をブツブツ言っているのでござるか？　師匠？」

「いや。なんでもない。」

・・・・・まず最初にやっておくか。

俺はトウキの頭に手を置いてゆっくりと撫で始めた。

「わっ！？　なっなんでござるかっ！？　師匠っ！？」

「トウキ。さっきはすまなかった。許してくれ。と言える立場じゃないが謝らせてくれ。」

俺は謝罪の言葉を口にした。

・・・・・・・・いちいち謝るなんて、かつての俺じゃあ考えられないことだな。

「・・・・師匠・・・・・・・・・・・・・」

顔を赤くしながらされるがままになるトウキ。

しばらくの間、ゆったりした時間が――――――――――――――――――――――――

「ごほんっ！！！　げほっげほっ！！！」

流れなかった。

俺はトウキの頭を撫でるのをやめて、わざとらしく咳をしたルナー

ルに視線を移した。

ルナールの視線はなぜか厳しい物になっていた。

「仁。リリィ様がお待ちになっておられる。早く行くぞ。」

強引に俺の腕を引っ張り始めるルナール。

「急にどうした。殴るぞ。」

「ぜひっ！！　・・・・・・・・・・いやいや待つんだルナール。さっきの彼女が嬉しそうに頭を撫でてもらえているのを見て、私だってたまには優しくされたいと今思ったばかりじゃないか・・・・・・」

俺の抗議を無視してブツブツとつぶやき始めるルナール。

・・・・・ルナールの性癖を知っている奴ならともかく、流石にトウキとルギリスの前でこれ以上ルナールを殴るわけにはいかないな・・・・・・

俺は俺の腕を掴んでいるルナールの手を引き剥がした。

考え事をしていたためか、ルナールの手は簡単に俺の腕から離れた。

だが――――――――――――――――――

「・・・・・・・っ！？」

突然、目まいがして少しフラついてしまった。

幸いなことに周りの奴らは気付かなかったようだったので、安堵の息を漏らした。

とりあえず放っておけばそのうち治るだろうと自分に言い聞かせ、俺は三人に話しかける。

「そろそろ行くぞ。いつまでもここで馬鹿なことをやっている時間は無い。」

「はいでござるっ！　師匠っ！」

「・・・・・・・・馬鹿なことをやっていたのは貴様らだろうが。」

二人からは賛同の声？　が上がり。

「仁っ！　リリィ様が待っておられるのだぞっ！」

ルナールだけが反対した。

「・・・・・・・そもそも貴様は誰だ。この男とどういう関係なのだ。」

ルギリスの当然の様な疑問に、中に入る前に自己紹介をすることになった。

・・・・・・やれやれ。こんなところで時間ばかり食っていると、メイドさんに殺されかねないんだがな・・・・・・・

あのメイドさんのことだからハーピィの巣にお宝があるなんてガセネタは信じていないだろうが・・・・

三人が自己紹介をしている中、俺は別行動しているメイドさんのことを考えていた。

その頃。

「・・・・・・・・・これは違いますね。これもお宝とは言えない・・・・・・」

ハーピィの巣の中でメイドさんがお宝と呼べそうな物を探していたことを仁は知らなかった・・・・・

第八十三話　そろそろ、先に進みたいんだが！（後書き）

ルナール、ちょっと嫉妬しました。
そして恒例の自己紹介です。
次回はようやく中に入ります。

第八十四話　完全に、迷った！（前書き）

題名通り迷っています。

第八十四話　完全に、迷った！

サマヨイの森の中に入ってからほぼ二時間経過。

恒例の自己紹介を済ませ、ルナールに事情を説明してルナールにも手伝ってもらうことになった俺たちは文字通り道に迷っていた。

俺はこのような状況に至った経緯を軽く振り返ってみた。

サマヨイの森は入った瞬間、外界から切り離されたように周囲にとても毒々しい紫色の濃い霧が立ち込めていた。

最初はわかりやすく一本道になっており、周りには不気味なくらい同じ形の木で埋めつくされていた。

試しに石を投げてみたら反対側から出てきたので、今度は俺が横の森の中に入ってみるとやはりすぐに反対側から同じ場所に出た。

ルギリス曰く。

「この森には元々侵入者防止用の結界が張ってあったが、魔女が更に新しい結界を張った。今ではもう私たちですら容易には抜けることができなくなってしまった。」

とのことらしい。

仕方ないので道なりに進むと、今度は八方向に別れた道があった。

「待て。ここから先は正しい手順で八方向全てに進まないと先へは

抜けられないようにできている。」

とりあえず考えなしに真っ直ぐ進もうとしてルギリスに引き止められた。

「じゃあその正しい手順を教えてくれ。」

と頼んでみると。

「・・・・・・・・・・・・わからない。」

魔女の手で結界の抜け方が毎回変わってしまったため、入るたびに違う順路で進まなければならなくなったそうだ。

「何か攻略法は無いのか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙っているということは知らないということか、あるいは教えられない事情があるのか。

いずれにせよ、攻略法がわからない以上取るべき手段は一つしかなかった。

そして今。

「・・・・・・・・・また戻ったでござる・・・・・・・・・」

「このルートも駄目か・・・・・・・・・」

俺はつぶやきながら頭の中に線を引く。

すでに試したルートは百本を超えているが一向に先に進める気配はない。

「・・・・・普通こういった場所に来るときは事前に何らかの道具を手に入れるか攻略法を学んでから来るもんだよなぁ・・・・・・」

意味がわからなかったのか、俺の言葉に同意を示す者はいない。

俺は横と後ろにいる三人に視線を向けた。

ルギリスは以前魔女の元に行った時に似たような体験をしたらしくまったく疲れを見せておらず、ルナールは今は見る影もないが元々超一流の暗殺者だけあって肉体的にも精神的にも疲れている様子はなかった。

だがトウキだけは違っていた。

口にこそ出していなかったが、いつまでも変わらない景色に心身ともに疲れを感じていることが顔に出ていたからだ。

・・・・・・仕方ないな。

「お～さまゲ～ム。」

「・・・・・・・・・・・・はっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・師匠？」

突然の言葉に三人は目を丸くした。

「王様ゲームって知っているか？」

俺の質問に三人は沈黙で答える。

俺はその辺り（あた）の木から適当な大きさになるよう枝をへし折りながら説明を始める。

「簡単に言えば俺たち四人がランダムに番号と印が付いたクジを引いて、印が付いた物を取った奴が他の番号の奴らに好きな命令ができるって遊びだ。」

「遊びだと・・・・・・・貴様っ！　ふざけて――――――――――」

俺は抗議の声を上げるルギリスを手で遮る（さえぎ）。

「このままいつ先に進めるかもわからない場所を黙って歩き続けるよりも、気を紛らわしながら進んだ方が精神的にも肉体的にも有効だろう。」

「・・・・・・・・・・・・・師匠・・・・・」

「・・・・・・・・・ちっ！」

ルギリスもトウキの疲労には気付いていたらしくそれ以上何も言っ

てこなかった。

「安心しろ。別に立ち止まってやるわけじゃない。どの道を通ったかはちゃんと俺が覚えておく。」

何も言ってこなかったが明らかに不満顔のルギリスを納得させるために俺はそう言った。

少し頭痛を覚えていたが特に気にするほど非道いわけではないし、問題無いだろう。

「・・・・・・なんでも・・・・・・」

ルナールはしばらく固まっていたが、急に身悶(みもだ)えし始めた。

「・・・・・はぁ、はぁ、・・・私が王様になったら・・・・・仁に・・・・・・」

真っ赤になっているのは顔だけではなく、目も血走っていた。

・・・・・・・・・なにを妄想しているんだ?

「それじゃあまずは当たりの印を付けてっと。」

俺は一本の木の枝に爪で傷を付けて、その他の三本には番号を刻みつけてから誰にも見られない様にシャッフルしてから三人の前に突き出す。

「それじゃあ行くぞ。王様だ~れだっ!」

三人が一斉に木の枝を一本ずつ取った。

「・・・・・・・・・・・・・楽しそうですね。」

「・・・・・・・・・・・・・んっ。」

サマヨイの森の奥にある一軒の小屋の中。

二人の人物が水晶玉に映る侵入者たちの奇行を興味深そうに観察していた。

第八十四話　完全に、迷った！（後書き）

仁、少しだけ優しくなった様です。
次回でたぶんサマヨイの森を出ます。

第八十五話　・・・・・・・、計算通りだ！（前書き）

王様ゲームから始まります。

第八十五話　・・・・・・、計算通りだ！

「二番が三番に平手打ちをするでござるっ！」

相変わらず変わらない景色の中を歩く俺たちだったが、少し前までとは違い活気があった。

これで三回目。

最初の二回は両方ともルギリスが王様になったが、何を命令すればいいのかわからなかったのか『一番が逆立ちをする』と『三番が二番と握手する』などというとてもつまらない命令をしたので俺たち三人はがっかりしたと告げた。

そのせいかルギリスがさっきから落ち込んでいるように見えたがここは触れないのが俺の優しさ。

「三番だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・二番は私だ」

俺とルナールが木の枝に刻まれた番号を見せる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんでお前がそんな悔しがるような顔をするんだ。」

ルナールが番号を見ながら心底後悔する様な顔をするのを見て、俺は呆れを隠せなかった。

「それじゃあルナール殿っ！　師匠に是非強烈な一撃をっ！　王様の言葉は絶対でござるよっ！」

トウキよ。実はまだ怒っているのか？

「・・・・・・・・・・・・わかった。」

少し考えてから何かを思いついたように顔を明るくさせたルナールは大きく深呼吸して静かに構える。

ってちょっと待てぃっ！　どう見ても平手打ちの構えじゃないぞっ！

と俺が抗議しようとした瞬間。

「はぁっ！！」

裂帛の気合と共に俺の腹に強烈な掌打がクリーンヒットした。

「ぐふぅぉっ！！」

体に衝撃が走ったことを感じたときには俺は吹っ飛び木に叩きつけられた。

「・・・・・・・・・おいルナール。言い訳があるなら聞いてやるぞ。」

凄みのある声で脅してやったが。

「仁っ！　今のはわざとだっ！　だからお前も私のことを思いっき

り殴っていいぞっ！！」

・・・

期待を込めた眼差しで俺を見つめるルナール。緊張で汗をかきながら真剣な顔で俺の命令を待つトウキ。ショックから立ち直れず溜め息をつくルギリス。

一通り見てから俺は口を開いた。

「二番と三番が一番を罵倒しろ。」

俺の言葉に反応を示したのは三者三様の反応を見せた。

明らかに落胆の色を見せるルナールと安堵の息を漏らすトウキ。それに不満げな表情のルギリス。

この反応だけで誰が一番なのかが良くわかった。

「それじゃあ早速始めろ。」

「ごめんでござる。ルギリス殿。」

一言謝ってからトウキは大きく息を吸い込み叫んだ。

「この卑しい豚めっ！　でござるっ！」

「どこでそんな言葉を覚えたっ！？」

トウキの意外な罵倒の言葉に俺は驚愕した。

「豚では無い。鳥だ。」

「そこにツッコむのかっ！？」

更に驚愕する俺。

というかこのメンツでまともにツッコミ役をこなせるのはもしかして俺だけなのか・・・・・・？

「・・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・」

一方、ルナールは明らかに拗ねていた。

先ほど俺に殴られなかったことや今回の命令について私は納得していない。と表情が訴えているのがよくわかる。

・・・・・・・・・・・こいつもう駄目なんじゃないか・・・・・・・・

などと思ったことは秘密だ。

「ルナール。早くしろ。命令だぞ。」

「はぁぁぁぁぁぁーーーーーーー。・・・・・・・・・・・・・わかった。」

わざととても深く大きいため息をついてからルナールはルギリスの方を見た。

「鳥頭（とりあたま）。」

「如何にもそうだが。」

投げやりなルナールの言葉に同意を示すルギリス。

・・・・・・・まあ罵倒と言えば罵倒だが、ルギリスは果たして鳥頭と言われたことの意味を理解していて肯定したのだろうか・・・・・・

「じゃあ次にいくでござるっ！」

トウキがクジを集め始める。

「楽しそうですね。私も入れてもらえませんか？」

突如聞こえてきた声にトウキは硬直した。

「貴様はっ！？」

ルギリスがはっきりとした敵意と殺意の眼差しでローブ姿の人物を射抜く。

なるほど。こいつが話に出てた――――――――――――――

「初めまして。皆様。ハーピィ様方に『魔女』と呼ばれている者です。」

ローブ姿の魔女はゆっくりと一礼した。

「流石師匠でござるっ！」

再び動き出したトウキは尊敬の目で俺を見つめながら言った。

「なっ、なんのことだ？」

「謙遜しなくていいでござるっ！　先ほどまでの『王様ゲーム』はこの魔女をおびき寄せるための罠だったのでござろうっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ええっと。」

「そうだったのですか。見事なものですね。」

魔女は柔らかに微笑みながら賞賛の言葉を掛けてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・実はそうなんだ。」

「私、少しも気づきませんでした。すごいお方ですね。」

「そうでござるっ！　最近ちょっと疑問に思っていたでござるけど、師匠はすごい人なんでござるっ！」

「・・・・・・はっはっは。」

褒める魔女とトウキの言葉に俺は視線を泳がせながら乾いた笑いを漏らすことしかできなかった・・・・・・・・

第八十五話　・・・・・・・、計算通りだ！（後書き）

サマヨイの森、突破（？）しました。

第八十六話　直っている、どういうことだ！（前書き）

久しぶりにアレの登場です。

第八十六話　直っている、どういうことだ！

「粗茶（そちゃ）ですが・・・・・・・・・・」

「なら出すな。」

文句を言いつつも俺は出された緑茶を飲む。

あっ。結構おいしい。

サマヨイの森の奥、一軒の小さな小屋。

中は意外ときれいな内装をしておりテーブルにはちゃんとテーブルクロスが敷（し）かれ小さな窓が二つ右の壁についており今は使われていない暖炉の上には花瓶に青い花が入れられていた。

ちなみにいま俺たちが座っている来客用のイス（たぶんだが）には敷しき物が敷いてあった。

「ふぅぅぅー・・・・・・・・・なごむでござる・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・落ちつくわ。」

まったりとした空気を醸（かも）し出しているトウキとルナール。

ここに来た目的を完全に忘れているようだ。

「少しお待ちください。いまお茶菓子を用意します。」

「あっ。どうもお気づかいなくでござる。」

笑顔を浮かべる魔女にトウキがほのぼのと会話しているのを見て、いい加減後ろのハーピィ様の我慢も限界に達しようとしていた。

・・・・・・・・そろそろ本題に入るか。

「なあ魔女さん。訊きたいことがあるんだが――――――――――」

「アマネ。」

魔女は俺の言葉を遮(さえぎ)ってつぶやいた。

「・・・・・・・・・なに？」

「私の名前です。どうかアマネをお呼びください。」

「・・・・・・・・・わかった。アマネ。訊きたいことがある。」

「なんでしょうか。」

「お前はここで何をしている？」

率直な問いかけにアマネは柔和な微笑みのまま沈黙で答えた。

・・・どうでもいいけどなんでこの世界の大人って腹黒そうなのが多いのかねぇ・・・・

「お茶菓子はまだでござるか？」

「黙れ馬鹿弟子。」

俺は反射的に懐に手を入れて木彫りの熊（残骸）を取り出しトウキの頭に軽く投げつけた。

「痛っ！？　何をするでござるかっ！　し――――――――――――」

言葉の途中で固まるトウキ。

どうしたんだろうか。

不思議に思ってトウキの視線を追ってみると、視線は木彫りの熊（残骸）に――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・は？」

我ながら間抜けな声を上げたと思うが、そうせざる負えない光景がそこにあった。

直っている。

木彫りの熊が完全に直っている。

前に洋館から宿屋に戻って木彫りの熊を取り戻した時には確かに残骸のままだったのに。

・・・・・・・・頭が痛くなってきたので材質について考えるのはやめた。

「・・・・・・・・・師匠っ！　これほど素晴らしい芸術をどこで手に入れたでござるかっ！？」

呆けていたトウキが復活した途端、イスから立ち上がり俺に詰め寄ってきた。

だが俺はトウキの質問など気にも留めずトウキの両手に俺の両手を重ねるように置き強く握りしめて感動の言葉を漏らす。

「そうかっ！　流石は俺の弟子を名乗るだけのことはあるなっ！この木彫りの熊の素晴らしさがわかるのかっ！」

「もちろんでござるっ！　師匠っ！」

「弟子よっ！」

「師匠っ！」

「あらあら。美しい師弟愛ですね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・むぅ。」

ルナールは若干羨ましそうに、アマネは変わらぬ微笑みで俺たちを見つめていた。

と、いきなりテーブルを強く叩く音が室内に響き渡る。

「貴様等っ！！　いい加減に――――――――――――――――――――――――――――――――」

「「「五月蠅いっ！！！　空気読め（でござる）っ！！！」

「えええっ！？！？！？」

突如大声を張り上げたルギリスに対し、俺とトウキ、それになぜかルナールも一緒にルギリスの言葉を粉砕した。

まさか阻(はば)まれると思っていなかったルギリスは混乱したまま完全に固まってしまった。

よし。これで安心して話の続きができるな。

話しを訊くのに初めから敵対視している奴がいては情報収集もままならない。

俺はルナールに固まっているルギリスを小屋の外に運んでもらい、そのまま見張っているように頼むとルナールはしぶしぶながら引き受けた。

「後で代金を払ってもらう。」

「殴るぞ。」

「それでいい。」

・・・・・・・というやり取りもあったが。

気を取り直して俺はアマネと向き合った。

「それじゃあ答えてもらおうか。お前がここにいる理由を。」

「良いでしょう。」

表情を一切変えずに今度は即答した。

さてと。どんな話が出てくるのやら。

アマネは口を開いた。

「ちょっと待て。」

口を開いたアマネが発言する前に俺はアマネを手で制した。

「・・・・・・・・どうしたのですか。」

話しの腰を折られたアマネは表情を変えずに声だけで不機嫌さをアピールした。

「お茶のおかわり。」

「あっ。それがしもでござるっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかりました。少し待ってい

てください。」

アマネは仕方なく緑茶を入れ始めた。

第八十六話　直っている、どういうことだ！（後書き）

では次はアマネの事情からです。

・・・・・・・・・・・・・・・木彫りの熊については終盤の方で説明があるかと思います。

第八十七話　情報収集は、大切だ！（前書き）

予定通りアマネの話からです。

第八十七話　情報収集は、大切だ！

「私の目的・・・・・・・・それは娘の足を治すことです。」

「娘？」

バリバリと音を立ててついでに出されたお茶菓子、（せんべいもどきとでも言えばいいのか。）を食べながら俺は尋ねた。

見かけ通り醤油味で歯ごたえもあり、中々に美味。

ちなみにトウキは話しに興味が無いらしく一心不乱にせんべいもどきを食べ続けていた。

・・・・・・・・・・・・・・今更だが仮にも魔女と呼ばれている奴の家で飲み食いして大丈夫なんだろうか・・・・・・・・・

「はい。娘は生まれながらにして病弱で満足に外を歩くこともできません。ですがある方がサマヨイの森の奥にある神聖の泉を飲ませれば治るのではないかと言いました。」

俺がもしかしたら実験用の薬でも入っているんじゃないだろうかと怪しんでいる間にもアマネは話していたので俺は質問しておく。

「治ったのか？」

俺の言葉にアマネは首を横に振った。

「いいえ。ですが多少の回復は見られました。どうやらここの泉に

は生き物の生命力を増大させる不思議な力があるようなのです。」

うっさんくせぇ～。

と思っていても口には出さない大人な俺。

「そこで私はこの泉の水を研究し、娘の体を治すための薬を開発するためにここに住み込んで日夜研究に励んでいるのです。」

「ここがハーピィたちにとっての聖域だと知っていてか？」

アマネは微笑みながら頷いた。

「もちろん存じております。しかしハーピィ様方からの許可はしっかりと取ってあります。」

・・・・・・・・・・・・・・なに？

「ですからあのハーピィ様が何故私を敵視しているのかがわからなくて困っております。一体何がそんなに不満なのでしょうか・・・・・・」

「・・・・・・・・・・許可は取ったと言ったな。」

「はい。」

答えるアマネに俺はさらなる疑問をぶつける。

「ルギリスはハーピィたちの一族の一番上――――――――――――――――――――かどうかは知らないが、少なくともかなり立場

は上のはずだ。」

俺はアマネを睨みつける。

「・・・・・ハーピィたちから許可を取ったと言うなら、立場上ルギリスが知らないはずはない。お前は本当にハーピィたちの許可を取ったのか？」

「はい。」

俺は迷い無く即答するアマネの瞳を数秒間観察した。

・・・・・・・・・嘘は言っている目では無い。だが――――――――

「・・・・・・・本当のことは話していない。か。」

俺のつぶやきが聞こえたのかどうかはわからないが、アマネはあくまでも微笑んでいるだけだった。

「師匠。結局どうするのでござるか。」

途切れた会話によって訪れた沈黙を破ったのはトウキだった。

トウキの問いかけに俺はしばし考える。

「・・・・・・・・・・ルギリスから話しを聞く必要があるな。」

それが俺の出した結論だった。

思えば俺たちには情報が少なすぎる。

ルギリスは他にもハーピィはいると言っていたが、そいつらが許可したにしろルギリスたちのところへ報告が行っていないのは明らかにおかしい。

だからと言ってアマネの言葉を鵜呑(うの)みにするのは危険すぎる。

あの村の村長と名乗ったじじいも怪しいと言えば十分怪しい。

可能性だけを考えたらキリがない。

ならば集められるだけ情報を集めてから動いた方が得策だ。

「トウキ。ルナールとルギリスを呼んできてくれ。」

「わはぁったでごずぁるっ！　じしょうっ！」

トウキは口いっぱいにせんべいもどきを頬張(ほおば)りながら返事をする。

と喉(のど)に詰まらせたようだ。

トウキは慌てて自分のお茶に手を伸ばし、中身がすでに無いことに気付いた。

トウキは目でアマネに助けを求めると、アマネは微笑みながら首を横に振って俺を指差した。

苦しそうにしながらしばらく悩んだ後、トウキは俺に助けを求める視線を向けた。

・・・・・・・馬鹿が、素直に初めから俺を頼れば助けてやったのに。

俺は自分のお茶を持つとトウキの方に差し出す。

「っ！！」

トウキが俺の手からお茶を奪う。

直前で手を引っ込める。

俺はお茶を冷(さ)ましながら苦しそうにしながらも抗議の視線を向けてくるトウキの頭を鷲掴(わしづか)みにする。

もちろん力加減には注意を払いながら。

ジタバタ暴れるトウキを押さえつけるための最小限の力で。

次第にトウキの抵抗が弱まってくる。

限界ギリギリになったところでトウキを開放して冷めたお茶を手渡す。

「っ！！！　んぐっ、んぐっ、んぐっ――――――――――――――」

お茶の中身を一息で飲み干してからトウキは深呼吸した。

「助かったでござる・・・・・・・・・」

「次はなにかあったらまず俺に助けを求めろ。そうすれば助けてやる。」

俺の言葉を聞いたトウキはまるで化け物でも見るかのような恐怖の視線を向けてくる。

「しっ、師匠ではないでござるなっ！　お前はいったい何者でござるっ!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でトウキの頭に拳を振り下ろした。

「こっ、この痛み・・・・・・・・・間違いなく師匠でござるっ！」

「わかったのならさっさと二人を連れてこい。馬鹿弟子。」

「わかったでござるっ！　師匠っ！」

やっと外へ向かっていくトウキ。

「仲がよろしいんですね。」

アマネの言葉に俺は何も答えなかった。

「師匠っ！」

トウキが扉の前で立ち止まり振り向いた。

「どうした。」

「さっきの言葉、嬉しかったでござるっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・さっさと行け。」

「はいでござるっ！」

扉を開けて今度こそ二人を呼びに行ったトウキの後姿を俺はただ見つめていた。

第八十七話　情報収集は、大切だ！（後書き）

最近、仁が妙にトウキに甘いですね。
彼も初めての弟子ができたことを内心で喜んでいるのでしょうか。

第八十八話　娘の教育は、ちゃんとしておけ！（前書き）

娘登場です。

第八十八話　娘の教育は、ちゃんとしておけ！

「きっ、貴様等っ！　私をどうするつもりだっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・えーっと。」

三十秒ほど前、困った顔を浮かべてトウキが俺を呼びに戻ってきた。

サマヨイの森の奥は周囲にやはりサマヨイの森と同じ種類の木が取り囲むように配置してあり（恐らく結界の一種だろう）外へ出るには来た道を真っ直ぐ戻るしかなさそうだ。

空を見上げると太陽は無く謎のピンク色の霧に包まれており、地面は一面が芝生になっており中心に小屋と周りに二、三本違う種類の木が植えてあった。

小屋より先には大きな洞窟があって恐らくその中に例の泉とやらがあるのだろう。

だがそんなことよりも今はまずあの謎の光景が目に飛び込んできたことに対して俺はリアクションに非常に困っていた。

どんな光景かというとだ。

まず翼と脚をロープで縛られ木の枝に逆さ吊りされているルギリス。

顔を血の海に浸しながらうつ伏せに倒れて気絶しているルナール。

良く見ると血はルナールの鼻から溢れていた。

そして最後にさっきまでいなかったはずの人物が一人。

白いドレス（リリィと対照的な白いゴスロリといった方がいいか）に身を包んだ外見年齢十歳前後の少女が一心不乱にスケッチブック（の様な物）に鉛筆（もじき）で何かを描いている。

ここにいる以上、恐らくアマネの言っていた娘だろう。

後ろから覗き込んでみると鼻血の海に沈んでいるルナールと逆さ吊りにされているルギリスが鮮明に描かれていた。

ただし全裸の絵だ。

まるで少女には服が透けて見えているかの様に二人を観察する時以外、一切手を止めずに描き続けていた。

「お嬢さ～ん。この状況はお前の仕業か～。」

話し掛けるも反応は無かった。

試しに顔の前で手を振ってみる。

反応無し。

頬をつねってみた。

反応無し。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・面倒くせえ。

「トウキ。」

「なんでござるか。」

「俺たちは何も見なかった。」

「はいでござる。」

「戻るぞ。」

「わかったでござる。」

示し合わせたような会話を交わした俺たちは小屋の中へと――――――――――――

「待てっ！　置いて行かないでくれっ！」

ルギリスは背中を向ける俺たちに必死な叫び声を上げた。

俺は振り向くと一言。

「がんばれ。」

と言って再び小屋の方へ――――――――――――――――――――――――――――

「助けてくれっ！　私にできることならなんでもするからっ！　お願いだっ！」

本当に追い詰められているらしく涙声で叫び続けるルギリス。

・・・・・・情報収集のために呼びに来たんだから見捨てるわけにもいかないか。

「トウキ。ルギリスを助けてやれ。」

「はいでござる。」

トウキは腰に挿してある刀を抜いてルギリスの方へと近づいて行く。と。

「――――――――――――――余計なことをしないで。」

先ほどまで俺たちのことなど気にも留めていなかった少女が口を開いた。

「私はいま絵を描いているの。邪魔をしないで。」

少女はそれだけ言うとまた絵を描き始めた。

トウキが視線で『どうするでござるか?』と訊いてきたので、俺は『さっさとやれ』と返した。

トウキは指示通りルギリスを縛っているロープを切ろうとする。

「警告が聞こえなかったの?」

少女が再び口を開いた。

先ほどより若干だが感情がこもっている。

「そのロープを切ったら、あなたは呪うわ。」

言って少女はスケッチブックと鉛筆を置き、（どこかから）藁人形と二本の蝋燭、金鎚、五寸釘、能面を取り出した。

・・・・・・・・・なんで丑の刻参り？

確かに呪いの定番と言えば定番だが、ここは異世界。

当然ながら日本の風習などあるはずがないのだが――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・ふぅ。」

頭痛がひどくなってきたので、深く考えるのはやめた。

「・・ししょ～・・・・・・・・・・・どうすればいいでござるか～・・・・・・・」

トウキが少女の取りだした物を見て恐怖におののいていた。

ルギリスはさっさと助けろと言わんばかりに俺を睨みつけている。

・・・・・・・・・・・・・・・最近、貧乏くじを引いてばっかりな気がする。

「おい。そこの呪い娘。」

やはり俺のことは無視する少女。

というより自分の邪魔をした者に対して反応するのか？

・・・・・・・・・ここは親の出番だな。

「トウキ。アマネを呼んで来い。」

「わかったでござる。」

トウキは刀を鞘に収めると小屋に向かって走り出した。

やれやれ・・・・・・・・・・・・・・・

情報を集めるだけでこんなに苦労するとはな・・・・・・・・・

俺はこんなことなら理香たちと一緒に行けば良かったなと少し後悔していた。

「・・・・・・・・・・・あなた。あの人の知り合いなの？」

何の前触れもなく少女がいきなり俺に話しかけてきた。

「そうだが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・そう。」

少女は丑の刻参りセットを（どこかに）片づけると再び黙って絵を描き始めた。

第八十八話　娘の教育は、ちゃんとしておけ！（後書き）

すみません。ほとんど進みませんでした・・・・・・・・

次回は少しは前進する予定です。

第八十九話　行くべき場所は、決まったな！（前書き）

今回でサマヨイの森を出発します。

第八十九話　行くべき場所は、決まったな！

「本当に申し訳ありませんでした・・・・・・・・・」

アマネは俺たちに頭を深く下げた。

「・・・・・・・・まさか貴様に助けられることになるとは・・・・・っ！」

ルギリスは助かった安堵（あんど）よりも敵対している者に助けられたという屈辱（くつじょく）の方が強いみたいだ。

「レイラ。あなたも謝りなさい。」

「ごめんなさい。」

言われて無感情に頭を下げるレイラと呼ばれた少女。

順当に考えて、この娘がアマネの子供だろう。

「それにしてもどうしてお前は逆さ吊りになっていたんだ？」

ルギリスは戦ったことはないが、たぶん弱くはない（と思う）。

少なくともこの少女――――――――――――――――――――――――レイラは戦闘能力は皆無と言えるレベルだ。

何の理由もなく縛られたりはしないと思うが――――――――――――

「・・・それが・・・・・・・・・私にもわからないんだ。先ほどまであの小屋にいたのは覚えているんだが・・・・・・・・いつの間にか木に逆さ吊りにされていた。」

ふ～む・・・・・・・・・・

だとすると放心している間に吊るされたということか？

にしてもルナールが近くにいた以上、ルギリスが戦闘不能でも問題ない様な気がするが・・・・・

「レイラだったか。お前がルギリスを吊るしたのか。」

「違う・・・・・・・・・・」

レイラは俺の質問に首を横に振った後。

「・・・・・・・・・吊るしたのはあの人。」

と言って未だに鼻血の海に沈んでいるルナールを指差した。

「・・・・・・・・・その後に大量の鼻血を出して倒れたの。その光景を見て私の頭に雷が落ちてきてそれで絵を描いていたの。」

助けろよ。

言っても無駄の様だったので誰も口には出さなかったが。

誰もがどう反応すればいいのか分からなくなった状況で、俺は今わ

かっていることをまとめてみる。

まず、ルナールが（何故か）ルギリスを縛り上げて逆さ吊りにした。

次にルナールが（何故か）鼻血を出してその場に倒れた。

そして少女の脳裏に（何故か）稲妻（いなずま）が走り絵を描いていた。

・・・

うか。」

「それはっ・・・・・・・・・・・・・・・」

ルギリスの視線が俺から逸れた。

「俺たちには情報が少なすぎる。このままでは取り返しのつかないことになりかねないぞ。」

俺のハッタリによってルギリスの目に迷いの色が灯った。

「師匠。取り返しのつかないことってなんでござるか?」

不用意な発言をした馬鹿弟子には木彫りの熊を投げつけておく。

木彫りの熊はトウキの頭にクリーンヒットし、トウキは頭を抑えながらのたうちまわった。

「・・・・・・・・・・・・・・わかった。」

そんなトウキの様子に気付かず、未だ迷いのある瞳でルギリスは重い口を開いた。

「・・・・・・確かに私たちの巣はもう一つある。ここを使うことが許されるためにはそちらの巣へ行かなければならない。」

「どういうことだ?」

「私たちの長がいるのがその巣だからだ。」

つまりそちらの巣が本家というわけか。

俺は横目でアマネを見た。

「はい。確かに私が許可をもらったのは、長を名乗るハーピィ様でした。」

「ならばなぜ私がそのことを知らないっ！！」

声を荒げるルギリスを手で制する。

「話しを続けろ。」

「っ！　・・・・・・・・・・・長の命令は一族にとって絶対だ。それに長はめったなことには人間の前に姿を現さない。人間と会わなければならない事情ができてしまった場合は、長に選ばれた子供が代わりに用件を果たす。」

・・・・・・警戒の強い種族なことで。

「選ばれた子供はその時からある一定の年月を長と共に過ごしたら、何人かの従者を引き連れ近くに新たな巣を作り、一年以内に子を産み育てて長が死ぬときまでそこで過ごし、長が死んだとき新たな長となって新天地を目指さなければならない。」

ん～・・・・・・・・・・

ということはだ。

「ルギリス。お前がその選ばれた子供なのか。」

「そうだ。」

なるほど。だからさっきアマネの言葉に強く反応したのか。

ルギリスの話が本当なら、長がルギリスに話さないわけがない。

「選ばれた子供というのは変わることはないのか。」

「そんなことあるわけないだろうっ！」

ふ～ん。なら次行くところは決まったな。

「ルギリス。その長の所に案内しろ。」

「なんだとっ！？」

ルギリスは驚愕の声を上げた。

「どうやらその長とやらに直接話しを訊く必要がありそうだ。」

「そんなことできるわけが――――――――――――――――――――」

「ルギリス。」

反論しようとするルギリスを俺は殺気を込めた瞳で睨みつける。

「案内しろ。三度は言わない。」

「――――――――――――――――――――っ！？　・・・・・・

・・・・・わかった。」

ルギリスの返答に俺は満足した。

やはり人を説得するには誠心誠意真心を込めて説得するのが一番だ。

後ろでトウキ、アマネ、レイラが俺から距離を取ったのは気のせいだろう。

なんにせよ――――――――――――――――――――

やっと話しが進みそうだ。

サマヨイの森から出ようとする俺たち。

とその前に。

「いつまで狸寝入りしているつもりだ。さっさと起きろ。」

倒れているルナールに言葉を投げかける。

「・・・・・・・・・・今すぐ起きないなら殴ってやらない――――――――――」

「仁っ！　私を置いて逃げるつもりだなっ！　そうはいかないぞっ！　お前はリリィ様の元へと連れて行くっ！」

復活したルナールは神速の速さで俺の前に仁王立ちした。

「弱めと強め、どっちが良い？」

「強めでっ！！」

要望通り俺はルナールの腹に（顔は駄目だ。跡が残ったら面倒だし。）手加減なしの全力の一撃を叩き込んだ。

悲鳴を上げる暇もなく飛んでいくルナール。

飛ぶ瞬間に一瞬見えたその顔は、やはり幸福に包まれていた・・・・・

第八十九話　行くべき場所は、決まったな！（後書き）

次の目的地はハーピィの巣（その二）に決まりました。

第九十話　また、蟲かよ！（前書き）

続きです。

第九十話　また、蟲かよ！

前回までのあらすじ。

サマヨイの森を無事に突破した俺たちは悪さをしていた魔女を倒して財宝を奪い取り、帰ってから一切働かずに一生お金に不自由なく暮らしましたとさ。

「めでたし。めでたし。」

「先ほどから何をブツブツと言っているんでござるか？　師匠？」

トウキが不思議そうに尋ねてきた。

とりあえず周りを見やると不審げな視線が集まっている。

どうやら脳内完結したはずの現実逃避話を知らずに口に漏らしていたようだ。

「まあ変人なのは以前からわかっていたけど。」

痛い目を見るのが趣味の変態（ルナール）がなにかをほざいたので適当に全力で殴っておく。

「・・・・・・・・・・良い・・・・・・」

快感に悶えているルナールは放って何事もなかったように先に進む俺たち。

・・・・・・・こいつらも順応が早いな。

まあ先ほども全力で殴ったのにすぐに復活してしかも無傷だった（あるいは回復したのか）を目の当たりにすれば、殴っても問題ない奴と認定されるのも無理はないか。

「それでどうしたんでござるか？　師匠。」

「気にするな。世の中の理不尽さに憂(うれ)いを覚えていただけだ。」

「？　はあ・・・・・・・・・そうでござるか。」

トウキはそれ以上何も言わない。

下手にツッコんだら痛い目に合うことをようやく学習したみたいだ。

俺は愛弟子(まなでし)の成長に感慨深くなった。

ちなみに本当のことを言うと、サマヨイの森を出てきた俺たちは森の中を歩きハーピィの巣があった隣の山の頂上にあるというもう一つのハーピィの巣へと向かっている。

理由はもちろんハーピィの長の話しを聞くためだ。

直接話したところ、ルギリスもアマネも嘘はついていない。

ただ真実を話していないだけだ。

なら真実を見つけるためにはより多くの情報がいる。

そのために長の元へと向かうことになったのだが――――――――

「・・・・・・・・・・どうしてお前まで一緒にいるんだ？」

「お邪魔でしたか。」

平然と微笑むアマネに俺は呆れて溜め息を漏らすことしかできない。

「そもそも娘は放っておいていいのか。病弱なんだろう？」

「確かにそうですけれど、少しくらいなら一人にしても大丈夫でしょう。」

・・・・・・・やっぱり胡散臭い奴だ。

「・・・・・・・私は貴様の話を信用したわけではない。巣の中に入れるとは思わないことだ。」

「構いませんよ。私は外で待っています。」

ルギリスの敵意むき出しの視線をも平然と受け流すアマネ。

「・・・・・・・ふんっ。そもそも得体のしれない蟲の化け物を作り出すような魔女など、誰も信じはしないだろう。」

ルギリスの言葉に初めて魔女は表情を曇らせた。

いや。曇ったと言うよりも――――――――――――――――

「・・・・・・・・・なんのことでしょうか？　私はそのようなことしておりませんけど・・・・」

「なんだとっ！？　貴様とぼけるのも大概にしろっ！」

アマネの困惑するように放った言葉にルギリスは激怒した。

だが俺はその言葉に困惑していた。

確かに娘の治療が目的なら化け物を作り出す必要などない。

だとすればあの化け物は一体誰が――――――――――――――――――――――――

俺たちが歩きながら考え始めた時だった。

空から耳障りな音を立てて巨大なソレが落ちてきたのは。

俺たちは散り散りにその場から飛び退いた。

ソレはある意味予想通りの巨大な蟲だった。

今度のは全身が黒く、カブトムシと蝿（はえ）と蚊（か）を合体させて巨大化させた感じだ。

・・・・・・・・・前のと同じくらいグロい。

「くっ・・・・・・・・・魔女っ！　貴様、私たちの邪魔をするつもりかっ！」

ルギリスは完全にアマネが蟲の主だと思い込んでいる。

「だから私は知りませんよ。このような混合蟲（こんごうちゅう）のことなど。」

「まだとぼけるつもりかっ！」

ルギリスとアマネが言い争っている間にも蟲は活動を始めていた。

耳障りな羽音を立てながら浮上し、勢い良くトウキに向かって突撃して行った。

「なんでそれがしでござるかぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！！！」

絶叫と共に全速力で逃げ出すトウキ。

それを黙って見送る俺――――――――――――――――

・・・・いつもならそうするはずなんだが・・・・・・・・・・・・・・・

「やれやれ。ほんと俺らしくもないな・・・・・・・・・」

俺は懐から木彫りの熊を取り出してカブハエカ（名前を合体させてみました）に全力で投げつけた。

カブハエカは横からの光速の飛来物に気付くこともできずに直撃しそのまま吹き飛んだ。

さてと。

昆虫採集と行きますか。

俺は木彫りの熊を回収しつつカブハエカに近づいて行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・っ！？」

メイドさんがハーピィの巣で回収したお宝を持って外に出ようとしていた時だった。

脳裏を虫の知らせの様なものが横切ったのは。

「・・・・・・何故でしょう。今ここを離れたらまた出番が無くなってしまう予感がします。」

誰に聞かせたわけでもないその言葉をつぶやくメイドさんは、ここを離れるべきか真剣に悩み始めた。

第九十話　また、蟲かよ！（後書き）

果たしてメイドさんはどちらの選択をするでしょうか。

第九十一話　弱すぎだろ、こいつ！（前書き）

やっとあの人と合流します。

第九十一話　弱すぎだろ、こいつ！

「・・・・・・・・こいつ食えるかな。」

場の雰囲気を和ますための冗談を言った俺から全員がドン引きした。

ルギリスやアマネはともかくトウキやルナールにまで嫌悪の表情で見られるとちょっぴり傷つく（様な気がする）。

というかルナール。お前いつの間に追いついてきた？

・・・・・・・・・・まあ別に良いか。

「冗談だ。頼まれたってこんなの食うわけ無いだろ。」

「そっ、それはそうでござるなっ！　いくら師匠でもこんな化け物は――――――――――」

「当然だ。でっ、焼いたら美味いかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

先ほどよりも更に距離を離された。

・・・・・・・・・・冗談なのに。

木彫りの熊をぶつけられたカブハエカはピクリとも動かない。

先ほどの一撃で死んだか・・・・・・・・・・？

と思っていた時だった。

カブハエカの口から高速で鋭い針が伸びてきたのは。

「師匠っ！？」

「仁っ！？」

トウキたちが悲鳴に近い声を上げる。

だが俺は慌てず騒がず伸びてきた針を素手で掴む。

蟲はすぐに起き上り空を飛ぼうとするも俺は針をしっかり握ってはなさない。

以前マンティオウスからも似たような攻撃をしていたな・・・・・・

俺はそんなことをぼんやりと思い出していた。

「アマネ。炎系の魔法でこいつを焼き払えるか？」

俺は後方で変わらない笑みを浮かべていたアマネに声をかけた。

「はい。可能ですが流石に森の中で使うのはいかがなものかと思いますが・・・・・・」

・・・・・・・・・・・ふむ。確かにそれは問題だな。

下手に山火事にでもなったら後処理が面倒だし。

かといってこの手の蟲は斬ったり潰したりすると中から幼蟲が出てくるというパターンもあるからな・・・・・・・・

と、逃げることをあきらめたのか蟲が俺に向かって角を突き立てながら突撃してきた。

「・・・・・・・ふぅ・・・・・・・・」

俺は息を吐くと突撃してきた蟲の角に回し蹴りを叩き込む。

鈍い音を立てて角がへし折れた蟲は再び周りの木をなぎ倒しながら倒れた。

蟲はしばらくの間、ジタバタと暴れていたが今度こそ動かなくなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

俺は針を持ったまま蟲に近づいた。

そのまま軽く蹴ってみるが反応は無い。

完全に死んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・おかしい。」

以前戦った蟲もそうだったが今回も違和感があった。

手応えが無い。

弱い。というよりも耐久力が無さ過ぎる。

初めから倒されるために作られているのか、あるいは単なる失敗作なのか。

・・・・・・・・・・・考えてもわかるわけがないか。

「・・・・・・・・・先に進むぞ。また蟲が出てきても面倒だ。」

「待てっ！　仁っ！　この魔女が蟲を操って――――――――――――」

「やめろ。ルギリス。」

あくまでもアマネが蟲を仕向けていると思っているルギリスの言葉をとめた。

「勘違いするなよ。俺はアマネを信じているわけじゃない。だがここで言い争っても結論が出るわけじゃない。それにこれ以上時間を無駄にしたくはない。」

「・・・・・・・・・・・・くっ！」

不満を隠そうともしないルギリスだったが、良い反論が思いつかなかったのかそのまま沈黙した。

気まずい空気のまま俺たちは再び歩き始めた。

「・・・・・・・・・・ここだ。」

結局、空気が改善されること無く目的地である隣の山の頂上の洞窟入り口まで着いてしまった。

「・・・・・・・・・やはりボケは必要だな。」

俺はなまじボケとツッコミの両方をこなしてしまうため。純粋なボケ要因にボケという点で劣ってしまう。

ルナールはボケというよりは肉体的ダメージ担当だから、空気の改善にはあまり向いていない。

だとすると残るは――――――――――――

「トウキ。今からボケの訓練を始めるか？」

「師匠。それは真面目な顔して言う言葉ではないでござるよ。」

素で返されてしまった・・・・・・・・・・

「・・むぅ・・・・・・・・・・トウキは馬鹿だがボケには向いていないな・・・・・・・」

「さりげなく馬鹿呼ばわりしないでほしいでござる。」

ふむ。やはりトウキはツッコミ要因として育てるべきだな。

「貴様等っ！　いつまで遊んでいるつもりだっ！！」

カルシウム不足の鳥さんが怒鳴(どな)ってきた。

「なあトウキ。ルギリスって主食は魚なのか？　それても虫なのか？」

「魚だと思うでござる。でなければ先ほどの蟲も食べているはずでござるし。」

ならカルシウムも十分取っているはずでは・・・・・・

骨は食べてないのかな？

「いい加減にしろっ！！！」

弟子と師匠の他愛のない世間話にも突っかかってくるルギリス。

本格的にカルシウム不足の様だな・・・・・・・・

「あなたたちがいつまでもボケているからですよ。仁。トウキ様。」

・・・・・今、懐かしい声であり恐怖の対象でもある声が聞こえたような気が・・・・・・・

俺は油の切れた機械の様な鈍い動作で声の方向に首を動かした。

そこには――――――――――――――――――

「お待ちしておりました。仁。それに皆様。」

こちらに向かって姿勢正しく一礼するメイドさんの姿があった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・・・・・・」

一方、少し後方でルナールは鼻息を荒くしていた。

「・・・・・・あの蟲みたいに仁に思いっきり蹴られたら・・・・・・・・・・っ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

誰も何も言わないのは慈悲だったのかそれとも単に関わりたくないだけか。

いずれにせよこの女、役に立たないとその場にいた誰もが認識していた・・・・・・・

第九十一話　弱すぎだろ、こいつ！（後書き）

仁にとって幸か不幸か、しばらくはメイドさんと一緒に行動します。

第九十二話　見つかったのは、俺の所為じゃないからな！（前書き）

侵入ミッション開始です。

第九十二話　見つかったのは、俺の所為じゃないからな！

「こちらです。ついてきてください。」

ハーピィの巣内部を走るメイドさんの後について行く。

巣の中に入ったのは俺、メイドさん、トウキ、ルギリスの四人だ。

アマネを巣の中に入れることはルギリスが猛反発したので無理だった。

だがアマネを一人にしておくわけにもいかず、見張りとしてルナールを置いてきた。

「ちゃんと出来たら後で一つだけ言うことを聞いてやる。」

「わかったっ！！！　任せてっ！！！」

という餌をちゃんと与えてきたから大丈夫だろう。

中を走っていて思ったが、どうやらこの巣はルギリスの巣と内部構造はたいして変わらないようだ。

ただルギリスたちの巣よりこちらの方がハーピィが飛びやすいように通路が広くできている。

こちらが本家の様なものだから当たり前といえば当たり前か。

「・・・・・・・・・・・貴様。何故この巣の内部状況を知っている。

」

ルギリスが敵意の瞳でメイドさんを見ている。

「・・・・・・・・・・この娘。怖いもの知らずだな。」

思ったことをそのまま口に出してつぶやく。

「メイドさんの秘密です。」

そしてメイドさん。敵意の視線を向けられている中でその答えは無いだろう。

と思っても決して口には出さない。

・・・・・・・・・・決してメイドさんが怖いからじゃないぞ。

絶対に勘違いするなよ。絶対だからな。

「師匠。一人で百面相なんかして楽しいでござるか？」

・・・・・・・口に出していなくても顔には出していたらしい。

「トウキ。大人になればわかることも多いんだ。」

「師匠は確か未成年――――――――――――――――――」

「あっ！　あれはなんだっ！！」

追及してくるトウキを誤魔化すために適当な方向を指差して叫んで

みる。

そこには一羽のハーピィがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙。

俺たちはそのまま百八十度後方へ振り返り――――――――――――――――

「侵入者を発見しましたっ！！！」

叫び声を背中に走り出した。

走っているときに俺は自分の呼吸が荒くなっていることに気付いた。

・・・・・・なぜだ？　この程度で俺が疲れるはずが無い。

俺は体の違和感を振り切るために適当な言葉を口にする。

「ったくこんなところで追われるなんて誰の所為だっ！」

「師匠の所為でござるっ！！」

「少し見ないうちに役立たずになったものですね。」

「反省しろっ！」

三人にそれぞれ責められる。

・・・・・・・・・誰か俺に優しくしてくれる女性（ひと）はいないだろうか・・・・・・・

頭の中を検索してみる。

キーワード。女、優しい

該当件数、無し。

・・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ。

「俺って女運ないのかな・・・・・・・・・・・・・・・」

誰にも聞こえない様に本当に小さく言った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ？

「そういえばルギリス。お前次期ハーピィの長なんだから逃げる必要はないんじゃないか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・無理だ。」

当たり前のことに気付いた俺の言葉をルギリスは否定の言葉で返してくる。

「私はすでにこの巣から離れた身。長の許しなく再びこの巣に入ることはできない・・・・」

「・・・・・・すっげー不便だな。」

「それが掟というものだ。」

などと話しているうちに俺たちは辿り着いた。

行き止まりに。

完全に塞がっている土の壁を見ながら俺はつぶやく。

「だ～いピ～ンチ。」

「余裕ですね。打開策でもあるのですか？」

メイドさんの質問に俺は堂々と首を横に振った。

「本当に役に立たなくなりましたね。」

「師匠にはがっかりでござる。」

「クズが。」

・・・・・・・・・・・・・泣いていいかな。

それとも全員（メイドさん以外）半殺しにすればいいのかな・・・・・・っ！！

「そこまでだっ！！」

俺が人に戦わせてばかりいるこいつらを本格的にシメるべきか考えているところに女の叫び声が響いた。

後ろを振り返るとそこにはルギリス似のハーピィとそれを取り巻くように数人のハーピィがいた。

「大人しく投降しろ。ルギリス。それに侵入者共。」

「・・・・・・・・わかった。」

ルギリスの言葉に反対する者はいなかった。

この場でハーピィたちと敵対する理由が無いからだ。

それなら捕まった後に情報を集めればいい。

メイドさんはたぶん俺と同じ考え。トウキわからないが戦っても多勢に無勢と考えているんだろう。

「・・・・・・・・・・連れて行け。」

ルギリス似のハーピィは周りのハーピィに命じた。

命じられたハーピィが俺たちに近づいていく中、俺はこれからの行動について考えていた。

「ここに入れ。」

鉄格子(てつごうし)でできた牢屋の中に俺たちは一人ずつ閉じ込められていった。

縄などで縛られなかったのはルギリスが一緒だったからだろうか。

まあ武器になるものはほとんど取り上げられたが。

無事なのは俺の木彫りの熊ぐらいなものだ。

とりあえず俺は指示通り牢屋内に入る。

ここの作りもルギリスたちの巣とほとんど変わらない。

ハーピィは鉄格子に鍵を掛けると入口へと向かっていった。

俺は入口の扉が閉まり、ハーピィの気配が無くなったのを確認してからメイドさんに声を――――――――――――

「・・・・・・・捕まったのか。無様だな。」

――――――――――かけようとして不意に聞こえた声の方向に視線を向けた。

「まったく。来るのが遅いと思ったら随分と情けないな。」

そこには縄でグルグル巻きにされて地面に転がっているリューグがいた・・・・・・・・

第九十二話　見つかったのは、俺の所為じゃないからな！（後書き）

侵入ミッション終了しました。
ついでにリューグが合流しました。

第九十三話　お前、憐れだな！（前書き）

リューグ絶叫タイムです。

第九十三話　お前、憐れだな！

「ときにメイドさん。内部の構造にくわしいのなら当然あの通路は行き止まりだとわかっていたのでは？」

俺は少し奥の方の牢屋の中にいるメイドさんに疑問をぶつけてみた。

「誰にでも間違いはあるものです。」

平然と返されたその言葉に、そもそも捕まる原因を作ってしまった俺は黙り込む。

「・・・・・・・・・・・・・・・おい。」

「これからどうするでござるか？　師匠？」

メイドさんと向かいの牢屋の中にいるトウキからの質問。

「トウキ。人に訊いてばかりいないでたまには自分で考えたらどうだ。」

この返答に、むむっ。とうなってからトウキも沈黙した。

「・・・・・・・・・・・・・・おいこら。」

「確か・・・・・ルギリス様。でしたか。何か逆転のための秘策はありませんか。」

「そんなものがあったらとっくに言っているっ！！」

メイドさんより更に奥の方の牢屋で相変わらずのカルシウム不足ぶりを発揮するルギリス。

「・・・・・・仕方ない。とりあえずこの牢屋をぶっ壊して――――――――――――」

「俺を無視するなぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

役立(リューグ)たずが叫び声を上げた。

「どうした役立(リューグ)たず。」

「五月蝿いですよ。捨(リューグ)て駒様。」

「大(リューグ)マヌケ殿。静かにしてほしいでござる。」

「お前らぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

クールなツッコミが売りのはずのリューグは大絶叫していた。

「ところでどうしてお前がこんなところにいるんだ。」

いくらリューグが役立たずだからといって、フレスやトウキほどではない。

「今とてつもなく失礼なことを思わなかったでござるか？　師匠。」

「全然。」

弟子の恐るべき第六感に驚愕するも面(おもて)には決して出さないクールな俺。

「でっ。なんでお前がここにいる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

リューグは憮然(ぶぜん)としたまま答えない。

「・・・・・・・・・まさか・・・・ただ単にヘマをして捕まったとか・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・違う。」

俺のつぶやきに表情を変えずに今度は答えるリューグ。

「やれやれ・・・・・・・・・所詮、捨て駒様(リューグ)は捨て駒様(リューグ)ということですか。」

「ちょっと待てっ！！　あんたがそれを言うのかっ！！」

メイドさんの言葉にリューグは強く反発した。

「なんですか捨て駒様(リューグ)。まるで私には批判する権利はないとでも言いたげな声ですね。」

「どう考えても俺が捕まったのはメイドさんのせいだっ！！」

むっ。それはどういうことだ？

「どういう意味ですか？　私には覚えがありませんが。」

声から判断してメイドさんは本気で心当たりがないようだ。

「夜明け前っ、メイドさんがこの巣の中に侵入したらハーピィたちの注意を引けって言ったっ！！　その後、俺が捕まるまでにお宝を回収して捕まった後にメイドさんが俺を救出してお宝を山分けにするって作戦だったろうがっ！！」

「・・・

・・・・・・・・・・まあただの言い訳だろうけど。

と入口の扉が開いた。

入ってきたのはルギリス似のハーピィと数人のハーピィたち。

「・・・・・・・・・長がお呼びだ。ルギリス。それと侵入者共を全員出せ。」

ハーピィたちはその声に従い鉄格子を開けた。

「やれやれ。ようやく長の話が聞けるな。」

「・・・・・・・・・・口を慎(つつし)め。本来ならば人間風情が長の声を聞くこと自体が許されぬことなのだぞ。」

低い声には人間に対する憎悪の感情がこもっていた。

何か人間に恨みでもあるのだろうか。

「・・・・・・・・・・姉さん。」

ルギリスがルギリス似のハーピィに声を掛ける。

なるほど。姉か。通りで似ていると思った。

「ルギリス・・・・・・・・・貴様。人間をここに連れてくるとはどういうつもりだ。」

「姉さん。私は――――――――――――――――――――――――――――」

「言い訳は聞かない。長の信頼を裏切った貴様と話すことなど何もない。」

それだけ言うとルギリスの姉は飛び上りどこかへ去って行った。

どうやら長のところへの案内とやらは部下のハーピィがやるようだ。

ルギリスは姉が去った方向を見つめている。

「元気を出せ。短気なシスコン。」

「貴様っ！　私を馬鹿にしているのかっ！！」

「うん。」

「殺すっ！！」

怒りに身を任せたルギリスの攻撃をよけ続ける。

・・・・・・・・・・まっ。少なくともこの鳥女は暗くなっているより怒っていた方が良いだろう。

俺は本当に俺らしくない行動に自身を嘲笑（ちょうしょう）した。

「・・・・・・・・メイドさん。」

「なんでしょうか。」

「・・・・・・・・・・どうしてそんなに不機嫌なんだ。」

「そんなわけないでしょう。目が腐りましたか。」

誰がどう見ても不機嫌そうなメイドさんの声にリューグは若干（じゃっかん）の恐れを抱（いだ）きながらも、牢屋から出してもらえることを切に願っていた。

第九十三話　お前、憐れだな！（後書き）

メイドさんは本当に仁のことを心配していたんでしょうか？

それはともかく次は長の登場です。

第九十四話　長との、面会だ！（前書き）

ちょっとずつ前進しています。

第九十四話　長との、面会だ！

牢屋から出された俺たち（リューグも一緒だ）は数人のハーピィに連れられて歩いていた。

歩いている途中、何度か視線を動かして周囲を観察したがやはりルギリスたちの巣を広くしただけに感じる。

というよりも恐らくルギリスたちがこの巣を真似（まね）て巣を作ったと考えるべきか。

しばらく歩いていると先頭のハーピィがある扉の前で立ち止まる。

そしてルギリスに対して一礼すると周りのハーピィとともに来た道を戻るように飛んで行った。

見る限り特別な物には見えない普通の木の扉だ。

ルギリスはその木の扉の前で深く頭を下げる。

「長。ルギリスです。ただいま参りました。」

「・・・・・・・・・・入って良いぞ。」

返ってきた声は低く静かだが威厳（いげん）のある老婆の声。

木の扉がその声に反応するように勝手に開いた。

頭を上げたルギリスは部屋の中へと入っていく。

続いて俺も部屋の中に。

「おいっ！　貴様っ！」

小さな声でルギリスが怒りの言葉を吐く。

その意味は後ろを振り返ったらわかった。

メイドさん、トウキ、リューグが扉の前で深く頭を下げていたからだ。

俺は少し考えてから――――――――――――――――――――――――

「テイクツー。」

一人でつぶやいてから部屋の中に入ってくるメイドさんたちと入れ替わるように部屋の外へ。

そこで深々と一礼してから部屋の中へと再び入る。

周囲から浴びせられるひんやりとした視線は無視。

とっとと話を先に進めよう。

「・・・・・・・・・・・よく来たねぇ。ルギリス。」

「ご無沙汰しております。長。」

俺の願いが通じたのか、長もルギリスも普通に会話を始めていた。

長は予想通り小柄な老婆のハーピィだった。
羽の色がすべて白いのは元からなのか高齢だからか。
・・・・・・・・・・正直どっちだっていい。
「いったいどうしたってんだい。あんたが人間を連れて私のところまで来るなんて珍しいじゃないか。」
「はい。実は――――――――――――――――――――」
ルギリスはこれまであったことを長に伝えた。
後ろで聞いている分には自分に都合が良いように話を改変している様子はない。
俺たちを連れてきたのは自分にとって決して都合の良い話をするわけではないと証明するためか。
俺は少しルギリスに対する評価を上げた。
話を聞き終えた長はゆっくりと首を振った。
「・・・・・・・・・・あたしゃ知らないねぇ。そんな女と娘の話。」
「ではやはりあの女が嘘を――――――――――――――――――――――――」

「待ちなさい。あんたはいつも判断するのが早すぎるよ。ルギリス。」

今すぐにでもアマネの元へ行こうとしたルギリスは長に咎められて動きを止めた。

「そこのあんたら。話を聞いた時そのアマネとやらが嘘をついていると思ったかい？」

急な質問にメイドさんとリューグとトウキは俺に視線を向けた。

・・・・・・・メイドさんとリューグは仕方ないがトウキは俺と一緒に話を聞いていただろう。

溜め息をつきながら俺は思ったことを口にする。

「俺はアマネが嘘をついたとは思っていない。」

隠し事をしているのは確かだが。

「・・・・・・・・・思った通りだね。その女は嘘をついちゃいない。」

「しかしっ！　現に長はあの女のことを知らなかったではありませんかっ！！」

「落ち着いてあたしの話を聞きなさい。」

取り乱すルギリスを言葉で制する長。

流石のカルシウム不足も頭を冷やすことにしたようだ。

「確かにあたしゃこの話を知らなかった。だけど少し前に隠し事をされたんだよ。」

「隠し事・・・・・・・・？　いったい誰にっ！！」

長は静かに深く息を吐いて。

「ルアリスさね。」

名を聞いたルギリスはその意味を理解できずに固まった。

「ルアリスとは誰だ。」

途切れた話を再開させるために俺は長に問うた。

まあルギリスの反応から予想はつくが。

「ルギリスの姉であたしが一番信頼を置いている娘さね。」

長は再び深く息を吐いた。

長自身、ルアリスを疑いたくはないといわんばかりに。

「あの娘が少し前にあたしのところに来てね。「長に会いたいと言っていた人間を追い払った。」なんて報告をしてきて、いつも通りの報告だったんだけどいつもと様子が違かった様に感じてね。」

長は過去を思い出すように目を細めた。

「・・・・・・今思えば、あの時にはあの娘は何かを企んでいたんじゃないかねぇ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・そだ。」

不意に震えているルギリスの唇が開いた。

「嘘だっ！！！」

叫び声を上げたルギリスは部屋から飛び出しどこかへと飛んで行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・どうしようか。

「仁。」

メイドさんが視線を俺に向けてくる。

・・・・まぁ気になったのも事実だしな。

「行ってくる。」

「頑張れ。」

「師匠。頑張るでござるよ。」

無責任な声援を背に俺はルギリスの後を追いかけた。

「・・・・・・・・・・・・あたしも歳を取ったものだね。あの娘の気持ちも考えずに余計なことを言っちまったよ。」

長は深く深く溜め息をついた。

「・・・・・・・・・・・・あちらは仁に任せておきましょう。」

メイドさんは一度部屋の外を見てから長に向き直る。

「長様。話しの続きをお願いできますか。」

「・・・・・・・・・・・・・・ああ。わかったよ。」

長は再び話を始めた。

第九十四話　長との、面会だ！（後書き）

次回はルギリスを追いかけているところからです。

第九十五話　なぐさめなんて、俺らしくもない！（前書き）

相変わらずゆっくりと前進しております。

第九十五話　なぐさめなんて、俺らしくもない！

巣の中を軽く走りながら俺はハーピィを見かけてはルギリスの向かった方向を聞いた。

意外なことにどのハーピィも俺に対して敵対心や警戒心がほとんどなかった。

理由を聞いてみると「ルギリス様の連れてきた人間だから。」といった答えが返ってきた。

・・・・・・・・・・・・意外と人望があるんだな。あのカルシウム不足。

しかしさっきは侵入者として扱われていたのに変わり身が早いな。ハーピィたちは。

それだけ長の命令に忠実というわけか・・・・・・

目撃情報を聞きながら走っていくと一つの部屋に辿り着いた。

中に入ってみるとどうやら子供部屋の類(たぐ)いの様だ。

ボールや人形。その他子供向けのおもちゃがあちこちに置いてあった。

・・・・・・・・・ハーピィも子供の遊び道具は人間の物を使っているのか。

俺は変な所に感心していた。

と。部屋の隅に一人のハーピィがうずくまっている。

「こんなところで何をしている？」

「・・・・・・・・・・・・貴様には関係ないだろう。」

うずくまったままこちらを見ようともせずに返答が返ってきた。

やれやれ。ちょっと重傷だな。

「長の部屋からあんな風に出て行くのは礼儀知らずなんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五月蝿い。」

挑発（ちょうはつ）するも、いつもみたいに怒ってこない。

・・う～ん・・・・・・・・・怒らないルギリスはツッコまないリリィと同じだな・・・・・

「や～い。ば～かば～か。おしっこちびり～。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

完全に無視されました。

・・・流石に幼稚すぎたみたいだな・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・私に一体何の用だ。」

俺が次の手段を考えているとルギリスが小さくつぶやいた。

「特に用は無い。」

「・・・・・・・・・・・・・・・ならばなぜ来た。」

メイドさんに脅されたから。

などと言ったら絶対に心を閉ざされてしまうのでお口にチャック。

少し考えてから口を開く。

「・・・・・・・・・・・・心配だったから?」

「・・・・・・・・・・・・どうして疑問形なんだ。」

「さあ?」

口にした言葉は俺の本心だった。

ルギリスのことを心配しているかどうか。

俺自身わかってはいなかった。

ただ少し気になったのは事実だ。

・・・・・・・・・・・・前から思っていたが他人のことを気にするなんて俺らしくもない。

・・・本格的に壊れたかな。俺は。

「・・・・・・・・・・・・私だってわかっている。長が嘘をつく必要はないと。」

いろいろと考えているうちにルギリスが勝手に話し始めた。

「だが私には信じられないっ！！　長に忠誠を誓っている姉さんがっ！！　誇り高く一族最強の戦士でもある姉さんがっ！！　・・・・・・・・・私の大好きな姉さんがっ・・・・・・・・・っ！！」

最後の方の声は涙声だった。

しばらくの間、嗚咽(おえつ)するルギリスを俺は静かに眺めていた。

「・・・・・・・・・・・・すまない。見苦しいところを見せた。」

「別に。気にするな。」

むせび泣くルギリスの姿を脳内画像保管庫に保存したことは秘密だ。

最近、俺は甘くなってきているから後で脳内再生して外道としてのキャラクターを活性化させないと。

「・・・・・・・・・・長のところへ戻るぞ。」

俺が密(ひそ)かな決心を固めている間にルギリスが歩き出す。

「戻ってどうする。」

「長に無礼を詫びる。そして姉さんに直接話を訊きに行く。」

弱音を吐いてすっきりしたのか、真っ直ぐな瞳をしているルギリス。

その様子を見てついからかってしまいたくなるのが人の性。

「さっきまで子供みたいに泣いていた奴の発言とは思えないな。後でトウキたちに面白おかしく改変した泣いたルギリスの話しでもしてやるか。」

「貴様・・・・・・・・・・っ！！　さっきのことは誰にも話さないと誓えっ！！！」

真っ赤になって怒りだすルギリス。

うんうん。やっぱりルギリスはカルシウム不足キャラじゃないと。

「ほら。勝手に長の部屋から出て行ったカルシウム不足さん。早く長の所へ行かないと長に失礼じゃないのか？」

「っ！？　・・・・・・・・・くそっ！！　絶対に誰にも話すなっ！！」

ルギリスは吐き捨てるように言うと急いで長の部屋へと飛んで行く。

俺もまた走り出す。

が。

「っ！？」

突如、周囲の景色が歪んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

思わず立ち止って周りを見てみるが特に異常はない。

・・・・・・・・・・まさか・・・・・頭痛が酷(ひど)くなっている？

俺は二、三度頭を振ってから再び走り出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。」

走っている最中、俺は間抜けな声を上げた。

あることが頭に浮かんだからだ。

ルギリスのことが気になったわけ。

「・・・・・あいつ、理香に似てるんだ。」

口でどこがとは説明できないが、どことなく雰囲気が。

俺は一人納得しながらそのままルギリスの後を追いかけた。

第九十五話　なぐさめなんて、俺らしくもない！（後書き）

仁も少しは仲間に優しくなったみたいです。
そしてそのことに危機感を覚えた仁は外道としてのキャラを取り戻そうとしている様です。

第九十六話　このやり取り、懐かしいな！（前書き）

続きです。

第九十六話　このやり取り、懐かしいな！

「ようやく来ましたか。仁。」

長の部屋の前でメイドさんの一言が俺たちを出迎えた。

メイドさん曰く話しはすでに終わったのでメイドさん以外は外に向かったとのことだ。

ルギリスは。

「先に行っててくれ。長と話をしてから合流する。」

と言ったので俺とメイドさんは二人で外に向かうことになった。

まあ要するに。

時々すれ違うハーピィたちのことを無視すれば、久しぶりの二人きりというわけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もっとも、別に二人きりだからといって話すことなど何もないわけだが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。」

無言のまま外に向かっていると不意にメイドさんが声を掛けてきた。

「なんだメイドさん。」

「体の方は大丈夫ですか。」

――

少しの間、返答に詰まった。

最近体に異常を感じているのは事実だ。

だが――――――――――――――――――――――――――――――――

「いつも通りだ。特に問題はない。」

俺はメイドさんに偽りの言葉で返答した。

「そうですか。」

それ以上は追及してこないメイドさんは会話の間、無表情のまま眉一つ動かしていない。

・・・・・・・・・・・・・・・相変わらず何を考えているかを読ませない。

「・・・・・・どうして急にそんなことを訊くんだ?」

揺さぶりを含めた俺の率直な疑問にメイドさんは。

「心配だったから。では理由になりませんか？」

相変わらず本音かどうか良くわからない返答で返してきた。

「・・・

・・・・・・・・・くそっ。やっぱり口じゃあ敵わないか・・・・・・

そんな話しをしながら歩いているうちに洞窟の入口が見えてきた。

「話しはこれで終わりにしましょう。」

「りょ～かい。」

会話を終えた俺たちは洞窟を出てあいつら（アマネやルナールを含む）と合流する。

「師匠っ！！　ルギリス殿はっ！？　大丈夫でござったかっ！！！」

「長と話をしている。心配するな。」

何故かやたらと心配そうに慌てている弟子の頭を撫でて落ちつかせる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えへへ。」

頬を赤く染めて照れながらトウキは満足そうに笑顔を浮かべる。

その様子をメイドさんは無表情に、ルナールは少し羨ましそうに、アマネは微笑みながら見つめていた。

後になってリューグから聞いたことだが、実は少し前にアマネがこっそりトウキに「心配そうに慌てている姿を見せれば仁に優しくなだめてもらえるかもしれませんよ。」と耳打ちしたのを知っているのは聞き耳を立てていたリューグだけだったそうだ。

無論、この時そんなことを知らなかった俺はトウキが落ちつくまで頭を撫で続けていた。

・・・・・・・・・なぜだろう。すっごく嫌な予感がするのは・・・・・・・

「・・・・・・・・・・仁。その辺にしておいたらどうだ。」

後ろから感じる無表情で無感情かつ無機質なメイドさんの視線にほんのり恐怖を覚えていた俺にリューグが声を掛けてきた。

「なんだリューグ。お前も撫でて欲しいのか？」

「違う。」

否定の言葉を意に介さず俺はトウキの頭から手を離すとそのままリューグに近づいて行く。

「やめろ。俺にそんな趣味は――――――――――――――――――――」

俺はリューグの頭に手を乗せゆっくりと撫で始めた。

「仁っ！！　お前気でも狂ったかっ！！」

慌てて俺の手を払いのけるリューグ。

「なんだよ～。ノリの悪い奴だな～。もっとラブラブな空気を出そうぜぇ～。」

「俺に同性愛の趣味はないっ！！！」

不満の声を上げる俺を一喝（いっかつ）するリューグ。

「・・・・・・・・・・・むぅ。仁が責めですか・・・・・順当と言えば順当ですが・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・責めるなら私を責めてほしい。」

本気かどうかわからないメイドさんと人として（魔族だけど）危ないルナールの言葉を背に俺は嫌な予感の回避に成功したことを心の中で喜んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あまり、心配を掛けさせないでください・・・・・・・」

ルギリスが来る直前。

メイドさんは誰にも聞こえない様につぶやいた。

第九十六話　このやり取り、懐かしいな！（後書き）

メイドさんは仁に一体どのような感情を抱いているのでしょうか・・・・・

それはそれとして次はあの村に行きます。

第九十七話　村の様子が、変だ！（前書き）

後半シリアスです。
内容を頭の中で想像すると結構グロいです。

第九十七話　村の様子が、変だ！

ルギリスと合流した後、俺はメイドさんから次に向かうべき場所を教えてもらった。

その場所とは俺たちがハーピィ退治の依頼を受けたあの村だ。

長の話によると、最近ルアリスが頻繁（ひんぱん）にその村を訪れているそうだ。

まああのじじいは最初から怪しかったから特に異論はない。

ルギリスは一足先（一飛び先と言った方が正しいか？）にあの村へと飛んで行ってしまった。

一応止めたが聞く耳を持たなかったので、どうなっても知らない。

そんなわけで俺たちはあの村を目指して薄暗い森の中の険（けわ）しい山道を下（くだ）っている最中だ。

この山道を真っ直ぐ突っ切るのが一番速く村に辿り着くらしいが、斜面はかなり傾いているうえに雨でも降った直後なのか、異様なまでに地面がぬかるんでおり足場が非常に不安定になっている。

気を抜けば転びかねない。

だが今はそんなことは気にならない。

「えへへ～・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぬかるみに足を取られて転んで足をくじいた馬鹿弟子を背負って（最初荷物を持つように肩に乗せようとしたら周囲の視線があまりにも冷たかったのでやめた。）歩いている俺に突き刺さる視線。

怖い。後ろのメイドさんがすごく怖い。振り向いたら死が待ってそうだ。

ルナールはいつも通り羨望（せんぼう）の眼差しで見ているがそこには殺気も敵意も悪意も無機質さも恐怖もない。

ある意味では俺の知り合いの女性の中で一番気楽に一緒に過ごせる女なのかもしれない。

リューグは完全に俺たちのことを無視して前を歩いている。

体中から「頼むから俺のことを巻きこまないでくれっ！！」というオーラが漂（ただよ）ってきている。

もしもの時の身代わり人形にするけど。

アマネはメイドさんより更に後方にいるためどんな様子か確認できない。

どうせいつも通り微笑んでいるんだろうけど。

そもそもアマネが回復魔法を使えればこんなことせずに済んだというのに「私は攻撃魔法しか使えません。」などと言われた。

「ししょ～。もうちょっとゆっくり歩いてほしいでござる～。」

「五月蠅い。文句を言うな。」

甘えるように俺の背中に頬を擦り寄せてくるトウキ。

・・・・まったく。フレス以上にわがままな奴だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてそんな俺たちの様子を無機質な瞳で見つめているメイドさん。

その無言の圧力は俺だけに向けられているようで、トウキはまるで気付いていない。

・・・・・・・・・・・・・・気付いていて無視しているならこいつは大物になるだろうけど。

そんな感じで微妙に気まずい空気の中、それでも俺たちは何事もなく村に到着した。

のだが。

「・・・・・・・・・・・・・おかしい。」

誰がつぶやいたのかはわからなかったが、俺たち全員が似たような思いを抱いていたであろうことは容易に想像がついた。

その理由は簡単だ。

「どうして誰もいない――――――――――――――――――――――――――――」

その村は以前見たときと変わらない姿をしていながらまったく別のモノに変貌していた。

「すいませ～ん。誰かいませんか～。」

俺はトウキを背負ったまま俺は一軒の民家の中に入った。

とりあえず俺とトウキ、リューグが民家の探索。メイドさんとアマネはルギリスを探すと役割分担し、そして何もなくとも半刻後には中央にある広場に集まることとなった。

「・・・・・・・・・誰もいないでござるな。」

俺とトウキが周囲を見渡す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

普通の二階建ての民家だった。

少なくとも少し前までは普通に生活をしていたであろうことはテーブルの上に飲みかけのコーヒーカップ（の様な物）を見ればすぐにわかる。

「・・・・・・・師匠。どうするでござるか。」

「・・・・・・・・・・・・二階も確認してみる。だがその前に刀を

貸せ。馬鹿弟子。」

「・・・・・・・・・・・・・・わかったでござる。」

流石の馬鹿弟子もこの異常事態＋自分が足手まといとわかっているからか、素直に刀をこちらに差し出してきた。

両手がふさがっている状態でどう使うかだと？

両手が使えない以上、使える場所は一つしかないだろう。

俺はトウキが差し出してきた刀を口で抜いた。

「師匠っ！！　それがしの刀を――――――――――――――――――」

案の定、文句を言おうとする馬鹿弟子を視線だけで黙らせる。

静かになったところで階段を上っていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぎしぎしと音を立てる木の階段以外、無音の空気はホラー映画を連想させる。

階段を上りきると二つの部屋があった。

俺は手前の方の部屋の扉を開ける。

「――――――――――――――――――――――――――――」

「なっ、なんでござるかこの臭いはっ！？」

トウキが身を乗り出して室内を見ようとしたので俺は咄嗟（とっさ）にトウキの顔に頭突きを入れる。

「あぅぐっ！？」

涙目になって鼻を抑えるトウキを無視して改めて俺はその光景に視線を移す。

まず最初にとてつもない腐臭。

密室の状態のまま放置されたのだろうか、中に入ったら確実に吐く。

トウキは俺に背負われているのが幸（さいわ）いしたと言える。

この光景を直視せずに済んだのだから。

それは口にするのもはばかられる凄惨（せいさん）な殺人現場とでも言うべきか。

部屋中に飛び散った真っ赤な液体は完全に乾いている。

その部屋には総量で人間一人分ぐらいの切断されたパーツがあった。

ただし犠牲者が一人ではないということは明確だった。

理由は簡単だ。

同じパーツが複数散らばっている。

それだけ見ても三人以上の犠牲者がいることがわかった。

俺は黙って扉を閉める。

馬鹿弟子が見るには早すぎる光景だったからだ。

だが扉を閉めるとほぼ同時に隣の部屋で物音が聞こえた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・師匠。」

ようやく目を開けたトウキは俺にしがみつく力を強くする。

警戒心を向上させつつ俺は隣の部屋に向かっていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・鬼が出るか蛇が出るか。

俺は臨戦態勢を取りながら扉の前に立った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・非道いものだな」

リューグもまた一軒の民家を探索して死体のある部屋を見つけていた。

『・・・

第九十七話　村の様子が、変だ！（後書き）

仁たちは今、ホラーゲームの様に無音の村を探索しています。
さて、物音のした部屋には一体何が・・・・・・・・・・

第九十八話　事情説明が、欲しいぜ！（前書き）

一応、空気はシリアスのままです。

第九十八話　事情説明が、欲しいぜ！

俺は扉を蹴破りそのまま中に突入する。

中にいたのは――――――――――――――――――

「ひっ！？」

部屋の隅で震えながら五歳くらいの少年を抱きしめている十歳くらいの少女が息を詰まらせたような小さな声で悲鳴を上げた。

この家の子供か？　それとも何かの罠か？

俺は二人の子供と一定の距離を保ちながらなるべく優しく話しかける。

「ふが。ふぐぁ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・刀で口がふさがっていたのを忘れていた。

俺はどこかの三刀流の剣士みたいに口で刀を持ちながら器用にしゃべることはできないみたいだ。

・・・・・・・・・・・・・・・まあそもそも口で武器を持つこと自体、ほとんどやったことはないんだが・・・・・・

俺はトウキに視線を向けてアイコンタクトを図る。

だがトウキは何故俺が自分を見たのかわからなかったらしく困惑した様子で首を傾げた。

・・・・・・・・・・・・・・・使えん馬鹿弟子だ。

ジェスチャーをしようにも馬鹿弟子を背負っているため両手も使えない。

そんな俺たちの様子を見て更に警戒心と恐怖心をむき出しにする二人の子供たち。

むぅ・・・・・・・・・・この子たちは一体何故そこまで俺に恐怖心を抱くのか・・・・・・・

刃物を口に咥えている所為でよだれが口から溢れ出ているだけの俺のどこに恐怖を感じる要素があるというんだろうか・・・・・・・

とりあえずこのままにしておくわけにもいかないので俺はトウキと子供たちの交互に視線と顔を動かしながら何回か顎をしゃくった。

「・・・・・・・・・・・・・・・ああっ！！　そういうことでござるかっ！！」

ようやく俺の意図を理解した様子の馬鹿弟子。

「そこのお主たちっ！　それがしは怪しい者ではござらんっ！　話を聞かせてはくれませぬかっ！」

大きな声ではっきりと言ったトウキに子供たちの震えは更に増した。

ったく。いきなり大声を出せば誰だってビビるというのにこの馬鹿弟子は・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・師匠。どのように考えましても師匠の所為であの童たちは怖がっているでござるよ。」

そんな馬鹿なっ!?

声に出して言いたかったがしゃべれなかったので表情で驚愕を表現した。

「・・・・・・・・・・・・。この人はそれがしの家臣でござる。決して危害を加えぬことを約束するでござるから話を聞かせてほしいでござる。」

優しい声音で語りかけるトウキ。

って誰が家臣だっ!?

「師匠っ！　今はこの童たちを安心させるのが先決でござるっ！」

小さく耳打ちされた言葉にぐうの音も出ない俺。

確かに、トウキが話し掛けてから少しではあるが子供たちの警戒心が薄れている。

「大丈夫でござるよ。ほらこの人はこんなに面白い顔ができるでござるよっ！」

俺の頬をつねったり伸ばしたりして顔を変形させる糞弟子。

お仕置き決定。ハードコースで。

「・・・・・・・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・・・・・そうね・・・・・」

意を決したのか少女は少年から離れると少しずつ俺たちに近寄ってきた。

「・・・・・・・・あのぅ・・・・・・・・・・・・」

「わかってくれたでござるか？　この人は怖くないということが。」

言いながら鼻をつまんだり目を見開かせたりと俺の顔をいじくりまくるトウキ。

・・・・・・・・・・・・・・お仕置き、ヘルコースにするべきか。

「そうじゃなくて・・・・・・・・お姉さんたちはこの村の人達ですか？」

「違うでござる。仲間たちと一緒に旅をしているでござる」

トウキの言葉に露骨（ろこつ）に安心した様子を見せる少女。

・・・・・・・・・・・んっ？　今の発言だとこの少女は――――――――

――――――――

「お願いしますっ！　私たちを助けてくださいっ！」

少女は深く頭を下げた。

先刻決めた通り、俺たちは本来は祭りの為にでも使われるのか無駄に広い村の中央にある広場に集まっていた。

その中にはルギリスの姿もあった。

ルギリスは村人が森の方に行っているかもしれないと考え空から地上を探しており、先ほど戻ってきたところメイドさんたちと合流したそうだ。

「それでこの子供たちはいったい何者なんだ。」

「それはこれからこの子たちに話してもらえばいい。」

リューグの質問にトウキを地面に降ろして肩を回している俺が答えた。

ちなみに刀は唾液（だえき）に濡（ぬ）れていたからかトウキが触るのを嫌がっていたため俺がそのまま持っている。

ともあれ俺の言葉で二人の子供に集中する。

「あのっ！　私たちは――――――――――――――――――――――」

「待てっ！　何か来るぞっ！」

少女が口を開いた時、リューグが空を指差しながら叫んだ。
俺たちは視線をリューグの指差した方向へと向ける。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・どういう、ことだ。」
ルギリスが呆けた言葉を口にする。
・・・・・・・・・・まあ無理もないか。
正直、俺も状況が良くわからない。
ただわかっているのは空の向こう。
無数のハーピィたちが俺たちにむき出しの敵意をぶつけらがらこちらに向かってきているということだけだった。
「・・・・・・・・・・・・ルギリス。」
一人のハーピィが空を飛んでいた。
「・・・どうか無事でいて・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

巻きこんでしまった。

そのことを悔いながら最愛の妹を想う姉の姿がそこにはあった。

第九十八話　事情説明が、欲しいぜ！（後書き）

一体どうなっているのでしょうか・・・

第九十九話　まさか、まだいたとはな！（前書き）

なんだかんだでもう九十九話です。

読者の皆様方、ご愛読ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第九十九話　まさか、まだいたとはな！

ハーピィたちは俺たちから一定の距離を取りつつそのまま空中に留まる。

「貴様等・・・・・・・・・一体どういうつもりだっ！！」

ルギリスの恫喝（どうかつ）に答える様子もなく先頭にいた二人のハーピィが襲いかかってきた。

「メイドさんっ！！　その二人の子供を頼むっ！！」

俺は叫びながら刀を横に一閃させる。

二人のハーピィは羽を切られたというのに悲鳴も上げずに地面に落ちた。

「っ！？　これは・・・・・・・・っ！？」

落ちたハーピィの傷口を見て俺は驚愕（きょうがく）した。

血が出ていない。

かと思えばいきなり透明な液体となって落ちたハーピィの元へと戻っていく。

「・・・・・・・これはいったい・・・・・・・・？」

メイドさんやルギリスも驚愕を隠せないでいた。

「・・・・・・・・・・そういうことか。」

だが俺は以前の経験からこいつらがなんなのかがわかった。

「フーエっ！！　こいつらは――――――――――――――」

『・・・・・・・・間違いありません。』

俺の言葉にフ―エが肯定で返す。

・・・・・・・・・やっぱりか。

「仁っ！　こいつらは一体何なんだっ！？」

ルギリスの悲鳴に近い叫びに俺は上空のハーピィ共を睨みつけながら答える。

「メタモルフォーゼ・・・・・・通称メタの名前で知られている擬態能力を持った人造生物だ。」

忘れもしないあの初めての依頼。

俺が（理香の手で）半殺しの目にあった忌まわしい記憶。

「なるほど・・・・・・・・理香様たちから聞いた洋館で遭遇したという魔物ですね。」

メイドさんの言葉に首肯する。

「何故そのような魔物が私たちの一族に化けているのだっ！？」

「知るか。」

やかましく叫んでいるルギリスに適当に返してからアマネの方に視線を向ける。

「アマネ。あいつらは基本的に物理攻撃が効かない。頼めるか？」

「ええ。任せてください。」

アマネはやはり微笑みながら答えた。

「そういうことなら俺も参戦するぞ。」

そう言ったのは役立たず（リューグ）。

「心配するな。今回は役に立って見せるさ。」

不敵に笑いながらリューグが何かを取りだした。

あの形は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「銃？」

「知っているのか？　意外と博識（はくしき）なんだな。」

リューグは右手に紫色の、左手に緑色の銃を持ち構える。

ふむ・・・・・・・・・・・・リューグは馬鹿ではないし銃などこの世

界で見かけたことはなかった。

ならあの銃は特別な物。恐らく通常弾ではなく特殊弾を撃つための物と考えるべきだ。

「任せていいんだな。リューグ。」

「当たり前だ。」

俺は一言だけ確認すると馬鹿弟子に視線を移した。

「動けるか？」

「無理でござる。」

俺は馬鹿弟子の頭を掴んで二人の子供を後ろにかばっているメイドさんの方へ投げた。

「うわぁぁぁぁーーーーーーーーーーでござるぅぅぅぅーーーーーーーーっ！！！」

・・・・・・・・・・・・余裕を感じさせる悲鳴だな。

メイドさんは投げつけられてトウキを避けた。

「うぅぅぅ・・・・・・・・・非道いでござる・・・・・・・・・」

背中から地面に落ちたトウキはうめき声を上げる。

流石に足手まといをかばいながら戦うつもりはない。

「メイドさん。ついでにトウキも頼む。」

「わかりました。」

メイドさんは歩けないトウキの襟首(えりくび)を掴む。

「仁。」

そして一言。

「・・・・・・・・・・気を付けてください。」

それだけ言うと二人の子供とトウキを連れて近くの民家の中へ避難して行った。

「あらあら。」

アマネが意味深に微笑みながら言った。

いや、アマネだけではない。

リューグも変な笑みを浮かべながら俺を見ている。

「・・・・・・・・・・何だ?」

「別に。」

その笑みは正直ムカついたが今は目の前の障害を取り除くのが先決だ。

「ルギリス。戦えるか？」

俺は先ほどからハーピィもどきの集団を睨みつけているルギリスにも声を掛けた。

「当たり前だっ！！　人間が作った魔物がハーピィをまねるなど・・・・・・・っ！！！」

怒りに震えるルギリスにはこれ以上の言葉は不要みたいだ。

「ルナール。どうだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わずに構えているルナールを俺は準備完了しているのだと判断した。

そして俺は改めて上空にこちらを見下ろしているハーピィもどきを見やった。

何故メタがこれほどいるのか？　会話が終わるまで襲いかかってくるのを律儀（りちぎ）に待ってくれているのか？　などといった疑問はたくさんあったが今はそのことを考えている場合ではないだろう。

と、突然一匹のハーピィもどきが金切り声を上げた。

同時にハーピィもどきたちが一斉に動き出す。

戦闘開始。

俺たちはハーピィもどきたちを迎え撃った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちなみにルナールが何も言わなかったのは実はどうやったら仁に痛めつけてもらえるのかを考えていたからだということは、本人以外誰も知らなかった・・・・・・

第九十九話　まさか、まだいたとはな！（後書き）

次は雑魚（雑鳥？）共との戦闘開始――――――――――――――――――ではなく。

第百話記念番外編をお送りしたいと思います。

それと第一回人気投票も行なってみたいと思います。

詳しいことは次回の後書きに書きますので、気軽に投票していただけましたら作者としてとても嬉しいです。

ではまた次回お会いしましょう。

第百話記念番外編　俺とあいつらとのとある休日（前書き）

今回は仁たちが転移する前の日常の一部をお送りします。

当たり前の日常は仁にとって何よりも大切なものです。

第百話記念番外編　俺とあいつらとのとある休日

春のポカポカとした陽気の晴れの休日。
俺は理香の家の玄関（げんかん）の呼び鈴を鳴らした。

「り～か～ちゃんっ。あっそびっましょ～。」

「・・・・・・・・・いつも思うんだけど、もうちょっと普通に誘おうよ。」

後ろで東間が呆れているが特に気にする必要はないだろう。
ほどなくして玄関から理香が現れた。

「・・仁・・・・・・・・・・・いつものことだけど恥ずかしいからもっと普通に呼びなさいよ。」

東間と似たようなことを言う幼馴染みその二。
二人からそう言われた俺は顎（あご）に手を当てて少し考える。

「ん～・・・・・・・・・じゃあ、りかちゅぁ～ん。あそびましゅぉ～ん。」

「「気持ち悪い。」」

・・・・・・・大不評でした。

・・・むぅ・・・・・・ちゃんといつもと違う言い方をしたのに何がいけなかったんだろうか・・・・・・

「まあとにかく出発しようか。」

「ええ。そうね。」

「りょ～か～い。」

今日は三人で花見をしようと約束していた。

俺たちは最後に荷物の確認をしてから近くの公園へ出発した。

「きゃぁーーーーーーーーーーーっ！！　東間様ーーーーーーーーっ！！！」

満開の桜が咲き乱れる近くの自然公園に入った俺たちが最初に受けた一声。

見れば公園で花見をしていたほとんどの人の視線がこちらに集まっている。

どこのアイドルだよ。とツッコミたくなるほど東間のファンは多い。

東間もいちいち笑顔で手を振り返すからなおさらファンたちの熱気が上がっていく。

そしてそれと同じくらい。

「理香ぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

理香のファンも多かった。

理香も明らかな苦笑いを浮かべながら手を振るう。

東間は幅広い層の女性から、理香は男女問わずに。

確かに元気で明るく前向きなツンデレであり天才美少女である理香は、幼馴染みの俺の目から見てもすごいと思う。

東間の馬鹿は何をやっても常に俺の思っている以上の成果を上げる。

まったく・・・・・・こんな奴らに付き合わされる凡人の身にもなってほしいもんだ。

「あぁーーーーーーーーーーーーっ！！　またあの男も一緒だわーーーーーーーーーーーっ！！」

「東間様たちから離れろーーーーーーーーーーっ！！」

「消えなさいよーーーーーーーーーっ！！　この男女ーーーーーーっ！！」

「そうだそうだーーーーーーーーっ！！　理香にまとわりつくストーカーめーーーーーーーっ！！」

「失せろ害虫ーーーーーーーーーーーーっ！！」

次々に浴びせられる俺への罵声（ばせい）。

この程度では俺の鋼の心は傷一つ付きはしないのだが――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

理香の奴がうつむきながら震えている。

はっきりとわかる怒りの感情が今にもファンたちに向けられそうになっている。

「――――――――――――――――――――っ！！」

俺は動き出そうとしていた東間の右腕を掴んだ。

こちらを振り向いた東間に俺は黙って首を横に振った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

東間が下唇（したくちびる）を噛みながら腕から力を抜く。

・・・本っ当に世話の焼ける奴らだ・・・・・・・・

周りの連中なんてどうでもいいが、こいつらには明るい道を歩んでほしいからな。

「みんなごめんっ！　今日は三人でお花見をするって決めていたから僕たちのことは気にせずに楽しんでほしいっ！！」

東間の一言でファンたちは「はぁーいっ！！」と一斉に元気良く返答してから散り散りになっていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ほんとすっげぇーカリスマだな。

「行くぞ。」

ファンたちがいなくなって道ができたので、俺たちはあらかじめ予約をしておいた場所を目指して歩き出す。

予約した場所は一番大きな桜の木の下だ。

東間と理香の名前を使えば簡単に一番良い場所が取れる。

喧騒（けんそう）の中、俺たちは持ってきたビニールシートを敷いてから座り持ってきた弁当を取りだした。

だが、これから花見を始めようって時にまだ理香の奴がうつむいている。

「理香。気にするなって。あれくらいの罵倒（ばとう）いつものことだろ？」

「でもっ――――――――――――――――――――――――」

開いた理香の口に箸（はし）で取った唐揚（からあ）げを放り込む。

「むぐっ！」

理香は口の中の唐揚げをそのまま良く味わいながら飲み込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・相変わらず女のプライドをズタズタにする様な料理の腕ね。」

理香の言葉に俺は立ちあがってどこかの赤い検事の様に優雅(ゆうが)に一礼した。

「お褒めいただき光栄の至(いた)り。」

「僕も今日は上手にできたんだよ。」

取りだした弁当を広げた東間は中にある卵焼(たまごや)きを一つ箸で摘(つ)まんでその場に座りなおした俺に差し出す。

俺はその卵焼きを直接口に入れる。

「どうかな?」

良く噛んで味わいながら飲み込んで。

俺は思ったことをそのまま発言する。

「東間にしては上出来だな。」

「ありがとう。」

笑い合う俺たちをジト目で見つめる理香。

「・・・・・・・・・・・・・そういうのは普通、男同士でやるものじゃないわよ・・・・・・」

不満そうにつぶやく理香。

・・・・・・・・たかだか「あ～ん。」「ぱくっ。」をやっただけなのになぜそこまで機嫌を損ねるのだろうか・・・・・・？

「ほら。理香も食べてみなよ。」

東間が自分の弁当箱を理香に差し出すが、理香がそれを手で制して

――――――――――――――――

「ねぇ、二人とも。実は――――――――――――」

そう言いながら謎の包みを取り出そうとする理香。

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

本能が俺たちに逃げろと訴えてきたのをはっきりと感じ取った。

「りっ、理香っ！！　今日は僕たち二人がお弁当を作ってくるってことで納得したよねっ！！！」

「そうだけど・・・・・・私も何か作ってきたくて・・・・・・・・」

理香の言葉に俺と東間は顔面蒼白（がんめんそうはく）になって立ち上がる。

「二人ともっ！！　実はさっき家に忘れ物しちゃったんだっ！！

だから今から家に取りに行ってくるよっ！！！」

「いやいや待てよ東間っ！！　お前が行ったらまたファンたちに取り囲まれて動けなくなるだろうっ！！
ここは俺が行くべきだっ！！」

「大丈夫だよ仁っ！！　僕の心配はする必要が無いからここで理香と仲良く待っていなよっ！！！」

「はっはっはっ！！！　いいから俺に行かせろって言ってんだよ・・・・・・・・・・っ！！！」

「あはははははっ！！！　絶対に嫌だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！！！」

互いの命をかけた全力の取っ組み合いを始める俺たちに氷点下の視線が突き刺さる。

「・・・・・・ねぇ・・・・・・・・・二人とも・・・・・・・・・・・・・・」

「「おいしくいただかせていただきますっ！！！」」

俺たちは二人で仲良く逝(イ)く道を選んだ。

「良かったっ！　それじゃあちょっと待ってねっ！！」

こいつそのうちツンデレからヤンデレに進化しねえだろうな・・・・・・

などと思わせる今日この頃。

何度失敗してもあきらめずにに努力し続けるその姿勢を俺も東間も高く評価している。

・・・評価しているけどさぁっ！！　付き合わされる身になって考えてほしいよなぁっ！！！

「・・仁・・・・・・・・・・生まれ変わったら僕は鳥になって自由に空を飛びたいよ・・・・・・・」

「・・・・俺は食事をしなくても生きていける世界に生まれたい・・・・・・・」

死刑執行を待つ死刑囚である俺たちは十三の階段を昇る気分を味わいながら来世について語り合う俺と東間。

そんなときでも俺は心の奥底で願っていた。

こんな日常がずっと続いてほしいと――――――――――――――――――――

「親父ぃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

「泣くな息子たちよっ！！！」

「だけどあいつら俺たちも食ったことのない理香の手料理を――――――――――――――――」

「それでもだっ！！！」

木の陰にいくつかの影がひそんでいた。

それは理香の暮らしている道場の門下生たちと道場主とその息子だった。

皆、理香の努力を良く知っているため理香のことを大切に思っており、本日幼馴染みとはいえ男二人と出かけると聞いて今日初めて三人の後を浸けてきたのだった。

そのことは仁ですら気付かなかったほどであることを考えると、そのストーキング技術は目を見張るものがあると言える。

ちなみに先ほど仁のことを罵倒していた人々は、「俺たちの理香の幼馴染みを侮辱するんじゃねぇっ！！！」といった感じに、ほどよくこの連中にぶちのめされていた。

この時の争いは「またファンたちの暴走か。」ということで適当に処理されていた。

「理香よぉ・・・・・・・・おめえの手料理は兄ちゃんである俺や親父に最初に食わせてほしかったぜぇ・・・・・・・・・」

「馬鹿野郎っ！！　男なら小せえことでめそめそしてんじゃねえっ

！！」

このストーカーたちは知らなかったが、実は理香はすでに何度も仁たちに手料理を振舞(ふるま)っていたのだ。

・・・・・・・・・そのたびに仁たちがどのような目にあってきたのかを彼らは知らない・・・・・・

「ああっ、親父っ！！　見てくれっ！！」

「なんだぁっ！！　どうしたぁっ！！」

門下生の一人が指差した先には何度も肌を様々な色に変色させながら倒れて痙攣(けいれん)している二人の男の姿が。

「畜生(ちくしょう)っ！！　色が変わってぶっ倒れるほど美味(うま)いってことかよっ！！」

「俺も食いてぇよぉっ！！」

「泣くな馬鹿野郎どもっ！！　今はじっと我慢しとけぇっ！！！」

彼らは勘違いをしたままずっと三人を見続けていた・・・・・・・・・・

第百話記念番外編　俺とあいつらとのとある休日（後書き）

では人気投票について説明します。

まず投票の仕方についてですが、感想の方にどのキャラが良いかを書いてください。

理由はあってもなくてもどちらでもいいです。

投票は一人一キャラでお願いします。

キャラといってもしゃべっているキャラで無くてもＯＫです。
（例、木彫りの熊、ナルシーの馬、仁に蹴破られた扉、メイドさんのスプーンなど）
また、名前のないサブキャラもＯＫです。
（例、宿屋のおばちゃんやヴェンリスに助けられたメイドなど。）

優勝したキャラは、そのキャラを主役とした番外的な連載を新しく作りたいと思います。（無理だった場合は短編として本編にちょくちょく載せます。）

期間は今日から三十日後の八月十二日までとします。

その他、何かわからないことがありましたら感想の方にお書きください。

どうかお気軽にご投票ください。

よろしくお願いします。

つけ足させていただきますが、投票する時はなるべく『～に投票』などといった文章を入れてください。

その方が作者としてもわかりやすくて助かるのでよろしくお願いします。

第百一話　まったく、体調不良とはな！（前書き）

では本編を再開します。

第百一話　まったく、体調不良とはな！

咆哮を上げながら強襲するハーピィもどきの群れ。

「ふっ！」

俺は近づくハーピィもどきを片端から切り捨てる。

が。

「・・・・・・・・やっぱり物理攻撃は無意味か・・・・・・・・」

切った端から液体となって再生するハーピィもどきたち。

「仁っ！　お前は魔法は使えないのかっ！」

「使えるわけないだろっ！！」

「威張るなっ！」

銃を乱発しながら訊いてくるリューグに俺は怒鳴り声で返すとリューグも怒鳴った。

「煉獄の炎よっ！　彼の者どもを業火で焼き尽くしたまえっ！　炎獄渦っ！」

アマネが放った魔法が、文字通り炎の渦を形成しながらハーピィもどき共を飲み込んでいく。

「冷却風(フリーザー)っ！」

ルギリスの放った旋風も次々とハーピィもどきを凍りつかせて砕いていく。

リューグはリューグで右手の銃からは紫電(しでん)を纏(まと)った弾丸を放ちハーピィもどきを感電、蒸発させ、左手の銃からは風を纏った弾丸でハーピィもどきをはじけさせている。

風の弾丸の方は、恐らくだが空気の抵抗を利用して液体であるハーピィもどきをはじけさせているのだろう。

「闇夜の旋律よっ！　愚かなる敵を討てっ！　影杭壁(スレイヴストーク)っ！」

ハーピィもどき共を囲むように黒い壁が現れハーピィもどきを包み消滅させる。

ルナールもルナールで普段の駄目っぷりでは考えられないほど役に立っている。

と、のんきに頭の中で解説しながら俺はふと気づいた。

・・・・・・・・・・もしかして俺だけ何もしてなくないか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いかんっ！　このままではリューグだけでなく俺まで役立たずの烙印(らくいん)を押されてしまうっ！！

俺はリューグと同列扱いされるのを避(さ)けるべく刀に魔力を集中させ

る。

そして。

「裂獄炎風(れつごくえんぷう)っ！！」

真一文字(まいちもんじ)に振るった刀から極大の黒い業火を走らせる。

業火は空中にいたハーピィもどきを全て飲み込み跡形もなく焼き尽くした。

「ふぅ・・・・・・・・・・・・・・・」

これで役立たずの烙印は押されないだろう。

俺は安心した瞬間――――――――――――――――――――――――

その場に倒れそうになったが刀を杖代わりにしてどうにか踏みとどまった。

・・・・・・・・・・・・・・魔力を使いすぎたか？

口に出さない疑問に答える声などなく、俺はとりあえず周りの様子を確認すると――――――――――――――――――――――――

全員がこちらをガン見していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・あっ。」

そりゃあ魔法が使えないといった人間があんなものを使ったら疑問

に思うよな。

「っ！？」

なんとかこの場を誤魔化そうと口を開いたが、言葉が出てこない。

というよりもまず呼吸自体が上手くできない。

「仁。大丈夫か？」

リューグを始め全員が心配そうに駆け寄って（一人は飛んで）きた。

「さっきの技はお前の体に大きな負担をかける技みたいだな。これ以上は使わない方が良い。」

リューグの言葉に反論しようとしたが、上手く言葉にできない。

・・・・・・・・・・・どうやら認めないといけないようだ。

本格的に体調不良であることを。

「仁。無理せずに休め。貴様に倒れられたら後が面倒だ。」

ルギリスも俺の心配をしてくれているみたいだった。

「ルナール。仁をメイドさんの所へ連れて行ってくれ。俺とルギリスとアマネは周囲を調べてくる。」

「わかった。」

ルナールはリューグの指示に大人しく従うと俺の腕を自分の肩にまわして俺を支える。

「歩けるか。」

ルナールの問いに俺は頷く。

ゆっくりと歩き始めたルナールは何かの呪文を唱えた後、誰かに報告でもしているかのように小さくつぶやき始めた。

「よし。俺たちはさっきのハーピィもどきたちが来た方向を重点的に調べるぞ。」

「良いだろう。」

「わかりました。」

リューグたちは俺たちが歩き始めたのを確認するとハーピィもどきたちが来た方向の森の中へと走って行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ。

いつもならゆっくりできることを喜ぶはずなのになぜかそんな気分になれない。

体調不良が原因だとしたら一刻も早く治さなければ俺のアイデンティティーが崩壊してしまう。

「仁。」

いつの間にかつぶやきを終えたルナールが静かに俺を呼んだ。
また殴ってほしいとかいうつもりか？　とルナールの方へ顔を向けると。
「・・・・・・・・無理をしているならちゃんと言ってほしい。」
そこにはいつもの変態の顔は無かった。
「あなたを失って悲しむのは、私だけではないのだから・・・・・・・・」
それは年相応の女の子の泣きそうな顔だった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ。
俺が体調崩したぐらいでそんな態度を取られるとかえって調子が狂うっての。
俺たちはそのままゆっくりとメイドさんたちがいる民家へと歩いて行く。
その間に俺はどうにかしてしゃべれる程度にまで回復するように気を集中していた。

「二手に分かれた様です。」

薄暗い森の中、仁たちを見つめる老人といくつかの影があった。

「いかがいたしましょう。」

「決まっておるじゃろう？」

老人は愉快（ゆかい）そうに笑いながら言った。

「皆殺しじゃ。」

第百一話　まったく、体調不良とはな！（後書き）

そういえば『活動報告』の方で第三回ミニコーナーが行われているそうです。

メイドさんが是非皆様に読んでほしいと言っていましたので、のぞいてみてください。

第百二話　うわっ、割とやばいかも！（前書き）

別行動を取ってしまった仁たちに迫る魔の手。

第百二話　うわっ、割とやばいかも！

「仁っ！？　どうしたのですかっ！？」

メイドさんたちがいる民家の中に俺とルナールが入っていくと、メイドさんが何故か冷静さを失って慌てて駆け寄ってきた。

民家の中はやはりこれと言って特徴のない平凡な内装だった。

「少々、疲れただけだ。心配ない。」

回復に集中していたおかげか、しゃべれる程度までにはなっていた。

「・・・・・・・・・・・・無理はするな。」

ルナールが小さくつぶやく。

「師匠・・・・・・・・・・本当に大丈夫でござるか・・・・・・・？」

足の痛みがひいたのか、トウキもいつになく心配そうに俺を見つめながら近寄ってきた。

・・・・・・・・・ったくどいつもこいつも・・・・・・・・

俺の心配なんてする必要がないだろうに。

俺は内心で悪態づいた。

「心配させているのは誰ですか。」

メイドさんはそんな俺の心を読んだかのように言ってきた。

「・・・・・・・・そういえばあの二人はどこに行った？」

話しを変えるべく周囲を見回していた俺はあの二人の子供の姿が無いことに気が付いた。

「あの二人なら奥の寝室にいます。疲れていたようなので寝かせておきま――――――――――」

メイドさんが言葉を途中で区切り、ナイフとフォークとスプーンを取りだした。

「？　どうしたんでござるか？　メイドさん殿？」

本当に進歩しないトウキが不思議そうにメイドさんに尋ねる。

・・・・・・・・・・・・・・今度、気配の探り方くらい教えてやるか。

「ルナール。俺は大丈夫だ。手を離せ。」

「・・・・・・・・しかし・・・・・・・・・・・・」

「離せ。」

ルナールは心配そうな顔のまま俺から離れていく。

俺は手に持った刀をその場で軽く振り、その後手足を動かしてみる。

・・・・・・・・・・・・よし。痛みさえ無視すれば体は十分に動かせる。

「トウキ。寝室に行ってあの二人を守れ。」

「・・・・・・・・・・敵、でござるか・・・・・・・・・」

流石にこの緊迫(きんぱく)した空気を読み違えるほど空気が読めないわけじゃないようだ。

「早く行け。」

「わかったでござる。」

トウキは急いで奥の部屋に向かって行った。

「ルナール。敵の数はわかるか。」

調子の悪い俺では敵の数を見誤るかもしれないので、元暗殺者に訊いてみることにした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・同じ気配が二十六。それによくわからない気配が二つある。」

「メイドさんは?」

念のため今度はメイドさんに訊いてみる。

「ルナール様と同意見です。それにしても、この状況で襲撃(しゅうげき)してく

るとなると相手は恐らく――――――――――――――――――――」

「たぶんメタの群れとその黒幕だろうな。」

俺の答えにメイドさんが静かに頷く。

しかし良くわからない気配は三つ感じたんだが――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・来るっ！」

ルナールがそう言った直後――――――――――――――――――――

天井が爆散し複数の気配が降りてきた。

俺はそいつらが着地するのと同時に一体に向かって刀を横に一閃した。

刀はその対象を上と下の二つに切断する。

が、予想通り。

切断された体は液体となって結合し、メタは俺に向かって手に持ったスコップを俺に向かって薙ぎ払ってきた。

「くっ！」

俺は後ろに大きく跳んでその一撃を避ける。

「ふっ！」

一方メイドさんは持っていたスプーン、フォーク、ナイフを降りてきたメタの一体に高速かつ連続で投げつける。

メタはそれを避けようともせずにメイドさんへと突撃して手に持っていたバットを振り下ろす。

「この程度ですか。」

その一撃を後ろに下がって避けたメイドさんは俺の隣に立つ。

「はぁっ！」

ルナールは打撃でメタを攻撃するが、液体の体に衝撃が吸収されてしまいそのままメタはクワ（農具）で反撃する。

「でぁっ！」

ルナールは蹴りでクワをはじき飛ばす。

そのまま一旦距離を取って俺たちを合流したルナール。

「・・・・・・・・こいつらは・・・・・・・・」

「恐らくこの村の住人を模したのでしょう。」

メイドさんの言う通り、メタたちは農民の男の姿をしていた。

俺はまるで村人にに話しかけたら強制戦闘になったという理不尽な

RPGをやっている気分になった。

「・・・・・・・この狭(せま)さでは魔法は使えない。」

「・・・・・・・・・厄介ですね。」

二人の言葉に俺は頷いた。

俺の技もルナールの魔法も範囲が広すぎる。

特に今の俺の状態では使えたとしても制御に自信が無い。

だがここで外に出ればあの三人が狙われる可能性が非常に高い。

トウキを含めたあの三人を見殺しにする。っていう選択肢を取れば簡単に勝てるだろうが・・・・・

そんな選択肢を取れば、人として終わってしまう気がする。

それに外道キャラには外道キャラとしてのルールがある。

だがこのままでは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふぉっふぉっふぉ。お困りの様ですなぁ～。旅の方々。」

民家の玄関が開いた。

「わしが助けてあげましょうかのぉ～？」

そこにはあのじじいがメタを従えて立っていた。

「くそっ！　嵌められたかっ！？」

リューグが紫色の銃を乱射してメタの軍勢を蒸発させていく。

仁たちと別れて調査をしていた時、来た道を塞ぐかのように大量のメタが現れた。

その目的は明らかな時間稼ぎ。だとすれば狙いは――――――――――――――――――――

「まずいですね・・・・・・・・あの状態の仁や子供たちを守りながらではルナールさんもメイドさんも耐えられるとは限りません。」

「口を動かすなら魔法を使えっ！！」

ルギリスが冷静な分析をしているアマネに怒鳴り声を向ける。

「口は悪いがルギリスの言うとおりだ。一気に蹴散らすぞっ！」

リューグは再び引き金を引いた。

第百二話　うわっ、割とやばいかも！（後書き）

じじい再登場。
そして仁たちはピンチです。

第百三話　このっ、クソじじいが！（前書き）

ピンチが続いています。

第百三話　このっ、クソじじいが！

「じじい・・・・・・・・・てめえ何者だ。」

「ただのこの村の村長じゃが？」

俺の凄みを込めた視線にも余裕の顔で受け流すじじい。

メタ共はじじいの周りを、そのうちの一体はじじいのそばでガッチリとガードしていて不意打ちをすることはできそうになかった。

「・・・・・・・・・・あなたが今回の事件の首謀者ですか？」

メイドさんがかばうように俺の前に立ち位置を変えながら尋ねる。

「事件？　事件なんぞ起きていたかのぅ？　少なくともわしは知らんぞ。」

笑いながら言葉を返してくるじじいの声は本当に耳障(みみざわ)りだった。

「・・・・・・・・・・・言い方を変えましょう。この村の住人を皆殺しにしたのはあなたですか。腐れじじい。」

「殺したとは失礼じゃな。みんな栄誉(えいよ)ある実験のための犠牲(ぎせい)になれたんじゃ。今頃、あの世で死者どもに自慢をしているじゃろうて。」

「――――――

俺にとってこの村の住人なんてどうでもいい。

生きていようが死んでいようがどっちだって構わない。

どうせ俺には関係のないことだ。

だがそれは。

無差別に殺しをして良い。という意味では無い。

俺は確かに外道であり、あの姿を見た者はほとんど消してきた。だから俺にはこのクソじじいを非難する権利は無いのかもしれない。

しかしこのクソじじいのように外道からすら外れたゴミを見るのは個人的に我慢できない。

「・・・・クソじじい・・・・・・・・・・・・その言葉が本当かどうか死んで村人たちに会ってきたらどうだ・・・・・・っ！！」

「遠慮しておこうかの。あまりの人気に村人どもにもみくちゃにされたらかなわんしのぅ。」

朗らかに笑うクソじじいをこの場で殺したい衝動に駆られる。

俺は息を大きく吐いて魔力を集中し――――――――――――――――

「そうそう。下手なまねをしおったら奥にいる子供たちの安全は保障できんぞい。」

クソじじいの言葉で集中した魔力が拡散していく。

・・・・・・・安全のために戦えないガキどもを人質に取る。か・・・・・・・・

戦術戦略としては正しいと言える。

相手の弱みにつけ込むのは当然のことだ。

だが――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「仁。今は抑えてください。」

俺に向かって忠告するメイドさん方が今にもクソじじいの首を狙いに行きそうなほどの殺気を放っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

変態の称号を持つルナールも今は暗殺者の無機質な殺意に満ち溢れた目付きをしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・やれやれ。二人が熱くなっているなら俺は冷静にならないとな。

「なにが望みだ。」

俺は深呼吸して気持ちを落ち着けた後、単刀直入にクソじじいに訊いてみた。

わざわざ人質まで取る以上、そこには何らかの目的があるはずだからだ。

「ほっ。威勢が良いだけでなく察しも良い若造じゃのう。」

クソじじいは胸くそ悪くなるニヤけた顔をしながら言葉を続ける。

「実はのう・・・・いまハーピィたちを研究材料にしておるんじゃが、せっかく長をメタモルフォーゼに取り替えたというのにそれに気付いて擬態ハーピィを倒し続ける厄介なハーピィが一匹おるんじゃよ。」

・・・・・・・・・ってことはあの時の長はすでに偽物だったってわけか・・・・・

ということは厄介なハーピィっていうのはたぶん――――――――――

「そこでじゃ。お主らにはそのハーピィの退治を改めてお願いしたい。もちろん逆らえばあの子供たちの命はないぞぅ。」

「・・・・・・・・・・・・・その前にあいつらの無事を確認させろ。」

俺の言葉にクソじじいは少し考えて。

「まあそれくらいなら良いじゃろう。わしは寛大じゃからな。」

クソじじいはそばにいたメタの耳元で何かをつぶやく。

言葉を聞き終えたメタは口を大きく開けた。

そのまま少しすると奥の扉から三体のメタが気絶した三人をそれぞれ一人ずつ持って現れた。

「それ以上動けば子供たちの命は無いぞい。」

俺が三人の生死を確認しようと近づこうとした矢先の言葉だった。

「安心せい、殺してはおらん。今はまだ、のう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・このクソじじいが。

「満足したかのう。それではハーピィ退治に向かってもらうことにするかのう。」

クソじじいは再びそばにいたメタの耳元で何かを命令する。

命令されたメタはもう一度大きく口を開けると外から一体のメタが現れ、形を変えてトウキと同じ姿となった。

「見張りと案内役としてこの者を一緒に行かせるからのう。旅の方々、よろしく頼みますじゃ。」

「・・・・・・・・・・・・皆さん。よろしくお願いします。」

俺たちは誰も何も言わずに民家を出た。

トウキもどきも俺たちの後ろについてくる。

この時、俺は心に決めた。

あのクソじじいには最上の苦痛を味あわせてから殺してやることを。

メイドさんはクソじじいに対する怒りよりも自身の不甲斐無さに対する憤り(いきどお)で心を埋めつくしていた。

子供たちを任された身のメイドが、なんという失態。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・このままでは、済ましません。」

仁が心に決めたようににメイドさんもまたあることを心に決めていた。

第百三話　このっ、クソじじいが！（後書き）

さてこれからどうなるでしょうか。

第百四話　いったい、どういうつもりだ！（前書き）

続きです。

第百四話　いったい、どういうつもりだ！

「こっち。ついてこい。」

トウキもどきの案内の元、俺たちは再び薄暗い森の中を歩いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・・・」

まだ三十分も歩いていないのに俺は息を荒くして刀を杖代わりにして歩いていた。

正直な所、視界は歪み頭痛や吐き気も強くなってきた。

更に体温が上がってきたらしく肌と服にまとわりつく汗がより一層俺の気分を悪くさせる。

そのせいか、いま歩いているところが以前歩いていた森とどこが違うのかすら判断がつかなくなっている。

「・・・・・メタモルフォーゼ様。この辺りで少し休憩いたしませんか。」

俺を気遣ってくれたのか、単にメイドさんが疲れただけなのか。

どちらにしろ、今の俺にとってありがたいメイドさんの休憩の提案にトウキもどきは立ち止まり振り返りながら口を開く。

「スペクトラ。」

・・・

「仁。」

呼ばれてメイドさんの方に顔を向けるとメイドさんに両手で顔の位置を固定された。

「動かないでください。」

そのままメイドさんは俺の額（ひたい）に自分の額をくっつけた。

・・・・・・・・・・・・・・・少し、恥ずかしいな。

「・・・・・・・・・・・・・・・すごい熱です。早く治療しなければ。」

そう言ったメイドさんは俺から離れるとスペクトラに話し掛ける。

「スペクトラ様。急いで仁の治療を行いたいのですが――――――――――」

「少し待つ。」

スペクトラは立ち上がり後ろを振り向いて目を怪しく輝かせた。

「見張られてる。あれを見ろ。」

俺たちに向かって小声でそう言ったスペクトラの視線を追って一本の木の上に視線を移す。

そこには黒い一羽の鳥が俺たちを静かに見つめている姿があった。

その目にはスペクトラと同じ怪しげな光が宿っている。

いや、スペクトラが宿らせたのか・・・・・・・・・？

「あのメタモルフォーゼは他の仲間に連絡が取れなくなった。それにあのメタモルフォーゼには私たちが普通に歩いているようにしか見えない。これで大丈夫。」

スペクトラの意味不明な行動に俺たちの心には疑念がわいていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの鳥はいったい・・・・・」

「あれは監視。あの人は私のことなんて信用していない。」

ルナールの質問に対するスペクトラの回答にますます混乱する俺たちを代表してメイドさんが質問をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あなたもあの腐れじじいに作られたメタモルフォーゼなのではないのですか。」

「確かにそう。でも今の博士は完全に狂ってる。私はあの人を殺すことになろうとも止めなくちゃいけない。」

無感情なはずの瞳には確かな決意の色があった。

「・・・・・・・・・仮にあなたの言葉を信じるとして、何故あの腐れじじいに従っているのですか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの人を止めるためにはそばにいるのが一番だと思った。でもそのせいであの村が襲われてい

ることに気付かなかった。」

スペクトラは空を見つめて。

「・・・・・・・・・・・・止められなかった、私の責任。」

悲しみと後悔を込めた言葉を口にした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それで。私たちにどうしろというつもりですか。」

メイドさんが警戒したまま尋ねる。

「まずは人質を救出する。もしかしたら人質に擬態して人質救出の際、混乱させる作戦を取っているかもしれないから私が行って直接見分ける。」

「それを信用するとでも?」

メイドさんの言葉にスペクトラはルナールを指差して言う。

「お前がついて来て、怪しい動きをしたら私を殺せばいい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わかった。」

ルナールは静かに頷(うなず)く。

その後、スペクトラはメイドさんを指差して再び命令をする。

「お前はそこのもう一人をここで看病していろ。」

「わかりました。」

即答するメイドさん。

「時間が無い。急いで行く。」

スペクトラはそのまま来た道を高速で逆走する。

「なるべく早く戻る。」

俺にそう告げたルナールもスペクトラの後を追うように駆けて行った。

「仁。無理せずに横になって休んでください。」

言われるまでもなく横になろうとしていた俺の視界に空から高速で接近してくる一つの影が映る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うわぁ～・・・・・・・・・・

この展開ってまさかとは思うけどさ～。

影は俺たちの手前で急停止し、その反動で起こった突風が周りの木々を揺らした。

「貴様等っ！！　ルギリスをどこへやったっ！！」

そこには頭に血が昇ってどう見ても話し合いに応じそうにない一人のハーピィがいた。

「一つだけ訊いても良いか。」

「手短に。」

疾走の中、ルナールはスペクトルに疑問を投げかける。

「どうして私たちを助ける？　お前にとって私たちがどうなろうと知ったことではないはずだ。」

スペクトラはしばらく沈黙した後。

「・・・・・・・・・もうあの人のせいで人が死んでいくところは見たくない・・・・・・・・」

とつぶやいた。

第百四話　いったい、どういうつもりだ！（後書き）

人間嫌いのアホ鳥が乱入しました。

第百五話　情けねぇな、おい！（前書き）

頭に血が昇ったルアリスが現れました。

第百五話　情けねぇな、おい！

思ったことは二人は本当に姉妹なんだということ。

まあ要するに。

「人間どもが・・・・・・・・・・っ！！　さてはルギリスを殺したのだなっ！！」

思い込んで熱くなったら人の話を聞こうとしない。

「絶対に許さんぞっ！！！」

ルアリスは翼を大きく広げ、空高く昇っていく。

寝ようとしていた俺は立ちあがろうと手足に力を込めて。

「っ！？」

瞬間、走った激痛に顔を歪めた。

手足だけではない。

体のどこに力を入れても激痛が走る。

おまけに高熱に頭痛や吐き気、腹痛も時間が立つほど悪化している。

痛みを無視すれば動けないことは無いが、長時間の戦闘には耐えられそうにない。

・・・・・・・そういえば昔、似たような状況で生物兵器と戦わされたことがあったっけ・・・・・

あの時は体調不良なのに何をやらせるんだっ！！！　って親に猛抗議したけど、考えてみればあの化け物を潰せばよかっただけだったので現在の状況に比べると随分マシだったんだな・・・・・・・・・・・・

「仁。」

メイドさんは上昇して行くルアリスを眺めてから振り向いて、過去を思い出していた俺に話しかけてきた。

「あなたはここで寝ていてください。アレは私が掃除します。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぶっそうな・・・・・・・・ことは・・・・・・・」

まともにしゃべれない俺をその場に寝かせながらメイドさんが俺の唇に人差し指を当てた。

「わかっています。アレでもルギリス様の姉。殺しはしません。ただ――――――――――――――――」

メイドさんがいつもの食器類を取り出しながら不敵に微笑(ほほえ)んだ。

「空気の読めないアホ鳥には、きちんとした調教が必要のようです。」

メイドさんが言い終わった直後。

ルアリスが急降下しながらこちらに鉤爪(かぎづめ)を向けてきた。。

「死ねぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

・・・・・・・・・・・・・・すっごい物騒(ぶっそう)な鳥だな。

ぼやけた頭でそんなことを考えていると、メイドさんはその一撃をよけ――――――――――――――――

「させませんっ！！」

――――――――――――――――――――ずに蹴りでルアリスの突撃をはじいた。

「なにっ！？」

ルアリスは驚愕(きょうがく)した。

今の一撃は普通ならば避けるであろうことを計算に入れてそのまま後ろにいる仁を狙った一撃だったからだ。

放った言葉からメイドさんはルアリスの狙いを完全に読んで迎撃(げいげき)したのだ。

「ルギリス様がおっしゃっていました。あなたはハーピィの中で誇り高き最強の戦士だと。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

メイドさんの言葉を黙って聞くルアリス。
それとも単に警戒しているだけだろうか。

「・・んっ？」

頭痛がひどくなっていく中で、俺は何となくメイドさんの言葉が気になった。

・・・・・・・・ルギリスが姉について話していた時ってメイドさん一緒にいたっけ・・・・・・・

霞（かすみ）がかった脳内には保管庫に保存したルギリスの泣き顔が浮かび上がったが、他の映像は思い出せない。

「その誇り高い戦士は、病気で動けない人間を先に襲うのですか？」

「っ！？」

ルアリスの顔が赤くなった。

だがそれは単に怒りの色だけではなく自身に対する羞恥（しゅうち）の色が混ざっていた。

「・・良いだろう。その男は後回しだ。先に貴様から殺してやる。」

「できるものなら。」

少しは冷静さを取り戻したらしいルアリスにメイドさんが再び不敵に微笑む。

「場所を移すぞ。その男を巻き込むわけにはいかない。」

「少しお待ちを。」

メイドさんがしゃがみこみ俺の開いた右手に自分の右手を置いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これは・・・・・・・・・」

「万が一の時のための保険です。決して離さないでください。」

俺の右手に何かをしっかりと握らせたメイドさんは立ち上がる。

「あちらの方でやりましょう。」

「好きにするがいい。死に場所くらいは選ばせてやる。」

そのまま走り出したメイドさんにルアリスが飛んでついて行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あー・・・・・・・」

俺は握りしめさせられた右手を眺めながらうめいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・こんなところを魔物にでも襲われたら死ぬな。確実に。

ぼーっとしながら俺はなんとなくそう思った。

「この辺りで良いでしょう。」

メイドさんは森から抜けて広くひらけた丘で立ち止まった。

「・・・・・・・・・・・・正気か？　森の中で闘った方が貴様に有利だろうに。」

背中を向けているメイドさんに向けて言ったルアリスの言葉はもっともだった。

木々のせいで上手く飛べない森の中ではハーピィの行動は制限されてしまう。

だがこの丘は遮蔽物(しゃへいぶつ)が何もない。

むしろ隠れるところが無い以上、制空権を持っているルアリスの方が圧倒的に有利だ。

「闘う？　何を言っているのですか？　ルアリス様。」

疑問の声を上げながらメイドさんはルアリスの方へ振り返る。

「っ！！！！！！！！！」

ルアリスは今まで感じたことのない戦慄（せんりつ）と恐怖を感じた。

メイドさんは構わず続ける。

「時間がありません。処刑を開始しましょう。」

第百五話　情けねぇな、おい！（後書き）

ルアリスはメイドさんを本気にさせたようです・・・・・・・

第百六話　終わるときは、あっさり終わるもんだ！（前書き）

今回は途中からリューグ視点になります。

第百六話　終わるときは、あっさり終わるもんだ！

「・・・はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・」

ぼんやりとして横になったまま目を閉じかけていた俺の視界に蟲が入ってきた。

カミキリムシとイナゴとカマキリを足したような姿の蟲だった。

「・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

上手く呼吸を整えられず、息を荒くしながら動けない俺にカナキリ（前回と同じく名前を合体させた）が近づいてくる。

すぐ近くまで来たカナキリの顔の部分が二つに裂けた。

裂けた顔はどうやら口らしく上下左右に並んだ鋭い牙と中心から伸びる大きな舌には大量の唾液が付着していた。

カナキリは口を広げたままカマキリの部分であるカマの右の方を振り上げ――――――――――――――――――――

俺の胸に勢い良く振り下ろす。

・・・・・・・・・・やれやれ。死ぬ時は本当にあっけなく死ぬんだな・・・・・・

振り下ろされる死のカマがやけにゆっくりに感じながら俺は目を閉じた。

「こっちは終わったぞっ！　そっちはどうだっ！！」

「全て片付いたっ！　村まで引き返すぞっ！」

返ってきた声に俺は頷(うなず)いた後、村に向かって走り出す。

「先に行っているっ！！」

その言葉を残してルギリスは全速力で飛んで行った。

「アマネっ！　俺たちも急ぐぞっ！」

「はい。わかっています。」

走るアマネの速度は俺と同じかそれ以上。

魔女のくせに足が速いことに多少の疑問を感じつつも、今はそんなことを気にしている場合ではないと思い直して俺は走った。

この速度で走れば村まで十分程度でたどり着く。

メタモルフォーゼを掃討するのに思っていた以上に時間がかかってしまったが、あのメイドさんならば例え仁をかばいながらでもなんとかしのいでくれているはずだ。

今もいつ奇襲が来てもおかしくはないし着いた瞬間、戦闘になることも考慮して油断だけはしないよう心掛ける。

やがて村が見えてきた。

俺はメイドさんたちがいるはずの民家を目指そうとして――――――――――――――

横からアマネに飛びつかれ茂(しげ)みの中に押し倒された。

「アマネっ！！　貴様何を――――――――――――――――――――」

「しっ！！」

アマネは手で俺の口を塞いだ。

「静かにしてください。先ほどとは様子が違います。」

アマネは俺の口から手を放すと茂みに隠れたまま村の様子をうかがい始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一刻も早く仁たちの元に向かわなければならなかったが、俺は自分が冷静さを欠いていたという事実を受け止めてアマネと同じように静かに村の様子をうかがった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！？」

そこには表情も生気も感じられない多くの村人たちと下卑た笑みを浮かべる村長、それに村人にさるぐつわを噛まされ縄で両手足を縛

られたトウキと二人の子供たち。

そしてそいつらと真っ向から対峙しているルギリスの姿があった。

「うぅーーーーーーーっ！！　うぅーーーーーーーーーーーーっ！！！」

さるぐつわを噛まされているため言葉にならない声を上げるトウキ。

「貴様等・・・・・・・・・・・・・・・っ！！」

「大人しくしていてもらおうかの。ハーピィよ。」

ルギリスが村長に飛びかかろうとするとトウキたちの首筋にクワなどの農具が突き立てられる。

あの無表情な村人は、恐らく全員がメタモルフォーゼなのだろう。

・・・半ば予想していたことだったがあの村長が黒幕だったわけか・・・・・・

「逆らえばこの娘たちの命はないぞい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・くそっ！！」

ルギリスは悔しそうに下唇を噛んだ。

「ふぉっふぉっふぉっ。安心せい。おぬしもわしの偉大なる研究の実験台になれるのじゃからな。」

村長はそばにいたメタモルフォーゼに何事かをささやくとメタモルフォーゼが口を開いた。

すると村人もどきたちは一斉に投げ縄をルギリスに投げつけた。

「くっ！？」

縄で縛られたルギリスが地面に落ちる。

「貴様・・・・・・・・・私をどうするつもりだっ！！」

村人たちによって体を縛られながらもルギリスは村長を睨みつけて怒声を上げた。

「言ったじゃろう。実験台にすると。と、その前に訊いておかねばならんことがあったのう。」

村長は下卑た笑みを浮かべながらルギリスに近寄った。

「あの二人。おぬしと共にいた者たちはどこにおるのじゃ？」

ルギリスは村長の顔に唾を飛ばした。

「死ねっ！！　生ゴミがっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

唾と罵声を浴びた村長は片手を上げた。

村人もどきどもが四、五人集まりルギリスを連れて近くの民家に入

っていく。

「殺しはせんよ。殺しは、な。」

唾を拭きながらルギリスに向かってそう告げた村長――――――――――生ゴミじじいの顔には再び下卑た笑みが宿った。

「・・・・・・・・・アマネ。トウキたちを救出するぞ。」

俺は短くアマネに告げた。

「・・・・・・リューグ・・・・・・・・・・」

俺が冷静さを失っていないかを心配したのかアマネが声を掛けてきた。

「大丈夫。とは言えないかもしれないがやることはわかりきっている。急ぐぞ。」

「・・・・・・・・・・・・ええ。そうですね。」

俺たちは行動を開始した。

民家に閉じ込められたトウキは必死で縄を外そうともがいた。

自分の未熟さと不甲斐無さのせいで仲間たちを危険にさらしてしまった。

自分自身を呪いながらもトウキはもがき続けた。

第百六話　終わるときは、あっさり終わるもんだ！（後書き）

捕まったルギリスに自身の無力さを呪うトウキ。

次回はメイドさん視点からスタートします。

第百七話　ここは、どこだ！（前書き）

メイドさんはSですが、あくまでもメイドです。

第百七話　ここは、どこだ！

「くぅっ！？」

「まだあきらめませんか。」

満身創痍の状態になったルアリス様は無様に地面に倒れ伏しながら私を睨みつけられます。

「時間がありません。一刻も早く仁の元に戻らなければならないのですから。」

右手で懐から取り出した銀のお皿をルアリス様へ投げました。

「くそっ！！」

無様に右に転がりながらお皿を避けるルアリス様。

銀のお皿はそのまま回転しながら飛んで行き、その先の岩、大木を切り倒しながらどこかへ飛んで行ってしまいました。

それにしても――――――――――――――――――――――――

「甘いですね。」

ルアリス様が避けた先には先ほどお皿の陰に隠して左手で投げておいた十七本のフォークがあります。

「なんだとっ！？」

驚愕の表情を浮かべるルアリス様の身体に満遍なくフォークが突き刺さりました。

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・あぁっ・・・・・！！」

ルアリス様は苦しげな悲鳴を上げて地面に倒れ伏します。

・・・まったく・・・・・・・・時間だけ無駄にかけさせまして・・・・・・・・・ルギリス様の姉で無かったら瞬殺して差し上げたのですが・・・・・・・・

私はここに来た時の道を逆走するために振り向きました。

保険は渡しておきましたが、果たして間に合うかどうか・・・・・・

「それでは私は行きます。ルアリス様はそこで無様に倒れていてください。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ま・・・・・・・・・て・・・・・・・」

歩き出そうとする私にルアリス様が声を掛けてきました。

「なんでしょうか。これ以上、余計な時間をかけさせるつもりならば本当に殺しますよ。」

「一つだけ・・・・・・・・確認させてほしい・・・・・・・」

息も絶(た)え！絶(だ)えのルアリス様はゆっくりと口を動かします。

「・・・・・・・ルギリスは・・・・・・・・無事なのか・・・・・・・」

「わかりません。ですが仮に敵に捕まっていたとしても必ず助け出します。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そう・・・・・・・・・・か・・・・」

そのまま安心したように気を失ったルアリス様。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

急がなければならない。

それはわかっているのに――――――――――――――――――――

「・・・・『メイドたる者、常に奉仕の心を忘れてはならない。』・・・・・・・・」

私はルアリス様に駆け寄って治療を始めました。

「起きろ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ・・・・・・・・・・・・・？」

かけられた言葉に俺はゆっくりと目を開けた。

「ここは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

そのまま起き上がって周りを見る。

そこは奇妙な空間だった。

空を含めて周囲は銀色一色でできており、ところどころに様々な色と形のオブジェが浮遊している。

剣や盾もあれば何に使うのかよくわからない物もあった。

地面は土ともコンクリートとも違う物質でできている。

というより俺が立っている場所はそもそも地面では無く、ここも何かのオブジェの上のようだ。

触ってみたが少なくとも俺にはこのオブジェの構成物質はわからなかった。

地上の物ではない。だとすると答えは一つ。

・・・・・・・・・もっと物騒で不気味な場所だと思っていたのだが、ここはたぶん・・・・・・・・・

「地獄か。」

「自分が逝く場所を躊躇なく地獄と断言できるその心はどうかと思うぞ。」

何気なくつぶやいた言葉に反応する言葉が一つ。

背後に気配を感じた俺は振り向きざまに回し蹴りを叩き込む。

が――――――――――――――――

「いきなり攻撃してくるか。相変わらず礼儀を知らない奴だな。」

回し蹴りは空を切っただけだった。

そこには確かに仮面をつけた――――――――――――――――がいるというのに。

「それにお前はまだ死んではいない。あの瞬間、お前とあの蟲の時間だけを止めてお前の精神をここに連れてきたのだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

仮面をつけた――――――――――――――――の言葉に俺は目を閉じる前までのことを思い出した。

「そういえば俺はまともに動けなかったはずなのになんで普通に動けるんだ?」

「体の時間が止まっているからな、それよりあまり時間が無いから一言だけ言わせてもらう。」

仮面をつけた――――――――――――――――がそう言ったと同時に空間が鳴動(めいどう)した。

「こうやって直接助けてやれる回数はそう多くはない。だから父親のようにあまり無茶をするな。」

――――――――――――――――――――――――――――っ！？

空間の鳴動が強くなっていく中、俺は今の言葉に反応して叫ぶ。

「お前はいったい誰だっ！！　親父たちのことを知っているのかっ！？」

「誰だ、か。いつも・・・・・・とは言わないが転移してから大抵そばにいるのだがな。・・・・・・まっ、もう少し扱いの方を考えてほしいとは思っているが。」

「なにっ！？」

「ルナールやメイドさんに礼を言っておけ。この場所での時間稼ぎはあの二人のおかげで意味を持ったのだからな。」

「何を言って――――――――――――――――――」

「時間だ。今度はゆっくり話したいものだ。」

瞬間、空間の全てが白一色に染まっていった――――――――――――――――――――

「っ！？」

目を開けるとそこには振り下ろされるカマがあった。

と同時に体全身の激痛や頭痛なども復活する。

あの野郎っ！！　助かってねえじゃねえかぁっ！！

カマは俺の胸に突き刺さ――――――

第百七話　ここは、どこだ！（後書き）

幼馴染み再登場。

ではまた次回お会いしましょう。

第百八話　怖いな、おい！（前書き）

蟲は中ボスみたいなポジションのはずですが、相手にならないようです。

第百八話　怖いな、おい！

「仁っ！！」

倒れたままの俺の視界に空からもう一人の幼馴染みが降ってきた。

視線だけを動かして上を見るとそこには巨大な白い鳥がいた。

・・・・・・・・・・・・その姿を見て不〇鳥ラー〇アを連想した俺に罪はないと思う。

巨大な鳥から次々と降りてくる勇者メンバーたち。

「仁さんっ！！」

「マスターっ！！」

その中にはアイリスやフレスの姿もあった。

・・・・・・・・・そういえばあいつらはリリィに押し付けたんだっけっか・・・・・・・

ということはリリィもどこかに――――――――――――――――――

視線を動かして探そうとするが、それに意味はなかったとすぐに悟ることになった。

腕を切られたカナキリが目に怒りの色をにじませて理香を睨みつけ

た瞬間。

「灼滅(しゃくめつ)の紅炎(こうえん)よっ！！　愚者に裁きの鉄槌をっ！！　炎葬狂想曲(ブレイズラプソディ)っ！！」

荒れ狂う紅蓮の炎がカナキリを包み込んだ。

カナキリは一瞬たりとも炎に耐えられず灰となって完全に消滅した。

「・・・仁・・・・・・・・・・・・・・・・・」

理香の後ろからリリィが姿を現す。

深紅の瞳には怒りの色がにじんでいた。

・・・・・・・・・・・・・・うわぁ～・・・・・・・・やっぱりフレスたちを押し付けたことを怒っているのかな・・・・・・・・・・

「仁っ！！！」

近くで聞こえた声に俺は視線を動かした。

理香が慌てながら俺のそばに駆け寄りしゃがみ込んで俺の額に手を当てた。

ひどい高熱に理香は泣きそうな顔になる。

「馬鹿っ！！　無茶ばっかりしてっ！！　馬鹿っ！！　馬鹿馬鹿馬鹿っ！！！」

「・・・

「・・・・・・・・・・・・・仁・・・・・・・・・・」

他の奴らとは違い、無表情なままゆっくりとした足取りで俺に近づくリリィ。

「誰にやられましたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・じ・・・・・・・・・・・く・・・・・・・」

自業自得と言おうとしたのだがやはり言葉にできない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな俺を無表情で見下ろすリリィ。

「しかし、あの化け物はいったい・・・・・・・・・・・・・・・」

「事情は私の方から説明します。」

ラフィの疑問に答える声が一つ。

倒れている俺の死角から声はしたため、俺はそちらを見ることができなかったが誰だかは声でわかった。

「間に合ってくれましたか。皆様。」

近づいてきたメイドさんは俺の横に持っていたものを転がした。

「・・・・ぐ・・・・・・・・ぅぅ・・・・・・・・・・」

そこには全身ボロボロになったルアリスの姿があった。

・・・・・・・・・・・・物騒なことはしないと言ったと思ったんだが・・・・・・

「・・・・メイドさん。一体何があったんですか。」

「はい。実は――――――――――――――――――」

東間の問いにメイドさんは淡々と説明を始めた。

俺の体調が徐々に悪くなっていったこと、村のこと、人質が取られていること、ハーピィたちのこと、じじいのこと、メタモルフォーゼのこと――――――――――――――――――

メイドさんの話が終わると沈黙が辺りを包んだ。

しばらくの間、誰もが口を閉ざしていた。

解決したと思っていた事件が実はまだ終わっていなかったことにショックを受けたのだろう。

「・・・・・・・・・メイドさん・・・・・・・・・」

不意に理香が口を開いた。

「なんでしょうか。」

「・・・・・・・・・・・・その老人が仁をこんな目に合わせたの・・

・・・・・？」

「はい。」

っておいっ。あのクソじじいをかばうつもりなんか世界が終わってもねえが、俺の体調が悪くなったのは俺自身の所為だぞ。

「・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・ふふふ・・・・・・・・・」

そんな中、一人だけ理香の恐怖に脅えていない人物がいた。

「理香。悪いと思いますが、そのご老人は私(わたくし)が始末いたしますわ。」

理香がリリィの方へ振り向く。

「ええ。一緒に殺(ヤ)りましょう。リリィ。」

「はい。ウフフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・恐怖が二重になった瞬間だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・魔王の継承者を怒らせるということがどういうことか。そのご老人には骨身に刻まなければならないようですわ・・・・・・・・・」

最後のリリィのつぶやきだけは聞き取れた者はこの場にいなかった。

第百八話　怖いな、おい！（後書き）

理香はツンデレです。ヤンデレではありません。

第百九話　現在、治療中だ！（前書き）

今回はルナール視点です。

第百九話　現在、治療中だ！

「・・・・・・・・・・・・・止まる。」

あと少しで村に着くというところでスペクトラが手で私を制しながら木を背に様子をうかがい始めた。

私も近くの木に背中を預けて村の様子を確認する。

村では村人が普段通りの生活（実際に見たことは無いが、たぶんそうなのだろう。）を行っていた。

農業、家事、遊ぶ子供たち。

全員から一切の感情が抜け落ちていることを除けばどこにでもある村の風景と言えるだろう。

「・・・・・・・・・・トウキたちは捕まった時の民家に？」

「可能性は低い。」

私の問いかけにスペクトラが首を横に振った。

確かに、閉じ込めるのなら私たちに居場所がわかっているところでは意味が無い。

急いで居場所を見つけて救出しなければ・・・・・・・・・・・っ！！

私は仁が安静にしているであろう方向を見た。

仁に早く治ってもらいたい。

治ってからトウキたちを救出したご褒美に〇〇〇を？？？して△△△した後、あの道具を使って？？？してもらって――――――――――――――――

「どうして幸せそうな顔？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！」

恍惚とした妄想に浸っていた私をスペクトラの声が現実に引き戻した。

危ない危ない・・・・・・・・ここで失敗したら全てが台無し。

仁の期待に応えるためにも私は成功させなければならない。

一念発起した後、私は右手で黒塗りのナイフを取り出して。

「「動くな。」」

後ろから近づいて来ていた男の首筋に突き付けた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

右手に紫色の銃を持ってこちらの額に向ける男の外見はリューグそのものだった。

しかし相手は擬態能力を持ったメタモルフォーゼ。
油断はできない。
「ルナール。この人はメタモルフォーゼじゃない。」
スペクトラはリューグを見ながら断言した。
スペクトラがメタモルフォーゼを見分けられるというのならその情報は真実だろう。
しかし問題はそれだけではない。
「・・・・・・・・・そこのトウキもどきと一緒にいるお前は本物のルナールか？」
私はメタモルフォーゼであるスペクトラと共にいる。
リューグが私のことを疑うのは当然のことだろう。
私は黒塗りのナイフで自分の左手の指を浅く切った。
一瞬の痛みの後、血が垂れ始める。
「・・・・・・・・・・・・・・・なるほど。確かな証明だ。」
リューグは銃を降ろした。
「それだけでは足りませんよリューグ。私の質問に答えてもらいます。」

リューグの後ろの木陰からアマネが姿を現した。

「スリーサイズは？」

「上からはちじゅ――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・そうか。」

話しを聞き終えたリューグは目を閉じた。

「フーエは?」

「・・・・・・・・・・・・・・・訊いても返事が無い。」

私の問いに短く返答すると、リューグは顎に手を当て解決策を考え始めたようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・仁は大丈夫なのですか?」

「わからない。だからできるだけ急いで助けに行かないと・・・・・・っ!」

アマネたちのおかげでどこにトウキたちが捕まっているのかもわかった。

後は救出するための手段を考えるだけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・まずいな。」

リューグが静かに言った。

「スペクトラ。お前はこれ以上、奴のせいで人が死ぬのを止めるためにここにいるんだな?」

スペクトラが頷く。

「お前が離反することを前提にお前を仁たちと行動を共にさせたのなら、それはつまり奴にとってお前がここにいては困る理由があったということだ。」

リューグはトウキたちが捕まっている小屋を見やる。

「お前に実験を止められること。それが奴のお前にいてもらっては困る理由だと考えられる。」

私はリューグが言わんとしていることの意味を考える。

「人質は生かしてこそ機能する。だが奴がもしも人質を人質として扱うつもりが無かったとしたら？」

・・・・・・・・・・・・・っ！？

「人質は一人で十分。あるいはメタで偽装すればいいとでも考えていたとしたら？」

「まさか・・・・・・・っ！？　トウキたちを実験台に・・・・・・・っ！？」

私の言葉にリューグが険しい表情で頷く。

「本来なら夜襲をかけようと思ったが、時間をかけさせることが狙いだとしたらそんな余裕はない。すぐにでも助け出すぞ。」

「方法はどうするつもりですか？」

アマネの質問にリューグは即答で返す。

「一人が囮となって敵を引きつけて、残りが人質を救出する。単調な作戦だが今は考えているだけの時間が無い。」

「囮役は誰？」

スペクトラの質問に対しても即答で返すリューグ。

「この中で一番囮に適しているのは俺だ。だから俺が囮役をやる。異論は無いな？」

リューグの言葉に私たち全員が頷いた。

「よし、行くぞっ！！」

私たちは人質救出のための行動を開始した。

「・・・・・・・・・・強情な奴じゃのう。早くしゃべってしまえば楽になれるというのに。」

村長の視線の先には複数の村人もどきに囲まれた、生きているのか死んでいるのかわからないほどボロボロになったルギリスの姿があった。

「まあ良い。そろそろこちらも実験を始めるとするかのう。」

下卑た笑い声をあげながら村長は実験道具を取りに行った。

第百九話　現在、治療中だ！（後書き）

今回はここまでです。

ではまた次回。

第百十話　変わらず、瀕死だ！（前書き）

題名通り、仁は瀕死のままです。

第百十話　変わらず、瀕死だ！

「・・・・メア・・リ・・・・・・・・じゅう・・・・ぶん・・・・だ・・・・ありが・・・・とう・・・・」

「えっ？　でっ、ですが――――――――――――――――――――――――――――――」

まだ全然治っていないことを理解しているため動揺するメアリをとりあえず無視して俺は無理やり起きあがった。

どうにかしゃべれる程度には回復したが身体全身の激痛や頭痛、吐き気などはほとんどそのままだ。

意識だけははっきりしているのがありがたかったが、正直な所、回復魔法に何の意味があったのか疑問に思うがそこは考えても仕方が無い。

「仁っ！？　なんで起きあがってるのよっ！？」

そのまま立ちあがろうとする俺に理香が驚くような責めるような声を張り上げた。

「仁・・・・・・後は私たちに任せて大人しく寝ていなさい。これは命令です。」

「・・・・・・・あい・・・にく・・・ギルド・・・・・・マスターに・・・ぜっ・・・たい・・・ふくじゅう・・・しな・・・・ければ・・・ならな・・・・いっ！！　・・・・理由・・・は・・・・・な

い・・・はずだ・・・・・・っ！！」

立ちあがりながら話したせいで、激痛に言葉がとぎれとぎれになってしまった。

「マスターっ！！　マスターが死んじゃったら誰が僕をあの女から守ってくれるんですかっ！！」

フレス・・・・・・・・・お前は良くも悪くも変わっていないな・・・・・・

フレスの態度にある意味感心していると、東間が俺の右手を肩にまわして俺を支えた。

ちなみにフレスの発言については黙殺された。

「仁・・・・・・・・・君のことだからどうせ放っておいても無茶をするんだろう？」

・・・・・・・・・流石は腐れ縁といったところか。

「・・・・・・・あの・・・・・クソじじい・・・・・には・・・・・・借りが・・・・ある・・・・・・その体に・・・・叩き・・・・返してやらないと・・・・・ならない・・・・・巨大な・・・・・借りが・・・な・・・・・・・・・っ！！」

俺の怒りを悟ったのか、東間は無言で頷いた。

「・・・・・今のあなたになにができるというのですか。」

周りの奴らが黙っている中で、メイドさんだけは俺を非難するように言ってきた。

「人質がいる上に足手まといまで連れて行く必要などありません。はっきり言って邪魔です。」

「・・・・・・・・そうですわ。仁。今のあなたは足手まとい以外の何物でもありませんわ。大人しく休んでいなさい。」

メイドさんやリリィから浴びせられる非難の言葉を俺は薄く笑って返した。

「・・・・・・・・・なにが可笑しいのですか。私が強制的に眠らせますよ。」

冷たいメイドさんの視線が俺を貫く中、理香が東間と反対側の手を自分の肩にまわして俺を支える。

「理香っ！？」

「・・・・・・・・・理香様。どういうつもりですか。」

リリィとメイドさんの驚きの声に頭を冷やしたのか冷静な状態で理香が答える。

「リリィ。メイドさん。この馬鹿は言っても絶対に聞かないわ。それどころか置いて行ったら自分の体がどんな状態でも無茶をして私たちの元に駆けつけてくると思うわ。だから例え足手まといでも、そばで監視している方が私たちとしても安心できるの。」

理香が俺の手を握る力を上げる。

「それに、仁をこんな目に合わせたその老害には仁に土下座をして謝ってもらわないといけないわ。」

「・・・・・・そうですね。私を含め少なくとも煮え湯を飲まされた皆様があのゴミクズじじいにそれなりの報復をせねば気が済まないはずです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。」

メイドさんがＯＫを出した後、リリィが俺の目を見つめながら口を開く。

「この件が終わったら大人しく治療を受けることを誓いなさい。」

そのやたらと威厳のある言葉に。

「・・・・・・・ちか・・・・・って・・・・・やる・・・・・・」

俺はどうにか返した。

リリィはしばらくの間、俺の目を見続けていたがやがて一回頷き視線を外した。

「では参りましょうか、皆様。」

メイドさんの一言で俺たちはあの巨大な鳥の方へ向かった。

「・・・・・・・仁さん・・・・・・・・・・」

「・・・・・マスター・・・・・・・・・」

と、不安そうに俺を見つめる二人の子供がいた。

アイリスとフレスだ。

俺は視線で東間に一旦手を離すように伝える。

東間は頷くと肩にまわした俺の手を開放した。

「・・・・・しん・・・・ぱい・・・・・・する・・な・・・・・・」

誰がどう聞いても心配するであろう声で俺はアイリスの頭を撫でた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい。」

アイリスの表情は晴れなかったが、そのまま振り向いて巨大な鳥の方へ駆けていく。

「マスター・・・・・・・・・僕には？」

そう言いながら頭を差し出してくるフレスに拳骨一発。

「痛っ！？　非道いですよマスタ～っ！！」

「・・・・・・・ちょう・・・・・・し・・・に・・・・・・のる・・・な・・・・・」

フレスは頬を膨らませながら巨大な鳥の方へ向かっていく。

「仁・・・・・・・あれでもフレスは君のことを心配していたんだよ？」

再び俺の腕をかたにまわしながら東間が言ってきた。

「・・・・・・・・・わ・・・・・かっ・・・・・・て・・・・・・・い・・・・る・・・・・」

俺は東間にそれだけ返答すると支えられながらゆっくりと歩き始めた。

リリィたちにはああ言ったが、実は理香の内心は決して穏やかではなかった。

腕から伝わってくる熱と汗は、明らかに仁の体が弱っていることを示していたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿・・・・・・・・仁の大馬鹿・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・そんな馬鹿と一緒にいるお前らも十分過ぎるほど大馬鹿だ。

理香の耳にはそんな声が届いたような気がした。

第百十話　変わらず、瀕死だ！（後書き）

仁は現在、足手まといとなっているようです。

第百十一話　どうしてやろうかな、あのクソじじい！（前書き）

途中でリューグ視点になります。

第百十一話　どうしてやろうかな、あのクソじじい！

俺たちは不○鳥ラー○ア（名前を聞きたかったがそんな場合ではない）に乗ってあの村を目指している。

何か魔力の障壁でも張ってあるのか飛んでいるのに風は無かった。

それでも俺に気を使ったのかとてもゆっくり羽ばたきながら飛んでいる。

ちなみに刀は背中にヒモでくくりつけてある。

「仁・・・・・座っていなくて大丈夫かい？」

「・・・・・・・いま・・・・・・座ったら・・・・・・・・立つ・・のが・・・・・・・たい・・・・へんに・・なる・・・・・」

相変わらずしゃべるのも辛い状態だが、言葉通り下手に座ると今度は立てなくなる可能性もあった。

東間もそれ以上何も言わなかった。

ゆっくりとはいえ、この速度ならあと十分以内には到着することができることが予測できたので、今の内に俺はどうやってあのクソじじいを地獄に叩き落とすかを考えていた。

「それじゃ、派手に暴れますかっ！」

右手に赤い銃、左手に紫色の銃を持って俺は村の中へ特攻した。

「くたばれっ！」

叫びと共に両手の銃を乱射して一気に十数体の村人もどきを蒸発させる。

村人もどきは特に驚きもせず――――――――――――――――あるいは『驚く』という感情が無いのか、無表情のまま俺に襲いかかってきた。

「ふっ！」

正面から振り下ろされたクワやスコップを後ろに下がって避けながら正面と左右の村人もどきを撃ち抜く。

何体かの村人もどきが溶けて崩れ落ちた。かと思えばそのまま液体の体で俺の足に絡(から)みつこうとする。

「おっとっ！」

俺が上空に跳んで液体を避けると、狙いすましたかのように三体の村人もどきがボウガンを放った。

飛んできた矢を俺は左手の銃をしまいながらフーエを抜いて矢をはじき落とす。

そのまま右手の銃で三体の村人もどきを撃ち抜く。

『後ろですっ！！』

フーエの叫び声に反射的に反応して振り向かずに後ろに数発の銃弾を撃ち込む。

蒸発する音が二つ聞こえたことから判断するに二体の村人もどきが後ろにいたのだろうか。

俺はフーエを鞘に納めて今度は緑色の銃を取り出す。

そのまま両手の銃を地面に向けて途中で弾道が重なり合うように撃つ。

炎と風の魔力弾は空中でぶつかり、炎の旋風を巻き起こして村人もどきを薙ぎ払った。

地面に着地した俺は警戒しながら周囲を見渡す。

・・・視認できた村人もどきは全て片づけたはずだが・・・・・・・・・

「ふぉっふぉっふぉっ。お見事ですじゃ、旅の方。」

拍手と共に一軒の民家から生ゴミじじいがそばに一体のメタモルフォーゼを連れて現れた。

「久しぶり。というほどの時間は立っていないか？　生ゴミじじい。」

「ふむ。やはりあのハーピィが捕まった時にどこかで見ておった様

じゃな。」

生ゴミじじいはそう言うと値踏みでもするかのように俺の体を見始めた。

俺は警告無しに生ゴミじじいの眉間に向かって数発の銃弾を叩き込む。

だが――――――――――――――――――――――――

「なかなか面白い武器を扱いなさるな。旅の方。」

銃弾はじじに当たる前に横にいたメタモルフォーゼの液体化した腕によって阻まれた。

しかもメタモルフォーゼの腕は蒸発しておらず、銃弾だけが消えていた。

「じゃが見ての通り、わしの最高傑作の前では無意味じゃ。無駄な抵抗はやめた方が良いぞ？」

・・・・・・なるほど。あのメタモルフォーゼは特別製ってことか。

「無駄かどうかはやってみないとわからないぞ。」

俺は両手の銃をメタモルフォーゼに向かって構える。

「無駄じゃよ。こちらには人質がいることを忘れておるのか？　囮役を買って出たつもりじゃろうがお主の仲間も今頃はあの迷宮をさ

迷っているころじゃろう。」

・・・・・・・トラップが仕掛けてあったか。

「わしは奴らが弱るまで待って、弱ったところを捕まえれば良いだけじゃしのぅ。」

「・・・・・どうかな。あいつらはそう簡単に捕まるほど弱くは無いぞ。」

「捕まえるのが無理なら殺せば良い。別に死体でもわしは構わんわい。」

下卑た笑いを浮かべる生ゴミじじいに俺は再び数発の銃弾を撃ち込む。

だがやはりその銃弾も隣のメタモルフォーゼに防がれた。

「・・・・・・・・わしの言葉が理解できんのかのぅ？　無駄じゃと言ったのじゃ。」

「俺は物わかりは良い方だ。無駄だと思っていないからこそ撃ったんだが。」

「・・・・・・・・・・大人しく捕まるのなら、手荒なまねはしなくてすんだのにのぅ。」

生ゴミじじいは隣のメタモルフォーゼに何事かをささやく。

メタモルフォーゼが一回頷くと――――――――――――――――

―――――

俺の目の前にいた。

「っ！？」

俺は咄嗟に大きく後ろに跳んで銃を構えるが。

「いないっ！？」

瞬間、背中に強い衝撃が走った。

地面に叩きつけられながらもなんとか受け身を取って転がりながら立ち上がる俺とは対照的に静かに地面に着地するメタモルフォーゼ。

「・・・・・・・・・なるほど・・・・・・」

生ゴミじじいの妙な自信も納得がいった。

「もう一度言おう。それはわしの最高傑作じゃ。」

生ゴミじじいは変わらず下卑た笑みを浮かべながら言い放った。

ルナールたちは廊下を走っていた。

途中で見つけた部屋は全て似たような作りになっていた。

「・・・・・・・・・・幻覚系のトラップか、空間に直接作用する類の魔法の様です。解除しなければ先に進めそうもありません。」

アマネの解析ではどこかに解除のための仕掛けがあるそうなので、ルナールたちは部屋を一つ一つ調べつつ走り続けた。

第百十一話　どうしてやろうかな、あのクソじじい！（後書き）

リューグ苦戦中。

次回に続きます。

第百十二話　さっさと、着かねえかな！（前書き）

リューグ視点の続きです。

戦闘中に考え事をして傷を負うのは仁もリューグも変わらないようです。

第百十二話　さっさと、着かねえかな！

俺の目の前でメタモルフォーゼ（強）の左半身が溶けて消える。
残った右半身の手が液体化し巨大な鞭のようにしなりながら高速で縦に振るわれた。
俺はその鞭を銃を乱発しながら撃ち落とそうとするも――――――――――――――――――――――――――――――――
「くそっ！！」
液体の鞭に触れた銃弾は先ほどと同じようにかき消えた。
俺は右に跳んで鞭をかわすと、鞭はそのまま地面を切り裂いた。
・・・・・・どうやら鞭のようにしなっているものの、打撃武器というより斬撃武器の系統みたいだな・・・・・・・・
俺はメタモルフォーゼ（強）の右半身に狙いを定めて――――――――――――――――――――――――――――――――
「っ！？」
直感に身を任せて大きく後ろに跳んだ。
刹那、地面から俺が立っていた横一直線上に大きな氷柱（つらら）が幾重（いくえ）にも伸びた。

「ふぉっふぉっふぉっ。なかなかやりおるわい。」

生ゴミじじいの言葉は耳からシャットアウトすることにして、俺は氷柱に数発の銃弾を撃ち込む。

予想通り銃弾は氷柱に当たった瞬間消えてしまった。

・・・・・・どうやらこいつの体の仕組みを理解しない限り勝機は無さそうだ。

氷柱が再び空気に溶けて崩れ落ちる。

「押してダメなら引いてみろっ！　てなっ！！」

俺は両手の銃を青と緑の銃に持ち替えた。

そのまま弾道が重なるように撃つと二つの弾丸は吹雪となって荒れ狂った。

吹雪は氷柱を飲み込み完全に凍てつかせる。

「なんじゃとっ！？」

雑音を無視して氷柱が動かないことを確認した俺は残った右半身を見やる。

相変わらず無表情だが心なしか俺のことを感心しているように見える。

・・・・・・・・最高傑作だから感情があるのか・・・・・？　い

や、そういえばあの洋館のメタモルフォーゼは感情があったはずだが・・・・・・？

疑問に思う俺に対してメタモルフォーゼ（強）は右半身の手をこちらに向いた。

「ぐっ！？」

瞬間、右手が俺を刺し貫いた。

反射で体をそらしたおかげで致命傷はまぬがれたが、わき腹に深い傷を負ってしまった。

戦闘中に考え事をするなんて馬鹿か俺はっ！！

内心で自分自身を叱咤（しった）しながら俺は突き刺さっている右手に至近距離で銃弾を撃ち込むが。

「・・・・・・やはりか。」

放たれた銃弾はかき消えてしまった。

どうやら俺の推測は当たっていたようだ。

メタモルフォーゼ（強）が右手を元の形に戻す。

俺は出血を抑えるために青い銃で傷口を撃つ。

傷口が凍りついた後に、俺は先ほどと同じように銃を撃って吹雪を巻き起こす。

メタモルフォーゼ（強）は吹雪に巻き込まれる前に地面に溶けて消えた。

俺はどこから奇襲を掛けられても対処できるように全周囲への警戒を強める。

「なにをやっとるっ！！　さっさと仕留めんかっ！！」

時折入ってくる雑音に惑わされない様に神経を集中させる。

と、氷柱が次々と粉々に砕け落ちた。

音に反応した俺は氷柱の方向に銃を向け――――――――――――

「なっ！？」

誰かに足を払われた。

咄嗟に下を見るとメタモルフォーゼ（強）の一部が見えた。

しまったっ！？　油断したっ！！

体勢を立て直すことができないまま俺は地面に倒れた。

その間に氷柱は全て砕けて一か所に集まる。

やられる・・・・・・・・・っ！！

俺は迫り来るメタモルフォーゼ（強）の右手（あるいは左手か両手か）に死を予感させながら急いで顔を上げて――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・なに・・・？」

メタモルフォーゼはその場に立ったままだった。

いや、ただ単に立っていただけではなく――――――――――――

「素晴らしい。お見事です。私ともあろうものが久々に熱くなってしまいました。」

賞賛の言葉と共に惜しみない拍手を俺に送ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は生ゴミじじいに視線を移すと口を大きく開けながら固まっていた。

「――――――――――――――――――――なっ、何をやっとるっ！！

殺せぇっ！！　早く殺すのじゃぁっ！！！」

だがメタモルフォーゼ（強）は生ゴミじじいの命令を無視した。

「ですがいくら傷口を塞ぐためとはいえ、そのままでは凍傷によって細胞が壊死してしまいます。早急に治療を行った方が良いでしょう。」

むしろ存在そのものを無視していると言って良い態度を取り続けている。

「ええぃっ！！　気でも狂ったかっ！！　わしは殺せと言っておるのじゃっ！！！」

「――――――――――――――――――――――――五月蝿いですね。」

メタモルフォーゼ（強）はわずらわしそうに生ゴミじじいに視線を向け。

「少し黙っていてください。」

一瞬で背後に立ちその首をへし折った。

「見えました。」

メイドさんの言葉の方向に俺たちは視線を移した。

・・・・・・いよいよか。覚悟しろよ、クソじじい。

俺は気合だけは十分に身体全身に行き渡らせた。

第百十二話　さっさと、着かねえかな！（後書き）

次回は仁視点に戻ります。

第百十三話　クソじじい、待ってろよ！（前書き）

仁たちが村に到着しました。

第百十三話　クソじじい、待ってろよ！

俺たちを乗せた不〇鳥ラー〇アは村の入口に周りの木をなぎ倒しながら着地した。

俺たちは一人ずつ降りて行き、俺は東間と理香に支えられながら一緒に降りた。

着地の際、結構な衝撃と痛みが俺の体を突き抜けたが男の子なのでここは我慢。

「仁、大丈夫？」

「・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・」

心配そうに尋ねてくる理香に適当に返事をして俺はあのクソじじいに支配された村の様子を確認する。

出迎えたのは物音一つしない無音の空間。

・・・・・・おかしい、この鳥がここに向かっていたことにあのクソじじいが気付かないはずが無い。

良く見るとあちこちの家が破損したり傷がついたりしており、何者かが争った形跡が残されているのがわかった。

誰かがメタを殲滅したのか？

だが人質が取られている以上、リューグたちがメタを殲滅したとは

考えにくい。

・・・・・・・ならばメタを殲滅できるほどの力を持った第三者がここに来たという可能性が考えられる・・・・・・・

「・・・・・・・様子が変です。」

メイドさんもそのことに気付いたらしく、振り返ってラフィたちに告げる。

「ここから先は私と仁たち、それにリリィ様の三人で行きます。他の皆様は万が一のため、ここで脱出路の確保をお願いいたします。」

「うなぁ～っ！　リャナも東間と一緒に行きたいのだ～っ！！」

「わがままを言っちゃ駄目だよ、リャナ。」

騒ぎ出すリャナをいさめるアイリス。

・・・・・・いま気づいたんだがこの二人よく似てるな。

性格は全然似ていなさそうだが。

「リャナ様。申し訳ありませんがあまり大人数で進めば、それだけ咄嗟の行動に遅れが出る危険性があります。それに万が一のための脱出路の確保は戦いにおいて重要なことです。ここは我慢していただけませんでしょうか。」

「・・・・・・・・・・うなぁ～・・・・・・」

リャナは一回うなってから黙り込んだ。
完全に、とまではいかないが一応納得してくれたようだ。
「それでは皆様、行きましょう。」
メイドさんを先頭に俺たちはゆっくりと歩き始めた。

村を警戒しながら歩く俺たちだったが、今のところ何かが襲ってくるような気配は無い。
・・・・・・・ここに明らかに弱って足手まといになっている俺がいるにもかかわらずだ。
ゆっくりと歩を進めつつ改めて村の様子を確認すると、ところどころに焦げ跡が残っていた。
メタの弱点が物理攻撃以外だと知っている者の仕業か・・・・・・・？
いや、メタと相対してあの液体の体で物理攻撃が効かないことを知れば、誰でも魔法による攻撃を思いつくか・・・・・・・
「――――――――――――――――――――止まってください。」
メイドさんが手で俺たちを制した。
「メイドさん、どうしたんですか？」

東間の質問に対する返答は無かったので、メイドさんの視線を追って行くと――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・なんですの、これは・・・・・・・」

俺たち全員の心の声をリリィが代弁した。

そこにあったのは色彩鮮やか、というよりもカラフル過ぎて逆に不気味と言える巨大で歪（いびつ）な形の家だった。

以前来た時には複数の民家があったはずの場所にいつの間にか建っている。

「いらっしゃいませ。『夢の家』へようこそ。」

声に反応したメイドさんとリリィが前に出る。

そこにはあのクソじじいのそばで従っていたメタがいた。

のだが、なぜか服が執事服に変わっており、シルクハットをかぶっている。

「お客様は五名様ですね。この家は『不思議の国（ワンダーランド）』へ繋がっています。ごゆっくりお楽しみください。」

「・・・・・・・・・・お断りします。」

メイドさんが更に一歩、距離を詰める。

「私たちは腐れじじいの抹殺と捕まった皆様の救出のために来ました。遊んでいる時間はありません。」

「ならばなおさらこの家の中へ入られた方がよろしいと思われます。」

執事メタがそう言って指を鳴らした瞬間。

屋敷の上空に映像が浮かび上がった。

そこにいたのは――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・りゅー・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・っ！？」

暗い部屋の中でボロボロで倒れているルギリスを守りながら黒い獣の群れと戦っているリューグの姿があった。

「ちなみに他の皆様もこの家の中におられます。今はまだ大丈夫の様ですが、時期に命の危険にさらされると思われ――――――――――――」

「灼刃（しゃくじん）よっ！！　切り裂けっ！！　炎刃破（バーンスラッシュ）っ！！」

リリィの放った炎の刃はそのまま執事メタのいる方向へ飛んで行く。

しかし執事メタは刃が届く一瞬前に消えてしまった。

「皆様のご様子を拝見いたしましたところ、制限時間は三十分程度と考えてよろしいかと。では悪夢のひとときをご堪能（たんのう）ください。」

その声だけを残して。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ・・・・・・・・・」

トウキは幼い姉弟を連れて石でできた廊下を走っていた。

まるでどこかの巨大な迷路にでも迷い込んでしまったように感じられるが、そんなことを気にしている場合では無かったし、この状況のおかげでアレから逃げのびていられる。

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――」

武器は無い。頼れる人もいない。

だがなんとしてもこの二人だけは守りぬいて見せる。

トウキは決心に身を固めながら二人を連れて見つからない様に出口を探し続けた。

第百十三話　クソじじい、待ってろよ！（後書き）

次回に続きます。

第百十四話　嘘だろ、っていうか嘘って言ってくれ！（前書き）

途中で東間視点になります。

第百十四話　嘘だろ、っていうか嘘って言ってくれ！

ここにきて訳のわからない展開になっているが、迷っている時間は無かったので俺たちは『夢の家』とやらに入ることにした。

家の中に入ると、薄暗い部屋の中に赤、青、黄、緑、白の五つの扉が並んでいた。

順当に考えれば一人一つの扉を選べ。といったところだろう。

「・・・・・・手を・・・・・はな・・・せ・・・・・」

束間は黙って俺から離れたのだが、理香はなかなか俺から離れようとしない。

「・・・・・理香・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙り込んだままうつむいている理香。

・・・・・・・・・・・・・・・そんなに俺のことが信用できないのか、こいつは。

時間をかけていられないので俺は一瞬だけ力を入れて理香を振り払って正面の赤い扉に突撃した。

「仁っ！？」

後ろから聞こえた叫び声は扉の先に入った途端、聞こえなくなった。

赤い扉の先は左右の壁に一定の距離で光る鉱石の様なものが埋め込まれ、白い床の上に赤いカーペットが敷かれた一本道の廊下だった。

振り向くと壁があるだけで赤い扉はどこにもなかった。

・・・・・・・・・・・・・どうやら一方通行のようだ。

俺は変わらない頭痛や吐き気、全身の痛みに耐えながら刀を杖代わりにして廊下を進む。

しばらく歩くと、何もないところから突然赤い大きな扉が出現した。

・・・・・・『不思議の国』はいったいどんなおもてなしをしてくれるのかな。

俺は力の無い笑みを浮かべながら扉を開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あっ・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の声に反応してこちらを向いた扉の先の人物と目が合った。

瞬間、急いで扉を閉めた。

ははぁ、つまり先に進みたければあいつを倒せと。

・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は回れ右をしてそのまま来た道を逆走する。

「どこへ行くつもりだ。」

と、扉が開き向こう側から伸びてきた手が俺を掴み扉の中へ引きずり込んだ。

・・・・・・・・・・相変わらずすごい力だ。万全の状態でもあらがえなかったかもな・・・・・

「久しいな、カゲツキジン。」

俺は現実逃避の為に周りに視線を向けた。

氷に閉ざされた洞窟、気温は軽くマイナス三十度を超えている。

絶えず吹きすさぶ凍てつく風は今の俺にはかなり辛い。

「まさかこのようなところで会えるとは思っていなかった。」

俺もだよ。この戦闘狂（バトルジャンキー）。

現実からは逃げられそうもなかったので俺は目の前にいる人物を見る。

装着者の動きを殺さない様に造られている漆黒の鎧と明らかにその体とは不釣り合いな大きな漆黒の槍。

流れるような銀色の髪と澄んだ緑色の瞳。

って緑色？　前は赤かったような・・・・・・・・・・

「さて。」

俺の声に出さない心の疑問など気付くはずもなく、軽い言葉と共に振るわれた槍の一撃が俺の眼前に迫っていた。

「ここは・・・・・・・・・・」

仁が赤い扉の中に入った直後、赤い扉は消えてしまった。

少しの間、みんなの時間が止まったかのように動きを止めた後に得体のしれない気配を三人から感じた。

勝手なことをした仁に対する怒りと心配で女性陣の心に灯っていはいけない火が灯ったかと思ったら、三人とも急いで別々の扉に入っていってしまった。

・・・・・このままだと仁の身が危ないっ！！

自業自得とはいえ、幼馴染みを見殺しにするなど僕にはできなかったので急いで仁と合流して弁護の準備をしなければ・・・・・・・・・・っ！！！

余った青い扉の先には左右の壁に一定の距離で光る鉱石の様なものが埋め込まれ、白い床の上に青いカーペットが敷かれた一本道の廊下に出た。

振り向いてもそこには壁があるだけで青い扉は無い。

先に進むしかないと理解した僕がしばらく歩くと大きな青い扉があった。

中に入った僕を待ちうけていたのはサンマやイワシなど見たことのある魚に良く似ているたくさんの魚が泳いでいたり、コンブやワカメなどに良く似た見たことのある海藻（かいそう）が砂の上揺れていたりするどこかの海底だった。

海底と言っても呼吸はできるし浮力によって動きが制限されることは無い。

どういう仕組みなのか気にはなったけど、僕は先に進むことにした。

早く行かないと仁の命が（女性陣の手によって）危機に・・・・・・っ！！

焦りながら海底を走る僕の足元の砂から触手が飛び出してきた。

「くっ！？」

僕は咄嗟に左に跳んで触手を避けた。

剣を抜きながら触手の方に体を向けると、砂の中から巨大なタコが姿を現した。

・・・・・・・・こいつを倒さないと先には進めないってことかな。

僕は剣を構えて巨大ダコに突撃した。

「はぁ、はぁ、くそっ、なんて数だ・・・・・・・・・・・っ!!」

薄暗い部屋の中には数十体の黒い獣。

倒しても倒しても次々と沸いて出てくる。

すでに数百頭の黒い獣を倒したリューグは終わりの見えない戦いに悪態づいた。

「・・・・・・・・・・リューグ・・・・・・・・・私のことは放って・・・・逃げろ・・・・・」

「次に馬鹿なことを言ったら後で殴るからなっ!!」

倒れたまま弱気な発言をするルギリスに怒鳴ってから、リューグは再び襲いかかってくる黒い獣を撃ち殺した。

第百十四話　嘘だろ、っていうか嘘って言ってくれ！（後書き）

ヴェンリス再登場。

いま闘ったら仁は確実に死にます。

第百十五話　今回、俺の出番は無い！（前書き）

題名通りです。

第百十五話　今回、俺の出番は無い！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふむ。」

緑色の扉の中に入った私は左右の（以下略。）、緑色の大きな扉の中に入りました。

中に入った私を待ちうけていたのは数えきれない熱帯植物で構成されたとても蒸し暑いジャングルでした。

湿気が多い上に気温も高くては体が汗でベトベトになってしまいます。

メイドとしてそのような姿を皆様にさらすわけには参りません。

「・・・・・・・・先に進みましょうか。」

それに勝手なことをしてまたピンチになっているだろう仁を、今度こそきっちり調教しなおすべきだと私は考えていました。

「そういうわけで私は先を急いでいます。来るのなら早めに来てください。」

言った私の視線の先には巨大な紺色のカエルがいました。

巨大なカエルは真っ赤な瞳で私を睨みつけ、咆哮を上げると私に向かって跳び上がり――――――――――――――――――

着地する前にジャングルの中から飛び出したとても太いツルに体を

縛り上げられ、引きずり込まれるように消えて行きました。

肉を引き裂き噛みちぎる音がしばらくの間続いたかと思うと、カエルの骨だけがこちらに向かって飛んできました。

その後、鳴動と共にジャングルの中から何かが姿を現しました。

緑色の大きな幹の頂点に大きな一輪の白い花を咲かせ、いくつもの幹と同じ色の枝やツルを張り巡らせた巨大な木。

そして幹の中央には唾液を垂れ流しにしている大きな口と並んだ牙。

「なるほど、食肉植物の類いでしたか。」

私の言葉を聞き取ったのか、食肉植物は私に向かってツルを伸ばしました。

単調なその動きには知性など感じさせなかったので、本能だけで動いていることが予測できました。

私はツルを避けながらナイフでツルを切り裂きますが、そこはやはり植物というべきでしょうか切り裂かれた傷口から新たなツルが生えて襲って来ました。

やはり植物には炎が一番ということでしょうか。

しかし私は炎系の魔法など覚えていませんし、たいまつなどの道具も持ち合わせてはいません。

避けながら考えていると私はあることを思い付きました。

そうです、アレを行えば・・・・・・・・・・・・っ！

私は考えを実行するためにツルを避けながら少しずつ間合いを詰め始めました。

白い扉を選んだ私は（以下略。）白い大きな扉の中に入りましたわ。

・・・・・私や理香、それにメイドさんに対して心配ばかりかける仁に一言いってやらなければ気が済みませんでしたし、それにギルドメンバーでもある仁を見捨てるわけにはまいりませんもの。

「ここは・・・・・・・・・・・・・・・？」

入った先にはどこにも光源がない暗い部屋。

私は目を凝らしてなんとか部屋の様子を見ようと――――――――――――――――――――

「おや、珍しい。こんなところにお客さんが来るとは。」

後ろから何の気配もなく掛けられた声に戦慄しながら私は振り向き。

「そう生き急ぐな、何もしなければこちらも危害を加えるつもりはない。」

振り向いた先には誰の姿もなく、後ろから手で頬を撫でられる感触に嫌悪よりも恐怖を感じさせられましたの・・・・・・・・・

「おっと。良く見たら『楽園の悪夢（パラダイスナイトメア）』のギルドマスターじゃないか。一体どうやってこんなところに入ってきたんだ？」

「・・・・・・・・・あなたに言う必要はありませんわ。」

その言葉に男は適当な相づちで返して、私をじっくりと観察するように上から下まで見続けましたわ。

そんな視線にさらされながらも私は嫌悪では無く恐怖しか感じませんでしたわ。

・・・・・・・・ただ一つだけ、この男について私にもわかることがありましたわ。

それはこの男が。

「・・・・・・・・・合格かな。流石は現魔王の娘といったところか。」

人の形をしているだけの何かだということ――――――――――

――――――

「・・・・・・・・・・私のことを良く知っていますわね。」

「いろいろな情報網があってね。大体のことは知っていると思う。それはともかく一つ質問しても良いか。」

男は私の顔の前に手の平を拡げて敵意も殺意もない自然体のままで口を開き――――――――――

「今すぐに死ぬのともう少し生き延びるのとどっちが良い？」

「くっ・・・・・・・・ここは一体・・・・・・・・・・っ！？」

「わかりません・・・・・とにかく急いでトウキたちを見つけないと・・・・・・・・」

焦るルナールと流石に余裕が無いのか顔から微笑が消えているアマネ、それに無表情のスペクトラがトウキたちを探している間に変貌は起こった。

彼女たちは長時間いたら確実に目が疲れるであろう様々な色が塗られた子供の落書きの様な迷路の中をさまよい続けていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・次はこっち。急ぐ。」

手がかりも方法もない彼女たちはいま、数撃ち当るという方法で先に進もうとしていた。

第百十五話　今回、俺の出番は無い！（後書き）

リリィもピンチになりました。

第百十六話　出番、よこせ！（前書き）

今回も仁の出番はありません。

第百十六話　出番、よこせ！

ｓｉｄｅトウキ

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――」

笑い声が聞こえる方向とは反対の方向にそれがしは二人の子供の手を引いて逃げていたでござる。

音が反響しているため、意識を集中させておかなければ見つかってしまう。

・・・・それがしには二人の子供を守りながら戦える――――――――――師匠のような強さはないでござる・・・・・・・・

ゆえにそれがしは逃げることのみに専念していたのでござるが――――――――――――――――――――

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ――――――――――――――――――――」

「はぁ、はぁ、はぁ、あぅっ！？」

息を荒くして走っていた子供たちの内、弟の方が足をもつらせてこけてしまった。

「大丈夫でござるかっ！！」

それがしが立ち止まり足をみてみるとひざがすりむけてしまっていたでござる。

「うっ、ぅぅぅぅぅ――――――――――――――――」

「ダメっ！　泣いちゃダメよっ！！」

泣きだしそうになっている弟を姉がしかりつける。

そうしている間にも笑い声はどんどん近寄ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・それがしは覚悟を決めたでござる。

「二人とも、ここで待っていてほしいでござる。」

「えっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「トウキお姉ちゃん・・・・・・・・・・・・・・・・？」

呆けている二人をそのままにそれがしは笑い声の方へ向かって歩いて行く。

「無茶だよっ！！　だって武器もないしトウキお姉ちゃん役立たずだもんっ！！」

・・・・・・・・・・・・子供に役立たず呼ばわりされたことに精神的なショックを隠しきれなかったでござるが、なんとか平静を装う

でござる。

「心配いらないでござる。なんとかしてみせるでござる。」

師匠なら絶対に何とかして見せるはずでござる。

・・・・・・・・・・それに師匠なら、絶対に子供を見捨てて逃げるなんて非道なことは――――――

ｓｉｄｅ理香

「そこでじっとしていて。」

私は人質だと聞かされた三人の子供を確認すると、不気味な笑い声の方向に視線を向けた。

「くひゃ、くひゃひゃひゃ

慌てて返事をするトウキに視線を向けずに私は天井だけを睨み続けた。

「二人を連れて少し離れて。ただ、あまり離れ過ぎると守れなくなっちゃうからその辺りのことも考えておいて。」

「はいでござるっ！」

トウキは怪我をして動けなくなっている男の子を背負って女の子と共に少し離れる。

トウキが動き終わる直前、気配が私の真上に来たかと思うとその部分の天井が崩れ落ちた。

私は後ろに跳んで落ちてきた瓦礫を避けるとソイツが落ちてきた。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――」

心臓――――――――――――――――――――

公になった気分ね。」

私は槍を構えた。

「悪いけど、あの馬鹿の顔を一発叩かなきゃいけないの。さっさと決めさせてもらうわよ。」

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――」

理解しているのかしていないのかわからないその化け物に私は斬りかかった。

ｓｉｄｅ???

魔王城の一室、一人の子供が空中に浮いているいくつものモニターを見ていた。

「・・・

「ねぇ、マルス。今回のゲームは当たり二つと外れ二つ、それに大外れが一つだったよね。」

「左様でございます。」

「それじゃあどうしてリリィ様の選んだ部屋が見られないの？」

「・・・・・・・・・・・・？　おかしいですね。リリィ様はリューグ殿の場所へ転移したはずですが・・・・・・・・・・・・？」

「それじゃあルール違反だよ。ゲームじゃないよ。」

「申し訳ございません。どうやら手違いがあった模様で・・・・・・・・・・」

「しょうがないな～、もう・・・・・・・・」

子供は何もない空中からパソコンのキーボードの様な物を取りだした。

「ルール変更。こっちのミスだから勇者たちに有利になるようにしてあげよっと。」

第百十六話　出番、よこせ！（後書き）

ハーピィ編もようやく終盤になって来ました。

第百十七話　毒殺か・・・・・、ぐふっ！（前書き）

理香が化け物と戦闘開始しました。

第百十七話　毒殺か・・・・・、ぐふっ！

「気分はどうだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

とてつもなく寒い上に氷に包まれた洞窟の内部で周囲にはヴェンリスが打倒したのであろう巨大な魔物の死骸（骨しか残っていなかったので、たぶん食ったのだろう。）が転がっているこの状況下で。

現在、俺はなにかの動物の毛皮にくるまりながらたき火で暖を取っている。

「熱の方は・・・・・・・・・全然下がっていないな。」

ヴェンリスが俺の額（ひたい）に手を当てて自分の熱と比べる。

・・・・・・・・・・・でかい槍を振り回している割には意外と細い手だな・・・・・・

そんなどうでもいいことを考えられるくらいには回復した様だ。

「待っていろ、いま体が温まるものを作ってやる。」

そういうとヴェンリスはなにやら作業を始めた。

どうしてこんな状況下にいるかというと、発端は俺がヴェンリスの攻撃を避けたことから始まる。

ヴェンリスにとって、その初撃は挨拶にもならないほどとても軽い一撃だったらしい

だが俺の体がガタガタだったために完全には避け切れず腕に傷を負ってしまった。

それを見たヴェンリスが不審げに俺を問い詰めたので、軽く事情を説明したら血相を変えて火をおこし動物の毛皮を俺に渡して――

そして今に至るわけだ。

どうして俺の看病をしているのか訊いてみると、「私は全力で貴様と闘いたい。だから貴様が全力を出せないのでは何の意味もない。」とのことだ。

ゲームや少年マンガなどでは珍しくもない行動だが、実際にそれをやる奴は初めて見た。

流石は武人とでも言えばいいのだろうか・・・・・・・・・・・・・・・

「できたぞ。しょうが湯だ、飲め。」

俺が先ほどまでのことを振り返っているとヴェンリスが湯気を立てているカップを差し出してきた。

・・・・・・・・・・・・・この世界にしょうががあることに対してツッコミを入れていいのだろうか・・・・・・・・・・

「これを飲んでゆっくり休めば体調も元通りになっているはずだ。」

言外にそして早く私と闘えと言っているようにしか見えないぞ・・・・・・・

口に出しても出さなくても結果は変わらないのでその言葉を飲み込んで、俺は差し出されたカップを手に取り。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ!?」

生命の危機を予感した。

これを飲むのは非常に危険だ。と俺の生存本能が警告している。

「冷める前にさっさと飲め。」

・・・・・・・・・・・・・そういえばフレスが食事でひどい目にあったと嘆(なげ)いていたな・・・・・・・・

覚悟を決めて俺はしょうが湯を一気に喉に流し込み――――――――――――――――――――――――――――――

俺が覚えているのはそこまでだった。

ｓｉｄｅ理香

「はぁっ!!」

気合の入った叫びと共に、私は勢い良く化け物に槍を突き刺した。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――――――――」

しかし傷口から血が吹き出るのも構わず化け物は狂ったように笑い続けている。

私は噴き出る血に嫌な予感を覚え、返り血を浴びない様に槍を引き抜いて後ろに下がった。

床を濡らした血から赤い人型が這い出て来る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ほんと、この前の洋館といい気持ち悪いのばかりが出てくるわね・・・・・・・・・」

ホラー映画も続けて似たようなものを見させられたら飽きがくるわ・・・・・・・・

私が呆れている間にも人型は立ち上がりゆっくりと歩を進め始めた。

見た所、ここは古い遺跡の中。

風の流れを感じないことから、密室状態になっている可能性も否定できない。

なら炎系の魔法は駄目、他にも遺跡自体に強い衝撃を与える魔法は使うべきではない。

なら、と私は槍を地面に突き立てる。

「氷よっ！！　不浄なるものを包みこめっ！！　霊氷縛（アイスバインド）っ！！」

唱えた魔法は槍の先から地面を通って人型と化け物を凍らせた。

氷系はあまり使ったことは無いので、成功したことに私は安堵の息を漏らす。

だが――――――――――――――――――――――――

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――」

氷の中で笑い声は響き続ける。

いや、さっきまでよりも私を嘲笑の響きが濃くなっている気がする。

そう思った次の瞬間、化け物を包んでいた氷に亀裂が入り氷だけが粉々に砕け散る。

私が砕けた氷の破片にひるんでいると、化け物の笑い声を上げている顔以外の顔が一斉に口を開けて。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

初めて笑い声以外を発した化け物の叫びを聞いた私の視界を血の様に真っ赤な光が覆い尽くし――――――――――――――――

炸裂した。

ｓｉｄｅ東間

「くそっ！！　まだ着かないのかっ！！」

七枚目の扉をクリアした僕は苛立ちの言葉を吐いた。

繰り返される巨大な海産物との戦いに対する飽きと先を急いでいるという焦りが僕を不機嫌にさせていた。

「早く仁と合流しないと・・・・・・・・・・・・っ！！」

八枚目の扉に手を掛けたその時。

僕の視界が歪んだ。

第百十七話　毒殺か・・・・・、ぐふっ！（後書き）

今回の敵も例によって物理攻撃が効きません。

ああ、それと活動報告の方のミニコーナー（というよりもただ単にメイドさんがリリィで遊んでいるだけ）も更新？　しましたので、よろしければそちらの方も・・・・・・・・・・・・

ではまた次回。

第百十八話　返事が無い、俺は気絶しているようだ！（前書き）

東間が理香と合流します。

第百十八話　返事が無い、俺は気絶しているようだ！

ｓｉｄｅ東間

「・・・・・・・・・・・・・ここは・・・・・・？」

突如、視界が歪んだと思ったら僕は先ほどまでとはまるで違う場所に立っていた。

土煙りのせいで良く見えないが、どうやら古い遺跡の中にいるようだ。

先に進んだということかな・・・・・・・・・・・・・・・・・？

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――」

僕が注意深く辺りを見渡していると、不気味な笑い声が聞こえてきた。

僕は笑い声がした方向に剣を構えて叫ぶ。

「そこにいるのは誰だっ！！　姿を見せろっ！！」

「っ！？　東間っ！！」

僕の声に反応したのは不気味な笑い声では無く、良く知っている幼馴染みの声だった。

「理香っ！！　そこにいるのかっ！！」

確認するために僕が走り出そうとすると。

「風よっ！！　流れよっ！！　風起(ウインディ)っ！！」

強い風に飛ばされない様に僕は踏み留まっていると、風は土煙りを吹き飛ばしてこの場の視界を晴らす。

晴れた視界の中に移るのは見知った顔の幼馴染みと幼い二人の子供をかばうように立ちながら震えている少女、そして人の心臓の形をしている無数の顔が張り付いた異形の化け物だった。

「理香、無事で良かっ――――――――――――――――――――――――――――――――」

僕は理香の右腕から流れ落ちるかなりの量の血を見て途中で言葉を詰まらせた。

「東間、気を付けて。こいつ結構厄介な化け物みたい。」

「理香・・・・・・・・・・・・・・・・その腕は・・・・・・・・・」

「ああ、これ？　ちょっと油断しちゃっただけよ。大丈夫、折れてはいないから。」

両手で槍を構え直しながら理香は苦笑する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理香にここまでの傷を負わせる相手か・・・・・・・

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――」

笑い声を上げている老人の顔の目が僕に向いた。

「新しい実験台が来おったっ！！　愉快じゃっ！！　実に愉快じゃっ！！」

・・・・・・・・・・笑い声だけかと思ったらちゃんとしゃべれるんだ。

「随分と醜悪（しゅうあく）な姿になられましたね。腐れじじい。」

「「メイドさんっ！？」」

僕と理香は突然姿を現したメイドさんに対して驚きの声を上げた。

「くひゃひゃひゃひゃ、また一人実験台が来おったかっ！！」

狂った笑い声を上げる化け物にメイドさんは侮蔑（ぶべつ）の視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・その姿、まるであなたの心をそのまま具現化したような醜い容姿ですね。お似合いですよ、腐れじじい。」

メイドさんの態度に僕と理香はすぐに悟った。

あの老人の顔が仁をあんな目に合わせた老害。

どういう経緯でこんな姿になったのかはわからないけど、同情するに値しない存在なんだということに――――――――――――――

「メイドさん殿っ！！」

少女がメイドさんに呼び掛けた。

「トウキ様、もうしばらくお待ちください。」

トウキ・・・・・・・・・・・・確か仁の弟子だったっけ。

なるほど。仁の弟子だって言うからどんな子か心配したけど、身を張って子供を守れる優しい子なんだ。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――」

僕が安心していると再び不気味な笑い声を上げる化け物。

メイドさんは侮蔑の表情のまま黙って銀色のお皿を取り出すが。

「待ってメイドさんっ！　この化け物に物理攻撃は通用しないのっ！」

理香の声でメイドさんはお皿を懐に戻す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つくづく面倒な害虫ですね。まだグロゴールやゾンビの方が需要があります。」

・・・・・・・・・・・・・・需要？　いったいなんの需要なんだろうか・・・・・・・・？

「なんて考えている場合じゃなさそうだ。理香っ！　魔法は通用するのかっ！」

「さっき氷魔法を使って通用したから、魔法は大丈夫だと思うっ！」

僕が尋ねると理香は肯定の言葉で返してきた。

僕は精神を集中させて魔力を溜める。

この化け物を一撃で葬れるぐらいの威力の魔法を使うために。

「本当なら存分に苦しめてから消滅させたいところですがまあ良しとしましょう。」

僕の思考を読んだのか、軽い口調で恐ろしいことを口にするメイドさんに多少の戦慄を覚えつつ僕は魔力を溜め続ける。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――――――」

狂ったように笑い続ける化け物は、僕が魔力を溜めて無防備になっているというのに何もしてこない。

・・・・・・・・・・・・・・不気味だが、いまは一気にやるしかないっ！

「光よっ！！　愚かなるものに死せる運命（さだめ）をっ！！　光滅流麟（ホーリーバースト）っ！

僕の放った光の膜が化け物を包み込んだ。

「！」

ｓｉｄｅリリィ

「な～るほど。そういうことか。」

私の目の前で男が納得したように頷いた。

「それならまあ仕方ないな。ちゃんと送り返してやろう。」

困惑する私の視界が歪み、次の瞬間には目の前から男の姿がかき消えた。

第百十八話　返事が無い、俺は気絶しているようだ！（後書き）

メイドさんも合流。

そしてリリィが転送されました。

第百十九話　馬鹿が、勝手に死にかけやがって！（前書き）

仁が怒ります。

第百十九話　馬鹿が、勝手に死にかけやがって！

ｓｉｄｅ東間

化け物を包んだ光が徐々に消えていく中で、僕は息を吐いた。

僕が放った魔法は光の膜の中に敵を閉じ込め、そのまま光ごと敵を消滅させるという光系魔法では最上位の攻撃力をほこる魔法だ。

メアリ曰く、この魔法は倒せこそはしないものの魔王にすら大きなダメージを与えることができるらしい。

その分、この魔法は大量の魔力を消費する上に制御が難しいので僕は一度使ったら魔力が底を突いてしまう。

でも当たって倒せなかった敵は今のところいない。

光が完全に消えると、そこにはもう化け物の姿は無かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・終わったでござるか・・・・・・？」

不安げな表情で尋ねてくる少女――――――――――――――――――確かトウキって名前だっけ――――――――――――――――――に僕は笑顔で――――――――――――――――――

「東間様っ！！　後ろですっ！！」

メイドさんの叫び声で後ろを振り向こうとした時。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・？」

呆けた声を口から漏らした僕の腹を地面から突き出た青い触手の様なものが貫いていた。

「東間っ！？」

理香の叫び声が響き渡るとほぼ同時に僕は口から血を吐きだした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

んだ・・・・・・・・・？」

周りの風景は見たこともない遺跡の様なところ。

どうしてここにいるのかを考えるため、意識を失う前のことを思い出そうとすると――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

脳が俺の意志に反して、思い出すなと必死に警告を出している。

俺自身、嫌な予感しかしなかったのでここに来た経緯は思い出さないことにした。

ともかく、まずは起き上ってからだ。

「よっ・・・・・・・・・・・・・・・っと・・・・・・・・・」

ゆっくりと体を起こして刀を杖代わりにして立ちあがる。

力を入れるとまだ結構な痛みが走るが、前よりはずっとマシになっている。

「・・・・・・・・・・・まずは現状確認からだな。」

ここにどうやって来たかは無視することにしても、ここがどこなのかがわからなければどうしようもない。

俺が最初の一歩を踏み出そうと――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「東間っ！？」

腐れ縁その二のただならぬ悲鳴のような叫び声を聞いた俺は、自分の体調のことなど無視して全力で走った。

そのおかげで目撃することができた。

少し離れた場所に理香とメイドさん、トウキと子供たち。

そして地面から突き出た青い触手の様な物に貫かれている馬鹿の姿を。

青い触手は地面へと引っ込み、馬鹿の体が支えを失った様に地面に倒れ伏す。

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

「「仁っ！？」」

俺は全速力で貫かれている馬鹿の元へと駆け寄った。

「師匠っ！？」

聞こえてきた言葉を全て無視して俺は東間の外傷と心音や呼吸を確認する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

心臓は動いているし、呼吸もしている。

だが出血はひどく、肺に傷ができていたとしたら気管に血液が詰まって呼吸できなくなる可能性もある。

「理香、メイドさん、治療を手伝ってくれ。」

静かに言った俺の言葉に二人は無言で頷いた。

「くひゃ、くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――――――」

響き渡る不気味な笑い声など俺にとってはどうでもよかったので無視してメイドさんと共に治療を始める。

背後で地面から複数の何かが出てきた気配がした。

「死んだ死んだっ!!　これで実験ができるぞいっ!!」

今のところ応急処置は上手くいっているが余談は許さない状況だ。

・・・・・・・・・・・・まったく。いつも俺に心配を掛けさせるなって言っているくせに自分はこれかよ。

「次は誰じゃっ!!　そこの女かっ!!　それともそこの子供かっ!!　みんなみんなわしの実験材料じゃわいっ!!」

「仁。」

止血が終わった段階でメイドさんが声を掛けてきた。

「後は私たちがやります。あの耳障りな雑音を消してきてください。」

俺は改めて東間の様子を確認する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・この馬鹿がそう簡単に死ぬはずはない、か・・・・・・・・・・・・・・・

俺は立ちあがって後ろを振り向く。

そこには先頭にあのクソじじいの顔を張りつかせた青い人型と血の涙を流している白い顔の張り付いた無数の赤い人型がいた。

「次は貴様が死ねぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

青い触手と赤い触手が一斉に俺に襲いかかってきた。

ｓｉｄｅトウキ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・それがしはただ黙って見ていたでござる・・・・・・

・

ボロボロだったはずの師匠が普通に行動している。

もちろんそれにも驚いたがそれだけではないでござる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あんな師匠、初めて見たでござる。」

グロテクスな化け物も、すでに恐怖の対象には成りえなかった。

あそこまで静かに、怒り狂った師匠を見てしまった以上――

第百十九話　馬鹿が、勝手に死にかけやがって！（後書き）

仁を怒らせるのはメイドさんを怒らせるのと同等ぐらいのタブーです。

第百二十話　トラウマか、えぐってやるよ！（前書き）

今回、仁は相手を精神的に追い詰めます。（書き慣れていないので下手くそに感じるかもしれませんが・・・・・）

一応、そういうのが苦手な人はあまりこの話を読むのはお勧めしませんのでご了承ください。

第百二十話　トラウマか、えぐってやるよ！

本当はあの姿になろうと思ったが、理香が見ていることを思い出して俺はギリギリのところで思い留まった。

あの姿にはならず、この青いゴミを処分する。

俺は迫り来る触手を無視して静かに刀を構えた。

まずは青いゴミ以外を消してからだ。

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！！　死ね死ね死ね死ねーーーーーーーーーーーーっ！！！」

俺は触手に向かって刀を横に一閃する。

「刹滅牙（せつめつが）っ！！」

もちろん必殺技の叫びを忘れずに。

一閃した刀から漆黒の衝撃波が放たれ、空間ごと触手とゴミどもを薙ぎ払った。

漆黒の衝撃波が消えると残ったのは消された腕を再生させている青いゴミだけだった。

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃーーーーーーーーーーーー

青いゴミがこの状況を理解しているのかしていないのかはどちらでもいい。

だが狂気のせいで痛みも苦しみも無いまま消したりはしない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

東間のことはもう心配はしていない。

メイドさんが任せろと言った以上、あいつは絶対に助かるはずだ。

なら俺のすべきことはこいつを正気に戻した上でじっくりといたぶり殺すこと。

だがどうすればこの青いゴミを正気に戻せるだろうか・・・・・・・・・・

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！！　わしの実験は成功したんじゃっ！！　これで妻と娘を蘇らせることができるっ！！」

・・・・・・うわ～・・・・・・・・・・・・流石はゴミ。わかりやすいヒントだ。

「・・・・・・・・・・成功などしていない。」

「くひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――――――――――――――ひゃぁ？」

狂気の笑いを上げ続けていた声に初めて疑問の様な声が混じった。

「青いゴミ、お前の実験は失敗したんだ。妻も娘も戻ってきたりはしない。絶対にな。」

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――」

再び狂った笑い声を上げ――――――――――――――――――――

「でたらめを言うなーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

怒り狂った表情になって触手をしならせながら襲いかかってきたので俺は刀を地面に突き刺し。

「衝破練空（しょうはれんくう）っ！！」

裂帛（れっぱく）の気合のこもった素手による神速の一撃を空気に当て、それによって発生した烈風が青いゴミを吹き飛ばして壁に叩きつけた。

「嘘じゃない、お前の妻と娘は死んだんだ。他ならないお前の手によって。」

「――――――――――――――――――――――――――――くひゃ？」

「お前は自分の実験を止めようとした妻を殺して実験の材料にし、更にその光景を目撃した娘も殺して実験の材料にしたんだ。」

もちろん全て嘘だが反応からして当たらずとも遠からずか、あるいは記憶が混乱しているのか。

どちらにしてもトラウマの様だから利用しない手は無い。

「――――――――――――――――――――嘘じゃ。」

短くつぶやく青いゴミに俺は言葉を続ける。

「お前は自分を止めようとしたのが妻だと、その光景を目撃したのが娘だと気付かずに殺して実験台にしたんだ。後になって二人がいなくなっていることに気付いたお前は二人を生き返られようと必死に研究を続けた。」

俺はできる限り皮肉を込めた笑いを浮かべて。

「全てはお前自身が招いたことだ。妻も娘もさぞお前を恨みながら死んでいったことだろうな。」

「嘘じゃ嘘じゃ嘘じゃ嘘じゃウソジャウソジャウソジャ――――――――――――――――――――」

狂ったように同じ言葉を繰り返す青いゴミの目に徐々に後悔と懺悔の色が浮かび上がってきた。

・・・・・・・・・もうすぐか。

俺は一旦深呼吸をしてから再び口を開いた。

「俺には今にも見えてきそうだ。お前に対する恨みと憎しみの言葉を吐きながらお前をゴミを見るような目で蔑(さげす)む二人の姿が。」

そもそも二人の外見など知らないがそこは黙っておこう。

「わっ、わしは・・・・・・・わしは・・・・・・・・・っ！！」

「実際に現場を目撃したわけではないが、いったいどんな表情で死んでいったんだろうなぁ？　裏切られたことに対する憎しみの表情か？　それとも家族に殺されるという悲しみと絶望の表情か？」

「うっ、うおぉぉぉ・・・・・・・・・・・・・・・」

頭を抱えながら悲しみと苦しみに満ち溢れたうめき声を上げる青いゴミに更なる追撃をかける。

「その挙げ句に罪の無い人々を殺しまわって意味の無い実験を繰り返して、死んだ妻や娘はお前のことを心の底から軽蔑して、いやむしろもうお前のことなど関心を持たない他人だと思って無視しているのかもしれないなぁ？」

「うっ、うぉわぅえあぁァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

叫びの声には絶望の色があった。

「さてと、正気に戻ったか？　それとも完全に壊れたか？　どちらにしても苦しみと絶望を味わえ。」

「ぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は笑顔で放心する青いゴミを見た。

「・・・・・・・・・・・・・仁。」

青いゴミに地獄を見せてやろうとしている俺に理香が声を掛けてきた。

「やめて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無言のまま振り向いて理香を見る。

俺を見るその目には悲しみが張り付いていた。

俺を非難するでもなく怒っているわけでもなく。

ただただ悲しみだけがそこにはあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は理香から視線を外して苦しげにうめく東間を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ。」

俺は舌打ちして青いゴミに視線を戻した。

第百二十話　トラウマか、えぐってやるよ！（後書き）

家族のために狂った科学者は、家族に否定されるのが何よりも辛いようです・・・・・・・

次回はリューグ視点から始まります。

第百二十一話　現在、考え中だ！（前書き）

今回はリューグたちです。

仁に出番はありません。

第百二十一話　現在、考え中だ！

ｓｉｄｅリューグ

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は息を切らしながら周囲の状況を確認した。

とてつもない数の黒い獣を葬った俺の全身はボロボロで体中のあらゆるところから血を流していた。

だがその暗闇の部屋に流れているのはリューグの血だけ。

黒い獣は倒すたびに消滅し、血など一滴も流さなかったのでそれは不自然ではない。

いや、倒したら消滅している時点で十分不自然なのだが俺はそんなことは気にならなかった。

俺が気になったのは一つだけ。

「はぁ、はぁ、・・・・・・・・・・・・・・・どうして、増援が無い・・・・・・・・・・・・・？」

先ほどまでは倒した分だけ黒い獣が現れ、一向に減る気配など無かったというのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・終わった、のか・・・・・・・・・・・」

俺の後ろで倒れているルギリスが静かにつぶやいた。

「・・・

殺(や)られる・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！！

せめて一矢報(いっしむく)いるために俺は赤い銃を影に向かって構え――――――――――――――――――

「落ちつけ、私だ。」

聞き覚えのある声に俺はそのまま銃を撃った。

「ちょっ！？」

影は至近距離から放たれた銃弾を反射で避ける。

・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど。偽物には出来そうもない反射運動だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・本物の様だな。」

「確かめるならもっと別なやり方にしろ。」

怒りを含んだ声を出しつつ影――――――――――――――――――――――ルナールは俺の首から手を離した。

「いきなり奇襲を掛けてきたのはそっちだろう。」

「・・・・・・・・・・・私としても、お前が本物かどうかの確証が無かったのでな・・・・・・・・・」

俺が肩をすくめていると部屋の中に光の玉と共に誰かが入ってきた。

「ルナール、先に行っては危険ですよ。」

「・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうしました？　その後なにがあったのですか？」

アマネの言葉に俺は首を横に振った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・覚えていない。生ゴミじじいの首がへし折られたのを見た後、俺はどうやら気を失ったみたいで・・・・・・・・・・気がついたらここにいた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アマネは無言で話しの続きをうながす。

「暗闇に目が慣れてきたころ、近くにボロボロのルギリスがいるのを見つけてな。ルギリスを連れて部屋から出ようとしたら黒い獣の軍勢に襲われた。そいつらを片づけた所でお前たちが来たのさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど。他にも訊きたいことはたくさんありますが、今は外に出ることを優先することにしましょう。」

アマネの提案に特に反対する理由が無かったのでルナールがルギリスを背負って急いで部屋を後にした。

背後に獣のうなり声を聞きながら。

sideリリィ

「・・・・・・・・・・・・・・やはり、あなたの仕業だったのですね。」

「そうですよ、リリィ様。いや、リリィ姉さまと呼ぶべきかな？」

あの謎の部屋から『夢の家』の外である村の中に転移させられた後、私は転移魔法を使って魔王城へと。

その足で魔法研究所長室に訪れていましたわ。

事件の全容を知るために――――――――――――――――――

第百二十一話　現在、考え中だ！（後書き）

次回は再び仁たちです。

第百二十二話　俺に、できるのか！（前書き）

今回は肉体的に追い詰めます。（やはり表現が未熟ですが。）

今回もそういった描写が苦手だと言う方は読むのをお勧めしませんのでご了承ください。

第百二十二話　俺に、できるのか！

「・・・・・・・・・・・・・・・理香。」

俺は苦しげにうめき声を上げる青いゴミに視線を向けたまま後ろに向かって言った。

「お前がどう思おうが俺はあいつを殺す。それも楽に殺してやる気は無い。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

理香の反応は無かったが、反論してこないということは異論は無いということだろう。

刀を引き抜きながら俺は青いゴミへと歩を進める。

「・・・・・・・・・・・・・おおおおぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・」

「トウキ。」

青いゴミのすぐ近くに来てから俺はこの光景を見ている馬鹿弟子に声と視線を向けた。

「良く見ていろ。お前が師と仰ぐ奴がどれだけ薄汚れた最低な存在なのかを。」

返事は聞かずに俺は刀を青いゴミの足にに突き刺した。

「・・・

俺は刀を突き刺しながら左手で青いゴミの顔を掴んだ。

体全身が痛みを感じる機能に特化している状態では例えアリなどが体を昇っても激痛と感じる。

「ぎぎぃいいいいいーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

「痛いか？　苦しいか？　だがまだ足りない。お前から受けた屈辱はこの程度で晴れはしない。」

俺自身が味わった屈辱。

俺の大切な存在を傷つけた罪。

それがこの程度で許されるはずが無いっ！！！

俺は掴んだ手に更なる力を込める。

この青いゴミが味わっている苦痛は頭蓋骨が砕ける痛みの方が遥かにマシだというレベルだろう。

俺は刀を引く抜き。

「火灯切（かとうせつ）。」

武器に炎を纏わせるだけの技だが、俺は出力を最大限にまで弱める。

この小さな炎では羽虫を焼くのが精一杯だが、今のこいつにとって

は――――――――――――――――

「ぎひぃいいいいいいいっ！！！　熱いっ！！！　熱いっ！！！」

地獄の業火を味わっている気分のはずだ。

「さてと、なぶるのにも飽きたことだしそろそろ楽に――――――――――――――――」

俺は小さな炎を纏った刀を青いゴミの腹に突き刺した。

「ぎぎぎぎぃいいいぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！」

「――――――――――――してやるはずがないだろう？」

俺は刀を引き抜きながら再度刀を別の場所に突き刺――――――――――――――――

「おやめなさいっ！！　仁っ！！！」

遺跡中に響き渡ったのではないかと錯覚させるほどの鋭く威厳のある声に俺は静止した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

振り返るとそこには険しい表情を浮かべたリリィが立っていた。

リリィはメイドさんと理香によって治療の施されている東間と近くで震えているトウキと二人の子供を視線を向けた後、俺の元へと歩

き出し――――――――――――――――――――――――

「っ！！！」

強烈な一撃を俺の頬に浴びせた。

予想もしなかった強烈なビンタに俺は体勢を崩して尻もちをついてしまった。

「仁。あなたは今、自分が何をやっていたのか理解できていますの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言の俺に構わずリリィが言葉を続ける。

「少しの間でしたけれど、東間や理香と旅をして私は二人ともとても立派な人だと感じましたわ。それに何よりも二人ともあなたのことを大切に思っていましたわ。」

リリィの目には怒りと悲しみがあった。

「そのあなたが二人を裏切るような真似をして良いと本気で思っていますのっ！？　もしそうなら私はあなたを軽蔑しますわっ！！！」

リリィが近づいてくる。

また一撃食らわせるのかと思ったら、リリィがしゃがみ込んで俺の肩に手を置き。

「・・・お願いですわ・・・・・・・・・・私に・・・・・・あなたを・・・・嫌わせないで・・・・・・」

泣きながら俺の顔を見て言葉を吐いた。

・・・・・・・・・・

リリィに泣かれたとき、俺の胸にはある疑問が沸いて来た。

俺は、東間や理香の為ならば誰だって殺すつもりだ。

例え相手が誰であったとしても。

だがもしも。

もしもリリィと東間たちが敵対することになったら？

当然、ルナールも敵に回るはずだ。

・・・・・・・・もしそうなったとき。

俺はリリィやルナールを殺せるのだろうか――――――――――――

第百二十二話　俺に、できるのか！（後書き）

東間たちが勇者として魔王継承者であるリリィと戦う時がきたら、果たして仁はどちらの味方をするでしょうか・・・・・・・・・・

第百二十三話　久しぶりの、太陽だな！（前書き）

ハーピィ＆メタ編もそろそろ終わりが見えてきました。

第百二十三話　久しぶりの、太陽だな！

「ここは・・・・・・・・・・外か。」

理香と共に東間の腕を肩にまわしてその体を支えながら俺は空を見た。

青い空に白い雲、そして位置の変わっていない太陽から判断して入ってからほとんど時間が経過していない様だった。

後ろを振り返ってみるとそこには『夢の家』が変わらぬ姿で――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・なに？」

そこにはいくつかの家があっただけだった。

あの奇妙なオブジェの家はまるで初めから存在しなかったように完全に消失していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・『夢の家』ねぇ・・・・・・・・・・」

誰が何のために造ったかは知らないが、確かに『夢』だったのかもしれない。

「東間様ーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

「東間ぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！

！！」

「仁さーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーんっ！！！」

「マスターーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

感傷に浸っていると大きさ叫び声が聞こえてきた。

声の方向を見ると待機していたはずの連中（ルアリスを除く）がこちらに向かって走って来ていた。

「東間様っ！？」

俺と理香が草の上に東間を寝かせると、メアリはいち早く東間の元へと駆け寄り東間の状態を確認し始める。

「・・・・・・・これほど深い傷を・・・・・・・・・東間様・・・・・・」

「うなぁ～・・・・・・・・・・・・東間ぁ～・・・・・・・・・」

リャナも東間に近くで小さくうなりながら東間の顔を見ている。

「・・・・・・・・・ごめんなさいメアリ、リャナ。」

蒼白になるメアリと心配そうなリャナに理香が謝罪の言葉を述べる。

「いいえ、理香様のせいではありません・・・・・・・・・・全ては

そばで東間様のサポートをすることができなかった私のせいです・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうだにゃ、リャナも役に立てなかったにゃ・・・・・・・」

落ち込んでいる三人に俺は声を掛ける。

「責任の所在はどうでもいい。早く東間を治せ。」

「・・・・・・・・わかっています。」

俺の命令口調に多少ふてくされたようだが、そのまま東間の治療に入る。

「仁さんっ!!!」

「マスターっ!!!」

穏やかで暖かな優しい光が東間を包み込むのを見ている俺にアイリスとフレスが飛びついてきた。

「おっと。」

二人を抱きとめると体中に鈍い痛みが走ったような気がするが今は無視する。

地面に降ろすとアイリスは涙で顔をくしゃくしゃにしながらどうにか言葉を発する。

「・・・ぐすっ、無事・・・・・だったんですね・・・・・・・・・・・・・・良かった・・・・・・・・・」

次いでフレス。

「流石はマスターっ！　『グロゴールよりもしぶとい害虫』の異名はだてじゃないですねっ！！」

「はははははははは。」

アイリスの頭を優しく撫で、フレスの頭にはアイアンクロー。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！！！」

万力の様な力にフレスが悲鳴を上げるのを聞きながら俺は改めて周囲の見渡した。

メイドさんとラフィは難しい表情で何かを話し合っている。

リリィとルナールも険しい表情で言葉を交わしていた。

アマネは震えているトウキと二人の子供を落ちつけようと話しかけていた。

・・・・・・・・・・・・・・・もう、トウキに師匠と呼ばれることは無いだろうな・・・・・・・・・

ふと、そんなことを考えた俺は頭をニ、三度振ってくだらない考えを払った。

その後、俺の目に映ったのはあちこちに包帯を巻きながら座り込んでいるルギリスとリューグだった。

俺はアイリスとフレスから手を離すとリューグたちのもとへ歩いた。

「よぉ、随分とやられたみたいだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふん。」

皮肉気な俺の言葉にリューグは鼻を鳴らし、ルギリスは無言で睨みつけてきた。

「だいぶやられたみたいだな。相手が相当強かったのか、お前らが油断しただけなのか・・・・・」

「そういうお前は体の方は大丈夫なのか。」

リューグの問いかけに俺は笑いながら答えた。

「大丈夫だ。今は、な。」

その言葉だけで察したリューグはそれ以上何も言ってこなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の魔力が切れたのか悲鳴を上げることも無く黙ってしゃがみ込む青いゴミとそのすぐ近くで無表情にそれを見つめるスペクトラの姿を。

ｓｉｄｅ???

「ねぇマルス、あの技ってもしかして――――――――――――――――」

「左様でございます。」

魔王城魔法研究所長室。

子供はその映像を見ながら興奮していた。

「・・・・・・・・・面白いね。もしかしたらあの人こそ――――――――――――――――」

執事姿の男――――――――――――――――――――――――――――マルスは主の言葉を黙って聞いていた。

第百二十三話　久しぶりの、太陽だな！（後書き）

ではまた次回でお会いしましょう・・・・・・・・・

第百二十四話　これから、どうするのか！（前書き）

今回はスペクトラの事情説明です。

第百二十四話　これから、どうするのか！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

草の上に座り込んでいる青いゴミを静かに見下ろしていたスペクトラの元へ歩を進める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

スペクトラはわずかに視線を俺に向けた後、何事も無かったかのように再び視線を青いゴミに戻した。

やがてスペクトラの隣に立つと俺は共に視線を青いゴミに向けた。

「お前か。」

不意にスペクトラが口を開いた。

「お前がやったのか。」

責めるわけでもなく、単なる確認の口調に俺は。

「そうだ。」

短く答えた。

「そうか。」

訪れた沈黙に俺は少々違和感を覚えた。

というのもスペクトラはメタなのだが外見だけはトウキにそっくりだからだ。

あのトウキが真面目な顔をしていて言葉も語尾にござるが付いていない。

そのギャップにどうしても慣れることができないのが原因だろう。

「ありがとう。」

「んっ？」

再び口を開いたスペクトラから何故か礼の言葉が出てきた。

「父を止めてくれてありがとう。」

「・・・

「人間じゃない、か・・・・・・・・・・・・・・」

つぶやいた言葉は空気に乗って誰の耳に届く前に霧散した。

「フーエ。」

スペクトラがリューグ――――――――――――――――――――――――

否、フーエを手招きし始めた。

それを見たリューグは鞘からフーエを抜いてスペクトラの方へ放り投げた。

投げられたフーエは縫い止められるように一旦空中で停止し（物理法則を軽く無視しているが、まあ魔力か何かを使ったのだろう。）ゆっくりと漂うようにこちらへ近づいてきた。

『スペクトラさん。やはりこの人は・・・・・・・・・・・・』

「そう、私たちの父親。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

この短い言葉の中にはどれほど多くの感情が込められているのか、俺には理解できなかった。

表情から察しようにも片方は無表情、片方は剣と察しようが無い。

「みんなを集めて。」

スペクトラが周囲に向かって言葉を口にする。

「全てを話す。」

治療中の東間の近くにみんなを集めたスペクトラは近くにフーエを漂わせたまま説明を始める。

「まず最初に、私は普通のメタモルフォーゼでは無い。」

そんなの既にわかっている。

といった空気を読まない無粋なツッコミを入れる奴はこの場にはいなかった。

普段の俺ならやったかもしれないがあいにくそんな余裕はない。

「私はある人間の死体をベースに造られた特殊なメタモルフォーゼ。他のメタモルフォーゼがどのようにして造られたかは知らないが、人間をベースに造られたのは私だけ。」

ある人間、ねぇ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

話しの流れからすると一人しかいないな。

「私はフーエの体から造られたメタモルフォーゼ。父は死んだ肉体をメタモルフォーゼに変貌させることで死者蘇生をやろうとした。」

『ですが、メタモルフォーゼの数は三体だけのはず・・・・・・・・・・それにあの屋敷で父を取り込んだメタモルフォーゼは既に消滅した

はずです。」

フーエの疑問にスペクトラは首を横に振った。

「それは違う。というよりもその認識自体が間違っている。」

スペクトラはフーエの間違いを訂正するように言う。

「父はメタモルフォーゼに取り込まれてなんていない。フーエの記憶は魂をいじられた時に生じた誤認かあるいは父に意図的に記憶を操作されたから。」

『なっ・・・・・・・・・・・・・・・っ!?』

驚くフーエにスペクトラは更に言葉を続ける。

「父は確かにあの屋敷で研究を続けていた。それは事実。でもあの屋敷でメタモルフォーゼが二体やられたのを知った父は研究資料と自分に擬態させたメタモルフォーゼ、それに失敗作の実験体を残して屋敷から逃げのびた。」

スペクトラが続けた言葉にはかすかだが後悔の色がにじんでいる様な気がした。

「そしてこの村の近くで行き倒れた父は通りかかった村人に助けられ、そして――――――――――――――――――――」

スペクトラはそこで言葉を止めた。

これ以上は言いたくないし言う必要はない。と言わんばかりに。

「待て、それならお前はどこにいたんだ。そもそもお前が近くにいれば行き倒れなどしなかったはずだ。」

リューグのもっともな質問に。

「それは――――――――――――――――――――――――――――――」

スペクトラはほんの少しの戸惑いを見せながらもリューグの問いに答えるために口を開いた。

ｓｉｄｅ???

「ふぅ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は息を吐きながらイスに座った。

「申し訳ありませんご主人様、今すぐに侵入者の排除を――――――――――――――――――――――――――――――」

「もう遅い。既にお帰りになった。」

女は身震いした。

失態を犯した自分に対していかなる処罰が下されるか。

想像するだけで恐ろしい。

だが男の言葉は女の予想を裏切るものだった。

「どうした？　報告はそれだけだろう。さっさと行け。」

男の言葉に女は思わず訊き返した。

「・・・・・・・・・・・・・・・あの、処罰は・・・・・・・」

「俺に二度同じことを言わせるな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ。」

女が姿を消した後、男はリリィとルナール、そして仁に対する資料を眺めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふふっ。」

その顔にわずかな笑みを浮かべながら。

第百二十四話　これから、どうするのか！（後書き）

次回は話しの続きからです。

第百二十五話　わからないこと、多いな！（前書き）

スペクトラの話の続きです。

第百二十五話　わからないこと、多いな！

「それは私が父によってガラスビンの中に封じられていたからだ。」

「ガラスビン？」

問い返したリューグに肯定の頷きを見せるスペクトラ。

「父だけが持っていたメタモルフォーゼを封印するための特殊なガラスビン。私は父によってその中に入れられていた。」

「スペクトラ様、あなたはどうしてそんなところに封印されていたのですか？」

メイドさんの質問にスペクトラは首を横に振る。

「わからない。けどたぶん私が父に対して反抗的な態度を取っていたからだと思う。そのせいで父の暴挙を止めることができなかった。」

スペクトラの答えに俺は納得できなかったので改めてスペクトラに問うことにした。

「ならあのクソじじいはどうやって村の連中を皆殺しにしたんだ？まさか自力でやったなんて馬鹿なことを言うつもりか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・わからない。」

俺の問いにスペクトラは本心から困惑しているようだった。

「父がどうやって村人を殺したのかも。そしてどうやってあれだけの数のメタモルフォーゼを集めたのかも。封印されている間は私は眠りについていたから。」

「だがお前の封印は解かれた。それはなんでだ?」

再びの質問にスペクトラは更に困惑の色を深めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それもわからない。ただ、父は「もうお前を封印している必要は無くなった。」としか言ってくれなかった・・・・・・」

うつむくスペクトラは話すことはもう無いと言っている気がした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まあそうですわね。」

俺の（話しを誤魔化すための）正論に、一応全員納得したようだった。（気絶している東間など一部を除く。）

「ではまずはこの青いゴミをどうするか決めることにいたしましょう。」

「メイドさん・・・・・・・・・・娘の前でもゴミ扱いなのね・・・・・・」

「当然です。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・当然なのですか・・・・・・・・』

その場にいた全員が（俺以外）メイドさんの言葉に若干引きながらも青いゴミへと視線を向けた。

「もちろん、父はこの場で処理する。」

一番に発言したのは意外なことにスペクトラだった。

その内容も仮にも父親と呼んでいる存在に対してとは思えない内容だ。

「よろしいのですか？　仮にも父親なのでしょう？」

「いい。父は決して許されないことをやった。当然の報い。」

淡々と語るその口調には感情は込められていなかった。

何も感じていないのか、それとも感情を押し殺した言葉なのか。

「・・・・・・・・・・・・フーエ様は？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

尋ねられたフーエはたっぷり三十秒ほど沈黙してから。

『・・・・・・・・・・・・・父を、葬りましょう・・・・・・・・・』

押し殺しきれない悲しみと辛さを込めた言葉を吐き出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は悩んでいた。

普通の英雄譚や勇者劇などでは、ここでは俺の様な脇役は何も出来ない。

黙って成り行きを見守るか、それとも勇者たちが起こす奇跡の逆転劇に驚いたり解説したりするのが関の山だ。

だがこのクソじじいの精神を破壊したのは俺だ。

別にその事を後悔しているわけでも反省しているわけでもない。

ただ情報を聞き出せなかったこととその娘？　に辛い選択肢を押し付けてしまったことは多少反省すべきなのかもしれない。

まあ要するに。

俺はこのクソじじいの壊れた精神を治せるということだ。

恐らく発狂する前の、つまり妻を失う前の元の人格に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

死者蘇生も運命操作も自分を対象としなければ俺に起こせない奇跡は無い。

だがそれを行うためにはあの姿にならなければならない。

誰にも見せたくないあの姿を、こんなクソじじいを救うためにならなければならない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は黙々と火葬の準備に入るメイドさんたちから視線を外して未だに治療を続けている東間の顔を見た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・なあ東間、お前だったらどんな選択をする？

思わず口に出しそうになった言葉を飲み込みながら俺は答えの無い問答を頭の中で考え続けた。

sideルアリス

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うぅ・・・・・・・・・」

私が目を覚ますと、視界は白い羽毛で覆われていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ここは・・・・・・・・・・・・・？」

私は痛む体を起して現在位置を確認すると巨大な白い鳥の上にいることが判明し、更に周りを見渡すとあの村があるのがわかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！？　ルギリス・・・・・・・・・・・っ！！」

ルギリスの気配を感じた私は飛び上がろうとしたところで地面に落ち、そのままルギリスの元へ向かって足を引きずりながら歩き出した。、

第百二十五話　わからないこと、多いな！（後書き）

ちなみにリリィは真相を知っていますが、ルナールは知りません。

第百二十六話　やっと、起きやがった！（前書き）

東間復活。

そして話は進みません・・・・・・・・・・

第百二十六話　やっと、起きやがった！

「・・・・・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・・うぅん・・・・・」

「っ！　東間様っ！　大丈夫ですかっ！！」

治療をしているメアリが上げた叫び声に注目が集まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・メアリ・・・・・・？」

東間はゆっくりと上半身を起こしながら寝ぼけ眼（まなこ）でつぶやいた。

「東間様っ！！」

「東間ぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

そんな東間にメアリが抱きつこうとする前に、助走をつけてから天高く跳び上がったリャナが東間へとダイブした。

「ぐはっ！？」

不意のことでリャナを抱き止められはしたものの衝撃を完全に消すことができなかったらしい東間は地面に叩きつけられて痛みによる叫び声を上げた。

「東間ぁーーーーーーーーーーーーっ！！　良かったにゃーーーーーーーーーっ！！」

そんな東間の様子などお構い無しでリャナは東間を思い切り抱きしめた。

「痛いっ！　痛いよっ！　リャナっ！！」

訴えながらも純粋に自分を心配してくれているリャナに感謝の表情を浮かべている東間（という名のロリコン。）

「いま何か失礼なことを思ったね。」

俺の思考を読んだらしい東間がジト目で睨んできた。

まあ東間が真正のロリかどうかはどうでもいいんだが。

「良くない。僕は決してロリコンじゃない。」

反論してくるロリコン「だから違うって。」はとりあえず無視して俺はメアリの様子を確認――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

してから目を合わせないように視線を明後日の方角へ向けた。

メアリは笑っていた。

確かに笑っていたんだが――――――――――――――――――――――――

「リャナさん。東間様が困ってますから離れましょうね。」

「うなぁ～・・・・・・・・・・でも――――――――――」

「リャ・ナ・さ・ん？」

リャナはそれはそれはすさまじいスピードでアイリスの後ろに隠れた。

うん。なんていうかさ。

この世界の女って怖いのが多い気がするのは気のせいかな？

「メっ、メアリ・・・・・・・・・・その・・・・・・・・・」

「東間様、まだ完全に傷が治ったわけではないのですからゆっくり休んでください。」

「いや、でも――――――――――――――――――――――――――――」

「や・す・ん・で・く・だ・さ・い。」

「・・・・・・・・・・

女にここまでの迫力があろうとは・・・・・・・・・・・・・っ！？

「あの迫力・・・・・・・・・・王族としての資質はリリィ以上か・・・・・・・・・？」

「当然です。」

突然背後に現れたメイドさんについては、もう特に驚くに値しない。

「何が当然なんだ？　メイドさん。」

「メアリヴェスタ様は私が教育係として育てました。言わば私の一番弟子です。」

あの迫力はメイドさんの所為か。

「その通りです。本気になったメアリヴェスタ様は女王陛下と私を除けば国で最強の女性を名乗れるでしょう。」

それは精神面の話しか、それとも肉体面の話しか？

「両方です。」

・・・・・・・・・・・・・口に出す前に二回連続で心を読まれた・・・・・・・・・

俺ってそんなにわかりやすい奴なんだろうか？

「とっ、ところで仁、僕が気を失っている間に一体何があったんだ？」

多少メアリにビクつきながら東間が俺に尋ねてきた。

「ああ。実は――――――――――――――――――――――――――――――――」

俺は東間に（拷問時のことなどは省略して）気絶してからのことを話した。

聞き終えた東間は神妙な顔つきで何かを考えていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ったくこの馬鹿は言われないと気付かないのか？

「おい、馬鹿東間。考えるよりも先にやることがあるだろう。」

「えっ？」

俺はメイドさんと理香をそれぞれ指差した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。そうだね。僕は大事なことを忘れていたよ。」

東間は立ち上がると俺たち全員に向かってお辞儀をした。

「みんなありがとう。みんなのおかげで助かったよ。」

東間の感謝の言葉に。

「そんな・・・・・・・・・・もったいないお言葉です・・・・・・」

「うなぁ～っ！」

などと多種多様の反応を示した。

「それと仁、メイドさん、理香、三人がいなかったら僕は死んでいたかもしれない。本当にありがとう。」

「いいえ。お気になさらないでください。」

「べっ、別にこれくらいで感謝しなくても良いわよ。」

丁重に頭を下げるメイドさんと赤くなりながら顔を背ける理香。

俺は特に反応を示さずに薄く笑いながら東間の顔を見ていた。

まったく、世話の焼ける馬鹿だ・・・・・・・・・・

そう思っていても内心では東間が無事だったことに俺は安心感を覚えていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あのぅ・・・・・・・・すいません・・・・・・』

「無駄。忘れられている。」

少し離れた場所で寂しそうに青いゴミのそばにいる一人と一本のことは、今は無視することにした。

第百二十六話　やっと、起きやがった！（後書き）

次回、話は進みます。

第百二十七話　すんなりと、終わるわけないか！（前書き）

ハーピィ＆メタ編もそろそろ終わりです。。

第百二十七話　すんなりと、終わるわけないか！

「準備が整いました。そこの青いゴミを火葬いたしましょう。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お願いします・・・・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

準備を終えたメイドさんがフーエとスペクトラに許可を取った。

火葬と言ってもただ単にクソじじいを縦に固定した丸太に縛り付けて火を点けるだけのものだが。

「ではラフィ様、その青いゴミをこの縄で縛り上げてください。」

「わかりました。」

どこから取り出したのか不明の長いロープをメイドさんがラフィに渡した。

ラフィは青いゴミを縛り始めると、ふと何かに気付いた様に俺たちに視線を向けて口を開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・手伝ってはくれないのですか？」

「やだ。」

「丁重にお断りします。」

「触りたくありませんわ。」

「あっ、もういいです・・・・・・・・・私一人でやります・・・・・・」

再び作業を始めるその背中にはほのかな哀愁が漂っていた気がする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・終わりました。」

丸太に縛り付けられている間もクソじじいは口を半開きにしたまま虚ろな目をしていた。

「点火します。」

メイドさんは言葉と同時に手を動かして丸太の下の方に火を点けた。

油でも染み込ませてあったのか火は瞬く間に丸太とクソじじいを燃やしていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。」

灰になっていくクソじじいを眺めている俺の隣に腹の傷を右手で押さえている東間が来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当にこれで良かったのかな・・・・・・・」

「さぁな。」

不安が込められている質問を適当に流した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そっか・・・・・・」

俺たちは無言でクソじじいの最後を見届けた。

「くひゃひゃひゃ

ラフィが剣を抜きつつ周囲を警戒しながら発した叫び声を無視して俺はあの方向に視線を向けた。

初めて俺がこの村を訪れたときに感じたかすかな違和感。

あの物置となっていた小さな廃屋へと。

瞬間――

廃屋が轟音と共にはじけて四散し、地面の中から巨大な影が空に向かって昇っていった。

「あれは・・・・・・・・・・・・・っ！？」

轟音に気付いた他の奴らも空に昇っていくそれを見ていた。

太く長い緑色の鱗に覆われたその体。

その姿はまるで――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「龍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

東間も俺と同じことを考えていたようだった。

やがて尾の先まで空に昇っていった龍が天をさ迷いながらこちらに顔を向ける。

細長い舌をチロチロと口の中から出しながら細い瞳で獲物を品定めするその姿は――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・龍じゃ無くて蛇だったか。」

俺がツッコミを入れたその時、大蛇はその大きな口を開けてすさまじい速度でこちらへ突っ込んできた。

「伏せろぉっ！！」

誰が叫んだのかはわからないが声が上がる前に全員がその場に伏せた。

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ――――――――――――――――――――」

半身が灰と化しているクソじじい以外は。

大蛇は迷うことなく勢い良く燃え上がる丸太とクソじじいを丸呑みにした。

「くっ・・・・・・・・・・・・・うぅっ！」

大蛇の体が通り過ぎる際に巻き起こった突風は木造の家を破壊するほどの威力だった。

俺たちは必死に地面にしがみついて風に飛ばされないようにする。

ようやく風が収まると、大蛇は再び獲物を品定めするようにこちらを見つめ始めて。

不意に村の入り口の方向に視線を移した。

・・・・・・・・・・えーっと、入り口には確か――――――――――――――――――――――――

「まずい・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！　入口にはエイミィがいる・・・・・・・・・っ！」

・・・・・あの怪鳥エイミィって言うのか・・・・・・・・・・・・

などと考えている場合ではないことは東間の焦りを含んだ声からわかる。

俺はリューグに目配せしたが、リューグは既に銃を取り出しており殺る気満々の臨戦態勢だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ～・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は鞘から刀を抜いた。

面倒だけど、化け蛇退治の始まりだっ！

ｓｉｄｅルアリス

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ、あの化け物は・・・

・・・・・・・っ！？」

足を引きずりながらゆっくりと歩いていたルアリスは突然の地震に倒れ、空を見上げたら巨大過ぎる大蛇が目に映った。

「ルギリスが・・・・・・・・・っ！　危ない・・・・・・・・・・・・・っ！！」

ルアリスは何とか起き上ると無理をして歩く速度を速めた。

第百二十七話　すんなりと、終わるわけないか！（後書き）

ボス登場。

しかし所詮は大きいだけで理性の無い化け物に過ぎません。

第百二十八話　面倒くさい、とっとと終わらせるか！（前書き）

大蛇戦その二です。

雑魚ではありませんが強敵と呼べるほどでもありません。

第百二十八話　面倒くさい、とっとと終わらせるか！

「「炎よっ！！　駆けよっ！！　球炎弾（キャノンフレア）っ！！」」

理香とリリィが同時に放った火炎球があの怪鳥――――――――――エイミィへと向かって行く大蛇の胴体に命中したが、大蛇は意に介さずそのまま空を進んで行く。

「「光よっ！！　貫けっ！！　聖光槍（ホーリーランス）っ！！」」

今度は東間とメアリが同時に光の槍を大蛇に飛ばす。

しかし光の槍は鱗に阻まれて大蛇に傷一つ付けることができない。

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！？」

魔法を放った東間が腹の傷口を押さえて膝をついた。

「東間様っ！？」

「僕は大丈夫だ、メアリ。今はあいつをなんとかしないと・・・・・・・・・っ！」

手で傷口を押さえたまま再び立ち上げる東間。

今のところ、あの大蛇は俺たちのことは眼中に無い様なのでとりあえず俺はこの状況で戦力になりそうにない奴らを確認した。

リューグは魔力も体力も使い果たしているだろうから戦力外。

ルギリスも同様。

メイドさんとアマネはたぶんやる気が無い。

トウキは遠距離攻撃ができないに加えて俺が刀を持っている。

となるとそれ以外の連中がこちらの戦力ということか。

俺は横目で平気な顔して無茶をする東間を見た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・まあ面倒だし俺一人でやった方が早いな。

俺は刀を下段に構えた。

「あ～っと。お前らに一つ言っておく。」

突然の俺の発言に皆の注目が集まる。

「俺はたぶんこの戦いが終わったらぶっ倒れるから、そのつもりでよろしく。」

「ちょっと仁――――――――――――――――――――――――――」

理香が発した抗議の声を無視して俺は下段に構えた刀を――――――――――――――――――――――――――

「獄竜断(ごくりゅうだん)っ！！」

叫びと共に勢い良く斬り上げた。

斬り上げられた刀から生じた漆黒の魔力による斬撃は一直線に大蛇へと飛んで行き、大蛇の胴体を二つに切り裂いた。

切り裂かれた尾の方の胴体は浮力を失ったらしくそのまま地上に墜落した。

しばらくの間、ピクピクと動いていたが特に何も起こらずそのまま動かなくなっていった。

対して頭の方は空に浮いたまま血走った赤い瞳で俺を睨みつけている。

大蛇が咆哮を上げながら俺へと突撃してくる。

・・・・・・・・・・火炎放射でもするのかと思ったら突撃してくるだけか・・・・・・・・・・

俺は軽い失望を抱きながら大蛇の突撃を横跳びで避ける。

大蛇は地面に激突しそのまま潜っていった。

って潜った?

確認しようとした次の瞬間、俺の立っている地面の下から大きな口を開けた大蛇が飛び出した。

口が閉じる前にギリギリのところで身をかわす。

間髪いれずに大蛇が突撃してきた。

これもまらギリギリで避けられたが、こちらが体勢を立て直す前に大蛇は突撃してくる。

しかも半身を失ったせいか、それとも怒りによるものか段々と大蛇の突撃速度が上がっている。

このままではいずれ避け切れなくなる。

その考えが脳内を横切った瞬間、足元の石に気付けなかった俺はこけてしまった。

大蛇がそんな俺を見逃すはずもなく大きな口を開けて更なる速度で突っ込んできた。

「凍てつく氷河よっ！！　我が槍に宿り冷たき矛となせっ！！　流氷纏槍（アイシクルパルチザン）っ！！」

そんな大蛇の頭を上から貫いた氷の槍を持った女が一人。

「かっ、勘違いするんじゃないわよ、仁っ！！　単に狙いやすいタイミングが今だったってだけなんだからねっ！！」」

理香だった。

・・・・・・・・・・・・・・・しかし一直線に突撃していたとはいえ、高速で動いている大蛇の頭が狙いやすいか・・・・・・・・・・・？

疑問を抱く俺の目の前で頭を貫かれた大蛇が地面の上で暴れまわった。

「うわっ！？」

理香は大蛇の頭を貫いている槍にしがみつくようにしっかりと両手で握って振り落とされないようにしている。

「頭を貫かれて即死しないだと・・・・・・・・・・・・っ！？」

少し遠くからリューグの驚愕の声が風に乗って聞こえてきた。

確かに、俺もいろいろな奴と戦ってきたが脳を貫かれて死なない奴とはまだ会ったことが無い。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや、待てよ。

脳を貫かれたら死ぬ。

イカサマでもしない限りこれが変わることは無い。

だがこの蛇の頭に脳が無いとすると――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・やめた。」

口にすると同時に俺は考えるのをやめた。

主人公ってのは正統派なら仲間と協力して、知能派なら脳の位置を推理して倒すのだろう。

だが俺は勇者じゃないしいちいち脳の位置を考えるのも面倒くさい。

それになにより。

俺の体がいい加減限界にきているらしく悲鳴を上げ始めている。

俺は大蛇の頭の上に飛び乗ると頭を刀で突き刺した。

「えっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

と同時に、刺さっていた槍と呆けた声を上げる理香の服の襟首を掴んで東間たちの方へ投げる。

「なっ！？」

慌てて東間が理香を受け止めるのを確認した後、俺は暴れまわる大蛇の上で刀に魔力を込め始める。

大蛇の息の根を止めるために。

「・・・・・・・・・・・よろしいのですか？」

「なにがですか？」

アマネの問いかけにメイドさんはとぼけた回答をした。

「・・・・・・・・・・・・心配、しているのでしょう？」

「そうですね。」

メイドさんは一度もアマネの方は見ずに。

「今夜の宿はどこにしましょうか。」

と答えた。

第百二十八話　面倒くさい、とっとと終わらせるか！（後書き）

次回で決着が着きます。

第百二十九話　なんだ、この夢！（前書き）

いろいろな謎を残したまま戦闘終了。

そしていつも通り仁がぶっ倒れます。

第百二十九話　なんだ、この夢！

大蛇は危険に対する本能からか刀に魔力を溜めている俺を民家へと叩きつけようとする。

「ちっ！」

俺は大蛇から刀を引き抜くと大蛇が突っ込んで行った民家とは別の民家の屋根の上に飛び乗った。

大蛇は民家を粉砕すると俺に向かって再度突撃を仕掛けてくる。

「・・・・・・・・・馬鹿の一つ覚え――――――――――――――」

と、口にしてから俺は気が付いた。

いま戦っているのは馬でも鹿でもなく蛇だという心底どうでもいい事実に。

「って呑気に考えている場合じゃなかったーーーーーーーーーーーっ！！！」

絶叫を上げながら俺は大蛇の突撃を食らって吹き飛んだ。

空中で四回転半ほどしてから地面に落ちた俺。

・・・・・・・・・・・・流石に直撃すると結構痛い。

とりあえず起き上ると大蛇は懲りもせずに突撃してきた。

弱ったところを丸呑みにするとでも考えているのだろうか。

どちらにしろ俺は突撃してきた大蛇を左手で受け止めた。

周囲に響き渡る衝撃音は大蛇の突撃の威力を物語っていたが、俺の体は小揺るぎもしない。

何故自分が止まってしまったのかを理解できずに困惑している様子の大蛇と目が合った。

途端、大蛇の瞳からは怒りが消え失せ、かわりに恐怖の色が浮かび上がってきた。

大蛇は暴れまわり、俺の手を振り払うと空を飛ぶことも忘れて無様に地べたを這いずるように逃げ始めた。

・・・・・・・・・・やれやれ、随分嫌われたものだな。もっとも――――――――――――――――――――――――――――――――

俺は苦笑しながら空へと跳び上がる。

逃がすつもりは無いけどなっ！

「これで終わり、だっ！」

叫びと共に刀を媒介に魔力を集中させて巨大で極太な紫色の光の刀身を作り出す。

「牙竜点星(がりょうてんせい)っ！！」

作り出された刀身を上段に構えて一気に振り下ろした。

光の刀身は大蛇を包む込むだけでは無く、村や外の森の一部を巻き込み――――――――――――――

俺が刀身を消しながら地面に降り立つと大蛇のいた場所及び村と森の一部にはえぐり取られた地面以外、何も残っていなかった。

「・・・

・・・・・」

・・・・・意識が・・・・・・・・・・保てない・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・後のことは私に任せてください。」

「そう・・・・・させて・・・・・・もらう・・・・・・・」

こちらに向かって駆けてくる理香やリリィたちを見たのを最後に――

――――――――――――――――――――――――

俺の意識は闇の中へと落ちて行った。

「おとーさんっ！　おとーさんっ！　あれが欲しいですっ！」

「ダメだ。誕生日プレゼントはもうすでに買ってやっただろ？」

とある休日の昼下がり。

俺は家族と一緒に買い物に出かけることになったのだが。

「じゃあ来年の分ですっ！　前借りで買ってもらいますっ！」

愛娘がどうしてもあのおもちゃが欲しいといって聞かないから困っている。

「こらっ、リン。父さんを困らせちゃダメだろ。」

「う～・・・・・・・・・・じゃあおにーちゃんが買ってくださいっ！」

「え～・・・・・・・・・・・・・・・」

妹のわがままに困った顔をする愛息子。

「あははっ！　仁も大変だね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふんっ。」

一緒に買い物に来ていた東間一家の大黒柱こと、腐れ縁の東間に笑われた俺は憮然とした表情になった。

「おとーさーんっ！　抱っこーっ！」

「はいはい。」

東間は駆け寄ってきた自分の娘を抱き上げる。

「おにーちゃんっ！　買ってくれるんですかっ！　くれないんですかっ！」

「いやっ、だって今月のお小遣いはちょっとピンチだからあまり使いたくないって言うか・・・・・・」

「あっ！　また無駄遣いしたんですねっ！　もっと私みたいに計画的に使ってくださいっ！　そんなんだからみんなにかいしょーなしって言われるんですよっ！」

「計画的っていうよりリンの場合は人にたかっているだけだろっ！
それと甲斐性無しって言ってたのは誰だ？　半殺しにしてくるからくわしく教えてくれないか。」

二人の子供のやり取りを俺は巻き込まれないように少しずつ離れながら優しく見守っていた。

「あっ！　お父さんが逃げようとしているっ！」

流石は俺の愛娘というべきか、逃げようとする相手に敏感に反応する。

「大丈夫だよ、リン。だってほら――――――――――――――――――――」

愛息子が指差したのは俺の後ろ。

「あっ！　お母さんっ！」

愛娘の喜びの叫びに俺は恐る恐る後ろを振り向くと、そこには――――――――――――――――――――――――――――――――

・・・

視界に入ったのは見知らぬ天井。

体を預けるはこれまた見知らぬベッドの上。

窓から差し込むのは昼の証である太陽の光。

体を起こそうとした俺は全身に走る激痛を感じ、口を動かすことはできても声を出すことはできなかった。

無茶をし過ぎたせいでどうやら回復しかけていた体が更にひどいことになったようだ。

それよりも気になったのは今の夢。

娘？　息子？

それに最後のあの顔は確か――――――――――――――――――――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まさか、な・・・・・・・・・・

俺は今の夢を忘れるために再び目を閉じて眠りについた。

第百二十九話　なんだ、この夢！（後書き）

仁は親バカになりそうです。

それと夢の中で仁が振り返った先にいたのは――――――――――

第百三十話　俺、死ぬのかな！（前書き）

仁、再びピンチです。

第百三十話　俺、死ぬのかな！

再び目を覚ました俺の視界に入ったものはやはり見知らぬ天井だった。

窓の外から差し込む月の光が今は夜だと言うことを知らせてくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・しっかし、このパターンが多いな・・・・・・・・・

熱はあっても頭が朦朧としていないのは果たして幸運なのか不幸なのか。

とりあえず言えることは頭がはっきりしているせいで痛みもはっきり感じるということだけだ。

「起きましたか。」

扉が開く音と共に掛けられた声の主を確認するために俺は視線をそちらへ動かした。

「具合はどうですか？」

口は動かせても声が出せないので痛む体で俺はなんとか両腕を交差させてバツを作る。

「そうですか、もう十分回復したと。だったらさっさと起きてください。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・メイドさん、いじめカッコ悪い・・・・・・・

失意と絶望の眼差しでメイドさんを見ているとメイドさんは特に表情を浮かべずにつぶやく。

「冗談です。」

メイドさんはそのまま俺の寝ているベッドの近くに置いてあったイスに座った。

「状況は理解できていますか？」

俺は首を横に振る。

「では簡単に説明します。」

俺がぶっ倒れたあの後。

血相を変えた東間と理香たちによって俺はルヒナの王都、リグルロードへとエイミィで運ばれたそうだ。

途中で力尽きて倒れていたルアリスも一緒に。

ルギリスがボロボロのルアリスを見たとき本気で心配していたそうだがそれはどうでもいい話。

ルギリスとルアリスを一旦、長の巣へと送り届けてからリグルロードへ到着した。

すぐに病院（竜人の国なのに人間用の医療施設なんてあるのか？）に連れて行こうとした東間たちをメイドさんが引き止めて宿屋に寝かせることになったそうだ。

その際、メイドさんと理香の間に一悶着あったそうだがくわしいことは教えてくれなかった。

ちなみに俺は三日ほど眠りについていたらしく、理香やリリィ、メイドさんたちが交代で看病してくれたらしいが東間たちは今日は王様に呼ばれたのでいないらしい。

視線を動かして周囲を見てみると、看病に疲れたのかアイリスとフレスが寝ている。

「あの二人の姉弟は隣の部屋でお休みになられております。食事は口にしているようですがショックが大きいらしくあまり元気がありません。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まあ目の前で家族を殺されたのなら仕方ないことだな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

待ってメイドさん、買い出しって――――――――――――――――

「ああ、言っておりませんでしたか。仁が目を覚ましたときに栄養をつけさせるために理香様が料理を作りたいとのことです。」

・・・

メイドさんの手によって強制的にベッドの上に戻される俺の心には死への恐怖などは無く、ただ絶望だけが支配していた・・・・・・・・・・・・

「あら。起きていたのですか。」

その時、一筋の光明が――――――――――――――――――――――――

「お帰りなさいませ、アマネ様。料理の材料はそろったのですか？」

「ただいま戻りました、メイドさん。ええ、一体どんな料理を作ろうとしているのか想像もつかない材料をたくさん買ってきました。」

差すはずもなく。

「では厨房の使用許可を宿屋の主人に――――――――――――――――」

「大丈夫です。既にリリィさんがお金を払って使用許可をもらっていましたから。後は理香様たちが戻ってくるのを待つばかりです。」

「そうですか。では私は理香様たちが戻ってこられるまでここで仁を見張っていましょう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・遺書、書いておかないと・・・・・・・・・

俺は十三の階段を昇る死刑囚の心情がこんなに辛いものなのかと痛

感しながらこれまでの人生を振り返っていた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ところでアマネ様。」

部屋から出て行こうとするアマネをメイドさんが呼び止めた。

「なんでしょうか、メイドさん。」

「いえ、大したことではないのですが――――――――――――――――――――――――」

メイドさんは俺から視線をそらさずに言葉を続けた。

「髭(ひげ)の剃り残しがありますよ。」

「――あら。うふふ。」

そんなやり取りも虚空を見上げている俺にとってはどうでもいいことだった。

第百三十話　俺、死ぬのかな！（後書き）

次回は女性陣の料理から始まります。

第百三十一話　やばい、やばすぎる！（前書き）

今回は終始リューグ視点です。

第百三十一話　やばい、やばすぎる！

ｓｉｄｅリューグ

・・・・・・・・・・・・・・・俺は今、一体何を見ているのだろうか・・・・・・・・・

別に仁が心配だったわけじゃないが様子を見に来てみたら厨房から変な悪臭が漂ってきたのでこっそりと覗いてみると――――――――――――――――――――――――――――

「理香、ちょっとそこのワルゲリャルタイガーの生き肝を取ってくださるかしら。」

女性陣が（一部除く）厨房に立ってせわしなく動いていた。

「ちょっと待って、・・・・・・・これね。」

リリィは受け取ったワルゲリャルタイガーの生き肝をそのまま煮込み鍋の中に投入した。

・・・・・・・・・・・・・・・俺の記憶によるとその生き肝はおう吐や下痢を引き起こす上に、強心作用もあって下手をすると心臓が停止をする危険もあるんだが・・・・・・・・・

「メアリ様、食材は洗剤で消毒してはいけません。」

「ええっ！？　そうだったんですかっ！？」

「どうしてアイリス様が驚かれているのですか。」

メイドさんは自分の料理をこなしつつメアリとアイリスを注意している。

アイリスは洗剤をつけてしまった竜の睾丸と書かれた食材（流石は少女といえど獣人・・・・・・選ぶ食材がワイルドだ・・・・・・・というか竜人の国で竜の睾丸って・・・・・）を慌てて水で洗い流す

・・・・・・・・それにしてもそこからわからない奴らもいるのか・・・・・・・・・・・・・・・

「ルナール、あなた一体何を混ぜているのかしら？」

「秘蔵の隠し薬（やく）です。これを飲めばどんな病人も立ちどころに元気になり手当たり次第に周囲の人間に襲いかかるという――――――――――――――――――――――――」

「捨てなさい。今すぐに。」

リリィに命令されてルナールはすごく残念そうに謎の粉を懐にしまった。

というか隠し味ならぬ隠し薬っ！？　こいつらは本当に料理をしているのかっ！？

「リリィ、ちょっとそこの〇？？？？？？？△△を取って。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もしかしてこの泡立

っている紫色の毒々しい謎の液体のことですの・・・・・・・・・・？」

「失礼ね。それは私が独自の研究で開発したれっきとした秘伝の調味料よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・理香、意外なことにあなたもまともな人間ではなかったのですわね・・・・・・・・・・・・・・・・」

謎の液体を受け取った理香は中身を豪快に自分の作っている料理に入れた。

液体を入れられた理香の料理（なんだろうかアレは・・・・・・・・変色しているが何かの肉と野菜の炒め物か？）は発光して（発光っ！？）虹色の蒸気を噴き出し始める。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺もトレジャーハンターのはしくれとして世界中を旅してあらゆる料理や調味料を見てきたが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あの様な謎の調味料は見たことが無い。

「うなぁ～っ！　リャナのはもうすぐ出来上がるのだぁ～っ！」

「完成といっても単なる豚の丸焼きじゃないですか。」

「うなぁ～っ！　メアリみたいに食べられないものを作るよりはマシなのだぁ～っ！」

「なっ！？　そんなことありませんよっ！　リャナさんっ！」

メアリと言い争いながらも味付け様の塩やタレを豚の丸焼きにかけるリャナ。

何故だろう。丸焼きが一番まともな料理に見えてしまうのは。

ちなみにメアリの料理は――――――――――――――――――――

うん、なんだろうなアレ。

強いて言うなら・・・・・・・・・・・・・・・・・・炭？

「まったく・・・・・・・・リャナさんは失礼な方ですね・・・・・・・」

あっ、いま重曹入れた。

何を作っていたのか知らないがこの時点で何を作っていようともアウトだろ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

メイドさんは指導するのに疲れたのか黙々と自分の料理を作り続けている。

流石はメイドを名乗るだけあって料理の方も――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

隙間から見えたメイドさんの料理に俺は絶句した。

一瞬だけしか見えなかったが間違いなくアウトだ。

・・・・・・・・・味の方は知らないが誰だって見た目がヘドロと不定形物の固まりじゃ食欲は失せるだろうな。

俺は何も見なかったことにしてその場を立ち去ろうと――――――――――――――――――――――――――――――――

「リリィ様、ちょっとそこのスライムを取ってくださいませんか。」

「わかりましたわ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。

いろいろあったけどお前は結構良い奴だったよ・・・・・・・・・・

じゃあな。来世はもっと楽しい人生を送れよ。

仁の為に祈りをささげた俺は死地からの脱出をはかった。

「どこに行かれるのですか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・宿屋の出口で微笑みながら俺に声を掛けてきたアマネの姿はまさしく死神にしか見えなかった。

立ち止まらずに全速力で走り出す俺は気付いたら世界が回転していた。

「味見役が欲しかったところでしたので、丁度良い時に来てくれましたね。」

メイドさんに投げられたのだと気付いた時には、既に俺は縄で縛られて魔界へと運ばれていた。

「俺・・・・・・・・・・もし生き残ることができたらあの娘に告白するんだ・・・・・・・・・・」

俺の口からは何故かその様な言葉が自然と出ていた・・・・・・・・・・

第百三十一話　やばい、やばすぎる！（後書き）

さようならリューグ・・・・・・・・・・・・・・・

第百三十二話　俺は逃げる、逃げるんだ！（前書き）

逃げられません。

第百三十二話　俺は逃げる、逃げるんだ！

宿屋の二階の一室。

ベッドで横になっている俺と近くのイスに座っている東間は等しく絶望を味わっていた。

原因は昨日、東間たちが帰ってきたのは夜中だったので料理は今日のお昼に作ろうということになったからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ」

「どうして、こんなことになっちゃったんだろうね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・さあな。」

しっかりと休んだおかげか、先ほどまでは話すことすらできなかったというのに今では普通に会話できる俺は自分自身の回復力に呆れながら、しかしまったく喜びを感じてはいなかった。

なぜなら何かを食べることができないくらいひどい状態なら、これから行われる処刑を回避することが可能だったはずだからだ。

その場合、俺は東間を生け贄として差し出して生き延びる算段だったのに・・・・・・・・

「仁、例えどんなにひどい状態だったとしても僕が絶対に君にも食

べさせたよ。」

「東間っ！　てめぇ親友を地獄に巻き込むつもりだったのかっ！！」

「親友と呼んでいる相手を見捨てるつもりだった人に僕を批判する権利は無いっ！！！」

見苦しく言い争う俺たちに呆れる視線が一つ。

「東間様、仁殿、二人ともいい加減にしたらどうですか。」

扉付近のイスに座って俺たちが逃げ出さないように見張り役を引き受けたラフィだった。

曰く、「料理はちょっと・・・・・・・・・・・・・・・」と進んで見張り役を引き受けたそうだ。

・・・・・・・・・・・・・この謙虚さが理香にもあれば・・・・・・・・っ！！

「お二人がそんな態度では料理に励んでおられる皆様に失礼ですよ。」

年老いたおばさん「・・・・・・・・・・どれだけ失礼なことを考えているのですか。」もとい若くてきれいな年上のお姉様のありがたいお言葉に俺の脳裏に雷鳴が轟(とどろ)いた。

「っ！？　・・・そうか・・・・・・・・・・・・・そうだよな・・・・・・」

俺はベッドからゆっくりと起き上り。

「・・・・・・確かに、料理は真心って言うよな・・・・・・・・」

ゆったりとした足取りで歩き始め。

「味なんて二の次、本当に大切なのは料理を食べさせる相手への思いやりの心だよな・・・・・・」

窓を開け、己の犯した罪を悔い改めるように窓の外へ身を乗り出し

――――――――――――――――――――――――――――――――

「逃がすかぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!!」

今まで一度も感じたことの無い迫力の束間に後ろから羽交い絞めにされて取り押さえられてしまった。

「ふざけんなっ!!!　俺は生きるからお前一人で処刑されろっ!!!」

「処刑だなんて物騒だよ仁っ！　料理は真心なんだよねっ!!　じゃあその真心をしっかりと味わった方が良いよっ!!!」

回復したといっても体中に激痛を感じていることには変わりない。

だがそれでもいまこの激痛に耐えて逃げることさえできれば希望の明日があるはずなんだっ!!

「離せ東間っ！！　俺たちは心友だろっ！！　の〇太とジャ〇アンみたいな関係だろっ！！　だから大人しく人身御供（ひとみごくう）になってくれよっ！！」

「僕がの〇太っ！？　それならジャ〇アンはピンチの時には体を張って助けてくれるはずだろっ！！」

「俺はの〇太やス〇夫を使い捨てて逃げるジャ〇アンなんだよっ！！」

「最低だろそのジャ〇アンっ！！！　というかそれはもうジャ〇アンじゃないからっ！！！」

口論しながらももがき続ける俺を離すまいと必死に押さえ付ける東間くっそ、こいついつの間にこんな力を・・・・・・・・・・・・・・・っ！

それとも単に俺が弱り過ぎてるだけか？

暴れ続ける俺たちにラフィは深い溜め息を一つ。

「以前、理香様がおっしゃっていましたが・・・・・・・・東間様は本当に仁殿と一緒にいると無邪気にはしゃぐのですね。」

命を掛けた一進一退の攻防がラフィにははしゃいでいるだけに見えるらしい。

激しく抗議したいところだが、今は脱出するのが先決――――――――――――――――――――――――――――――

「東間っ！！　仮にも勇者と呼ばれている者がこんなことで心を乱して情けないとは思わないのかっ！！」

「思わないっ！！！」

はっきりと言い切った東間に多少驚きながらも説得を続ける。

「今回の料理対決だって俺のためというのはただの口実でメアリやリャナはお前に食べさせるために料理をしているんだろっ！！」

「そこでどうしてメアリやリャナの名前が出てくるのかはわからないけど、それなら理香やリリィにメイドさんたちは君に食べて欲しいから料理をしているんだろっ！！」

「なんでだよっ！！」

叫び返した俺に東間が一瞬沈黙した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まさか、気付いていないのかい？」

「何に。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は東間の腕を振りほどくと自由を得るために窓の方へ駆け出した。

「あっ！？」

我に返った東間が俺を押さえつけようとするがもう遅い。

これで俺は助かったんだっ！！

喜びと共に俺は明日への飛翔の為の最後の一歩を踏み出した。

いぎゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・

それに記憶違いで無ければ今の悲鳴の主は――――――――――――――

「リューグ・・・・・・・・・・・・っ！？」

この時、俺は全てを悟った（様な気がした。）

うげぇあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

再び聞こえてきたリューグの悲鳴と同時に逃れ得ぬ絶対なる恐怖が迫っていることを思い知らされてしまった。

第百三十二話　俺は逃げる、逃げるんだ！（後書き）

今回は女性陣が料理を作っている間の仁たちの話でした。

人気投票の結果はいつも通り活動報告の方でのミニコーナーで行います。

小説の方を先に更新しますが、今日中には結果発表をします。

いつも通りグダグダなミニコーナーが完成しましたのでよろしければそちらもお読みください。

第百三十三話　諦めなければ、きっと道は開ける！（前書き）

仁が無駄な足掻きをします。

第百三十三話　諦めなければ、きっと道は開ける！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

悲鳴が聞こえ始めてから約三十分が過ぎようとしていたころ。

俺は逃げることをあきらめて窓の外にある太陽を虚ろな眼差しで大人しく眺め、東間はイスの上で座禅を組み悟りを開いたかのように自然と一体となって全てを受け入れていた。

ラフィは何とも言えない複雑な表情で俺たちを見つめていた。

ふと気付いたら断続的に続いていた悲鳴が聞こえなくなっていた。

不思議に思っていると――――――――――――――――――――――――

「準備が完了しました、どうぞこちらへ。」

扉を開けていつも通り無表情なメイドさんが姿を現した。

「逝こう、仁。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ。」

「行こう」の言葉に若干違和感を覚えたがツッコミを入れても仕方が無いこと。

俺と東間は立ち上がりメイドさんの後ろについて行き、俺たちの後ろをラフィが歩く。

もともと体は回復へ向かっていたらしく歩いても特に問題は無かった。

ニ階の廊下を歩き、階段を降りて一階へと。

「なあ、メイドさん。」

「なんでしょうか。」

階段を降りていく最中にどうしても聞きたいことを勇気を振り絞って尋ねてみる。

「その・・・・・・・・・・リューグは・・・・・・・・・・・・・・・どうなったんだ?」

「リューグ様? お見かけしておりませんが。」

「・・・・・・・・・・そう・・・・・・・・・・・・・・・・か・・・・・・」

後ろでラフィが困惑するのがわかったが、俺はメイドさんの態度で大体のことを察していた。

胸元で聖印を切りながら俺はリューグに対してある思いを持った。

・・・・・・・・・・リューグ・・・・・・・・・どうせ犠牲になるなら料理? 全部ダメにしておけよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・まったく・・・・・・・使えん奴だ・・・・・・」

「何かおっしゃいましたか。」

「別に。」

会話はそれで途切れ、そのまま食堂へとたどり着いた。

テーブルに着かされた俺はメイドさんの手によって縄でイスに固定される。

「っておいっ！！　なんでイスに縛り付けられなきゃならないんだっ！！！」

「逃げられたら困りますでしょう。」

「当たり前の様に答えるなっ！！！」

俺の文句の叫びなどどこ吹く風とメイドさんは黙々と俺を縄で縛る。

作業が終わったら次は東間をイスに縛り付け始めるが――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

仙人の如く全てを受け入れていた東間は無言のまま縄で縛られた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？　東間の奴もしか

して生きること自体を放棄してないか・・・・・・・・・・・・・・・？

「これで完了です。では最初の料理を運んできましょう。」

そう言ってメイドさんは厨房の方へ消えて行き、入れ替わるように厨房からアマネが姿を現した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、アマネ。」

珍しく浮かない顔をしているアマネに声を掛ける。

「ああ、いえ、なんでもありません。ただ――――――――――――――――――――――――」

アマネは厨房の方を振り向きポツリと一言。

「リューグさんの後始末が少々面倒だったもので・・・・・・・・・・・・・・・」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

全てを聞き終える前に俺は気合を入れて無理やり縄を引き千切ろうとする。

だが――――――――――――――――――――――――――――――

「くぉのおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おぉっ！！！」

どれだけ力を入れても一向に縄が切れる気配が無い。

結び方が特殊なのか縄自体が特別性なのか。

いずれにせよ、俺はメイドさんを侮っていたということか・・・・・・・・・っ！！

「大丈夫ですよ、仁さん。」

いつも通りの微笑みを浮かべたアマネが無駄な抵抗を続ける俺の肩に手を置いた。

「こんなこともあろうかと、墓石は既に手ごろなのを手に入れてありますから。」

「どんなことだぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

最後の力を振り絞っての抵抗はやはり無駄に終わった。

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ・・・・・・・・・・・・・・・」

力尽きた俺は汗だくになりながら息を切らした。

「お待たせいたしました――――――――――――――――――――――――――――」

蓋(ふた)をされている二つのお皿をそれぞれ片手で持ったメイドさんが俺

の様子を訝(いぶか)しげに見つめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なにかあったのですか？」

「いいえ、なにも。」

答えたのは俺では無くアマネだったがメイドさんは気にせずにお皿を俺たちの前に置いた。

「審査は公平に行うために誰が作ったかは伏せさせていただきます。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・審査、できるものだったらな・・・・・・・・・

「では最初の一品です、お召し上がりください。」

そう言ってメイドさんは蓋を開けた――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅアマネ

この人たちはどうしてこんなに面白いのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふふっ。」

先ほどのリューグさんにしろ傍観者の立場なら安全に楽しむことができた。

被害者には絶対になりたくない光景だったが。

「さて、一体誰が優勝するのか――――――――――――――――――」

口に出しながら私は、それ以前にどこまで意識を保っていられるかの方が気になっていた。

第百三十三話　諦めなければ、きっと道は開ける！（後書き）

次回、試食（拷問）編開始です。

第百三十四話　・・・・・・・・・、ぐふ！（前書き）

大体、一話で二人の料理が出る予定です。

どれが誰の料理でしょう？

第百三十四話　・・・・・・・・・、ぐふ！

「へぇ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

蓋の中から出てきた最初の料理は分厚く大きな焼き肉だった。

程良く焼けた豚肉（見た目は）何のつけ合わせも無くソースがかかっているわけでも無かったが香ばしい香りと溢れ出る肉汁が食欲を誘ってくる。

誰が作ったかは知らないが少なくとも理香にはこんな真似はできないはずだから、安心して食べられる。

「流石に縄で縛られたままでは食べられないでしょう。」

そう言ってメイドさんはスプーン（普通ナイフだろ・・・・・・）を取り出し東間を縛っている縄を切り裂いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・良いんですか？　メイドさん。」

「東間様は信用できますから。」

「メイドさん、俺の縄は――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・この扱いの差は一体何だろうか。

「でもメイドさん、それだと仁が食べられないんじゃ――――――――――――――――」

「ご心配無く。」

メイドさんはナイフとフォークを取り出し肉を一口サイズに切ってからフォークで俺の口元まで運び。

「あ～ん。」

躊躇いも無くそんなセリフを口にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・羞恥プレイか。

ラフィとアマネはニヤニヤと、東間は微妙に複雑そうな顔をして俺を見つめている。

「あ～ん。」

口を開かない俺にメイドさんは同じ言葉を繰り返す。

俺は口を閉じたまま顔を背けてせめてもの抵抗をする。

しかし――

「仁っ！！！　今すぐ口を開けるんだっ！！！！」

東間の必死な叫び声に何事かと顔を東間の方に向けようとした時。

メイドさんと目が合った。

・・・

・

一言で言うのならそう――――――――――――――――――――――

「「・・・・・・・・・・・・・・平均？」」

俺と東間は同時につぶやいた。

「次の料理です。」

完食した（させられた）焼き肉の皿を厨房に戻しに行ったメイドさんはそのまま底のある皿を二つ持ってきたことから次の料理が汁物系であることが判断できた。

「どうぞ。」

テーブルに置き蓋を取ると、最初に猛烈な刺激臭が漂ってきた。

「うっ・・・・・・・・・・・・・・・・・！？」

「なんだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！？」

思わず鼻を塞ぐ東間と両手が動かせないので刺激臭をそのまま嗅ぐことになってしまった俺。

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・うぅぅっ！！」

少し不意を突かれたが、この程度の刺激臭なら耐えることは可能だ。
俺はちょっと涙目になりながら中身を確認すると――――――

確証は無い、だが口にすれば命の危険にさらされると本能が告げている。

「あ～ん。」

本能が告げている。

「あ～ん。」

・・・・・・・・・・・・本能が告げているんだってば～・・・・・・・・・・・・・・

「あ～ん。」

涙目で声に出さない訴えをしている俺にメイドさんは無慈悲にも痙攣している具材と真っ赤な液体を掬い上げたスプーンを俺の口元に運んでくる。

「仁・・・・・・・・・・・・・・・・・・死ぬときは一緒だ・・・・・・・・・」

東間も覚悟を決めたらしくただ浮かんでいただけの物体（てめえも痙攣しているやばそうな物体を食えよっ！！！）と真っ赤な液体を口に入れた。

その勇姿を見た以上、俺だけ逃げるわけにも行かず（単に逃げられないとわかっていただけだが）勇気を振り絞ってスプーンを口に含んだ――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅラフィ

「アマネさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

見ていてふと気になったことを私は隣で同じ様に見ているアマネさんに訊いてみることにした。

「なんでしょうか。」

「これは料理大会では無く単なる処刑なのではないでしょうか。」

「面白ければ良いんじゃないでしょうか。」

即答された言葉に私は少し考え込んで――――――――――――――――――――――――

「それもそうですね。」

余計な口出しをせずに謎の液体を口に含んで悶え苦しむ東間様に萌えることにした。

第百三十四話　・・・・・・・・、ぐふ！（後書き）

仁に食べさせる役はじゃんけんで決めました。

第百三十五話　この程度、何の問題も無い！（前書き）

今回は耐えられます。

第百三十五話　この程度、何の問題も無い！

「・・・

ブルの上に置かれた先ほどから俺が視界に入れないようにしていた物を見る。

「地獄への道連れが戻ってきたことを喜ぶべきなのかな？」

生きることを完全に諦めたその言葉に俺は顔を上に向けて天井を見つめた。

「・・・

ースっぽいタレがかかった一品。

如何にもサクサクな仕上がりとなっているそれは、見かけだけなら最初の肉と同じレベルと優秀な物だと言える。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・衣（ころも）の色がドピンクなのを除けば、だが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も東間も食べることにすごく躊躇した。

だってここまで衣が深いピンク色だと、もはや毒々しいとしか言いようのないコロッケ形の物体となっている。

「あ～ん。」

しかしメイドさんがそんな俺を許すはずもなく先ほどのようにナイフとフォークで切り分けて俺の口元へ運んでくる。

ちなみに中身もピンク一色の液体だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・くっそ、結局食わなきゃいけないのかよ・・・・・・・

まあさっきのが理香の料理だろうから命の危険はないだろうが。

「いっ・・・・・・・・・・・・・・・・・いただきますっ！」

東間も理香の料理では無いことがわかっていたためか、自分で切り分けたコロッケの形の物体を口に入れた。

「あ～ん。」

多少のダメージは覚悟して俺はコロッケにかぶりついた。

瞬間――

――様々な薬品のイメージが鼻から、舌から、俺の脳裏を横切って行く。

まるで走馬灯の様に駆け抜けて行くそのイメージは幻想の様な神秘さを抱かせた。

・・・

「次の料理です。」

いろいろな種類の薬を合わせただけの様なコロッケの形の物体を完食させられた俺たちの前に出された次なる料理。

蓋を開けたその中に入っていたのは――――――――――――――――

「うわぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「また焼き肉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

切り裂かれた分厚い焼き肉だった。

前回と同じように溢れ出る肉汁と香ばしい香りが食欲をそそるが――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何の肉だ、これ。」

違うのは豚肉では無く、完全に見たことも無い肉だということだった。

近い肉と言われても正直よくわからないその肉に警戒心を抱くが。

「あ～ん。」

やはりまた適当な大きさに切り分けられた肉を俺の口の前に差し出すメイドさんに逆らえるはずも無く、警戒心を抱いたまま肉を食べ

る。

・・・・・・・・・・・・・・・不思議な味、とは思うが食べられないわけでもない。

東間も俺と同じ不思議そうな顔をしながら肉を食べている。

「ちなみにお二方。」

不思議がる俺たちを見てメイドさんがつぶやく。

「その肉は竜の睾丸です。」

・・・・・・・・・・・・・・・

メイドさんは理香の手料理を食わされている俺たちがその程度のことで動揺するとでも思ったのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・次の料理を運んできます。」

何故か悔しさをにじませた声を出しながらメイドさんは皿を持って厨房の方へ行ってしまった。

sideリューグ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・

！！

俺は二人が早く地獄へ堕ちるように呪詛の言葉を吐き続けた。

第百三十五話　この程度、何の問題も無い！（後書き）

リューグ、まだ命尽きていませんでした・・・・・・・・・・・・

第百三十六話　まさか、これほどとは！（前書き）

今回は危険物二連続です。

第百三十六話　まさか、これほどとは！

「次の料理です。」

先ほどと同じ様にメイドさんが運んできた皿の蓋を開けるとそこには――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・炭だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・炭だね。」

おおよそ、料理とは呼べない様な真っ黒な炭だけが乗せてあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・誰だか知らないがもう少しまともな物を作れなかったのかよ。」

「仁、女の子が一生懸命作ってくれた料理をそんな風に言うのは良くないよ。」

東間は理香の料理以降、ひどい目に合っていないからか余裕の表情でそんなことを言ってくる。

確かに理香の料理よりひどい料理なんてあるとは思えないから気絶する心配はなさそうだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ～ん。」

嫌な予感をどうにも振り払うことのできない俺にメイドさんは躊躇することなく炭を俺の口へと運ぶ。

「いただきます。」

東間もナイフで炭を切りフォークを使ってそれを口に入れる。

しょうがないので俺もフォークに刺さった炭を口の中へと――――――

「落ちついてください。」

どこかから取り出したフォーク（料理を刺していたものとは別の物）を俺の額に突き刺すメイドさん。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ここまでやる必要はないんじゃないのかな。」

「すみません、仁を正気に戻すためにはこれくらいやる必要があると思いまして。」

額から流れ落ちる血の気配を感じての抗議の言葉はあっさりと一蹴されてしまった。

「魔王と対峙する夢でも見られたのですか？」

刺さっているフォークを抜くとほぼ同時に止血、消毒、包帯巻きを終わらせた（この辺は流石メイドさんとしか言いようが無いな。）メイドさんの質問に俺は夢を内容を思い出しながら答える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・確か・・・・・・変な杖を持った白い少女が笑顔で撃ってくる光線から逃げ惑っていたような・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「変態ですか。」

「否定はしない。」

俺の返答にメイドさんが距離を取ったような気がしたが気のせいだと思っておくか。

「・・・嫌だ・・・・・・・・・・・もう何も信じないし誰も信じたりするもんか・・・・・・・・・・」

妙なつぶやきが聞こえてきた方向を見やるとイスの上で体育座りをしながらブツブツと同じ様な言葉を繰り返している東間の姿があった。

その姿からは先ほどの余裕はまったく感じられなかった。

「お二人が気絶している間に既に次の料理を運んであります。」

その言葉を聞いた瞬間、東間の体がビクッと震えたのは、きっと痙攣を起こしただけなのだろう。

「ではどうぞ。」

蓋を開けた瞬間、まばゆい光が食堂中を覆った。

「くっ・・・・・・・・・・・

東間は無言で光輝く危険物を見つめている。

この料理を目の前にして逃げ出さないのは、流石と――――――――――――――――――――――――――――

「うわあああぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

全力で逃げ出した。

「無駄です。」

しかしメイドさんは無情な一言を発している間に東間を縄で縛り上げて座っていたイスに固定させた。

「嫌だっ！！　もう僕は限界なんだっ！！！」

東間が必死にもがく姿を俺は憐みなど一切持たずに見物していた。

はっ！　俺を見捨てて逃げようとするからだ、ざまあみろ。

「仕方ありませんね、ではこの料理は仁だけに食べていただきましょう。」

・・・

だが光輝く危険物を俺の口へと近づけるメイドさんが夢に出てきた
魔王以上に恐ろしい存在だということだけは理解できた。

「メっ、メイドさん。ちょっと・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ～ん。」

「トイレに行きたいな～なんて・・・・・・・・・・・」

「あ～ん。」

「ほっ、ほら、さっきまで食べた物を出してからの方がおいしく感じられるような・・・・・・・・・・」

「あ～ん。」

言葉による時間稼ぎは、逃げられないことを悟るだけの結果に終わってしまった・・・・・・・・・・・・・・

第百三十六話　まさか、これほどとは！（後書き）

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・

第百三十七話　死ぬから、ほんとに死んじまうから！（前書き）

初めてではない臨死体験。

第百三十七話　死ぬから、ほんとに死んじまうから！

「あははははは、兄さ～ん。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ？

少し離れた場所から聞こえてきた声に俺は数度まばたきしながら目を開けた。

「ここは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

自分が立っている場所がきれいな花畑だと理解するのに数秒かかった。

いつここに来たのかも覚えていないし、なんでここにいるのかもわからない。

「兄さ～ん、こっちこっち～。」

声の方向に視線を向けるとこちらに向かって手を振っている少女が一人。

周りを見渡しても誰の姿も無いから、少女が見えない人に手を振っていない限り俺に向かって手を振っているということになる。

はて、あの少女は俺の知り合いなのだろうか。

俺の知る限り、俺を兄と呼ぶ奴はいない。

俺の父と母が新たに子供を産んだというならわかるが、それにしては成長し過ぎている。

もっとも、隠し子とかがいるのなら話は別だが。

少なくとも俺の記憶の中にあの少女の姿や声は存在していない。

「兄さ～ん、早くこっちに来て～。」

だが自然と俺の足は少女の方へ歩いていた。

普通なら子供であろうと見知らぬ相手の元へ行こうとしないはずなのだが・・・・・・・・・・

「こっちこっち～っ！　早く来てよ～っ！」

少女へと続く道の先にはゆるやかな流れの大きな川と渡り船があった。

「兄さ～ん、早く早く～っ！」

渡り船に乗ると一枚の紙と手漕ぎ板があった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

手紙を開くと中には一文。

『さんずの川、レンタルボート、料金六文。」

「って三途の川じゃねえかっ！！！」

思わずツッコミを入れた俺の視界がいつの間にか別の場所に切り替わっていた。

「三途の川とは何ですか？」

「なんでもない、気にするな。」

隣に立っていたメイドさんに適当に返答しておく。

というかやけに喉が痛むんだが・・・・・・・・・・・・・・

「それにしても驚きました。あの料理？　を一口食べただけで消化中の胃の中身ととてつもない量の胃液を吐き出すとは。」

・・・・・・・・・・・・・・ああ、喉が胃液による酸で溶けたからこんなに痛いのか・・・・・・

「仁・・・・・・・・・・・・生きているのか？」

心配そうに声を掛けるのは逃げ出そうとして逃げられなかったくせに発光料理を食べなかった裏切り者。

「実際、死にかけたが何とか生きてる。それにしてもまさかあそこまでの破壊力を持った兵器（りょうり）を作りだすとは・・・・・・・・・・・・・・」

「正直、みんなを侮っていたね・・・・・・・・・・・・」

臨死は初めてではないにしろ、まさか見知らぬ亡霊に呼び掛けられる日が来るとは思っていなかった。

しかしわざわざ俺に呼び掛けたあの亡霊は一体誰なんだろうか・・・・・・？

「次の料理です。」

考え事をしているうちにメイドさんが次の料理を運んできた。

「どうぞ。」

メイドさんが二つの蓋を開け――――――――――――――――――――――

「「グゲリュウアアアアアアァァァァーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」」

そのまま蓋を戻した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

重苦しい沈黙が場を支配する。

「まさかあそこまで成長していようとは・・・・・・・・・・・・・・・」

メイドさんのつぶやきを俺たちは聞き逃したりしない。

「待て、メイドさん。一体何を作り上げたんだ。」

「一瞬だったけど、不定形のゲル状の生物が僕たちを襲おうとしていたのは気のせいじゃないよねっ！！」

メイドさんは俺たちの質問には答えず。

「少々、お待ちください。」

二つの皿を持って厨房の方へ消える。

「「ゲルゼリョオオオオオォォォォーーーーーーーーーーーーっ！！！！」」

しばらくした後、先ほどと似たような叫び声と共に聞こえてきた戦いの音。

ナイフが刺さる音や理香やリリィの呪文詠唱と爆音、アイリスの悲鳴やベチョベチョと粘液が張り付く音――――――――――――――――――――

五分程度、時間が経過すると厨房は静かになった。

「お待たせいたしました。」

何事も無かったように平然と二つの皿を持ってきたメイドさんの後ろには体中グチョグチョの粘液にまみれた理香たちの姿があった。

何か聞くべきか迷ったが、メイドさん以外の女性陣は粘液を床に垂らしながら風呂場の方へ歩いていった。

「この粘液・・・・・・・・・・・・・・・仁にお仕置き用として使ってもらって・・・・・・・・・・」

一人ブツブツと妄想にひたりながら恍惚となっていた変態（ルナール）がいたが無視しよう。

「今度は大丈夫です、どうぞ。」

蓋を開けると予想通り不定形の固体と液体との中間でできたゲル状の何かがあった。

ところどころに埋め込まれている動物の骨や何かの植物（紫色）がより一層の不気味さを引き出している。

「料理名は『とあるメイドの嫉妬』となっております。ではまずは仁から食べてもらいましょう。」

わけのわからない料理名をつけたメイドさんはナイフで不定形の一部を切り裂いた。

「ギョォオオオオオオォォォォォォォンっ！！！！」

瞬間、おたけびと共にゲルの中から出てきた目が俺を睨みつけた。

「まだ生きていましたか、まあ問題は特にありませんが。」

フォークを取り出したメイドさんは切り取った不定形を突き刺し俺の口へ運ぶ。

「あ～ん。」

俺は軍の携帯食が天国だったんだと思ってから生きることをあきらめて口を開いた。

ｓｉｄｅ???

「ねぇ、母さん。」

キモい男女を兄と呼ぶという屈辱的な夢を見た私は母さんに尋ねてみることにした。

「母さんって、赤い髪の青い目をした男か女かよくわからない子供とかいるの?」

「いるわよ。今は日本で一人暮らししているはずだけど・・・・・・」

答えてから母さんは不思議そうな顔をする。

「どうして髪の色や目の色まで知っているの?　話したことあったかしら?」

「ううん、ちょっと気になる夢を見たの。」

私はそれ以上は何も言わずに父さんに言われた課題をこなすことにした。

第百三十七話　死ぬから、ほんとに死んじまうから！（後書き）

ちなみに魔王の名を継げるのは一人だけです。

第百三十八話　ふぅ、生き残ったぜ！（前書き）

試食の際、メイドさん以外の女性陣には仁たちの様子はわからないようになっておりました。

第百三十八話　ふぅ、生き残ったぜ！

迫り来るゲル状の何かから俺は必死に逃げていた。

ドロドロの触手を伸ばし俺の体を縛りつけようとする。

いつもなら蹴散らすはずの俺は何故か戦う気になれずに逃走を続けている。

本能的に勝てないと思っているのか、それともっと別の理由からか。

なんにしても今の俺には逃げる以外の選択肢など存在してはいなかった。

「はぁ、はぁ、あっ！？」

突然、何かに足を掴まれその場に転倒してしまう。

その間にもゲル状の何かは近づいて来ている。

俺は足を掴んだ相手を振り払うために後ろを向くと――――――――――――――――

「お前も地獄に堕ちてこいよ・・・・・・・・・・・・・・・」

青白い顔をして死んだ目のリューグが地面から顔と手だけを生やしていた。

「ってあの馬鹿本当に死んだのかよっ！？」

絶叫と共に俺は意識を取り戻した。

既に縄は解かれており口の中の感覚がまったく無くなっていること以外は普通の状態だった。

「お目覚めですか。」

「目覚めたの方が良かったのかどうかはわからないがな。」

相も変わらず俺のそばに立っていたメイドさんが無表情で訊いてくる。

あの馬鹿もあの料理を食ったのかと隣の席を見てみると――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ？」

東間の姿が無い。

メイドさんに縄で縛られた以上、自力での脱出は不可能だと思っていたが・・・・・・・・・・・・？

「東間様でしたらお部屋でお休みになられております。」

俺の考えを察したかのようにメイドさんが答える。

「お腹が満腹になられたご様子で、完食なされた後眠ってしまわれました。」

・・・・・・・・・・完食、させられたんだろうな・・・・・・・・・・・・・

永眠していなけりゃいいけど・・・・・・・・・・・・

「東間様はメアリ様たちが見ておられますから問題はありません。それに次の料理は仁だけが食べた方がよろしいでしょうから。」

メイドさんが後ろに向かって手招きする。

「そろそろおいでになった方がよろしいと思いますが。」

呼ばれて中に入ってきたのは――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・トウキ。」

うつむきながら皿に料理を乗せて歩いてくる。

その表情はうかがいしれなかったが、俺に恐怖を抱いているのは間違いないだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙ったままトウキは俺に料理を差し出す。

不器用に切り裂かれところどころが焦げている野菜炒め。
それを観察している俺にメイドさんがフォークを渡してきた。
「どうぞ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
俺も無言で野菜を突き刺し口の中に入れる。
「まずい。」
口の中に入れただけではっきりと言える。
こげくさい上に甘過ぎるし、食感もパサパサとジャリジャリが入り混じった感じだ。
点数評価を付けるなら百点中確実に一桁台になる。
だが――――――――――――――――――――――――――――――――
「食える分だけ、理香やメイドさんよりもずっとマシだ。」
「それは後で処刑されたいと申していると判断してもよろしいでしょうか。」
メイドさんの鋭い殺気は右から左へスルー。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・師匠。」

ずっと黙っていたトウキが不意に口を開く。

「お願いしますでござるっ！」

皿をテーブルの上に乗せたトウキはその場で俺に土下座をしながら

「それがしを鍛えてほしいでござるっ！」

「却下。」

本気で頼み込むトウキを俺は一蹴した。

「鍛えてくれると約束してくださるまでここを動かぬでござるっ！」

「それじゃあそのまま動くなよ。」

そのまま立ち上がり俺は部屋に戻る。

「・・・・・・・・・・・・えっ？　あの、師匠・・・・・・・・・・・・？」

困惑しながらトウキは土下座したまますがるような声を出す。

だが俺はトウキを鍛えるつもりはなかった。

別にトウキをいじめているわけではない。

俺は誰かを鍛え上げられるほどの経験を積んだ熟練者では無い。
それに仮に鍛えるとしても父親や母親から教わったやり方しかできない。
そんなことをすればトウキが持たないのは明白だったからだ。
「残念ですが仁、あなたは断ることはできません。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なに？」
トウキに助け船を出したのは意外なことにメイドさんだった。
「・・・・・・・・・・・・・どういうことだ、メイドさん。」
「あなたを従わせるのは簡単だと言っております。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ほぉ。」
メイドさんの方へ振り向いた俺は視線を鋭くする。
確かにメイドさんの言うことなら（悲しいことに）聞き入れざる負えないかもしれない。
だが今回のトウキを弟子にする件に関しては、俺は例えメイドさんの命令だとしても――――――――――――――――
「後ろをご覧ください。」
メイドさんが真っ直ぐ指差した方向へ素直に視線を移すと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁・・・・・・・」

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！？」

そこには悲しそうな表情を浮かべた理香が立っていた。

ｓｉｄｅメイドさん

理香様を見て明らかに動揺している仁を少し距離をとりながら見つめていました。

生まれた時から長い時間を共に過ごしてきた存在。

私の知らない仁の顔を知っている深い絆を持った女性。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・

第百三十八話　ふぅ、生き残ったぜ！（後書き）

実は隠れて料理を作っていたトウキ。

しかし次回は理香がメイン。

第百三十九話　ああもう、まったく！（前書き）

理香のストレスが爆発した模様です。

第百三十九話　あああもう、まったく！

真っ直ぐに俺を見つめている理香を避ける様に目をそらした。

「・・・・・・・・・・・・・メイドさんから聞いたわよ。」

理香が悲しさと怒りの入り混じった声で詰め寄ってくる。

メイドさんから何を聞いたのかはわからないが、どうせろくでもないことだろうな。

「あんたがロリコン趣味だってことをっ！！！」

「んなわけあるかぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！」

思わず絶叫ツッコミを入れてしまうほど無責任な誤情報だった。

というかメイドさんっ！！　理香にどんなデタラメを吹き込みやがったっ！！

しかも今はトウキの弟子入りについての話のはずだったよなぁっ！！！

あまりにも脱線した話の内容に俺は冷静な思考ができずに混乱してしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

視界の隅で気のせいか発端であるメイドさんも困惑している表情を浮かべていた様な気がする。

「だけど仁っ！！　アイリスもフレスも幼い娘じゃないっ！！！」

「否定はせんが成り行きで一緒に旅をしているだけだっ！！」

「リリィやルナールだって小柄できれいだしっ！！」

「それも否定できんがっ！！」

「そこにいるトウキだって立派な幼女よっ！！　あなたが成り行きで一緒になっている娘はみんな小さくて可愛い娘ばかりじゃないっ！！」

「ぐっ・・・・・・・・・・・・うぅぅっ！！」

どれも否定できない・・・・・・・・・・・・・・・っ！！

「あのぅ・・・・・・・・・・・師匠？　理香殿？　それがしは今年で十九になったので幼女扱いされるのはちょっと・・・・・・・・・・・・・・・」

トウキがブツブツとつぶやいているが今はまず理香の誤解を解かなければ・・・・・・・・・・・・っ！

「信っじられないっ！！　いつからそんな変態になったって言うのっ！！　本当に最低よっ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうせ私たちを置いて旅に出たのだって、きれいなメイドさんと二人っきりで旅に出られるからとでも思ったからでしょうっ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・黙って聞いていれば好き勝手言ってくれるじゃねえか。」

ちょっとイラッとしたので反論を開始することにした。

「大体なぁっ！！　旅に出たのだって俺の意志じゃねえしあいつらと一緒にいるのだって本当に成り行きでそうなっただけなんだよっ！！」

「はぁっ！？　あんた成り行きで女の子ばっかりと出会ったっていうのっ！！！」

「そうだよっ！！　それがどうしたってんだっ！！　仮に俺がロリコンの変態だったとしてどうしたそれをお前に咎（とが）められなきゃならねえんだよっ！！」

「幼馴染みから犯罪者が出るのが嫌なだけよっ！！」

「勝手に俺を犯罪者呼ばわりするんじゃねえっ！！」

俺たちの口論はどんどんヒートアップして行く。

トウキはどうすればいいのかわからずにオロオロしており、メイドさんは沈黙したまま俺たちを観察している。

「そもそも置いて行かれるのが嫌ならついてくりゃ良かっただろっ

！！　それをしなかったのはお前の意志だろうがっ！！」

「――っ！！！！！」

右頬にすさまじい衝撃が響いたと思うと俺は体をよろめかせた。

それが理香に思いっきり平手打ちされたからだと気付くまでに数秒の時間がかかった。

「・・・

・・・・・・・・・・・・俺は東間と理香の幸せを願っている。

あいつらは幸せになる権利を得られるだけの功績は残してきたし、

この世界でも勇者として名を残すだろう。

だがそこに俺はいない。

わかっている、最初からわかっていたことだった。

どんな腐れ縁だろうといつかは断ち切られる。

どれだけ望んでも永遠に続くことは無い。

ましてや俺は人では無い何か別の存在だ。

いつまでも一緒にいてはいけない。

怪物は怪物らしく消えて行くのが世の定め。

自分が何なのかわからない俺には、それ相応にふさわしい結末が待っている。

「追わなくてよろしいのですか？」

「追ってどうする。」

即答にメイドさんは失望した視線で俺を見下した。

「そうですか。」

メイドさんはそのまま二階へと上がって行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふんっ！！！」

俺はイスに座りながら目の前のテーブルを蹴り砕いた。

立ち上がった俺は宿屋の外へ。

このまま放っておいて万が一、理香の身になにかあったら俺の行動目的を達成できなくなる。

適当な言い訳を内心で考えながら俺は理香の走って行った方角へと走り出した。

ｓｉｄｅトウキ

「え～、・・・・・・・・・・・・・・・っと。」

それがしはその場に立ちながら呆けておったでござる。

師匠と理香殿の痴話喧嘩を見せつけられながら想うことは一つ。

「それがしの弟子入りの件は・・・

第百三十九話　ああもう、まったく！（後書き）

東間たちはメイドさんに言われて二階で待機中。

そしてトウキは忘れられています・・・・・・・・・・・・・・・

第百四十話　夕日が、きれいだ！（前書き）

衝動的な喧嘩だったので頭を冷やしたようです。

第百四十話　夕日が、きれいだ！

ｓｉｄｅ理香

町外れにある大きな木の太い枝の上に座りながら私は沈んで行く夕日を眺めていた。

沈み行く太陽の赤い輝きは夜の訪れを示すものであり、見知らぬ町での暗い夜道は危険だということは私もよく知っていたが今は戻る気になれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・バカ。」

自然と口に出た言葉は人の気も知らずに勝手に突っ走って行くアイツに向けられたものなのか。

それとも素直に気持ちを伝えることのできない自分自身に向けられたものだったのか。

考えた所でわかるわけも無かったが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

仁と東間の為にみんなで料理を作ろう。ということになったとき、私は表に出さなかったけど心の内では大いに張りきった。

明らかに無理をしている仁に少しでも早く元気になってもらおうと思って作った肉じゃがは今までで一番の出来栄えだったと思う。

さっきは仁にあの肉じゃががおいしかったかどうか聞きにいったのにはずなのに――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁぁ～・・・・・・・・・・」

私は深く深く溜め息をついた。

いざ、仁と面と向かった時に恥ずかしくなって、つい変なことを言ってしまった。

仁がロリコンではないことは私も良く知っている。

だけど仁の周りにはきれいで可愛い女の子ばかりが集まってきて。

私の知らない仁を知っているかもしれない――――――――――――――――

そう考えたときどうしようもなく胸が苦しくなって。

どうしようもなく仁のことが許せなくなって。

そして口論となってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁぁぁぁぁぁぁ～・・・・・・・・・・」

先ほどよりも更に深い溜め息をついた。

全部私の八つ当たりが招いたこと。

仁に非は無いとわかっていても謝りに行くことができない。

頭の中や心では謝らなくちゃいけないと思っているのに体が動こうとしない。

いや、体が動こうとしないのも結局は私の意志。

不安を感じている私の意志。

・・・・・・・・・・・・・謝って仁が許してくれなかったらどうしよう・・・・・・・・・

嫌われるのが怖い。

この考えがある限りは私は自分の足で仁に会いに行くことができない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～・・・・・・・・・・・・・」

三度目のより一層深い溜め息をついた時。

「・・・・・・・・・こんなところでなにをしているんだ。」

下からあのバカの声が届いた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

理香を見つけた俺は下から一声かけてから理香の隣に跳んで立った。
衝撃はなるべく抑えたので枝が折れるようなことは無かったがそれでも木全体が少し揺れて何枚かの葉が地面に落ちた。
・・・・・・・・・・・・・そういえばいつだったかは忘れたが似たようなことが昔あったな・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・何か用？」
「別に。」
そのまま枝の上に座って理香の見ていた沈み行く夕日を見ていた。
理香は何かを言いたそうな顔をして、一旦口を開いてから声には出さず口を閉ざす。
俺はそんな理香を視界に入れつつ、じっと夕日を眺めていた。
しばらく続いた静寂の世界。
理香は決心が着いた様で、深呼吸してから声を発する。
「あの・・・・・・・・・・・・・・・仁っ！！」
俺の横顔を直視しながら。
「さっきは・・・・・・・・・・・・・ごめんっ！！！」

謝罪の言葉を口にした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は夕日から視線を外して理香を見る。

夕日に照らされて顔を真っ赤にしている理香。

「・・・・・・・・・・・・・・・理香、俺は別に謝罪の言葉を聞くためにお前を追ってきたわけじゃない。」

真っ直ぐな理香の目を真っ直ぐに見つめながら言葉を続ける。

「単純にお前が心配だった、だから追ってきただけだ。」

何も言わない理香に俺は更に言葉を続ける。

「普段の俺だったなら、あの程度のことで口喧嘩を起こすようなことは無かったはずなんだが・・・・・・・・・・・・どうやら俺も気が立っていたらしい。」

誰かさんたちの料理のせいで、とは言わない。

「さっきの口喧嘩は俺たち二人の責任だ、どちらが悪いというわけでもない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁・・・・・・・・・」

「だからお前が謝るというのなら俺も謝っておく、さっきは・・・・・・すまなかった。」

真っ直ぐに理香を見つめたまま謝罪する。

そのまま俺たちは互いの目を見つめていたのだが。

・・・・・・・・・・・・なんだか急に恥ずかしくなってきた気がする・・・・・・

理由は不明だが緊張していたらしく、気付けば手汗をかいていた。

「・・・・あのね、仁。ちょっと話があるの。」

不意に理香が口を開いた。

「私は――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

「マスターーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

口を開いた理香の声は遠くから響いたフレスの声にかき消された。

「心配しましたよーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！　生きていたんですねーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

声の方向へ視線をやれば、フレスが走りながらこちらに向かってきていた。

・・・・ふぅ・・・・・・・・・・・・どこに逃げていたんだか知らないがとりあえずお仕置きだな。

俺は枝から跳び降りながら、ふと気になって理香に声を掛けた。

「理香、さっきなんて言おうとしていたんだ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんでもないっ!!!」

問いかけに理香は何故か不機嫌になりながら叫んだ。

第百四十話　夕日が、きれいだ！（後書き）

危険を察知していたフレスは仁たちを囮に逃げていました。

そして次回は新展開の予定です。

第百四十一話　本当に、面倒くせえな！（前書き）

新展開です。

再びバラバラになりました。

第百四十一話　本当に、面倒くせえな！

「いたか？」

「いや、こっちにはいなかった。」

本来なら暗闇を照らすのは月の光だけのはずの森の中にゆらゆらと蠢く複数の光源が存在した。

虫の鳴き声や獣の遠吠えに注意を払いつつも松明を持った複数の男女が何かを探している。

まあ何かでは無く俺たちを、と言った方が正しいんだろうが。

「・・・・・・・・・・・・・・この辺りにはいなさそうだな。」

「よし、今度は向こうを探すぞ。」

「絶対に逃がさないわ・・・・・・・・・・・・・」

男女の影が走り去り、気配が完全に途絶えてから俺は茂みの中から顔を出して周囲を確認する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・行ったようだな。」

フレスを肩に担ぎながら茂みから出ると後ろから同じ様に出てくる影が一つ。

「行くぞ、理香。」

「ええ。」

小声で会話した俺たちはそのままあいつらの行った方向と反対の方向へ走り出す。

・・・・・・・・・・・・・・くそっ、厄介なことになったもんだな・・・・・・・・・・・・

心の中で舌打ちしながら俺は頭の中でこの状況になった経緯を整理する。

理香と和解した後、フレスに口では言えない様なちょっぴりキツイお仕置きをしてから宿屋に戻った俺たちを待っていたのは謎の集団。

問答無用で殺意を込められた攻撃をされた俺たちは木彫りの熊を投げつけて二、三人倒したが、どこからともなく増援が次々に湧きだしてきたためその場を離れざる負えなかった。

倒すこともできたが、何人隠れているかを判断する時間も無かったし夜とはいえ竜人の国の王都の宿屋で殺意を込めた攻撃をしてくる輩（やから）がどんな手段を取ってくるかが予想できなかった。

狙いは勇者である東間や理香だと考えればなおさらだ。

宿屋にはメイドさんやリリィたちがいたので、東間が殺された可能性は極めて低いが、奇襲された以上あそこに留まっている可能性は皆無と考えるべきだ。

撤退した俺たちはそのまま近くの森の中に逃げ込み、奴らがそれを

追ってきて。

そして今に至る。

「理香、東間たちと連絡をとる手段は無いのか？」

走りながら小声でした質問に理香は首を横に振った。

「残念だけど、私は攻撃に特化した魔法ばかり習得しているから通信系の魔法は使えないの。」

「ならあの目印になる巨大な鳥は――――――――――――――――」

「それも無理ね、こんな事態は想定していなかったからエイミィは自分の巣に戻っているわ。エイミィを呼ぶための笛は東間が持っているし、仮にエイミィを呼んだら敵にここにいると伝える様なものよ。」

再びの質問を完全に言い終える前に理香は否定の言葉を口にした。

「・・・ならどうにかして東間たちを見つけるしかないか・・・・・・」

「そうね・・・・・・・・・・・・」

何故か答えた理香の声に少し嬉しさの様な物を感じたが、訊いたところで否定するだけだろう。

「っ！」

不意に感じた気配に俺はフレスを地面に寝かせ理香を手で制した後、隠れるように木に背中を預けながら様子をうかがった。

少しして数人の足音と明かりが前方を通り過ぎて行った。

瞬間、俺は一番後ろの若い男の口を塞ぎ手刀で意識を断ってから音を立てずにこちらへと引きずり込んだ。

他の仲間たちは一人いなくなったことに気付かずに走り去って行った。

「さて、と」

気配が無くなってから男に気付(きつ)けをする。

「うげっ！」

多少、力加減を間違えたのか男は苦しそうにしながらも意識を取り戻す。

俺は男が騒ぎ出す前に首を絞めながら耳元でつぶやく。

「騒いだら殺す。」

同時に放った殺気に男は震えながら首を縦に動かした。

俺は男の首から手を離しながら質問を始める。

「まず最初にお前らは何者だ。」

「お、俺たちは『竜人による自然保護団体』、通称『竜然護団（りゅうぜんごだん）』だ・・・・・」

「自然保護団体？」

予想外の答えに俺は困惑した声で返す。

「ああ、そうだ。俺たちはこの国の自然や動物たちを守るための団体だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・それがどうして俺たちを襲う。」

「どうして、だと・・・・・・・・・・・・・・・っ！！」

俺の疑問に男の怒気が膨れ上がった。

「知っているのだぞっ！！　貴様等が先日、空飛ぶ希少な大蛇を殺したという事実をっ！！」

叫ぶ男の言葉で、俺は少し前に大蛇を殺したことを思い出した。

恐らく、誰かが俺たちと大蛇との戦いを見ていたのであろう。

それはともかく――――――――――――――――――――――――――――――――

「騒いだら殺す、と言ったはずだ・・・・・・・・・・・・・・・」

「ひぃっ！？」

小声でささやく俺に男は恐怖の視線を向ける。

静かになったところで質問を続ける。

「確かに俺たちは大蛇を殺した、それと自然保護団体がどう関係してくるというつもりだ。」

「それは――――――――――――――――――――――――――――」

男の回答に俺はどうしようもないやるせなさを感じながらあきれ果てた。

ｓｉｄｅ理香

仁と二人きり、仁と二人きり、仁と二人きり、仁と二人きり・・・・・・・・・・・・・・っ!!!

突然の奇襲に驚いた私たちは森の中に逃げた。

ようやく頭が冷静になったときに、私はいま仁と二人きりになっているという事実に気付いてしまった。

どうしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ!?

周りには東間の姿も無く、他の女の子もいなく暗い森の中に二人きり。

心臓の音が大きく聞こえる。

3，14159265358979３・・・・・・・・・・・・

仁が若い男と話している間、私は冷静さを取り戻すために円周率を計算し始めた。

第百四十一話　本当に、面倒くせえな！（後書き）

理香にはフレスが眼中に無いようです。

第百四十二話　静かに、してろよ！（前書き）

二人（笑）だけの逃避行。

第百四十二話　静かに、してろよ！

「まったく・・・・・・・・・・・面倒なことに巻き込んでくれたもんだな・・・・」

一通り男から情報を聞きだすと、再び男を気絶させてから腕章を奪いフレスを肩に担いでから俺たちはその場を後にした。

月の光が差し込んでいるものの、薄暗い森の中は注意して進まなければ植物にに足をとられる危険が高い上に、奴らの気配も探らなければならない。

こんなくだらないことで追い回されている現状に腹を立てていると、理香が不安そうに尋ねてきた。

「仁・・・・・・・・・・これからどうするの？」

「とりあえず東間たちと合流するぞ、その後でお前たちは竜人たちの王の所に行って事情を説明してこい。」

俺の言葉に理香は顔を曇らせた。

「仁、一人で危ないことをするのは禁止だからね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ、流石は腐れ縁だな。

俺が自然保護団体を一人でつぶすつもりなのを見透かしてやがる。

「また無茶をして倒れたりしたらどうするつもり？」

「その時はまたお前たちに運んでもらうさ。」

冗談のつもりの一言によって、一瞬にして理香からそれだけで常人なら死に至るほどの鋭い殺気と俺の背筋を凍らせるほどのすさまじい魔力が溢れ出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・じ～ん～・・・・・・・・・」

「嘘ですごめんなさい。」

即座にフレスを盾にしながら謝った。

「・・・・冗談にしても質(たち)が悪いのよ・・・・・・・・私がどれだけ心配して・・・・・・・」

殺気と魔力を戻しながらブツブツとつぶやく理香。

後半は聞き取れなかったが、とりあえずフレスが星にならなかったことに胸を撫で下ろした。

しかしこれだけの魔力をいつの間に身に付けたのか・・・・・・・・・・・・

「さっきのすさまじい魔力はこの方角から感じたぞっ！」

「よしっ！　行くぞっ！」

感心と少しの嫉妬を抱いていると大声と共に複数の方向から人の気配が近づいて来ているのがわかった。

「理香、逃げるぞ。」

「でもどの方向に・・・・・・・・」

松明の明かりが近づいてくる中、小さく鋭くささやいてから俺は一番気配の少ない方へ駆け出した。

「なっ！？」

驚愕する若い男たちの意識を一瞬で刈り取る。

男たちは俺の動きに反応すらできずにその場に倒れる。

「走るぞっ！」

叫び声を上げながら走り出す。

「向こうだっ！」

「逃がすなっ！！」

男たちは俺の逃げた方向へ走って行く。

正確には逃げたと思いこんだ方向へ。

気配が消えた後、俺は木の上から跳び下りた。

「もういいぞ、理香。」

小さな声を上げながら草むらの中に身を潜めていた理香と合流する。

「よくやり過ごせたわね・・・・・・・・・・」

「小さいころから似たようなことをやらされていたからな、あれくらいは簡単だ。」

あの頃は『見つかる＝死』だったから文字通り命がけのかくれんぼだったしな。

「・・・・・・・・・・・・？　どうしたの、仁。」

「いや、なんでもない。気にするな。」

・・・・・・昔のことを思い出したら蘇った恐怖で少し震えてしまった。

「それにしても理香、さっきみたいにむやみに魔力を放出すると簡単に見つかるぞ。」

思い出した恐怖を振り払う意味合いも含め、俺は理香のミスを注意する。

「・・・・・・・・・ごめんなさい。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・素直に謝られてしまった。

何かしらの反論をしてくると思ったんだが・・・・・・・・・・・・・・・

「あ～・・・・なんだ、誰にでもミスはあるから以後気を付けろよ。」

気まずさを誤魔化すために理香の頭を撫でておく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！？　やっ、やめなさいよっ！！」

少しの間、されるがままだった理香はいきなり真っ赤になりながら俺の手を振り払った。

よし、いつもの理香に戻ったな。

茹だったタコの様に顔を紅潮させた理香を見て、安心した俺は気絶させた男たちに近づいた。

先ほどの男同様、腕に黄色い腕章を付けている。

この腕章と合い言葉さえあれば誰でも本部に入ることができるというのだからずさんな管理体制だと思うが、民間の組織にそれ以上を期待する俺の方が間違っているのだろうか・・・・・・・・・

「まあいい、腕章はいただいて行くぞ。」

気絶している男たちに一言断ってから腕章をいただいて行く。

これで少なくとも俺と理香の分がそろった。

置いて行かれるのが嫌なのなら一緒に行けば文句はないはずだ。

「理香、行くぞ。」

「だからどこに――――――――――――――――」

尋ねてくる理香に俺は一点を指差しながら答えた。

「もちろん、さっきあの男から聞いた奴らの本部にだ。」

ｓｉｄｅニブル

魔王城の一室で就寝前の紅茶を飲んでいる最中でした。

「ニブルちゃ～ん。入るわよぉ～。」

「何かご用でしょうか。」

相変わらずの個性溢れる口調で部屋の中に入ってきたバット将軍に私は微笑みながら問いかけます。

「実はねぇ～ん、面白い娘が城内に侵入したらしいわぁん。」

「なるほど、わかりました。」

バット将軍の面白いという言葉はすなわち、かなりの使い手を指すということ。

そして娘とおっしゃっている以上、私にヴェンリス将軍を呼び戻せと言っておられる。

「しかしそれほどの使い手なのですか？」

「もちろんよぉ～、下手をしたらヴェンリスちゃんでも危ないかもしれないわよぉ～。」

ふざけた口調に真剣味はないものの、それが嘘ではないことは長い付き合いから判断できます。

「少しお待ちください。」

「なるべく急いでねぇん、今のところ城の兵士には見つかっていないけど見つかったら城の兵士が皆殺しにされちゃうわぁん。」

冗談のように聞こえる冗談では済まされないその言葉に苦笑しながら私はヴェンリスを呼び戻すための通信と転移の魔法を唱え始めました。

第百四十二話　静かに、してろよ！（後書き）

次回はアジトへ侵入。

第百四十三話　潜入、成功！（前書き）

潜入ミッションスタートです。

第百四十三話　潜入、成功！

男から聞いた場所に来た俺たちは奴らのアジトらしきものを発見した。

正面に門があり、門以外の場所は石造りの壁に囲まれている。

微量な魔力を石から感じ取れたことから、恐らく門以外から中に入ろうとすると何らかのトラップが作動する仕組みとなっているのだろう。

わざわざ侵入を教えてやる義理も無いので俺たちは予定通り正面から堂々と中に入ることにした。

「止まれ。」

体全身を大きめのロープで隠しながら門の前に来ると門番に呼び止められた。

俺は縄で縛ったフレスを見せながら。

「奴らの一人を捕らえた。団長に報告がしたい。」

「・・・・・・・・・・・・見せてみろ。」

門番は手に持った紙とフレスの顔とを見比べた。

「・・・・・・・・・・・・ご苦労だった、入れ。」

確認の終わった門番は門を開ける。

「ああ、ちょっと待て。」

フレスを担いで中に入ろうとした俺たちを慌てて門番が呼び止める。

「一応、規則なんでな。腕章と合い言葉を。」

俺たちは黙ってローブの中の腕章を見せた。

「・・・・・・・・・・・・ふむ、良いだろう。次は合い言葉だ、『自然の守護者は』」

「・・・・・・・・・・・・『我ら竜人』」

どれだけ竜人であることに固執しているかが良くわかる合い言葉を口にした。

「よし、通れ。」

門番の許可を得た俺たちはそのままアジトの中へ入った。

アジト、と聞いたものの中に入ってみると実際は小さな村と言った方が正しい。

あちこちに電灯の様な物（恐らく光魔法を応用したものであろう）が配置されており、農作業や牧畜をしている者たちもいた。

中の明かりや物音が外に漏れていないところを見ると、何らかの結界の様なものが施してある可能性が高い。

「ちょっといいか。」

俺たちは近くにいたタオルでハチマキにして頭に巻きながら農作業をしている若者に声を掛けた。

「なんだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・？　どこかで聞き覚えのある声だな・・・・・・・・・

少し気にはなったが構わずに質問を続ける。

「奴らの一味を捕らえたんだが団長に報告したい、団長は今どこにいる？」

「ああ、それなら――――――――――――――――――――――――――――――――」

振り向いて一番大きな小屋を指差す男。

「あの家の二階にある団長の部屋で書類の整理をしているはずだ。案内は別に必要無いだろう？」

「ああ、ありがとう。」

男に礼を言ってから教えられた家に向かって歩き出す。

男もそのまま農作業へと戻って行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁。」

今まで黙ってついて来ていただけの理香が唐突に男を凝視したまま口を開いた。

「どうした、理香。何か気になることでもあったのか？」

理香は信じられない物を見る眼差しで俺を射抜いた。

「本気で言ってるの？　いや、私は大して長い時間一緒に行動していたわけじゃないから見間違いかもしれないけど・・・・・・・・・」

ささやく様に小さめな声を出しながら農作業を再開した男を指差して。

「あれって、リューグじゃない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

てしまうっ！

「リューグって確か・・・・・・・・・・・」

「あの一味の一人・・・・・・・・・・・」

ざわつきながら疑惑の視線が徐々に集まってくる。

「いっ、いやっ、すまない。死んだはずの知り合いに似ていたからつい大声を上げてしまった。」

自身の失態に心中で舌打ちしながら必死にこの場を誤魔化す。

リューグの奴も何らかの意図があって俺を無視したに違いない。

「んっ？　・・・・・・・・・・・・・・・」

リューグはローブの中を俺の顔を覗き見る。

頼むリューグ、どうにかこの場は誤魔化してくれっ！！

真剣な表情で訴える俺の思いは。

「仁っ！？　なんでお前がここにっ！？　ってしまったっ！？」

リューグによってあっさりと裏切られてしまった。

しかもあの野郎わざわざ『しまった』まで大きな声で言いやがった。

「仁だと・・・・・・・・・・・・・・」

「まさか奴らは一味の・・・・・・・・・・・・」

疑惑の視線は確信と敵意の視線へと移り変わって行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・同レベルの馬鹿二人・・・・・・・・・」

あきれ果てた声でつぶやく理香に文句の一つでも言ってやりたいが、それどころではない。

「ちょっと来てもらおうか。」

やたらとごつい男たち数人が大きな金棒を持ちながら近づいてくる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・できるだけ穏便に済ませるつもりだったが。

「やるしかない、なっ！」

フレスをその辺に投げ捨ててから一番近くの男の顔に跳びひざ蹴りで強襲する。

「貴様っ！？」

動揺する男たちに脱いだローブを投げつける。

「それじゃ、いっちょやるかっ！」

放った言葉はそのまま戦闘開始の合図となった。

ｓｉｄｅ？？？

「あ～あ、つまんないの～。」

魔王城に侵入した私は走りながら不服のつぶやきを漏らした。

少しは期待していたのに私に気付かない雑魚ばっかり・・・・・・・・・・

「もうちょっと楽しませてほしいのにな～。」

「では楽しませてやろうか。」

誰に言ったわけでもない言葉に返ってきた言葉が一つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へぇ。」

漆黒の槍と鎧を身に纏ったその女性を見た瞬間、体全身を戦慄が駆け抜けた。

「ついてこい、好きなだけ暴れられる場所に案内してやる。」

「・・・・・・・・・・オーケー。」

ニッコリと笑みを浮かべながら私はその女の誘いに乗ることにした。

第百四十三話　潜入、成功！（後書き）

潜入ミッション失敗。

そしてやはり暴れ――――――

第百四十四話　これが、連携というものだ！（前書き）

馬鹿と嫉妬。

第百四十四話　これが、連携というものだ！

美しい月光が大地を照らしており静寂であるはずの夜の一時をかき乱す騒がしい喧騒がここにあった。

「でやぁっ！」

理香が（メイドさん同様、どこから取り出したのかわからなかった。これが女体の神秘という奴なのだろうか・・・・・・・・）豪快に槍を横に薙ぎ払う。

「ぐへぇっ！」

「ぎゃぴぃっ！」

三流小悪党丸出しな悲鳴を上げながら数人の男たちが薙ぎ倒されていく。

「死ねぇっ！」

「おっと。」

呑気に見物している俺の背後から振り下ろされたのろまな一撃を人差し指と中指で受け止める。

・・・・・・・・・・どうでもいいけど、ここは自然保護団体を名乗っているんだから不意打ちで死ねはちょっと似合わないのでは・・・・・・・・・・

刃を受け止めたまま後ろを振り向いて奇襲してきた女の顔を見やる。
血走った眼に溢れんばかりの殺気。
うん、こいつら言葉なんて通用しないわ。
「しっかし、女に手を上げたらまた理香やメイドさんあたりに怒られそうだな・・・・・・・・」
二本指に力を込めて刃をへし折りながら、女の顎を掌底で打ち上げて横っ腹に回し蹴りを決めて吹き飛ばしてからポツリとつぶやく。
「しょうがない、全部リューグがやったってことにしておくか。」
壁に叩きつけられてゲロを吐いている女の存在を無視して視線を送ってからリューグの姿がないことに気付いた。
キョロキョロと辺りを見回してみると、一つの小屋の中から何かの布を持ったハチマキ姿のリューグが現れた。
・・・・・・・・・・・？　あいつ何やってんだ・・・・・・・・・？
怪しい挙動をしているリューグを観察していると、近くの畑に走って行き――――――――――――――――――――
「収穫、収穫ぅ。」
畑から野菜を回収し始めた。
「・・・・・・・・・・・

・・・」

どこからどうツッコミを入れるべきか。

散々頭を悩ませた俺は根本的な所からツッコムことにした。

「この非常時に何やっとんじゃぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

華麗なるローリングソバットを嬉々として野菜を盗んでいるリューグの後頭部に直撃させる。

「ぐふぉぇあっ！！！」

意味不明な叫び声を上げながらリューグは四度回転してから動かなくなる。

「何しやがるっ！！」

かと思ったらあっという間に復活した。

きっと理香たちの手料理を食べて生き残ったことによって肉体が大幅に強化されたのだろう。（主に胃袋などの消化器官が。）

それはそれとして。

「何しやがるじゃねえっ！！　リューグっ！！　なんで火事場泥棒の真似事なんかしてるんだよっ！！　トレージャーハンターなら堂々と宝を盗めっ！！」

「お前、絶対トレージャーハンターを盗掘者か何かと一緒にしてるだろうっ！！！」

ぬっ！？　バレたか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しかしその程度のことではひるまない俺は更なる正論で責め立てる。

「そんなことはどうでもいいっ！！　俺が言っているのは勝手に人様の土地に上がり込んで勝手に物を盗むような奴は最低だって言いたいんだっ！！！」

「お前ここに何しに来たっ！！！」

「むかつく奴らを叩き潰しに。」

即答した俺にリューグは何も返してこなかった。

どうやら俺の正論にグゥの音もでない様だ。

なにやら凄い顔と憐みの瞳で俺を見つめている気がするが、気にしたら敗北する気がするのでスルー。

「リューグっ！！　もう一度言うが人の物を盗むなんて最低なんだぞっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・ちなみにお前が初めて盗んだ物は？　またその年齢は？」

真顔で問うてきたリューグに対して少しの間、過去に思いを馳(は)せて

―――――――――――――――――――――

「六つの時に傘がトレードマークの会社の機密資料を少々。」

あの時は大変だったなぁ・・・・・・・・・・・・・・・

三メートルくらいのゴツゴツしたマッチョ（触手持ち）から必死に逃げ回って・・・・・・・・・・・・・

思わず思い出に浸りそうになった俺は、我に返ってリューグの説得を続ける。

「リューグっ!!　争いは何も生まないっ!!　憎しみは新たな憎しみを生むだけだっ!!!」

「なんだそのウザキャラっ!!!　しかも話の流れ関係無いしっ!!!　ついでにさっきここの連中を叩き潰すとか言ってた奴のセリフじゃねえだろっ!!!」

俺はリューグの元へ駆け出し、その両手を強く握りしめた。

「お前ならきっとわかってくれるって信じていたぞっ!!!　リューグっ!!!」

「おい理香ぁっ!!　こいつ頭がイカれてるぞっ!!!」

リューグは俺たちが漫才をやっている間に全ての敵を倒してしまった理香に向かって叫び声を上げたが――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

リューグはそれ以上何も言わずに自身の存在を危うくする脅威でも見たかのように顔を真っ青にして震えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・ずるいわよ、私だって・・・・・・・・」

ブツブツと口から洩れたそのつぶやきは風に流されて俺たちの耳に届くことは無かった。

「・・・・・・・・・・・おい、仁。」

「なんだ。」

顔を寄せてボソボソと小声で会話を始めるリューグ。

「理香の奴、なんであんなに怒っているんだ?」

「?　なんのことだ?」

後方で怒気が膨れ上がったのを感じて後ろを振り向くと赤鬼の幻影が見えたので無視することにした。

「別に理香は怒っていないじゃないか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、そう。」

心からの溜め息を吐き出したリューグは何故か天を仰いだ。

第百四十四話　これが、連携というものだ！（後書き）

男相手でも嫉妬する理香。

いや～・・・・・リューグも大変ですね～。

仁とリューグは相性がそれなりに良いから理香の嫉妬対象になってしまいました。

・・・・・・・・・・・・・・でもリューグのヒロイン化か～・・・・・・・・・・

・・・・・・男装・・・・・・それとも女体化・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・いっそ同性のまま攻略対象に・・・・・・

第百四十五話　嘘つきは、嫌いだ！（前書き）

ただし自分が嘘をつくのはＯＫらしいです。

そして未だに続くはギャグパート。

第百四十五話　嘘つきは、嫌いだ！

「じゃ、そろそろ行くか。」

フレスが起きるまで適当なイスに座って理香と雑談していた俺は唐突につぶやきながら立ち上がった。

正直、いつまでたっても起きないフレスに待ちくたびれた。

「行くって・・・・・・・・・って、どこに行く気だ？」

リューグは一人、俺たちから多少距離を取った場所に立っていた。

お前たちの近くにいたら俺の精神が持たない。と非道い暴言を浴びせられたので、後で理香の手料理をご馳走してやろうと密かな決意を固めていたりする。

まあそれはともかく。

「リューグ、さっき聞いたここの団長の居場所は間違いなんだよな。」

「ああ、お前たちと同じやり方でここに潜入したときに直接会ったからな。間違いないだろう。」

「なら問題ない。」

移動していないのならそこに行くのは簡単だ。

問題はこれだけの騒ぎを起こしていながら何のリアクションも示してこないという点だった。

仮説としては防音性に優れた部屋にいるか、騒ぎなど歯牙にもかけていないのか。

それとも罠、か。

「理香、お前はどうする？」

理香は少し考えてから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・行くわ。」

短く返答した。

考えていたのは恐らく俺と同じ、罠の危険性を考慮していたのだろう。

「なら俺は一緒には行くが、少し離れた場所で待機しておくか。」

罠にかかったときの為の保険という意味であろうリューグの言葉を聞いて、俺はあることを思いついた。

すなわち、リューグを囮にして安全を確保するという素晴らしい提

―――――――――――――――――――

「却下だ、いい加減にしておかないと頭をぶち抜くぞ。」

殺気を込めた本気の眼差しで俺の頭に赤い銃を突きつけるキレやす

い若者。

「まだ何も言ってな――――――――――――――――――――――」

「どうせ俺を囮にして安全を確保しようとでも思い付いたんだろ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おおっ!!」

俺はそんな方法もあったんだといま気づいたと見せかける様に手の平を握り拳でポンッと軽く叩いた。

「・・・・・・そんなわざとらしい仕草じゃ誰も誤魔化せないわよ・・・・・・」

俺の迫真の演技に横やりを入れてくる困った腐れ縁その二。

「失礼な。俺が仲間を盾にする様な外道だと思っているのか。」

「うん。」

「ああ。」

「はいっ!」

それぞれ上がった三つの声に虚空を見つめながら俺はショックで震えた。

「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・・・・」

まさかそんな風に思われていたとは・・・・・・・・・・・・・

「「仁・・・・・・・・・・・・・・」」

「マスター・・・・・・・・・・・・・」

少し言い過ぎたか、と反省の色が三人の瞳に映っているのを無視して叫ぶ。

「まさか俺をちゃんと理解している奴らがこんなにいるなんて思っていなかったぞっ！！！」

喜びの悲鳴に反応する存在は皆無。

そんなことだろうと思った。と冷たい視線だけが矢の様に降り注いでくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁は誰にも相手にしてもらえないと寂しくて死んじゃうんだよ・・・・・・・・・・・・・」

その場で膝を抱えてうつむきながらつぶやく。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうしてこんな人をマスターに選んじゃったんだろう・・・・・・・」

呆れ二人に絶望一人の反応。

・・・

フレスの全身から汗が滝の様に流れ、顔面は蒼白を通り越して色素が欠乏したかのように真っ白になっていた。

「つっ、ついさっきですっ！！　マスターがリューグさんを囮にってところで――――――――――――」

「フレス。」

必死に弁明をするフレスにニッコリ笑顔。

「俺は嘘は嫌いだ。」

正確には嘘をつかれるのが、だが。

「ほっ、本当ですっ！！　信じてくださいマスターっ！！！」

・・・

「お仕置き。」

「助けてぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！」

絶叫を上げるフレスを引きずりながら近くの小屋の中へ入って行く俺たちを理香とリューグは合掌しながら見送っていた。

ｓｉｄｅヴェンリス

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いにかなりの手傷を負いながらも、私は笑みを浮かべていた。

この娘、十三、四くらいの年齢であろうに、見た目に反して相当な手練れだ。

仁と同格か、あるいはそれ以上――――――――――――――――――――――――

だが、私は喜びと共に多大な焦燥感も抱いていた。

万が一、魔王陛下の元へ侵入者を行かせてしまう様な事があったなら――――――――――――――――

修行を終えた直後であり万全の状態で戦うことができなかったことが非常に悔やまれる。

「はぁ、はぁ、・・・まさか、この程度で終わり、なんていうつもりは無いわよね。」

「はぁ、はぁ、・・・・もちろん、だ。」

侵入者の息を切らせながら挑発に乗って私は再び全力で駆けた。

第百四十五話　嘘つきは、嫌いだ！（後書き）

フレスが寝たふりをしていた理由は、仁たちが先に行った後にこっそりと逃げ出すためだったそうです。

第百四十六話　一気に、終わらせる！（前書き）

少年お仕置き中・・・・・・

第百四十六話　一気に、終わらせる！

「悪い、待たせたな。」

少々、やんちゃが過ぎたフレスへのお仕置きを終えた俺は家から出て理香たちと合流した。

もちろん後ろにはフレスもついて来ている。

・・・・・・・・・・ゾンビのように生気のない青白い顔で今にも倒れそうなほどグッタリフラフラしているが。

「え～っと、ねぇ仁？」

リューグが俺とフレスに視線を合わせないように明後日の方向を見つめているのに対し、理香は気まずそうにしながらも勇気を振り絞って問いかけてくる。

「一応、聞いておくけど・・・・・・フレスに一体何をしたの？」

俺はヒマワリの様な暖かく満面の笑顔を浮かべて。

「大人になったら教えてやるよ。」

その体に直接。と続けようとしたら。

「いや、いいわ、絶対に教わりたくない。」

即答されてしまったので口を噤(つぐ)んでおく。

「まっ、その話は後にして――――――――――――――――――」

「後でもやらないわよ。」

「とにかく、さっさと行くぞ。」

倒れそうなフレスを肩に担いで（流石にこの状態のフレスを放っておくわけにもいかないだろ。）団長のいる小屋へ向かって行く。

「仁、気付いているとは思うが――――――――――――――――――」

「ああ、これだけ時間を掛けているってのに誰も来ないのはおかし過ぎる。」

リューグが真面目な顔になったので俺も真面目に返答する。

「ということはやっぱり罠・・・・・・・？」

「それか隠し通路かなんかで逃げたか。」

「仮説なんていくら立てても証明できないのなら意味は無いだろ。」

話をしているうちに団長のいる大きな家の前までたどり着く。

「中に入るぞ。」

奇襲に備えて身構えている理香が緊張からか汗を垂らしながらのどを鳴らす。

リューグがドアに手を掛け――――――――――――――――――――

「リューグ、止まれ。」

家の二階の明かりの灯っている部屋を睨みつけながらリューグにストップをかける。

「どうした？　何か気になることでもあったのか？」

疑問符を浮かべるリューグを一旦無視してフレスの耳元で小さくささやく。

「ひゃいっ！！！！！　マスターっ！！！！！　ご命令をどうぞっ！！！！！」

途端、どういうわけかフレスは俺の肩から跳び下りて直立不動で敬礼をする。

「フレス、変身。」

「了解いたしましたっ！！！！！！　失礼ながら血を少々拝借させていただきますっ！！！！！！」

俺は親指を犬歯で軽く噛み、一滴の血を垂らし落した。

フレスは猛スピードで口を広げて血を飲み込む。

「武装変身っ！！！！！」

俺とフレスの体が光に包まれ、久しぶりに両手両足に銀色の装甲が纏われた。

「わぁ・・・・・・・・・・・・・・・」

「ほぉ・・・・・・・・・・・・・・・」

理香とリューグがそれぞれ感嘆の息を漏らす。

そういえばこいつらの前でフレスを使ったことは無かったんだっけ。

「契約魔獣か、役に立たない子供をなんで連れているのか不思議に思っていたが・・・・・・そういうことだったのか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・話には聞いていたけど本当にファンタジーよね・・・・・・・」

以前も契約魔獣を見たことがあるのか、リューグは特には驚いていなかった。

一方で理香は驚きと呆れの中間の様な顔をしてフレスをジロジロと見つめていた。

俺は大きめの家の二階を見上げながらポツリと声を出す。

「リューグ、確認しておくがあの部屋に団長がいるんだよな。」

「あ、ああ。逃げていなけりゃの話だが――――――――――――――――」

リューグの言葉を最後まで聞かずに俺は息を大きく吐き、腰を低く落として左手を前に突き出し右手と手甲に魔力を集中させながら後ろへ引いて行き――――――――――――――――

「断空正拳突きっ！！」

勢い良く突き出された右拳は風を纏った衝撃波となって一直線に部屋へと伸びてゆく。

風の拳が部屋に直撃した瞬間――――――――――――――――

轟音を生み出し何もかもを粉々にする荒れ狂う竜巻が家を粉々に吹き飛ばす。

竜巻の中で悲鳴が聞こえた気がしたが、悲鳴を上げられるだけ元気なのだろうから心配はいらない。

それにどうせ敵だし死んだところで俺に非は無いはずだ。

「おいっ！　仁っ！」

徐々にその範囲を拡大させていく竜巻から逃れるために走り出すと、リューグが竜巻の音に負けじと大きな声を張り上げる。

「あの竜巻、どうにかできないのかっ！！」

「無理。」

「ああ、そうかよっ！！」

即答されるのも考慮に入れておいたのか、リューグは気にした様子も無く走り続ける。

「仁っ！　あの竜巻はどれくらいで収まるのっ！？」

「それほど時間はかからない――――――――――――――――――――」

言いかけた時、背筋が凍りつく視線に立ち止まって竜巻の方へ振り向いた。

「えっ――――――――――――――――――――」

「どうした――――――――――――――――――――」

二人も立ち止まって振り向くと、竜巻が何かにかき消された。

「なっ――――――――――――――――――――」

「これは――――――――――――――――――――」

驚愕する二人を尻目に俺は視線の主へ視線を向けた。

消えた竜巻の遥か上空に小さい人の姿をした何かが浮いている。

無気力なその目には世界に対して何の興味も持っていないことがはっきりわかるくらいの虚無に溢れていた。

ｓｉｄｅバット

「あらぁん。どっちも大変ねぇん。」

私はお紅茶を楽しみながら右の目でヴェンリスちゃんを、左の目であの子たちを見守っている。

「頑張ってねぇん。きっと勝てない相手じゃないわよぉん。」

届かないとわかっているからこその無責任な応援を口にしながら、私は二つの戦いを楽しむことにした。

第百四十六話　一気に、終わらせる！（後書き）

フレスのお仕置き内容については、描写してしまうと子供は読んではいけないものになってしまいますので省略させていただきました。

第百四十七話　このガキ、強え！（前書き）

理香やリューグは強いです。

仁はそれよりも遥かに強いです。

しかし決して最強でも無敵でもありません。

第百四十七話　このガキ、強え！

人の必殺技（から派生した竜巻）をあっさりと消した少年？（少女？）は俺たちの前に降り立った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

幼い顔つきなどの外見から判断するに年齢は十歳に届いたか届いていないか程度。

長く伸びた水色の髪は伸ばしているというよりも面倒だから伸びているだけという印象が強い。

虚空を見つめるそのけだるげな瞳には俺たちの姿は映っていない。

正確には映っているもののまったく意識していない。

今のところ確信を持って言えるのは、この子供がかなりの使い手であるということだけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だるい。」

突然、口を開いた子供に警戒を強める俺たちだったが、それ以上何をするでもなく虚空を見つめたまま突っ立っている。

「理香、リューグ。」

子供から視線を外さないまま二人に小さく声を掛ける。

「逃げるぞ。」

「わかった。」

「そうね。」

即答する二人に俺は一回頷いてからゆっくりと後ずさりを――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・あっ、そうだ。」

何かを思い出したように子供が再び口を開いた。

「――――――――――――――――――――――――――――――――えっ？」

呆けた声を上げたのは理香。

場違いかと思う奴もいるかもしれないが、理香の反応は普通のものだった。

誰だって一本の腕が自分の胸を貫こうとしているところを見れば、動くことなどできない。

ましてや、それが自分の理解を超える速度で動いていたとすればなおさらだ。

飛び散る鮮血。

は存在しなかった。

『痛い痛い痛いっ！！！！』

かわりに大きな悲鳴を上げるフレス（変身中）。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ。」

子供は虚空を見ていた時と変わらないけだるげな動作でゆっくり手を引き抜く。

咄嗟に割り込ませた腕は子供の指が装甲ごと貫通していた。

『痛い痛い痛い痛いっ！！！！！』

やかましく騒ぐフレスを今回だけは好きに騒がせておく。

この装甲はフレス自身なのだから、それに穴が空いたとなれば体に穴が空いたということだから本当に痛いのだろう。

・・・・・・・・・それにしても今の一撃。

本気で理香を殺すつもりだった。

ためらいなど微塵も無く、単にそこらへんの羽虫を潰そうといった態度で人の命を奪おうとするガキ。

油断していたつもりは無かったが、見た目に騙されてしまったことも否定できない。

だが――――――――――――――――――――――――――――――――

「リューグ、理香を連れてこの場から離れろ。」

「――――――――――――――――――――わかった。」

有無を言わさぬ静かな口調でリューグに理香のことを頼む。

「行くぞ、理香。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

自身の無力さを感じてか、うつむいたまま理香は正門へ向かって走るリューグの後を追って行く。

門から外へ出て行き、理香たちの姿が完全に見えなくなったところで改めて俺はその子供に向き合った。

理香がターゲットなら逃がすような真似はしないはず。

なのにこの子供は虚空を見続けている。

まるでその先に何かが待っているかのように。

「おい、クソガキ。」

だが俺はこのクソガキの考えていることなどどうでもいい。

目的も背後関係も気にはなっているが今はどうでもいい。

重要なのはただ一点。

このクソガキが俺の前で理香を殺そうとしたという事実だけ。

「今からお前を殺す。異論は無いな。」

「やだ。」

別に返事を期待して話しかけたわけでは無かったのだが、意外なことにクソガキは返答を返してきた。

かと思ったら俺に背を向けて歩き出した。

「・・・・・・・・・・どこに行くつもりだ。」

「帰って寝る。」

簡潔に答えたクソガキは空中に浮かんだ。

飛んで帰るつもりなのかもしれないが、それを許してやるほど俺も甘くなったつもりはない。

一気に間合いを詰めて――――――

決める直前でカウンターの掌打を胸に叩きこまれる。

「――――――――――――――――――――――――」

一瞬、心臓が停止したかと思うほどの強烈な衝撃が体を掛け抜け、近くの家に激突した俺はその家を完全に倒壊させた。

信じられないほどの威力の掌打だ、木彫りの熊が間に無ければ今の一撃で下手をすれば死んでいたかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?」

クソガキが不思議そうに自分の手と俺を見比べたが、すぐに興味を失った様に背を向ける。

口から多量の血を吐き出しながらクソガキを睨みつける。

この敵が全力で戦っても勝てるかどうか怪しい敵であることを確信しながら。

ｓｉｄｅ理香

あの場所からかなり離れた森の中で私は悔しさに体を震わせていた。

死んでいた。

仁が守ってくれなかったら確実に殺されていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は強く唇を噛んだ。

何も変わっていない。

昔も今も仁に守られているだけ。

自分自身が情けない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・強く、ならなきゃ。」

ささやきは夜風に乗って闇の中へと溶けていった。

第百四十七話　このガキ、強え！（後書き）

本気の仁を相手に勝てる存在は両手で数えられるほどしかいません。

つまり両手で数えられる程度の数は存在します。

第百四十八話　何気に、ショックだ！（前書き）

必殺技は『必ず殺す技』と書きます。

第百四十八話　何気に、ショックだ！

『マスターっ！！　ここは逃げましょうっ！！』

「却下だ。」

焦りを隠そうともしないフレスの叫びを俺は一蹴した。

普段の俺はならばフレスに言われるまでも無くフレスを囮にして脱兎のごとく駆け抜けたであろう。

だがこの敵相手に逃げ出すわけにはいかない。

そもそも確実に俺より速いとわかりきっている奴から逃げるのは容易いことではない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ、別に逃げ出したところで追いかけてはこないとは思うが・・・・・・

だが理香を殺そうとした相手から逃げ出す。

そんなことを俺ができるわけがない。

それをやるくらいなら――――――――――――――――――――――――

「玉砕覚悟で確実に仕留めてやるよ・・・・・・・・・」

『嫌だぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーっ！！！　マスターの我がままで僕は死にたくないよぉぉぉぉーーーーーーーーーーっ！！！』

本音を隠さずに泣き叫ぶ俺（フレス）の使い魔。

・・・・・・・・・・・・・・ときどき、契約ってクーリングオフできないかどうか真剣に考えることがある・・・・・・

「覚悟を決めろ、フレス。」

一言だけ告げて俺は改めてその敵を観察する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ、流れ星・・・・・・・」

空を見上げて呆然と星を眺める姿には隙しか存在しない。

これならたぶんメアリたちの方が隙が少ない。

「ちょうちょだ。」

野生の蝶に無防備に近づいて行く。

やはりどこからどう見ても隙だらけだ。

俺なんか相手にする価値すらないという意味かもしれないが、今なら確実に一撃入れることができる。

「きれいだな～・・・・・・・・・・・・・・・」

だというのに何故だろうか。

俺が殺されるイメージしか湧いてこないのは。

「考えても仕方ない・・・・・・・・・・・・・っ！」

嫌なイメージを振り払うように全力で踏み込む。

音を遥かに凌駕した速度でその敵に間合いを詰めた俺はその小さな頭を狙って――――――――――――――

「金剛葬撃っ！！」

一撃必殺の技を繰り出した。

放った技は相手の体の中に衝撃を叩き込み、内部で爆散させて敵の体を完全に破壊する技だ。

脳や心臓、胃や腎臓などどこかの体内器官を狙って放てば、例え他の器官が無事でも標的となったその器官は確実に破壊される。

今回狙ったのは脳。

心臓が破壊されても生きている奴はいたが、脳を破壊されて生きていた奴はいない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・嘘だろ。」

だがそれは俺の経験上の話。

今回の敵はそれに含まれていなかった。

「・・・・・・・・・・持ち帰ったら怒られるかな～・・・・・・・・・・・・・・・」

確実に脳が破壊されたはずのその敵は、何一つ変わらない体勢で蝶を見つめている。

俺はその場から飛び退いた。

反撃も追撃もされなかったが、それが逆に不気味でしょうがない。

まるで先ほどの一撃に気付いていないかのようなそのそぶりは、戦慄を通り越して恐怖すら感じる。

「・・・・・・・・・・・・やっぱり諦めよう・・・・・・・・・・・・・・」

蝶から視線を外したその敵は周囲をキョロキョロと見回す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。」

ふと、その視線が俺のいる方向で止まった。

今度はその瞳にしっかりと俺の姿を映しながら。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・仕方ない、あれで遊ぼう。」

つぶやきが終わる直前に俺は腕を交差させて首をガードする。

次の瞬間、先ほどと同じように手甲ごと両腕を貫き首にその敵の爪が少し刺さっているのを感じながら俺は右足で蹴りを入れる。

しかし放った蹴りは空を切っただけでその敵にはかすりもしなかった。

次いで上空から振り下ろされるかかと落としを穴の空いた左腕で迎撃する。

かかと落としと拳が衝突した際、左腕が砕けるのを感じながら右腕を振るった。

「っ！」

俺の拳が届く前にその敵は空中で跳ねて大きく後退した。

左腕が使い物にならなくなったというのに敵は無傷。

「フレス、平気か？」

その敵から決して視線を外さずに、傷だらけになった手甲へと声を掛けるが返答は無い。

なので俺はフレスは気絶していると判断して、それ以上話しかけるのをやめる。

流石に完全に壊されたわけではないので死んではいないだろう。

とはいえ一撃一撃があの破壊力では俺もフレスも長くはもたない。

あの姿になる以外に方法はない、か・・・・・・・・・・・・・・・

生命の危機に瀕しているときに迷っている俺に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・すごい、これなら――――――――――――」

賞賛の言葉と言い様のない恐怖が包み込んだ。

「次はもっと強くできる・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉が耳に入り終わったと同時に、視線を外していないはずの敵の姿がかき消えた。

ｓｉｄｅ???

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ？」

夜よりも深く暗い部屋にいた男は何かを感じたかのように見えないはずの天井を見上げた。

「いかがなされました?」

男は答えず部屋の外へと歩き出す。

女もそれ以上は口を開かず、黙って男の後について行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・あいつめ、何を道草食っているんだか・・・・・・・・・・・・・・・」

ささやくような声に女は興味を惹かれたものの、やはり口を開くことは無かった。

第百四十八話　何気に、ショックだ！（後書き）

契約魔獣は基本的にマスターが死ぬか、粉々にでもされない限り死にません。

第百四十九話　本気に、させたな！（前書き）

ボコられます。

第百四十九話　本気に、させたな！

その一撃を防ぐことができたのは、父親たちの訓練の賜物（たまもの）としか言いようが無かった。

背後からの後頭部を狙った一撃。

自分の直感と経験則に従って右腕を犠牲にどうにか敵の抜き手の軌道をずらす。

かすめた頬から血が垂れ落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・化勁（かけい）・・・・・・」

その敵は静かに確認するようにつぶやく。

化勁とは中国拳法の一種で、簡単に言えば敵の攻撃をそらして無効化するもの。

確かにいま、俺がやったものは化勁を応用したものだが・・・・・・・・

なぜ異世界の住人であるこの敵が化勁の存在を知っているんだ？

「っと、いかんいかん・・・・・・・・・・・・」

考え事をしている余裕があるほど甘い相手ではない。

気を引き締めて全力でやらないと、一瞬で殺される。

と思っていたら、敵の姿が無いことに気が付いた。

「・・・・・・・・今のを防がれたのは、ちょっとショック・・・・・・・」

声の聞こえた方向を向くと、やはり先ほどとまったく同じ位置に立っていた。

音も気配も無く動くそれは瞬間移動や転移魔法の類いに思える。

だが俺の頭はすでに結論を下していた。

あれはそう、単純に俺が見えないほどの速度で動いているだけなんだと。

「・・・・・・・次はもっと早くやる・・・・・・・・・」

むしろ遅くしてくれ、と懇願する暇も無くその姿が消えた。

正面から頭を狙った鋭い手刀。

直感がそう告げたのと同時に俺は右へ跳んだ。

その判断が功を奏し敵の手刀を回避することに成功。

したのだが――――――――――――――――――――――――

「げっ！？」

その敵の手刀は余波だけで一直線に大地を引き裂いた。

深く大きな傷跡が真っ直ぐに伸びて行き、どこまで伸びて行ったのか判断することができなかった。

今の一撃は俺が放つどの技よりも破壊力がある。

「・・・・・・・・・・・・・・また、避けられた・・・・・・・・」

しょぼくれるその容姿は、まさしく可哀想な子どもというにふさわしかったがやっていることはただの環境破壊だ。

「・・・・・・・・どうすれば、当たる？」

「どうやっても当たらない。だから諦めろ。」

首を捻りながら問いかけてくる敵にはっきりと答えを返す。

逃げるつもりも逃がすつもりもないが、１％の勝ち目も無いのも厳然たる事実。

こうなったらあの姿になるしかないか――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・ん、わかった・・・・・・・・・・」

その言葉がさっきの諦めろという言葉に対する返答だと気付くのまで約二秒。

フレスを強制的に切り離して遠くへ投げ捨てるのに約一秒半。

「・・・・・・・・・・遊ぶのは、あきらめる・・・・・・」

続く言葉が今までまるで本気を出していなかったのだと理解するまでの時間は一瞬。

姿が消えたその敵が俺の腹に穴を開けることを感じるまでの間だけだった。

「がっ・・・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・・・」

口から非常に多量の血液が溢れ出る。

内臓は確実に潰された。

誰がどのように見ても致命傷としか見られない状態。

「・・・・・・・・・・・次、行く・・・・・・」

人の腹を貫いた手を引っ込めると姿が消える。

顎に強烈な一撃を食らい宙を舞う。

だが地面に落ちることは無くそのまま宙に浮いていた。

身体全身を苛烈な暴力が襲い続けながら。

一秒の内に少なくとも百撃はくだらない打撃の大嵐。

飲み込んだ対象を決して逃さず、粉々に朽ち果てるまで蝕(むしば)み続ける

殲滅の暴風。

一撃一撃は先ほどのものよりは弱まっているものの数がケタ違いに多すぎる。

肉は裂け骨が砕かれ臓器が潰されても決してやむことのない非情の鉄槌。

確実なる死。

走馬灯が駆け廻(めぐ)りなどはしないが生命が尽きようとしているのは理解できる。

・・・・・・・・・理解、できる？

腹の奥からふつふつと怒りが湧き出してくる。

瀕死になっているはずの自分の体が他人の様に遠くに感じる。

どうして俺がこのような目に合っているのか。

理不尽な死を受け入れなければならないのか。

俺が死ぬのは東間と理香の幸せになっている姿を見届けた後でなければならない。

「・・・・・・・・これで、終わり・・・・・・・・」

力のこもった蹴りの一撃が俺を光速で吹き飛ばし再び一軒の家に激突し倒壊した家屋に飲み込まれる。

「・・・・・・・・それなりに、面白かった・・・・・」

その敵が俺に背中を向けて歩き出す。

・・・・・・・・・・・・・・・怪物には怪物のふさわしい死に方が存在する。

暗闇の中で砕けた右手を強く握りしめる。

俺がこんなところで死ぬこと自体がありえない、間違っている。

こんなところで――――――――――――――――――――――――――――――――

「――――――――――――――――――――終わることは絶対に許されないんだよっ！！」

「っ！？」

俺の体から放出された衝撃波が倒壊した家を粉々に吹き飛ばした。

その敵は咄嗟に遠くへと逃げて衝撃波を避けたようだが、そんなことはどうでもいい。

「散々、好き勝手なぶってくれやがって・・・・・・・・・・・・覚悟はできてるよなぁっ！！」

忌々しいこの姿にしたこと。

さんざん痛ぶってくれたこと。

そして何より理香を殺そうとしたこと。

「その命で償ってもらうっ！！」

異形の右手を突き出した俺に、その敵はかすかに口元を歪めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・面白い、ね・・・・・・・・・・・・」

ささやく声が空気に溶け込むころには、俺と敵の姿が消えていた。

ｓｉｄｅ東間

「っ！？」

僕は歩んでいた足を止めた。

「東間様？　どうかなされましたか？」

メアリが疲れを滲ませた声で尋ねてくる。

たびたび襲いかかってくる謎の集団を撃退しながら僕たちは森の中をさ迷っていた。

疲労もかなり蓄積していたが、一つの場所に留まることは危険だったので満足に休むことすらできない。

「・・・・・・・・・・・いいや、なんでもないよ。」

そんな状況でメアリに心配を掛けさせるわけにはいかない。

僕は胸の中にある嫌な予感を外には出さずに、歩みを再開した。

第百四十九話　本気に、させたな！（後書き）

仁が全力で戦うようです。

第百五十話　まさしく、怪物だな！（前書き）

一見、互角の戦い。

第百五十話　まさしく、怪物だな！

一撃、二撃、三撃、四撃――――――――――――――――――――

一秒を数える間に延々と繰り返される光速の攻防。

この戦いを目視できる奴が果たしてどれだけ存在しているだろうか。

お互いに声を発することも無く（発したところで耳に入ってはこないだろうが）敵の一撃を避け、あるいは受け止めてから自分の一撃を相手に繰り出す。

終わりの見えない戦いを続ける俺は奇妙な違和感を感じていた。

この敵は間違いなく最強の敵だ。

ヴェンリス、いや父親よりも強い。（メイドさんは別の意味で最強なので除外。）

だがこの敵には脅威（きょうい）を感じていない自分が存在するのがはっきりとわかる。

ヴェンリスは肌で感じる強大な気配を。

怒った父親からは数百メートル離れていても感じる恐怖を。

だがこの敵からはそういった気配をまったく感じない。

メイドさんの様に意図的に気配を隠しているわけではない。

こうして視認していなければそこにいることがわからないほど、何も感じないのだ。

魔力も生命としての気配すらも。

・・・・・・・・・・・・・・危険な相手だな・・・・・・・

繰り出される神速の突きを右手で掴み取り握り潰す。

骨をバラバラに筋肉をグシャグシャにしてやったというのに顔色一つ変えずに左手でこちらの心臓をえぐり出そうとしてくる。

俺は左手が胸に触れる寸前に右腕を掴んだまま顔面を思いっきり蹴り飛ばした。

その敵は先ほどの俺の様に光速で吹き飛び家に激突して家屋を倒壊させた。

ただしさっきの俺とは違いその敵の右腕は俺が持ったままだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

このままいけば勝てると確信している一方で、現状をひどく冷静に見ている俺がいた。

忌まわしいがこの姿になれば実力差はほとんどない。

というよりも少しではあるが俺の方が優位に立っている。

そのはずなのに――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・すごい、すごい・・・・・・・・・・・・・・」

倒壊した家の中からボロボロのその敵が姿を現す。

その顔には苦痛や恐怖、憤怒の感情は一切無く代わりに凶悪な笑みだけが張り付いていた。

なのに――――――――――――――――――――――――――――――

それでも何も感じない。

その敵からは何一つ感じることができない。

「・・・・・・・・・一つだけ、訊いても良いか？」

「・・・・・・・・・・・・・・なに、を・・・・・・・・・・・・・・」

会話の最中にいきなり攻撃されないように警戒しつつも言葉を続ける。

「お前は一体何だ？」

「・・・・・・・・・・・・・・はは、ははは・・・・・・・・・・・・・・」

質問に対する回答は笑い声。

「・・・・・・・・・・・・・・・誰だじゃなくて、何だなんだね・・・・・・」

というわけでもなかったらしくその敵の声はそこで終わらなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・僕は何でもないモノ、ただここにいるだけのモノ・・・・・・・・・・・・・・・」

「名前は？」

再び問いかけた俺に愉悦の視線を向けて。

「・・・・・・・・・・・・・・・そんなものない、だけど・・・・・・・・・・」

一旦、口を閉じて考える素振りを見せてから口を開く。

「・・・・・・・・・・・・・・・マキナ、デウス・エクス・マキナでいい・・・・・・・・・・・・・・・」

「機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）だと・・・・・・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・そう、それが僕の名・・・・・・・・・・・・・・・」

唐突に、右腕で顔を押さえて実におかしそうに笑い声を上げ始めるその敵――――――――――――――――――――――――マキナ。

・・・・・・・・・・・・・・・

右腕で――――――

「・・・・・・・・・・・・・・もっと、楽しめる・・・・・・・・・・・・・・」

駆け抜けた先には、無表情だったことが信じられないほど表情豊かな俺以上の怪物が笑っていた。

ｓｉｄｅリューグ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ。」

遠くに離れていても感じることのできる仁の凶悪な魔力。

理香は今にも走り出そうとしては立ち止まって戻ってくるを繰り返している。

仁の魔力はどういう手段を使っているのかは知らないが普段とは比較にならないほど絶大かつ凶悪になっている。

誰が相手であろうと負けるはずはない。

だと思っているはずなのに――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・くそっ！！」

駆けつければ足手まといにしかならないとわかっているものの、漠然とした不安が胸の中から溢れてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・死んだら殺してやる・・・・・・・・」

悪態をつくことしかできない自分自身に苛立ちながら俺は星を見上げた。

第百五十話　まさしく、怪物だな！（後書き）

互角では無かった戦い。

第百五十一話　犬ころ風情で、どうにかなると思うなよ！（前書き）

遊びをやめると言ったマキナでしたが、それは遊べなくなったから処分するという意味で、まだまだ遊べる相手だったら遊びます。

第百五十一話　犬ころ風情で、どうにかなると思うなよ！

「でぇりゃあっ！！」

上空から力任せに放った右ストレートはマキナの頭に直撃し、その体を地面に深くめり込ませた。

手から伝わってくる感触は間違いなくマキナの頭蓋を砕いた。

はずなのに――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・まだ、まだ・・・・・・・・・」

砕かれた頭でマキナは平然としゃべった。

そのままマキナは左腕で俺の胸を貫く。

「がはっ！」

寸前で体を少しずらしたおかげで心臓への直撃はまぬがれた。

俺は体を貫いているマキナの腕を右手でねじり切り、距離を取った。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・」

マキナを腕を引き抜くと、傷口から大量の出血が起こったが放っておけば勝手にふさがる。

問題は――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・いた、い・・・・・・・・・・・」

口で言いながらもすでに新たな左腕が再生している。

ケタ外れの身体能力と再生能力。

気配がまったくしないため行動の先読みも不可能かつ常に視認していなければならない。

これだけでも十分すぎるほど厄介だが、俺の勘では他にも何かある。

「・・・・・・・・・・・・・・次の、遊び・・・・・・・・・・」

そしてその勘は正しかった。

マキナはおもむろに地面に両手を置いて――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・召、喚・・・・・・・・・・・・」

ささやく声に大地が反応するかのように大きな地震が起こり、マキナの両手を中心に巨大な白い魔法陣が描かれた。

余計なことはさせまいとマキナに右腕を振り下ろす。

全力のスピードとパワーを乗せられた全身全霊の一撃はまさしく会心の一撃。

しかし――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・来て、ヴィトニル・・・・・」

本気で殺すための一撃を無防備に受けたはずのマキナはそれを気にも留めておらず、魔法陣が一際強く光を放ち――――――――――

「グォォォォォォォォォンッ！！！！！」

鼓膜（こまく）が破れるかと思うほどの極大の咆哮。

光が消え去さり視力の戻った俺の視界に入ったのは地面に手を置くマキナと巨大な黒い毛並みの大き過ぎる足。

上を見上げると月の光さえ見えないほど真っ暗な闇が広がっていた。

否、闇では無くそれが黒い体毛だと気付けたのはその巨大な足を見ていたからだろう。

「・・・・・・・・・・・ヴィト、ニル・・・・・・・」

視界を戻すとそこにはマキナの姿は無く声だけがどこからか聞こえてくる。

「・・・・・・・・・・・遊んで、あげて・・・・・・・」

再び巨大な咆哮と共にその巨大な足が上にあがり勢い良く俺へと下ろされた。

「っ！？」

俺は瞬時に横に駆け抜けて空へと跳び上がりその巨大な影を見て愕然とした。

「・・・・・・・・・・・・おいおいマジかよ・・・・・・・・・・」

全長三百メートルはあろう巨大な体。

漆黒の毛並みに合わせた巨大な黒い瞳。

唾液が滴り落ちる発達した犬歯が多い口。

とんでもないサイズの黒狼。

それがマキナの呼び出した物の正体だった。

「・・・・・・・・・・・・ヴィト、ニル・・・・・・・・・」

再びどこからともなく聞こえてくるマキナの声。

辺りを見回しても姿が見えないのはどこかに隠れているのか。

「・・・・・・・・・・・・食べて、いいよ・・・・・・・・」

巨大な黒狼――――――――――――――――――――ヴィトニルは主の許しを得て空中を漂う俺へと疾走する。

その巨大な口を開けて俺を踊り食いにしようと大きくジャンプ。

だが――――――――――――――――――――――――――――

「びっくりワンちゃんコンテストにでも出ていろっ！！」

俺は空中で駆けてヴィトニルの鼻先を右腕で殴り飛ばした。

「ギャウンッ！？」

ヴィトニルは悲鳴を上げて地面に激突する。

「ついでだっ！！」

俺は地面に倒れたヴィトニルの腹へ真っ直ぐに駆けて、その勢いに乗せた右腕を振り下ろした。

「ギャウゥゥゥゥゥンッ！！！！！！」

更に大きな悲鳴を上げたヴィトニルは動かなくなる。

「・・・・・・・・・・・・・動物、虐待・・・・・・・・・・」

「やかましいっ！！」

ヴィトニルの上に立って周囲を見回しても、やはり声だけが聞こえてきてマキナの姿は無かった。

「・・・・・・・・・・・・・しょうが、ない・・・・・・・・・」

マキナが指を鳴らすとヴィトニルの姿が消えた。

「・・・・・・・・・・・・・次は、これ・・・・・・・・・・」

姿を見せないマキナがつぶやくと、今度は空に巨大な魔法陣が展開された。

ｓｉｄｅヴェンリス

「ぐっ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・」

ヴェンリスは吐血をこぼしながら床に膝をついた。

砕けかけた槍を支えにしておかなければ立ち上がれないほど疲弊した体で倒れた侵入者を睨みつける。

「・・・・・・・・・・・・あんた・・・・・・・どんな化け物よ・・・・・」

侵入者は閉じかけた瞳で私を見つめている。

正直、これほどの使い手をこの場で殺したくは無い。

だが――――――――――――――――――――――――――――――――

「ここは魔王城、そして私は魔王陛下の矛だ・・・・・・・・・」

魔王城に侵入し魔王陛下の命を狙った者を私情で逃がすわけにはいかない。

私は止めを刺すために足を引きずりながら侵入者へ近づいて行った。

第百五十一話　犬ころ風情で、どうにかなると思うなよ！（後書き）

どれだけ大きな魔獣だろうと、今の仁の敵ではありません。

第百五十二話　次から、次へと！（前書き）

遊びは続く。

第百五十二話　次から、次へと！

「・・・・・・・・・・・・・脱出、ゲーム・・・・・・・・・」

展開された巨大な魔法陣から白い光の矢が雨の様に降り注ぐ。

「ちぃっ！」

右手で防いでみると殺傷能力は高くは無いが、当たった時の衝撃はかなりのものだった。

長時間食らい続けると体が持たないな・・・・・・・・・・・・

視線を横に向けると魔法陣の外は弾幕が降っていない。

上空から降り注ぐ光の弾幕に対して右手を盾にしながら魔法陣の範囲外へ駆け抜ける。

しかし――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・逃がさ、ない・・・・・・・・・」

もう少しで魔法陣の外に出るというところまでたどり着くと、光の弾幕は雨を通り越して滝の様に降り注ぎ俺の行く手を阻む。

「くっ・・・・・・・・・・・・っ！」

光の滝に押し戻され魔法陣の内側に戻されると光の弾幕の勢いは雨に戻る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふむ。

もう一度、今度は逆方向に駆け抜けるもやはり光の滝に阻まれて押し戻される。

・・・・・・・・・・・・・・なるほど、どうやらこれも遊びの一つみたいだな・・・・・・・・・

殺すつもりならもっと殺傷能力の高い攻撃をしてくるはず。

それをしないってことは俺がどうやって魔法陣の外へ出るかを試していやがる。

魔法陣を叩き壊すという手もあるにはあるが、ジャンプしたところで魔法陣にたどり着く前に撃ち落とされる。

それにそもそも破壊できる類いのものかもわからない。

俺は再び魔法陣から脱出するために駆け出した。

「・・・・・・・・・・・・・・無、駄・・・・・・・・・・・・・・」

光の弾幕は一点集中し雨は滝の様に勢いを強める。

その瞬間、俺は身をひるがえして反対方向へ全力で跳んだ。

光が一点に集中する以上、他の部分が薄くなるのは先ほど確認済み。

「・・・・・・・・・・・・・・甘、い・・・・・・・・・・・・・・」

だがそれはあらかじめ想定済みだったらしく俺が跳んだ方向に光の滝が降り注ぐ。

まあ、こちらもそれくらいは想定済みなわけだが。

俺は光の滝の直前で更に空中で跳ねて方向を変えた。

光の滝が雨に戻る前に、俺は更にもう一度空中で跳ねて速度を上げる。

無事、脱出に成功した俺は空を見上げると魔法陣は空気に溶けるように消えて行った。

「・・・・・・・・・・・・・・正、解・・・・・・・・・・・・」

拍手の音と共に、突然マキナが何の前触れも無く出現した。

転移か・・・・・・・・・・・・・？　いや何か違う気がする・・・・・・・・・

訝(いぶか)しむ俺を無視するような形でマキナは拍手を続けている。

「・・・・・・・・・・・・・すごい、本当に・・・・・・・」

キラキラと輝く瞳は、新しいおもちゃを買ってもらった子供のソレとなんら変わらない。

この姿だけを見れば誰もこいつが凶暴な怪物だとは思わないだろう。

・・・・・・・・・・正確に言えば無邪気な怪物か。

「・・・・・・・・・・次は、鬼ごっこ・・・・・・」

無邪気な瞳のまま宣言した次の遊びにどうしようもない不安を覚えた。

たぶん、鬼ごっこは鬼ごっこでもシャレにならない鬼ごっこなんだろうな・・・・・・

本当なら今すぐにでもマキナの首を取りたいのだが、マキナはそんな俺の心情に恐らく気付きながらも楽しんでいる。

「・・・・・・・・・・範囲は、この広場だけ・・・」

マキナはまず地面を指差し。

「・・・・・・・・・・僕が、鬼・・・・・・・・・」

次に自分を指差し。

「・・・・・・・・・・十秒後、始める・・・・・・・」

最後にそう宣言してから目を閉じた。

・・・・・・・・・・さて、どうする・・・・・・

遊びに付き合ってやる義務も義理も存在しない。

むしろ隙だらけの今の内に（そう見えるだけで実際は隙なんて存在

していないだろうが）その首を捻り潰すことも可能だ。

だが――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・ろーく、しーち・・・・・・」

逆らってはいけないという謎の恐怖が俺の体を支配している。

鬼ごっこがスタートした時点で俺は絶対にマキナに触れてはいけなくなったのだと。

こういう時の俺の直感は嫌になるくらい良く的中する。

俺は姿勢を低く、いつでも全力で走れるようにしながらマキナに視線を固定する。

「・・・・・・・・・・・・きゅー、じゅー・・・・・・・・」

マキナがその目を開く。

「・・・・・・・・・・・・今度も、正解・・・・・・・・」

本当に嬉しそうに俺に笑顔を向けるマキナ。

・・・・・・こいつ相手に隠れた所で何の意味も無い。

更に範囲が決まっている以上、逃げられる場所も限られてくる上にマキナの気配を探ることは不可能。

ならば重要なのはマキナから決して視線を外さないこと。

「・・・・・・・・・・・・・・それじゃあ、行く・・・・・・」

笑顔のままマキナはものすごい速さで突撃してきた。

ｓｉｄｅメイドさん

・・・・・・・・・・私は空を見上げて月を見つめました。

真っ白く輝く月。

何もかもを浄化する優しい光。

なのに今夜に限っては私の胸に去来するのは不安感だけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・仁・・・・・・・・・」

私は無意識に彼の名前をつぶやいていました。

彼の名前を言うたびに何故か不安が大きくなることに気付きながら。

第百五十二話　次から、次へと！（後書き）

次回でマキナ戦は終了の予定です。

第百五十三話　こいつで、どうだ！（前書き）

ヤンデレ系ヒロイン（？）マキナちゃん（性別不詳、外見年齢一桁）

第百五十三話　こいつで、どうだ！

「・・・・・・・・・・・・捕ま、えた・・・・・・・」

俺の胸に小さな手が触れた瞬間――――――――――――――――――――

「ごばっ！？」

体の中がはじけ、地面に倒れ伏した。

骨が砕け筋肉が切断され血液が逆流し内臓が破裂した。

普通の状態だったら俺でも即死は避けられない衝撃。

打撃でも斬撃でも無い。

あえて言うのなら内部から敵を破壊する浸透勁（しんとうけい）が一番近い。

しかし先ほど俺が使った技とは明らかに破壊力が違う。

「がはっ、げぼっ、ごほっ！！」

咽喉（のど）の奥からから次々と溢れ出てくる血を吐き出す。

「・・・・・・・・・・・・鬼、交代・・・・・・・・」

苦しんでいる俺とは対照的に、声をはずませながら俺から距離を取り始めるマキナ。

鬼ごっこ、と言ってはいたがリアル鬼ごっこも真っ青なこのふざけた攻撃をもう一度受ければ間違いなく死ぬ。

つまり俺が鬼のである内に奴を仕留める必要がある。

無理無茶承知（むりむちゃしょうち）、それでも殺（や）るしかないっ！

「・・・・・・・・・・・・早く、数えて・・・・・・・」

砕けた骨と切れた筋肉を魔力で無理やり動かして起き上ろうとしている俺にマキナは理不尽な注文をしてくる。

「・・・・・・・・・いち、に、さん――――――――――――――――――」

生まれたての仔馬の様に両手足をガタガタと震えさせながらどうにか立ち上がる。

同時にマキナの注文通り数を数え始める。

長期戦は不可能、それどころかこれ以上戦うこと自体がもはやできない。

つまり数え終わったと同時に限界を超えた一撃を放つ以外、俺に勝利は無い。

俺の考えていることを見抜いているからか、マキナは上機嫌に俺を見守っている。

・・・・・・・・・こいつは今、心の奥底から期待している。

俺の一撃が自分を傷付けることができることを望んでいる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・上等だ。

正気の沙汰とは思えない行動だったが、俺もマキナも人ではない以上、人としての思考を当て嵌(は)めること自体が間違いだ

「・・・・な、はち、きゅう・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

全身全霊だけでは足りない。

今までの限界を超えた一撃を放たなければマキナは倒せない。

迷いは禁物(きんもつ)、自分の体を省(かえり)みることも禁止。

俺の体の全細胞に言い聞かせる。

――――――――――――――――――――――――――――――――

マキナ(てき)を殺せと――――――――――――――――――――――――

――――――――

「じゅうっ！！！」

それ以外、何も考えずに駆け抜ける。

ただただ全ての力を込めてマキナを打ち崩すために。

「神殺(ロン・ギヌス)しっ！！！」

右腕だけではなく全身を一本の槍と化した一撃。
機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）を貫く神殺しの槍はマキナの体を貫いた。

「・・・・・・・・・・・・残念、賞・・・・・・・・・」

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

貫かれたマキナは子供らしい笑みを浮かべながら。

「・・・・・・・・・・・・これで、おしまい・・・・・」

再び俺の胸にマキナの手が触れた。

最後の瞬間まで意識だけは失わないように気を張っていたおかげで、倒れても意識だけは残すことに成功したがそれだけだ。

「・・・・・・・・・・・・すごく、面白かった・・・」

地面に倒れた俺は首しか動かせない状況になっていた。

痛覚神経は許容量を超えたため（あるいは壊れたのか）痛みが無いのは救いと言えば救いだった。

「・・・・・・・・・・・・また、遊びたいな・・・・」

マキナはしゃがみ込み俺の顔を見る。

「・・・・・・・・・・・・名前、教えて・・・・・・」

「そいつの名前は影月仁だ。」

答える前にマキナの質問に対する回答を発した男がいた。

後ろに秘書らしき女性を従えたその男はマキナとは違い、はっきりと強大な気配を感じ取れる。

「まったく・・・・・・・勝手なことばかりして・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・何の、用・・・・・・・・・」

男に対してマキナは目に見えて不機嫌な顔になった。

知り合いには違いないだろうが二人の間に何かあったのだろうか。

「何の用ではない、誰を消そうがお前の勝手だが役に立ちそうなギルドのメンバーを殺すのだけはやめろと言っているだろう。」

「・・・・・・・・・・・・・・ギル、ド・・・・・・・・・」

一枚の紙を取り出し、マキナに差し出す男。

マキナは黙ってその紙を眺めるだけで受け取ろうとはしない。

「・・・・・・・・・・・・・・・まあ、いい。とにかく帰るぞ。これ以上ここにいては余計なことに巻き込まれかねない。」

男はそれだけ言うとその場から消えた。

控えていた女も同様に消える。

魔力の気配を感じたことから転移の類いであることはわかった。

消えた男たちを見つめていたマキナは笑顔で俺に振り返る。

「・・・・・・・・・・・・じゃあ、ね・・・・・・・」

マキナも男たちの後を追うように消失したが、やはりマキナだけは魔力を感じることはできなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人残された俺は体が戻って行くのと同時に生じた異様な眠気に身を任せて目を閉じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・悪い、理香・・・・・・・・」

届かない謝罪の言葉を口に出しながら。

ｓｉｄｅマキナ

「・・・・・・・・・・・・・・ふ、ふふ・・・・・・・・・」

胸にできた傷口を触りながら僕は笑う。

そこには未だに癒えない確かな傷跡と流れる赤い血液があった。

僕が傷を付けられた。

その事実に興奮を隠しきれない。

「・・・・・・・・・・・・・・カゲツキ、ジン・・・・・・」

指に付着した血を舐めながら僕は愛(いと)しい彼の名前を口に出した。

第百五十三話　こいつで、どうだ！（後書き）

マキナ戦終了。

理香の命を狙った相手に敗北してしまった仁の胸中は如何に・・・・・

第百五十四話　良く、寝たな！（前書き）

目覚めるとそこは――――――

第百五十四話　良く、寝たな！

目を開けるとそこは薄暗い見知らぬ牢獄の中だった。

なぜ牢獄なのかわかったかと言えば、単に視界内に一番最初に映ったのが鉄格子だったからだが。

起き上ろうとして俺は自分の両手が手錠の様な鎖で縛られていることに気が付いた。

魔力で肉体強化を行えないところを見ると、たぶん魔力を封じる鎖だ。

だが不思議なことに体にそれほどダメージが残っていない。

軽い運動くらいなら可能なレベルまで回復している。

寝ているうちに回復していたのだろうか？

「それにしても牢獄の中にぶち込まれるなんていつ以来――――――――――――――」

・・・・・・・・・・いや、つい最近牢獄の中に入れられたことがあったな。

具体的に言うとハーピィの巣の中で。

捕らわれのお姫様の気分を味わいながら持ち物検査。

服は囚人服（誰が着換えさせたのかは非常に気になるところだが、今は無視。）お金は財布ごと無くなっている。

武器になりそうなものも全て奪われたようだ。（木彫りの熊も無くなっている。奪った犯人は見つけ次第、惨殺しよう。）

後は特に変化は無し。

次にどうして俺がここにいるのかについて考察してみる。

確かマキナの奴に負けた後、気を失ったはずなんだが――――――――――――――――――――

「マキナ、か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

理香を殺そうとした奴に手も足も出せずに大敗した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・奴だけは俺の手で必ず殺してやる。

俺は両手を強く握りしめて、溢れだしそうな怒りを心の奥底に沈める。

必ずリベンジはする、その時までこの怒りは残しておく必要がある。

心を落ち着かせた俺は、改めて思いだそうとするがマキナにやられた後のことは思い出せない。

「う～む・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・起きたのかい、新人さん。」

とりあえずいくつかの人の気配を感じ取ってキョロキョロと周囲を見回していた俺に、向かい側の牢屋から声を掛けてくる人物がいた。

薄暗い上に物陰にでも隠れているのか、姿は見えなかったが声からして三十代半ばくらいのおっさんだろう。

「・・・・・・・・・・・何をやったのかは知らないけど、あんたも運が悪いね。よりによってこんなところに運ばれてくるなんて。」

「ここはそんなにやばいところなのか？」

少しでも情報を集めようとする俺におっさんは溜め息を一つ。

「・・・・・・・・・・・なにも知らないのかい、ここは竜人たちのための奴隷収容施設さ。ここに連れてこられた人間の罪人は死ぬまで――――――――――――――いや、死んでもなお竜人たちのために重労働を強いられる・・・・・・」

おっさんの声は絶望と諦めの入り混じった疲れた声だった。

このおっさんはここに連れてこられてしばらくの期間、働かされ続けたようだな。

「おっさん、あんたは一体どんな悪事を働いてここに連れてこられたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なにも。」

おっさんは再び大きな溜め息をついた。

「私はいつも通り働いていたら突然、王の使者を名乗るものが現れて強制的にここに連れてこられてしまったのさ・・・・・・」

おっさんの声には嘘偽りの色は混じっていない。

どうやら本当に何もしていないのに捕まってしまったようだ。

「・・・・・・・それがこの国の連中のやり方さ・・・・・・」

乾いた笑いを漏らすおっさん。

・・・・・・・俺は将来、もっと夢のあるおっさんになろうと誓った瞬間であった。

そんなことを考えていると、牢獄内に突如大量の明かりが点灯した。

「ひぃっ！　奴らだっ！　看守どもが来るっ！！」

「あっ、おいっ！　おっさんっ！」

おっさんは逃げ場のない牢獄内の自分の牢の一番奥へ身を潜める。

他の囚人共も同様に自分の牢屋の一番奥へ隠れてしまった。

・・・・・・・こいつらは一体何をそんなに恐れているのだろうか？

「おらぁっ！　てめぇら、仕事の時間だぞぉっ！」

その疑問は入口の扉を蹴破りながら雑魚っぽい口調で現れた看守によって解消された。

現れた看守は人の姿をしていなかった。

正確に言うと二足歩行はしているのだが、身長は二メートル越えで鋭い牙がいくつも並び伸びたかぎ爪が生えている。

命名するならリザードマン、が妥当なところだろう。

「今日もしっかりと働いてもらうからなぁっ！　覚悟しておけよぉっ！」

看守がのしのしと歩きながら徘徊(はいかい)を始める。

皆、徘徊する看守に目を合わせないように縮(ちぢ)こまっている様だ。

ふと、看守は俺の牢の前で立ち止まった。

「あぁんっ、誰だてめぇ、新入りか？」

顔を近づけてくる看守の生臭い吐息に鼻を手で覆う。

「息が臭いぞ、それ以上顔を近づけるな。」

目に見えた挑発だったが看守は顔を紅潮させた。

「・・・・・・てめぇ、良い度胸してんじゃねえか。」

看守が俺の牢の鍵を開ける。

「出ろ、今からてめぇに地獄の洗礼を味あわせてやる。」

ありきたりな看守の言葉に従い、俺は牢の中から出る。

さてと、情報収集を始めるか。

内心でそんなことを考えている俺の前を看守は歩き始めた。

ｓｉｄｅ???

闇の中に黒いフードに包まれた一つの集団があった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ここだ。」

そのうちの一人が地図を広げて確認するようにつぶやく。

「散れ。」

静かな命令に地図を広げた一人以外が一斉に散らばって行った。

第百五十四話　良く、寝たな！（後書き）

捕らわれの身になった仁。

第百五十五話　こいつら、生臭い！（前書き）

生臭い部屋のご招待。

ちなみに仁は彼らのことを東間たちの障害にならないのであれば、相手にする価値が無いと思っています。

第百五十五話　こいつら、生臭い！

監獄内を歩きまわされた俺は、とある一室を目指して生臭(なまぐさ)トカゲ看守（勝手に名付けてみました）と共に歩いている。

歩きながら看守の話を聞く限り、どうやらこの監獄は鉱山に繋がっており、そこで罪人に罪を償うというお題目の元、重労働を強いているそうだ。

歩いている途中に出会ったのは全てリザードマンと恐怖に顔を引きつらせている罪人（人間）だけだったところから見ると、ここが奴隷収容所という話も頷(うなず)ける。

・・・・・一部の人間が獣人を奴隷としている、竜人の中にも人間を奴隷として使役しているというわけか・・・・・・・・・・

魔王軍に支配されそうなこの時期にそんなことをしている阿呆(あほう)共がいるとはな・・・・・・・・・

このことが発覚したら人間と竜人との間に決定的な亀裂ができる。

俺の知ったことではないが、それで苦労するのがあの馬鹿どもだとするなら今の内にこいつら全員皆殺しにして証拠を隠滅した方が良いのではないだろうか。

「看守長、新入りを連れて参りやした。」

「入りたまえ。」

変わらず生臭い吐息を吐き出しながら話す生臭トカゲ看守（面倒だからこれからは生臭看守で）の言葉で、俺は目的地である一室にたどり着いたことに気が付いた。

「おらぁ、早くしろっ！」

生臭に背中を叩かれながら俺は部屋の中に足を踏み入れた。

「うっ・・・・・・・・・・・・・っ！？」

結構広くきれいに整理されている部屋は、左右に並んだリザードマンたちのせいでとてつもなく生臭く変貌してしまっていた。

額縁（がくぶち）に飾ってある風景画も天井にある豪勢なシャンデリアも全てこの生臭さが台無しにしている。

「ようこそ、新たな罪人よ。」

声を発したのは部屋の奥にある大きな机と豪華なイスに座ってこちらを見下す視線を向ける小悪党という呼び名が良く似合いそうな眼鏡を掛けた桃色髪の男。

・・・・・・・・・・・・なんで男なのに桃色の髪なのかは俺に訊くなよ・・・・・・・・・・

「さて、必要はないだろうが君の罪状を述べてあげよう。」

看守長と呼ばれた男が指をパチンと鳴らすと、一体のリザードマンが一枚の紙を手渡した。

「罪人ナンバー５９３４８、君は我が国の自然破壊及び『竜然護団（りゅうぜんごだん）』支部の壊滅の罪によってここに連れてこられた。」

後者は事実（半分以上マキナのせいにしておくとして）だが、前者は思い当たる節が無い。

「聞くところによると、君はこの国で大蛇を殺したそうだね。」

その一言で俺は前に尋問した『竜然護団』のメンバーの話を思い出した。

確かこの国で蛇やトカゲなど竜に近い存在（爬虫類）を殺すことは暗黙のルールとして禁止されているとか。

そのルールを破った俺たちに『正しき制裁』とやらを行うために捕らえようとしていたとか。

それにしても、これが自然保護団体が掲げる『正しき制裁』、ねぇ・・・・・・・・・

「それだけでも重罪なのにその上、罪のない一般市民たちを襲った罪。もはや死刑は避けられないところだったのだが――――――――――――――――――――――――」

男の眼鏡がキラリと光る。

「特別に我が国で奉仕作業をすることが許された。なぁに、たったの五百年だ。頑張って奉仕作業に努めたまえ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・本気なのか冗談なのか。

とりあえず死ぬまで解放されないことは間違いなさそうだが。

「ああ、そういえば君は人間だったね。君一人では精々百年が限界か。」

周りの看守共が豪快に笑い出す。

その瞳は完全に人間という種族そのものを馬鹿にしきっていた。

「安心したまえ、君一人で償いきれなければ君の子供に罪が移るだけだ。」

「はっ？」

意味がわからなかった俺は思わず頓狂（とんきょう）な声を上げてしまった。

看守長はそんな俺に下等生物でも見下すような憐みの視線を向ける。

「失礼、君のような存在にはもっと長々と説明しなければ理解できないみたいだね。つまり君は交尾ができる年齢の内に囚人共の中から適当なメスと交尾をして子供を産ませるんだ。その子供が君と共に罪を償うというわけさ。」

看守長は愉快そうに唇を歪めて。

「ああそうそう、君が生きている期間内はその子供がいくら働こうとも罪が引き継がれていない以上、刑期には何の影響もでないがね。」

それが当然のことだと言い切った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふぅ～・・・・・・・・・

前にメイドさんがいつかの馬鹿が竜人としてはマシな存在だと言っていたが――――――――――――――

「まさかここまでのクズしかいなかったとは・・・・・・・・・・・・・」

正直、予想外過ぎて言葉も出ないほど呆れている。

「話は終わりだよ、連れて行きたまえ。」

「はっ！　おらっ！　行くぞっ！」

生臭看守が俺の背中を叩く。

「てめぇにはこれから存分に働いてもらうぜぇ。ギャハハハハハハッ！！」

生臭い吐息にさらされながら俺はこんな害虫どもからさっさと逃げ出す手段を考えていた。

ｓｉｄｅ？？？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人の黒いフードの元に、別の黒いフードたちが集まった。

「経路は？」

「確保。」

「良し、行くぞ。」

黒いフードたちは暗闇の中に姿を消す。

誰にも目撃されないように、細心の注意を払いながら。

第百五十五話　こいつら、生臭い！（後書き）

地獄の洗礼とか言いつつ全然地獄の洗礼じゃありませんでした。

ですがそれは仕方が無いことなんです。

なぜならば生臭看守は「地獄の洗礼を味あわせてやる」という発言を言ったこと自体覚えていなかったのですから・・・・・・・・・

第百五十六話　自由に、なれたな！（前書き）

所詮トカゲ。

第百五十六話　自由に、なれたな！

「着いたぜ、ここがてめぇがこれから死ぬまで働く場所、だっ！」

背中を蹴られ（この生臭看守、人の背中を攻撃するのが好きだな・・・・・）前に押し出された俺は転びそうになったのをなんとか踏み止まった。

連れてこられた鉱山は魔法の応用で作られた電球の様な物で明るく照らされたどこにでもある様な普通の鉱山だった。

見るとあちこちで囚人服を着た人間が看守である生臭共に見張られながら必死に動いている。

岩盤を掘る者、鉱石を運ぶ者、看守に鞭で叩かれている者――――――――――――――――――――

実に様々な役割をこなしている。

「なぁ、いくつか訊きたいことがあるんだが。」

「あぁんっ！　・・・・・・ちっ、てめぇは新入りだからな。今回だけは特別に何でも答えてやるよ。何が訊きてぇんだ？」

この生臭看守、根は親切な奴なのかな？

そんなことを思いながら俺はまず手錠型の鎖に巻かれた自分の腕を差し出す。

「これを外してもらわないと作業ができないんだが。」

「安心しろ、作業の間だけはその鎖は外してやる。」

見張りは当然いるがな。と笑いながら付け足す生臭看守。

つまりその間は魔力が使えるというわけか・・・・・・・・・

「五百年と言っていたが、この鉱山の大きさでこれだけの人数がいたなら全ての鉱石が掘り終わるまでそれほどの時間は必要ないと思うが？」

「ここが終わったら次の鉱山に移るだけだ。万が一、発掘できる鉱山が無くなった時は貴族共の奴隷になるだけだ。」

・・・・・・ある意味予想通りの答えだな・・・・・・・・

「腹を壊したときとかはどうすればいいんだ？」

「他の看守ならその場でやれ。と言うだろうが、俺は臭いのは嫌いだからな。俺に言えば特別に厠（かわや）に案内してやるよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり良い生臭なのか？

生臭看守に対する好感度を上げつつ、俺は看守に鞭で叩かれている老人を指差す。

「あそこで看守に叩かれている老人は何かやらかしたのか？」

「ああ。ありゃあ働けなくなった囚人が別の意味で看守に奉仕活動

しているのさ。」

・・・・・なるほど・・・・・・・・・・・

働けなくなったら看守のストレス解消の相手になるわけか。

「悪趣味だな。」

「ああ、そうだな・・・・・・・・・・」

口から出した言葉に隣から同意を得た俺は少し驚いた。

「お前も悪趣味だと思っているのか。」

訊いてみると生臭看守は地面に唾(つば)を吐き捨てた。

「勘違いするんじゃねえ。下等な人間がどうなろうが俺の知ったことじゃねえが、そんな下等生物をわざわざいたぶって遊んでいやがる他の看守共が気に入らねえだけだ。」

「と言いながら生臭看守は心の内では弱者を救済したいという正義の炎が燃えていたのであった・・・・・・・・・」

「おいこらっ！　何をふざけたことぬかしてんだてめぇっ！！　って言うか生臭看守って俺のことかっ！！」

図星を突かれて照れている生臭看守を俺は微笑ましい気持ちで見つめていた。

「ふざけんなっ！　てめぇはさっさと働けっ！　罪人野郎っ！」

照れ隠しに背中を強く蹴られて俺は地面に倒れる。

「くそっ！　俺はもう行くからなっ！」

「ちょっと待ってくれ。」

足早に去ろうとする生臭看守を慌てて呼び止める。

「なんだっ！！」

俺は鎖に巻かれた両手を差し出しつつ。

「この鎖を解いてから行ってくれないか？」

と駄目元で言ってみたら。

「ちっ・・・・・・・・・・・・・・・っ！！」

舌打ちしながら鎖に付いていた鍵穴を鍵で開けてくれた。

「もういいだろっ！　俺は行くぜっ！！」

生臭看守は吐き捨てるように宣言してから別の看守に何も言わずに去って行った。

・・・・・・・・・親切か、それとも馬鹿なのか・・・・・・・・・

「さて――――――――――――――――――――」

自由になった俺は改めて自分の状態を確認してみる。

持ち物は何も無し、体力は通常通り。

魔力は・・・・・・・・・・鎖が巻かれていた間は回復もしていなかったようだが、今のところ問題無し。

「生臭看守には悪いが・・・・・・・・・こんなところに長居するつもりはないんでね。」

少し簡単に行き過ぎていることに罠の危険性も考えはしたが、これから強制労働を強いる囚人をわざわざ罠にかける必要性は低い。

ならばここはチャンスに乗じて脱獄するべき。

とは言えその前に木彫りの熊だけは見つけないといけないな。

あの素晴らしい造形美を失くしたなんてことになったら子々孫々（ししそんそん）の恥だ。

他の囚人共は気の毒に思う気持ちがまったく無いわけじゃ――――――――――――――――――――

「いや、俺にとってはどうでもいいことか。」

自分の正直な気持ちとして確かに看守共はムカつくが、だからと言ってここの奴らがどうなろうが知ったことではない。

俺は奪われた木彫りの熊を探し出すべく監獄へと駆け出した。

ｓｉｄｅ？？？

「止まれ。」

先頭を走っていた黒いフードが仲間たちを手で制した。

黒いフードは目の前にあるほとんど肉眼では見ることのできない透明な糸の前で手をかざし、何かの魔法を唱える。

すると糸は最初からそこに存在しなかったかのように消滅した。

「行くぞ。」

侵入者を知らせるための罠であった魔力の糸が消えたことを確認した黒いフードたちは再び疾走を開始した。

第百五十六話　自由に、なれたな！（後書き）

次は脱出劇が始まる。

かもしれません。

第百五十七話　ちゃんと、謝ったのに！（前書き）

生臭こと、リザードマンは竜人たちの使い魔の類いです。

第百五十七話　ちゃんと、謝ったのに！

「木彫りぃ～、木彫りぃ～、木彫りの熊ぁ～」

即席の木彫りの熊のための賛美歌を口ずさみながら監獄内を歩き回っていた。

冷静になった生臭看守が俺が自由になったことに気付くのも時間の問題と言えたがそれはそれ。

「素晴らしいぃ～、造形美ぃがぁ～、俺のぉ～、心をぉ～、狂わすぅ～。」

それにこうやって賛美歌を歌ってやれば歓喜した木彫りの熊が自分から現れてくれるかもしれない。

「という妄想はここまでにしておいて。」

道の先、曲がり角から臭ってくる生臭に俺はたまたま近くの部屋あった部屋の扉を開けて（日頃の行いのおかげか、鍵はかかっていなかった）中に入って扉を閉める。

殺(や)っても良いが、なるべく穏便に脱出したい（だって後々面倒なことになりそうなんだもん・・・・・・）のでここは我慢。

「でよぉ、この前の人間の女が・・・・・・

話の内容はロクでもないことだったので聞き流した。

やがて気配が去って行ってからゆっくりと扉を開けて目で確認する。

上下左右見まわしたが誰もいなかったので、外に――――――――――――――――――――――――――――――

「っと。」

出る前に部屋の中で着替えていた十五、六歳程度の金髪ツインテールで下着姿の少女に頭を下げて謝罪する。

「悪ぃ、わざとだ。」

誰かがいる気配には気付いていたが、まさか異世界の監獄内でこんな王道ラブコメ展開が待っていようとは誰も思うまい。

「――」

少女は蒼白になったり赤面したり金魚の様に口をパクパクさせたりと百面相してから。

「――――――――――キャアアア

こかの情けない主人公とは違い気を失ったりはしない。

しかしちゃんと謝ったのに悲鳴を上げるなんて非道い女もいたものだ。

これがメイドさんだったら悲鳴を上げずに食器で処刑、理香だったら真っ赤になって槍で串刺し、リリィだったら悲鳴を上げてから魔法で消滅と、みんな穏便な態度で――――――――――――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・謝っても死は免(まぬが)れないな・・・・・

唯一、ルナールだったら下着を見てもその場で思いっきり殴って（あるいは蹴って）やれば特に問題は無いはずだ。

いろいろ問題だらけだと思うけど、問題は無いっ！！

とまあ現実逃避はここまでにしておいて。

「キャアアアアアァァァッッッ！！　キャアアアアアアアアアアッッッ！！！」

少女は悲鳴を上げ続けながら近くの物を手当たり次第に投げつけてくる。

めちゃくちゃな軌道で次々と物が飛来してくるが、この程度は機動予測ができなかろうが問題無く避けられる。

それにしても・・・・・・・・・・

避けながら部屋の中を確認しているのだが、どう見ても更衣室には見えない。

ロッカーは一つしかないし、やたらと豪勢な部屋のつくりになっているし、そういえば扉に何か赤い文字で注意書きが書いてあった様な――――――――――――――――――――――――――――――

「キャアアアアアアッッッ！！！　キャアアアアアアアアッッッ！！！！」

さて、余計なことを考えながら飛んで来る物を避けている間に廊下にドタドタと大きな複数の足音が響いているのがわかった。

どう考えても看守共が悲鳴に反応してこの部屋に向かっている音だ。

「キャアアアアアアアッッッ！！！！　キャアアアアアアアアッッッ！！！！！」

にしても――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・五月蝿（うるさ）いな・・・・・・・・・」

一向に終わる気配を見せない（大した肺活量だとは思うが。）甲高（かんだか）い悲鳴にいい加減、イラついてきた。

というわけで――――――――――――――――――――――――――――――

「静かにしろ。」

「キャ――――――――――――――――――――――――――ンンッ！？」

少女の口を右手で塞ぎ、残った左手で手を捻り上げる。

「暴れたらこの腕を折る。」

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

本気であることを悟った少女は敵意の眼差しを向けながらも、暴れるような愚行はしなかった。

・・・・・・・・・・下着姿の少女の口を手で押さえて脅している。

人として間違った行為だと思わなくもないが、ちゃんと謝ったのに悲鳴を上げるこいつが悪いということにしておこう。

「姫様っ！！」

「いかがなされましたっ！！　姫様っ！！」

扉の前で叫ぶ生臭たちの声を聞きながら。

「騒ぐなよ。」

「っ！？」

力を込めた後ろ足で背後の壁を破壊した。

ｓｉｄｅ？？？

「っ！？　なんだ・・・・・・・・・・・っ！？」

騒ぎに気付いた黒フードたちは一瞬、自分たちの侵入に気付かれたのかと思ったが――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

看守たちが別の方向へ走っていることに気付く。

なにが起こっているのかはわからないが、この混乱を利用しない手は無い。

「・・・・・・・・・・・・・・・急ぐぞ。」

黒フードたちは走り回っている看守に注意しながら走る速度を上げた。

第百五十七話　ちゃんと、謝ったのに！（後書き）

仁って姫との接点が多いですね。（勇者は東間と理香なのに。）

というかどういう事情で姫様が監獄内で着替えていたのでしょうか・・・・・・・

第百五十八話　こいつら、阿呆だ！（前書き）

竜人の国にも、いろいろありそうです。

第百五十八話　こいつら、阿呆だ！

壁が蹴り破った時に生じた轟音を聞いた生臭共と看守長は慌てて部屋の中に入ってきた。

「姫様っ！！」

「ご無事ですかっ！！　姫様っ！！」

どうやら口の悪い生臭共も、立場が上の者には敬語を使うらしい。

まっ、上司に媚びを売ることに関してはどこの世界の下っ端も変わらないってことかな。

「この穴は・・・・・・・・っ！？」

看守長が俺が空けた穴から顔を出して左右を見回す。

「ええぃっ！　下等生物がこともあろうに姫様を人質に逃げ出すとは・・・・・・・・っ！！」

桃色の髪を掻き分けて、看守長が顔を歪める。

小物っぷり丸出しのニヤついた笑顔へ。

その顔のまま後ろを振り返り生臭共に命令を下す。

「草の根分けてでも脱獄者と姫様を探し出し、見つけ次第、脱獄者を姫様と共に抹殺せよっ！！」

「「「了解しましたっ！！」」」

その場にいた生臭共も下卑(げび)た笑みを浮かべながら応じる。

と、一人の生臭が看守長へ近づいて行く。

「看守長、姫様を生かしたまま捕らえた場合は・・・・・・・・・・」

「好きにしろ。ただし王へはばれない様にな・・・・・・・・・」

「・・・ゲヘッ、ゲヘゲヘゲヘ――――――――――――――――」

看守長のありがたいお言葉を頂き口から唾液(だえき)を垂らしながら妄想(もうそう)にひたる生臭。

「では、行けぃっ！！」

「「「はっ！！！」」」

生臭共は俺の空けた穴を更に広げて通って廊下に出る奴らと、扉から廊下に出て左右に散らばる奴らに分かれて行動し始めた。

その内の一人の生臭が壁に付いていたスイッチの様な物を叩くと、けたたましいサイレンの音が鳴り響く。

「さて・・・・・・・・・私も行くとするか・・・・・・・・・」

生臭共がいなくなった後、看守長もこの部屋を歩き去って行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰もいなくなったことを確認した俺はロッカーの中から出る。

「・・・・・・・・・やっぱり阿呆(あほう)の集まりでしかなかったか・・・・・・」

特にあの看守長、穴が空いているからと言ってそこから逃げて行ったとは限らないだろうにこの部屋をちゃんと調べずに去って行くとは・・・・・・・・・・・・・・・

ガタッと物音に振り向いてみるとザクロの様に真っ赤に染まった顔があった。

「どうした？　熱でもあるのか？」

「おっ、おおおおおおおおおおおおお主っ！？　一体何を考えておるのじゃっ！？」

せっかく人が心配してやったのに、すごく声をどもらせたかと思えば、いきなり怒鳴り声を上げる情緒不安定(じょうちょふあんてい)な少女。

「何をって・・・・・・・・脱獄の手段だが？」

この少女が姫なら脱獄に利用できるとも考えたのだが、さっきの様子からそれは無理そうだな。

「そうではないっ！！　なぜこのような狭(せま)い場所に、ふっ、二人で密着しながら・・・・・・・・・っ！？」

？　何をそんなに慌てているんだろうか？

あの状況で咄嗟に逃げたと思わせてやり過ごせる都合の良い場所がそこのロッカーしか無かったから仕方なく抱き合いながら入っただけなのに。

「ああ、自分だけが下着姿なのが不満だったのか。」

「っ――――――

「それじゃあ俺は行くが、お前はどうする？」

「・・・・・・・・・・・行くに決まっておろう。」

顔を紅潮させたまま、少し戸惑ってから少女は答えた。

ロッカーに隠れていた時、真っ赤になって悶(もだ)えていたものの話は耳に残っていたようだ。

「そうか。それじゃあさっさと行くぞ。」

鳴り響くサイレンの音の中、敵に見つからずに行くのは不可能だと思うがこの少女に道案内させればもしかしたら秘密の抜け道などを知っているかもしれない。

「待てぃっ！！」

廊下に出ようとした俺を少女が呼び止める。

「なんだ、急いでいるのはわかって――――――――――――――――――――――――――――――」

「服を着させんかっ！！　馬鹿者っ！！」

怒鳴られてから少女が下着姿だったことを思い出す。

「そういえば――」

ロッカーの中から服を取り出し終えた少女の方を振り向いて。

「可愛い下着を付けているんだな。その貧相な体に良く似合っているぞ。」

純白のきれいな下着とその体つきを褒めてあげた直後。

顔面に激突した物がロッカーだと認識できたのは鼻血を吹き出して倒れた後だった。

ｓｉｄｅ？？？

「侵入者だっ！！」

「殺せぇっ！！」

黒いフードの怪しげな集団を確認した看守二名は剣を抜き放って襲いかかった。

だが――――――――――――――――――――――――――――――

「げふぅっ！？」

「ほげぇっ！？」

先頭にいた黒いフードは襲いかかる看守たちを倒し、素早く咽喉元へナイフを突き立て絶命させる。

「不要な戦闘は極力避けろ。体力の無駄遣いだ。」

瞬く間に看守たちの命を断った先頭の黒いフードは後ろの仲間たちに告げると再び走り始めた。

第百五十八話　こいつら、阿呆だ！（後書き）

女の子をきちんと褒められるようになった仁。

成長しましたねぇ～・・・・・・・・・・

第百五十九話　放っておくと、腐乱臭だらけになるぞ！（前書き）

腐乱臭ですよ。

読み方が同じだからと言ってどこかの紅い館の妹様のにおいのことではありませんから。

第百五十九話　放っておくと、腐乱臭だらけになるぞ！

「痛てててて・・・・・・・・・・・」

「ふんっ、自業自得じゃっ！　馬鹿者めっ！」

せっかく人が下着と容姿を褒めてやったというのにこの少女はえらくご立腹だった。（もちろん今は動きやすそうな長袖（ながそで）とミニスカの服を着ている。）

その背には身の丈（たけ）に不釣り合いにもほどがある大剣を背負っていた。

バスタードソードというやつだろうが、果たして扱いきれるのかどうか疑問だった。

それにしても何がいけなかったんだろうか？

女という生き物は本当に訳がわからないな・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・そういえばすっかり忘れていたがフレスは無事だろうか？

目まぐるしい思考をしながら、サイレンが鳴り響く誰もいない廊下を俺たち二人は走っていた。

正確には誰もいないではなく、生きている生臭が一人もいないというべきか。

走りながら軽く確認してみたが、道々に倒れている生臭共は全員咽（の）ど

喉を始め急所を一撃で刺されて絶命している。

ルナールの奴が俺を助けにでも来てくれたのか？

一瞬、頭に浮かんだルナールの姿をかき消す。

あの変態が竜人の国の監獄を襲撃する意味が無いし、俺を助けに来たのだとしたらなおさらわざわざ看守を殺すメリットは無い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少し気になって少女に視線を向けると、何とも言えない複雑な表情をしていた。

「どうした、自分の命を狙った者たちとはいえ、自国の領民が死んでいるのは辛いといった顔をして。」

「・・・・・・・・・お主は妾（わらわ）の心が読めるのか？」

「まさか。」

当てずっぽうが当たっただけだのだが、少女は俺の答えなどどうでも良かったらしく深く息を吐いた。

「・・・・・・・・・妾の命を狙ったことだけでは無い、皆が一丸となならねばならぬこの時期に、こやつらが人間を奴隷の様に扱っていることは死に値するほど重罪じゃ。」

口に出す言葉とは裏腹に少女の顔は悲痛に歪（ゆが）んでいた。

「あんな話を聞かされた後だって言うのに、随分とお優しいことで。」

「ふんっ、妾とてこやつらを許したわけではない。だが――――――――――――――――――――――」

少女は走りながら黙祷するように目を閉じた。

「・・・・・・・妾に力があれば、こやつらが暴走することもなかったはずなの――――――――――――――――――――――」

言い終わる前に、少女は一体の生臭に足を引っ掛けて――――――――――――――――――――――

「ふぎゃっ!?」

顔を廊下にぶつけた。

・・・・・・・・ありゃ、かなり痛いぞ・・・・・・・・

「――――――――――――――――――――――うぅ～・・・・・・・・・・・・・・・」

先ほどとは別の意味で赤くなった顔をさすりながら少女は起き上る。

涙目では無かったのは、見た目ほど痛くなかったのかそれとも意外と我慢強いだけなのか。

「立てるか？」

俺が優しく手を差し伸べてやる（ふっ、紳士として当然の行いだ。）
と少女はその手を掴んだ。

「あっ、ありがとう、なのじゃ・・・・・・・・・・・・」

立ち上がりながら礼を述べる少女。

俺らしくない行動だが、当然目論見(もくろみ)はある。

この女は姫と呼ばれていたのなら父親は王族と考えるべきだ。
ならここでこの女に恩を売っておけば、東間たちが王様に会った時
にいろいろ優遇(ゆうぐう)するように頼める可能性が高い。

「決して善意で行動しているわけじゃないから間違えるなよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・誰に向かって何を言っておる
のじゃ？」

おっと、思わず口に出してしまっていたか。

失敗、失敗。

「気にするな、それより何が起こっているか分からない。早く木彫
りの熊を探しに行くぞ。」

「うむ、了解し――――――――――――――――――――――
――――とらんぞっ！？」

急いでいるというのに、いきなり大きな声を上げる少女。

「なんだ、トイレか？」

「なんだではないっ！！　木彫りの熊とはなんのことじゃっ！！
妾たちは出口に向かっていたのではないのかっ！？」

「そのつもりだったんだが――――――――――――――――――――――」

俺は若干、気まずそうに頭をかいた。

「木彫りの熊が無かったことを、今さっき思い出してな。アレを取り戻さなきゃならない。」

「・・・

監獄が大きく揺れたのはそんな時だった。

ｓｉｄｅ???

「これは・・・・・・・・・・・・っ!?」

廊下を駆けていた時に遭遇したおびただしいほどの看守の死体の数に先頭の黒いフードは驚きの声を上げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・くっ!」

そばに行って確かめてみるも、全員事切れていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・行くぞ。」

黒いフードは看守たちの死体に祈りを捧げてから、怒りを押し殺した声で仲間たちに告げた。

第百五十九話　放っておくと、腐乱臭だらけになるぞ！（後書き）

所詮は雑兵。

ここの監獄ではそれほど強い看守はいませんでした。

第百六十話　生臭四兄弟、参上だ！（前書き）

別名、名前の無い雑兵共。

第百六十話　生臭四兄弟、参上だ！

「ここじゃ。」

廊下を走っていた少女は見覚えのある一室で立ち止まった。

「ってここは看守長の部屋だぞ。」

先ほど生臭看守に案内されたばかりの場所に俺は呆れた声を出した。

「なんでよりにもよって自分の命を狙っている小悪党の所に自分から乗り込むんだよ。純白下着。」

瞬間、鼻をかすめながら鉄でできた暖かみの無い廊下を音速を超えた斬撃が深々と切り裂く。

「お主、良い度胸じゃのう。じゃが口には気をつけんと長生きできんぞ。」

振り下ろしたバスタードソードを背に戻しながらリリィと同等、メイドさんや理香よりは下の迫力で忠告してくる少女に俺は微笑みで応じる。

「人生、太く短くが性分なものでね。後悔も反省もするが、今しかできないことをやるだけさ。」

「ふむ、立派な心がけじゃがそれと妾の怒りを買うのとどういう関係があるというのじゃ？」

ここで深呼吸してから大きな声で――――――――――――――――――――――――

「無いっ！！！」

断言した言葉にリリィだったらノリノリでツッコミを入れるところなのだが――――――――――――――――――――――――

「そうか。」

リアクションが薄い上に果てしなく冷たい視線を送るだけの少女の態度にちょっぴり心にダメージを負ってしまった。

・・・・・・・・・リリィ、リューグ、ツッコミ役がいないとここまで寂しいものなんだね・・・・・・・・・

そういえばリューグは今頃、理香と二人きりでどこかにいるはず――――――――――――――――――――――――

・・

「なんじゃ？　何をそんなに殺気立っておるのじゃ？」

「はっ？」

俺が殺気立っているだって？

「何を馬鹿な、別に俺はなんともないぞ。」

理由は良くわからないが、とりあえずリューグと再会したら五発く

らい殴っておこう。

「・・・まあ良いのじゃ。入るぞ。」

少女が扉に手を掛けて――――――――――――――――――――――――

「死ねぇっ！！」

刹那、扉から無数の剣が突き出て少女の体に突き刺さる。

寸前に少女は大きく飛び退き扉から離れた。

「ちぃっ！！」

「しくじっちまった・・・・・・っ！！」

扉が壊れ、中から姿を現したのは一回り大きな体格と腹など防御の薄い場所に硬そうな鎧を着込んだ四人の生臭。

四人とも普通の大剣とは二回り以上大きな大剣を手に持っている。

ただ、気になるのはその目に憎悪の炎を灯していることなのだが・・・・・・・

「てめえら・・・・・・よくもこの監獄をめちゃくちゃにしてくれたな・・・・・・っ！！」

「許さねえぞ・・・・・・・殺された同胞たちの仇（かたき）を討ってやるっ！！」

「・・・・・・・・・・・・ああ、なるほど。」

こいつら生臭共を殺したのが俺たちだと思っていやがるのか。

・・・・・・・・・・・面倒くせぇ生臭だな。

「違うっ！！　妾たちが見た時には既に皆生き絶えておったのじゃっ！！」

少女の必死な弁明にも聞く耳持たない生臭四兄弟（兄弟かどうかは知らないけど。）

「話を聞く気はねぇっ！！　殺(や)っちまえっ！！」

一人の怒声を引き金に四人が一斉に襲いかかってきた。

「くっ・・・・・・・・・仕方が無いのじゃっ！！」

背中のバスタードソードを抜き放ち、一人の斬撃を受け止める少女。

しかし相手は四人で二人が俺に向かってきている以上、一人の斬撃を受け止めたところで――――――――――

「おっと、呑気(のんき)に見物している場合じゃなかったな。」

正面からかなりの速度で振り下ろされる剣を体を右に反(そ)らして避けると、後ろから合わせた様に一文字に剣を振るう生臭。

一文字切りを跳んで避けると抜群のコンビネーションで正面の生臭

が突きを放ってきたので、左手を使って払いのける。

「死ねぇっ！！」

すかさず後ろの生臭が同じ様に剣を突いて俺の後頭部を狙っていたが、慌てず騒がず空中回し蹴りで大剣を叩き落とす。

「てめぇ――ふげっ！？」

後ろの生臭が叩き落とされた剣を拾っている間に正面にいる生臭の顎（あご）を蹴り砕く。

顎の骨を砕いた感触と折れた歯が何本か空中に漂うのがやけにスローモーションに感じた。

「っ！？　たかが人間風情が調子に乗ってんじゃねぇっ！！」

仲間がやられたのを見て剣を拾った生臭の怒りが限界を超えたらしく、渾身（こんしん）の斬撃が振り下ろされた。

ｓｉｄｅ？？？

「あったか？」

「いいえ・・・・・・・」

ある一室で黒いフードたちは看守たちの荷物を探索していた。

「そっちはどうだ?」

「こちらにもありません。」

「やはり看守長の部屋かと・・・・・・・・・」

一人の仲間の言葉に黒いフードたちは頷(うなづ)く。

「良し、では行くぞ、看守長の部屋へ。」

第百六十話　生臭四兄弟、参上だ！（後書き）

さて、この姫様はヒロイン化するのかあるいはゲストで終わるのか・・・・・・

第百六十一話　生臭ごとき、相手になるか！（前書き）

ちなみに生臭四兄弟が着けている鎧は『はがねの鎧』です。

第百六十一話　生臭ごとき、相手になるか！

振り下ろされた渾身の一撃を掻い潜り生臭の懐に潜り込み――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「殺しはしねぇ、よっ！！」

絶妙なボディーブローを叩き込む。

「かっ・・・・・・・・・・・・・・へっ・・・・・・・・・・・・っ！？」

我ながら会心の一撃と賞賛できる拳は生臭の鎧を砕き柔らかい腹に突き刺さった。

「――――――――――――――――――――――――――――――――ごべぁっ！！」

しばしの硬直後、胃液と奇声を上げながら倒れ伏す生臭。

「お主・・・・・・・・・・・・もう少し丁寧にはできぬのか？」

掛けられた呆れ声に振り向くと無傷の純白下着と外傷は見当たらない倒れている看守二名。

どうやって倒したか知らないが俺よりも早く片づけるとは・・・・・・

意外と強いんだな。

「殺さない様に手加減したが・・・・・・・何か不満でもあるのか？」

別に殺しても構わないが王族のレディの（大きな貸しを作るまでは）機嫌を損ねたくは無いゆえの配慮だったんだが。

「いや、不満など無い。むしろ妾（わらわ）の為に気を使わせてしまった様じゃな。」

お主の下心（したごころ）など見え見えじゃ。

と言外にそう訴えている少女から目を背ける。

考えてみれば仮にも王女なんだし、媚（こ）びを売ってくる連中をごまんと見てきたことは簡単に想像できる。

さっきまでの様な謙虚（けんきょ）な姿勢を示す方が返って印象を悪くするな・・・・・・・・・

――――――――――――――――

なら逆転の発想でここはいつも以上に強気で行くべし――――――――

「おい、金髪ツインテ。ここに用があるのなら三秒以内に済ませろ。できないなら服も下着も破り捨ててまだ生き残っている生臭に売りつけるぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・下心は無くなった様じゃが、その態度はどうかと思うのじゃ・・・・・・・・・」

？　おかしい・・・・・・更に印象が悪くなってしまった様に感じ

るのは気のせいだろうか・・・・・・・・・？

「・・・・・・・・・・はぁ～・・・・・・・これ以上、時間を無駄にしているわけにも行くまいて、望み通り早く用事を済ませるとしようかのぅ。」

疲れた足取り(あしど)で（先ほどの戦闘で無理でもしたのだろうか？）看守長の部屋へ入って行く少女。

続いて入ると残っているのは臭いだけで生臭が一人もいない。

どうやら急事(きゅうじ)の際には先ほどの四人を覗いて全員出払うらしい。

「ふむ・・・・・・・・・・・・・・・・」

漂(ただよ)う悪臭を気にも留めずにガサゴソと少女が部屋を物色し始める。

「い～ち、に～い――――――――――――――――――――――――――――――――」

「本当に数えるで無いっ！！！」

大きな声でツッコミを入れる少女。

ふっ、やはり俺の目に狂いは無かったようだな。

この少女にはリリィに匹敵する天性のツッコミの才能があるっ！！

今の内に仕込んでおけばゆくゆくはリリィニ号、（あるいはリリィスペア）として活用できるかもしれない。

「まったく・・・・・・・・・ふざけた男じゃ・・・・・・・・・」

文句を垂れ流しながら部屋漁りを続ける少女。

その行為をしばらく見つめていたが、飽きてきたので少女に話しかける。

「なあ。」

「なんじゃ。」

「なんか看守長に取られた物でもあるのか?」

「別に何もありはせん。」

看守長の机の引き出しを開けながら返答する少女。

「じゃあどうして看守長の部屋を漁っているんだ?」

「囚人の荷物は大抵が看守長がどこかに保管するのじゃ。」

次いだ質問には意味のわからない回答が返ってくる。

「それがどうしたんだ?　お前は囚人ってわけじゃないだろう。」

少女は手を止めないまま。

「お主は囚人じゃろう。なら木彫りの熊とやらもこの部屋のどこかに保管されておるはずじゃ。」

まるで自分の大切な物を取り戻すための様な口調で言い放った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女の言葉に俺は少しの間、動けなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうか。」

忘れていた事実を思い出し、空中に視線を向けながらゆっくりとつぶやく。

「そういえば俺って囚人だったんだよな・・・・・・・・・・」

「忘れておったのかっ！！！」

信じられないという表情を浮かべる少女に俺はにこやかに頷いた。

「思い出させてくれてありがとうっ！！」

「わかったのじゃっ！！　さてはお主馬鹿じゃなっ！！」

少しずつツッコミのキレが良くなってきたことにより、俺の『ツッコミ育成計画』が順調に進んでいることに内心でほくそ笑んだ時。

窓を突き破り何かが落ちてきたのと同時に俺の背後に黒いフードの下から覗く凶刃が迫ってきた。

ｓｉｄｅ？？？

念のため、途中で仲間たちを分散させた黒いフードは地図で確認した看守長の部屋へ急ぐ。

そして見えてきた看守長の部屋の前に倒れている四人の屈強そうな看守を見つけ、中にいる人影を視認した時、黒いフードは躊躇(ためら)うことなく懐(ふところ)の刃(やいば)を抜き放った。

そのまま襲いかかろうとした直前に、窓が割れる音が室内に響き渡る。

それをチャンスと取った黒いフードは入り口付近にいた囚人服に刃を突き立てた。

第百六十一話　生臭ごとき、相手になるか！（後書き）

ツッコミ、あるいはボケがいないのなら育てれば良い。

というわけで始動した仁の『ツッコミ育成計画』。

またの名を『お姫様調教計画』。

果たして上手くいくのでしょうか・・・・・・・・・

第百六十二話　生臭、じゃないだと！（前書き）

生臭ばかり相手をしていたせいで、気が緩んでいたようです。

第百六十二話　生臭、じゃないだと！

迫り来る凶刃を間一髪（かんいっぱつ）のところで回避し、反撃に転じようとした時には黒いフードはバク転をしながら距離を取った。

回避したはずの脇腹（わきばら）を左手で押さえ付けると血が滲（にじ）み始めているのがわかった。

そして身体全身を縛りつけるような強烈な痺（しび）れ。

・・・・・・・・・・毒、か・・・・・・・・・・

先ほどの生臭四兄弟とは比べるだけ失礼なほどの速度と身のこなし。

ルナールと同等か少し下程度のレベルか・・・・・・・・・・

この傷はここにいるのは生臭だけだと思って油断していたところを突かれた俺のミス。

そう長い時間、効果は続かないと思うがその間は一瞬たりとも黒いフードから目を離せない。

「お主、大丈夫かっ！？」

平静を乱しながら駆け寄ってくる少女に心の中で大きく舌打ちする。

案の定、入口から複数の黒い人影が飛び出し少女を拘束する。

冷静さを欠いていたために咄嗟（とっさ）の対応が遅れた少女はあっけなく体

の自由を奪われてしまった。

「くっぅ・・・・・・・・・・っ！！　放せっ！！　放すのじゃっ！！」

馬鹿力で体を押さえている黒いフード四人ごと体を起こそうとするが他の黒いフードが魔法を唱えると少女の体に水の鎖が巻き付き、動きを封じた。

「うっ・・・・・・・ぬぅぅ・・・・・・・・っ！！」

必死に抗おうとするが水の鎖はビクともせずに少女の動きを完全に束縛（そくばく）する。

「・・・・・・・・悪いが人質を取らせてもらった。」

俺と睨み合っていた黒いフードは不意に口を開く。

声と体つきから女であることは容易にわかった。

「抵抗さえしなければ身の安全と人としての尊厳（そんげん）は保障しよう。」

「黒いフード全員から敵意をむき出しにされている俺にそんなことを言って素直に信じると思っているのか？」

「別に信じてもらう必要はない。その場合はお前とお前の連れが死ぬだけだ。」

少女を押さえ付けている内の一人の黒いフードが少女の首元に鋭い大型サバイバルナイフを突き立てる。

「――――――――――――――――――――――――――っ！」

死への恐怖で顔が青ざめてはいたが、悲鳴をあげなかったところを見るに少なからず覚悟はあるということか・・・・・・・・・

「我々も手荒な真似はしたくない。大人しく降伏しろ。」

「おっ、お主っ！！　妾に構わず逃げるのじゃっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・なんだこの典型的な展開は・・・・・・・・・・・・・

正面に出さずに呆れながら俺は両手を上げて降参の意志表示として両手を上げた。

身体の痺れが残っている状態でコイツの相手をするのは少々きつ過ぎる。

仮に勝てたとしても間違いなくあの育成途中（ツッコミ係としての）姫様は殺されている。

なら二人とも確実に助かるために今はこうして敗北を受け入れるしかない。

「・・・・・・・・・・・・抵抗の意志が無いのなら、両手を頭の後ろで組んでその場に座れ。」

要求通りの行動をすると、黒いフードの一人が手錠を俺の腕に――
――――――――――――――――――――――――
と見せかけて。
「なにっ！？」
素早く立ち上り、すぐ傍に寄って来ていた黒いフードの顔面に蹴りを一発。
鼻血を噴き出して倒れる黒いフードに視線が集まっている間に俺は少女を魔法で呪縛している黒いフードの元へ駆け出す。
「寝てろっ！！」
容赦のない掌打が魔法使いの黒いフードにを吹き飛ばした。
「貴様――――――――――――――――――――――――

に対する叱責だと気付けず――――――――――――――――――――――――――――――

「でりゃあっ！！」

自由になった少女は立ち上がると同時にあまり迫力の無い高音の掛け声でバスタードソードを真横に薙ぎ払う。

「「「ぐべぇはっ！！！」」」

黒いフード三人はほぼ同時に同じ様な悲鳴を上げながら壁に叩きつけられた。

「おのれ――――――――――――――――――――――――――――――」

一人になってしまった黒いフードはナイフを片手に俺に向かって疾走する。

未だに体の痺れが取れない以上、狙うはカウンターしかない。

刃と拳が交差する瞬間――――――――――――――――――――――――――――――

「そこまでだっ！！」

聞き覚えのある小悪党の声と飛んできた十数本の矢によって俺と黒いフードは互いの心臓に攻撃を当てる直前で後方に大きく飛び退いた。

ｓｉｄｅ？？？

「――――――――――――――――――――」

黒いフードは仁から目を反らさずに現れた男にも意識を割いた。

ボウガンを持った十数人の看守たちを率いて立っているのは、恐らくこの監獄の看守長。

自分だけなら問題ないが倒れている仲間はかばう必要がある。

黒いフードは厳しい戦いになることを予感し、改めて覚悟を決めた。

第百六十二話　生臭、じゃないだと！（後書き）

看守長再登場。

第百六十三話　俺たち、空気だ！（前書き）

姫様と看守長（小物で脇役）の戦いです。

第百六十三話　俺たち、空気だ！

「・・・・・随分と好き勝手なことをやってくれましたねぇ・・・・・姫様。」

小物看守長は笑いを必死にこらえている下卑(げび)た眼差しで少女に視線を送るが、少女はまったくひるまなかった。

「妾(わらわ)の暗殺を企てた者に、何も言う権利など無いと思うがのう。」

「はて、何のことでしょうかねぇ？」

私はそんなこと言った覚えはありませんととぼける看守長。

「突拍子(とっぴょうし)もないこと口にするとは、やはり正気を失っていましたか。」

「ほう、面白いことを言うのう。妾が正気では無いじゃと？」

少し目を細く鋭くする少女。

すぐに怒りだすリリィやメアリと違って少しは辛抱(しんぼう)できる教育の行き届いた姫様だ。

・・・・・・・ますます俺好みのツッコミ役として調教したくなる。

そしてリリィと組ませてダブル姫様ツッコミ（食らった相手は即死するほど強力な物理攻撃）をいつか必ず実現させて見せるぞっ！！

もちろん被検体はリューグｏｒルナールで。
将来の妄想にふける俺は話を耳に入れながら参加はしない。
・・・・・・まあ、正確には俺と黒いフードは互いに牽制し合っているから参加できないんだが。
「ええ、そこにいる侵入者たちを招き入れたのはあなたでしょう。人間の囚人を許可なく脱獄させようとするとは・・・・・・国王陛下に知られたらどのような顔をなさるでしょうか。」
「お主にその様なことはできまい。」
余裕ぶっていた看守長の顔が初めて曇った。
「ほう・・・・・大した自信ですが、その根拠を尋ねてもよろしいでしょうか？」
「簡単なことじゃ。父上はこの様に人間を筆頭とした他の種族からの信頼を失うような真似を、例え秘密裏にとはいえ行う様な愚王ではない。」
少女の目には確かな信頼と確信があった。
「まあ馬鹿ではあるがのう。」
続いた言葉にも確かな信頼と確信があった。
対して看守長はその顔に小悪党にふさわしい邪悪というよりも醜悪

な笑みを浮かべながら嬉々として笑う。

「確かにこの監獄のことを王は知りませんよ。ただこの監獄が王族によって管理されているのもまた事実なのですよ。姫様。」

「・・・・・・・・・・じゃろうな。」

少女はギリッと唇を歯で噛みしめる。

認めたくはないが認めざるをえない事実にくやしさを感じているといったところか。

「この監獄を襲撃するということはあのお方に逆らうということなのですよ、姫様。そしてあのお方は邪魔なあなた様を前々から処分したいと思っていらっしゃる。」

看守長が右手を上げると周りの生臭共が一斉に矢を装填したボウガンを構える。

「そうですねぇ・・・・・せめてもの慈悲として『姫様が突如錯乱し看守たちを見境なく殺した後、自殺を図った。』ではなく、『監獄内で侵入者へ勇敢に立ち向かったが侵入者と共に命を落としてしまった。』ということにしておいてあげましょう。」

勝利を確信して笑っている看守長に少女が不敵な微笑みを返す。

「そう簡単に妾を殺すことができると思わぬ方が良いぞ?」

バスタードソードを上段に構えながら挑発する様に言葉を紡ぐ。

「・・・・・・・・たかが小娘が、調子に乗りやがって・・・・・・そんな重そうな剣を持ったまま避け切れるとでも思っているのか。」

しかし看守長は少女を姫様としてしか見えていないらしく少女の言葉の意味が理解できずに悪態(あくたい)をつく。

「やってしまえっ！」

勢い良く右手を振り下ろすと十数本のボウガンが避ける隙間も無く少女に飛来する。

「甘過ぎるのじゃっ！」

ボウガンの引き金が引かれる刹那に少女は構えていたバスタードソードを垂直に床に突き刺した。

そのまま柄(つか)の上に飛び乗り大きく大きく飛翔(ひしょう)する。

「なっ――――――

高く飛翔した少女は空中で体勢を変え、天井を蹴って看守長に肉薄する。

「ひっ――――――――――――――――――――――――――――――」

「終わりじゃっ！　小悪党っ！！」

少女の放った右ストレートが看守長の胴体にめり込み遠くに飛ばす。

「――――――――――――――――――――てっ、てめぇっ！」

吹き飛ばされた看守長を呆然と見送った生臭共は、我に返って少女に襲いかかる。

しかし――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ？？？

「ぐへっ！　がふっ！」

バスタードソードを高速で軽々と振り回す少女の筋力だったが、殺すつもりのない打撃だったので看守長は苦しみながらも生きていた。

「小娘がぁ・・・・・・・・・・・・殺してやるぅ・・・・・・・・・・・・」

せき込みながらも必死に声を絞(しぼ)り出す。

そのままどうにか顔を上げると黒いマフラーが視界を遮(さえぎ)っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・ほへ・・・・・・・・・・・・？」

間抜けな声が看守長の最後の言葉となった。

咽喉(のど)が異様に熱くなったと感じた看守長は。

二度と覚める可能性が無い眠りについた。

第百六十三話　俺たち、空気だ！（後書き）

あっさりと殺された看守長。

次回、看守たちを一人で殺しまわった人物が登場します。

第百六十四話　形勢、逆転だ！（前書き）

仁たちが形勢逆転されます。

第百六十四話　形勢、逆転だ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒いフードは俺と少女の両方を警戒しながらジリジリと後退を始めた。

とはいっても黒いフードの後ろは壁。

逃げることは不可能であるはずなのだが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒いフードの隙間から見える瞳には揺(ゆ)らぐことのない信念が見える。

この手のタイプは文字通り死んでも自分の意志を曲げようとしない。

死んだあとにどうやって意志を曲げていないか確認する方法など知らないがな。

「とりあえず諦めてくれないか。別に取って食おうとしているわけでもない。」

いつまでも硬直状態(こうちょくじょうたい)が続いて倒れている仲間が目を覚ますと面倒なので、降伏勧告をしてみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言っておくが、ここの看守たちを殺したのは俺たちじゃない。俺

はただここから脱獄しようとしただけだし、あっちの純白下着も看守を殺すようなあくどい奴には見えないだろう？」

「おっ、お主、いつまで引っ張るつもりなのじゃっ！！」

「・・・・・・純白下着？」

真っ赤な顔で大声ツッコミを入れる少女と疑問符を浮かべる黒いフード。

とはいえ下着ネタばかりに反応を示すのはツッコミ係としては役不足も良いところだ・・・・・・

早急に他のネタでもツッコミを入れられるように調教せねばな。

場の空気が幾分（いくぶん）か和（なご）んだところで音もなくソイツが現れた。

「・・・・・・・・・・・・貴様が王女だな。」

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

少女の首に音もなく突きつけられた大型の銀のナイフ。

黒いマフラーを身に着けた男の突然の登場に俺は急いで駆け出すが間に合うはずもなく。

ナイフは少女の首を――――――――――――――――――――――――――

「やめろガジールッ！！」

黒いフードの叫び声に男は手を止めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・何故止める。リーダー。」

「やはり・・・・・・・・・看守たちを殺したのはお前だったか・・・・・・・・」

ナイフを首に突き付けられている少女はもちろん、俺も迂闊（うかつ）には動けない状況で黒いフードはその男に敵意の視線を向ける。

「答えろ。私はお前に他の仲間を守る様に命じたはずだ。そのお前が何故ここにいて、しかも看守たちを皆殺しにした。」

「答える必要は無い。」

即答する男に黒いフードは更に詰め寄った。

「私たちの目的は奴隷（どれい）たちの解放と自由を得ることだ。むやみな殺戮（さつりく）は王国との戦争を引き起こしかねない。」

「ふんっ。いくら奴隷を解放したところで現政権を打破しない限り、また同じことが繰り返されるだけだ。戦争でも暗殺でもして王族や貴族などのゴミ共を処分しなければ俺たちに自由などありはしない。」

男は強い憎しみの念を込めた口調で言い放った。

この国に対する完全なる軽蔑（けいべつ）と絶望。

他にも色々な負の感情をこの国に抱いているようだ。

「しかし戦争になれば民に犠牲を強いることになってしまうっ！
それでは本末転倒だっ！！」

「腐り落ちぬゴミに媚び諂うことで、自分たちだけ平和であればそれで良いと考えている民衆など、全て殺してしまえば良い。そんな奴ら、生き残ったところで国に寄生しているだけの害虫にしかならん。」

言い切った男の右頬に黒いフードが平手打ちを入れた。

小気味良い音を響かせた一撃に男の頬が赤く染まって行く。

「・・・・・・・・暴力無き者は何も出来はしないが、暴力だけに頼る者は愚者だ。お前の言い分は間違ってはいないが、決して正しくもない。」

黒いフードは男から視線を外して、俺を一瞥してから倒れている仲間を介抱し始めた。

「ガジール、その少女と囚人は人質として連れて行く。ここで殺すことは許さん。」

「ハク、お前――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男はナイフを少女の首に突き付けたまま、器用に片手で縄を使って少女を縛る。

「お前も今度こそ大人しく捕まってくれ、悪い様にはしない。」

「了解。」

さっきまでの間抜けな仲間と違ってあの男――――――――――――――――ガジールを出し抜いて少女を助けるのは不可能だ。

今回は大人しくしておかないとせっかくの『ツッコミ育成計画』が台無しになってしまう。

俺は縛りやすいように両手を黒いフードに向かって差し出した。

縛られている最中、暇だったので前々からの疑問を少女にぶつけてみる。

「そーいえば純白下着。お前の名前、まだ聞いてなかった気がするんだが。」

「今更っ!?　しかもこのタイミングで聞くことかのうっ!?」

良しっ！　良い感じのツッコミだっ！

「黙れ。自己紹介がしたいのならアジトに戻ってから尋問の前に聞いてやる。」

尋問というより拷問を行いそうな空気の読めないガジールのせいで、その場では名前を聞くことはできなかった。

第百六十四話　形勢、逆転だ！（後書き）

何だかんだで未だに名前が登場しないお姫様。

このままずると名前の無いキャラになってしまうのでしょうか・・・・・・・

第百六十五話　こいつ、むかつく！（前書き）

仁は命令されるのが嫌いです。

ただし命令してくる人物がからかいがいのある人物なら割と素直に言うことを聞くかもしれません。

第百六十五話　こいつ、むかつく！

「なぁ～、まだ着かないのか～。」

「黙って歩け。」

視界が黒一色で覆われている中、ガジールの手には俺の両手を縛っている縄が握られている。

視界ゼロで誰かに引っ張られながら歩いていると転びそうになるが、幸いにもここの地面はそれほど歩き辛くは無かった。

「足元には十分注意しろ。」

「うっ、うむ。」

見えはしないが少女も前方を黒いフード――――――――――――――ハクに手を引かれて歩いているはずだ。

両手を縛られた後、アジトに戻るが敵の可能性もある俺たちに位置を知られないようにするため目隠しをされることになった俺たち

黙って歩くのも暇なのでハクが事情を簡潔（かんけつ）に説明したことを頭の中で反芻（はんすう）する。

こいつらは竜人の国ルヒナの反抗勢力（レジスタンス）で、理不尽な暴力に苦しめられている他種族を解放、和解して現政権を打倒しようとしているそうだ。

国王自体はまともな人物らしいが、周りの大臣や貴族たちは自分たちの種族が至高だと信じている連中が多く、国王一人では全てを御することができない。

ガジール曰く、「無能な部下を切り捨てられない国王に国を治める器など無い。」とのこと。

ハクは少し悩んでいたようだがガジールの言葉に賛成も反対もしなかった。

ちなみにあの監獄の囚人たちは俺たちが捕らわれた後、全員解放されたそうだ。

その中でレジスタンスに入る、つまりルヒナと戦おうとする気概のある者は別同隊によって本部に連れて行かれた、と大体こんな感じか。

「お帰りなさいませ、リーダー。ガジール殿。」

おっと、考え込んでいる間に到着した様だ。

「ただいま、変わりは無いか？」

「はい、問題ありません。」

「そうか、話は変わるが尋問室を使いたい。空いているだろうか。」

「はい、大丈夫です。」

短いやり取りを終えたハクは少女と共に尋問室とやらに歩いて行っ

てしまった。

「俺たちも行くぞ。来い。」

尋問室が空くまで待機かと思っていたが、ガジールは俺を別の部屋に連れて行くことにした様だ。

俺としても早く木彫りの熊を探しに行きたいから、この展開に特に異論はないが。

扉の開く音がすると俺を引っ張ってガジールは中に入る。

「目隠しを取れ。」

手を縛っていた縄をナイフで切りながら命令してくる。

自由になった両手で目隠しを取ると急激に視界が明るくなったので、数回瞬目（まばたき）をして目を慣らす。

光に目が対応すると、俺はガジールを視界から外さないようにしつつ周囲を観察した。

どうやら洞窟を改造して自分たちのアジトとした様だ。

ハーピィの巣に似ているが巣の跡地でも利用したのだろうか？

あちこちに物が散乱しているが部屋自体はかなり広い。

これから戦うのに不自由ないくらいは。

「座れ。」

イスを一つ手渡されたので大人しく腰を下ろす。

「簡潔に答えろ。」

ガジールは鋭い視線で俺を射抜く。

「何故、お前は姫と行動を共にしていた。」

「俺好みに調教するため。（ツッコミ役として。）」

・・・

「興味ないならわざわざ質問するなよ。」

「黙れ。貴様は訊かれたことだけ答えろ。」

うわぁ～・・・・・・・むっかつく～・・・・・・・・・・

今すぐにでもボコボコに殴りたい衝動をどうにかこらえる。

「仲間はいるのか？」

「いる。」

向こうがどう思っているかは知らないが、同じギルドに所属しているリリィとルナール、それにリューグたちは仲間と呼んでいいだろう。

メイドさんと理香は――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・あの二人は・・・・俺にとって・・・・・・」

「黙れと言ったはずだ。」

思わず口に出してしまった心の声に敏感な反応を示すガジール。

「次に勝手にしゃべったならその舌を切り取る。それで仲間の数は？」

「答える義理は無い。」

音もなくナイフが閃いた。

微塵の躊躇いも感じさせない咽喉を狙った一撃を、刺さる寸前で右手の親指と人差し指で白刃取る。

「・・・・・・・・・・・・・・ほぉ。」

「警告も無しに人を殺そうとするな。」

感嘆の息を漏らすガジールと軽口を叩く俺。

睨み合ったまま三十秒ほど硬直して――――――――――――――――

動き出した。

ｓｉｄｅハク

「では君はあの監獄で行われていたことを諫めるためにあの場所にいたと。」

「そうじゃ。」

姫の言葉が嘘ではないと、私はこれまでの経験から判断した。

確かに世間の評判では姫はお転婆（てんば）が過ぎるところもあるが、民のことを思いやれる優しい姫だと言われている。

それに上手く味方に引き込めれば新たな活路を開けるかもしれない。

「では次の質問だ。」

私はどうやって姫を説得するかを考えながら情報を引き出すための尋問を続けた。

第百六十五話　こいつ、むかつく！（後書き）

仁の見立てではガジールはルナールよりも少し弱いです。

第百六十六話　かなり、痛いぜ！（前書き）

痛いどころか、普通死にます。（ツッコミとしてならこの程度は大丈夫ですが。）

何が痛いのかは今回わかります。

第百六十六話　かなり、痛いぜ！

ナイフから手を離し、ガジールは頭部を狙って回し蹴りを放つ。

「よっと。」

左腕で蹴りを防ぎ、右手のナイフを無造作にガジールの胸へ投擲（とうてき）する。

「ふん。」

だがこの程度の反撃は予測済みだったらしく、ガジールは少し後ろに下がりながら胸を狙ったナイフを受け止め投げ返してきた。

「わぉ、すごいすごい。」

挑発的な声を発して頭を狙ったナイフを避けると、視界に影が差した。

「砕けろ。」

部屋に隠してあったのか、ガジールが両手で持った重そうな金属のハンマーを俺の頭を狙って振り下ろした。

一流の戦士だろうが避けなければ間違いなく即死であろうその一撃を俺は自ら（みずか）直撃した。

「なっ！？」

だが砕けたのはハンマーの方。

ガジールもまさか避けようともしないことと、ハンマーが砕けたことに対して二重に驚いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無論、俺の頭部もただでは済まなかった。

でかい瘤（こぶ）、どころの問題ではなくダクダクと血が溢れてきて顔から地面に流れ落ちる。

流れる赤い血を舌で舐めとりながら、ガジールを見る。

いや、正確にはガジールなど見てはいない。

俺はマキナの幻想を視界に入れている。

全力を出して手も足も出せずに敗北した思い出。

マキナにとっては俺は羽虫ほど殺すのが簡単な相手だったのだろう。

金属ハンマーの一撃をあえて受けた理由は、俺もマキナの様に相手の攻撃を受けても瞬時に治るか、対抗してみたかったからだ。

攻撃が弱過ぎてはそもそも怪我（けが）をしない、即死を狙ったものは危険だから却下。

そんなわけで丁度良いから金属ハンマーの一撃をくらってみたわけだが――――――――――――――

「・・・・・・・・・・やれやれ、自分のことながらイカれているな。」

しかしこれくらいの傷を瞬時に治す芸当ができなければマキナには届かない。

「っ！？」

二重のショックに硬直していたガジールは我に返ると俺から距離を取る。

得体のしれない相手には、まず距離を取って様子を確認するか・・・・・・・・

俺は左手を上げてガジールを手招きする。

「来いよ。遊んでやる。」

気分が高揚（こうよう）しているのか、普段言わない様な事を言ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガジールは反応を示さずに部屋に置いてあった刀剣を抜く。

地面を駆け出し、迷うことなく俺の心臓目掛けて突きを放つ。

客観的には速く鋭い良い一撃だ。が――――――――――――――――――――

「遅すぎる。」

俺にとっては取るに足らない一撃だ。

俺は右手で掴み取り、かかと落としで刀身を破砕する。

「それがどうした。」

ガジールは柄から手を離すと懐(ふところ)の投擲用ナイフを三本投げつけてきた。

紫色の液体が染み込ませてあるそのナイフはどう見ても毒ナイフ。

俺は破砕した刀身を蹴ってナイフを三本ともはじいた。

「っ！」

はじいた三本の影から薄く小さい針が三本。

暗器(あんき)の類(たぐ)いか、ちょっと驚いたな。

恐らくは毒針であろう三本の針をそれぞれ右手の人差し指と中指の間に二本、中指と薬指の間に一本受け止める。

「なんだとっ！？」

必殺の仕掛けが破られたことに驚いたガジール。

「返すぞ。」

右手を振って毒針をガジールに投げ返す。

「くっ！」

また受け止めて投げ返してくるのかと思ったが、ガジールは毒針を避けた。

俺はイスから立ち上がってガジールと間合いを詰めた。

「貴様――――――

ガジールは強いし手加減ができるような相手では無かったのは事実。
だからストレス解消の意味合いも込めてもう少しガジールには耐えてもらう。

「きっ、貴様――――――――――――――――――――――――――――」

まだしゃべる元気のあるガジールを再度踏み付けるために足を軽く上げて――――――――――――――――――――――――

「おっ。」

一瞬の隙をついてガジールが地面を転がり距離を稼いでから立ち上がる。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・・・・・・・・・・」

「息が荒いぞ、大丈夫か。」

心優しい俺は敵であろうと心配を怠(おこた)ったりはしない。

「はぁ、はぁ、ふんっ。ふざけた奴だ・・・・・・・・・・・・」

息を整えながら悪態づくその姿は、何やら先ほどまでとは違う様に感じた。

「そこまでだっ！」

不思議に思って問おうとした時、制止の声が部屋の中に響き渡った。

ｓｉｄｅハク

姫との話し合いが終わった私は二人が別の部屋に行ったと報告を受け、その部屋に向かった。

ガジールのことだから姫の連れを殺してしまいかねない。

間に合ってくれと願う私の耳に戦いの音が届いた。

やはりと思って扉を開けると頭から流血している囚人の姿が。

「そこまでだっ！！」

それが視界に入った瞬間、私は大声で叫んでいた。

第百六十六話　かなり、痛いぜ！（後書き）

変な所でマキナに対抗しようとする仁。

やはり内心ではかなり悔しかったようです。

第百六十七話　読んでたぜ、この展開！（前書き）

ハクの介入により戦いは中断されました。

第百六十七話　読んでたぜ、この展開！

「・・・・・・・・・何の用だ、ハク。」

「ガジール、貴様――――――――――――――――――――――――」

理由はわからないが怒り心頭のご様子のハクさんはガジールに詰め寄ってから吐血の後に気が付いた。

「ハク、こいつの尋問は既に終わった。後はアジトを適当に案内してやれ。」

ハクが次の言葉を口にする前に吐き捨てる様に言ったガジールはハクを押しのけてそのまま部屋から退室した。

残されたのは微妙な表情のハクと十分なストレス解消ができなくてちょっと不満気味な俺。

「・・・・・・・・・・・・・ガジールと戦ったのか。」

「ああ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・そうか。」

ガジールが出て行った扉から視線を動かさずにつぶやくハク。

こちらに背を向けているのでどんな表情をしているのかわからなかったが、なんとなく複雑な顔をしている様な気がした。

「・・・・・・・・・・・・ついて来い。」

しばらく沈黙した後、ハクはそう俺に告げて部屋から退出。

今回も特に逆らう理由が無いので大人しく後ろを歩いて行く。

「・・・・・・・・・・・・・・アイツが、例の・・・・・・・・・・」

「じゃあ・・・・・・・・・・・・・・それで・・・・・・・・・・・・・・・」

マジでハーピィの巣を人間用に改造した様な洞窟内部には人間だけでなく獣人もいた。

獣人も竜人たちに奴隷(どれい)にされていたのか、あるいは単純にハクの掲(かか)げる理想に惹(ひ)かれてついてきたのか。

俺には関係ないがちょっとだけ気になった。

「え～っと、ハク、と呼んでいいのか？」

「構わない、何か訊きたいことでもあるのか。」

ハクはキビキビとした口調でしゃべる。

良く見ると顔も整っているし、背は女性の割には高い。

うん、この女なら丁度良いかも。

「男装に興味はあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？」

立ち止まって振り返ったハクはポカンとした顔になっていた。（当然と言えば当然の反応だが。）

「いや、何でもない。気にするな。」

「あ、ああ。良くわからないが・・・・・・・わかった。」

流石（さすが）に出会ったばかりの男に男装に興味はあるか、なんて訊かれたら常識人ならまず引くよな・・・・・・・・・・・・・・

時期尚早（じきしょうそう）過ぎたことを心の中で反省する。

「とりあえず姫と君に少し話がある、それが終わったら今日はゆっくり休め。部屋は用意してある。」

「りょ～か～い。」

気の抜けた返事を返したのだが、ハクは気に留める様子を見せずに早足で歩く。

『姫様調教計画』だけでなく、もう一つ『計画』を実行するのも面白いかもな。

だがこちらの計画を進めたければハクの好感度をもっと上げる必要があるな・・・・・・・

最悪、『姫様調教計画』の方は好感度がどれだけ低くても素晴らし

いツッコミを習得させられることができれば良し。

嫌われている分、ツッコミによるダメージが大きくなる危険性はあるが、その程度のリスクは（身代わりとしてリューグに押し付けること前提で）承知済み。

待ってろよっ！　名前も知らない少女っ！

リリィに匹敵（ひってき）、あるいは凌駕（りょうが）するツッコミ係として鍛え上げてやるからなっ！

「ふふ、ふふふふふふ・・・・・・・・・・・・」

未来のことを思い描いて思わず笑いが込み上げてくる俺を。

「・・・・・・・・・・・・・・・いきなり笑いだして気味が悪い奴だ。」

ハクの呆れた眼差しが射抜いた。

っと、しまったっ！　図（はか）らずともハクの好感度を下げてしまったっ！

「まあいい、着いたぞ。」

案内された部屋は宿屋の客室の様に整理された部屋だった。

簡素な造りの二段ベッドが部屋の隅に配置してあり、中央には四角の木造テーブルとイスが四脚（よんきゃく）あった。

そのうちの一つに少女が座って湯気（ゆげ）の立った飲み物を湯呑（ゆの）み茶碗（ちゃわん）で

飲んでいる。

「待たせてすまない、リアーナ。」

「うむ。」

どうやら純白下着の名前はリアーナというらしい。

「それで君は――――――――――――――――――――ええっと・・・・・・・・・」

口ごもってしまったハクに、俺はまだ名前を教えていなかったことに気付いたので簡潔に。

「仁だ。」

とだけ名乗った。

「仁、だな・・・・・・・・・・・・・・」

「なかなか良い名じゃ、覚えておこう。」

「そりゃどうも。でっ、話って何だ。」

リアーナの褒め言葉に社交辞令(しゃこうじれい)で返答し、ハクに問いかける。

「ああ、これは先ほどリアーナに既に了承を取ったこと何だが――――――――――――――」

言葉を切ってから再び口を開くハクの言葉は。

「単刀直入に言おう、私たちの仲間にならないか？」
という突拍子（とっぴょうし）のないものだった。

ｓｉｄｅガジール

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
歩きながら俺はついさっきまでの出来事を頭の中で再現していた。
あのまま続けていたら間違いなく俺の敗北に終わっていた。
あれほど力。
いままで見たことのない暴力。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・使えるな・・・・・・」
俺は唇（くちびる）をわずかに動かして笑みを浮かべた。

第百六十七話　読んでたぜ、この展開！（後書き）

ガジールはいろいろと考えている様です。

仁も怪しい計画を考えている様です。

第百六十八話　やっぱ、予想外だ！（前書き）

仁、自爆。

第百六十八話　やっぱ、予想外だ！

「いいぞ。」

ハクに対して二つ返事で返す。

「本当かっ！？」

「条件付きだがな。」

驚きと喜びが混ざった明るい表情を浮かべたのは一瞬。

条件付き、という言葉にハクは真顔になった。

だがそれは条件を付けられるのが嫌だというわけではなく、俺がどんな条件を付けるのか聞き漏らさないようにするといった感情が見られた。

「どんな条件だ。」

「別に難しいことじゃない。」

俺は人差し指をハクに突きつける。

「一つ、木彫りの熊に関しての情報を集めて俺に渡すこと。」

「・・・・・・・・・・木彫り？」

意味がわからないという表情を浮かべるハク。

どうせそんなリアクションをするだろうと思っていたので俺は中指を立てながら話を続ける。

「一つ、俺の単独行動、及び独断で動くことを認めること。」

最後に薬指を立てる。

「一つ、俺が不利益になると判断したことは誰の命令だろうとやらなくていいこと。この三つが条件だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・無茶苦茶(むちゃくちゃ)だな。」

俺もそう思う。

こんな条件を許したら他のメンバーに示しがつかない上に、組織構成員として誰の命令にも従わない存在は組織の癌(がん)になりかねない。

仮に俺が組織のトップだとしたらこんな条件を出した奴を真っ先に処分する。

「・・・・・・・・・・・・わかった。」

だというのにハクは不承不承(ふしょうぶしょう)ながらも頷(うなづ)いた。

「良いのか？　言った本人である俺が言うのもなんだが、こんな条件を出す奴、俺だったら両手両足の骨をへし折った後に縄で縛りあげて野犬の群れに放り捨てるぞ。」

「そっ、それはちょっとやり過ぎだと思うが・・・・・・・・・・・・

・」

ハクが顔に戦慄の色を浮かべながら後ずさりをする。

しまったっ！　更にハクの好感度が下がってしまった気がするっ！

「とっ、とにかく、今日はゆっくりと休んでくれ。明日になったらこれからについて話す。お休みなさい。」

「うむ、お休みなのじゃ。」

好感度上昇のための弁解の言葉を言う前にハクは部屋を出て行った。

残されたのは俺とお茶（色から判断して緑茶っぽい。）を飲んでいるリアーナのみ。

「リアーナ、お前はハクたちの仲間になるのに何か条件を付けたのか？」

「無論じゃ、どんな条件かはしゃべるつもりはないがのう。」

緑茶をすすっているリアーナの顔はやけに満ち足りている。

緑茶が好物、あるいはやばい薬でも入っているのか。

後者だったらすぐに逃げ出そう。

「まあなにはともあれ、今日はゆっくり休むことにするかのう・・・・・・」

飲み終わり空になった湯呑みをテーブルの上に置き、立ち上がる

「妾は眠ることにするが、お主はどうするつもりなのじゃ？」

「俺か？」

この部屋には二段ベッドが一つ。

他の部屋は案内されていない。

ということはそういうことなのだろう。

「お前は平気なのか？　男と一緒に寝るなんて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・別に平気と言うわけではないのじゃ。」

顔を赤く染めながら不貞腐れた様につぶやくリアーナ。

「じゃがお主とはもっと恥ずかしいことをしたから、今更一緒の部屋で寝ることなど問題ではないのじゃ。」

リンゴの皮の様に真っ赤に染まった顔でリアーナは堂々と言い切った。

「そっか。それなら俺もやることないし、今日は休むことにするか。」

「うっ、うむっ！　そうするが良いっ！」

優雅な足取りで下のベッドに向かうリアーナ。

右手と右足が一緒に動いていようと優雅に見えるのだからリリィとは別の意味でなかなかやる女の様だ。

「わっ、妾は下で寝る。お主は上のベッドを使うが良い。」

早口で言ったリアーナはこちらに横になってこちらに背を向けてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・さて。」

俺はリアーナのいるベッドの中に潜り込んだ。

「なっ――――――――――――――――――――――――――――っ！？」

「邪魔するぞ。」

こちらに背を向けていたせいで背中に俺の手が触れるまで気がつかなかったリアーナは声にならない悲鳴を上げる。

「――――――――――――――――――――――――――――

かいた。ってパターンが多いからセクハラ覚悟で逆パターンを演出してみただけだが。」

「――――――

sideハク

「ふぅ・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋に戻った私は一通りの書類に目を通していた。

レジスタンスと言っても仲間内での揉(も)め事はもちろんある。

それに補給に関することや次の行動の為の会議、故郷に帰りたがっている人たちの護送。

その他、書類仕事だけでもその量は甚大(じんだい)だった。

「っと、そうだ。」

ふと、先ほど二人に伝え忘れたことがあったのを思い出した私は休憩がてらに二人の部屋に向かうことにした。

第百六十八話　やっぱ、予想外だ！（後書き）

さて今後の展開は――――――――――――――――――――――――――――――――

一、王道としてハクが室内に入り、気まずい空気が流れる。

二、なし崩しにキスをする。

三、どこかから侵入したメイドさんに仁が処刑される。

四、その他。

答えは次回明らかに！

第百六十九話　おい、この感触はまさか！（前書き）

別の展開を期待していた方には申し訳ありませんが、今回はこのような展開となりました。

ただ今回はこうだっただけで他の番号の展開もこれから先にあるかもしれません。

作者として言えることは一つだけ。

仁には後にメイドさんたちのお仕置きという名の処刑が確定したことだけです・・・・・・・・・・

第百六十九話　おい、この感触はまさか！

現在、俺とリアーナは同じベッドで互いに向き合ったまま横になっている。

ううむ・・・・・・てっきり暴力的なツッコミを入れてくるだろうと思っていたのだが・・・・・

予想外の展開に流石の俺も戸惑っている。

せっかく同じベッドで寝ているんだからいろいろなことをするべきなのかもしれないが、それをやったら非常に危険な気がする。

主にメイドさんに八つ裂きにされたり、理香に八つ裂きにされたり、リリィに八つ裂きにされたり、ルナールを八つ裂きにしたり。（これは単なるストレス解消。）

とにかくこの場でリアーナに手を出すことはできない。

据え膳食わぬは男の恥？

知ったことかっ！！

こっちは命がかかっているんだっ！！　いちいちそんなこと気にしていられるわけがないだろうっ！！

というか俺はいつまで囚人服を着続けなければならないんだ？

「・・・・・・・・・・の、のう・・・・・・・・・」

グルグルと意味の無い思考を続けていたせいで、突如掛けられた声に思わず身体がビクッ！　と震えてしまった。

「なっ、なんだっ！？」

「おっ、大きな声を出すで無い・・・・・・・お主・・・・・・・・妾（わらわ）と一夜を過ごしたいということはそういうことなのじゃろう・・・・・・・・・・・・・・？」

・・・・・・・・いまここで「実は単なるボケでした。」と笑って言えばどんな反応を示すでしょう？

一、笑って許してくれる。

二、泣きながら殴り殺される。

三、戦争が起こる。

一はまずあり得ない。そんな男に都合が良い様にできている聖女みたいな女は存在しない。

二は順当だろう、今回に限り全面的に俺が悪いわけだから大人しく殴り殺されるべきなんだが――――――――――――――――――――

くそ、こんなときに限ってリューグがいないのは辛いぜ・・・・・・・

三は万が一の可能性。

リアーナが国王にこのことを告げて怒り狂った国王様が人間の国と戦争を起こす可能性。

ゼロでは無いのがかなりやばい。

つまりここは適当に誤魔化(ごまか)してどうにか切り抜けるしかない。

「ああ、うん。まあ俺も囚人生活が長かったからさ。（実際は一時間未満程度しか囚人生活を送っていない。）久しぶりに人肌のぬくもりというのを味わいたくてな。」

「そ、そうか・・・・・・・・・・・・」

恥ずかしそうな声に安堵(あんど)の色が混じった。

とりあえず納得してくれたみたいだな。

「な、ならばじゃ・・・・・・・もっと直接ぬくもりを感じた方が良いのではないのか・・・・・・・・？」

・・・・・・・・・・・・・・・はっ？

疑問を声に出す前にリアーナは俺の手を握りしめる。

冷え症なのか、冷たい手だったが肌の色は顔の色と同じくザクロよりも赤く赤く染まっていた。

・・・・・・・・・・・・・・やべっ、こいつ何気に結構可愛いかも・・・・・・・・・

油断すると俺まで赤くなってしまいそうなので目を閉じて瞑想する。

「こっ、ここで目を閉じるということは・・・・・・・・・そういうことなのじゃろうか・・・・・・・・・？」

薄く眼を開けて様子を確認すると、うつむきながらブツブツつぶやくリアーナの顔が。

・・・・・・・・・・・しっかしこの世界の女って基本的に変人だけど見た目はきれいだよな～。

気を抜くとリアーナに欲情してしまいかねないので、平常心を保つ意味合いも兼ねて再び目を閉じて考察を開始する。

筆頭としてはメイドさん、彼女ほど変なメイドかつきれいなメイドは生きてきた中で見たことが無い。（そもそもメイドを見る機会がほとんどないのだが。）

お姫様その二（その一はメアリ。）こと、リリィは良いツッコミ係。俺が安心してボケに走れる全力のツッコミを入れてくれる素敵な仲間だ。好感度的にはリューグに勝るとも劣らない。

ルナールはただの変態、これは否定しようのない事実。嫌いじゃないしストレス発散の時に便利だし、ずっと一緒にいたい気もするが。

なにか唇に暖かいものが触れた気がするが気にせず考察を続けよう。

アイリスは発展途上、これからに期待。トウキは残念な娘。なんか最近、そんな空気が漂い始めた気がする。

あまり思い出したくない奴ナンバーツー（ナンバーワンはマキナ）、ヴェンリスは間違いなく理香と同格の美人の上に強い。

会うたびに戦いを挑まれるのは面倒極まりないのでなるべくなら関わりあいになりたくない。

・・・・・・・・・・こんなところか。

唇から暖かい何かが離れて行くのを感じた俺はなんとなく目を開けた。

そこには頭の中身が沸騰しているのではないかと思えるくらい紅く染まったうつむき顔が存在していた。

ｓｉｄｅハク

「・・・・・・・・・・・・・・むっ。」

目的地に向かう途中で私はガジールと出会った。

「ハク、これからどこに行くつもりだ。」

「あの二人の所だ。伝え忘れたことがあったのでこれから伝えに行くところだ。」

答えてから再び歩きだそうとする私をガジールは手で制する。

「やめておけ、二人とも疲れているとしたら急ぎの様でもない限り休ませてやるべきだ。」

「それは・・・・・・・・・・・・たしかにそうだな・・・・・・・・・・」

正直、伝え忘れたことも急いで伝えなければならないというわけではない。

明日の朝、迎えに行く時にでも伝えればいいことだ。

「お前も今日は休め。明日はいつもどおり早いのだから。」

「そうか、ではありがたくそうさせてもらおう。」

ガジールに礼を言ってから私は体の向きを反転させて自室へ向かった。

第百六十九話　おい、この感触はまさか！（後書き）

先に言っておきますが、リアーナは痴女ではありません。

彼女もいろいろと思うところがあるようです。

それと活動報告の方でミニコーナーを更新しました。

・・・・・・・・・もはやミニコーナーと呼ぶべきものなのかわからなくなるほどカオスになっていますが・・・・・・

第百七十話　説明を、誰か説明を！（前書き）

戦い以外で想定外のことが起きると、意外と動揺してしまう仁。

第百七十話　説明を、誰か説明を！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いの手を握り向かい合ったまま俺は目を閉じて眠りにつこうとしていた。

真っ赤になってうつむいているリアーナにはもう意識は無い。（と思う。）

どうやら頭がオーバーヒートを起こしたらしく完全に気絶している様だ。

それでも俺の手を握ったまま離そうとしないために俺は上のベッドに移ることもできない現状。

・・・・・・・・・・いくら怪力といえども俺がその気になったら引き剥がせないことは無いのだが――――――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は握られていない手の指で自分の唇を軽くなぞった。

先ほどの感触。

まさかとは思う。

普通知り合ったばかりの男といきなりそんなことをするお姫様など

存在しない。

リアーナが普通の定義に当てはまってくれればの話だが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ。」

スッキリしない気分のまま目を閉じる。

眠ることで先ほどのことは夢だったということにしよう。

なんてことは思っていない。

単に今の俺に眠る以外の選択が無いだけだからだ。

それ以上何も考えずにいたら、本当に疲れていたのかあっさりと眠りに落ちて行った。

ｓｉｄｅリアーナ

・・・・・・・・・・・・・・・・やってしまったのじゃ・・・・・・・・

妾は羞恥心で今にも意識を失ってしまいそうじゃったが、幸か不幸か気絶せぬままうつむいておる。

いきなり目の前で目を閉じおったので・・・・・・つい、唇を――

――――――――――――――――――――

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――っ

！！」

寝息を立てておる仁を起こしてしまわぬように妾は静かに悶える。

いくらなんでも急過ぎた。

本当なら手を握るのじゃって早過ぎたと思うておったのに・・・・・・

それが・・・・・・・・・・それが・・・・・・・・・っ！！

再び悶える妾は仁から手を離して上昇した体温を冷ますために服を脱ぎ捨てる。

しかしあまり効果は無い上に手を離してしまったことに寂しさを感じたので手をしっかりと握り直す。

それにしてもさっきは二人きりになれたことに我を失っていたとしか考えられない。

穴があったら入りたいとは今の妾の状態のことを言うのじゃろう。

あの監獄で再会した時。

成長こそしておったものの忘れもしないあの顔と雰囲気。

懐かしくて、嬉しくて。

監獄にいた理由はわからぬもののそんなことは瑣末なことでしかない。

仁はルールに捕らわれなどしない。

生まれた時から王族というルールに捕らわれておる妾とは違う。

「・・・・・・・・・・・・・影月、仁・・・・・・・・・・・」

昔、教えられたその奇妙な名前と自由の意味。

そして人を好きになるということを教えてもらったその時から妾は生涯この者だけを愛することを誓ったのじゃから――――――――――

side out

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んっ・・・・・・・・・・」

洞窟内が明るくなったことを感じ取った俺は目を開ける。

まず視界に入ったのは変わらぬ顔色のリアーナ姫。

手は握りしめられたままだったが、俺はなんとか上半身を起こして部屋内を確認すると松明に火が灯っていた。

部屋の中に誰かが入ってきた痕跡（こんせき）は無い。

とすると何らかの仕掛けによって、時間がきたら自動的に松明が灯るということか。

「仁、リアーナ。起きているか？」

扉がノックされてからハクの声が聞こえてきた。

「ああ、起きている。入って良いぞ。」

朝からわざわざリーダーさんがやってくるということは何らかの用事があるはず。

俺は自分の現状を考慮（こうりょ）せずに迂闊（うかつ）にも入室の許可を出してしまった。

「失礼す――――――――――――――――――――――――――――――る・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋の中に入ってきたハクはベッドにいる俺を見つめて絶句した。

「？　どうしたハク――――――――――――――――――――――――――――――」

この時になって俺はようやく現状を思い出した。

リアーナと同じベッドで手を握った状態でいる。

しかもいつの間にかリアーナは全裸になっており大切な部分をシーツで隠している。

周囲には脱ぎ散らかされたリアーナの服が――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・すっ、すまない・・・・また後で来る・・・・・・・・・・」

謝りながら扉を閉めて去って行くハク。

・・・・・・・・・・ねぇ、これなに？

なんなのこの状況。

「誰か説明してくれぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

俺の叫びは部屋の中に虚(むな)しく響き渡った。

ｓｉｄｅメイドさん

まだ全員揃ってはいないものの、私が東間様たちと合流して他の方々を探し始めた時。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

異様な怒りを感じた私は無言で近くにあった岩を解体してしまいました。

東間様たちが少々驚かれたご様子でしたが――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

この怒りを感じたのは私だけではなく理香様やリリィ様も沈黙したまま近くにあった物を八つ当たりするかの様に破壊しましたのをご覧になって、東間様たちは何も言いませんでした。

しかしこれは恐らく――――――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・何故かはわかりませんが、仁がまた新しい女とイチャイチャしている様に感じますわ・・・・・・・・・・」

リリィ様の言葉に私と理香様は力強く頷(うなづ)きました。

第百七十話　説明を、誰か説明を！（後書き）

ちょっとだけ出番のあったメイドさんたちは準備体操中。

そしてまたしばらくは出番がないかも・・・・・・・・

第百七十一話　ツッコミと、理不尽な暴力は違う！（前書き）

理不尽な暴力、なのでしょうか？

第百七十一話　ツッコミと、理不尽な暴力は違う！

「ＯＫ、落ちつけ俺。現状を打破する方法は常に現場に隠されているものだぜ。」

リアーナの手を無理やり引き剥がしてベッドから離れて深呼吸。

まず昨夜、別に泥酔していたわけではないが何があったのかは覚えていない。

ただ間違いなくリアーナは服を着ていた。

つまりリアーナが服を脱いだとするならば俺が寝ている間に自分で脱いだしかあり得ない。

仮に誰かが不法侵入をしてリアーナの服を剥いでから立ち去ったとするなら間違いなく俺が気付く。

次に俺とリアーナが過ちを犯した可能性だが、これもゼロだと断言できる。

どれだけ疲れていようと寝ている間に襲われたら起きるし、この部屋にそういった臭いや液体の後はまったくない。

結論を上げると俺が寝ている間に（理由は不明だが）リアーナが服を脱いで就寝。俺はその行動に気付かず朝になって目を覚ましたところをハクに目撃された。

うん、やましいところなんて何も無い。

・・・・・・・何も、無いんだが――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・一緒のベッドで男女が寝ている（女の方が全裸。）の光景を見られた時の誤解の解き方、か・・・・・・・・・・・」

思案を開始するが約二秒半で考えるのをやめる。

「だってどう考えたって無理だろ。」

手で頭を押さえながら吐いた独り言は俺以外に聞き取った者はいない。

「・・・・・・・・・・・・さて、気を取り直して――――――――――――――――」

とりあえず先ほどの推理が正しかったかどうかを確認するためにもリアーナを起こす。

「おい、起きろ。リアーナ。」

頬をペチペチと軽く叩く。

これがフレスやトウキあたりだったらバケツに冷水を汲んでぶっかけるか起きるまで呼吸を止めてやるんだが・・・・・・・・・・

知り合って間もない奴に暴力的な起こし方はできない。（面倒くさいことにしかならないから。）

「・・・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・・んんぅ・・・・・・・・・・」

「起きろ～、起きないと目覚めのキスをしちゃうぞ～。」

ピタッ。

そんな擬音が聞こえてくるかと思うほどリアーナの硬直は見事だった。

先ほどまで起き掛けていたのに今はもう完全に動かない。

顔だけでなく身体全身が炎の様に紅く染まっていること除けば。

・・・・・・・熱にうなされているわけでもないのに器用な奴だな。

「冗談だ。どれだけ待ってもキスなんてしないぞ。」

「なんじゃとっ！？」

慌てたような怒った様な口調でリアーナが飛び起きる。

「おっ、お主っ！！　妾の純情を弄(もてあそ)んだというのかっ！！」

「人聞きの悪いことを――――――――――――――――――――――――――――――」

その時、飛び起きたせいでリアーナの身体を覆っていたシーツがはがれていることに気付き口を止めてしまった。

発展途上ではあるリアーナの身体だが、この細身の身体つきであの怪力をどうやって出していたのか気になり――――――――――――――――――――――――

「――――――――――――――――――――――――

たぶんレジスタンスの主要メンバーであろう少数の人々がこの場に集まっている。

周りは変わらぬ洞窟内だがいつの間にか広間の様な部屋で横になっていたようだ。

しかしこんなところに案内された記憶も歩いてきた記憶も抜け落ちているんだが。

「仁、すまないが今は会議中だ。静かにしていてくれ。」

声に視線を向けてみると書類を片手に持ったハクが固い表情でこちらを見ている。

「では次の行動についてだが――――――――――――――――――――」

しかしそれもほんの少しの間だけ。

すぐにハクは何事も無かったかのように会議を進め、周りの人々も俺の存在を無視するように会議に戻って行った。

「リアーナ、一体何がどうなってこんな状況になったんだ?」

これ以上、ハクの好感度を下げない様に小声で尋ねる。

「・・・・・・・・・今朝のことを覚えておらんのか?」

「まったく。」

困惑する俺を尻目にリアーナはホッと一息。

「おっ、覚えておらんのならそれで良いじゃろう。」

少し残念そうに小さな声で言った。

ｓｉｄｅリアーナ

・・・・・・・・・・・どうやら本当に覚えておらんようじゃな。

妾は仁にバレない様に心の中で安心の息を吐いた。

いずれ夫婦（めおと）になった時にはそういうこともせねばならなくなるじゃろうが、今は駄目じゃ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

口に出してしまった言葉が仁に聞かれていないかどうか慌てて確認するが、どうやら聞こえなかったようじゃった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふふっ。」

いつか実現させて見せる夢の一つを想像する妾の胸中は暖かい何かで満たされておった。

第百七十一話　ツッコミと、理不尽な暴力は違う！（後書き）

メイドさんたちのことを知ったら、リアーナはどのような行動に移るでしょうね・・・・・・・・・・

第百七十二話　組織ってのは、似たようなもんだな！（前書き）

ガジールは今のメンバーを嫌悪しているようです。

第百七十二話　組織ってのは、似たようなもんだな！

「次は王都に侵攻するべきでは――――――――――――――――」

「何を馬鹿なっ！！　我々の戦力ではまだ太刀打ちできないぞっ！！」

「しかしこのままではいずれ王都の貴族共に滅ぼされかねまぜんぞっ！！」

「いっそ他の国々に助けを求めるというのは――――――――――――」

「それこそ論外だっ！！　そんなことをすれば魔王軍に一気に攻め滅ぼされてしまうっ！！」

「やはり王国に戦いを挑んだこと自体が間違いだったのでは・・・・・・・・・・」

「今更何をっ！！　我らには罪深き王国に裁きを下すという崇高（すうこう）な使命があるのだぞっ！！」

あーだ、こーだ、こーだ、あーだ。

会議と言う名の意味の無い会話が延々と続いているのを俺たちは少し離れた場所から傍観（ぼうかん）していた。

「皆、落ちつけっ！　冷静さを欠くなっ！」

ハクは一人でこの不毛な会話を止めようとしているが、白熱した議論はハク一人では止めきれない。

「醜悪(しゅうあく)だろう？」

会議には加わらず俺たちの近くで彼らを見ていたガジールが声を掛けてきた。

「組織という物は常にこうだ。大きくなるにつれて機敏(きびん)に動くことができなくなり、自分たちだけでは何も決めることのできない愚者が一部の有能な人間に寄生する。」

「そういうお前も組織の一員、それも幹部だろ。あの話し合いに参加しなくていいのか。」

「時間の無駄だ。」

本心からそう思っているらしいガジールは冷たい視線で彼らを見下していた。

「・・・・・・・・・・レジスタンスも元はもっと小規模な組織だった。」

訊いてもいないことをポツポツと語り始める。

「ハクを中心とし、周りには有能とはいかないまでも無能な奴は誰一人いなく迅速かつ的確な作戦を実行し確実な成果を上げていた。」

昔を懐かしむその目に怒りの感情が灯る。

「だが組織が大きくなるのに比例するかのように、無能な輩が増えて行き俺たちの足を引っ張り始め、やりもしない大口を叩き組織を腐らせていった。」

ガジールは会議をしているレジスタンスメンバーを仲間だとは見ていない。

害虫、いやむしろ癌細胞として消去すべきと言っている様に見えた。

「足手まといをかばいながらの戦いで初期メンバーの仲間たちは一人、また一人と命を落としていった。他人に依存し足を引っ張るだけのゴミ共を仲間に引き入れた結果がこれだ。」

「・・・・・・・・・・・・ならどうしてお前はまだここにいる。」

問うた俺にガジールは視線を会議している連中の先――――――――――――――――――――――――

ハクへと向けた。

「・・・・・・・・・・・・あの女はどこまでも不器用な女だ。自身は間違いなく有能だというのに無能な愚図共を見捨てられずに共に歩もうとしている。俺は――――――――――――――――――――――――」

そこまで言ってからガジールは口を噤んだ。

続きが気にはなったが干渉するつもりもないので俺も何も言わなかった。

「・・・・・・・・・・・・んっ？」

と、今になって気付いたことが一つ。

いつの間にか隣に立っていたはずのリアーナの姿が無い。

「おい、ガジール――――――――――――――――――――――――――――――」

「そこまでじゃっ！！！」

リアーナがどこに行ったのか知らないか？

尋ねようとした俺は途中で無意味な質問と判断して訊くのをやめた。

なぜなら探すまでもなく見つけたから。

どこから持ってきたのかわからない丸テーブルの上にイスを置いて更にその上に腕組みしながら立っている偉そうなお姫様の姿を。

「先ほどから聞いておればお主らは勝手なことを延々と話し続けおって・・・・・・・・・・・・恥を知れっ！！！」

時間が止まったかのように唖然（あぜん）としているメンバーたち。

「なっ、何だ貴様はっ！！」

「小娘がっ！！　知った口を聞くなっ！！」

時が経つにつれ一人ずつ動きを取り戻していきリアーナを批判し始める。

「ふんっ、吠えるだけなら犬でも可能じゃ。」

しかしリアーナはどんな批判の声にもまったく動じずにレジスタンスメンバーを見下ろしている。

ちなみに俺は犬は結構便利だし可愛いから犬の批判はちょっとやめてほしいと思っていたりする。

「問うが、お主らは一体何のために戦おうとしておるのじゃ？」

「決まっているっ！　腐った王国を滅ぼし真の自由を得るためだっ！」

一人が叫ぶと周りのメンバーたちもその通りだと騒ぎ出す。

「話にならん。」

リアーナはそんな彼らを冷たく見下ろしていた。

「なんだとっ！？」

「貴様・・・・・・・・・我らを愚弄するつもりかっ！」

案の定、熱くなり始めるメンバーたちをリアーナは。

「ならばお主らはその腐った王国が滅びた後のことを考えたことはあるのか？」

更に冷たい言葉で返した。

ｓｉｄｅハク

「リアーナ・・・・・・・・・・・・・・・」

高い場所から私たちを見下ろす冷たいリアーナの視線。

皆が話をやめてリアーナを見ている。

本来ならば私が彼らをまとめ上げなければならない。

私に力が無いばかりに皆が好き勝手なことを言ってしまい、結果いつまでもまとまらない。

私には皆をまとめる器も力も無い。

そしてリアーナは恐らくその両方を持っている。

今の私はそんなリアーナを見上げることしかできなかった。

第百七十二話　組織ってのは、似たようなもんだな！（後書き）

誰にも気づかれない様に丸テーブルの上にイスを乗せて更にその上に立つ。

・・・・・・・・・・・・・・・・涙ぐましい努力ですね。

第百七十三話　ふぅん、なるほどな！（前書き）

演説スタート。

第百七十三話　ふぅん、なるほどな！

「確かにこの国は腐っておるかもしれん。暴走する貴族にまとめあげるだけの力を持たぬ国王。お主らの言い分も理解できぬことはない。」

言葉を紡ぐリアーナに気圧されるかのようにレジスタンスたちは沈黙している。

・・・・・・リアーナに威厳があるのは認めるが、それだけで全員が黙ってしまうのは、はっきりとした思想がないと証明していることにこいつら自身は気付いているのだろうか？

俺がガジールの失望を理解している中でリアーナの演説は続く。

「じゃがここが国である以上、住む人々は確実に存在しておる。そして国を滅ぼすということは国に代わる新しい何かを作り出さねばならぬ。そうでなければ多くの民に犠牲を強いることになってしまうからじゃ。お主らはそれを作り出すことができるというのか？」

「だが国が腐っていてはどちらにしろ民が犠牲となることに変わりはない。」

レジスタンスが誰一人として口を開くことができない中、ガジールだけは正面からリアーナを睨み付ける。

「そうじゃ。だからこそお主らも民も王族も貴族も皆が考え、話し合い、そして行動せねばならぬ。この国に生きる者として。」

「理想論だ。民はただ同じ日常を繰り返し、貴族の腐敗は話し合いで解決できるほど浅くない。貴様の言っている綺麗事では何も変えられない。」

「それはやってみなければわからぬことじゃ。行動もせずに勝手な決め付けをしてはなにもできはせぬ。」

「やってみなければ？　遅すぎる、もはや力を持ってでしかこの国を救うことはできないっ！」

「力を否定するつもりはない。じゃが力だけでは変化を起こしたとしても長くは持たぬ。その先を考えて行動せねば国は導けぬ。」

「それが遅いと言っているっ！　この国は今すぐにでも変えなければ魔王軍に侵略されるか自滅するかのどちらかしかないっ！」

真っ向から睨み合うガジールとリアーナ。

レジスタンスも今はただ二人の言い分を聞いているだけだが、時機にどちらが正しいかを口論し始めるだろう。

今だけでなく、未来を見つめているからこそ時間をかけた変革を起こそうとしているリアーナ。

今を乗り越えなければ未来もないゆえに力による即時の変化を求めるガジール。

俺から見ればどちらの言い分も正しくもあり、間違ってもいる。

この国の行く末に関わるつもりはない俺には関係の無いことだが。

「・・・・・・・二人とも、そこまでだ。」

今にも戦いを始めようとしている二人の間にハクが割って入る。

「・・・・・・・・・・・そこをどけ。ハク。」

「邪魔じゃ。」

案の定、二人ともハクに敵意を向けるがハクは敵意を受け流しながら静かに言葉を続ける。

「二人の考えのどちらが正しいかは私にはわからない。だが少なくとも仲間同士での戦いが間違っているということはわかる。話を続けるなら冷静になってから再度話し合うべきだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガジールとリアーナは再び互いに敵意を向ける。

だがそれも一瞬。

ガジールはハクとリアーナに背を向けて部屋から出て行った。

「・・・・・・・・・ハク、お主もわかっておるはずじゃ。冷静になったところで何も変わりはせん。」

「・・・・・・・・・・・・・ああ、わかっているさ。」

ハクは去って行くガジールの背中を見つめた後。

「全員っ！　今日はこれで解散とするっ！　次の会議は追って伝えるっ！」

レジスタンスメンバーに大きな声で告げた。

レジスタンスのメンバーがざわめきを起こしながら部屋を後にすると、残ったのは俺とリアーナにハクの三人だけだった。

「お疲れさん。」

本当に疲れた顔のハクとスッキリしていない難しい表情のリアーナをねぎらうが反応はなかった。

「まっ、今日はゆっくり休め。そんな顔をして他の事に手をつけようとしても失敗しかしないからな。」

軽口を叩きながら部屋から退室しようと歩き出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・のう。仁。」

「なんだ？」

声を掛けられたので立ち止まりながら聞き返す。

「この道は、正しいのかのう・・・・・・・・・」

「知るか、お前が自分で選んだ道だろ。俺に答えを求めるな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

それ以上、呼び止められることもなかったので歩みを進める。

そして部屋から出る直前。

「まっ、話し相手くらいにはなってやる。自分一人で答えが出なかったらいつでも来いよ。二人とも。」

それだけ告げて部屋から出た。

ｓｉｄｅガジール

「・・・・・・・・・・・・・・王族、か・・・・・・・・・・・・」

今日、直接会話してみて思っていたよりもずっとマシな存在だと思った。

少なくともあの姫は。

「だがそれでも駄目だ・・・・・・・・・・・・・っ！」

苛立ちを隠さずに俺は吐き捨てる様につぶやいた。

第百七十三話　ふぅん、なるほどな！（後書き）

リアーナもガジールも自分の考えで動いています。

ハクは一体どんな道を選ぶでしょうか。

そして仁は――――――――――――――――――――――――――――――――

―

第百七十四話　・・・・・俺、終わった！（前書き）

第百六十八話の四つの選択肢。

実は四のその他、つまり『全て』が正解だったことに気付きましたでしょうか。

二のなし崩しにキスをすると、一のハクが現れて気まずい空気が流れるはやりました。

では残っているのは――――――――――――――――――――――――

第百七十四話　・・・・俺、終わった！

「お帰りなさいませ、ご主人様。お食事に致しますか、ご入浴になされますか、それとも処刑をご希望ですか。」

俺は開けた扉をそのまま閉めた。

キザなことを言って二人の好感度を上げることに成功した俺は上機嫌に部屋に戻って来たのだが――――――――――――――――――――

周りを見まわしてここがレジスタンスのアジトであることを再確認。

次にこの部屋が俺とリアーナに割り振られた部屋であることも再確認。

万事ＯＫ、深呼吸して落ちついてからいるはずの無い人物の幻影を振り払ってから扉を開ける。

「お帰りなさいませ、ご主人様。土下座してからの処刑に致しますか、身も心もズタズタにする処刑になされますか、それとも純然たる処刑をご希望ですか。」

「選択肢その四『お前が欲しい。』で。」

「かしこまりました。処刑ではなく死刑執行に致します。」

馬鹿なっ！　俺が選択肢を間違えただとっ！？

「何か言い残すことはございますか。」

「・・・・・・・・・・どうすれば死なずに済むでしょうか。」

「不可能です。」

命乞いなど聞く耳持たないと、メイドさんの身体全身から発している殺気が言っている気がする。

どうしてここにメイドさんがいるんでしょうか？　を始めとした数々の疑問は口に出したりはしない。

だってそれで死を免(まぬが)れることなんてできはしないのだから。

「リューグっ！！！　カムヒアーっ！！！」

俺が生き残るためにはメイドさんの攻撃を全て受け切らなければならない。

つまり俺を生かすための盾が必要不可欠だということだっ！

アイツは俺の心友(身代わり)っ！　俺の呼び掛けにはきっと応えてくれるはずだっ！

だが――――――――――――――――――――――――――――――

「探し物はアレでしょうか。」

メイドさんが自分の後ろを指差すのでそこに視線を送ると――――

―――――――――――

「リューグっ！」

ピクリとも動かずに倒れているリューグその人に慌てて近づき、意識の有無を確認する。

「盾にされるのではないかと思い、あらかじめ処刑しておきました。」

「なっ！？　メイドさん・・・・・・・・なんて、なんて――――――――――――――――」

息はあるものの完全に意識の無いリューグを持ち上げながら。

「なんて都合の良いことをしてくれたんだっ！　ありがとうっ！」

「いいえ、どういたしまして。」

暴れるリューグを盾にするのは面倒くさかったが、これなら楽にメイドさんの攻撃を防げる。

「さあ来いメイドさんっ！　全ての攻撃を（リューグが）受けきって処刑を耐えて見せるっ！」

「わかりました。では参ります。」

メイドさんが笑顔でそう告げた刹那――――――――――――――――――――――――

時間が止まった。

そう感じただけで実際は時間など止まっていないのだが。

少なくとも本当に時間が止まってくれたのなら、と俺は本気で思った。

「言い忘れていましたが――――――――――――――――――――――」

凍りつく大気に身体が震える。

千里（せんり）先までの野生で生きている生物は全速力で反対方向に逃げ出すだろう。

「心配をしていた私たちを放って――――――――――――――――――」

なぜだろう、右手に持っているナイフやフォークがダー〇ンスレイヴやパ〇パタに見えるのは。（実物見たこと無いけど。）

父親や母親、ヴェンリスやマキナなどとの戦いでも恐怖や戦慄を感じたことはあったが。

悲鳴を上げて逃げ出したいと思ったのは初めてだ。

「新しい女とイチャイチャするクズに――――――――――――――――――――――」

リューグの盾が紙の盾に思える。

こんな薄っぺらい盾で俺はどうにかできると思っていたのか。

少し前の俺を殴ってやりたい。

「容赦など必要ありませんよね？」

考えろっ！　考えるんだ俺っ！

窮地（きゅうち）にこそチャンスは必ずあるっ！

何か方法がっ！　この場を切り抜ける手段がっ！

じっくりと歩を進める笑顔のメイドさん。

目が笑っていないとか作り笑顔とかいうレベルじゃない。

あれは本心から笑顔になっているのだ。

笑顔で、怒り狂っている。

「リューグっ！　起きろっ！　起きるんだっ！」

俺が考えた苦し紛れの一手。

リューグを起こしメイドさんの方へ蹴り飛ばして胸でも触らせて怒りの矛先を変えるという手。

何の意味も無い一手だが、奇跡が起こって本当に矛先が変わるかもしれないのでリューグを殴り続ける。

「やりもしないで諦めるわけにはいかないっ！」

リューグを地面に叩きつけ頭を蹴り続けるが一向に目を覚ます気配は無い。

「言ったはずです。リューグ様は処刑したと。」

気付けば手を伸せば届く距離にメイドさんが。

「では――――――――――――――――――――ショケイヲ ハジメマショウカ。」

拝啓。父親、母親。

俺はもう駄目の様です。

今まで育てて下さってありがとうございました。

心の中で両親にお礼の言葉を述べつつ、メイドさんの手が頬に触れるのを感じながら俺は目を閉じた。

第百七十四話　・・・・・俺、終わった！（後書き）

怒り＋嫉妬でかつてないほどパワーアップしてしまったメイドさん。

対して仁は木彫りの熊の加護が無い状態。

補足ですが、ダ〇ーインスレイヴは血を求める魔剣、パス〇タは破壊神シ〇ァの持つ怒りの槍です。

そして意味も無く処刑された憐れなリューグ。（とはいっても死んではいません。）

・・・・・・・・・・・・ちなみに怒っているのはメイドさんだけでは無いことをお忘れなく。

第百七十五話　俺、処刑中！（前書き）

リューグは軽めの処刑で済んでいたようです。

第百七十五話　俺、処刑中！

ｓｉｄｅリューグ

メイドさんによって仁が連れ去られた後、しばらく様子を見てから俺は起き上った。

蹴られた頭が痛むが文句も言わず気絶したふりをしてて助かった。

実は仁によって盾にされている最中、俺は意識を取り戻していた。

だが目の前にいるメイドさんが「死にますか？」と眼光で問いかけてきたので気絶したふりをしたのだ。

「仁・・・・・・・・・・お前のことは忘れないぞ。」

俺は心友（生け贄）の尊い犠牲に目から一滴の汗を流した。

「さて、悔やむのはこの辺で終わりにしてと。」

とりあえず身の安全と自由は確保したわけだが。

メイドさんの処刑が終わるまで待機しているにしても、いつ終わるかわからない。

それにメイドさんの処刑が終わったとしても――――――――――――――――――――――――

不意に扉が開いた。

？　メイドさんの処刑が終わったのか？
にしても早すぎる気が――――――――――――――――――――――――
――――
「のう仁・・・・・・・・・少し話が――――――――――――――――――
――――――――――」
疑問を抱く俺の前に姿を現したのは見知らぬ少女。
・・・・・・・・・仁の奴、また新しい女を作りやがったのか？
呆れ果てる俺に見知らぬ少女は鋭い視線と敵意を向ける。
「・・・・・・・・・・・・お主、何者じゃ。」
「仁の友人だ。仁の奴に会いに来たんだが、お前こそ何者だ？」
半分本当、半分嘘の答えを返すが見知らぬ少女は警戒を緩めない。
「ならばなぜここに一人でおる。仁はどこにいったのじゃ。」
「あの馬鹿ならメイドさんにお仕置きされている最中だ。仁が戻ってくるまで俺はここで待っているだけだ。」
「メイドじゃと？　従者がなぜ仁にその様な真似(まね)をするのじゃ。」
「あ～・・・・・・・・・・話せば長くなるんだが――――――――――
――――――――――――――――――」

俺はメイドさんと仁のことを知っている限り説明した。

ついでに理香やリリィ、ルナールたちのことも。

仁の女なら別に知られて困る様なことではないし、もしもの時は仁に責任を取ってもらえばいい。

「ほお・・・・・・・・・そうか。仁はいろいろな女子（おなご）に好かれておるのじゃな。」

見知らぬ少女は誇らしげにつぶやいた。

普通、自分の男が他の女といろいろやっている話を聞かされれば怒るものなんだが――――――――――――――――――――――――

「流石は我が伴侶（はんりょ）となるべき者じゃ。」

「恋人すっ飛ばして夫婦宣言しているところ悪いが、自分の男と他の女がイチャつく話を聞かされて怒らないのか？」

「側室が何人であろうと構わぬ。その程度のことで妾の想いは揺るぎはせぬ。」

ちゃっかり自分を正妻の位置に置いている見知らぬ少女。

仁の奴が一体何をしたのか知らないが、メイドさんたちによるお仕置きが更に苛烈になることだけは予想できる。

「お主、他には仁についての話は無いのか？」

「んっ？　あるにはあるがそれがどうした。」

仁に黙祷を捧げる俺に見知らぬ少女の期待の眼差しが届く。

「ならば妾が許す。仁についてもっと話すのじゃ。」

「・・・

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私のお仕置きに恐怖と戦いながら戦慄を隠せないでいる仁の顔は何故あれほど愛おしいのでしょうか。

思い出すたびに思わず溜め息がこぼれてしまいます。

理香様やリリィ様のお仕置きの時も、同じ顔をするのでしょうか―

―――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう思った時、私は自分の胸中に得体のしれない感情がくすぶっていることに気が付きました。

気持ちの悪いこの感情。

昨夜、仁を探して偶然にも名前の知らない女性とベッドの中でキスをしている現場を目撃してしまった時も、この胸の中に黒い炎の様な揺らめきがありました。

「・・・・・・・・・・・・・・・いけませんね。」

私は胸の内の黒い感情が爆発しない様に、心の声に従って動くことにしました。

念入りに周囲に人がいないことを確認した後。

そばに近づき、体を起して私の唇を彼の唇と―――――――――――

―――――――――

ｓｉｄｅリューグ

「――――――――――――――――――――ということがあったんだ。」

「ほうほうっ！　仁はやはりすごいのうっ！」

子供の様にはしゃぎながら俺の話を聞いている見知らぬ少女に俺は苦笑を漏らした。

仁、お前本当にいろんな女に好かれるな。

「それでっ！　それでどうなったのじゃっ！？」

「ああ、それは――――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

見知らぬ少女に急かされるままに俺は話を続けた。

第百七十五話　俺、処刑中！（後書き）

リアーナは器が広いというのでしょうか・・・・・・・・・

でも正妻の座はきっちり自分のものにしています。

キャラ設定その五（前書き）

久しぶりのキャラ設定。

今回はルギリス、アマネ、スペクトラ、マキナ、リアーナです。

キャラ設定その五

ルギリス

年齢　二十二歳

身長　１７０ｃｍ

体重　５２ｋｇ

スリーサイズ　８２　５７　８５

趣味、特技　空を飛ぶこと、風魔法

容姿　両手が翼になっており、足も鉤爪状になっている少女

髪の色　薄いピンク色

瞳の色　青色

次期ハーピィ族長。現在は新たな巣を作り族長を継ぐためにいろいろなことを学んでいる。本来ならば姉であるルアリスが族長を継ぐはずだったのだがとある事情によりルギリスが後継者となった。姉の影響で人間のことを信用していなかったが、仁たちに出会いリューグに守られたことから考えを改めている。
ちなみにハーピィには女性しかいないため、生殖に他種族の男を必要とする。

アマネ・ラン

年齢　二十九歳（本人はそう主張、実際の年齢は不明。）

身長　１５７ｃｍ

体重　４７ｋｇ

スリーサイズ　あらあら、うふふ。

趣味、特技　生け花、裁縫

容姿　小柄で妖艶な女性の様な男性

髪の色　紫色

瞳の色　紫色

どこからどう見ても女性にしか見えない男性。なぜそのような格好をしているかは不明。
魔法を得意とし料理などもできるが荒事は苦手で力仕事を嫌う。
仁とメイドさんは出会った時点で男と気付き、リューグは森の中で押し倒された時に気付いた。他のメンバーで気付いている人間はいない。
子供が一人いる。

スペクトラ

年齢　自分でもよくわかっていない。

身長、体重、スリーサイズは本体が液体状であるため自由に変化できる。

容姿、髪の色、瞳の色も擬態能力で自由に変化できる。

趣味、特技　いろいろな人に擬態すること、擬態

フーエの肉体を本体に作られたメタモルフォーゼ。フーエとは違う独自の人格を持っている。
擬態能力は、あくまで外見を同じにするだけであるため戦闘能力自体はスペクトラ本人のもののままである。
トウキの肉体が気に入っているのか、ずっとトウキの姿のままでいる。
現在は滅びた村で村人を供養しているはずだが・・・・・・・・・・

デウス・エクス・マキナ

年齢　外見年齢十歳前後

身長　１４０ｃｍ

体重　３２ｋｇ

スリーサイズ　・・・・・・・・・・・・・ひみつ。

趣味、特技　ゲーム、歌

容姿　中性的な顔つきの子供

髪の色　水色

瞳の色　深紅色

自らをデウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神。）と名乗る謎の子供。
仁曰く魔力も存在も感じることができないとのこと。
頭を砕こうとも心臓をえぐり出そうとも一切ダメージを負わない無敵としか言いようのない性能を誇るが仁の一撃で傷を負った。
初めて自分をキズモノにした仁のことを殺したいほど愛している。

リアーナ・フォン・クラウスベニル

身長　１５５ｃｍ

体重　妾が教えるわけ無かろう。

スリーサイズ　馬鹿者っ！　なっ、何を訊いておるかっ！

趣味、特技　詩集の読書、狩り

容姿　細身の体の美少女。

髪の色　金色

瞳の色　碧色

ルヒナの王女。現在の王国に強い危機感を抱き、現状打破のために

行動している。片手でバスタードソードを振るったり、身軽に跳躍することから身体能力はかなり高い。
過去に仁と出会い、彼を一途に思っている。
ヤンデレでは無い。（たぶん。）

キャラ設定その五（後書き）

活動報告の方にも書きましたが、身長、体重、女性陣はスリーサイズを追加しました。

体重、及びスリーサイズは素直に教えてくれる人と教えてくれない人に別れています。

第百七十六話　何があったのか、記憶がねえ！（前書き）

メイドさんにいろいろとヤられた記憶は忘却の彼方に消し飛んだようです。

第百七十六話　何があったのか、記憶がねえ！

あれは小学一年の頃だったか。

夏休みに両親に連れられて見知らぬ謎の樹海に行ったのは。

両親と出かけるときは起きている時と眠っている最中に連れて行かれる時の二種類ある。

起きている時は普通の家族旅行で、理香や東間たちも一緒に行くことが多かった。

眠っている最中に連れて行かれる時は修行のために本当に日本なのか怪しい場所ばかり連れて行かれた。

確かこの時の課題は樹海に住む謎の巨大生物を殺して証明のために死体の一部を切り取って持ってこいだったはずだ。

支給品としてわずかな携帯食と日本刀を受け取り、樹海内に入った俺は目的の生物を探して徘徊していた。

途中で見たことも無い怪生物に出会うことなんて日常茶飯事（にちじょうさはんじ）。

驚くにも値しない鳥もどきや獣もどき、虫もどきを蹴散らしながら焼いて食う。

そして樹海に入ってから三日ほど過ぎた昼過ぎに目的の巨大生物を見つけた。

全長十メートルほどの角の生えた一つ目の巨人。（サイクロプスという奴だろうか。）

その強靭（きょうじん）な肉体から振るわれた木々を薙ぎ払う一撃は、当時の俺にとって十分な脅威（きょうい）に値した。

食らったら終わりの攻撃を避けながら懐（ふところ）に潜り込み一つ目を潰す――――――――――――――――――――――――――――――――

はずだったのだが予想以上に眼球自体が硬くて俺の攻撃では致命傷を負わせることができなかった。

そのうち奴は俺との戦いが退屈になったのかどこかに消えてしまった。

俺はこれを敗北と受け止め、悔しさから周囲の木々を破壊しまわった。

もちろん別に意味があるわけではなく、純然たる自然破壊活動。

今にして思えば恥ずかしい思い出の一つである。

「・・・・・・・・・お主、なにをしておるのじゃ？」

八つ当たりを続ける俺に子供の冒険者が話し掛けてきた。

身の丈に合わない長剣とどこか気品を感じさせるその少女。

「見てわからないのか、木を破壊し回っているんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・その行為に何の意味があるというのじゃ？」

「ストレス発散。」

素直に答える俺に少女は溜め息を一つ。

「ここは妾の父上の治める国じゃ。あまり勝手な森林伐採はやめてもらおうか。」

「だが断るっ！」

「なぜじゃっ！？」

とは言ったものの、これ以上森林を破壊し続けても逃げられた事実は変わりない。

両親にこのことがバレたら殺される危険性が非常に高い。

俺は少女の言葉通り無意味な自然破壊によるストレス発散をやめて、あの一つ目を探すことにしたのだが――――――――――――――――

「まっ、待つのじゃっ！」

何故か忠告通りに自然破壊をやめた俺を少女が引き止める。

「なんだ？　別に場所を変えて森林伐採をするつもりは無いから安心しろ。」

「そうではない・・・

を確認する。

何か夢を見ていたような気がするが、それが何かが思い出せない。

それ以前にどうしてここにいるのかも思い出せない。

確かリアーナの演説を聞いた後、キザな言葉を吐いてから自分の部屋に戻ると何故かメイドさんがいて――――――――――――――――

「っと、そういえばメイドさん、どこに行った？」

右を見渡しても左を見渡してもメイドさんの姿が無い。

部屋の中はメイドさんが掃除をしたらしき後は残っているから、そう遠くには行っていないはず。

「・・・・・・今の内に逃げるか・・・・それとも大人しく探すか・・・・・・」

どちらの方がよりリスクが少ないかを真面目に検討しながら俺は次の行動を考えていた。

ｓｉｄｅメイドさん

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ――――――――――――――――――――――」

自分でもわかるくらいに顔を充血させてしまった私は息を整えようとしていました。

けれどいくら呼吸を続けても一向に整えられず、鼓動も早くなったままでした。

あの感触。

心の内が満たされる様な行為。

「――――――――――――――――――――――――――――――っ！」

思わず近くにあったイスやテーブル、武器をバラバラに切り裂きながら私はどのような顔で仁に会えばいいのかを悩み続けました。

第百七十六話　何があったのか、記憶がねえ！（後書き）

珍しく恥ずかしがっているメイドさん。

メイドさんも人の子だったということですね・・・・・・・・・・

第百七十七話　捜索中につき、出番は無い！（前書き）

理香が怒っている分、リリィは冷静なようです。

第百七十七話　捜索中につき、出番は無い！

ｓｉｄｅ理香

「まったくもう・・・・・・・・・・・・っ！」

「理香・・・・・・・・少し落ち着いた方が良いですわよ。」

そう口にするリリィも内心では私と同じく仁に対して怒りの感情を抱いていると思う。

今、私たちはこの国のレジスタンスのアジトである洞窟内の一室に隠れていた。

どうやってかはわからないが、ここに仁がいる情報を掴んだメイドさんに案内されて私たちはここに潜入し、空き部屋らしき一室で仁をメイドさんが連れてくるまで待機することになった。

あまり大人数で行動してはレジスタンスと余計な揉め事を起こしかねないから私たちだけでここに来たのだが――――――――――――――――――――

メイドさんの掴んだ情報によると、仁は見知らぬ女の子と仲良さそうに話していたとか。

あの後、私たちがずっと心配してたというのに自分は新しい女の子とイチャイチャイチャイチャ――――――――――――――――――――

「ふんっ！　仁なんてどうせならやられちゃえば良かったのよ・・・・・・っ！」

「理香・・・・・・・・・・・・・・・」

心の中が台風が上陸したかのようにかき乱されている。

仁は私の気持ちに気付いてなんてくれない。

・・・もっとも例え気付いてくれても――――――――――――――――私に仁と付き合う資格は無い。

あの日、あの時、あの瞬間。

仁を拒絶してしまったあまりにも愚かな私。

アイツに私が一生を費やしても癒せない深い傷を負わせてしまったのだから。

それはわかっているけど、それでも私は仁が他の女の人と仲良くしているのを見たくない。

我ながら非道い自己中心的な考え方だと思う。

だけど、ただの我がままでも。

どんなことがあっても私は仁のことが好きだから。

「・・・・・・・・・・・ごめんねリリィ、少しは落ち着いたみたい。」

「そう・・・・・・・・・それは良かったですわ。」

深呼吸をして気持ちを落ち着けながら謝る私に、リリィは同性の私でさえ赤面するほど可愛い笑顔を浮かべた。

・・・・・・・・・リリィも仁のことが好きなのかしら。

だとすればリリィとは友達だけどライバル同士ってことにな――――――

瞬間、鈍い音を響かせながらナイフははじかれていた。

「っ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

大型のナイフを持った黒い影が飛び退くと、リリィと黒い影の間に黒装束に身を包んだ少女が一人。

「ご無事ですか、リリィ様。」

「ルナールッ！？　あなたも来ていましたのっ！」

「はい、ご無礼を承知の上で護衛のために尾行させていただきました。」

暗殺者ルナール。

私が仁から聞いた話では元凄腕の暗殺者で今はリリィの付き人をやっていると。

仁が凄腕というからには本当にかなりの腕を持っているとは思っていたものの、まさか今まで私たちに気付かれずに私たちを尾行していたとは思ってもみなかった。

でもそのおかげで私では助けられなかったリリィの命が助かった。

「リリィ様、ここは私たちに任せてお下がりください。」

「冗談でしょう、ルナール。私も共に戦いますわ。」

やる気満々なリリィにルナールは首を振った。

「いいえ、リリィ様の魔法はある程度の広さがある場所ならともかく、この密閉された限定的な空間では敵味方の区別ができずに両者を攻撃してしまいます。」

「うっ・・・・・・・・・・・・・・・」

ルナールの言葉に反論できないリリィは言葉を詰まらせる。

「それに彼らの相手をする以上、魔法など唱えている暇はありません。」

ルナールはそう言って私に目配せしてくる。

「わかってるわ。こっち側に――――――――――――――――――――」

私は部屋に飾ってあった装飾用の剣を取って背後からの鋭い一撃を受け止める。

「ほお・・・・・・・・・・・・・・ハクの一撃を受け止めるとは。」

ルナールと対峙している黒い影の男が感心したように言ったが、私は目の前の相手に集中することで手いっぱいだったので、何を言っていたかまでは聞き取れなかった。

奇襲を仕掛けてきた黒服の女はバク転しながら私から離れる。

闇の中での戦いは、見えているので特に問題はないものの――――
――――――――――――――――

その女と対峙しながら私は槍を持ってこなかったことを後悔したがもう遅い。

黒服の女は剣を構える私に向かって駆け出してきた。

ｓｉｄｅリューグ

「なるほどのう・・・・・・・・・・やはり妾の夫となるべきは仁しかおらんのじゃ。」

「・・・・・・・・・・納得していただけたところで俺はそろそろ帰ってよろしいでしょうか。」

「ダメじゃ。」

三十二回ほど仁が活躍する話を繰り返し語らされた俺は心身共に疲労困憊になっていた。

「ほれ、もう一度じゃっ！」

「はいはい。」

やっぱり仁の知り合いの女は変人しかいないな・・・・・・・・・・

改めて認識した俺は三十三回目の同じ話を始めた。

第百七十七話　捜索中につき、出番は無い！（後書き）

ルナール登場。

今回はＭではありません。

というよりも彼女は仁に対してだけドＭになるようです。

後、活動報告の方にミニコーナーを追加しました。

お楽しみいただけたなら幸いです。

第百七十八話　捜索は、続く！（前書き）

今回もメイドさん捜索中。

第百七十八話　捜索は、続く！

響く剣戟（けんげき）の音の方向に通路を探索していた俺は振り向く。

誰かは知らないがアジト内で戦っている馬鹿どもがいるようだ。

恐らく模擬戦だろうから放っておいても問題はないだろうと判断し、俺は大人しくメイドさんを探し続けた。

戦っているのが理香たちだと気付かないまま。

ｓｉｄｅ理香

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「くぅっ！」

黒服の女が無言で放つ急所を狙った斬撃を私はどうにか受け流す。

リリィは私たちの邪魔にならないように部屋の隅で悔しそうに唇を歪めながらじっとしている。

部屋から出て行って仁やメイドさんたちを呼びに行く、という行為は愚行でしかないとわかっているからだ。

その理由は私たちが相手をしている敵にある。

二人とも戦闘スタイルが暗殺者タイプ、つまり標的を殺害するのに手段を選ばない戦いをするということだ。

ルナールとその相手の力量はほぼ互角。

下手にリリィが動けばルナールはリリィを守るために動き、結果的に致命的な隙を作る要因になりかねない。

「でやぁっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私の打ち込みを紙一重で避けながら反撃してくる黒服の女。

カウンターとして放たれた掌打を後ろに跳んで威力を軽減する。

威力自体は大したことはないものの一撃一撃が早く隙が無い。

しかもこちらの武器は装飾用の剣。

今にも砕け散りそうな不慣れな剣術だったが、考えてみれば剣だからこそ戦えている。

ここは狭い室内、当然槍を振り回すスペースなどほとんどない上に相手はスピード重視の暗殺者。

もしここに槍を持ってきていたとしたら満足に戦えないどころか、初撃でやられていた危険さえある。

とはいっても所詮ただの時間稼ぎにしかならない。

そう、ただの時間稼ぎにしか――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「きゃっ！？」

足を払われ仰向けに倒れたところに咽喉（のど）を突き破るためのナイフが振り下ろされる。

だけど私は咽喉元に突き刺さろうとするナイフを無視して黒服の女の腹を蹴り上げる。

「ぐっ！？」

防御も回避も選択せずに反撃してくるとは思っていなかったらしい黒服の女は私の蹴りをまともに食らい壁に背中をぶつける。

下手をすれば黒服の女が吹き飛ばされる直前にナイフを手放して咽喉に刺さったかもしれない。

一見、無謀に見える行為だったかもしれないが私の眼には蹴り飛ばした程度では手を放さないと確信できるほどしっかりとナイフを握っていた黒服の女の手が映っていた。

それに黒服の女の攻撃には何故か殺意がまったく感じられなかった。

その間に私は急いで起き上がり体勢を整えるが、黒服の女はこちらの体勢が整う前に心臓目掛けてナイフを投げる。

後方で準備が整ったことを感知した私はナイフをはじきながら体を伏せる。

「氷拘束蔦(コールドバインド)っ！！」

「なっ――――――――――――――――――――――――――――」

私が伏せたのとほぼ同時にリリィの詠唱を省略した魔法が炸裂する。

リリィの正面に展開された魔法陣から五つの氷の触手が伸び、黒服の女を襲う。

大規模な魔法しか使えないから下手に動くことができず部屋の隅でじっとしているしかない。

それに魔法を詠唱している隙を与えるほど自分たちは甘くはない。

私たちの会話からそう思い込んでしまった黒服の女は完全に虚(きょ)を突かれ一瞬動きを止める。

それが敗因。

一瞬とはいえ動きを止めてしまった以上、狭い室内でこの魔法を回避する術(すべ)はない。

氷の触手は黒服の女の体に絡まり凍結させて動きを封じる。

「くそっ・・・・・・・・・・・・っ！」

「ハクッ！」

ルナールの相手をしている男の気がこちらに向く。

その瞬間に生じた隙をルナールは見逃さない。

「はっ！」

「しまっ――――――――――――――――――――――――――――」

男はルナールの一撃を無理な体勢で避け、それを予期していたルナールは更なる追撃を放ち。

完全に体勢を崩してしまった男を地面に叩きつけたルナールは男の体に馬乗りになってナイフを首に突き付ける。

「終わりだ、動けば殺す。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ！」

男はルナールの言葉が嘘ではないと悟り、余計な抵抗はしなかった。

「貴様ら・・・・・・・・・何者だ・・・・・・っ！」

首から上以外は凍りついている黒服の女が私たちを睨みつけながら問いかけてくる。

「私は理香。この世界に召喚された勇者よ。ここには行方不明の仲間がいると聞いて来たの。」

「勇者、だと・・・・・・・・・・・・・っ！？」

私は困惑している黒服の女に事情を説明し始めた。

ｓｉｄｅルナール

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

理香が事情を説明している様子を眺めながら（もちろん目の前の男に隙を見せるような真似（まね）はしない。）私は考えていた。

理香と東間は勇者、ならたぶん仁も・・・・・・・・・・

つまり将来的には魔王様、そしてリリィ様と敵対するということ。

私は魔王軍として彼らを殺さなければならない。

例えそのことでリリィ様に責められることになろうとも。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

でも今は、今の間だけでいいから。

私は彼らと、仁と一緒にいたい。

問題の先送りになるとわかっていても。

この仲間でいられるという優しい時間を過ごしていたい。

ただの幻想に過ぎない時間を。

第百七十八話　捜索は、続く！（後書き）

意外と真面目に未来のことを想像していたルナール。

これはヒロインの一人としての葛藤なのか。

・・・・・・・・・・それともしかしてこれは死亡フラグの一種なのでしょうか？

第百七十九話　見つけて、そして合流！（前書き）

合流します。

第百七十九話　見つけて、そして合流！

「――――――――――――――――――――」

立ち止まった俺は魔力を感じた方向に視線を移す。

とはいっても視界に入るのは洞窟の壁だけで実際に魔力を感じた場所が見えるわけではないのだが。

今の魔力は恐らくリリィのものだ。

あのツッコミ姫がここに来ていたことは少し意外だったが戦っているのなら加勢しないわけにはいかない。

なにせ万が一でもリリィが死んでしまったらリアーナとのダブル姫様ツッコミの夢が消えてしまう。

・・・ただ・・・・・・・・・もし戦っているのがリリィとリアーナだったとしたら――――――――――――――――

一抹の不安を抱きつつも俺はその場所に向かって走り出そうとして、その姿に気づいた。

「メイドさん、ここにいたのか。」

「っ！？」

通路の角でしゃがみ込みながら震えていたメイドさんに声を掛けると、返答ではなくフォークとスプーンの投擲（とうてき）がきた。

「おわぉっ！？」

ギリギリで回避に成功する俺の前髪が数本切断された。

「メイドさんっ！　いくらなんでも危なすぎるだろっ！」

「黙りなさい、あなたに発言は許されていません。」

壁に深々と突き刺さった食器を見ながら抗議の声を上げると、静かだがどこか焦っている口調で返答された。

何故かはわからないがメイドさんはとてつもなく不機嫌のご様子。

そしてその理由は大半が俺だったりするのだが――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・あの、メイドさん？」

「黙りなさい、三度は言いません。」

振り返らずにナイフをギラつかせるメイドさんに俺は恐怖を覚えながらも命令通り何も言わずにじっと待った。

メイドさんは食器を懐（ふところ）にしまうと大きく大きく深呼吸。

こちらを振り向くメイドさんはいつもと変わらぬ無表情。

「・・・・・・・・・何か御用ですか、仁。」

なのにやっぱりどこか焦りを含んだように思えるメイドさんの声に戸惑いながらも俺は返答する。

「えーっと、目を覚ましたら誰もいない部屋の中に一人で倒れていたから。メイドさんに会ったのは覚えているんだが、その後どうして倒れていたのか思い出せなかったからメイドさんを探していたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・つまり私と会った後の記憶が無い、と。」

「ああ。」

メイドさんはしばらく考え込んでから。

「・・・・・・思い出せないのなら大した記憶ではないのでしょう、だから忘れなさい。」

「いや、でも――――――

ィ様たちが戦ってらっしゃると思われます。」

「俺もさっきリリィの魔力を感じた。急ごうぜ。」

メイドさんと頷き合いながら走り始める。

道がわからないに加えてその部屋までは単純な距離も遠い。

道行く他のレジスタンスのメンバーにいちいち説明しなければならないと思うと気が滅入る――――――――――――――――――

「ってあれ？」

そうしてここまでの道筋を振り返ってみると、メイドさんに会って以来誰とも遭遇（そうぐう）していない。

人の気配はあるのに、まるで無人の荒野を行くが如く人の姿が無い。

「ご心配なく、手は打っておきました。」

疑問に思う俺の心をいつも通り見透かしたメイドさんの一言。

「・・・・・・・・・なにをやったんだ？」

「殺してはいません。ただしばらくの間、皆様には静かにしてもらっているだけです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無意味な追及はしない。（だってメイドさん怖いし。）

そんなわけで何事もないまま走り続けていたら前方に二つの影。

誰かは大体見当がつくが騒がれると面倒だ。

先手必勝っ！　と俺は迷わず背が高い方の人影に真空飛びひざ蹴りを放つ。

「待てっ！　仁っ！　俺だっ！！」

そこには予想通り慌てて手を振って自分だとアピールする役立たず（リュード）の盾。

俺は狙いを寸分違わずにその顔面にひざ蹴りを――――――――――――――――――――

「うぉっ！？」

しかし役立たず（リュード）の盾は小癪（こしゃく）にも俺が止める気などまったくないことを見切りギリギリのところで横に跳んで身をかわす。

「ちぃっ！？」

空（むな）しく空を切った俺の必殺のひざ蹴り。

舌打ちしながら着地するともう片方の人影は予想通りリアーナだった。

「リアーナッ！　無事で良かったっ！」

「いや明らかにそのセリフはおかしいじゃろうっ！？」

キレの良いツッコミを返すリアーナに俺は上機嫌に頷く。

「良いぞ、その調子でツッコミレベルを上げるんだっ！」

「ツッコミレベルッ！？　なんなのじゃそれはっ！？」

「とりあえず今の行動に弁明があるのなら聞いてやるぞ。」

ツッコミ育成計画発動中に無粋な声が後頭部に突き付けられる硬い感触と共に俺へ掛けられる。

「リューグッ！　良かった、無事だったんだなっ！　・・・・・・・・・・・・・・・ちっ。」

「良し。今の舌打ちが最後の言葉で良いよな。」

冷たく告げるリューグは容赦なく赤い銃の引き金を引いた。

もちろん俺の反射速度を持ってすれば引き金を引く一瞬の間に銃身をずらすことなどわけがない。

至近距離の爆風をまともに浴びながら俺はリューグと距離を取った。

「・・・・・・・・上等だ、前々からお前とはやり合ってみたかったんだ。」

「俺は別に。だってお前弱そうだし。」

挑発する俺にリューグは不敵に笑うだけ。
俺たちはどちらからともなく動きだした。

「などとやっている場合ではありません。」

動き出してから刹那未満の時間でメイドさんの手により俺とリューグは縄で縛られていた。

えっ？　なに今の動き？　見えないどころか反応できなかったんですけど。

しかもどうして亀甲縛りなんですか？

「では参りましょう。リアーナ様。そこの二人、次に騒いだら口では言えないようなことをしますのでそのつもりでいてください。」

ダメだ、メイドさんには絶対勝てない。

俺とリューグは互いの顔を見ながら思ったことがシンクロした。

第百七十九話　見つけて、そして合流！（後書き）

メイドさん、やはり最強ですね・・・・・・・・・・・・・・・

第百八十話　二人とも、急ぐぞ！（前書き）

急ぎます。

第百八十話　二人とも、急ぐぞ！

リリィたちの元へ歩いている途中（流石に縛られている状態で走れはしない。）俺は根気強くメイドさんと交渉をしていた。

「お願いしますメイドさん、逃げたり暴れたりしませんからどうかこの縄をほどいていただけないでしょうか。」

「却下します。」

取りつく島も無く即答されるが俺は諦めずに説得を試みる。

「メイド神様っ！！　なにとぞっ！　なにとぞこの私めにご慈悲(じひ)っ！！」

「お前人前で良くそんなことができるな・・・・・・・・・・」

亀甲縛りをされながら華麗にジャンピング土下座を決める俺に無粋なツッコミを入れてくる俺と同じ状況の輩(やから)が一人。

「私めの自由と引き換えにこの者の命を代価として差し出しますっ！！　それでどうにかならないでしょうかっ！！」

「なにふざけたことを言っているんだっ！」

「足りませんね、ゴミはどれだけ集めてもゴミ以上の価値にはなりません。」

「俺の扱い非道くないかっ！！！」

やかましい生け贄（リューグ）は完全無視して話は続いて行く。

「ではこの者が身に着けている物全てを売って良いですからっ！！」

「おいこらっ！　俺を無視して話を進めるなっ！！」

「ふむ・・・・・・・それなら交渉の余地はありますね。」

「あるのっ！？　つまり俺の命って身に着けているものより下なのかっ！？」

本当にやかましく騒ぐうざい奴（リューグ）に俺とメイドさんは冷たい視線を送る。

「さっきから五月蝿いぞ、子供じゃないんだからもっと空気を読め。」

「ただ役に立たないだけでなく空気も読めないとは・・・・・・・生きている価値はありませんね。」

「えっ、えっ！？　なにこれっ！？　なんで俺が責められてるのっ！？　なんなのこの扱いっ！？」

涙目になりながらなおも騒ぐ雑兵（リューグ）に俺たちは深い深い溜め息をついた。

「メイドさん、リアーナ、こんな奴放っておいてさっさとリリィたちの所へ行こう。」

「そうですね、ゴミムシ様（リューグ）を縛っている縄はその辺に繋いでおきましょう。」

「そうじゃのう・・・・・・妾も早くリリィとやらに会ってみたいからのう。」

「えっ！？　ちょっ！？　リアーナまでそんな扱いするのっ！？　待ってっ！！　お願いっ！！」

メイドさんは俺の縄をほどくと、都合良く見つかった岩の出っ張りにリューグの縄を固く結びつけた。

意外と打たれ弱いのか、今にも泣き出しそうな顔をしているリューグを見ているとS心が大いに刺激されたがここは我慢して先を急ぐことにした。

「急ぐぞ、二人とも。」

「はい。」

「わかっておる。」

二人に一声かけてから目的地へ向かい軽く走り始める。

「おいっ！！　ふりとかじゃなくて本当に置いて行くのかっ！？　鬼っ！！　悪魔っ！！　後で覚えていろよぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーっ！！！！！」

後方より洞窟内に響き渡る虚しい負け犬の遠吠えを耳に入れながら、このS心を受け止めてくれる都合の良い相手はいない者かと心の内

で思っていた。

「ここか。」

目的地の部屋の扉を蹴破って中に侵入。

「誰っ！？」

視界に入る五つの人影のうち、その一体に両足でのドロップキックで奇襲を仕掛ける。

「ぐぼぁっ！！」

綺麗に顔面に入ったドロップキックと最高に輝いている笑顔のルナール。

普通なら非難されても文句を言えない状況下で俺は更なる追撃を仕掛ける。

吹き飛んで倒れたルナールへと大きく跳んで腹に着地。

「ぴぎゅあっ！！」

そのまま全体重を乗せながら足をグリグリと動かして腹を踏み躙（にじ）る。

ルナールは悲鳴を上げているというのにその表情は苦痛には歪んでいなく、何故か輝きを増している。

スッキリしたところで離れると恍惚とした表情に幸せそうな笑顔を浮かべて息を荒げているルナールがいた。

「・・・・・・・・・ああ・・・・・・久しぶりの・・・・・・・・・良い・・・・・・」

空気に流れる小さなつぶやきを全て聞き取ることはできないが、表情同様幸せに満ちているのだけはわかった。

・・・・・・・・・・・・・・やった本人である俺が言うのもなんだが、この女本当に大丈夫か？

「でっ、だ。」

ルナールは放っておいて周りの状況を確認する。

首から上以外氷漬けになっているハクに部屋の隅にいるリリィと何故か装飾用の刃が付いていない剣を持っている理香に仰向けに倒れているガジール。

そして全員の視線はただ一点、俺に向かっていた。

・・・・・・・・・・・・・・

ｓｉｄｅリューグ

「俺の・・・・・・・・俺の存在価値は一体・・・・・・・・・・」

『気を落とさないでください、リューグ。』

フーエに慰められながら俺は壁に向かってブツブツと囁いていた。

そんなことをしても意味は無いとわかってはいたが、そうでもしないと正気を保てそうになかった。

「あいつら・・・・・・・・・いつか必ず復讐してやる・・・・・・・」

『無理でしょうね。』

フーエに断言されながらも俺は心の中で復讐の炎を燃やしていた。

第百八十話　二人とも、急ぐぞ！（後書き）

憐れなリューグ・・・・・・・・・・・・

彼に救いは訪れるのでしょうか・・・・・・・・・・

第百八十一話　説明は、終了したぜ！（前書き）

事情説明完了。

第百八十一話　説明は、終了したぜ！

「つまりこの侵入者たちは仁が探していた仲間で、こいつらも仁のことを探していてここにいるという情報を手に入れ、やってきた。というわけか。」

「そういうことだ。」

恍惚（こうこつ）のルナールは目を覚ましそうになかったので先にガジールとハクに事情を説明した。

リアーナはリューグから大体の事情を聞いていたそうだ。

あの馬鹿、意外と使い道が多いのかな。

「・・・・・・・・・・むぅ、側室とはいえなかなか美しき者たちじゃな。こ奴らを落とすとは・・・・それでこそ妾の夫じゃ。」

とかなんとか訳のわからない独り言をつぶやいていたが、この場で問いただすと命は無いという直感が働いたのでスルー。

「事情はわかった。だが仲間が心配だからと言って不法侵入をしては誤解されても仕方が無いぞ。」

解凍されて自由になったハクは炎の魔法で体を暖めながら二人に軽く苦言を漏らす。

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・反省しておりますわ・・・・・・・・」

しょんぼりとうなだれる理香とリリィ。

だが今回は全面的にこちらが悪いので俺としても掛けるべきフォローの言葉は無い。

王国に追われるレジスタンスのアジトに不法侵入したのだから、むしろこの程度で済んで良かったと思うべきだろう。

「にしてもどうしてお前らがここにいるんだ？」

「はぁっ！？」

「本気で言っていますのっ！？　仁っ！！」

「本気だとすれば救いようがありませんね。」

「仁よ・・・・・・流石の妾も今の言葉は許せぬぞ。」

素朴な疑問を投げかけただけなのに、一斉に突き刺さる非難の声と冷徹な視線。

ところでどうしてリアーナにまで責められなくちゃならないのだろう？

「そうじゃない、俺を心配してくれたのはありがたいが、他の奴らはどうした。東間たちは一緒に来なかったのか？」

東間のことだから、どうせ「君のことを信じているからだよ。」と

でも言ったのだろうが

「東間様たちは別行動中です。本来ならばここに来られるはずだったのですが、急な用ができたのでそちらに向かってもらいました。」

「「えっ？」」

メイドさんの回答に驚きの声を上げるは理香とリリィの二人。

「・・・・・・・・・・なんでお前らが一番驚いているんだ。」

「メイドさん、急用って一体何があったんですか？」

俺の疑問を堂々と無視して理香はメイドさんと会話を続ける。

「実は王家の娘がレジスタンスに捕まったという情報がありまして、実際に娘が行方不明となっているので王家の者たちは必死に捜索しています。」

「まさか東間が疑われておりますのっ！？」

「いえ、レジスタンスに捕まったという情報があるというのに東間様が捕らえられるはずはありません。東間様たちは別の用件のので王の元へ向かいました。」

「別の用件？」

「詳しくは調査中です、結果が出次第、報告させていただきます。」

女性陣の会話が続いて行くのを見ながら俺はリアーナに視線を向け

る。

リアーナは平静を装っている様に見えたが、額（ひたい）に汗を流していることを俺は見逃したりはしない。

「リアーナ？」

「うっ、うむ・・・・・・少しばかり城を空け過ぎた様じゃ。」

口にする言葉には反省の色があった。

城に帰ることに抵抗感を感じていないところを見ると――――――

「リアーナ、城へ帰るつもりか。」

険しい表情のガジールがリアーナへと問い掛ける。

「うむ・・・

まさかとは思う。

だがもしかして――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「あいつら・・・・・・まさか本気で俺のことを忘れているわけじゃない、よな・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

フーエは何も答えない。

肯定も否定もしないその沈黙は俺の心の傷を深く深くえぐりとったことにフーエが気付くことは無かった。

第百八十一話　説明は、終了したぜ！（後書き）

ハクとガジール、城に興味があるそうです。

第百八十二話　コマンド、説得だ！（前書き）

ハクとガジールは城に行って何をするつもりなのでしょうか？

第百八十二話　コマンド、説得だ！

「ハクはともかくガジール、お前城の中に入ったら絶対に暗殺を始めるだろ。」

「早まるな、今回はあくまでも敵情視察。準備も整っていないのに無意味な暗殺をするつもりはない。」

ガジールの言葉は正直胡散臭さに溢れていた。

なので必然的に城に行くのはハクということになる。

ただそうなると――――――――――――――――――――

「ガジールよ、お主何か企んでおるのではなかろうな？」

「さあな、答える義理はない。」

ガジールはリアーナの問いに対して答えをはぐらかす。

怪しさ爆発の態度ではあるが、何を企んでいるのかわからない以上、ガジールを独りで残すのは危険だった。

かといってガジールは城に行くためにわざと自分を残すのは危険だとアピールしている可能性も否定できない。

となると――――――――――――――――――――

「俺がガジールと残るから、お前らだけで城に行ってこい。」

「「ええっ！？」」

仕方なく出した妥協案に集中する驚愕と非難を含んだ声。

「仁っ！！　何故お主が残るのじゃっ！？」

「しょうがないだろ、ガジールと殺りあって勝てるのは俺かメイドさんだけなんだから。」

頭を掻きながら補足説明を始める。

「理香は槍使い、広い空間ならともかく狭い室内で高速で動き回る相手では相手勝てる可能性は低い、リリィは論外、ルナールなら勝てるかもしれないが可能性としては五分五分、メイドさんは戦う気がない。」

「でっ、でもここに二人以上残れば――――――――――――――――――――」

「確かにここに二人以上残すという選択肢もあるが、向こうで何が起こるか分からないので戦力を必要以上に分散させる事態は避けたい。」

言いながらリアーナの顔を見ると、苦渋の色を浮かべている。

やはり城で何か起こることは視野に入れておいた方が良さそうだ。

後、なにより少しくらいは女性陣から解放されて自由な時間を満喫したい。

「異論はあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙り込む女性陣。

どうやらみんな納得はしていないが反論はできないようだ。

良し、これで本当に久しぶりに羽を伸ばせる・・・・・・・・・・・・っ！

「仁、あなたの主張はわかりました。ですが一つ、肝心なことを忘れています。」

勝利と喜びを表に出さない様に噛み締めていると、メイドさんが不敵に微笑みながら発言する。

だが俺が肝心なことを忘れているだと？　俺の完璧な理論のどこに穴が――――――――――――――――――――――――

「その理論は私がガジールを抑えます。といえば簡単に崩れ去る運命にあります。」

「なっ！？」

衝撃の言葉に身体が硬直する。

メイドさんが自らの意志で戦うことを選択するだと・・・・・・・・・っ！！

確かにそれならガジールを単体で止められるのは俺だけ、という理論は崩壊する。

つまりメイドさんがガジールを止めるのならば俺が残らなければならない必然性は無くなってしまうのだ。

「馬鹿な・・・・・・・・っ！？　メイドさんっ！　自分が何を言っているのかわかっているのかっ！？」

「私にとってもこれは苦渋の決断です。しかしメイドの一人としてこれは果たさなければならない使命なのです。」

「そのために自分自身を犠牲にしようというのかっ！！　メイドさんっ！！　貴女(あなた)は間違っているっ！！」

「誤った道だとしても私自身が自らの意志で選んだ道・・・・・・・・。それを否定することは誰であろうとしてはいけないことです。」

「っ！？」

想像以上のメイドさんの悲壮(ひそう)の決意。

言葉では今のメイドさんを止めることはできないのか・・・・・・・・・・っ！？

「くっ・・・・・・・・・・俺は一体どうすれば・・・・・・・・っ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何やってるの？」

メイドさんの説得を続けようとする俺に、笑っているのか怒っているのか悲しんでいるのか呆れているのかよくわからない、複雑過ぎて描写しようも無い表情の理香が声を掛けてきた。

「コント『メイドさんの逆襲、第五章　黎明(れいめい)編』の練習だが。」

「ごめん仁、私あんたのことが理解できないわ。後、ツッコミ所が多過ぎて処理しきれない。」

本気で謝る理香に俺は大人びた笑いを漏らす。

「理香・・・・・・・・・・大人になればわかることも多いのさ・・・・・・」

「その通りです。理香様。」

「何故か判らないけど、私一生子供のままでいたいと思ったわ。」

タバコがあったのなら吸っているであろうハードボイルドな魅力に溢れた俺に理香はどこまでもどこまでも冷たーい視線を送り続けるのであった・・・・・・・・・・・・

「俺が悪かった、今回は俺もハクもここに残ることにする。だから

お前たちだけで城に行け。」

一連のやり取りを見ていたガジールからの非情なる宣告。

馬鹿なっ!?　そんなことになったら久しぶりの自由が完全に無くなってしまうっ!!

「早まるなっ!!　ガジールッ!!　城の連中はきっとお前たちのことを歓迎してくれるはずだっ!!」

「レジスタンスを歓迎する王城があったら、それは狂っているか罠のニ択しかないだろ。」

「それでも――――――――――――――――――――」

すっかりやる気を失ってしまったガジールを時間の許す限り俺は説得し続けた。

第百八十二話　コマンド、説得だ！（後書き）

グダグダと説得？　を続ける仁。

たまには自由になりたいんですね・・・・・・・・

第百八十三話　どうして、こうなった！（前書き）

さて、残るメンバーが決まったわけですが――――――――――――――

第百八十三話　どうして、こうなった！

「では行って参ります。」

「行ってらっしゃ～い。」

深く生い茂った森が日の光を遮っているアジト出入り口にて俺とルナールの二人は城へ旅立つメイドさんたちを見送っていた。

ここから城までの具体的な距離はわからないが、少なくとも四、五日以内には戻ってくるとか。

えっ？　なんで俺とルナールが残ることになったかって？

・・・

「二人とも一旦落ちついた方が良いですわ。」

「むっ。お主、妾とキャラがかぶってはおらぬか？」

「あら、そうだとすれば貴女の方が私をマネたということになりますわよ。」

「馬鹿を言うで無い。妾が他の者をマネる訳が無かろう。」

女三人寄れば姦(かしま)しい。とはよく言ったものだな・・・・・・・

「・・・・・・仲が良いのは大変喜ばしいことですが、そろそろ出発いたします。」

騒ぎ始める理香たちをメイドさんが軽く諫(いさ)める。

「・・・・・・・・・・・・五月蝿い奴らだ。」

「暗くなるよりもずっとマシだ。」

ぼやくガジールと微笑(ほほえ)むハク。

そんな感じでしばらくグダグダとしていたメイドさんたちは出発した。

見えなくなるまで見送った後、俺たちはアジト内に戻りリアーナと共にいた部屋に向かう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

途中、特に会話も無くただ歩き続けていた。

嫌な空気と言うわけではないが、良い空気と言うわけでもない微妙な沈黙。

話すべき話題も無く、かといって理不尽に嬲(なぶ)るのもさっきやったばかりだから気が乗らない。

「仁。」

「なんだ？」

珍しくルナールの方から俺に話しかけてきた。

声の音程や口調から察すると明るい話題ではなさそうだが――――――――――――――――――――――――

「お前は勇者なのか？」

「違う。」

訳のわからないことを突然訊いてきたルナールに迷うことなく即答する。

「だが理香や東間は勇者なのだろう。ならばお前も――――――――――――――――――――――――」

「冗談じゃない、俺は巻き込まれただけだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それなら」

納得していない暗い表情のまま更にルナールは問いかけてきた。

「それならお前は理香や東間が魔王様へ戦いを挑んだ時、どうするというのだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど。

確かにそれは避けられない問題だな。

「・・・・・・・・・・・・俺は理香や東間に幸せになってほしい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で続きを促すルナール。

「異世界だの平和だのは俺にとってはどうでもいい。俺はあの二人の邪魔をする者を排除するだけだ。例えそれが――――――――――――――――――――――――」

一呼吸置いてからはっきりと断言する。

「お前やリリィだったとしても。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうか。なら

その時、私は魔王軍として・・・・・・お前たちと・・・戦うだけだ。」

重苦しい沈黙が周辺を支配する。

ルナールは暗い顔をしたまま何も言ってこない。

口に出すことは無いが俺はルナールのことを気に入っている。

できれば戦いたくないと思っている自分がいる――――――――――――――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ。」

我ながら本当に甘くなったものだ。

自嘲(じちょう)しながら何気なく上を見る。

そこには空など当然なく洞窟の天井に立っている二振りの刀を持った洋服ミニスカのスパッツをはいた少女だけがいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

嫌悪を隠そうともしない敵意に溢れたその視線は並みの肉食獣なら百八十度後方に逃げ出すほど鋭い。

何よりも俺とルナールがその気配にまったく気付けなかった。

強い。

現時点でそれだけは確かな情報と言える。

「・・・・・・・・・何者だ？」

目線だけをルナールに移す少女。

だが俺の時とは違い少女の目はルナールのことを路傍の石ころ程度にしか思っていない、無機質な眼差しだった。

「あんたがルナールね。これは魔王陛下のご命令よ。『異世界から召喚された者たちを全て殺せ。』ってね。」

「なにっ！？」

「だから――――――

「今のに反応できるんだ。流石と言えばいいのかな？」

「お褒めにあずかり光栄でございますお嬢様。ついでに一つ訊いておきますが――――――――――――――――――」

血を流す手を握りしめながら少女に笑いかける。

「要するに殺されたいと言っているのですね？」

「――――――――――――――――――――――――――はっ！　上等・・・・・・・・っ！」

俺と少女は一旦距離を取る。

素手でどこまで食い付けるか心配ではあったが、逃がしてくれそうもない。

俺は血が流れている手の平を視界に入れながら少女と睨み合っていた。

ｓｉｄｅヴェンリス

魔王城、謁見の間に怒りに我を忘れそうな私は無礼を承知で入って行った。

「陛下っ！！　あの者に勇者討伐を命じたというのは本当ですかっ！？」

「騒がしいぞヴェンリス。」

「答えてくださいっ！！」

陛下は私を一瞥（いちべつ）すると溜め息をついた。

「あの女の強い要望だ。勇者共もこれから先、目障（めざわ）りになる可能性もある以上、野放しにはできぬ。」

「ですがリリィ様も勇者たちと共に行動しているのですよっ！！」

「捨て置け。あの女に殺される程度ならば我が後継者としては不足もいいところだ。」

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

あと少しで陛下に刃を向けそうになったが、ギリギリのところで私は自制に成功した。

「・・・・・・・・・・失礼します。」

私は謁見の間を後にする。

陛下が、お父様がそういうつもりならば私にも考えがある。

私は愛竜の元へ歩を進めた。

第百八十三話　どうして、こうなった！（後書き）

甘い展開は結構やったので多少シリアスにしてみました。

というわけで次回バトルスタートッ！！

第百八十四話　あ～、なんとなくわかった！（前書き）

少女の実力は如何ほどでしょうか。

第百八十四話　あ～、なんとなくわかった！

この女は強い。

マキナと比べなければ。

それが現在戦っている少女に対して俺が抱いた感想だった。

「威勢が良いのは口だけなのっ！」

「ちぃっ！」

いつも思うが繰り出される双刀の嵐をどうにか捌(さば)いては反撃を繰り出している現状で呑気に感想なんか思い浮かべている俺はただの馬鹿なのだろう。

二振りの刀、片方は敵を切り裂くための長刀で斬撃の射程が長く、もう片方は小太刀だと思われる短刀でこちらからの打撃はほとんど防がれている。

攻撃用の長刀と防御用の短刀。

リーチの違う二つの武器を自身の手足の如く動かすその動きは傍観(ぼうかん)しているだけなら美しいと感じたかもしれない。

身のこなし、足運び、全てが見事としか言えない磨き抜かれた武。

だがどうしてか。

この女の動きに俺は見覚えがある様な気がしてならない――――――――――――――

「考え事なんて随分と余裕の様みたいだねっ！」

薙ぎ払われる長刀を寸前で避け、回転しながらしゃがんで少女の足を払う。

「よっと。」

少女は足を払われる寸前で空中に跳ぶ。

俺はそのまま回転の勢いを殺さずに両手を使って跳ねて少女の腹に跳び蹴りを入れる。

金属音と蹴りの手応えから小太刀に蹴りが防がれたことを察する俺に少女は高速で長刀を振り下ろす。

避けられない速度であることを悟った俺は右腕で長刀を受け止める。

刃が皮を裂き肉を切り骨まで到達する感触の中、血飛沫が少女の視界を曇らせる。

「くっ！」

「せぇのっ！！」

掛け声を上げながら握りしめた左手で少女の顔に一発入れる。

長刀を手放しながら吹き飛び転がる少女。

しかし――――――――――――――――――――――――――――

「初対面の女の顔を殴るなんて・・・・・・・野蛮人だね。」

軽口を聞きながらすぐさま体勢を立て直す。

入ったと思った一発だったが、少女は命中する直前で俺の腹を蹴り自ら後ろに跳んで避けていた。

全力で蹴られた腹がかなり痛むが、そのおかげで武器は手に入れた。

右腕を切断しようとしていた長刀を左手で取り、そのまま左手で構える。

思っていた以上に右手の傷は深く、動かすことができない。

「まさか武器を手に入れた、だからあたしに勝てるだなんて思っていないよね。」

俺を見下したように少女は鼻で笑った。

「無理無理、片手だけであたしに勝とうなんてそんなの不可能に決まってるじゃん。」

「ならお前は俺が両手で武器持ちなら勝てると思っているのか？」

「はぁ？　あたしが言ってるのはあんたなんかじゃあたしには絶対勝てないってことよっ！」

会話から判断するに、どうやらこの少女は俺のことを知っているみたいだ。

そしてその上で俺に対して強い対抗心を抱いている。

・・・・・・・・・どこの誰だか知らないが、比べるのなら俺じゃなくて東間か理香にしてほしいもんだ。

「とはいえこの程度の実力じゃあな・・・・・・ガキの頃の俺の方が強かったんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・なんですって・・・・・」

少女は唇を強く噛み締める。

「あたしはあんたより強い。あたしはあんたよりも全てにおいて優れている。優れてなきゃいけないんだ・・・・・・・・っ！！」

少女は短刀を握りしめながら小さな声でつぶやいた。

「だから――――――――――――――――――――――――」

少女の短刀に魔力が集中する。

魔力は刃となり桃色の刀身を造り上げ、少女は腰から長刀の鞘（さや）を外し刃をその中に入れて――――――――――――――――

ってこの技はっ！？

「あんたはいらないっ！！　いちゃいけないんだっ！！」

鞘を外した魔力の刃による居合いの構え。

この技は俺の父親が得意とした必殺技の一つ。

発動阻止ができないことを悟った俺にできたことは――

「魔刃王牙斬(まじんおうがざん)っ！！」

視認できないほどの速さで鞘から抜かれた刃に刀身は付いていない。

この技はまさに一撃必殺。

刀身の消失と引き換えに切断したという結果のみを持つ斬撃を放つ。

防御不能、回避不可の究極の一撃。

距離も障害物の有無も関係ない。

強(し)いて弱点を挙げるとすれば込めた魔力の量によって切断できるもののレベルが決まるということだけだ。

この技による切断はある一つの方法以外ではどうしようもない。

無論――

「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

発動した方もただでは済まない。

「はぁ・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・」

地面に膝をつきながら少女は苦しげに息を吐く。

敵が切断されても生きている様な不死の存在でもない限り、一撃で仕留めることのできるこの技のリスクは半端ではない。

全身を襲う虚脱感(きょだつかん)に全細胞が一斉に死滅するかのような激痛。

込めた魔力の量に関わらず魔力も体力もほぼ尽きる。

それでも勝利を確信している少女の顔には自然と笑みが浮かんでいる。

本当に、滑稽(こっけい)としか言いようのない姿だ。

「やれやれ・・・・・・・・無理し過ぎなんだよ。」

「っ！？」

少女の顔が驚愕(きょうがく)に変わる。

「そ・・・・・・・・・・・んな・・・・・・・・・・」

殺したはずの俺が生きていることが不思議で仕方無いらしい。

先ほども言ったがこの技は俺の父親の得意技の一つ。

ならば当然、俺はこの技を習得しているしたった一つの切断を回避

する方法も知っている。

単純に同じ技をぶつけて相殺すればいいだけだ。

とはいえそのおかげで体力魔力は底をつき、咄嗟（とっさ）のことだったので相殺しきれず全身ボロボロで右腕は千切れかけている。

まあ、こいつが使ったあの技が未完成だったからこの程度で済んだと幸運に思うべきなのかもしれないが。

さてと――――――――――――――――――――――――

「殺すか。」

何気なくつぶやいた言葉に少女の体がビクッと震えた。

ｓｉｄｅ？？？

どこかの国のどこかの荒野。

「あら・・・・・・・・・・・・・？」

「どうした？」

普通の様で普通で無い夫婦がいた。

「大変よあなた。あの子の使っていたマグカップにヒビが入っちゃったわ。」

「おお、それは大変だな。また新しいのを買ってやらないと。」

娘には甘い親バカな二人。

「それともう一つ、随分前に粉々に壊れちゃった仁のマグカップはどうしましょうか？」

妻の問いかけに夫は夜空を見上げながら――――――――――――――

「・・・・・・・・たぶん買ってもすぐに粉々になるだろうから、放っておこう。」

「・・・・・・・そうね。」

息子の苦労を見透かしたように夫婦は星を眺めた。

第百八十四話　あ～、なんとなくわかった！（後書き）

仁はやせ我慢で立っています。

第百八十五話　やっぱり、そうだったか！（前書き）

仁、久しぶりの外道行為。

第百八十五話　やっぱり、そうだったか！

「・・・・・・・・・・っ・・・・・・・・・」

全身に力が入らないのか、立ち上がろうとした少女は地面に倒れる。

そのまま這いずる様に俺から離れようとする少女を逃さず無言で近づき――――――――――――――――

その後頭部を踏み付けた。

「がっ！」

「どうやらお前は、あの技は同じ技ををぶつけると相殺できることを知らなかったらしいな。」

だがあの短時間であれほどの魔力を刃に込められた少女の才能は感服する。

「遺言があるのなら聞いてやるぞ。」

グリグリとタバコの火を消すがごとく容赦なく少女の頭を踏みにじる。

「どうした？　遺言がないくらい満足な一生を送ってきたのか？」

口を地面に押し付けられている少女が言葉を発することなどできない。

それがわかった上で俺は不敵に笑いながら少女に尋ねている。

「遺言がないのならこのまま窒息死させてやるよ。」

踏みつける足に全体重を乗せる。

対して少女は抵抗の意思はあっても技の反動によってもがくことすら不可能。

この辺は魔力体力が尽きても実戦をさせられ続けた俺との経験の差であろう。

「人様の命を狙ったんだ。当然、自分が死ぬ覚悟くらいはできていたんだろ?」

少女の敵意が徐々に薄れていくのがわかる。

抵抗の意思がなくなったのではなく、単純に意識が遠のいているだけだが。

まあ、どっちでもいいことだ。

やがて完全に動きを止める少女。

「・・・・・・・・・・・・ようやく大人しくなったか。」

足を離しながら倒れている少女を観察する。

一見、死んでいるようにしか見えない（実際、殺そうとしていたわけだが。）少女に俺は――――――――――――――――

「でっ、もちろん説明してくれるよな。父親。」

動かない少女に声を掛けると、少女の体が浮き上がりこちらを向いた。

『気付いていたのか。』

俺を見る少女の眼には意識の光はなくその口から出てくるのは父親の声。

やはり少女に意識は残っていない。が、かろうじて息はしている。

『あと少し足を離すのが遅かったらその足を切り取っていたところだぞ。』

「やかましい。『命を狙ってきた相手なら親兄弟とて容赦はするな。』と教えたのは父親だろ。」

『それもそうだな。』

少女が笑みを浮かべる。

「ったく、さっさと説明しろ。この少女は何者だ?」

『んっ?　俺たちの娘。つまりお前の妹だが?』

当たり前のことを聞くな。と言外に告げているように思える父親に溜め息をつくしかなかった俺。

「わかった、質問を変える。この餓鬼が俺の妹だとしてどうして俺の命を狙ったんだ?」

『そりゃあ、そういう風に教育したんだから当然だろう。』

この時がいつにも増して父親に対して殺意が湧いた瞬間だったことを心に刻んでおく。

「おい、父親。今すぐここに来い、ぶっ殺してやる。」

『はっはっはっ。できもしない大口を叩くところは成長していないな。』

少女の手が俺の頭を撫でる。

「捻じり切っていいか?」

『大切な愛娘にそんなことをしたらお前を殺す。』

理不尽さを感じながらも父親の操る少女に今の俺が勝てるはずもないのでここはされるがまま。

しばらくすると満足したのか、少女（父親か。）は俺の頭から手を離す。

『こういうところは母親に似て素直で可愛い奴だな。お父さん、好きだぞ。』

「いちいち息子を脅すような父親のセリフじゃないな。」

『はっはっはっ。』

再び笑った父親は不意に真剣な（少女の顔だが。）表情を作る。

『・・・・・本当のことを言うと、この子にはもっと成長してからお前と会ってほしかった。』

「？　どういうことだ、こいつは父親の刺客じゃなかったのか？」

「その通りだが少し違う。」

父親はゆっくりと息を吐いた。

『この子は俺たちが大事に育てた。お前の時の失敗を生かし無茶をさせずにじっくりと基礎から教え込んだんだ・・・・・・・』

「おい待て父親。今の発言に聞き捨てならない部分があったぞっ！」

『だがそのせいで自分よりも強いのは俺と母さんの二人だけだと思い込むようになってしまったんだ・・・・・』

俺の抗議の声を完全に無視して話を続ける父親。

『世界は広く、自分よりも強い者がたくさんいることをほとんど学ばずに外に出してしまった。一応、それでも魔王軍の精鋭（せいえい）には気を付けるように教えることはできたんだが――――――――――――――――」

「更に待て。どうして父親が魔王軍のことを知っているんだ。」

『なによりお前のことを教えずに育ててしまってな。そのせいでお前のことをどうやら目障りだと思うようになってしまったらしく、そっちの世界に行ってしまったんだ。』

「わかった。とりあえず一つだけ答えてくれ。どうして俺のことを知っただけでそこまで恨むんだ？」

『年頃の娘の気持ちなど父親にわかるわけがないだろう。』

「無責任だっ！！！」

『はっはっはっ。』

三度笑い声をあげる父親。

そんな父親の様子を見ながら帰ったら絶対に叩きのめすことを心に誓う俺であった。

『ああ、それともう一つ言い忘れていたことがあったんだが。』

「なんだ。」

もうこれ以上会話したくないのだが、無視するとそれはそれで面倒なので訊いておく。

『この子は一度自分よりも強いことを認めると犬のように従順に懐(なつ)くから、叩き潰すなら圧倒的な力の差を見せつけた方がより懐くぞ。』

「あんた娘が大事なのかそうでないのかどっちなんだっ！！！」

『はっはっはっ。特に兄の存在に密(ひそ)かに憧(あこが)れているようだから、頑張るんだぞ。』

「五月蝿いっ！！　黙らないと訴えるぞっ！！　そして紅のスーツに身を包んだ天才検事に担当してもらうぞっ！！」

『なら俺は青いスーツの恐怖のツッコミ男に弁護を依頼するか。』

「くっ・・・・・そっ！　それじゃあこちらに勝ち目はないか・・・・・っ！」

『はっはっはっ。そんなだから妹一人教育できないダメダメな息子なんだ。』

「うがぁぁぁぁっ！！　本気で殴りてぇぇぇぇっ！！」

父親の言葉に俺は頭を抱えながら叫んだ。

第百八十五話　やっぱり、そうだったか！（後書き）

流石父親、全てにおいて仁を上回っております。

それと活動報告の方で、マスコットキャラ決定？　なのでしょうか・・・・・・・・・

第百八十六話　勝てる気が、しねえ！（前書き）

父親の戦闘能力はどれくらいなんでしょうね。

第百八十六話　勝てる気が、しねえ！

『ところで仁、そこに寝ている少女はお前の女か？』

「違う。アイツはリリィの付き人だ。」

下世話（げせわ）な勘繰（かんぐ）りをしてくる父親に苛立ちを含めた返答をする。

『ほほぉ・・・・・・リリィ、ね。どうやらお前は修羅の道（ハーレムエンド）を目指して頑張っているようだな。』

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる父親。

「ゲームじゃないんだ。ハーレムなんてできるわけないだろ。」

我が父親ながらどうしてこういう思考ができるのか理解に苦しむ。

『しかしハーレムは大変だぞ。好感度のバランスが崩れるとあっという間に死亡確定するからな。』

「だから俺はハーレムなんて目指していないって言ってるだろっ！」

『まっ、俺みたいに数多くの女の中から母さんを選ぶのも一つの道だとは思うがなっ！』

「選んだんじゃなくて母親にすがりついたんだろ・・・・・・・・・・」

朗（ほが）らかに笑う父親に呆れた声を出す。

『むっ、失礼なことを言うな。こう見えても俺は昔はモテモテだったんだぞ。』

プライドを傷つけられたのか不機嫌そうに反論してくる。

「自分でモテモテっていう奴が実際にモテたことなんてあるのか？」

『嘘じゃない。昔の俺は一万人の女性たちに囲まれていたんだからな。』

「それはハーレムというよりホラーの領域だぞ・・・・・・・・・っ！」

実際にその図を想像してみると戦慄が走った。

少なくとも俺はそんな状況御免こうむりたい。

「・・・・・・・・・んっ・・・・・・・・ぅぅっ・・・・・・・・」

唐突に少女の口から父親ではない言葉が漏れる。

『おや、どうやら意識が覚醒し始めたみたいだな。』

「おい、父親。ここでそいつの意識が戻ったら殺し合いを再開することになるんだが。」

『あ～・・・・・・・・・・それはちょっと困ったな。今のお前じゃこの子に殺られる可能性が高いし。』

確かに。

少女は魔力と体力を使いきっているとはいえ、寝ている間にある程度回復しているはずだ。

対する俺は体中傷だらけな上にほとんどの魔力と体力を使い切ってしまった。

この状況下で少女が俺に負けることはほぼない。

『ふぅ・・・・・・・・・仕方ない。俺はこの子を離れた場所に転移させる。お前はその間にどこかに逃げろ。』

「・・・・・・・・・それしかなさそうだな。」

メイドさんたちを待っている時間はない。

それに狙われているのが俺だけならばあいつらを巻き込むわけにもいかない。

・・・・・・・・・別にこれで言い訳付きの自由を獲得できると思ってなんかいないからな。

『転移する前に右腕を出せ。』

「？　ああ。」

言われるがまま右腕を差し出そうとして動かないことに気付いた。

『やれやれ・・・・・・・これはサービスだぞ。』

父親は動かない俺の右腕に触れて何かを唱える。

と、瞬時に右腕だけ全ての傷が消失した。

「・・・・・・・・・・・・相変わらずの化物ぶりだな。」

試しに右腕を動かしてみると痛みもなく今まで以上にスムーズに動く。

「どうせなら全身の傷を治してほしいんだが。」

『甘ったれるな、クソガキ。』

予想通りの返答をいただいた俺は黙って父親から離れる。

『じゃあな、生きていたら実体で会おう。』

「俺が殺すまで元気でいろよ。父親。」

『はっはっはっ。』

笑いながら父親――――――――――――――――――――少女の体がかき消えた。

無詠唱での空間転移。

それも自分の体ではない、異世界にいる人間を操作してだ。

「・・・・・・・・・・・・・・いつになっても勝てる気がしない

化物だな。」

つぶやいてからルナールの元へ近づく。

脈を確認してみると正常に動いているのでしばらくすれば目を覚ますことだろう。

グズグズしているとあの少女がまた来るかもしれない。

俺はレジスタンスのメンバーにメイドさんたちへ伝言を頼もうとするが――――――――――――

「・・・・・・誰もいないな。」

周囲の部屋からは人の気配を感じない。

派手に暴れていたのに誰も出てこないからおかしいとは思ったが・・・・・・

「そういえば、ハクの奴がメンバーは大広間にいるとか言っていたな。」

適当にそれらしい部屋を探し回ると中に人の気配を感じる大きめの扉を見つけた。

「すみませ～ん。ちょっといいですか～。」

挨拶(あいさつ)しながらノックはせずに扉を開ける。

「メイド神様に聖なる祈りをぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーー

っ！！！」

『聖なる祈りをぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーっ！！！』

音を立てないように静かに扉を閉め、天井を見上げながら足音を立てずに立ち去る。

「今日も良い天気だ、明日もきっと良い天気になるだろう。」

見えるはずの無い青い空を見上げつつ、せめてこれが一時の洗脳であることを祈りながら俺はまた一歩大人の階段を上ったのだった。

「おいこらぁっ！！！　お前わざと俺のことを無視してるだろっ！！！！」

大きな声に振り向けば泣き顔ギリギリのリューグがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。そういえば忘れてたな。」

「忘れるなっ！！　そしていい加減この縄を解(ほど)けっ！！」

「あいつ名前なんて言うんだろうな・・・・・・・・・・・」

「はぁっ！？　訳のわからないことを言ってないでさっさと解けっ！！　ああもうっ、お願いしますから解いてくださいっ！！！」

騒ぎ立てるリューグを面白いから放置しつつ俺は妹だという少女のことを思い浮かべた。

第百八十六話　勝てる気が、しねえ！（後書き）

修羅の道と書いてハーレムエンドと読みます。

まさに読んで字の如しですね。

第百八十七話　よし、生け贄確保！（前書き）

リューグには強く生きてほしいですね・・・・・・・・・

第百八十七話　よし、生け贄確保！

「ほれ、解(ほど)けたぞ。」

「ったく、やっと自由になれたか・・・・・・・・」

亀甲縛りのまま岩に繋がれて放置されていたリューグを俺は大いなる慈愛の心で解放してやった。

自由になった身体で肩を回しながらリューグは溜め息をつく。

「それにしても律儀(りちぎ)に縛られ続けるなんて・・・・・・・お前、そっち系の趣味でもあるのか？」

「馬鹿を言うな。俺は健全なノーマルだ。お前らが非情にも縛られて動けない俺を放置しただけだろうが。」

会話を続けながら思いきり背伸びをするリューグ。

「じゃあなんでフーエに頼んで縄を切ってもらわなかったんだ？アイツ自由に動けるはずだろ。」

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

気持ち良くうなりながら背伸びしていたリューグが固まる。

ああ・・・・・・さてはこいつ――――――――――――――――――――

「気付かなかったのか。」

「――――――――――――――――――――――――そっ、そんなことはないぞっ!!　気付いていたさっ！　もちろんっ!!」

ダラダラと目に見えて嫌な汗をかき始めたリューグに俺は失笑を漏らした。

「へぇ、じゃあどうして縄を切らなかったんだ？」

「そっ、それは・・・・・・・・・・・・・・・」

予想通り言葉に詰まる憐れなリューグ。

さぁて、こいつどんな言い訳をするつもりなのかな・・・・・・・・・？

「趣味だっ!!!」

洞窟中に響き渡ったのではないかと思うほど大きな声でリューグは叫んだ。

突如、リューグの頭上から黒い影が奇襲を仕掛けてきた。

「うぉっ!?」

慌てて後ろに下がるリューグと俺の間に一つの影が姿を現す。

とはいっても現在この洞窟内で行動できる人物はあと一人しかいないが。

「ルナールッ！！　お前何しやがるっ！！」

声を張り上げるリューグにルナールは敵対の視線を向け、俺をかばうように立ち塞がる。

「――――――――――――――――――――渡さない・・・・・・・・・っ！」

「はっ？　なんて言ったんだ？」

小さなルナールのつぶやきを聞き取れなかったリューグが耳を寄せながら問うと。

「仁にいたぶってもらうのは私だっ！！　お前なんかにその座は渡さないっ！！」

「死んでもいるかっ！！！！」

「死ぬほど痛めつけてもらうつもりか・・・・・・・・・・・っ！！」

「やられるならお前だけやられていろっ！！！」

どうやらリューグの発言が俺にいじめてほしいという懇願（こんがん）に聞こえた様だ。

「くっ――――――――――――――――くっくっくっ・・・・・・・・・・」

リューグとルナールの言い争いを見ていると自然と口から含み笑いが漏れ出した。

「てめぇっ！！　なに笑っていやがんだっ！！」

「いや、悪い・・・・・・・・・・・・」

謝罪の言葉と一緒に含み笑いを止める。

とにかく今は一刻も早くこの場を離れる必要がある。

「二人とも、今すぐ出発するぞ。」

「なにっ？」

「仁っ！！　またお前は逃げ出すつもりかっ！！」

疑問符を浮かべるリューグと俺を責めるルナール。

二人の反応は予想の範疇（はんちゅう）だったので驚くに値しないが、一から説明するのも面倒だし時間も無い。

「端的に説明すると、俺の妹が俺の命を狙っているから一刻も早くこの場を離れる必要があるんだ。」

「・・・・・・・・・すまん、意味がわからないんだが。いくつか質問しても良いか？」

「却下。リューグ、さっきの発言を忘れてほしいのならどうすればいいのかわかっているはずだよな？」

「うぐっ！？」

リューグ陥落、後はルナールだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・仁、もしかしてそれはさっきの――――――――――――――」

「ああ、魔王様の命令だとか言っていた女だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

心身ともに複雑なことが容易にわかるルナールの顔。

魔王陛下直々のご命令ならば自分に逆らう権利はないとでも思っているのだろう。

「どうする？　たぶんアイツの方がお前よりも遥かに強い。リリィの護衛に行くつもりなら止めないが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・私も行く。奴には借りがある。」

よし、これでこの場を離れてもルナールが事情を説明してくれるはずだし、いざとなった時の生け贄も確保した。

本当は巻き込むつもりは無かったんだが、保険は掛けておいて損は無い。

「それじゃあ、逃げますか。」

アイツも魔力回復のために休んでいるはず。

その間に俺も魔力を回復させればいい。

こうして俺たちの（たぶん短い）逃避行が始まった。

ｓｉｄｅ???

「仁・・・・・・仁・・・・・・・・・仁、仁、仁っ!!」

私は近くにあった大木を蹴り倒した。

いつ、どうやってここに来たのかは分からないが、気付いた時には私は見覚えの無い森の中で倒れていた。

覚えているのは頭に残っている感触。

踏みつけられ、呼吸することもできなかった屈辱。

「殺してやる殺してやる殺してやる・・・・・・・・・・・・・・・っ!」

倒れた大木を踏み砕いても気分は晴れない。

私の気分が晴れるのは無様に倒れた奴の頭を踏み砕いた時だけだ・・・・・・っ!!

一通り周囲の木々を壊した私は奴の居場所を探るために奴の魔力を探査し始めた。

第百八十七話　よし、生け贄確保！（後書き）

自然環境に八つ当たりするところは兄妹ですね。

第百八十八話　ありえねぇ、何だこの暑さは！（前書き）

考えてみたら、仁って逃亡してばかりですね。

第百八十八話　ありえねぇ、何だこの暑さは！

さんさんと空高くにあり地上全てを照らしている太陽は雲一つない青空を支配するかの如く輝いている。

地上の生物は皆全て太陽の恵み合ってこそ生き長らえているのだから、空の支配者と言うよりも地上の支配者と呼んだ方がふさわしいかもしれないが。

いずれにしろ、太陽は地上全てを平等に照らしている。

その姿はまさに慈愛の心を持ってあまねく全ての生物を己が光で包みこまんとする神の御手（みわざ）にも思えるほどだ。

なるほど、神話や伝説で太陽に関する神が多いのも頷ける。

なぜ急にそんなことを言うのかって？

それは――――――――――――――――――――――――――――

「なんで俺たちが砂漠を歩いているんだぁぁぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！！」

・・・・・・・・・我慢しきれなくなったリューグの叫びの通りだ。

「砂漠じゃない、ここは砂丘（さきゅう）だ。」

「知らねえよそんなことっ！！　というかお前どうしてここが砂丘だって知っているんだよっ！！」

「ここに書いてある。」

俺は手に持っていた本をリューグに見せる。

「『一度は行ってみたいルヒナの観光地特集』っ！？　お前いつの間にそんなもの手に入れてたんだっ！？」

「レジスタンスのアジトに置いてあった。」

「盗品かよっ！！」

「失礼な。無許可でもらってきただけだ。」

「それを盗品って呼ぶんだよっ！！！」

暑さゆえにか、いつになくハイテンションなリューグ。

暑苦しい上にうっとおしいが、下手に言い返すと更に暑苦しくなる危険性を含んでいたのでグッと我慢。

「とにかくそんなことはどうでもいいっ！！　俺はどうして砂漠を歩いているのか訊いているんだっ！！！」

「砂丘だって。」

「やかましいっ！！！！」

本当にイライラしているらしく、リューグはいつものツッコミではなく単なる八つ当たりを仕掛けてくる。

確かに俺もこれは想定外の事態だったのでちょっと焦っている。

レジスタンスのアジトを出発した俺たちはメイドさんたちと反対側の方向へ進み、森から出た途端、目の前に砂丘が広がっていた。

ガイドブックにはここは地下にある鉱石が発している特殊な磁場が展開されており、それが自然に影響して長い時間を掛けて周囲の環境を砂に変えてしまったそうだ。

それって砂丘と呼べるのかとも思うが、ガイドブックには砂丘と書いてるんだから納得するしかない。

「あぁぁぁぁぁぁ～、熱い暑い厚い篤いアツイあついっ！！！！」

ろくな準備も整えずにこの広大な砂丘を越えようとしたこと自体が間違いだった。

食料や水はもちろん無く、タオルなど身体を拭く物も、日陰を作る物も無い。

後、着ている服は俺は黒い服でルナールは黒装束、リューグはカジュアルな服ににコートにマフラー装着。（ただのアホだ。）

体感温度は四十度越え、訓練を受けていてもかなりキツイ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな中、暑さを誤魔化すためにわめき散らすリューグとは対照的にルナールは静かに歩いている。

騒いでいると更に暑くなることを馬鹿と違って理解している証拠だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ボタボタと大量の汗を流しながら目が据わっている様に見えるのはたぶん俺の気のせい。

「・・・・・・・・・・・・ああ、その川を渡れば楽園があるの・・・・・・・？」

幻覚を見ている様な発言をしている様な気がするのも俺の気のせい。

「あはははは、ここは涼しくて気持ち良いんだね～。」

壊れた様に棒読み口調になっているのも俺の気のせい――――――――――――――――――――

「なわけないっ！！　ルナールッ！　大丈夫かっ！！」

「あはははははははははは。」

「寝るなっ！！　寝たら死ぬぞっ！！」

今にも意識がどこかに飛びそうなルナールの頬を連続ビンタする。

小気味の良い音を立ててルナールの頬が腫れて行くがルナールは目を回したまま。

「リューグッ！　氷だっ！　氷を出せっ！」

「ああっ！？　そんなもの持っていたってとっくに溶けてるぞっ！！」

「お前の青い銃は氷を撃ち出せるんだろっ！！　それを使えば良いだけだろうっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっ。」

リューグ硬直。

最近思うんだがこいつ本当にただの馬鹿なんじゃないだろうか？

「わかった。ちょっと待ってろ。」

「さっさとしろこの馬鹿がっ！！」

思わず殴り倒したくなる衝動を抑えてリューグが氷を出すまでの間、俺はルナールの頬を叩き続けた。

「・・・・・・・・・・うっ、うぅぅ・・・・・・・・・・」

頬を叩き続けているとうめき声を上げるルナール。

「ルナールッ！！　目覚めたのかっ！！」

結構、本気で心配していたのでほっと胸を撫で下ろす。

と同時に頬を叩く手を停止させると――――――――――――――――――――

「もっ、もっと強く、激しく・・・・・・・・・・・・・・っ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

数秒前まで心配していた俺が馬鹿に思えたので俺は本気の一発（グーで。）をルナールの頭に打ち込んだ。

第百八十八話　ありえねぇ、何だこの暑さは！（後書き）

何の用意も無しに砂漠に足を踏み入れないでください。

冗談抜きで死にますから。

第百八十九話　肉だ、水分だ！（前書き）

なんで生きてるんだこいつら。

第百八十九話　肉だ、水分だ！

広大な砂丘をさまよい続けて早四日。

目印一つない砂だけの世界で食料、水の補給無しに歩き続けるのは本当に厳しい。（リューグの氷は冷やすことはできるものの、口の中に入れると体内が凍りついてしまうそうだ。）

・・・・・・・・・・というよりなんで生きているんだろうな俺たち。

俺は断食に慣れているからまだしばらくは大丈夫だが――――――――――――

「俺か？　ちょっと特殊な家庭で育ったからな、餓(う)えと渇(かわ)きには慣れている。」

意外な所に俺とリューグに共通点が存在した。

どうやらこいつも親には苦労させられているみたいだな・・・・・・

「・・・・・・・・・・ああ、この空腹感も咽喉の渇きも全て仁からのご褒美・・・ああぁぁ・・・・・」

おかしな幻術でも掛けられている憐れな妄想女は一人にするとどこに行くのかわかったものじゃないのでしっかりと手を握って引きずって行く。

しかし流石にこれ以上この状況が続くのは好ましくない。

いくら慣れているといっても限界は存在するし、この暑さではいつ倒れてもおかしくない。

ルナールは既に六回ぶっ倒れて、二回目までは普通に運んでいたのだが面倒くさくなったので引きずって行くことにした。

にしてもガイドブックではそろそろ砂丘を抜けていてもおかしくないはずの距離は歩いたはずなんだが・・・・・・・

「・・・・・・おい、仁。何かいるぞ。」

警戒心を含んだ声の持主であるリューグの視線を追ってみると、確かに砂煙を上げながら砂の中を何かが高速で移動している。

俺たちの近くまで移動してきた何かは一旦、砂の中深くに潜ってから一気に飛び出す。

砂の雨が目に入らない様に目を細めながらその姿を確認すると――

――――――――――――――

「・・・・おお・・・・・・・・」

全長十メートルほどの金色の長い体。

顔らしき部分には三人くらいならまとめて飲み込めるほどの大きな丸口。

退化しているのか目らしき部分は存在しない代わりに鼻の様な大きな穴が二つ。

「デザートワームだ。」

この魔物の正体を知っているらしいリューグの冷静な声。

「仁、気を付けろ。こいつは――――――――――――――――――――」

だが耳に入ってきた声に俺は注意を向けたりしない。

いや、今の俺は誰の声だろうと（一部例外有り）気にも留めなかっただろう。

だって目の前にこんな獲物がいるんだから。

俺の口から唾液（だえき）が垂れ落ちる。

久しぶり、久しぶりの――――――――――――――――――――

「肉だっ！！　水分だぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

ルナールを手放しながら一目散に目標へ突っ込む。

「待てっ！！　仁っ！！　その魔物は――――――――――――――――――――」

何か言っているリューグを無視して俺は目の前の肉の塊を仕留めるために全力の一撃を放つ。

俺の拳は飲み込まれるように深々と獲物に突き刺さった。
そのまま拳を放った右半身も突き刺さる。
「・・・・・・・・・へっ？」
呆けた声を上げている間にどんどん身体が獲物に飲み込まれていく。
「デザートワームに物理攻撃は通用しないっ！！　迂闊にそいつの身体に触れると体内に取り込まれてしまうんだっ！！」
「それを早く言わんかいっ！！　役立たずっ！！」
「勝手に突っ込んで行ったのはお前の方だろっ！！」
などと言い争っている内に更に身体が飲み込まれていく。
もがいてももがいても何の手応えも無く、むしろ飲み込まれる速度を速めているだけの様に感じる。
「ったくしょうがない奴だっ！！」
駆け寄ってきたリューグはまだ無事だった俺の左手を掴み引っ張り始める。
要するに単なる綱引きなのだが、明らかに体重はこのデザートワームの方が遥かに勝っている。
「こんのぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーっ！！！」

リューグは気合を入れて力を込めるが、砂に足を取られているせいか思うように引っ張ることができない様だ。

「舐めるなぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！」

砂から足を上げてリューグはデザートワームの体を足場にしようと思いっきり蹴った瞬間。

当然の様にリューグの足はデザートワームに飲み込まれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

数瞬の沈黙。

「この無能ぉおおおおおーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

「五月蝿いっ！！　阿呆（あほう）がっ！！！！」

更に悪化した状況で醜い（みにく）罵り（ののし）合いを始める。

「あぁぁぁーーーーーっ！？」

叫んだ声の方向には一人残されたルナールが。

「リューグばかりずるいっ！！　私も仁に罵られたいのにっ！！」

熱で頭をやられた人らしい問題発言をしながらルナールは真っ直ぐに突撃してくる。

「ちょっ、まっ――――――――――――――――」

止める暇も無くルナールは俺たちと激突して。

三人仲良く飲み込まれてしまいましたとさ・・・・・・・・・・

ｓｉｄｅ???

「どこだっ!?」

私は仁の魔力を追って砂漠を飛んでいた。

上から目を皿の様にしてアイツの姿を探すのだが一向に見つかる気配は無い。

魔力がここから移動した気配も無いので間違いなくここにいるはずなのだが――――――――――――――――

「逃がさないっ!!　絶対にっ!!」

沸き上がる憤怒の感情に身を任せた私はアイツを探し続けた。

第百八十九話　肉だ、水分だ！（後書き）

馬鹿しかいませんね、ほんと・・・・・・・・

第百九十話　貴重な、体験だ！（前書き）

前回、アホ三人組はデザートワームの体内に取り込まれてしまいました。

第百九十話　貴重な、体験だ！

「わぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！」

深く広がる奈落の底に真っ逆さまに落ちていく。

悲鳴はどこまでも飛んで行き山彦の様に反響する気配は皆無。

本当にここはあの魔物の体内なのだろうかと疑問に思ってしまう余裕があるのは現実感が感じられないからだろうか。

いずれにせよ、俺が落ちているという事実に変わりはない。

永遠に思えるほどの長い長い落下時間はその実十数秒にも満たない短い時間だったのを知ったのは底にある砂に激突した後であった。

「たっ、助かったのか・・・・・・・・・？」

砂が思っていた以上に深く柔らかかったためにクッションとして非常に役立ってくれた。

起き上がりながら怪我一つない己の肉体を確認して一安心。

しかし魔物の体内なのに何故か上には青い空。

俺は本当に魔物に飲み込まれたのか？　あれは何かの夢だったのではないか？

憎らしいくらいすがすがしい青空を。

「どけぇぇぇぇーーーーーーーーーーっ！！！」

「あっ？」

眺めている間に頭上に降ってきた二つの影に押し潰されてしまった。

「ぐぇっ！」

潰れたカエルのような泣き声をあげて下敷きになってしまった俺。

二人をどけようと手を動かすと柔らかい感触が手の平に伝わってくる。

これは・・・・・・まさか――――――――――――――――――――

「おい仁っ！！　なに人の尻を撫で回してやがんだっ！！」

「そんな事だろうと思ったよっ！！！」

触れているのがリューグの尻だとわかってはいた。

だってルナールの尻は俺の顔の上に乗っかっているんだもんっ！！

というわけで手探りで男の急所を探り当てて思いっきり抓(つね)る。

「――――――――――――――――――――っ！？」

悲鳴を上げることすらできずに無様に跳び上がるリューグ。

ふんっ！　せっかくラッキースケベというやつを体感できるチャンスだったのに邪魔をするからそうなるんだ。

落ちてきたリューグは痛みに悶(もだ)え苦しみ転がりまわる。

・・・・・自分でやっておいてなんだがその姿には憐れみを覚えていたりする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして何故かその様子を見ていたルナールは動こうとしない。

ぼーっとしてはいるものの意識がないわけではないみたいだが・・・・・

リューグから視線を外したルナールは期待を込めた眼差しで（文字通り）尻に敷かれている俺を見つめる。

「・・・・・・・・・・・・・・・どきどき。」

わざわざ口に出して期待していることをアピールする変態(ルナール)。

・・・・・・・・・リューグと同じ痛みを味わいたいと願っている奴は変態で十分だろう。

そしてその期待に応えてやる義務も義理も無い。（物理的に不可能だし。）

普通にルナールの尻を両手でどけて立ち上がる。

「・・・・・・・・・・・・・・・がーん。」

目に見えて落ち込んでしまったルナールに多少胸の高鳴りを感じてしまったことは誰にも言うまい。

とにかく、まずは現状を確認せねば。

頭を切り替えて俺は未だに転げ回っているリューグの背中を踏みつけて動きを止める。

「うごぁっ!?」

・・・・・・・・・ちょっと力を入れすぎたようでリューグが悲鳴を上げた。

いくらリューグでももうちょっと丁重に扱わないと、いざという時（盾として）役に立たなくなってしまう。

反省しながらできるだけ優しい声音で（ただし踏みつけたまま）質問する。

「リューグ、確認するが俺たちはあの魔物の体内に取り込まれたってことで良いんだよな。」

「まっ、まずは足をどけろ・・・・・・・っ！　話はそれからだ・・・・・・・っ！」

わがままなリューグの提案に俺は仕方なく従った。

「まったく、自分勝手な奴だな。だから役に立てないんだぞ。」

「・・・・・・・・・いつか殺してやる。」

リューグの吐いた呪詛（じゅそ）の言葉は誰に向けられたものだったのだろうか。

こいつもこいつで苦労してそうだから誰か恨みを買ったやつでもいるのかな？

「それで、だ。もう一度尋ねるが、ここはあの魔物の体内ってことで良いのか？」

「そうとも言えるしそうでないとも言える。」

曖昧なリューグの返答に俺は眉をひそめた。

「どういう意味だ？　まさかあの魔物の体内にワームホールの類があって、中に入った者はどこか別の場所に飛ばされるとか言い出すつもりじゃないだろうな。」

「知っているんなら話は早いな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・マジか？

こんなゲーム的展開をまさか実体験する日が来るとは・・・・・・・・・・っ！？

「ただ、少し訂正がある。周りを見てみろ。」

言われて周りを見てみると砂以外にも先ほどまで無かったはずの石造りの造形物があった。

はて、ガイドブックにはこの砂丘にあった物は全て砂になってしまったと書いてあったはずなのだが――――――――――――

「俺たちは別の場所に飛ばされたのではなく、過去に飛ばされたんだ。」

ｓｉｄｅ東間

「はっ！？」

僕の脳裏（のうり）に突如として神速の稲妻（いなずま）が走った。

「東間様？　どうなされたのですか？」

「いや・・・・・・・・・何か僕の親友としてのポジションが盗られそうになっている気がして・・・・・・」

「？　お疲れならばお休みになられますか？」

心から心配をしてくれているメアリに感謝しつつ僕は首を横に振っ

た。

「大丈夫だよ。それよりも早くみんなと合流しないと。」

離れ離れになってしまったみんなを探すために僕たちは再び歩き始めた。

第百九十話　貴重な、体験だ！（後書き）

さて、過去に来てしまった仁たちはどうなるでしょうか。

第百九十一話　熱は、無いな！（前書き）

前回、過去に飛ばされてしまった仁たち。

第百九十一話　熱は、無いな！

「ふむ、熱は無いみたいだな。」

「なぜいきなり俺の体温を測るんだ。」

砂漠の暑さにやられたことを自覚していない憐れなリューグは親切心でおデコに手を当てて熱を測ってやっていた俺の手をうっとおしそうに払いのけやがった。

「まあ元々頭のイカれた奴だということはわかっていたから発言については無視してＯＫとして。」

「ＯＫするな。デザートワームの体内は特殊な転移魔法が掛けられているらしく体内に入った者は過去に飛ばされると伝えられているんだ。俺も本当のことだとは思っていなかったが、実際に過去に来てしまったんだから信じるしかないだろう。」

妄言を吐き続ける可哀想なアホは放っておくことにして俺は落ち込んでいるルナールに声を掛けてやることにした。

「ルナール、ちょっと周囲を偵察してきてくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

蹲（うずくま）っているルナールは涙目で俺を一瞥（いちべつ）してから視線を下に落とす。

砂漠は変わらぬ太陽の熱さを砂に伝えているというのに尻は熱くないのだろうか？

「おい、ルナール。」

再度、声を掛けるも返答無し。

俺は頭を掻きながら溜め息をつく。

「わかった。何でもしてやるから機嫌を直せ。」

「・・・・・・・・・・・なんでも？」

「ああ、何でもだ。」

仕方の無く下手に出てやると（ルナールだし、メイドさんほど無茶苦茶なことは言ってこないだろう。）ルナールは顔を上げながら上目遣いで――――――――――――

「じゃあ、私のこと本気で殴ってくれる？」

――――――――――――――反射的に手加減無しの踵落としをきめてやったのは罪にはならないと思いたい。

「仁、向こうに街が見えるぞ。」

「おっ、本当だ。」

一旦、足を止めて俺たちは確認し合う。

しばらくの間、ルナールの願いを聞いてやった俺は（とてもじゃないが一般人には見せられないほど残虐な光景だったので説明は省かせてもらう。）今はリューグと二人、ルナールを背負いながら夕暮れの砂漠を歩いていた。

背中に背負ったルナールは間違いなく重傷になるであろう本気の拳と蹴りを何度も浴びせたというのに目に見えた傷は無く、顔にはペットの出産シーンでも見たような幼い子供の喜びと感動に満ち溢れた表情が浮かんでいた。

末期症状だが暗殺者としては敵の拷問に決して屈しない強い肉体を手に入れた、と判断するべきなのだろう、か？

話は変わって完全なる砂丘になる前の過去には街が存在したということをガイドブックで発見したので、ここが本当に過去なのかどうかはわからないが、あの場でじっとしていても何も解決しないので行動した結果。

日頃の行いのおかげか運よく完全に日が暮れる前に街を発見できたということだ。

「さて、まずは食い逃げをするための店と逃走経路の準備をしなければな。」

「普通は情報収集だろう・・・・・・・・」

豪快に腹の虫を鳴らしながら俺はなかなか大きそうな街を見ていた。

「そう言うな。流石の俺も五日近く何も口にしていないと堪える。」

「それは、まあそうだが・・・・・・」

リューグの腹も鳴り始めるのだが、無銭飲食には気が引けるのか言葉を濁す。

俺もできれば騒ぎを起こしたくないがリューグは骨董品屋で路銀を使い果たし（役に立たないクズだよなぁ、ほんと。）ルナールは魔王城に置いてきたとのこと。（さっき殴っている間に確認した。）

俺？　俺の場合、路銀は全額メイドさんが管理しているよ？

ああ、本当に、無一文だから何も買えず、メイドさんに懇願しないと果物一つ買えない現状に不満なんか・・・・・・・不満、なんか・・・・・・・・・っ！！

「・・・・・・どうしていきなり泣いてるんだ？」

「泣いてないっ！！　これは心の血涙だ・・・・・・・・・っ！！」

「結局泣いてるんじゃねえかっ！」

「・・・・・・・・・・ぅぅっ・・・・もっと・・・・・・・・・・強く・・・・」

同じく何も口にしていないはずの空気を読まないルナールは快楽をエネルギーに変換する便利な機能でもあるのか、餓えも渇きも感じさせない満ち足りた寝言をほざく。

いっそ砂の中に埋めようかなとも思ったが、こいつはこいつで役に立つので捨てるのは惜しい。

例え、いずれは殺すことになったとしても。

「何にしろ街があるんだ。砂漠でじっとしているよりはずっとマシだろ。」

「そうだな。」

そんなわけで俺たちは蜃気楼では無いことを祈りながら街を目指して早足で歩き始めた。

ｓｉｄｅルナール

「大丈夫か？　ルナール。」

「うん・・・・・・・・・」

優しい言葉と笑顔で仁は私の手を取り、抱きしめた。。

「もう・・・・・・離してやらないからな。ずっと傍にいろよ・・・・・」

「わかってる・・・・・・」

この時点でこれは私の夢の中だと気づいてしまったが、それはそれで一向に構わない。

仁はリリィ様が想いを寄せている人。

私がリリィ様の気持ちを踏みにじって良いわけがない。

だけど――――――――――――――――――――

「仁。」

「なんだ？」

私は彼の胸に顔を埋(うず)めて。

「・・・・もっと・・・・・・・・強く・・・・・抱きしめて・・・・・・・・」

「わかった。」

夢の中でしか味わうことのできない幸せを虚(むな)しさと共に私は噛み締めていた。

第百九十一話　熱は、無いな！（後書き）

意外と乙女な願望を抱いていた忠義の厚いドM暗殺者。

主人を思うがゆえにその想いを告げようとしないのはラフィと同じですね。

・・・・・・立てたフラグが死亡フラグで無ければいいんですけど・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4566s/

腐れ縁はチートども！

2011年10月12日13時29分発行